ゼロの使い魔～幻獣騎士～

妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔～幻獣騎士～

【Ｎコード】
Ｎ１７５１Ｏ

【作者名】
妖

【あらすじ】
ある日大学に行こうとしていた主人公は何か嫌な予感がして家に急いで戻ろうとする。
急ぎ帰ってきた主人公が見たものとは・・・・・・
ゼロの使い魔に転生した主人公が特殊能力引っさげて無双・・・・・・
・なんてことは目指さないで平和な日常を目指す物語です。
でもなんか話が進めば進むほどドンドン平和に暮らせそうにないフラグが立っていくよ？

この作品は処女作な上に不定期に更新されます。
読んでて無いわぁと思っても生暖かい目で見守ってください。

主人公設定（前書き）

こうして投稿するのは初めてなので、色々至らないところはあると思いますが読者の皆様これからよろしくお願いします。

またこの設定には随時情報を追加する予定です。

主人公設定

主人公：佐々岡龍二
異世界転生もの
ポケモンが好きな男
温和
生前２２歳
他にも多数のゲームや漫画を持っているオタク

転生先での能力候補
ポケモン召還
ポケモン装備

召還できるポケモンについて
召還できるポケモンは生前ポケットモンスターホワイトのボックス内のポケモンと手持ちのみ
ポケモンは主人公の分身ともいえる存在（ゼロ魔の世界では幻獣をあやつることができる使い魔がいるが、彼にポケモンは奪えない）
痛みのフィードバック等は無いが、完全に死んでしまったポケモンは１日使えない

ポケモン召還について
ステータスそのままだと違和感を感じるので、１メートル以下のポケモンはステータスそのまま（一部例外あり）
２メートルならＨＰ、こうげき、ぼうぎょ、とくこう、とくぼう２倍

３メートルなら3倍とします
また素早さは小さいほど速くし、二メートル以上は1倍、２～1メートルは2倍、それ以下は3倍とします（例外あり）
重さでのステ変化は、１００キロ以内なら1倍、２００までなら1．5倍、３００なら2倍、４００なら2．５倍アップします。（ただし素早さは除く）
同時召還に制限は無い

そして人間のステータスは
ゼロ魔だと
ワルド　１２０／１００／８０／２２０／１８０／１７０位　偏在はそのままコピーとする
ライトニングクラウド：威力特５０命中１００麻痺

ポケモン装備について
主人公はポケモンと融合することが出来ます（任意で解除も出来ます）
ポケモン装備の同時装備の上限は6体（変更の可能性あり）
ポケモンを装備することでそのポケモンのステータスと技を使用することが出来るようになります
また装備箇所は任意で変更可能
頭、胴体、右腕、左腕、右足、左足にそれぞれ当てることも可能
ポケモンのステータス変動はそのままで、装備したポケモンの分ステータスは増えていく
例こうげき３００のポケモン×２＝攻撃６００の主人公

無効属性について
本来ポケモンでは属性によって全く効かない属性が存在します。
悪にはエスパー、鋼には毒、ゴーストにノーマルなど。

これについては完全に無効と言う形にはなりません。
しかし効果いまひとつよりも軽減率は高い。
例えばゴーストだと
剣で斬られる＝鋼
魔法＝属性攻撃
故に肉弾戦以外は殆ど意味ありません。
でも剣は純粋な鋼じゃないので、かなり軽減されます。

ゼロの使い魔での主人公ｖｅｒ９８話

名前：レッド・ド・ドリュウズ
年齢１９歳
魔法のクラスは土のトライアングル、水のトライアングル
錬金は割と得意な部類
基本的に一人称は僕だが、脳内やポケモン相手だと俺と言っている。
しかし怒っているとき等は口調が荒れて、一人称も俺になる。
タバサとシルフィの前では俺という一人称になった。

技能：？剣技Ｂ……最近父さんといい勝負が出来るようになってきた。
？マインゴーシュＡ……達人クラスの剣線じゃなければ逸らせる。
？科学知識Ｄ……鉱物の名前とかは結構知っていても化学式とかが苦手なため、あまり使えない。
？反射神経Ｂ……母親からの訓練で成長した技能で、野球の剛速球クラスなら見切れる。
？まわし受けＢ……矢なら何とか弾けるが、鉄砲や火炎放射は無理
？ネタ技Ｃ……現状鎧通しの他にもいくつか増えました。

鎧通し：ストリートファイター４に出てくるイブキの超必殺技だが、他の漫画でも偶に出てくる。
土遁・黄泉沼：名前は違いますが魔法で再現下で説明します。
煉獄：喧嘩商売という漫画に出てきたフルコンタクト空手の秘奥（この漫画結構好きなのでもしかしたら他の技も登場するかもｗ）
剛体術：打撃のインパクト時に、関節を固定して自身の体重分の鉄球と同じ威力の衝撃を相手に与えるｂｙバキ。

現在出てきたポケモン
ラオウ（バンギラス）、ニューラ、ムクホーク、ピチュー、ピィ、ソーナノ、ピンプク、セレビィ、マナフィ、ゾロア、ホロ（ゾロアーク）、ハリテヤマ、ツボツボ、アブソル、ダゲキ、ピカチュウ、ポッチャマ、ロコン、モモヨ（コジョンド）、カイオーガ、スイクン、サーナイト、ラプラス、ト○ロ（カビゴン）、アイガ（レジロック）、ハク（ミロカロス）、ギドラ（サザンドラ）、こうてつ（メタグロス）、ＡＩＤＡ（ギラティナ）、ハガネール、ナズチ（ジュカイン）、テルー（ホウオウ）

ポケモンの名前について

ラオウ……最初ゴジラにしようかと思ったんですが、なんか被るかなぁと思ったので世紀末兄者にしました。

ホロ……某リンゴ好きな狼さんから来てます。毛色が違いますがそこは大目に見てくれ。

モモヨ……川神百代から来ているのですが、他の候補としてメイリン、シェンホワ等がありました。

ト〇ロ……彼＝死神説は結構有名ｗ田んぼに靴が浮いていた時点で既にメイは死んでいたのではないかと考えを巡らせた方もいらっしゃるようです。

アイガ……彼の名前に関しては、本編でも一応書きましたが、ガイアの逆読みです。岩→地面→地球→ガイアと言う風に連想ゲームしました。

ハク……千と千尋と言えば分ってもらえるかな？

ギドラ……某金色の三本首竜が元ネタです。バキの千春さんの背中の入れ墨もこれですね。

こうてつ……これはＨＧで交換したもので自分が名付けた訳じゃありません。

ＡＩＤＡ……俺のポケモンの中でも唯一英語表記の子。因みに元ネタは．ｈａｃｋ／ＧＵです。

ナズチ……モンハンのオオナズチをイメージしました……ゲロ吐いたりしませんけどね。

テルー……ジブリのあれです、テルーの唄と言うのが頭に思い浮かんだもので。

ここで一つ説明させていただきます。

この作品に置いて、基本的に名前がついているポケモンはＬｖ１０

０だと思ってください。
アイガは作者は持っていないのでＬｖもなにもないんですが、Ｌｖ８５位だと思っていただけると良いと思います。

この世界で使われたポケモンの技
いやしのはどう
いわくだき
うたう
こごえるかぜ
サイコキネシス
じこさいせい
シャドークロー
ストーンエッジ
つめとぎ
でんこうせっか
とびひざげり
ひっかく
みずでっぽう
みだれひっかき
れいとうパンチ
ローキック
ロックオン

オリジナル魔法　設定（前書き）

分けました。

オリジナル魔法　設定

オリジナル魔法の説明

土のラインスペル：ロックスピア
最初一本だけにしようとしたが、一本だと避けられる可能性があり、四方を囲むように四本出すことにした。
その分精神力を使うため日に5回が限界（6歳時）。
１０歳の今では２０回近くできる。
石の先端は鋭く尖っており、普通の鎧なら貫通できる。
ただしこの魔法は対象を目視しなければ発動は出来ない。

この魔法の石の槍の太さは変更可能で、鉛筆くらいの細さになると同時に５０本まで出せる。
ただし消費する精神力も多くなり、制御が難しい。
しかし主人公自身も成長したので今となっては殆ど問題なく使える。

土のトライアングルスペル：プリズンロック
相手を石の壁で囲む拘束用の魔法。
地面を除く5面を石の壁で囲むことで身動きを封じる。
またこの魔法で作った石の壁はある程度自由に動かせる。
故に内側に狭めて行ったり、中に石の棘を作ると……。

土土水のトライアングルスペル：ボトムレス・アース
上で有った様に土遁黄泉沼を魔法で再現。
相手の足もとに底なし沼を作る。
但しこのままだとフライとかで抜けられるかもしれないので、改良

が必要か？
現状では投石などで相手の集中を解くという手段が主。

水のラインスペル：アクアボール
正直攻撃力は皆無だし、見た目は唯水の塊を出すだけなので簡単に見える。
しかし水の玉を出す場所の設定、その指定されたものの周囲３０？位に広がり固定されるという発動されると、自爆覚悟でその場所に魔法を放つか、水魔法でどけるしかない。
結構えぐい魔法。
現在はこれの有効活用法を考え付いたので、それの訓練中。

水のラインスペル：アイシクルニードル
氷の針を発射する。
込める精神力によって数が変わってくる。

水のトライアングルスペル：アクアレーザー
ウォーターカッターを元にレッドが考えた魔法
溜めが短くても岩くらいなら余裕で切れる。
水球に均等に圧を掛けて、一部を開放することで凄まじい威力の水鉄砲が出ると考えてもらえるとわかりやすいかな。

水のトライアングルスペル：スパイラル・シールド

水の盾。
しかし只の盾ではなく、正面は丸みを帯びており、常に外側に向けて勢いよく水が流れ続けているために、防ぐというよりも逸らすことに重点を置いた盾。
弱点としては正面からの攻撃には無類の強さを誇るが、他から攻撃されるとアッサリ解ける。
一応全方位に出すこともできるが、地面だけは無理なので土の魔法を地面から出されると困る。

火のラインスペル：フレイムウェーブ
火の刃が地面から出てきてそれが相手に向かって行く。
火の高さは約１メートル。

火のラインスペル（上位）：フレイムゲイザー
相手の真下から炎の柱が現れる。
火の高さは約３メートル。

火のラインスペル：バーンナックル
絶招歩法を用いて相手に突っ込んでいった後、インパクト時に拳に炎を纏わせる。
タイミングがシビアな上、耐火装備がないと自身も大きなダメージを受けてしまう。
但しテリーは熱気の方向をある程度操作できるようになったので、１０秒くらいなら耐えることが出来る。

火のトライアングルスペル：フレアボール

フレイムボールの上位魔法。
凄まじい熱量を誇るため、地面に当たれば地面が解け、人に当たれば蒸発する。
但し長く維持するのは難しく、あまり遠距離まで飛ばすことが出来ない。
また制御も簡単ではないため、普通にフレイムボールの方が使い勝手がいい。

先住魔法：チャーム
簡単に言えば異性を意のままに操る魔法。
サキュバスや吸血鬼などの亜人は使える場合がある。

プロローグ

「あぁ卒研どうしようかなぁ・・・・・・そろそろテーマ決定だからはっきりしないとな。」

一人呟きながら大学に向かう姿はまさに残念な子である。

「とりあえず大学についてから考えるとしよう！」

いつも通り思考放棄した俺は大学に向かって足を進めようとするが、サイレンを鳴らしながら横を通り過ぎた消防車を目で追ってしまった。
そこで俺は運命の分かれ目と遭遇する。

「あれ？あの方向って俺ん家の方じゃないか？」

嫌な予感がした俺は、急いで来た道を戻った。
しかし嫌な予感とは当たるもので、案の定燃えていたのは自分の家だった。
一瞬泣き崩れそうになるが、自分の部屋にある宝物たちを助け出そうと家の前にある水道から水を被り、突入しようとする。
そんな愚行を消防局員が許すわけが無く・・・・・・

「ちょっと君！！危ないから離れなさい！！」
「でも俺の嫁たちが！！」
「嫁？何を言っているんだ君は！？」

しかしガシっと腕を捕まれているのを振り払い、炎の渦巻く家の中に入ってしまった。
家の中はすでに火の海で天井も崩れかけている。
急がなければと思い、自分の部屋へと直行した。
部屋に入り、最近はまっているポケットモンスターホワイトが入ったＤＳと外付けＨＤを抱えて部屋を出ようとしたその時！
天井の一部が俺目掛けて落ちてきた。
突然の命の危機に俺はただ呆然と立っていることしか出来なかった。

「あぁまだゴウカザルのレベル上げ終わってねぇのになぁ」

そんな締まらない一言で俺の人生は幕を閉じた。

「お前には別の世界に飛んでもらう。」

そんな一言で死んだはずの俺は目覚めた。
ここはどこだろう。

「ここは死後の世界に行く道の途中だ。」

なぜ俺が考えていることが！？

「お前の考えていることは全て分かる。」

そんなことが・・・・・・でも死後の世界があるくらいだからありえるのか。
ところであんたは誰だ？

「この世界の管理者だ。」

そうですか、その管理者さんが死んじまった俺に何の用ですか？

「お前には別の世界で転生してもらう。」

輪廻転生ってやつですか。
でも別の世界ってどういうことですか？

「別の管理者のミスでその世界に欠損が出来てしまったため、それを埋める存在が必要なのだ」

はぁ・・・・・それで俺はどうすればいいんですか？

「意外だな？てっきり憤るかと思ったのだが」

まぁ死んじまったことはある意味自業自得だし、ある意味自殺に近い形だから神様なら罰でも落ちるかなと思ってたもんで

「私は神ではない。ある意味神と言えるが世界の管理を行うだけで、罰を与えたりはしない。」

そうですか、で俺はどうすればいいんです？

「お前にはある世界の貴族として転生してもらう。」
「しかしその世界は魔法や幻獣などが存在する世界。」
「故にお前にいくつかの異能を付けて送ることにした。」

普通に嬉しいですけど、何故そんなサービスをしてくれるんですか？

「ある意味私たちの尻拭いを頼んでいるようなものだからな。」
「それに欠損が大きく普通の人ではその穴を埋めることが出来ないため、異能を付けることでお前の存在を大きくするのだ。」

そうなんですか
それで異能って何ですか？

「それは今から説明する。」
「お前に付ける異能は幻獣を召還、装備する能力だ。」

幻獣って何ですか

「お前の世界でいうと龍やペガサスなどに値する空想上の動物だな。」
「しかしお前が召還できるのはポケットモンスターというゲームのモンスターだ。」

ポケモン！？
ポケモンと現実で触れ合えるなんて・・・・・・夢みたいだ！

「話を最後まで聞け。」
「お前は死ぬ直前にそのゲームを持っていただろう。」
「あのゲームでお前が捕まえたモンスターを自由に呼び出せるが、捕まえていないモンスターの召還は不可能だ。」
「それとレベルなどもそのまま反映されるから気をつけろ。」
「次に装備について説明する。」

そうだよ、装備ってどういう意味だ？

「装備とは文字通りモンスターを装備することだが、どちらかというと融合に近い。」
「お前の世界にある漫画の闇の魔法とか言ったか？あれに近いものだ。」
「モンスターを装備することで、お前は装備したモンスターの能力や技を得ることが出来る。」
「ただし同時に装備できる数は６匹までだ。」
「それと存在が大きいモンスターは装備したときは、お前の見た目に変化をもたらすことがあるから気をつけろ。」
「以上がお前に与えた異能の内容だ。」

チートってほどじゃないが強いな
ところで俺はその世界で何をすればいい？

「特に何かをする必要は無い。」
「自由に生きるといい。」

そうか・・・・・・ありがとう

「それでは送るぞ。」

あぁ行ってきます

プロローグ（後書き）

こんな感じの書き方で良いのかな・・・・・・微妙だ

第1話　誕生（前書き）

どのくらいのペースで書けるかわかりませんが頑張ります

第1話　誕生

まず感じたのは激痛
次に感じたのは眩しさ
そして俺は新たな世界に生を受けた。

俺の名前はレッド・ド・ドリュウズ
家名がドリュウズとかヤバイなとか、レッドって初代主人公じゃんとかいう意見は全面的に無視する！！
まず俺は転生するときに記憶の引継ぎがあるのか聞き忘れていたが、どうやら問題ないようだ。
その所為で生まれるときに頭が潰れるかと思うほどの痛みと目を突き刺すような光を感じることになったが・・・・・・

とりあえず俺が目下の問題は下の世話が恥ずかしすぎるということだ。
２２の男が見目麗しい女性に下の世話をされるとか・・・・・・拷問だろｏｒｚ
今俺のオムツを変えてくれたのは第二の母さんクシャナ・ド・ドリュウズ。
その横で渋い笑顔をしながら俺を見ているのが第二の父ロジャー・

ド・ドリュウズ。
この夫婦の第一子がが俺らしい。

「可愛いわね。」
「そうだな。」

言葉は少ないがこの二人が俺を心から愛してくれているのは伝わってくる。
そのことをありがたく思いながら、突如訪れた睡魔に俺は逆らえなかった。

「眠ってしまったわね。」
「そうだな。」

ところで父上それしか言えないんでしょうか？

生まれて一年が過ぎた頃
管理者が言っていた通りこの世界に魔法というものが存在することが分かった。
俺が誤って落とした皿を母さんが宙に浮かべたのだ。
信じてなかったわけではないが、驚きは大きかった。

ちなみに異能の方はまだ試していない。
いきなり家の中に見知らぬモンスターがいたら警戒するだろうし、今はこちらの文字の勉強をする方が大事だ。
言葉は通じるけど、文字は書けないから勉強しないと大分困りそうだからね。
まぁそれでも絵本を読んでくれとねだる位しか勉強方法が無いんだけど・・・・・・
自分で教材片手に勉強という手もあるんだけど、目立っちゃうから避けたいところだし、俺はゆったりまったり暮らして生きたい。
農業や領地経営とかして生きたい。
まかり間違っても戦争なんか行きたくない。

だから公爵家なんかに行きたくない！！！！
明日の二歳の誕生日に、父と親交のある公爵家でパーティを開いてくれるということで御呼ばれされているのだ。
子爵の父と何故公爵家当主が関係を持っているかというと同級生だったらしい。
しかもその公爵家ヴァリエールって言うらしい。

ヴァリエール・・・・・・この名前に聞き覚えがある人は多いだろう。

そう！！この世界はゼロの使い魔の世界なのだ！！！

確かに魔法と幻獣のいる世界って聞いていたさ。
でもゼロ魔とは思わんかった！
しかもここトリステインだからメッチャ戦争するじゃんｏｒｚ
そういった理由でそこそこ出来るが戦場では役に立たないという微妙な立ち位置を目指して日々を過ごしている訳で・・・・・・
ヴァリエールとのお付き合いとか俺にとっては災いの元になるから遠慮したいです。

誕生日では目立たないように心がけよう。
特にカトレア様やエレオノール様と仲良くならない様に、尚且つ嫌われないようにしよう。
・・・・・・顔知らないんだけどね。
まぁ俺まだ2歳だからあんまり興味をもたれることは無いはず！
父さんか母さんの横で大人しくしておこう。

俺はそんな楽観的なことをベットの上で考えながら、緩やかにくる眠気に身を任せていった。
明日自分にどんなことが起こるかも知らずに・・・・・・

第1話　誕生（後書き）

短いかな？う～んどうしたものやら

第2話　初めてのお出かけ（前書き）

今日はもうちょっと書いてみよう……感想書いてくれた人ありがとう！！

第2話　初めてのお出かけ

誕生日なのに憂鬱な朝を迎えた俺。
そしてあまり表情には出てこないが嬉しそうな父さん。
見るからに嬉しそうな母さん。
そんな3人は馬車に揺られながらヴァリエール領へと向かっていた。

「（まさか初めての遠出が自分の家の領土じゃなくて、ラ・ヴァリエール領になるなんてｏｒｚ）」

微妙に沈んでる俺を見て、首をかしげる両親。
俺はその光景を見て、思い直した。

「（せっかく両親が俺のためを思って誕生会を開いてくれるんだから、喜ばないと！）」
「（それに俺が当主に目をつけられなければ何の問題もないはず……あと公爵夫人にも）」

よし心構えはできた！
しかし大きなパーティなんて初めてだし、ゼロ魔では決闘とか偶にあったよな？
なら一応召喚の練習しておこうかな？
呼び方は頭の中で名前と見た目を思い描けば出せるはず。
馬車の中に出したら両親がビックリするだろうし、かと言って馬車の横にギャロップとか出すわけにもいかない。

「（そうだ！鳥ポケモンなら大丈夫のはず！）」
「（何がいいかなぁ……初めてこの世界にポケモンを召喚するんだからちょっと大きめの鳥がいいなぁ）」
「（でも伝説系だと騒ぎになりそうだし、大きいといってもそこそこの大きさにしないと……）」

どうしようか悩んでいると、いつの間にか森の中に入っていた。
仲良く談話している両親をしり目に、俺は何を出すかまだ迷っていた。
そうして森に入ってから１０分くらい悩んで、やっと決まった。

「（愛着があって、それなりに強い、あまり大きくない鳥ポケモン……）」
「（君に決めた……，ムクホーク，！）」

俺はプラチナでの持ちポケモン，ムクホーク，を森の空に思い描いた。
すると３０メートル位離れた場所から鳴き声と共に、鳥が羽ばたく羽音が聞こえてきた。

「何だ！？レッドこっちに来なさい！」
「きゃ！」

楽しく談笑していた父さんは急いで俺を引き寄せ、警戒するように辺りを見回していて、母さんは突然の鳴き声にビックリしているようだった。
辺りを警戒して、離れていくムクホークの姿を視認した父さんは

「あんなに大きな鷹は見たことが無いな。」

と呟くように言って警戒を解いた。
ごめん父さん母さん……驚かせるつもりはなかったんだよ。
でもこれで召喚が出来ることは確認できた。
装備は人目があるから試すことができないけど、いざとなったら少し離れたところに強面のポケモンを出して驚かせて逃げよう。
強面のポケモンならどんなポケモンがいいかなぁとか考えつつ、俺はヴァリエール領につくまで眠ることにした。

「起きなさいレッド。」

母さんの声で眠りから覚めた俺は「おはよう」と一言言い、辺りを見渡した。
そして茫然とした。

「広いでしょう？ここがヴァリエール領よ。」

俺は生前海外旅行なんて数える位しかしていなかった。
でもこの光景はそのどんな場所よりも広く綺麗だった。
夕焼けに染まる空と、風に揺れる大草原。
何よりも壮大で圧倒された。

「そろそろ門が見えてくるぞ。」

父さんの声で我に返った俺は、前を向いた。
デカい！
その一言だった。
俺の家もそれなりに大きかったが、桁が違う。
こんなところで俺の誕生日を祝うのかと思うと恐縮してしまう。

「食べられたりなんかしないわよ？」

と俺を小さく笑いながら茶化してくる母親にソッポを向け、俺はヴァリエール邸に入って行った。

第2話　初めてのお出かけ（後書き）

明日も更新出来るといいなぁ

第3話　出会い（前書き）

ムクホークどこ行ったんだ・・・？

第3話　出会い

母さんに頭を撫でられながらヴァリエール邸内に入ると、高そうな調度品や絵画が並び、まさにお金持ちといった印象を受けた。
まぁ鎧や剣も多かったのはスルーしておこう。
俺と両親はそのままゆっくりと歩を進め公爵がいる部屋へと向かった。
ついにご対面かと少し緊張していると、頭を撫でていた母に伝わったのか

「大丈夫よ？優しい方だから。」

と俺に小さな声で伝えてくれた。
少し緊張が解けた気がした。
父はそのまま目の前にある扉を開いていった。

「かわいいなぁ！エレオノールとカトレアは！！」
「や、止めてくださいお父様！」
「お髭がくすぐったい。」

父さんは静かにドアを閉めていった。

「よし散歩に行こうか！」
「そうね、３０分くらいでいいかしら。」

父さんと母さんは何事もなかったかのように来た道を戻ろうとする。
いいのか？あれ？
数歩歩いたところで怒声となにか大きなものが壁にぶつかる音がした。
父さんと母さんは足を止め、少し冷や汗をかきながら振り向いた。

「カリーヌ殿は気づいていらっしゃるようだ。」
「そう……みたいね。」

なぜか少し足取りが重くなった両親は、少し汗ばんだ手で俺の手を掴みながら再び部屋へと向かっていく。
ゆっくりとドアを開けると見事な笑顔でこちらを出迎えてくれた公爵夫人と娘2人。
そして所々痣ができているラ・ヴァリエール公爵の姿がそこにはあった。
とりあえず緊張は吹っ飛んだが、夫人が少し怖かった。

「ようこそドリュウズ殿。」
「私の息子のためにパーティを開いてくれるとは有り難い。」

口調は少し硬いがお互いの表情には笑顔があり、親交の深さを表している。
母さんは母さんで公爵夫人と井戸端会議的な何かを始めたようだ。
必然俺は残った二人の相手をするわけだが……片や笑顔でこちらを

じっと見ているし、片や少し警戒している。
流石にこのままでは気まずいので、話しかけてみることにした。

「初めまして。僕の名前はレッド・ド・ドリュウズです。」

すると少し不機嫌そうに

「エレオノール……エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール」

嬉しそうに

「カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。仲良くしましょうね？」

と答えてくれた。
この時エレオノール様は9歳、カトレア様は6歳だった。
2歳にしては少ししっかりしているように見えるため悪印象はそんなないはずなんだけど、なんで不機嫌なのかな？
と思っているとカトレア様が

「ドリュウズさんがいらっしゃったことで、お父様との触れ合いが終わってしまったのが不満みたいなの」

と小さな声で教えてくれた。
ツンデレか！？と思ったがその言葉は胸の内に秘めておくことにした。
エレオノール様は不機嫌そうではあるが、流石に初めて来た小さな子が気になるのか、チラチラとこちらを窺っていた。
だが俺はそれ以上に未だこちらをニコニコしてみているカトレア様が非常に気になる。
気になった俺は直接聞いてみた。

「僕の顔に何かついていますか？」
「いいえ。」
「ではどうなさったのですか？」
「ただ貴方にも私と同じようなお友達がいるのだなぁって思いまして。」

友達？俺は生まれてからまだ両親と使用人以外との接触は殆どなかったし、同年代なんて尚更だ。
誰のことを言っているんだ？

「えっと・・・俺にはまだ友達と呼べる人はいないんですが。」
「うーんなんて言ったらいいか、私の友達みたいな友達？」

カトレア様の友達ってことは、動物たちか？
ってことはまさか……ポケモンのことか？！

何故知っている？まだ俺はムクホークしか出していないし、しかも俺との関連性は無いはずだ！
目に見えて動揺している俺を見て、エレオノール様は不思議がっているし、カトレア様は笑顔のままだ。
そしてカトレア様は驚愕の事実を俺に告げた。

「お昼頃に私の部屋のベランダに大きな鳥が飛んできたの。
お父様やお母様は私を守ろうと急いで駆け付けてその鳥に魔法を撃とうとしていた。
でもその鳥は唯私をじっと見つめるだけで動かなかった。
私は魔法を止めてくれるように頼み、危ないから下がりなさいというお母様の言いつけも聞かずにその鳥に近寄って行きました。
しばらくその鳥を近くで見つめていたら、急に飛び立ってしまったのです。
なんとなくだけれどあの鳥レッド君の友達のような気がして」

ムクホークお前何やってんだ！！！！
なんでよりによってヴァリエール邸にくるんだ？！
普通森とかじゃないのか？
あぁこれはヤバい。
動揺したことでその鳥に心当たりがあることはばれてしまったし、まだエレオノール様は気づいていないようだが……とりあえずカトレア様に内緒にしてもらえるように頼まないと！

「出来ればあいつのことは内緒にしてくれませんか？まだ両親にも教えていないので……」
「分かりました。でも後でまたあの子に会わせてくださいね？」

カトレア様はムクホークと再び会うのが楽しみなのか、先ほどよりも楽しそうにしていた。
因みに俺はこれからどうしようか考えを巡らせることで手いっぱいだった。
これからどうしたものやら……

第3話　出会い（後書き）

お前ここに居たのか！！

第４話　初めてのピンチ（前書き）

至らぬ点は多いかもしれませんが楽しんでくれると幸いです。

第４話　初めてのピンチ

あの後大人は大人同士で、子供は子供同士で話があるだろうということで誕生会まで解散したわけなんですが、エレオノール様は何も言わず部屋に戻ってしまった。
そんな中残された俺とカトレア様なわけですが・・・・・今なぜか俺はムツゴロウ王国ならぬカトレア王国にいるわけで

「なぜこうなったｏｒｚ」

落ち込んでいる俺、笑顔でムクホーク撫でているカトレア様。

～回想～

「私の部屋に遊びに来ませんか？」

突然のお誘いに戸惑いはしたものの、動物は好きだったので行って

見たいという気持ちもあって首を縦に振るまで時間はかからなかった。
カトレア様の部屋まで歩く途中カトレア様が

「あの大きな鳥の名前はなあに？」
「他にもお友達はいるの？」

とか結構いろんなことを聞かれたが鳥の名前はムクホークということだけを教えて、後は誤魔化した・・・・・誤魔化しきれたはず。
誤魔化したときに少し寂しそうな顔をなさっていたので、非常に心が締め付けられた。

「さぁ着きました。ここが私の部屋です」

カトレア様はそういってドアを開けた。
そこはサファリパークでした・・・・・ここまでいっぱい動物がいるとは思わなかった。
犬、猫、リスはまだ分かる。
でも熊とか危なくないのか？
そんな疑問が顔に出ていたらしく

「大丈夫よ？みんな私のお友達」

という説得力が有ったり無かったりする言葉をもらいました。

そしてカトレアさんはさっきの約束を思い出したのか

「ところでムクホークさんはどうやったら来てくれるの？」

と仰ったので、俺はつい正直に

「召還します」

と答えてしまった。
言った瞬間顔が青ざめた。
あんなにバレてはいけないと思っていたことを自分の口から出してしまうとは・・・・・言ってしまったものはしょうがないとはいえ、ある程度自分の事を話すしかないようだ。
召還という言葉に目を輝かせたカトレア様に、俺は自分のことを話し始めた。
まぁ殆どが嘘なんだが、空想上の動物を召還することが出来るという能力を持っているということにした。
もちろん転生のことや装備のことは話していない。
それらのことを聞いたカトレア様はより一層笑みを深くし、俺に尋ねた。

「今ここにムクホークさんを呼び出すことは出来ますか？」

まぁもちろん出来ますが、突然出すと動物たちが驚くだろうから、

動物たちを抑えてくださいねと言って俺は召還することにした。

「（ムクホークここに来てくれ！）」

そうすると目の前が光って、光の中から大きな鷹のような姿が現れた。
その幻想的にも見える光景にカトレア様はもちろん、俺も見惚れていた。
そうして出てきたムクホークは、小さく鳴いて俺のほうへ近寄ってきた。
結構大きいので少し威圧感があるが、俺の胸の辺りに頭をこすり付けてくると、愛おしさがあふれ出てくる。
俺は優しく頭を撫で、これからよろしくなと小さく呟いた。
そこで急にカトレア様がどうしているか気になった。
ビックリしているだろうか？
そう思い、カトレア様に目を向けるとまるで母さんのような目で俺を見つめていた。
俺は異様に恥ずかしくなり四つんばいになって落ち込んだ。

～回想終了～

落ち込んでいる俺から離れ、カトレア様に撫でられていたムクホークはくすぐったそうにしていた。
いつまでも落ち込んではいられないと思い、立ち上がるとカトレア

様がなぜかこちらを見ていた。

「他のお友達は出さないの？」

俺は迷ったが、余りポケモンをたくさん見せるのは良くないと思って

「今回はムクホークだけにしておいて下さい」

「そっか・・・・・・残念」

残念とは言っているがムクホークだけでも結構満足しているらしく、
笑顔のままムクホークを撫で続けている。
やることが無くなった俺は、カトレア様とムクホークの戯れを見て
時間を潰して誕生会までノンビリ過ごした。

第5話　父への疑問（前書き）

誕生会はじまた

第5話　父への疑問

え？何でこんなに人がいっぱい来てるの？
俺の誕生会にこんなに人来るのはおかしくないか？

「誕生日おめでとう」
「ありがとうございます」

この受け答えももう２０回目くらいかな？
まぁ大体が一言おめでとうで終わるんだけど、たまに君のお父さんには世話になった的なことを言ってくる方もいる。
父さん・・・・・あなた何をしたんですか？！
っていうか何をしてたんですか？
明らかに軍関係の方がお礼を言ってくるんですが！！
気になるから次言われたら聞いてみよう。

「お誕生日おめでとう。彼にもこんな可愛らしい子供が出来たのか・・・・・時がたつのは早いなぁ。」
「ありがとうございます。父さんの知り合いの方ですか？」
「あぁまだ名乗っていなかったね、私はグラモン伯爵。昔君のお父さんに命を救われてね、その時から仲良くさせてもらっているよ。」

父さん・・・・・本当にあんた何者だ？
って言うかギーシュの父さんかよ！
あぁ原作キャラと繋がりが出来てしまうｏｒｚ

「君もお父さんみたいな立派な男になるんだよ？」

ギーシュのお父さんはそういって他の貴族に挨拶に行った。
一回父さんの昔話を聞かないと駄目だな。

そんな忙しい時間が過ぎ、ちらほら帰っていく人が出てきた頃。
カトレア様が話しかけてきた。

「楽しかった？」
「楽しいというよりは、忙しかったです。」

俺がそう答えるとカトレア様は微笑んだ。

「でも私は楽しかった」
「どうしてですか？」
「ムクホークさんにも会えたし、レッド君にも会えたから」

俺は異常に気恥ずかしくなり、顔を背けた。
後ろでカトレア様が笑っている気がするが、きっと気のせいだろう。

そうして帰る時間、ヴァリエール公爵と公爵夫人、そしてカトレア様が見送りに来てくれた。

「今度は男二人で酒でも飲もう」
「帰り道に気をつけなさい」
「レッド君また会いましょう」

ヴァリエール公爵は父さんに、公爵夫人は私たち家族全員に、そしてカトレア様は俺にそれぞれ声を掛けて、俺と両親はヴァリエール邸から出発した。

その帰り道、父さんは月を見ながら黄昏ていたが、母さんは俺を見ながらニコニコしていた。
何か気になったので聞いてみると

「カトレアちゃんと仲良くなったのね！」

となんか異様なテンションで言ってきたので

「仲良くっていうか、友達になったのかな？」

と返すとまぁまぁとか言いながら父さんの方へ近づいていって、耳打ちをしていた。
なんかいやな予感がしたので俺は横になった。
疲労からかすぐに眠気は来たけれど、とりあえずこれからどうしようか考えてから眠ることにした。

なんか父さんが予想以上に武道派なのは分かったから、戦争に参加することは確実のような気がする。
ということは俺も参加は、ほぼ確定というわけか・・・・・まだメイジとしての教育を受けてないから分からないけど、俺は魔法を使えるんだろうか？
前世の記憶というか、前の世界では魔法なんてものは存在しなかったから使える自信がない。
まぁ装備をすれば魔法のようなことは出来るんだけど威力確かめてないから迂闊に使えないしなぁ。
もし錬金が使えるようだったら周りから中が見えないドームのようなものを作ってその中で練習しよう。
装備した状態で、杖を持っていればメイジもどきの出来上がり！！

・・・・・・これで良ければいいんだけど。

あぁ眠気がピークだ、とりあえず明日は父さんに昔の話を聞きに行こう。

それではおやすみなさい。

第5話　父への疑問（後書き）

最初の予定では賊でも侵入させようかと考えたんですが、流石に公爵邸に突貫かけるのはどうかと思い廃案
魔獣とかも流石に近くにいたら退治するだろう・・・・・・公爵夫人がw
そんなこんなで誕生会終了。
おそらく次の話は魔法のお勉強編かな？

第６話　父の過去（前書き）

やっと魔法に主人公が触れる……予定だったのにｏｒｚ

何か気づいたら総合評価ポイントが１００超えててビックリ！！

すっげぇ嬉しいんですけど！！

これを糧に頑張っていこう！

第6話　父の過去

誕生日の翌日の朝。
俺は昨日疑問に思った父さんの過去について聞くため、書斎へと向かった。
ノックをして中に入った俺を父さんは静かに迎え入れてくれた。
父さんの机の前に立ち、早速父さんに聞いてみた。

「昨日父さんに命を救ってもらったっていう伯爵様がいたんですが、父さんは昔何をしていたんですか？」

父さんは一瞬固まって、筆を置き、書いていた書類を脇に寄せた。
そして少し厳しい顔をして俺の顔を見た。

「まだ二歳のお前に教えるには早い」
「でも……知りたいんです」
「お前は確かに二歳に思えないほど聡い。俺の過去を聞いても理解できるかもしれない」
「なら！」
「だが二歳のお前に人の生死が関わる話をするわけにはいかない！」

父さんは厳しい顔をしてたが、その中に少し悲しそうな顔も混ざっている気がする。
俺は自分のことしか考えていなかったようだ。
幾ら自分の危険に関係してくるとはいえ、人の古傷をほじくり返し

ていいわけではない。
自分の配慮に欠けた言葉に、父さんが傷ついたと考えると申し訳ない気持ちになった。
父さんはそんな俺を見て、教えてもらえないから悲しんでいると思ったらしく、小さくため息をついて言った。

「はぁ……少しだけだぞ？」

申し訳ない気持ちに変わりはないが、俺は父さんの話に耳を傾けた。
長い話になったので要約すると、

父さんは昔軍の偵察部隊にいた。
その時の上官がグラモン伯爵だったらしい。
グラモン伯爵率いる軍は、オークの大群の討伐を命じられた。
偵察隊の父さんはオークの大群がどのくらいの数になるのか確認しに行った。
匂いに敏感なオークは、大勢で偵察に行くと見つかってしまうので

父さんの単独任務だったらしい。

オークの数を大方数えた父さんは軍に戻ろうとしたのだが、まだ若かったグラモン伯爵は父さんの報告を聞く前にオークの大群に突貫していった。
最初こそ破竹の勢いでオークたちを切り開いていったが、作戦もなく突撃した決して多くない軍は防御など考えていない。
一人また一人とオークの物量に押しつぶされていく。
グラモン伯爵も奮闘していたが、気づかぬ内に突出してしまったらしく、気づけばオークに囲まれていた。
１匹が一般兵士５人分に匹敵するオーク１０頭以上に囲まれた伯爵は流石に不味いと思ったのか、もう殆ど残っていない精神力で魔法を使い、なんとかオークの一角を崩し一時撤退することを決めた。
しかし運悪く魔法で倒したオークの持っていた棍棒が足に当たり、捻挫してしまった。
走ることはできそうにない。

「どうせ死ぬなら一匹でも多く道連れにしてくれるわ！」

と意気込んで未だ１０匹以上いるオークたちに剣一本で立ち向かおうとした。
そんな時突然激しい光が目の前に広がった。
そして聞こえてくる声。

「少し手荒になりますがお叱りは後で受けます」

そう言って父さんは肩にグラモン伯爵を担いでフライでその場を急ぎ離れた。
肩に担がれた伯爵は一瞬状況が飲み込めなかったが、次第に理解していった。
ライトの魔法を高出力で発動し、オークたちの眼を眩ませている内に私を連れてきたのだと……。

「すまん……恩に着る」
「ホントですよ！まったく俺の報告を聞いてから行動してください！」

いつもとは違う父の口調に驚きつつ、自分を本当に心配してくれたことが分かった伯爵は申し訳なさそうに謝った。

「すまん……軽率だった。」
「いえ、こちらこそ無礼な口を聞いてすいません」
「いや助けてもらったのだから、それぐらいは気にしないよ」

それからしばらく無言だったが撤退済みだった軍が見えてきたところで伯爵は呟いた。

「大きな借りを作ってしまったな」

それを聞いた父さんは笑いながら

「それじゃあ今度美味い酒でも奢ってくださいよ」

と言った。

その返事は予想外だったのか、伯爵は一瞬ポカンとして、次には声をあげて笑い始めた。
笑いが収まってから伯爵は父さんに楽しそうに言った。

「ああ！最高の酒を用意しよう！！」

それから父さんと伯爵は偶に一緒に飲む仲になったらしい。
因みに残ったオークの大群だが、ヴァリエール公爵夫人が一掃したらしい……あの人は化け物か？

話を聞き終わった感想は……なにこの人めっちゃカッコいいんですが！！！！
父さんあんた凄いな！
っていうかこれ以外にも絶対とんでもないエピソードあるだろ！
パーティの時に、父さんに命助けられたって言ってた人他にも何人かいたぞ？
その話も聞いてみたいと思ったが、グラモン伯爵を助けた時に父さんの部隊の人も何人か亡くなったらしく、父さんは少し遠くを見ていた。
流石にこの空気で、もっと話を聞きたいとは言えない。
とりあえず話してくれたことに対してお礼を言って、少し世間話をして部屋を出た。

自分の部屋に戻った俺は父さんの話を思い出しながら、コモンスペルでも使い方次第では非常に有用だと改めて感じ、絶対魔法を使えるようになろうと心に決めた。
とりあえず明日母さんに相談してみよう。
俺は明日の予定を頭の中で決めて、その日はもう寝ることにした。

第6話　父の過去（後書き）

俺にしては少し長かったかな？

第7話　初めての魔法（前書き）

魔法の設定が原作と違うかも……そして結構オリジナルの魔法とか出るかも

第7話　初めての魔法

朝起きて、ご飯を食べているときに、昨日考えていたことを母さんに聞いてみた。

「父さんと母さんって魔法のクラスはどのくらいなの？」
「父さんはトライアングルで、私はラインだけど……いきなりどうしたの？」
「えっとね……僕も魔法使いたいなぁと思って」
「そうなの……じゃあ少し予定より早いけど魔法の練習始めましょうか」

なんかえらくスンナリ決まったことに疑問を覚えたが、魔法を教えてもらえる嬉しさにその疑問は吹っ飛んで行った。

そして数日後

「もっとギリギリまで引きつけてから避けなさい！」
「はぃ」

息も絶え絶えでボロボロの俺がいた。
どうしてこうなった！！

～回想～

「じゃあまずコモンスペルの練習から始めましょう」
「え？いきなり実践ですか？」
「もちろんじゃない！，習うより慣れろ，よ！」

まぁ一応理に適ってるのか？
とりあえずやってみよう。

「まずこの杖を持って、目の前にある小さな石を浮かせなさい。呪文はレビテーションよ」
「ハイ！……えっとそれだけですか？」
「もちろんじゃない！　さぁ！！」

そんなんで出来るわけがないと思うんだが、やってみるだけやってみるか！

「レビテーション！……浮きません」
「今貴方は浮くわけないとか思っていたでしょう」
「はい」
「それじゃあ発動しないわ。
魔法はイメージが最も大切なの、絶対成功すると思って明確にどうなるか思い描くことによって初めて魔法は発動するわ」

難しそうだけど、日本のオタク舐めんなよ！
想像力は人一倍だ！！！
次こそ成功させて見せる。

「（石が一メートルくらい上に浮かぶイメージ）レビテーション！」
「ちょっと動いたわね」
「（これじゃイメージが弱いのか……それじゃあ石にかかっている重力を弱めて持ちあげるようなイメージで）レビテーション！」
「そう、やればできるじゃない！」

目の前には予定より少し低いが、宙に浮かぶ小石の姿があった。
自分が使った初めての魔法の効果を見て俺はテンション駄々上がりだ。

「それじゃあ次はフライを試してみましょう。今度は小石じゃなく自分が飛ぶイメージをしなさい」
「はい！」

これはさっきとは違い、浮かすだけではなく浮いて自分の意思で移動させるということか……それなら

「（重力を弱めるまでは同じ、次は掛かる力の向きを行きたい方向に変えていくイメージで）フライ！」

自分の体がフワッと浮く感覚があり、成功したと思った瞬間俺は引っ張られるかの如く前方に5メートルくらい吹っ飛んで転がった。

「どんなイメージをしたらこうなるのかしら？」

そんな少し呆れたような声を聞きながら俺の意識は遠のいていった。

「起きなさいレッド！」

母さんの声で意識を取り戻した俺は、とりあえずさっきの魔法の問題点を探した。
おそらく少し浮いたからと言って、重力を弱めるイメージが良かったわけではなかったのだろう。
あくまで弱めているだけだから、石なんかより重い俺は下に引っ張られる。
それを気にしないで前に進もうとしたら、そりゃあ足引っ掛かって転ぶわ。
でもこれだけで大分疲れた。
やっぱりＲＰＧでいうところのＭＰ的なものが少なくなってきているのかな？

「やっと起きたのね……とりあえずフライは後回しにして、先に属性を調べましょう。」
「属性ですか。」
「火ならファイア、水ならウォータ、風ならウィンド、土ならアース。これらは練習次第でみんな使えるようになるんだけど、一発で成功する魔法が自分の属性だと思った方がいいわね。」

自分的には風とかがいいなぁ……見えない攻撃とかカッコよくない？

「じゃあ順番に試してみなさい。」
「はい！」

結果として火→煙すら出ない

水→一滴出てきた
風→むしろ風が凪いだ
土→目の前の土が３０センチくらい隆起した

「貴方は土系統みたいね、努力次第で水もラインスペル位までは出来るかもしれないわ」
「（よし！風は使えないみたいだけど二つも使える可能性があるなら万々歳だ！）」
「じゃあこれからが本番」
「え？」
「私の魔法避けて、私にタッチしなさい」
「いや……それはいきなりすぎませんか？」
「大丈夫よ？直接当てはしないから」

そう言って３０？位の水の玉を自転車くらいの速さで飛ばしてきた。
そんないきなりの攻撃に俺は対応できるわけもなく、俺の足元に当たった水の衝撃で尻もちをついてしまった。
そんな俺を母さんはクスクス笑いながら見ていた……ドＳか？

「次はちゃんと避けなさいね？」

そう言って母さんは自分の後ろに８つの水球を浮かべていた。
俺……死ぬかもしれない。

～回想終了～

「ありがとう……ございました」

あの後少しずつ反応できるようになってきたんだけど、それに合わせて水球のスピードも上がってきて、最終的には時速８０キロ位出ていたと思う。
幾ら直接当てないからと言って無数に飛んでくる弾を前に恐怖しないわけもなく、動きは鈍り何度も転がされた。
夕方になった頃俺が殆ど反応出来なくなってきたために、やっと母さんの口から訓練終了の合図が。
安堵の表情をしていた俺に母さんは優しく現実を突き付けた。

「それじゃあ明日も頑張りましょうね」
「えっと毎日やるんでしょうか？」
「もちろんじゃない！何日も空けたら体が鈍っちゃうわよ？」
「そう……ですか」

この特訓は毎日続くらしい……大丈夫なのか俺？

第7話　初めての魔法（後書き）

父さんは土のトライアングル
母さんは水のラインです

母さんは水のラインですが、殆どトライアングルに近いので水の玉は最大１メートル最高時速は２００キロまでイケる。
父さんの実力については後日……
それでは読んでくださった皆様に心からの感謝を

第8話　能力の確認（前書き）

ちょっと時間が進みます

第8話　能力の確認

あの特訓を始めて早二年。
最早躊躇というものをどこかに忘れてきたのではないか、という母さんの猛攻を受けながらの訓練に少しは慣れてきました。
まぁそれでも全弾回避は出来ないんですが……。
それに半年くらい前から母さんが足元じゃなく胴体を狙ってくるようになりました。

「そろそろ大丈夫かな？」

という俺にとっての絶望の一言とともにｏｒｚ
まぁそんなこともあって、反応速度と足が速くなりました。
やったね！！まぁ某ＧＳの欲望魔人ほどではないですが、結構速くなったと思います。

次に魔法の方ですが、なんとか土はドットスペル迄できるようになりました。
水は要練習ですが……母さんが結構気にしているので、なんとか５歳までにドットまで出来るといいなぁ。
そしてこの４歳の夏！
ついに他のポケモンを試してみようと思い、近くの森まで遊びに来ているのです！！
ここの森にはオークやゴブリンといった魔物は居らず、動物の数も多くない。
ここなら人もあまり来ないだろうし、いい加減装備も試したいと思

い、両親に散歩の許可を得て来たわけです。

「う～ん……誰がいいかなぁ？流石にＬｖ１００の子達は不味いような気がするし、伝説もヤバいよなぁ」

あれこれ悩んだ結果やっとのことで決めたのは

「来い！ニューラ！」

レベルもあまり高くなくて、小さいから大丈夫かなと思ってこの子にしたわけですが……想像以上に可愛い！！
とりあえず頭を撫でてみたら、目を細めて心地よさそうにしていたのでしばらく撫でまわした。
気づくと１０分位撫でまわしていたようだ。

「違う違う！俺はこんなことがしたくて呼び出したわけじゃ……いやお前が嫌いってわけじゃなくてな？」

なんか微妙に悲しそうな顔しているニューラにフォローを入れつつ、
今回の目的を再確認した。
俺はポケモンの技の威力と装備についての確認をしに来たんだ！
ってなわけでニューラに指示を出してみることに

「ニューラ！みだれひっかきだ！！」
「ニャ！」

俺の目の前にある太さ６０センチの気に向かって、勢いよく飛びかかるニューラ。
どれくらいの傷がつくかなぁと見ていると、一回目で斧で切りかかったような痕がついた。

「え？」

そのまま二回目、三回目、四回目でその木は倒れてしまった。
木を倒したニューラは、まるで僕頑張ったでしょ！みたいな輝いた目でこちらを見ている。
とりあえず可愛かったから頭を撫でることにした。
ニューラの頭を撫でながら、俺はさっきニューラの攻撃を思い出してみた。
ゲームの中でのみだれひっかきの扱いは、威力１８で２～５回の連続攻撃。
あまり強い部類の技ではなかったはず……しかもニューラは悪、氷だからタイプ一致っていうわけでもない。
レベルも確かこの子は４０位だったはずだから、あまりステータスも高くない。
１８の４回目で倒れたということは、タイプ一致のれいとうパンチだとどうなる？
あれはタイプ一致だと威力１１２だったはずだ。
試してみるか？

「ニューラ今度はあの木にれいとうパンチしてきてくれるか？」
「ニャ～」

ずっと撫でていたためか少し眠そうに目標の木に向かった。
テクテクと歩いていく姿は非常に可愛らしいと思うが、そんなことよりも技の威力を調べなければ！
先ほどのように飛びかかっているわけではないから、木に到着するまで少し時間がかかったが、やっと目の前に到着した。
ニューラは先ほどまで眠そうにしていた顔から、戦闘時の凛とした顔になり、目の前の木にこぶしを振りかぶって振り下ろした！
パリン！というガラスが割れるような音と主に、ニューラが殴った部分木が凍って砕けた。
そして少し遅れて響く木の倒れる音。

あぁこれはヤバい……人を余裕で殺せる威力だ。
Ｌｖ４０台のニューラでこれなら、俺のホワイトで使っていたキュレムなら？
６００族のバンギラスＬｖ１００ならどうだ？
ヤバいってレベルじゃない……出すポケモンはよく考えないと駄目だな。
思考の海に使っていると不意に上着の袖を軽く引っ張られている感覚。
ふとそちらを見てみると、またも僕頑張ったでしょオーラを出すニューラ。
とりあえず撫でる、ひたすら撫でる。

管理者が言うには装備は、装備したポケモンの技とステータスをそのまま自分が使用できるという話。
しかも同時に６体まで装備できるという……流石にいきなり６体同時装備は厳しい気がするから、１体でいいよね。
ニューラは予想以上に強かったからもう少しＬｖの低いポケモンにしよう。
とりあえず装備を試すためにニューラを戻すことに……「また今度遊ぼうな」と言うと意味がなんとなく伝わったのか少し寂しそうな顔をしたが、また今度という言葉がなんとなく分かったのか笑顔で光の中に消えていった。
何だこの罪悪感は……ｏｒｚ

気を取りなおして、装備するポケモンを決める。
Ｌｖ４０以下でそこまで攻撃力が高くない子。
あぁ炎も駄目だ！森だし……
あれ？ムクホークでよくね？
さっそくムクホークを呼び出すことに決めた俺は、ムクホークを召喚した。
……あぁそうだったね、君前回出したまま戻してなかったっけ。
とりあえずその……ゴブリンらしき肉塊を啄ばむのをやめなさい。

ゴブリンを土に埋め、ムクホークに水を飲ませた（装備して味覚共有とかだったら死ねるから）。
そしてついに装備を試すことに！！
ムクホークを一旦戻し、自分の体の中に召喚するようなイメージ……そうすると身体から力が溢れるような感覚が襲ってきた。
流石に存在力とやらがムクホークではあまり大きくないらしく、俺の見た目に変化はなさそうだが、力が満ち溢れる。

少しビックリしつつムクホークの使える技を試してみることに……
えっと「でんこうせっか」でいいかな。
よし！行くぞ！！

「でんこうせっか！！」

その瞬間俺は風になった。
そして木に激突、そのまま気を失った。

赤い光が目を刺し、ゆっくりと目をあけると、もう夕方だった。
そろそろ帰らなければ両親が心配するだろう。
とりあえず人型に凹んだ木を見なかったことにしつつ俺は帰路に着いた。
色々練習しなきゃだめっぽいなぁ……そんなことを改めて感じた一日だった。

おまけ

帰った俺を出迎えてくれた母だったが、俺を見て笑顔だった表情が引き攣る。
俺は何か可笑しいところあったかなと思い、自分の服を見ると土に汚れ、所々敗れた無残な服がそこにはあった。
その後禍々しい笑みを引っ提げた母さんにこっ酷く叱られた俺は1週間外出禁止を命じられた。
……わざとじゃないのに。

第8話　能力の確認（後書き）

やっと装備試せた！！
そして予想外のポケモンの強さ
みねうちでも人は死ぬような気がするよ……

第9話　予想外の結果（前書き）

今回は命中率と威力の関係性についてのお話

第9話　予想外の結果

謹慎1週間の判決を下された俺だが、めでたく今日外出許可が出ました！！
この間のポケモンの技の威力についてもっと調べなければと思っていた俺は、急ぎ森へと向かった。
俺が動物好きということはカトレア様から聞いていたらしく、両親は急ぎ森に行く俺の後ろ姿を、微笑ましいものを見るように見送っていた。

そうして前回実験した場所に着いたわけですが……うん荒れてるね！
まぁ前回あのまま放置して帰ったから当たり前なんだけど、木が二本倒れているし、人型のくぼみがある木が一本。
知らない人が見たら、ちょっとしたホラーだよ。
とりあえずそれらのことは後で考えるとして、今回試してみるのはこの世界においてポケモンの技の命中率って言うのは何に関係してくるのかということだ。

実際，かみなり，や，ふぶき，なんかの命中率が高くない技も、向きさえ決めてしまえばその通り飛ぶわけだ。
ということは実際の命中率は基本１００％ということになる。
それに状態異常についても気になるところだけど、これに限っては軽々しく試すわけにはいかない。
生き物に対してしか使えないものだからこそ、余程のことが無い限

りは……
そんなことより今は命中率だ！

でもそんなことをどうやって試す？
命中率が上がる技は，つめとぎ，や，ちょうのまい，。
俺のポケモンの中でそれらを覚えていたのはＬｖ１００のウルガモスか？
いや流石に呼べないだろ……アイツの覚えていた技虫と炎だけだったはずだし、何よりニューラの比じゃないステータスしてるしなぁ。
いや待てよ？ニューラって確かつめとぎ覚えたよな？
なんとか使えないかな？
呼び出して聞いてみるか。

「来いニューラ！」

光の中から俺に向かって飛び出してきたニューラだが、まだ小さい
俺が支えきれるわけもなく一緒に倒れてしまった。
ニューラは俺の胸のあたりにひっついて、じっとしている。
可愛いのだが今回も遊ぶために読んだわけではないので離れてもらう。
少し名残惜しそうだが言うことを聞いてくれた。

「ニューラお前つめとぎ使えるか？」
「ニャ！」

元気よく首を縦に振って肯定してくれた。
それなら試せるか？
よしじゃあニューラに手伝ってもらうことにしよう！

「それじゃあまず木に向かってひっかくを一回頼む」
「ニャ！」

前と同じように木に向かって飛びかかるニューラ。
みだれひっかきより一撃の威力が高いためか、木は半分くらい断ち切れてしまった。
やっぱり威力高いなと思いつつ、次の指示を出そうとして気づいた。
俺はここで物理と特殊をそれぞれ試すつもりだったんだけど、ニューラの使える特殊って，こごえるかぜ，か？
確か他は技マシンが必要だったはず……ということは、こごえるかぜ1択か？
俺半袖なんだが？
まぁ大丈夫だろ！！向きを考えればきっと大丈夫、うん……きっと大丈夫。

「よし！覚悟は決まった頼むぞニューラ！！」
「ニャ～？」
「あの木に向かって，こごえるかぜ，だ！」
「ニャ！！フシャ～～～～！」

うん寒い！！
気温がヤバい勢いで下がってる！！

俺はニューラの肩を軽くたたき、止めてくれという意思を伝えるとニューラは技を止め、俺の方を心配そうに見てきた。
可愛いが今はそれどころじゃない、威力の検証をしないと……とりあえず木が１本丸々凍っているな。
流石に内部までは凍っていないみたいだけど、やっぱり凄い威力だ。

次はつめとぎ後の命中率が上がった時の威力か？
凄く嫌な予感がするが試さないと今後困るかもしれないし、やるしかないか！

「ニューラ！次はつめとぎをした後、さっき引っ掻いた木の別の部分を引っ掻いてくれ」
「ニャニャ！」

ニューラは俺の指示通りつめとぎ（爪同士をこすり合わせて）をした後、さっきの引っ掻いた場所のの３０？位上を勢いよく引っ掻いた……引っ掻いたって言うか断ち切った。
うん忘れてたよ！攻撃力も上がるんだったね！
比較できないｏｒｚ
落ち込む俺、俺を不思議そうに見るニューラ。
そこには愉快な空間が出来上がっていた。

復活した俺は次にこごえるかぜの変化後を確かめることにした。
こっちは特殊だから，つめとぎ，での威力変化はないはず！

「さっきとは違う方向にこごえるかぜを頼む！」
「ニャ！」

さっきとは逆の方向にこごえるかぜを放ったニューラ。
その結果は狙った一本以外の木も凍っていた。
正確に言うと3本だが、真ん中の木以外は少し凍り方が弱い。
木の間隔はあまり変わらないのに、凍る本数が違うということは効果範囲が変わったのか？
ということは命中率が上がることで特殊技は効果範囲が変わるということになる。
確か一段階上がるということは1．25倍だったはずだから、1．25倍で効果範囲が2～3倍。

「あれこれってヤバくないか？」
「ニャ？」

確かかみなりの命中率70だったよな……それで雨天時は命中率が100。
ということは雨の日、または，あまごい，後なら，かみなり，の効果範囲は3倍以上になり、下手すれば5倍近くなるのか？
……殲滅兵器かなんかですか？
駄目だこれは封印しなければ！！
戦々恐々としている俺の姿に、ニューラは相変わらずキョトンとしていた。

その後もしばらく他にヤバそうな技が無いかひたすら考えていたら、

どこからか寝息が聞こえてきて、音の元を見るとニューラが断ち切った切り株の上で丸くなって眠っていた。
非常に和む光景だったが、如何せん寒い。
でも森の中で火を使うのは少し躊躇われる。
うん今日は帰ろう！そうしよう！！
ニューラには悪いが眠ったまま、帰ってもらうことにして今度謝ることにしよう！
凍った木や転がっている2本の丸太は見なかったことに……

俺は全てを放置して家へ逃げ帰った。
しかしこの選択によって、近隣から山菜取りに来ていたお婆さんが腰を抜かすことになったのは……また別のお話。

後日談

「レッド、お前が良く遊びに行く森に、夏にも関わらず凍りついた木があったらしいんだが、何か知っているか？」
「ん～ん知らないよ？（ごめん父さん……）。」

第9話　予想外の結果（後書き）

次は主人公初めての……

まぁ予定は未定なのでどうなるかはその時まで分かりませんがw

第１０話　初めての戦闘（前書き）

ついに１０話
記念すべき１０話

第１０話　初めての戦闘

今日も俺はあの森に居る。
まぁ今回は実験じゃなくてニューラのご機嫌とりなわけですが……
いやぁ昨日寝ている間に還したこと思いのほか納得いかなかったみたいで、ずっとそっぽ向いちゃててどうしようか迷ってるんです。
とりあえず撫でてみたり、喉元くすぐってみたりしてみたんですが、一瞬嬉しそうにするんですがすぐに元どうりの膨れ顔になってしまう。

「どうしたら許してくれるんだ？」
「……ニャ」

そういうとニューラは俺に向かって両手を広げた。
これは……抱き締めろってことか？
上等！！思う存分抱きしめようじゃないか！！

「よし！　じゃあ今日は二人でごろごろしてようか」
「ニャ！」

なんとか機嫌を直してくれたニューラに、俺はホッと一息つくことができた。
俺とニューラは暖かな日差しの中、草のベットの上をゴロンと横たわって、日光浴を満喫していた。

「ニャ？」

しかし突然ニューラが立ち上がり辺りを見回し始めた。

「どうしたんだ？」

俺の質問にも反応せず、ニューラは辺りを警戒している。
それから俺にも違和感の正体が分かってきた。
臭いだ……生臭い獣臭がする。
でもここに熊とか魔獣とかはいないはず、何がいるっていうんだ？！

「ニャ！！」

ニューラは突如俺の服を掴んで、後ろに引き倒した。
その瞬間俺の上半身があった部分を何かが通過して行ったのが分かった。
次の瞬間後ろに有った木が、凄い音を立てて折れていくのが見える。
何が起こっている？
その答えはすぐに判明した。

「風竜だと？！」

どうやらあの攻撃の主はこの風竜らしい。
何故こんなところに風竜がいるのかは知らないが、非常に危険な状況に変わりない。
ゴブリンくらいならニューラでも倒せるだろうが、ニューラの2倍以上大きくタフなオークとかには苦戦するだろう。
ましてや竜なんてもってのほかだ！
しかも風竜は上空を飛びまわるため、寒さにも強い。
ニューラでは勝ち目がない……しかし新しくポケモンを召喚する時間はなさそうだ。
ニューラに頼るしかないのか？

「すまないニューラ……頑張ってくれるか？」

ニューラはまるで任せろというが如く、自身の胸と叩いた。
そして戦闘が始まった。

先手必勝と言うが如く特攻をかけるニューラ、大木を切り倒す爪も竜にはあまり効果が無いようだ。
このドラゴンをポケモンで表せば、ドラゴン、ひこうの氷耐性持ちというところか。
ならば弱点は岩、ドラゴン。
ニューラにはやはり厳しいか？

しかしスピードはニューラの方が上だ。
それに向こうはこちらの数倍大きいから、あまり機動性は良くない。
森というフィールドがうまく働いているな……飛ぼうとすると羽が

木にぶつかり、もし飛んだとしても木が邪魔で俺たちを補足するのは至難だろう。
そのことに風竜も気づいたのか、ニューラに引っ掻かれながら辺りを見回した。
そして俺に気付いたのか俺の方を見ながら口を開けた。

「これはヤバいな……」

自身の命の危機にそんなことを呟きながら、俺は足が震えてその場を動くことができなかった。
そんな俺をあざ笑うかの様に風竜の口から風の弾丸が、俺目掛けて……今放たれた。

「（これは死んだかも分からんね）」

初めての死の恐怖に俺の頭は全く回らず、静かに死を待つだけだった。
しかし

「ニャーーーーーーーーー！！！！！」

俺のわき腹に激しい衝撃を受け、俺は横に吹っ飛んだ。
何回か転がってやっと止まったところで、俺がまだ生きていることに驚く。

なんで俺はまだ生きている？
風竜に風の弾を受けて吹っ飛んだはずじゃ……いや何故俺は，横，に吹っ飛んだ？
竜は俺を正面から吹っ飛ばすはずだろう。
ならば何が？

そして俺はやっと気付いた。
さっきまで響いていた戦闘音が消えてることを……

「ニューラ？」

俺は辺りを見回して、ニューラの姿を探す。
そして目に映ったのは血まみれで横たわるニューラと、今にもニューラを喰わんとする風竜の姿。
一瞬で血が滾った。
目の前が真っ赤になるほどの怒り。
俺の所為だ……俺が装備でもしていればニューラはこんなことにならなかった！！
それよりも今はあの糞竜をぶっ潰すことだけを考えよう……

「俺も呼ぶ気はなかったんだけどな……流石に駄目だ耐えきれない。来い！ラオウ！！」

俺の掛け声とともに目の前に強い光が生まれる。
そこから姿を現したのは６００族の一匹、バンギラス。

「ラオウ！ストーンエッジだ！！！！」

バンギラスは激しい咆哮とともに、足を踏みならし、風竜の真下からストーンエッジを発動した。
一発目で翼は砕け、二発目で腹を貫通し、三発目で頭部を破壊した。
その後も１０数発の石の刃が風竜を襲い、風竜を見るも無残な姿へと変えていく。
全てが終わった時そこにあったのは無数の石と、飛び散る肉片だけだった。
俺はそんなことに目もくれず、ニューラへと駆け寄った。

「ニューラ！死ぬな！！」

ニューラの体は、もう冷たくなっていた。
俺はニューラの亡骸を抱きしめながら、泣いて謝り続けた。

「ごめん……ごめんな……」

俺が泣き止んだのは夕方になってからだった。
血まみれのニューラをこのままにしておけないと思った俺は、近くの湖で血を流そうと思い、一旦地面にニューラを横たえた。
次の瞬間、ニューラの亡骸は光の粒となり、俺の体の中に入ってきた。

俺は驚いたが頭の中で、たんたんたらーんという場違いな音楽が聞こえた時、希望を見出した。
とりあえずラオウにお礼を言って、戻した所で先ほどの音楽の意味を考えてみた。
（因みにバンギラスは帰るとき一礼して光の中に消えていった……騎士みたいだな。）

「（可能性は２つ。一つ目は俺の願望からなる幻聴。
もう一つは戻すことによってポケモンセンターに戻すのと同じ効果がある。
確かにボックスに戻すことで体力やＰＰは全回復するが、この場合はまだ分かっていない。
とりあえずわずかに残った可能性を信じることにしよう。）」

それにしても今回俺は本当に駄目だった。
装備もしなければ新しいポケモンも召喚しない。
ポケモン召喚は光が発生するため、戦闘の邪魔になる可能性があったためにしなかったというのもあるんだけど、離れて召喚すれば良かっただけじゃないか！
装備に至っては、していない意味が分からない。
俺には覚悟も、実戦経験も足りなすぎる。
父さんに相談してみよう……

俺はゆっくりと、これからのことを考えながら、家に帰って行った。

家に帰って、母さんに帰ってきたことを伝えに行くと、

「お帰りなさいレッ……ド」
「どうしたの母さん。」

俺の姿をみて、母さんは固まった。
俺はそんな母さんを不思議に思い、自分の体を見回してみると、血まみれの上着に破れたズボン。
顔も目は赤く、頬っぺたに擦り傷がある。
そんな俺を見て母さんは父さんを急いで呼びに行き、俺はそこにポツンと立っていることしかできなかった。
また謹慎かな？と暢気に思いながら、ニューラの復活を信じた。

後日談

やっぱり謹慎を食らった俺。
まぁ血は死んでいた動物を埋めたということで説明したが、どっち

にしろ心配させたことに変わりはないから謹慎らしい。

あと翌日にこっそり部屋の中でニューラの無事を確認するため召喚したら、ニューラは普通にピンピンしていた。
少しだけ涙が出たけど、その後1時間くらいニューラを抱きしめ続けた。
本当に……よかった。

第１０話　初めての戦闘（後書き）

すまんニューラ！！！
そしてありがとうラオウ（バンギラス）！！
……最初普通に伝説出そうと考えて、やっぱ駄目だろと自重しました。
まぁバンギでも十分ヤバいんですけどね？
しかも家のラオウＬｖ１００なわけで……じしんは広範囲すぎる、かみくだくは微妙、じゃあ弱点だしストーンエッジだということでブッパしました。
一応今回のストーンエッジは結構自重気味ですよ？
主人公が近くに居るので危ないからね。

第１１話　転生者の決意（前書き）

主人公決心する！

第１１話　転生者の決意

風竜との遭遇の翌日。
俺は父の部屋へと向かっていた。
いくらあの時が初めての実戦であったとしても、あれは不甲斐なさすぎる。
母さんからの扱きを受けてはいるものの、あれはあくまで魔法と回避の訓練にすぎないし、そこに死の危険性は無い。
明確な死が目の前に来た時、俺は２度何もできなかった。
前世での火事、そして今回の竜。

「父さん……僕強くなりたい」
「いきなりどうした？」

俺は確かに面倒事は嫌だし、死ぬのも怖い。
でも身近な人が死ぬのも嫌だ。
ならば最低限身近な人を守るだけの力を、とっさに動ける判断力が必要だ。
ならばどうする……鍛えるしかない。
俺は大きな危険を避けるため、小さな危険に立ち向かう決心をした。
ごめん父さん、少し嘘をつきます。

「僕は昨日の動物が死んでいるのを見て、すごく悲しかった。
確かに食べるために、身を守るためにその動物は殺されたのかもしれない。
でもあの動物がもし僕の友達だったら？

父さんや母さんだったら？
僕はそんなの耐えられそうにない」

俺の偽りない気持ちを父さんに伝えると、父さんは真剣な顔をして俺を見ている。
この厳しい目は、まるで俺の決意を試しているようだ。
ならば決して目をそらすことはできない！

「僕は！！領地でのんびり暮らしたい！！
動物と戯れ、領民と触れあい、静かに暮らしたい！」
「……」
「でもそのためには、もしもの時自分と周りを守れる強さ……最低でもみんなを逃がして、自分も逃げられるだけの力が必要なんだ！！」
「……」
「だから僕を鍛えてください！お願いします！」

俺はそう言って父さんに深く頭を下げた。
1秒、2秒、3秒と無音の時間が続く。
そして父さんは言った。

「途中で投げ出すことは許さんぞ？いいのか？」
「はい！」
「痛くて、苦しい思いもするかも知れない、それでもか？」
「はい！」
「そうか……」

父さんは立ちあがり後ろを向いた。
駄目か……
なんとか自主練習で補うしかないのか？

「明日……」
「え？」
「明日からだ」
「ということは……父さん！！！」
「俺は母さんよりも厳しいからな？」
「はい！！」

こうして魔法以外にも戦闘の心得や模擬戦をすることになった。
俺の日常は、こうして非日常へとまた一歩進んでしまった。
魔法練習、父さんの訓練、森でのポケモン召喚装備練習（と実験）のローテーションで俺の毎日は組まれていた。
正直キツイが、若い苦労は買ってでもしろっていう位だから頑張ろう。
目指せ将来の，のんびりライフ，！！

翌日

父さんは、まず殺気と恐怖に打ち勝つことから始めると言い出した。
徐に腰に下げていた剣を抜き放ち、いきなり俺に切りかかった。
とっさに目を瞑ってしまった俺は、いつまでも感じない痛みに疑問を抱いて目を開けると、腰を抜かした。
剣の切っ先が俺の額から1センチ位の位置にあったからだ。
父さんは特に怒りもせずに一度剣を収めた。

「恐怖を感じるのはしょうがないが、目をつぶってはいけない。
状況は常に動いている。
目を瞑るだけでは剣は引かないし、剣を避けることもできない。
お前は守りたいんだろう？
ならば目を開いて、状況を確認して、最善の行動を選べるように考えなさい」

そうだ……俺はもう目の前で知り合いが死ぬのを見たくない。
全てを守るなんて大それたことは言わないけれど、身近な人だけでも守れる強さを手に入れないと！！

「これから俺はお前に何度も切りかかる。
お前は逃げなさい。
ひたすら逃げなさい。
逃げながらどうやってこの状況を覆すか思考しなさい」

父さんはそう言って数を数え始めた。
これは１０数えたら来るってことなのか？
上等！！
逃げ切って見せる、母さんに鍛えられた自慢の足で！

俺は走った。
一歩でも遠くに、そして隠れて様子を窺うつもりだった。
１０数え終わった父さんはゆっくりと目を開け、俺のいる方へとを向け走ってきた。
速い！！それに何で俺の居場所が？！

「レッド、いくら俺が目を瞑っていても足音は聞こえてきた。
お前は飛んで逃げるべきだったんだ。
まずそこが一つ目のミス」
「（怖い……これは本当に父さんなのか？）」
「二つ目は、子供が行く足が速くても１０秒じゃあそう遠くまで行くことはできない。
遮蔽物が少ないここでは、自然と隠れる場所は限られてくる。
お前は逃げ続けなければならなかった」
「（ヤバい！父さんはもうそこまで来ている早く逃げなくちゃ！！）
」

俺がその場から逃げだそうとした時後ろに気配を感じた。

「3つ目。
お前は俺を甘く見過ぎだ！」

首筋に手刀を受け、俺はあっけなく意識を失った。

しばらくして目が覚めると、父さんの部屋のソファーで俺は寝ていた。

「ようやく起きたか？
加減を間違えたかと心配したぞ。」
「父さん……ごめんなさい。」
「ん？何がだ？」
「父さんの期待に応えられなくて……。」

そう俺が言うと父さんは、一瞬キョトンとして、大きく笑い声を上げ始めた。

「はっはっはっはっ！！当たり前だろう！
お前死の恐怖に打ち勝つなんて大人でも難しいことだ。
それをまだ子供のお前がいきなり出来たらそれこそ驚きだぞ？
それにお前の今回の行動は悪い点ばかりでもない。
実際遮蔽物が多い場所なら隠れることも有効だし、お前の足の速さには俺も少し驚いた」

父さんは本当に楽しそうに笑っていた。
さっきまであんなに怖かったのに……そうかあれが殺気ってやつなのか。
流石に前世では感じることが無かったから分からなかったけど、あれがそうなのか？

「お前はまだ若い。
ゆっくり成長して行け。
今は父さんと母さんが守ってやる。
だから早く強くなって父さんたちを守れるようになってくれよ？」
「はい！」

こうして父さんの初戦闘訓練は幕を閉じた。

第１１話　転生者の決意（後書き）

ふぅ１日３話はハードだよ……

他の作者さんに比べて一話一話が短いのに、こんな大変だなんて……

凄いな皆さん。

第１２話　自らの力（前書き）

さぁ次はどうしようか

魔法に関してはオリジナルが多いのでご了承ください。

第１２話　自らの力

父さんの修行を受け初めて2年が経過した。
6歳になり、昔だったら小学生になる歳だな。
まぁこんな6歳児は滅多にいるもんじゃないだろうけど……。
そんな俺は今

オークとタイマンしています！！
何でこんな状況かというと……。

～回想～

6歳になって、魔法も少し上達した俺。
父さんとの訓練も慣れてきて、少しだけど剣も使えるようになりました。
まぁ大人の剣を子供が受け切ることなんかできないんだが……皆さ

んマインゴーシュって知ってる？
簡単に言うと受け流すことを主とする剣のことなんですけど、それの真似事で何とかしのいでます。
これができるのも母さんの訓練で反応速度が上がっていたからなわけなのですが、初めてこれを試した時は父さんもビックリしていた。
俺がこれを使っているのは、某南瓜鋏の少尉さんが使ってた気がして試してみたら、シックリきたっていう理由なわけです。
父さんも元々パワーファイターではないので、何とか子供の力でも少しそらす位はできるレベルというのも使っている理由の一つだ。
父さんとの訓練では魔法を使う余裕なんてないから、どんどん近接技能がアップしていきます。
それでも父さんに未だ一撃も入れたことが無いのでどの程度かは分からないのだが……

母さんの魔法練習もステップアップしてきた。
母さんが放つ水球を俺の水球で撃ち落とすという非常に神経を使う修行に進化してしまった。
まだ俺は水に関してドットスペルしか使えないから、規模は小さいが自分に向けてハイスピードで飛んでくる水球はなかなか怖いものがある
土はラインになったから、それに伴って錬金も様になってきた。
俺の目標は異能の実験をするための鉄のドームを作ること。
まだ精神力が足りないから大きなものは作れないけど、少しずつ大きなものを作れるように練習しています。
１０歳までに出来るといいなぁ。

そんな濃い毎日を過ごしてきたわけですが、この度俺に父さんから個人的な依頼を頼まれました。

父さんの話を聞くに、領地内にはぐれオークが出たらしく、それを討伐してきてくれとのこと。
ラインの俺にとってオーク一体ならそれほど苦戦はしないだろうし、ポケモンの力を借りたらまさしく楽勝だろう。
でも今回俺はポケモンの力を借りる気は無い。
ポケモンに頼ってばっかりだと、自分はポケモンに依存してしまう。
それは駄目だ！彼らが俺を守ってくれるように俺も彼らを守れるようにならないといけない。
いくら戻せば回復するとはいえ、痛みは感じるのだから……。
故にこの任務を俺は剣と魔法だけでやり遂げるつもりだ。

そんな決意を秘め、父さんに依頼を受けることを伝えた。
オークがいると報告があった場所に向かおうとすると、父さんと母さんが見送りに来てくれた。

「気をつけて行けよ？決して油断するな！」
「本当に一人で行くの？」
「大丈夫だよ母さん、今まで父さんと母さんに鍛えてもらってきたんだから！」
「危なくなったらすぐ逃げるのよ？命あってこそなんだから……」
「うん！」

そうして俺はオークのいるとされる洞窟へと向かっていった。
距離はそう遠くなかったが、俺のよく行く森の深い部分にあるため夜に行くには危険が大きい。
故にそれなりに急ぎ、しばらくして問題の洞窟前へとたどり着いた。

「さてどうしたものか……。
とりあえず洞窟から引っ張り出すか」

俺はそこらへんにある木の枝を折り、火をつけて洞窟内に放り投げた。
それを何回か繰り返し、洞窟の外まで煙がでてくる位になった時、豚のような鳴き声が聞こえてきた。
地面の振動からどんどんこちらに近づいてきていることが分かる。
これから命のやり取りをすることを考えて、胸の鼓動が速くなってくる。
緊張、恐怖、不安これらが入り混じり、落ち着かない自分の心を無理やり鎮めていつオークが出てきても大丈夫なように準備した。

杖を抜き、剣に手をかける。
そうしてついにオークが出てきた。

〜回想終了〜

体長2メートル弱で、オークとしては大きな個体ではないが俺にとっては巨人みたいなもんだ。
煙で鼻と目をやられたらしく、涙を流しながらブヒブヒ言っている。
俺は先手必勝と、現状一番攻撃力が高い魔法を使うことにした。

「ロックスピア！！」

俺の言葉とともに、オークの周りから四本の鋭い岩がオーク目掛けて隆起した。
四方を囲むように飛び出た石の槍は、オークの肉をたやすく貫通した。
まだ息があるようだが、もうじき死んでしまうだろう。
案外早く倒せてしまい、少し気が抜けてしまったのか、俺は周囲の気配を探るのを忘れてしまった。
その結果……もう一匹オークがいたことに気がつくのが遅れてしまった。
振り向いたときにはオークが走ってきており、魔法は間に合わないと判断し、急ぎ剣を投げることでオークに牽制をした。
剣は手に刺さり、オークは足を止めたがその手に持っていた棍棒が俺目掛けて飛んできた。

「グッ！！」

なんとか直撃は避けたが肩にかすり、しばらく左手が使えそうにない。
左手で使う剣はもう投げてしまっているので問題は無いが、非常に

痛い！
しかし俺は痛みに耐えながら、手の痛みに怯んでいるオークに魔法を放った。

「ロック……スピアァ！！」

俺の放った魔法を避けることができなかったオークは、４本の石の槍に胴体を貫かれ、上半身と下半身が分断された。
もう油断はできない他にもオークがいるかもしれないと警戒して、しばらく辺りを見回していたが、辺りに気配はなく、やっと任務が完了したことを理解する。
気が抜けて尻もちをついてしまったが、自分が生きていることを実感し、そして先ほどの自分の失態を後悔した。
危うく死ぬところだった……俺はまだまだみたいだ。

周囲を見渡してみると石の槍に支えられながら死んでいるオークと、上半身と下半身が分かれてしまっているオークが転がっていた。
周囲には生臭い臭気が漂い、地面はオークの血で染まっていた。
自分は今命を奪った。
前に風竜を殺した時はラオウがやってくれたので、実感は湧かなかったが、今回は違う。
自分が一人でこの二匹を殺したのだ。

いくらオークだからと言ってこのまま死体を晒すことは無いと思い、オークの耳を切り取って布に包んで、オークの死体を一か所にまとめて、錬金で埋めた。

こうして領地にやってきたはぐれオークは土に還った。

肩の痛みに鈍い痛みを感じながら、俺はゆっくりと帰路に着く。
父さんに油断するなと言われてたのに、油断しちゃったな。
まだまだ修行不足か……もっと頑張ろう！！
そう新たな決意をしつつ、夕日に照らされながらレッドは歩を進める。

家に帰った俺は、母さんに怪我の理由を聞かれ、２時間の説教説教された後に今後の訓練強化が確定した。
黒い笑顔を浮かべた母さんに、俺はさっき立てた決意が少し折れそうになっていた。
……お手柔らかにお願いしますお母様ｏｒｚ

第１２話　自らの力（後書き）

また２年経過させちゃったｗ
いやぁ流石にあのペースだと原作はいるまでに、めちゃくちゃ掛かりそうだったからね！

次はカトレア様との再会、そして桃髪幼女とのファーストコンタクトを予定しています。

第１３話　再会（前書き）

久しぶりの原作キャラ登場か？

……口調については幼少期ということで大目に見てあげてね？

第１３話　再会

あの激戦からから早一ヶ月……まぁ激戦って言うほどではないか？
それは置いといて、あれから一カ月が経った。
母さんからの訓練強化宣言はマジだったらしく、母さんの訓練水球の弾数が１．５倍になり、父さんはゴーレムとの同時攻撃を仕掛けてくるようになった。
……俺死ぬよ？

特に父さんのゴーレムが素敵仕様なため、非常に困ってます。
原作でギーシュが使っていたような美しさなどは無く、ただ人型が木刀を持っているという簡易なものなのだが、３０メートル以内ならどこにでも出現させることが可能らしく、いきなり後ろに現れて奇襲をかけてきたりする。
しかも木刀だから普通に当ててくるし、いくら反射神経が良くなっていたとしても、前後同時に攻撃されたらなかなか避けるのが難しい。
まぁ父さんの方は真剣なので優先的に避けるが……でも木刀だって当たり所悪かったら死ぬんですよ？！
痛いし……まぁ訓練後に怪我が酷い場合、母さん特性の薬を使用するので割と大丈夫なんですが。
そんな厳しい訓練を受けていた訳だが、その日の訓練終了の時父さんがサラッと言った。

「３日後にカトレア様の誕生日会が開かれる。
だからプレゼントでも用意しておけ」
「へ？もうそんな時期でしたっけ？」

「あぁ、もうそんな時期だ」

カトレア様の誕生会、それは基本普通の誕生会だが俺にとっては違う。
カトレア様は俺と会うたび、新しいポケモンを見たがるので結構大変なのだ。
強面のポケモン……大丈夫のような気がするけど却下。
Ｌｖが高いポケモン……威圧感が半端じゃないので却下。
毒系のポケモン……もちろんアウト。
大きい又は重い奴……同じくアウト。
こんな感じで結構慎重にならなくちゃいけない。
因みに今まで見せたのはムクホーク、ピィ、ソーナノ、ピチュー、ピンプクの５体。
ムクホークは想定外だったけど、基本可愛いポケモンを見せることにしている。

そして俺にとってもう一つ困ることがある。
それは桃髪ツンデレくぎゅうの存在だ。
去年の誕生日の時に初めて会ったのだが、あのときはまだ１歳で言葉もあまり話せなかった。
それから１年、おそらくある程度話ができるようになっているはず。
彼女はエレオノール様のように、ツンデレに目覚めていないために人懐っこいのだ。
俺が初めて会った時も特に怖がることもなく、俺に手を伸ばして来た。
まぁ……可愛かったからしばらく戯れていた訳だが。
だが１００歩譲ってカトレア様と親交を持つのはいいさ。
彼女は原作上前線に立つような人でもないし、穏やかな性格をして

いる。

しかしルイズ嬢は違う。
彼女はこれから先虚無に目覚め、国家間の戦争に巻き込まれていく。
俺の素敵のほほんライフを根本から崩すような運命を持った女の子なのだ。
故にあまり深く関わりたくない。
俺はモブでいい。

そんなドキドキの誕生会が明日に迫った夜。
俺は未だ、カトレア様へのプレゼントを考えていなかった。
前世で女の子に誕生日プレゼントを贈った回数なんて数えるほどしかなく、どんなものを贈ればいいのか分からなかった。
故に今まで４回の誕生会で、母さんに教わりながら俺が作った、手作りのぬいぐるみを贈るというのが常だった。
しかし今回は訓練がハードになったため製作時間が取れなかったのだ。

「どうしよう……花？流石に１０歳には早いだろう。
貴金属？俺にそんな金は無い。
いや待てよ……錬金で何かを作ったならどうだ？

錬金は基本原子配列をいじくった物みたいだから鉄みたいな重たい鉱石じゃなく、別のもので像を作って贈るのなら元手もかからないし、失礼にもならないはずだ」

そうと決まれば即行動。
俺は静かに窓から外に出て、錬金を始めた。
やるからにはクオリティの高い物を！！
というオタク根性全開で作業に取り組む俺。
それをたまたま窓から見つけた母さんは小さく笑いながら「頑張りなさい男の子。」と呟いた。

翌朝

目の下に隈を作り、ついさっき出来た像を包んだ箱を持って俺は馬車の中に居た。
結局朝までかかってしまった像作成だが、結構の自信作が出来上がった。
像のモデルは昔カトレア様にも見せたことのあるピチュー。
実は昨日の夜一回呼び出して、ポーズを取ってもらったりしながら作った一品だ。

取ってもらったポーズの中で図鑑に表示されるポーズが気に行ったので、それを像にしたものなのだが大丈夫だろうか？
受け取ってもらうからには、喜んでもらいたいからな！

因みに材質は透明度の高い石英でつくったのでガラスみたいにも見えるが、あくまで水晶だから強度もしっかりしている。
まぁ大変だったのは水晶の不純物をどける作業だったわけだが……
なんにせよこっちの世界で水晶像なんてあまり見かけないから喜んでくれるといいなぁ。
そんなことを考えている俺を乗せた馬車はヴァリエール領への道を進んでいった。

相変わらず大きいなぁ、ヴァリエール邸を見たときの俺の感想は毎回これだった。
前方に門が見えてきて、ゆっくりと開いていく。
門があいた所に人影が２つ。
公爵夫人とカトレア様だ。

「ようこそドリュウズ殿」
「お久しぶりレッド君！」

カトレア様はまだ原作ほど体が弱くないらしく、こうやって外出もすることができる。

それでも遠出とかはできないようだが……。

「お久しぶりですカリーヌ殿」
「久しぶりですカトレア様。
お誕生日おめでとうございます」

そういうとカトレア様は小さく頬を膨らませて、

「様付けは止めてって言っているのに……」

と少し拗ねてしまったようだ。
可愛らしいとは思うが、俺の精神年齢は２２＋６歳なわけで、娘を見ているような気分になる……娘居なかったけど。
そんな感じで世間話をしながら客間へと案内される俺と両親……ではなく両親のみ。
俺は真っすぐカトレアさｍ……カトレアさんの部屋へと連れて行かれた。

「今日はどんなポケモンを見せてくれるの？！」

と少し興奮気味のカトレアさんに俺はまず

「とりあえずそれは少し後にして、先にプレゼントを渡すよ。」

「プレゼント！今度はどんな人形かしら」
「今回は人形ではないのです」
「そうなの？」

俺は嬉しそうにプレゼントを待つカトレアさんに萌えつつ、プレゼントの入った箱を渡して、開けるように促した。
カトレアさんは恐る恐る箱を開けると固まった。
なんだ！？なにか失敗したか？！
と内心びくびくしながら

「どう…かな？　気にいった？」
「凄く……綺麗」

どうやら気にいってくれたようだ。
それでこそ頑張ったかいがあるというもの。

「ありがとうレッド君！！」
「うおっと！」

余程嬉しかったのか俺に抱きついてきたカトレアさんの体温を感じつつ、今の状況公爵か夫人に見られたら俺死ぬなとか考えていた。

第１３話　再会（後書き）

あぁ別にカトレアルートってわけではないので……
っていうかヒロインは俺の中でまだ決まっていないので適度にフラグ立てしていきます。

あれ？ルイズが出てきてない……出す予定だったのに。
次こそ出す……出したい……出せるといいなぁ。

第１４話　三女との出会い（前書き）

ＰＶがついに１００００００突破！
そしてユニークも９８００とあと少しで１００００！
総合評価も徐々に上がってきて非常に嬉しい限りです！！
ここまでお付き合いしていただいた読者の皆様、誠にありがとうございます。
これからもがんばっていきたいと思いますので、読んでくださると幸いです。

第１４話　三女との出会い

あの後まだ誕生会まで時間がたっぷり残っていたので、まったり雑談をしていたら

「そういえばルイズ嬢は大きくなった？」
「ええ！とても愛らしくて、小さな手で私の手を握ってくる時なんて倒れてしまいそうになる位なの。」

うん……その基準はよくわからないが、溺愛していることは分かった。
苦笑しながらそんなことを考えていると、カトレアさんは信じていないと取ったらしく

「それじゃあ会いに行きましょう！」

と俺の手を取った。
カトレアさんって原作でこんなにアグレッシブだっけ？
とか思いつつ、俺はルイズ嬢のいる部屋へと引っ張られていった。

ルイズ嬢のいる部屋へとたどり着いた俺たちは、静かにドアを開いた。
部屋の中いたのは、詰み木で遊んでいるまだ小さなルイズ嬢。
開いたドアに気付き、持っていた詰み木を床に置いて、カトレアさんへ走り寄ってきた。

「ね～ね！」
「なんですか～ルイズちゃん？」

微笑ましいねぇ……俺の存在が空気になりつつあるけどｏｒｚ
そんな俺に気付いたカトレアさんは、少し恥しそうにして俺を紹介することにしたようだ。
ルイズ嬢も俺に気づいたらしく、カトレアさんの後ろに隠れながら俺を見ている。

「この子はレッド君っていうんですよ？」
「れっと？」
「そう、レッド君」
「れっと……」

まだ，ド，の発音がうまくできないらしく、レットになっているが、まぁしょうがないさ。
あれ２歳の時俺ガンガン喋ってなかったか？
……不味かったかな？まぁ過ぎたことだししょうがないか。
騒がれることもなかったから、早熟な子って印象を与えた位のはずだし。

とりあえずその思考を頭の隅っこに置いといて、ルイズ嬢に挨拶することにした。

「一応初めましてじゃないんだけど、僕の名前はレッド・ド・ドリュウズ。
レッドって読んでくれると嬉しいかな？」

俺はルイズ嬢に目線を合わせてそう言った。
昔子供と話すときには目線を合わせることで親近感を湧かせることができるって聞いたことがあるから試した訳なんだが、どうやら成功のようだ。
ゆっくりではあるけれど、カトレアさんの後ろから出てきてくれた。
俺はビックリさせないようにゆっくり手を差し出して、

「よろしくね？」

というと最初は戸惑ったようだけど、握手を求めていることが分かったのか彼女も手を出してくれた。
俺が彼女の手を優しく握ると、俺に害意がないのが伝わったのか笑いかけてくれた。
ルイズ嬢は

「よろしくれっと！！」

とまるで花が咲いたかのような笑顔で言った。
これがある意味俺とルイズ嬢のファーストコンタクトとなった。
因みにその時カトレア嬢は、慈愛あふれる顔で俺とルイズ嬢のことを見守っていた。
その後ルイズ嬢とカトレアさんと共に，おままごと，や，詰み木，をして誕生会までの時間を過ごした。
流石に精神年齢２８の男に、おままごとは精神的にキツイ。
まぁ途中から吹っ切れたけど……。
そんな楽しい時間は瞬く間に過ぎて、

誕生会は始まった。

「お誕生日おめでとうございます」
「ありがとうございます」

カトレアさんは、色々なところから来た貴族の人たちからお祝いの言葉を受けつつ、笑顔でお礼をいっていた。

その時俺は普通に飯を食っていた。
いやぁクラッカーの上にチーズは鉄板だな！！
他にもハシバミ草の苦みは日本人として生きていた俺にとって、一つの味のアクセントでしかなく、他の人の眼も気にせずにハシバミ

草にチーズを巻いて食べたりしていた。
原作のタバサは日本的な味覚しているのかもとか考えつつ、色々な物を摘まみながら俺は誕生会の終わりまで食べまくった（まぁ休んでは食べての繰り返しだったから、それほど食べていないのだが）。
途中カトレアさんが俺のところに来たり、ルイズ嬢が暇を持て余して俺のところに来たりしたがおおむね何もなかった。
偶にヴァリエール夫妻から視線を向けられた気がしたが、凄く嫌な予感がしたのでスルーした。

つつがなく誕生会も終わり、俺も帰る時間が来た。
父さんと母さんはすでに馬車に乗っており、俺はカトレアさんとルイズ嬢に挨拶をしてから行くと言ってある。

「それじゃあもう帰るね？」
「もうちょっと遊びたかったけど、夜も遅くなってきたし、しょうがないわね。」
「れっとかえっちゃうの？」

少し寂しそうなルイズ嬢に罪悪感を覚えるが、帰らないわけにもいかないため俺は首を縦に振る。

しかし流石にこのままでは後味が悪いので

「来年のルイズ嬢の誕生日にまた来るから、その時また遊ぼうね？」

来年という言葉の意味を理解できたかは、分からないがまた来ることは理解したらしく、なんとか機嫌を持ち直してくれた。
カトレア嬢は相変わらずの笑顔だったが、俺は今回ポケモンを見せることができなかったので

「カトレアさん。
次来る時は友達を二人連れてきますから、楽しみにしててください」

とルイズ嬢の手前人間の友達のように言ったが、カトレアさんには伝わったようで

「ええ！楽しみにしているわ！」

と先ほどよりも嬉しそうに笑っていた。

後日

カトレア嬢から手紙が届いた。
なんでも内容は俺からの誕生日プレゼントを親が見たらしく、どこで手に入れたか気になったらしい。
俺は流石に自分で作ったともいえず、流れの商人に領土を通る際に譲ってもらったことにした。
後で父さんと母さんに口裏合わせてもらおう。
父さんと母さんは俺が目立ちたくないことを知っているから、なんとか誤魔化してくれるはずだ！
あぁまた軽率だったな……気をつけないとなぁ。

第１４話　三女との出会い（後書き）

もし気になる点等があれば、直せる範囲で直しますのでその時は気軽に一言を書いてやってください。
他にも感想、アドバイス等を戴けたら俺のテンションが上がります。

第１５話　ラッセル村（前書き）

寝坊した……ｏｒｚ
今回は内政にちょっと関わってみようかな？

第15話　ラッセル村

カトレアさんの誕生日から一カ月。
最近自分は近接戦闘に自分の反射神経をもっと生かせないかと考えていた。
確かにマインゴーシュは使い勝手がいいんだが、攻撃力に欠ける。
そこで思い浮かんだのは、前世で小学校の頃から中学校の初めまで習っていた極真空手の存在。
あれに漫画とかの技で使えそうなのを組み込んではどうかというもの。

この世界に明確な格闘の流派というものが存在するかどうか分からないが、初めての相手ならば意表を突けるだろう。
俺はそう思って森に行く時に、記憶を探りながら空手の練習をした。
正拳突きは、拳を握る際に出来る限り小さな拳を作るように力を込めて握る。
拳を当てるときは、人差し指と中指の部分が初めに当たるように。
片方の拳を突き出す際に、もう片方の手の平が上を向くように自分のわき腹横のあたりに拳を引く。
そして拳を半周させながら出している拳を引き、もう片方の拳を勢い良く突く。
これが俺が昔ならった正拳突きの型。

しかしこれではノーガードにもほどがある。
試合ですら構えは、ボクシングに近い形をしている。
まぁ足は違うが……空手において足技は必殺に近い。
頭部に蹴りが当たると技ありとなり、倒れると一本となる。

小さいころ大人の空手の試合をみたとき、ヘッドギアが無かったので、拳で相手の顔は切れるし、蹴りで青あざができるといった大分ショッキングな試合が多かった。
故に蹴りのガードを意識しなければならないのだ。

しかしこちらの世界においてその程度なら、命をかけた戦闘に使用するには力不足。
最低でも板垣漫画クラスの攻撃力が無ければ……。
そこで考えたのが俗にいう中高一本拳や抜き手の使用。
抜き手は中国拳法でも使われている程使い勝手の良いものだが、鍛える際に突き指や骨折などが絶えないため使いこなすのが難しい。
中高一本拳も同様、あれは親指を中指の第二関節に当てた状態で拳を握るため親指に掛かる負担が大きい。
そして防御面では自分の反射神経を最大限に使って行う、無刀取りやまわし受けも要練習となる

そして肝心な怪我に対しての対応だが、俺には装備がある。
自己再生、光合成などの回復技を行使すれば大丈夫のはずだ。
攻撃力を強化してしまっては修行にならないため、ユンゲラー辺りが妥当か？
そして格闘技を用いた戦闘に魔法を組み込むことを考えるとバリエーションは増えていく。
そのためには先ず指輪を杖代わりに出来るようにしないといけないな。
そうして俺はどんどん戦闘技能向上をしていく。
いつかのんびりできることを目指して……。

そんなこんなで半年が経った。
空手も少しずつ形になってきて、抜き手や中高一本拳で木を凹ませる位は出来るようになった。
前世に比べて筋肉の成長速度が速いが、ラノベ仕様だと納得することにした。
まわし受けは、まだ練習方法の確立が出来ていないので習得出来きっていないが、無刀取りは相性が良かったのか割とすぐ出来た。
何故出来ることが分かったかというと、一回父さんとの模擬戦でうっかり使ってしまったからな訳だ。
あのときの父さんの顔は記憶に残っている。
驚愕と唖然……後に激怒ｏｒｚ
まぁ危ないからね？
剣を持った相手には極力使わないよう厳命されてしまった……。
たぶん守れないけど極力使わないようにしよう。

そして一回実際に使ってみてわかったんだが「別に剣を挟む必要なくね？」と感じたため、鉄板入りの手袋をつけ、拳を使って剣の腹を殴るようにしてみた。
腕を切られる恐れが大きくなったが、やりやすい。
また父さんに怒られたが、若干呆れの方が大きくなった気がする。
この手袋をすると中高一本拳が使いにくいが、防御力は上がる。

いつか使い勝手のいいガントレットでも買おうかな？

そんな父さんからの眼が段々痛くなってきた俺ですが、なんとついに領内を見回ることに！！
やっと……やっと人との触れ合いができる！！
ヴァリエール家は別だよ？
カトレアさんやルイズ嬢とは少し仲良くなったけど、それ以上にあそこは死亡フラグの山なのだ！！
でもなぁ、せっかく仲良くなったしなぁ。
ルイズ嬢はかなりの危険を伴うから程々にしないといけないけれど、カトレアさんなら友達になっても大丈夫なんじゃないか？とか俺の判断基準はどんどん甘くなってきていた。

そんなことはさておき、今回領内を見る理由は川が土砂で遮られてしまったらしく、それをどけてこいと父さんから依頼されたため。
俺はこれを機に領民とコミュニケーションを取って、仲良くなろうと考えていた。
まぁ両親は基本平民差別とかしない人なので、領民から怖がられはしないだろうけど、俺としてはフレンドリーには話かけてきたりして欲しい。
故にこの依頼は渡りに船だった。

俺は意気揚々と問題の川のある村へと向かった。

村が見えてきた。
自然とテンションが上がる俺。
俺は村の手前でフライを解き、歩いて中へと入って行った。
服装で貴族と分かったのか、村人が少しビクビクしていたが、軽く会釈をすると驚いたように固まっていた。
何か面白かったから、目があったら基本会釈をすることにした。
まぁこの世界の貴族の多くは目が合う→いちゃもんをつける→平民人生終了っていうこともあるぐらいだから驚くのは無理もないのか？
そして俺は川を直しに来たことを村長に伝えるため、村長宅へと向かった。

「レッド様、ようこそラッセル村へ」

村長は人のよさそうなお爺さんだった。
俺が家の中に入るとその村の特産品である麦を使ったパンを御馳走してくれた。

少し硬かったが、麦の味とスープが良く合っていて美味しかった。

「ごちそうさまでした」
「いえいえ、こちらこそ貴族様にお出しするには貧相なもので申し訳ないです」
「お気になさらないでください。
それにとても美味しかったですし……
ところで川がせき止められてしまったと聞いたのですが？」

俺がそういうと先ほどまでの表情を、少し悲しそうな顔へと変えて川がせき止められてしまった理由を語ってくれた。
どうやら先日振った雨で大きな岩が崖から落ちてきてしまい、それが川の一部をせき止めてしまっているらしい。

「その岩の大きさはどのくらいなのでしょうか？」
「5メイル程になります」

5メートルか……デカイな。
とりあえず現物見てみないと、どうしようもないから行ってみよう。
俺は村長に川まで案内してもらうことにした。
そして川に到着したわけだが……。

「これは……デカイな」
「村の男衆で引っ張ったり、ハンマーで叩いたりもしてみたのですがビクともせず、領主様に嘆願書を出した次第でして。」

確かに周囲にはロープやハンマーがいくつか転がっている。
でもこの岩には少し小さすぎるし、少なすぎる。
とりあえず俺は村長に色々試してみることを伝えて、下がっていてもらうことにした。

この大きさの岩を壊せそうなのはポケモンか装備、魔法だろうけど……俺の魔法でやれるか？
とりあえず試してみるか。

「ロックスピア！」

岩を囲むように石の槍が突き刺さっていく。
だが水の中なのがいけないのか、如何せん勢いが弱い。
５０センチくらいしか刺さらなかった。

「これは5回じゃきついか？
ならどうする……。」

流石にポケモンは使えない。
ならできることは装備か？
誰を装備すればいい……俺が水と土のメイジということは知られているから水か土っぽいやつかな。
いや、待てよ？

ポケモンにちょうどいい技が無かったか？

「（そうだ！，いわくだき，があるじゃないか！）」

格闘なのが少しネックだが、村長には目を瞑っていてもらうことにしよう。
なら装備するモンスターは決まってくる。
ある程度余裕をもって壊せるようにしたいから、フドウ（ハリテヤマ）お前に決めた！！
俺は体の中にハリテヤマを召喚するイメージをして、岩の前へと立った。

「レッド様一体何を？」
「これから僕がこの岩を砕きますから、村長は目を瞑っていてください。
あまり人に見せたい技ではないもので……」
「！？……分かりました。」

村長はそう言って目を瞑ってくれた。
俺は村長が目を瞑っているのを確認し、改めて岩の前へと立った。
足はどっしりと地面を捉え、正拳突きを打つ構えをしてゆっくりと深呼吸した。
左の拳を岩に軽く当て、右の拳を腰だめに構える。

「（準備は出来た…後は打つだけだ！！

行くぞ！，いわくだき，）ハッ！！」
強く息を吐くのと同時に、右の正拳突きを岩へと放った。
その結果、岩は轟音と共に四散した。

「何が起こったのですか！？」

村長が目を開けて駆け寄ってきた。
そして目の前に転がる岩の破片を目にして、驚いていた。

「魔法では……ないのですか？」
「いえ魔法ですよ？」
「ですが呪文を唱えていらっしゃらなかった！」
「僕は村に入る前から、土の魔法で身体強化を行っていたため、呪文は無くても大丈夫だったのです」
「ならば何故最初からこの方法を取らなかったのですか？」
「いえ……怖いでしょう？
小さな子供が大きな岩を素手で壊す光景。
僕は村の人に怖がられたくない。
魔法も確かに怖いですが、この方が直接的だ」
「……」
「触られればさっきの岩のように殺されてしまうかもしれない。
そんな風に思ってしまう。
俺はそう思われたくない！」
「大丈夫ですよ」
「え？」

「レッド様は先ほど私の家で何事もなくご飯を食べていたじゃないですか。
木の食器を持ち、パンを食べていたじゃないですか。
ということは力を完全に抑えることができるということになります。
ならば何も怖くはありません」

村長はそういうと、俺の手を優しく握った。
何故か涙が出てきた。
土の魔法と言ったが実際は装備という異能。
装備のことを打ち明けたわけではないが、それが及ぼす結果を見て怖がらないでいてくれた。
この世界において異端審問にかけられる可能性があるこの力を、認めてくれた。
嬉しかった。
俺は涙を流したまま一言言った。

「ありがとう」

第１５話　ラッセル村（後書き）

内政なのかこれは？

まぁ終わり方が微妙だが、とりあえずＯＫということにしよう！！

第１６話　暖かい村人（前書き）

今日はあと一回更新できるかわからない……
たぶんできると思うけど

第１６話　暖かい村人

川をせき止めていた岩を壊した俺だが、服が水浸しになってしまったため村長宅にお邪魔している。
濡れた服を乾かしている間、服は息子さんの昔の服を一時的に借りることになった。
乾くまで時間がかかるためしばらく村を見て回ることに……。

服が変わったからか、俺を見ても貴族と気付かない。
そのままうろうろとしていると、

「坊主！どこから来たんだ？」

なんか変なおっちゃんが話しかけてきた。
迷子とでも思ったのだろうか？
とりあえず

「あっちの方かな？」

と曖昧に返すとおっちゃんは、豪快に笑った。
そして俺の方を見て

「親は一緒じゃないのか？」

「お使いだから」
「そっか！　偉いな！！」

なんか騙している様で罪悪感が沸く。
話を切り上げて村長の家に戻ろうとすると、おっちゃんが家に誘ってきた。

「（まさかショタコンなのか！？……そんなわけないか。）僕村長のところに戻らないといけないから……」

そういうと少し驚いたような顔をしていた。
まさか俺が貴族だと気付いたのか？

「そっかお前さん貴族だったのか……」

やっぱり気付いたのか。
はぁだからバレたくなかったのに……。

「なら尚更だ！　俺の店の飯食っていってくれ！！」
「は？」
「お前さんだろ？　あの川の大岩ぶっ壊してくれたの！
その礼がしたいんだ！」

まったく……他の貴族にこんな口のきき方したら大変だぞ？
俺はそんなことを思いながら、表情は苦笑していた。
その後俺はおっちゃんに連れられて、おっちゃんが経営している飲み屋へと入って行った。
おっちゃんの店はあまり大きくなかったが、定食も出しているらしく昼でも客がいた。
厨房には奥さんと思わしき女性が料理を作っていて、娘さんなのかウェイトレスが一人いた。

「ここが俺の店，青い鳥の宿り木，だ！」
「「いらっしゃいませ～！」」

アットホームな感じの店だな。
客層も荒っぽそうな人はいないし……昼だからかな？

「この子があの大岩ぶっ壊してくれたぞ！！」

おっちゃんはサラッと暴露してくれやがった。
その後店の中は一瞬シーンと沈黙した後、ざわざわし始めた。
「あんな子供が？」「っていうことは貴族か？」とか聞こえてきて、微妙に居た堪れなくなってきた。
俺は静かにその場を離れようとすると、おっちゃんに肩を掴まれ止められた。

「ザワザワすんじゃねえ！

まずはこの子にいうことがあるんじゃねぇのか！」

客たちは再び沈黙すると、今度は喋らなかった。
だがおっちゃんの奥さん？が厨房から出てきて、俺に近づいてきた。

「へぇこんな小さい子があの大岩をねぇ！
凄いんだね坊や。」
「いえ魔法を使うのに年齢はあまり関係ないですから」

俺がそういうとおっちゃんの奥さんは楽しそうに笑った。
それに触発されたのか客も口々に「ありがとうよ貴族様！」「今度うちの店にも来てくれ！」とか言い始めた。
一気に活気づいた店内の空気についていけない俺は戸惑いながらおっちゃんを見た。

「みんなあの岩に困ってたんだよ！
特に家は酒場兼飯屋だから余計に困ってたんだぜ？」

俺はそれを聞いてこの騒ぎっぷりに納得した。
でもこの貴族へのフレンドリーっぷりはなんだ？
普通貴族は平民に恨まれたり、怖がられたりするんじゃないのか？

「何で貴族にそんなに親しい風に接することができるんですか？」
「それはな、ドリュウズさんの息子だからだよ！」

「父さんと会ったことあるんですか！？」

また父さんか……今度は何やったんだ？

「いやドリュウズさんと何処かの貴族様がうちの店に飲みに来たことがあって、その時偶々ガラの悪い客が来てて乱闘になったんだよ。それを止めたのがドリュウズさんとその貴族様だったんだよ。まぁ力づくの喧嘩両成敗だったんだけどな！！それ以来ドリュウズさんは、偶にウチの店に酒を買いに来てくれるようになったんだ」

今回はまだまともか？
いや……でも待てよもう一人の貴族って誰だ？

「えってもう一人の貴族の名前って覚えています？」
「ん？結構前のことだからなぁ……確かグラタン伯爵だったか？」

いやそんなおいしそうな伯爵はいません。
それにしてもあなたでしたか……グラモン伯爵！！
でもヴァリエール公爵とかじゃなくてよかったぁ。
もしそうだったら俺はまた父さんに話を聞きに行かなければならなかったところだ。

その後もぶどうジュースや、料理をごちそうになり、他の客に絡ま

れたりしたわけだが、村長さんが俺の服が乾いたことを伝えに来てくれて、俺は帰ることにした。
おっちゃんは「また来いよ！」と言ってくれた。
客の人たちも「帰り道気をつけろよ！」とか「今度はもっとゆっくりして行きなさいよ。」とか暖かい言葉を掛けてくれた。

俺は村長宅に服を戻りに行く途中村長さんが申し訳なさそうに言った。

「あやつらには厳しく言っておきますので！」
「いえいえ、俺も楽しかったですし、父さんのお酒も預かりましたので気にしないでください」
「そうですか？そう言って戴けると気が楽です。
あやつらもあの大岩には困っていたので、嬉しかったのでしょう」

そんな会話をしつつ、服を受け取った俺は村長に別れの言葉を告げると、村を後にした。
夕焼けの中ゆっくりと飛ぶ俺は、酒場での喧騒を思い出しながら家へと向かった。

因みに家に帰って父さんに任務の結果を伝えて、おっちゃんから預

かった酒を渡すと少し驚いていた。

「お前あそこに行ったのか？」

「うん！父さんとグラモン伯爵の武勇伝も聞いたよ！」

「……そうか」

俺がそういうと父さんは恥しそうに窓から外を見ていた。

第１６話　暖かい村人（後書き）

ふぅ……次はどうしようか。
ルイズ嬢の誕生日話でも書こうかな？

第１７話　伝説の力と新たな出会い（前書き）

一般の３歳児について調べてみたら、めっちゃ言葉数少ないんですねｗ
主人公の異様さが際立っている気がするよ。
まぁそこは転生故に……それと主人公は結婚ししていた訳ではなかったので、子供の成長具合などをあまり知りません。
故に加減が分からなかったのが大きな理由です。

っと言うことでルイズの誕生日はもうちょっと先にします。
あとここで別の原作キャラが登場します。

第１７話　伝説の力と新たな出会い

ある日俺は管理者が言っていたことを思い出した。
装備する時に存在力の大きいポケモンは装備する時に俺の外見が少し変わってしまう可能性があるということを。
これに関して実験できるが、流石に森じゃないとできそうにないな。
早くドームの錬成を出来るようにならないとな！

今日もまた森に来たわけだが、１時間ほど空手の訓練のしてから今日の本命を試すことにした。
近くに湖があったはずだから、そこでやれば俺の見た目が変わったかどうかも確認しやすいだろう。
ところで存在力の大きいポケモンって伝説とかだよね。
その中でレベル的に高くないのは、ＢＷの３犬とマナフィ、３鳥、エスパー３匹、ギラティナだけど、ギラティナのは危ないかな？
今中で変化が小さそうなのは、マナフィとかかな？
よしマナフィで試してみるか！

「（頼むぞマナフィ）装備！」

今までの装備と違い、俺自身が召喚された様に光に包まれていく。
光が晴れたそこには髪が青く染まり、額に赤い宝石がついた俺がい

た。
変化はこれだけか……？
俺は少し拍子抜けしていた。
だが外見の変化はそれだけだったが、問題はそこじゃなかった。
俺は自分の変化を確認し終えた後立ちあがって湖から離れようとした。
そして一歩踏み出した瞬間俺を中心とするように湖に波紋が生まれた。

「えっと……どういうことだ？」

俺はその場で軽く足踏みをした。
それに合わせるように波紋が増えていく。
これは俺の動きに合わせて水が動いているのか？
なら他の動きならまた違う動きするのか？
俺は興味が沸いてきた。

「よっしゃ！色々試してみよう！！」

先ず先ほどは軽い足踏みしてみたが、強くならどうなるか？
俺はその場で震脚した。
そうすると先ほどとは比べるのが馬鹿馬鹿しくなる位に大きい波が起こった。
波で木が若干しなったりしたが、折れるほどの威力は無かったようだけど、魚が何匹か陸上に打ち上げられてしまった。
可哀想だったので一匹一匹手で戻したのだけど、湖の水が少し減っ

てしまった気がする。
あまり気にしないことにしてもう一つ試してみることにした。

足で波ができる。
なら手なら水はどう反応する？
俺は軽く手を振ってみた。
すると手の先から水が出てきた。

「え？湖じゃないのか？」

突然爪のあたりから水が出るようになった俺の体に疑問を覚えつつ、
思いっきり振り下ろしてみた。
ザパッ！という音がして、目の前に道ができた。

「（　。д。）　・・・　（つд⊂）ゴシゴシ　（；。д。）　・・・何これ怖い。」

手から水の月牙天衝がでてきたよ？
ここブリーチじゃないよ？
湖が一瞬真っ二つになり４０メートルくらい先にある木が縦に真っ二つになっている。

「俺……伝説甘く見てたよ。
マナフィでこれなのか？

カイオーガとかどうすんだよ！」

俺は一気に頭が痛くなった。
とりあえずマナフィを戻し、近くにある木にもたれかかった。
余裕があれば多重装備も試してみたかったけど、俺の心が持ちそうにない。
だって手を振り回せば水の刃が飛ぶんだよ？
味方いるとこじゃ先ず使えない。
俺に対軍戦闘しろってことか？
そんなのは主人公のサイト君だけでいいよ！
５万とかヤバいでしょ……自重しなければどうにかできるかもしれないけど、それやったら対軍どころか対国になりそうだ。
伝説はやっぱり使い道が少なそうだ。

俺は心を鎮めるために、空手の型を練習し続けた。
目指せ愚地独歩！！火炎放射をまわし受け出来るようになりたい。
俺はいつもの倍の時間頑張った……さっきのことを忘れるかのごとく。

俺は夕方になって、疲れた体を引きずって帰路につこうとしていた。

しかし想定外の出来事が起こった。
森の入口付近に半死半生の女性が裸で倒れていたのだ。
流石に放っておくことも出来ず、駆け寄ると女性は小さな声で何かを言っている。

「い……たい……のね」

良く見ると背中に大きな三本の爪痕があった。
他にも体の何箇所か火傷もあるようだ。
あれ？俺変態っぽくね？
慌てて眼をそらしながら、女性に声を掛けた。

「大丈夫ですか？」
「……」

どうやら女性は気絶してしまったようだ。
俺はこのままでは危ないと思い、自分の上着をその女性にかぶせて、女性特有のやわらかさを背中に感じつつ、湖の近くまで運んだ。
湖についた俺はとりあえず背中の傷口に水を掛けて洗い流した。
水を掛けた時に、女性は顔を顰めていたけどまだ起きそうになかった。
女性が起きていないなら、治療して逃げてしまえば大丈夫かなと思い、装備した。

「（頼むぞ，タブンネ，）いやしのはどう」

初めて使う技だけど、ＨＰ半分って言うぐらいだから大丈夫だろう。
発動させた瞬間は何も起こらなかったけど、ちょっとずつ肉が盛り上がっていく。
大分グロテスクだったが、３分くらいで背中は元どうりになった。
次に，チリーン，を装備して，いやしのすず，を発動した。

何個かあった火傷も治ってほぼ完全な状態になったであろう女性を確認した俺は、静かにその場から離れようとした。
しかしそれは女性の声によって防がれた。
後ろを向いている俺に女性は「まつのね！」と一言言った。
俺はそこで気絶が睡眠に含まれることが分かって、それも，いやしのすず，が直してしまったことに思い至った。

「（自業自得ってやつか）何でしょうか？」
「貴方が治したのね？」
「……はい。
そうですがお礼などは結構なので！
僕帰ります！！」

強引に帰ろうとしたが、病み上がりとは思えない動きで立ちあがって俺の肩をガシっと掴んだ。

「だからまつのね！！」
「いえ僕門限があるんで！！」

帰ろうとする俺、帰そうとしない女性。
そんなやり取りを何回か繰り返した俺たちは、片や病み上がり、片や疲労困憊でその場に座り込んだ。
段々冷静になってきた俺は何でこんなに逃げたがってたのか考え直してみた。
装備をバレたくないから逃げるというのが逃げる理由だった。
あれ？なら大丈夫なんじゃないか？
少し安心した俺は、女性と話をしてみることにした。

「なんであんな怪我をしていたんですか？」
「そうなのよ！きゅいきゅい！！
あいつったらちょっと縄張りの上を通っただけで私の背中を引っ掻いたのよ！」
「あいつって？」
「火竜よ！
まったくあいつのことを思い出すと今でも腹が立つのだわ！」

火竜に追われて、逃げ切れるって普通にすごいな……結構凄腕のメイジなのかな？

「それであなたは何で私を直してくれたの？きゅいきゅい」
「いや流石に目の前で死にかけの人が倒れてたら助けるよ？」
「貴方いい人なのね！」

彼女はそう言って抱きついてきた。
流石に大人の女性に包容されると、恥しいな。

「と、とりあえず離れてください」
「？わかったのね。」

なんとか離れてもらい、流石に時間が気になってきたので女性に一言言って帰ろうとすると、彼女が

「イルククゥ！」
「え？」
「私の名前なのね！イルククゥ！！」
「あ……うん」
「貴方の名前は？」
「あぁ僕の名前はレッド。
レッド・ド・ドリュウズ」
「れっど……レッドね！
覚えたのね！きゅいきゅい！！
今度会う時今回のお礼をするのね！」

彼女はそう言って飛んで行ってしまった。
箒とか使わないのか？
まぁいいか！
なんか嵐のような女の人だったな。

「あ！！上着返してもらってない！！！
はぁ母さんに怒られそうだな」

なんか帰る前からほんのり憂鬱だったが、見ず知らずの女性とはいえ命を救えたことはいいことだと思ったので少しいい気分でもあった。
それにしてもあの口調どこかで……。

～イルククゥ　ｓｉｄｅ～

「あ！上着返すの忘れたのね……でもこの服いい匂い。
それに精霊の気配がするのね。
あの子エルフじゃないのになんで？
次に会ったときに聞こっと！」

イルククゥの頭の中ではレッドという男の子の顔が思い浮かんでいた。
今度会ったときにお礼をすると約束した男の子のことを……。

「お礼は何がいいかな？」

イルククゥは笑顔を浮かべていることに気付かずに空を散歩していた。

彼との再会の日は遠い。

～side　end～

第17話　伝説の力と新たな出会い（後書き）

この子の口調書きにくい！！
って言うか何でヴァリエール家の次がこの子なんだ！？
まぁ好きなキャラではあるが……

第１８話　違う物語での再会（前書き）

さぁてここからどうしようかな？
因みに俺はポケモンの映画はミュウツーの逆襲とゾロアークしか見てません。
故に他のどんなポケモンが喋るかは知りません。
そこら辺ご了承ください。

第１８話　違う物語での再会

最近両親と使用人の人たち以外と会話をしていない気がする。
親友とまでは言わない……話し相手がほしい。
それもあまり気を使う必要のない相手が！！
両親は確かにいい話相手になってくれるが、それでも装備や召喚のことは話せない。
かと言ってカトレアさんは家が遠い。
ならば話せるポケモンを呼ぶか？
……あれ？これいい手じゃないか？
俺が知っている話せるポケモンはミュウツーとゾロア位か？
まぁ例外としてロケット団のに話せるニャースがいるが、あれは本当に例外だ。

ならばミュウツーとゾロアの二択になる。
しかしミュウツーは駄目だ！
レベルもステータスも、存在力的にもアウトだろう。
ならゾロアしかいない。
ゾロアなら卵作って６匹位余っていたから大丈夫だ！
レベル１とかもう唯の子犬ですよ？
悪戯っ子なのが偶に傷だけど……親も呼ぶか？
いやでも親のレベルが高い。
迷うな……イリュージョンもあるからごまかしも効くんだけどなぁ。

イルククゥさんとか来ないかな？
なんか話してて面白い人だったんだけど、どっかで聞いたことある声な気がするんだよ。

まさか原作キャラか？
流石にモブまで覚えていないぞ？
まぁ特大死亡フラグ製造機は覚えているから、その人たちに最低限友好関係を深めなければ大丈夫だと思いたい。

なんにせよ一回森でゾロアを呼んでみよう。
セレビィとセットで呼んであげたいけど、あの子調子に乗ってＬｖ１００まで上げちゃったからなぁ。
森の中ならいけるか？
限定された範囲内なら大丈夫かな？

そんなこんなでとりあえず

「先ずはセレビィ召喚！」

光から現れたのは緑の妖精。
なんか辺りを見回しながら曲芸飛行している。
しかも昔実験で切った木の切り株から木を生やしたりして回っている。

俺が装備した時のマナフィみたいな現象は起こらないんだな……あれは俺の制御力不足ってことか？
それならまたやることが増えるな

「（それにしても無邪気だな。いや別にいいんだけどね？ラオウほどの威圧感は無いから……それでも特攻３００超えてるからサイコキネシスやリーフストーム使ったら大変なことになるんだけど。）
それでも今回はそういう意図で呼びだしたわけじゃないからぁ！」
「ピィ？」

首を傾げながら俺の方を向いているセレビィ。
このままでも見てて和むんだけど、今回はゾロアとの会話が目的なわけだ。
会話できるかわかんないけど……。
とりあえず呼んでみるか。

「来いゾロア！！」

ゾロアと聞いてセレビィは俺の横まで素っ飛んできた。
わくわくとした表情で光の中から出てくるゾロアを待った。
光が収まった場所に居たのは、ネコのように顔を擦るゾロアの姿だった。
その仕草を見て俺は不安になったが、セレビィはゾロアに駆け寄っていった。
ゾロアの周囲を飛び回る姿は、久しぶりに会う親友に喜ぶかのようだった。

「（映画館でもらったポケモンだから映画内の記憶持ちなのか。）
だとすればこのゾロアは……」

嬉しそうに飛び回るセレビィと、唯我独尊しているゾロア。
そりゃ当り前だよな……こいつ卵から生まれたばっかなのだから。

「セレビィ！」
「ビィ？」
「少し話を聞いてくれ」

俺はさっき思い至った結果をセレビィに説明していった。
徐々に笑顔が薄れていき、寂しさが出てきたセレビィ。
俺の説明が終わる頃には笑顔は形を潜めてしまった。

「ごめん……本当にごめんな」
「……」

ヤバいな、罪悪感があふれ出る。
可能性は低いが、セレビィを見せることで手に入るゾロアだったゾロアークを召喚してみるか？

「セレビィ、もしかしたら君の親友を呼び出せるかもしれないが、

既に進化して姿が変わってしまっている。
それでも会いたいかい？」

セレビィは俺の言葉を聞き、勢い良く俺の顔を見て深く頷いた。

「ならば呼んでみよう……（正直当初と予定が変わってるけど、俺としても会話よりセレビィに会わせてやりたい。）
来いホロ（ゾロアーク）！」

俺は光が出てくると同時に先ほど召喚したゾロアを還す。
もしホロが話せなかったら、セレビィがゾロアを視界に入れた時また悲しむかもしれないからね。
俺はピカチュウとかよりセレビィ好きだから！！！
映画館でもらった日にレベル３０以上上げた位溺愛してたから！！
光から出てきたホロは目を瞑っていた。
そしてゆっくりと目を開けると、視界にセレビィを見つけたらしく驚いていた。
セレビィは先ほどのこともあるから、少しづつホロへと近づいていく。
ホロも少しづつセレビィへと近づいていく。
そして二人の距離が５０センチもない所で二人は止まった。

「ビ……ビィ？」
「＜セレビィなのか？＞」
「（うおっ？！これがテレパシーか……頭に響いてくる感じで慣れないな）」

「ビィ！！」

テレパシーを受け取った瞬間セレビィはゾロアークの胸へと飛び込んで、とても幸せそうに涙に濡れた顔を擦りつけていた。
俺は流石にこの間には入れないと感じ静観していたが、１０分経っても２０分経っても終わらない。
流石に焦れてきたので横やりを入れることにした。

「あ～すまないが感動の再会のところ悪いんだが現状を説明させてもらってもかまわないかな？」
「ビィ？！」
「＜ウワッ！＞」

まるで俺に今気づいたような二人（二匹）に少しイラっとしながら現状を説明する。
ゾロアークを呼び出した理由、セレビィを呼び出した理由、俺の現状などを簡単に。
転生とかの説明は別にいらないかなと思って省いた。

「と理解してもらえたか？」
「＜とりあえずね。でも２８歳にもなって寂しくなるだなんて子供みたいだな！ニシシシッ＞」
「ビィビィ」
「何か普通に馬鹿にされた……そしてセレビィよ、お前さっきのこと根に持ってるだろ？
しょうがないだろ喋る印象がゾロアだったんだから！！」

「＜さっきってなんだ？＞」
「ビィ！？」
「それはなさっき別のゾロアに話しかけたら知らんぷりされて、ベソ掻きそうにな「ビィ！」うぉ！？
お前サイコキネシス使って物投げてくんな！こぶし大の石とか普通に死ぬぞ？！」
「ビィビィビィ！！！！」
「いや何言ってっかわかんねぇし……。」
「＜要するにバラすなってことらしいぞ？りゅう＞」
「おぉ懐かしい名前で呼んでくれるねぇ。
まぁ今はレッド・ド・ドリュウズだからそっちで呼んでくれ。
レッドでいいぞ？」
「＜ＯＫ＞」

ふくれっ面のセレビィを放置して、この世界での自己紹介を終えた俺は、今後呼びだす可能性があることと、その際は戦闘の場合が高いことを二人に伝えた。

「まぁ二人はレベルが高いから滅多に呼ばないけど、ホロは特性が凄いから呼びだすかもしれない。
そういえば人間への変化は上手くなったのか？」
「＜当たり前だ！　あの後ママにみっちり扱かれたからな……＞」
「なんか……ごめん」

なんか凹んだホロをセレビィが慰めていた。
見た目子供に慰められる母おやっと！？

「だからあぶねぇって言ってんだろうが！！って言うか今のホロだろ！！
お前、それお前の母さん使った時石畳吹っ飛ぶ威力だった奴だろ！！」

まったく木の後ろに隠れなければ危なかった……木も倒れ掛かってるんだけどな！
このままでは俺の命と精神状態が危うい。
とりあえず伝えることは伝えたから、別れの言葉を告げて二人を還した。
還る直前ホロにはあっかんべーをされたが、セレビィは普通に手を振ってくれた。
俺も振り返したが結構癒された。
これでしばらく戦える！！

それに久しぶりに素の自分を出せた気がする。
この世界に来てから、大前提としてドリュウズ家の息子というのがあったからな……。
偽りと言う程ではないが、気は使っていた。
自分の素を見せる相手が出来たことは、俺の胸につかえていたものを少しだけ取り去ってくれた。

「ありがとうなセレビィ、ホロ。
俺は……頑張ってユッタリライフを目指す！！」

なんか何処かで俺に対する突っ込みをされた気がするが気のせいだと思って、スルーすることにした。

……何と言われてもスルーすることにした！！

第１８話　違う物語での再会（後書き）

次はまた少し時間を進めよう。

第１９話　修行の成果（前書き）

時間経過による主人公の修行成果

第１９話　修行の成果

「セイッ！」
「甘い！もっと的確に急所を狙え！！」
「くそっ！」
「感情に振り回されるな！！」

絶賛父さんとの訓練中なわけですが、かれこれ父さんとの訓練も３年目に突入していた。
最初は恐怖や殺気に耐えること、次は気配を探る訓練、そして今は１対１の戦闘訓練になりました。
父さんは一体のゴーレムを出して、そのゴーレムの操作に全力を注いでいる。
この訓練の目的は、急所や鎧の隙間を狙うという正確な剣さばきを身につけるということ。
この世界において外科医療が発展していないため、人体の急所に関してはあまり普及してない。
偵察や密偵が主な仕事だった父さんはそういった知識に詳しく、いろいろ知っていた。
……微妙にグロイ話を聞く羽目になったけどｏｒｚ

「他のことを考える暇があったら攻めろ！
相手を観察しろ！　弱点を探れ！」
「ハイ！」

思い出す余裕がなくなってきたので今は、訓練に集中しよう。

ゴーレムは約１メートル８０センチ。
鎧は着ているけれど、フルプレートではない。
故に狙うなら横わき腹、関節各部、そして首から上。
俺の剣は細身故に刺突向きだ。
まぁマインゴーシュ用の剣も持っているが……ゴーレムの攻撃をそらすのは結構キツイ。
ということは最低限な動きで剣を避け、避けきれない部分だけを剃らす。
そして攻撃後の隙を剣で突くことができれば訓練終了となる。
今までの戦績は３０戦５勝とあまり良くないが、出来ないわけではない。

「（振りかぶったということは大上段か！　ならここが勝負どころだ！）しゃ！」

俺は上から振り下ろされる剣をマインゴーシュで逸らして、俺の中で最速の突きで喉を突いた。
剣先が当たった瞬間ゴーレムは崩れ、それは訓練の終了を告げていた。

「それでいい。受け止めずに逸らし、その隙に攻撃するのが今のお前に向いている戦法だ。
まだ子供のお前には力だ押し切る剣は向かない。
狙いすませろ！　相手の急所を狙え！
今回の訓練はこれで終わる。
復習しておきなさい」
「はい！ありがとうございました！」

装備すれば力ずくも出来るんだけど、手加減ができなくなるから対人戦にはあまり使いたくない。
なら俺自身の力を磨くしかない。
いつか牙突使えるようになりたいなぁ……あれは突きの奥義だと思う。
斎藤さんマジリスペクトです！

魔法訓練についてはあまり進展していない、だけど母さんに教わることは少なくなってきて、自主訓練が増えた。
前から欲しかった指輪型魔法発動体も去年の誕生日に母さんから貰った。
父さんからはマインゴーシュを杖に改造してもらった。
杖が杖っぽくないのは貴族的に変わり者らしいのだが、実用性を考えていないのだろうか？
マインゴーシュが杖になるなら剣で切りかかられた時に、逸らしてそのままゼロ距離で魔法を撃てる。
こんな効率的なことはないのに……指輪だってそうだ。
俺の場合剣が使えないなら、拳を使う気満々だからインパクト時に魔法を使うことで威力が跳ね上がる。
まぁネギまで主人公が使ってたものほど使い勝手は良くないけどね？
タイミングがシビアだし……。

後水もラインになりました！
土は変わってませんが……トライアングルの壁は厚い。
しかしこの二つの属性は大分応用が効く。
水は攻撃力に欠けるとか言われてるみたいだが、普通にヤバい。
実際かなりえげつないことができる。
土は錬金も使い勝手がいいし、密度の高い鉱石を使った攻撃なら鎧なんて紙みたいなものだ。
因みに最近水水土土のスクエアスペルが使えないならコンボすればいいということで、色々実験中。
魔法に関して俺は自重しない！

森での鍛錬も徐々にレベルアップ。
空手は拳速が上がってきて、拳も硬くなってきた。
抜き手は難航しているが、突き指する確率はかなり減ってきている。

大きな変化があったのは装備に関してだ。
Ｌｖ７０以下なら制御できるようになってきたことはかなり大きい。
前に湖真っ二つにしたマナフィ装備も、今となっては自分の意思で制御できる。
ただしＬｖ１００は無理！

幻系のポケモンなら出来なくもないけど、伝説系は無理！

一回試しに、見た目が好きだったギラティナを装備したことがあった。
装備した瞬間俺の体に黄色の鎧みたいなものが出来て、黒い羽根が生えた。
がっつり厨二病だとか思っていたら、俺の影が徐々に広がっていくことに気がついた。
いやね、最初は影伝いに転移でもできるようになったのかなと思ったんだけど、その影が周囲の木に触れた瞬間、木が影に引きずり込まれた。
唖然としたが、俺は未だ広がる影に顔を青くして、急ぎ装備を解除した。
後に残ったのは不自然に周囲に何もない空間。
消滅なのか、吸収なのか、それともゲームのように別の次元に連れて行かれるのか分からないけれど、もうギラティナは俺がゲットしてしまっているため、あそこから抜け出す方法はない。
まぁ俺が召喚すれば行けなくもないんだろうけど、なんにせよ空間制御出来る子は出来るだけ呼びださないことを心に誓った俺だった。

徐々に俺自身が強くなっていることは実感できるが、それでもワル

ドに勝てるかと言われたらＮＯ。
偏在がチートすぎる。
虚無の使い魔達もキツイ。
ジョセフの加速とかヤバいし、爆発もかなり半端ない。
俺としてはこんなヤバいやつらとの戦闘予定など立てたくないけど、
常に最悪は想定しておくに限る。
確かにポケモン自体は強い、でも俺は常に装備しているわけじゃない
いし、召喚にはワンテンポの遅れがある。
ならば用心に用心を重ねて自身の強化をしておくべきだろう。
最低でもしてから逃げることくらいは出来るように……。
逃げることが出来れば、装備も召喚も出来る！
故に俺は土魔法でのトラップ作成も練習中だ。
はぁ……先行き不安だなぁ。

～イルククゥ　ｓｉｄｅ～

「レッドいないかなぁ～？」

最近彼女は偶にレッドと出会った森の辺りを、風竜の姿で飛び回っていた。
その姿を見た村人が、そのことをドリュウズ家当主に報告し、レッドはしばらく森に行くことを禁じられているわけだが……そんなこと知る由もない。

「せっかくお肉持ってきたのに～。
……じゅるり」

まぁ周辺に被害はないし、竜を相手にするのは大変なため討伐命令は出ていないのが幸いだ。

「レッドいないし、私が食べちゃお、きゅいきゅい！」

そうして彼女は少しずつ森に居ついていった。
このことが主人公にどのような影響を与えるかは、まだ誰も知らない。、

第19話　修行の成果（後書き）

ヤバい……イルククゥが書いてて楽しい。
でも書きにくい。
ジレンマだな！

第２０話　山賊来襲（前書き）

ヤバい……３話更新が昼寝したら途絶えたｏｒｚ

祝２０話！

第２０話　山賊来襲

森へ向かうことを禁止された俺は、家の中で出来る空手の練習をしていた。
でもやっぱり森に行きたい。
ポケモンに癒されたい。
やっぱりポケモン可愛いんだよ！
前世で結構人と話すのが好きだった俺としては、この環境は若干寂しいものがある。
ポケモンは確かに喋れる子はかなり限られるけど、でもこっちの言葉は理解してくれる。
反応があるから話してて楽しいんだよ。

……父さんと母さんにバラそうかな？
いやいや、それは駄目だろ？！
信用していないわけじゃないけど、どこでどうバレるかなんて分からない。
なら知ってる人は少ない方がいい。
カトレアさんは予想外だったけど、ポケモンの戦闘能力までは見せてないし、きっと大丈夫！
一応黙っておいてくれるように会うたびに、頼んでるから大丈夫！

でもルイズ嬢に見つかったら俺は終わる。
ルイズ嬢にバレる→アンリエッタ姫に話す→俺呼ばれる→俺オワタ
これ確定！
故に本当にルイズ嬢は危険なんだよ。

そんなことを考えながら鍛錬をしていると、父さんが俺の部屋に入ってきた。

「レッド出かけるぞ！」
「え？どこに？」
「お前の良く行く森にだ！！」
「でも父さんが行っちゃだめって言わなかった？」
「それどころじゃない……どこの馬鹿か知らないけれど、風竜を捕まえてひと儲けとか考えた山賊もどきが、うちの領土に入ってきたらしい。
近隣の村で風竜の目撃者を脅していたところを報告されている」
「山賊？（そんなＲＰＧみたいなやつら本当にいるんだ・・・・・・）」
「場合によっては人を殺すことになるかもしれない。
だが人手が足りないんだ。
お前に手伝ってほしい」

いきなり来た初の対人戦闘の機会。
怖くないと言えば嘘になるし、人殺しなんかしないに越したことは無い。
でもあの森が荒らされるのは嫌だ！
あの森は俺の癒しポイントなのだから！！！

俺は父さんに行くことを告げて、用意を始めた。
まぁ用意って言っても、指輪と剣２本、革製の小手に鉄板入りのオープンフィンガーグローブ。

あと念には念を入れて特性頑丈持ちのツボツボを装備しておく。
これで万が一致命傷を負いそうになっても、死にはしない！
用意が出来た俺は父さんと共に森へと急いだ。

森に近づくに連れて、遠目に何人かの人が森の中に入っていくのが見えた。
俺と父さんは、さらにスピードを上げ森の入口に急いだ。

入口に降り立った父さんと俺は慎重に森の中へと入って行った。
父さん曰く、後ろからの援軍等が来たら不利になるかもしれないから全員がそろったところを叩くらしい。
俺と父さんは地べたに座りながら馬鹿騒ぎををする男たちを隠れ見ながら、いつでも魔法が発動できるようにした。
現在の人数は5人。
後から何人来るか知らないが、少なくは無い数だ。
幾ら父さんと一緒とはいえ、人との命の取り合いは初なので緊張しないわけがない。
ガチガチに固まった俺に父さんは、軽く肩を叩き微笑んだ。
少し緊張が解けた気がした。

しばらくして何人かの人の気配。
男たちが立ち上がったところから、仲間のようだ。
それにしても合計8人か……キツイな。
父さんに俺は目でどうするのか尋ねると、父さんは先ず自分を指さし6、次に俺を指さし2とジェスチャーした。
要するに俺は二人倒せばいいということか。
父さんの実力に関しては未知な部分が多量に含まれるが、山賊程度は瞬殺なのだろう。
まるで気負いがない。
それにも関らず俺に二人任せるということは、信頼されているということなのだろうか？
なら日頃の修行してもらっているに両親に掛けて、2人倒して見せる！

スリーカウントで奇襲を掛けるらしい。
父さんが今ゆっくりと3本の指を上げた。
指が一本折り畳まれる……俺は足に力を入れ、すぐに動けるようにする。
二本目……小さな声で魔法を唱える。
そして三本目が畳まれた瞬間、俺と父さんは隠れていた木から飛び出した。

父さんは先ず大きな岩の壁を出し盗賊たちを、6：2になるように分断した。
俺に対する横やりを入れさせないためか、それとも自分の戦闘スタイルを俺に見せないためか分からないが、俺にとってもありがたかった。

これでいざという時見られる心配はない！

「誰だお前！！」
「子供が何の冗談だ？」

山賊二人はいきなり仲間と分断されたために、興奮している様だ。
とりあえず俺の目的を告げる。

「僕はここの領主の息子です。
あなた方が領民に危害を与えたと聞いてやってきました。
ですがもしここで風竜を諦め、この領地から出て行ってくれるのなら何もしません」

山賊はぽかんとした表情で俺を見て、次の瞬間笑い始めた。

「ぎゃはははは！　何言ってんだこの餓鬼？」
「諦めるも何も、お前さんを人質にとれば身代金も取れて一石二鳥じゃねぇか！」

いやまぁ……予想はしてたんだけどね。
俺今杖持ってないからメイジに見えないだろうし。
なら実力行使と行きますか。

「そうですか……なら死んでください。
ロックスピア！！」

石の槍が６本出てきて、一人を串刺しにした。
６本の石の槍に突かれた男は、立ったまま事切れた。
１年前まで４本だった槍が６本になったのは、一本の太さを変えることで本数を増やすことが出来た。
今は本物の槍くらいの細さだが、頑張れば鉛筆くらいの細さまでイケる。
その場合は本数は６の二乗＝３６本まで出せることになる。
これは精神力をかなり食うので、あまり使えないけど……。

「なんだと！？」

もう一人の男はなんとか避けたらしい。
それでも二の腕の辺りが少し抉れているが……。

「いえね？ですから貴方達は風竜を諦めないのでしょう？
ならば領民に危害を加えるあなたたちを放っておくことはできません。
……それにこの森は僕のお気に入りなので貴方方に居座られると困るので」
「ならすぐ出ていく！！
風竜なんて知ったことか！
だから命だけは助けてくれ！！」

土下座をしながら嘆願してくる姿を見ると、流石に追撃をしたくはない。
……まぁ手元で何かごそごそやっているのが見えなければの話ですが。

「……アクアボール」

俺は山賊の頭部に水の塊でボールを作った。
頭部の周囲２０センチに座標固定しているので、どんなに動いても水の玉を外せない。
まぁ水のメイジならはずせるが……。
突如頭が水に包まれた山賊は、驚いて頭を上げ俺を見た。
そしてそれと同時に手でいじっていたものが何かも判明した。
杖だった。

「貴方メイジだったんですか……危なかったなぁ」
「ガボッガボボボボ！」
「なんて言っているかわかりませんが、とりあえず貴方の手が不自然に動いてましたのでこうして攻撃させてもらいました」

流石に窒息死は見てる方も辛いので、もう一度ロックスピアを唱えて串刺しにした。
さっきの山賊と同じ格好になってしまったが、違うのは口から出る血で赤く染まった水の玉だけだった。
アクアボールを解除した俺は、父さんがいるであろう壁を見ながら

ため息をついた。

「初めて人を殺したな……何の感慨もないけど、ちょっと悲しいかな？
俺も変わってきてるのか」

前世では人殺しなんていうと犯罪、幾ら相手が襲いかかってきたとしても過剰防衛になる可能性が高い。
この世界ではこんなに身近に死がある。
前の世界では考えられなかったことだ。
まぁ日本以外はどうだったかわからないけど……。
流石に中東の紛争地帯とかはこんな感じで、命が軽かったのかな？

そんなことに思いを巡らせていると、父さんが壁を解除した。
どうやら父さんの方も終わったらしい。
気になるのは父さんの方に居たはずの６人が跡形もないことなんだけど……

「父さん？　そっちの山賊は？」
「ん？　埋めた」
「・・・・・・・」

いや分かってたよ？父さんが若干規格外ってこと。
でもね？六人同時に落ちるほどの穴を作って上から、埋まるレベルの土を被せたってことでしょ？

それ絶対圧死してるよ？
中大変なことになってるよ？
っていうか錬金の応用が鋼の錬金術師に似た何かを感じるよ？

「どうしたレッド？」
「……いや、なんでもないよ父さん。」

父さんは俺と話しながら、俺の倒した山賊を土に埋めた。
マジで何者だこの人？
こんな感じで俺の初の対人戦は幕を閉じた。

因みにこの後父さんは、母さんにこの件を知らせないで、俺を戦闘に連れてったことで母さんはＫＡＳＡＮになった。
父さんのご冥福をお祈りしながら、俺は疲れた体でベットに横たわった。

～イルククゥ　ｓｉｄｅ～

「きゅい？なんか血の匂いがするのね。」

彼女はそういって戦闘があった場所に降り立った。
血の匂いがするけど、死体は無い。
注意深く調べてみると土の一部が新しくなっていることに気がついた彼女は、好奇心で掘り返してみることにした。
しばらく掘ってやっと爪が何かに当たったのを感じ、引っ張り出してみると、断末魔の表情を浮かべた一人の男の上半身が引っ張り出された（因みにこれはレッド君が後半にやっつけた方です。）
強く引っ張られたため腹から千切れ、内臓が出てきた。

「きゅい！？」

驚いた彼女はそれを投げ捨て、その場から急ぎ立ち去った。

「怖かったのね！
もうあそこ行きたくないのね！！
でもレッドにお礼……次に会った時って言ったから大丈夫！
いつかお礼するからねレッド、きゅいきゅい！」

それ以来の近くで風竜を見かけることは無かった。

第２０話　山賊来襲（後書き）

ふぅ……これで主人公の成長はいったん落ち着いたかな。
じゃあ次こそルイズ嬢の誕生日を書こうかな？

そしてこれからたぶん原作開始までイルククゥは出ません。
まぁたぶんですが……俺の場合寝起きで書くときも少なくないのでw

因みに主人公は自分の計画や予定を崩されることを基本嫌います。
まぁ自分や親しい人がきっかけの場合は話が別ですが。
故に今回自分の癒しポイントであるあの場所に行けなくなっていてストレスが溜まっていたときに、山賊が登場。
主人公のストレスの向いた先が彼らというわけで、捕獲という選択肢を吹っ飛ばして攻撃に至りました。
多少ですがグロテスクな表現が入り、申し訳ありません。
土魔法を使う故の弊害としておいてください。

第２１話　修羅場の兆し（前書き）

書きかけの小説が消えた……良く聞く話だったが、これはキツイな。
めっちゃストレスが溜まった。

第２１話　修羅場の兆し

俺も１０歳になって、小学校で言えば４年生だ。
修行は順調、ポケモンは可愛い。
全てはいつも通りだ。

「今年はどんなお友達を見せてくれるのかしら？」

あぁ……本当にいつも通りだ。

～回想～

「さぁ起きなさいレッド！」

ある日俺は、そんな母さんの声で起こされた。
俺は眠い目を擦りながらベットから出て準備を始めた。
何の準備かって？
ルイズ嬢の６歳の誕生日だよ。

……正直あんまり行きたくない。
いやルイズ嬢は良いんだよ？まぁ積極的に仲良くなりたいとは思わないけど、小さいころから「レッドにぃ！レッドにぃ！」と言って慕ってくれてたからね。

問題はヴァリエール夫妻だ。
ここ3年位ヴァリエール夫妻からの眼が怖い。
まぁ自分の娘と親しい男だから警戒してるのもあるかもしれないが、何やら二人っきりで部屋にこもって何やっているのかということが気になるらしい。
毎年聞かれるけど、その度動物と遊んでいると言っている。
ポケモンのことをバラすわけにもいかないわけだし、動物っちゃあ動物だから嘘はついていない。
カトレアさんにも聞いているらしいが、約束は守ってくれているようで、ポケモンのことは話さないでいてくれている。
その代わり動物と遊んでいるとも言わないが……。
娘から言質が取れない→怪しい→俺に聞くというループが年々続いているわけだ。
しかも徐々に視線が怖くなっていくオマケつきで！
そりゃ行きたくなくなるさ！！

でも行かないわけにもいかない。
せっかくプレゼントも用意したわけなのだし……。
因みにルイズ嬢へのプレゼントは毎年水晶で作った花を渡している。
カトレアさんには毎年ポケモンの水晶像をあげている。
何故花かと言うと、前世で彼女いない歴＝年齢の俺にとって、花は女性全員が好きなものという固定概念があったために、花を選んだわけだ。

今年の花は、紫水晶を主に用いたアイリスだ！
俺は余り花に詳しくないので、ゲームに出てきた花や有名な花くらいしか知らない。
因みに、アイリスを知っている理由は、友人にサクラ大戦を好きなやつがいて、そいつがキャラの写真と花の写真をセットで俺に見せ、その関係性を語っていたからだ。
まぁ基本聞き流してたわけだが、花の写真は綺麗だったから覚えていた。

毎年ルイズ嬢に水晶花を渡しているが、顔を赤らめて喜んでくれるので、俺の選択は間違えていないはずだ。
俺も自分が綺麗だと思う花を渡してるから、共感を得ているようで少し嬉しい。
今まで渡した水晶花は、王道で赤いバラ、母の日に贈るくらいだから縁起がいいはずだと思って白いカーネーション、少女マンガで思い出した白いマーガレットの三本だ。

でも初めて水晶花を渡した時にカトレアさんが、怖い笑顔をしながら俺を部屋に引きずり込んで
「どういうことなの？」
と聞いてきたので、何か不手際があったのかと思って
「女性なら花が好きかと思って……。」
と返したら呆れたようにため息をついて、いつもの笑顔に戻ったということがあった。
女性にも花が嫌いな人がいるっていうことなのかなと、自分なりに結論付けた当時7歳の俺だった。

そんな昔の誕生会に思いを馳せながら用意を済ませると、ドアの前で待っていてくれた母さんと共に馬車へと向かって行った。

馬車に揺られてしばらくして、目的のヴァリエール邸に到着。
俺と両親は客間に案内されて、夫妻を待っていた。
そして数分後、ドアの前に人の気配がしたと思ったら、ドアが静かに開いた。

「久しぶりだなドリュウズ！」
「こちらこそ久しぶりになります、ヴァリエール殿」

父はここ最近忙しく二年ほど、ヴァリエール邸には来ていなかった。
それにしても相変わらず公爵夫人は威圧感が半端じゃない……ヤバ！目があった。

「レッド君、今日もカトレアの部屋で，動物，と遊ぶのですか？」
「は……はい」

「そうですか、一度私も行ってみようかしら」
「いえ！　唯動物たちと触れ合っているだけなので、見ても楽しくなんてありませんよ？」
「そうかしら……」

ヤバい！半端じゃなくヤバい！冷や汗が……。
俺疾しいことなんかしてないはずなんだけどなぁ。
そんな針のむしろに座っている様な気分の俺に、幸運が訪れた。

「レッド君が来たって本当！？」
「兄様！？」

カトレアさんとルイズ嬢が入室したことで、夫人の追及が止んだのは本当に嬉しかった。
とりあえず二人に挨拶すべく、ドアの方へと歩いて行った。
決して夫人から逃げているわけじゃないよ？ホントだよ？

「久しぶりカトレアさん、ルイズ嬢」
「「お久しぶり！」」
「ルイズ嬢もまた大きくなりましたね。
はい、今年のプレゼントです」
「ありがとうレッド兄様！」
「ルイズ？ここで開けないのかしら？」
「いえ……部屋で開けさせてもらいます」
「喜んでもらえると嬉しいな」
「はい！」

いやぁ喜んでもらえると嬉しいもんだ。
ましてや手作りのものだから尚更嬉しい。
それにしてもさっきからカトレアさんの頬が少し膨れている気がするんだけど、気のせいか？

「じゃあカトレアさん、今日も動物と戯れるとしますか！
それではルイズ嬢、またパーティで会いましょう。」

俺がそういうとカトレアさんは花が咲いたような笑顔で、大きく頷いた。
何故か今度はルイズ嬢が膨れていた気がするが、気のせいだろう。
あと夫人お願いですから杖を仕舞ってください！
母さんも笑ってないで、夫人を止めてくださいよ！

～回想終了～

「今回は誰がいいでしょうか……前回はゾロアでしたよね？」
「えぇあの可愛らしい子犬のような子でしたわ」
「それじゃあ今回はカッコいい系で行きます。

来いアブソル！！」

俺がそういうと光の中から白い獣が出てきた。
1．2メートルというなかなかの大きさなため、結構威圧感があるけどまるで忠犬のように俺の指示を待っている姿は、宛らバトラーの様だ。
俺は召喚の見届け、安心からか欠伸が出てしまった。

「レッド君眠いの？」
「実はルイズ嬢のプレゼントに予想以上に手間がかかって、あまり寝てないんだ」
「そうなんだ……それじゃあ少し眠ってもいいのよ？」
「正直嬉しいですが、暇じゃないですか？」
「いいの、それにアブソル君もいるし！」
「それじゃあお言葉に甘えて。
アブソル、少しカトレアさんを頼んだよ」

アブソルは俺に小さく頭を下げ、了承の意を示した。
俺はカトレアさんが貸してくれた枕に頭を乗せ、目を閉じた。

～カトレア　ｓｉｄｅ～

「もう眠ってしまった？」

私は小さな声でレッド君に話しかけてみた。
返事は返ってこない。
ぐっすりと眠っているようだ。
私は立ちあがって、ゆっくりとレッド君に近づいていく。
しかし私のまえにアブソル君が立ちふさがった。
まるで彼を私から守るように……。
私はアブソル君のまえにしゃがみ、言った。

「大丈夫よ。
酷いことなんかしないわ。
少し枕を変えるだけ」

アブソル君は私の眼をジッと見つめて、そこから退いてくれた。
私は彼の頭の辺りに座って、彼の頭を少しだけ持ち上げた。
そして枕をずらし、彼の頭を私の膝へと乗せ換えた。

わずかな重みと暖かさが、とても落ち着く。

「起きた時、貴方はどんな顔をするかしらね？」

私はそう呟きながら彼の髪を梳いていく。
赤くなっているであろう私の顔をアブソル君は、ジッと見ている。
本当に今日のお友達は心配性の様だ。
私は小さく笑いながら、彼が起きるまで髪を梳いていた。

第２１話　修羅場の兆し（後書き）

ここで少し質問なのですが、ルイズとワルドが出会ったのっていつでしたっけ？
もうこの年でルイズって魔法使えないことで悩んでましたっけ？
そこら辺知っている方ぜひ教えてくださると助かります。

今回出てきた花の花言葉は、
赤いバラ：愛情、情熱
白いカーネーション：私の愛
白いマーガレット：真実の愛
アイリス：貴方を大切にします
主人公は花言葉なんてまったく知りません。
因みに俺も知りませんでした。
ありがとうｇｏｏｇｌｅ先生！！

第２２話　思いの自覚

十分な睡眠がとれたのか、俺は目覚め始めていた。
意識がゆっくりと覚醒して行く。
周辺状況確認。
場所：カトレアさんの部屋
出したポケモン：アブソル
俺の今の体制：横たわっている
目の前にあるもの：カトレアさんの笑顔

何だ何も問題ないな……ん？いやなんかおかしい。
カトレアさんの顔が近い。
この状態になるには、俺の顔をのぞきこまない限りあり得ない。
しかし俺に見えるのは覗きこんでいる姿ではなく、丸くなって寝ているアブソルを見るカトレアさん。
ならなんでこんなに近くに見える？
いやそもそも枕の質感が変わってないか？
そんなことを寝ぼけた頭で考えていると、俺が起きていることにカトレアさんが気付いた。

「おはようレッド君。
ぐっすり眠れたみたいね？」
「あ、うん」
「まだルイズのパーティまでは時間があるから、横になっていていいのよ？」
「ありがとう」
「それに私も、もうちょっと膝枕っていうものを堪能していたいし

ね」
「そうか、それじゃあお言葉に甘え……って膝枕！？」
「あら？気付いてなかったの？
レッド君が寝苦しそうにしていたから、枕のせいかなと思って咄嗟に私の膝を貸してあげたのだけれど……嫌だった？」
「とんでもない！
嫌なんかじゃないけど……足痺れなかった？」
「そっか、よかった。
大丈夫よ、これでもお友達との散歩で鍛えているんだから！」

カトレアさんはそういって力瘤を作るようなポーズをした。
その姿見て俺は吹きだした。
カトレアさんが少し膨れたが、ちょっとすると彼女も吹きだした。
そして二人目を合わせると、示し合わせたように笑い声を上げていた。

しばらく笑い続け、一先ず膝枕をしてくれた礼を言うと、カトレアさんは恥しそうに微笑んだ。
ルイズのパーティまであまり時間がなくなってきたため、俺は起き上がって、アブソルを起こしに行った。

「アブソル、今日はありがとうな。
還ってゆっくりしてくれ」
「またね、アブソル君」

俺とカトレア嬢はアブソルに別れを告げ、二人でパーティ会場へと

向かって行った。

「相変わらず大きなパーティホールだなぁ」
「そうなの？あまり気にしたことなかったのだけれど……」

パーティホールに着いた俺とカトレアさんは、互いの両親の元へ行くため分かれた。

「レッド、遅かったな」
「遅刻よ？」
「ごめん父さん、母さん」

両親と少し話した後、俺は今回の主賓であるルイズ嬢に挨拶に行った。
まだ流石に周囲に客がいるから、俺は後で行こうと思って料理を食べにに行こうとすると、

「兄様！」

と俺を呼ぶルイズ嬢の声がした。
振り返ってみると俺の方に向かってきているルイズ嬢が見えた。
周りの客たちは、「ヴァリエール家に男児なんて居たか？」「あれはドリュウズ家の……。」等の声が聞こえてきて、俺はかなり焦った。
目立ちたくない俺としてはこの状況はかなりキツイ。
そんなことを知ってか知らずか、彼女は俺の前に立って優雅にお辞儀をした。

「この度はお越しいただき、誠にありがたく感じております。
レッド・ド・ドリュウズ殿」
「こちらこそ、お誕生日おめでとうございます。
ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様」

子供二人が精いっぱい堅苦しい挨拶をしている姿に、周りの貴族たちは微笑ましく見守っていた。
よかった……さっきの視線よりは数倍マシだ。
そう思って安堵しているとルイズ嬢が小声で話しかけてきた。

「プレゼント開けさせてもらいました。
とても嬉しかったです！」
「そっか、喜んでもらえて何よりだよ」
「ところで兄様、花言葉って知っていますか？」
「あぁ、花にそれぞれ付いている意味のことだろ？」

「し、知っているならいいんです」
「？」

俺は赤くなっているルイズ嬢に首を傾げながら、周りを見渡した。
カトレアさんがこっちをガン見している。
なんだ？なんか恐いぞ？

「それでは兄様、パーティ楽しんでいってくださいね！」
「あ……あぁ」

ルイズ嬢はそういうと、貴族の塊の中へと戻って行った。
まだカトレア嬢がこっちを見ている。
っていうかこっちに歩いてきてる。
なんだ？　足が震えるぞ？！
俺が何かしたのか？！

「レッド君？」
「はい！何でしょう！」
「さっきルイズと何を話していたのかしら？」
「花言葉についてです、ｓｉｒ！」
「！？そう……それで貴方はどう答えたの？」
「知っていると答えました、ｓｉｒ！」
「貴方、知っていて贈っていたの！？」
「？知っていますが何か問題があったのでしょうか？」

カトレア嬢は何かを考えるようにそこから去ってしまった。
何だったんだろう……。

～カトレア　ｓｉｄｅ～

花言葉を知っていてあの花の水晶を贈っていたというの？

「ということはレッド君は、ルイズのことを好きなの？」

そう言葉に出した瞬間、私の胸が締め付けられるように痛んだ。
しかしまだレッド君の気持ちを直接聞いたわけではない。
……あれ？私なんでこんなに拘っているのかしら。
可愛い妹に優しい彼氏が出来る事なんて、とても喜ばしい事なのに
……。
それが納得いかない。
まだ早い？そうじゃない。
もっとカッコいい人がいる？確かに探せばいるだろう……でもそう

じゃない。
身分の差？それもあまり関係ない。
ならば何が私は納得いかないの？

「レッド君だから？」

ストンと当てはまった気がする。
そっか……私レッド君を取られたくなかったんだ。
初めて会った時は、不思議な動物と友達な小さな男の子。
一年に一回だけ会うお友達。
ルイズが生まれてからは一年に二回。
会えば会うほど彼に惹かれていた気がする。
彼の口からオーク退治の話を聞いたときは、柄にもなく怒ってしまった。
風の噂で彼が山賊退治をしたと聞いたときは、とても心配だった。
これが恋なのか、それとも親愛なのかそれはまだ分からない。
でもこれが恋なら、例え可愛い妹でも譲れない。

「負けないわよ、私の可愛いルイズ。」

～side　out～

第２２話　思いの自覚（後書き）

長くなってきたからちょっと分ける

第２２．５話　花言葉の意味（前書き）

またやっちまった……バックスペースが俺に反抗期

第２２．５話　花言葉の意味

～ルイズ　ｓｉｄｅ～

私が兄様に初めて会ったのは１歳の時だったらしい。
流石にその時の記憶は覚えていない。
私が兄様のことを認識したのは二歳の時だった。

ちぃ姉様が連れてきた見知らぬ男の子に、私は初め警戒して姉様の後ろに隠れてしまった。
しかし兄様はそんな私に眉ひとつ顰めることもなく、優しく手を差し伸べてくれた。
その時の笑顔と優しさに私の警戒心はアッサリと解けてしまった。
兄様がいたらこんな感じなんだろうな、と幼心に思った私は、彼を兄として扱うことにした。

兄様は、いつもちぃ姉様と一緒にいた。
いつもは私の頼みごとを断らないちぃ姉様も、兄様と一緒の時だけは違った。
最初私は兄様にちぃ姉様を取られた気がしたが、兄様とちぃ姉様が結ばれるなら兄様が本当の兄様になると喜んだ。

しかし３歳の誕生日のプレゼントで、私は兄様のことが良く分からなくなった。
兄様がくれたのは赤いバラの水晶像。

とても綺麗な赤で光が反射すると、もっと綺麗に見えた。

その時はそれだけだったが４歳の誕生日にも綺麗な水晶の花をもらった。

私はそれをお母様に自慢しに行った。

するとお母様は白いカーネーションをみて「レッド君は、知ってて贈ったのかしら……。」と少し眉をひそめて呟いた。

私は何故眉をひそめたのかお母様に聞いてみたけど、見事にはぐらかされてしまった。

とりあえずお父様にも見せに行ってこようと思いついた私は、お母様から花を返してもらいお父様の書斎へと向かった。

お父様に水晶花を見せたら、それを自分へのプレゼントと勘違いしたらしくとても喜んでいた。

しかし父さんも眉をひそめた。

「ルイズ？　こういったプレゼントを軽々しく異性に渡してはいけないよ？」

「なんで？」

「花には花言葉というものがあって、一種の手紙みたいな役割を果たしてしまう時がある。

例えばバラなんて愛や情熱、貴方のことを愛しますなんて意味もあるんだ。」

「え！？」

私は急ぎお父様から、プレゼントを奪い取り、部屋へと急いだ。

後ろでお父様がの土下座のようなポーズをとっていたが、気にしている余裕はなかった。
私は部屋に帰り、鏡を見てみると顔が真っ赤になっているのが分かった。
私兄様に告白されてた？
兄様はちぃ姉様が好きなんじゃ……私は思い悩んだ。
しかしふと思い出し、白いカーネーションの花言葉を調べてみた。
意味は「私の愛は生きている」「愛の拒絶」
兄様は迷っているの？

次の年のプレゼントは白いマーガレット。
花言葉は、真実の愛。
私は困ったと同時に疑問を覚えた。
確かに兄様からの告白は嬉しい。
でも何故兄様は真っ先にちぃ姉様の部屋に行くの？
私はここで一つの可能性に思い至った。
兄様は花言葉の意味を知らないのではないか？
私は気持ちが一気に沈んでいくのを感じた。
今までの一喜一憂が全て見当違いということになる。
そしてその場合やっぱり兄様の気持ちはちぃ姉様に向いていると思うと、胸が痛かった。
私は兄様を男性として見ているのをこの時初めて実感した。

私はこの疑問を解消すべく、今年の誕生日に直接聞いてみることにした。
今年の誕生日プレゼントはアイリス。
花言葉は貴方を大切にします。
これで意味を知らなかったら私は兄様をぶってもいいと思う。

「プレゼント開けさせてもらいました。
とても嬉しかったです！」
「そっか、喜んでもらえて何よりだよ。」
「ところで兄様、花言葉って知っていますか？」
「あぁ、花にそれぞれ付いている意味のことだろ？」
「し、知っているならいいんです」
「？」

やっぱり知っていて贈ってくれていたんだ！
私は一気に顔が真っ赤になった。
なんとか他の貴族に紛れることでごまかしたが、恥しくて嬉しくて倒れてしまいそうだった。
しかし私はちぃ姉様の気持ちも知っている。
兄様から貰った水晶像を暇があればいつも本当に嬉しそうに見ているのだから……ちぃ姉様も兄様のことが好きなのだろう。
兄様も姉様を少なからず好いているはずだ。
ならばいっ姉様に天秤が傾いても可笑しくない。
……もう少し私から積極的に動いてみよう！

「ちぃ姉様に負けないんだから！！」

～side　end～

その頃のレッド君

「なんだ？今寒気が……。
それにしても今日のルイズ嬢の様子が少し変だったな。
一応年上なんだから花言葉くらい知ってるよ。
まぁ花がどんな意味を持つかは知らないけど……。」

俺は夫人の眼におびえながら、パーティが終わるまでちょびちょび料理を摘まんでいた。

第２２．５話　花言葉の意味（後書き）

最終的な選択肢を増やすために、フラグは立てれそうなやつ片っ端から立ててていきます。

第２３話　鬼教官（前書き）

前回の話で疑問を覚えてしまった方もいらっしゃるようなので、ここで少し補足させてもらいます。

先ずレッド君は両親に自分がプレゼントを何送っているか教えていません。
両親もレッド君はしっかりしているので大丈夫だろうと任せているため深く聞きません。
故に立ったヴァリエール家フラグ二本。
いつかこのツケを払うことになる主人公……ヘブンｏｒヘル！
因みに作者はＢＢよりＧＧの方が好きです。
ファウスト先生リスペクトッす！

第２３話　鬼教官

つつがなく？終わったルイズ嬢の誕生会。
あの後何故かルイズ嬢が俺の傍に来て、ヴァリエール領のいい所とかを説明してくれたりした。
カトレアさんは他の貴族の子息にアプローチを受けていたが、笑顔ではぐらかしていた。
そりゃあ男の子はあの胸に目いくわな……俺も中学の時だったらあんな感じでガッついてた気がするしね。

今回も門の前まで見送りに来てくれたヴァリエール一家に別れを告げ、馬車を走らせた。
いつも通りの帰り道、流石に疲れて眠気に苛まれていた中、父さんが俺に話しかけてきた。

「レッド、お前も後４年で学園に通う年になるな」
「学園？」
「あぁ話してなかったか、貴族の子供は１４歳から１６歳までの約３年間、学園に通って魔法や一般常識を学ぶのだ。
まぁ他にも他の貴族との接点を作るという意味合いも大きいのだがな。
お前ももうすぐ１１歳だからな、そろそろ準備位しておいて損は無い」
「（あぁ原作で舞台になった場所か……）そうなのですか」

「それにお前はそこに入る前に、既に水と土のラインになってしまっている。
お前は目立ちたくないのだろう？」
「……はい。」
「ならばせめて属性はどちらか一つと言うことにして置いた方がいい。
それかドットということにして置きなさい」
「そうですね、そうしておきます」
「あぁそれと、学園では指輪やマインゴーシュではなく杖を使った方がいい。
軍人でもない限り、貴族は剣をあまり持たないからな。
指輪を発動体として使えば、実戦経験者ならお前の実力に気付いてしまうかもしれない。
バレたくないなら細心の注意を払った方がいいだろう」
「はい、父さん」

父さんはそういうと、馬車の壁に寄りかかり目をつぶった。
それと入れ替わるように母さんが俺に話しかけてきた。

「学園に関してはお父さんが言ってしまったから、私は何を話そうかしら？」
「いや……何もなければ話さなくてもいいのでは？」
「そんな！　酷い！！
お父さんとはあんなに楽しそうにお話して、私とはお話してくれないなんて！！」

いつの間にか父さんの眼が俺を貫いている。

いや父さん勘弁してください。
俺疲れてるんです……その殺気は今の俺には耐えきれません。

「そんなことありませんよ?！じゃあ母さん誕生パーティは楽しめましたか?」
「う～ん……いつも通り自慢話が多くてあまり楽しくなかったわ。私の領地では○○が豊富でしてとか、私の息子など既に火のドットになったのです！とか聞いていて面白くない話ばっかり」
「そうですか……」
「でもカリーヌ様が貴方に興味を持っていたみたいよ?なんでも二人とはいえその年で山賊を倒すなんて将来有望だとかなんとか。」
「（流石ヴァリエール家、諜報部も一流ですか）それは……ありがたいお言葉ですね」
「今度是非その力を試してみたいとかも言っていたわね」
「（勘弁してくれ！！あんたスクウェアクラスだろ！！）それは光栄ですが、そこまで手を煩わせるのは悪いですからお断りしたいですね」
「そう？　いい経験になると思うんだけどなぁ」

母さんはニヤニヤしながら俺を肘で小突いた。
母さん貴方俺が目立ちたくないの知ってるでしょうが！！
俺の信条のんびりライフを根底から崩す気ですか！？

「冗談よ、でも興味を持たれているのと、山賊退治を知られているのは事実よ?
一応そういったのは父さんの管轄ということではぐらかしておいた

けど、完全に調べられてるみたい」
「（やっぱりか……どうしようかな）」
「何にせよヴァリエール家の子女たちに手を出さない限り、貴方に直接手を出してくることは無いと思うわよ？
まぁ模擬戦くらいはさせられるかもしれないけれど……」
「（あの人と模擬戦やったら俺は死ぬな）なら大丈夫ですね、カトレアさんやルイズ嬢は俺にとって高嶺の花みたいなものですから」
「そうなの？てっきり私はカトレアさんのことを好きなんだと思っていたのに」
「友達としては確かに好きですが、女性としては……まだ分かりません」
「そう……急ぐことは無いけれど、カトレアさんは人気があるから早くしないと誰かに取られちゃうわよ？」
「（っ！！）流石に遊べなくなるのは寂しいですね」

何だ今の不快感？
俺はその後母さんと何を話したかも覚えていないほど、上の空だった。
俺にとってカトレアさんはどんな存在だ？
友人？親友？それとも……。
答えの出ない問いにイライラしつつも、疲れから来る睡魔に襲われ、俺は馬車の中で眠りについた。

翌朝

一晩寝ると昨日の不快感は消え、何だ気のせいだったかと安堵していた俺に、母さんからお出かけのお誘いが来た。
どうやら母さんの魔法の先生だった人に会いに行くらしい。

「どんな人なの？」
「う～ん、なんて言えばいいのかな？　いい人だけど嫉妬深い人？でも他人には結構怖い人だった気も……」
「（何だそれは……）そうなんだ」
「何で俺を連れていくの？」
「そろそろ貴方に魔法で教えることが無くなってきてしまったから、彼女に助言をもらおうかなって思って」
「彼女ってことは女性なんだ……」
「そうよ～、私と学園で同級生だったの！
懐かしいわねぇ」
「同級生なのに先生だったの？」
「彼女の方が水メイジとしての位が高かったから、コツを良く教えてもらってたから、ふざけ半分で先生って呼んでたら定着しちゃって……」

そう気恥しそうに母さんは言った。
母さんも青春してたんだなぁと感じた会話だった。

「ところでその人の名前は？」
「彼女の名前はマルギッテ・シェーン・ラ・フェール・ド・モンモランシ」
「……え？」
「だ・か・らマルギッテ・シェーン・ラ・フェール・ド・モンモランシ！」

ここにきてまた原作一家かよ・・・・・・。
まぁモブキャラだったはずだからまだ少しは気が楽かな？
それにモンモンとか言ったっけ？
あの子もまだ６歳のはず……原作開始まで会わなければ俺のことなんか覚えていないはずだ。
ＯＫ！！　落ち着いた！！

「そろそろ着くわよ？」

そんな母さんの声を聞きながら、俺は今度こそ接点を少なくしようと心に強く誓った。

第２３話　鬼教官（後書き）

さぁどうする俺！！
フラグを立てるか？
それとも立てないか！
正直モンモンはあまり好きなキャラじゃないが……一人でも希望者がいたら立ててみよう。

因みにマルギッテ＝マジ恋から引っ張ってきてるので、軍人気質な人を想像してくれると分かりやすいかな？
後俺ｗｉｋｉ見て初めて知ったよ……モンモラシーじゃなくてモンモランシーだったのねｗ
Ｃｔｒｌ＋Ｆで検索かけて出てこなくて焦ったよ。

第２４話　水魔法の新たな境地（前書き）

今日は卒研のミーティングがあるらしいので、３回更新できるか不安です。
とりあえず日曜まではなんとか三回更新していきたい。
そこから先はたぶん更新速度が落ちます。
それでも何とか１日１回は更新したいと思います。
これからもこの作品にお付き合いいただけると幸いです。

第２４話　水魔法の新たな境地

とりあえずマルギッテさんに一目見た感想は、怖い。
なんて言えばいいかな……ブラックラグーンのバララライカさんの火傷が無くなって、髪の毛が赤くなった感じ？
とりあえず威圧感が半端じゃない。
その人が今から3時間俺をみっちり扱くというのだから、俺は絶望すら感じるよ。

「今から私は貴様を死が救いと思えるほど扱く！
私は中途半端なものが何よりも嫌いだ！！
故に貴様を子供と思わず新兵と同じように訓練を行う！」
「はい」
「声が小さい！！」
「はい！」
「それでいい……それではこれからお前を立派な軍人にするために鍛えてやる！」
「いや……俺は軍人になりたいわけじゃ「黙れ！」ハイ！」
「まず貴様の最も得意な水魔法を放ってこい！」
「え！？それは危ないんじゃ「いいから黙って撃ってこい！！」ハイ！」

俺の得意な水魔法って言うとアクアボールか？
でもあれは駄目だろ……俺が改悪したもんだし、練習向きじゃない。
なら！

「アイシクルニードル！！」

マルギッテさんに3本の氷の長針が高速で飛んでいく。
彼女は杖を右手に握り、水の壁を作りそれを防ごうとしているのが見える。

「（いやそんな水の壁じゃ防げないんじゃ？！）危ない！」
「私を甘く見るな！！」

俺の放った氷の針は、水の壁に触れた瞬間に壊れてしまった。
何が起こったか俺には理解できなかった。

「何が起こったか理解できていないようだな」
「はい……なんで氷が水に割られてしまったんでしょうか」

マルギッテさんは無言で水の壁を解除すると大量の水がそこから出現した。

「え！？」
「見た目通りの水の量だと思っていたのか？
それは甘いな。
水を圧縮することで氷よりも質量があったのだ！」
「水を圧縮……」
「そうだ！　水を圧縮することで優秀な盾にも剣にもなるのが水の

特性だ！」

母さんは離れたところで俺を見て苦笑いしていた。
後から聞いてみたところ、母さんはあまり圧縮するのが得意ではなかったらしく、それ故に圧縮による硬度よりも弾速を鍛えたらしい。
高度何千メートルから海に落ちると、水はコンクリートと同じというのに似ているか？
俺ががどちらのタイプかわからなかったため、圧縮の得意な彼女に教えてほしいと頼んでくれたようだ。

俺はその後延々と水魔法を撃ったり、撃たれたりすることで圧縮のメリットとデメリットを体に嫌ってほど教え込まれた。
既に服はボロボロ、青あざの数は数えたくない。
圧縮した水の玉は砲丸と大きく変わらない。
流石にスピードは緩めてくれているようだが、直撃すると2メートルくらい吹っ飛ぶ。
一応プレートメイルを着けさせてもらっているけど、もうベコベコだ。
これで鎧がなかったらと思うと寒気がする。

「今日はこれくらいにしておく。
滅多に来ることは、ないだろうがもし次来た時に鍛錬を怠っていることが分かったら、今の3倍の弾速で水球を撃ちこんでやるから覚悟しろ！」
「それ食らったら僕死にますよね！？」
「鍛錬を怠るくらいなら死ね！」
「理不尽だ！！」

数時間でこれくらいの会話くらいは出来るようになった。
確かに厳しいけど、ためになる話と経験ばかりだった。

「とりあえず今日の訓練は終わりだ。
紅茶でも飲んでいくがいい。」
「訓練ありがとうございました！！」
「フンッ！」

……ツンデレかな？
口に出したら殺されそうだから言わないけど。
マルギッテさんは家の中へと一旦戻っていった。
そして訓練の終わったのが分かったのか、母さんが俺の方へやってきた。

「随分扱かれたわね～。」
「本当だよ……でも凄い人だね」
「それはそうよ！私の親友なんだから！！」

母さんは本当に嬉しそうに笑っていた。

しばらくしてマルギッテさんは丸いテーブルを肩に乗せて、戻ってきた。
使用人の人が椅子を用意してくれたのだけど、何でマルギッテさんは自分でテーブルを持ってきたのだろう？
母さんはそんな彼女を見て苦笑い。
なんでも昔からお茶会の時は彼女がテーブルを用意して、母さんが椅子を用意していたらしい。
今回母さんは客人として来ているため、椅子は使用人の人たちが用意したということ。
本当に仲がいいんだな……。

「遅れてすまない」
「いえ、母さんと話していたのであまり気になさらないでください」
「そうよ～水臭いわねぇ」

マルギッテさんも俺と母さんが気にしていないことが分かったらしく、少し苦笑していた。
俺はマルギッテさんの苦笑も気になったが、さっきからマルギッテさんの後ろに隠れている小さな女の子が気になった。
特に髪型が……何だあの巻きっぷりは？
俺が後ろにいる子を見ていることに気付いたマルギッテさんは、女の子の背中を軽く押し出した。

「ほら挨拶しなさい」

「……モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシです」
「すまない、この子は人見知りでな」
「いえいえ、じゃあ僕も自己紹介しましょう。
僕の名前はレッド、レッド・ド・ドリュウズです」

俺はとりあえず自己紹介をして、握手を求めることにした。
モンモンは俺の差し出した手と、俺の顔を交互に見て、おずおずと俺の手を握った。
その光景を見て、母さんは微笑ましいものを見たという様な顔をしていた。
マルギッテさんは表面上笑顔だが、目が笑っていない。
まるで娘に手を出したら切り落とすとでも言いたいかのように……。
俺はなんとか震えそうになるのを耐えながら、不自然にならないように握手を終えた。
モンモンから手を話した瞬間威圧感が消え、俺に向けられた殺気もなくなった。

「（この人ツンデレの上に親馬鹿か……）」

俺はこれから始まるお茶会に若干の不安を持ちながら、ゆっくりと椅子へ腰を下ろした。

第２４話　水魔法の新たな境地（後書き）

最初考えていた設定では主人公はポケモンとか使えずに、水の圧縮魔法オンリーで無双する予定でした。
この水の圧縮による威力の向上はその名残かな？
これでアクアボールの新たな使い方が出来るようになりました。

第２５話　少女の悩み（前書き）

いや～誠に申し訳ない！
学園に入る年齢を勘違いしていたらしく、アドバイスをいただきまして、入学時の年齢を１４歳とさせてもらいます。
混乱させてしまって申し訳ありません。
一応２３話の年齢を修正させていただきましたので、ご堪忍を！

第２５話　少女の悩み

母さんとマルギッテさんは、俺とモンモンそっちのけで昔話に花を咲かせている。
所々聞こえる、窒息や潰すという単語は聞き流すことにした。
一つ思ったのは、この二人マジ怖ぇ！

「えっと……あの……」
「どうかしたの？」

モンモンが俺に話しかけてきてくれたのは正直助かった。
あの二人の会話が怖すぎて、聞きたくなかったところだ。
でもどうしたのだろうか？

「あの……なんであんなに頑張るんですか？」
「え？なんのこと？」
「魔法の……練習をです」
「あぁ、僕には夢があってね」
「夢ですか？」
「うん、僕はね！のんびり暮らしたいんだ！」
「え！？それだったら何であんなに厳しい練習をするんですか？」
「確かに厳しかった……っていうか君のお母さんが怖かった」
「それは……ごめんなさい」
「でもこの修行は、いつか自分のためになる。
幾らのんびり暮らしたいといっても、絶対的平和なんてありえない。
貧困や差別がある限り、争いは消えないし、それに巻き込まれる可

能性が出てくる。
その時僕は最低限自分の大切な人を守れる強さがなければ、のんびりできない。
心配でそれどころじゃないからね」
「……」
「だから僕は今自分を鍛える。
いつ力が必要になるかわからないのだから。
これが僕の頑張る理由」
「凄いですね……」
「（凄いって言うか未来に戦争がありそうだから鍛えないと即死亡する可能性があるからね。）凄くは無いと思うよ？今カッコいい事言ったかもしれないけど、僕は最低限敵から逃げきれるだけの力があればいいと思うし、そのためなら他人を見捨てることも厭わない。大切な人１人と１００人の他人だったら僕は迷わず１人を選ぶよ」

少しの沈黙の後モンモンは少し下を向いて呟いた。

「それでも凄いです。
しっかり自分の夢を持って、それに向かって行動してますから……。
それに比べて私は！」
「！？」

いきなり顔をあげ、机を叩いたモンモンの目には涙が浮いていた。
母さんとマルギッテさんもいつの間にか、俺とモンモンを見ていた。

「私は何も出来てない！魔法もまだドットスペルも満足に使えない

し、頭も良くない！
体が強いわけでもなく、顔だって私より綺麗な子はいっぱいいる！
唯一水の秘薬を作るのが少し得意なくらい……私だってお母様みたいに凄い水メイジになりたいと思ってるのに！！」
「……そっか。じゃあ僕はそれを聞いてなんて言えばいいかな？
頑張っていればいつか成れるとでも言えばいいのかな？」
「何ですって！？」

俺はその時静かにキレていた。
マルギッテさんが俺にものすごい殺気を送っているのにも関わらず、俺は口を止めることが出来ない。

「確かに君は天才じゃないのかもしれない、秀才ですらないのかもしれない。
でも君は努力したのか？
あぁ確かに君は努力したんだろう。
でも結果がそれについてこないからって卑屈になるな！　諦めるな！！
魔法がうまく使えない？ならもっと練習しろ！それでも駄目なら工夫をしろ！！
頭の良し悪しなんて何を基準に言っている！　君の母さんか？
それなら君はマルギッテさんを侮辱している！
高々６年生きたくらいの子供に、２０年以上生きた人の知識や経験に届くものか！」

なんか殺気が増した気がする。
あれ？母さんからも殺気を感じるぞ？

「体が弱いなら鍛えろ！顔が綺麗？そんなものは飾りだ！」
「……」
「そして水の秘薬を作るのが得意って言っていたな！
俺は秘薬なんて作れない！！　ならば俺はその点において君よりも劣っているぞ！
俺にとっては君は俺よりも年下なのに、水の秘薬を作れる凄い女の子じゃないか！」
「グスッ……」
「自分の悪いところばかり見るんじゃない！
いいところもちゃんと評価して、そこを伸ばせば君は誰にも負けない一つを持つことが出来る！」
「うわーーーーーーーーーーーーん」

モンモンは泣きだしてしまった。
そしてそれと同時に一気に熱が冷める俺。
ヤバい……こちとら22歳の脳みそもった状態で、ここまで来てやっとラインだって喜んでたのに、6歳でドットスペル完璧ではないのかもしれないけど使える。
頭だってそうだ、俺は6歳でこんな思考が出来たか？
体が弱い？この世界でメイジは鍛えないのがデフォじゃなかったか？
自分より綺麗なやつがいる？
上探したら上限なんて見えるわけがないじゃないか。
秘薬作れるだけでも凄いだろ。
俺化学赤だったから、呼んでも理解できないことばっかだったぞ！？
未だにあんまり理解できないのに……そんな人が卑屈にならないでくれ。
俺が鬱になりそうだよ・・・・・・。

俺が我に返り、冷静になってみると言い方が厳しかったのではないかと後悔し始めた。
モンモン泣いてるし……。
そんな俺の肩を叩く二本の手。
……振り向きたくない。
振り向いたら絶望しかない！
しかしそんなのは関係ないようだ。

「貴様、随分家の娘に好き勝手言ってくれたじゃないか、ん？」
「レッド？女性の年齢についてはタブーって口が酸っぱくなる程教えたわよね？」

あぁ鬼が……鬼がいるよ。

「（俺生きて戻れるかな？）」

俺は二人の鬼に家の裏側へと引きずられていた。
モンモン……戻ってきたときに泣き止んでいるといいな。
俺戻れるかわからないんだけど。

しばらくの間Z指定級のお仕置きを受けた俺は、足を引きずりながらモンモンの元へと戻った。
彼女は泣き止んでいたが、目は充血していて、少しむくんでいる。
モンモンは少し恥しそうに、お礼を言うと屋敷に戻っていった。
一瞬思い出せなかったが、俺説教したんだっけ？
あのお仕置きが大ダメージすぎて記憶が少し飛んでたよ。
しかもいつの間にかあの二人戻ってきてるし……。

「レッド、ありがとう」
「え？」
「確かにお前の言い方は良くなかった……だがお前があの子を気遣ってくれたのは伝わった」
「（気遣ったって言うか、自分が耐えられなかっただけなんだけど。）そうですか……良かったです」
「あの子が悩んでいたのは知っていたのだが、私には話してくれなくてな。
今回の件で悩みの内容は理解した。
私の方でも少し話してみることにする」
「それがいいと思います。俺なんかの言うことよりも、マルギッテさんの言うことの方が説得力がありますからね！」

マルギッテさんは俺の言葉に苦笑し屋敷へと戻って行った。
母さんはもう帰る準備が出来ており、マルギッテさんに別れの挨拶も済ませていたようだ。

俺と母さんは馬車に乗り、モンモランシ邸を振り返った。
するとモンモランシ邸の窓が一カ所開いていて、何かが揺れている。
目を良く凝らしてみると、モンモンが手を振ってくれていた。
俺は少し嬉しくなり、大きく手を振り返した。
そして俺とモンモンは、互いが見えなくなるまで手を振り続けた。

第２５話　少女の悩み（後書き）

うん……これは酷い。
主人公が熱血キャラになっているw
っていうか泣き声って難しいな。
違和感しか感じない……。

そして今回フラグは立てませんでした。
……立ててませんよ？
次は久しぶりのポケモン回にしようかな？

第２６話　アニマルテラピー（前書き）

最近ポケモンレベル上げくらいしかやってないなぁ……
そのせいでＬｖ１００のポケモンが１８匹に増えましたｗ
ＢＷは７０くらいまで上げるのはそれほど苦じゃない……でも１００まで上げるのはダルイ。

第２６話　アニマルテラピー

久しぶりの森フェイズですよ皆さん！！
……皆さんって誰やねん。
突如やってきた電波が、俺にこう言えと囁いた気がする。

そんな実際は久しぶりじゃない森に来た。
相変わらず静かでいい場所だ！
それなりに広くて、動物もあまり多くないから人も来ることが少ない。
まぁじゃないとポケモン召喚なんて試せないわけだが……。
とりあえず日課の空手の訓練をし、今日は久しぶりにニューラを召喚してあげることにした。

「来いニューラ！」

いつもの光が現れ、そこから黒い影が飛んできた。
とりあえず避けてみた。
ズサーーーーーーーという音が聞こえてその後木にぶつかった様だ。

「ニャーーーーーーーーー！！！」
「あ……ごめん」

いやぁ、つい癖で避けてしまった。

この間のマルギッテさんの水弾を思い出してしまって、無意識だったんだ。
恨みのこもった目で見られている俺は微妙に居心地が悪かったので、とりあえず撫でることにした。
ひたすら撫でることにした。
最初は許さんとばかりにソッポを向いていたけで、段々顔が緩んできた。
3分くらい撫でていると機嫌は元に戻ったようだ。
それが分かったので一旦撫でるのを中断し、ニューラに改めて謝った。

「ごめんな？いきなり飛んできたからビックリしてな……許してくれ」
「……ニャ」

なんとか許してくれたようだ。
相変わらず可愛い系のポケモンは癒されるなぁ。
最近は修行ばっかりで、癒しが足りない！
しかも最近は召喚より、装備の制御ばっかりだったからここ半年くらい召喚してなかった。
だからか余計に可愛く見えた。

「よし！今日は他の子も召喚してみるか！」
「にゃ？」

他の子が誰のことを指しているか分からないニューラは首を傾げて

いたが、とりあえず俺は召喚をし始めた。

「来いピカチュウ、ポッチャマ、ロコン！」

目の前に3つの光が出てきた。
ピカチュウの光は少し大きいが……。
そうして出てきた三匹は、初めての異世界に興味津々のようだ。
まぁピカチュウは真っ先に俺のところに来たけど、他の二匹は思い思いの行動をしている。
ポッチャマは蝶々追いかけて転んでいる。
ロコンは突然出てきた蛙に驚いて火を吹いている……火？！

「ポッチャマ、水鉄砲だ！！」
「ポチャ！」

ポッチャマはロコン目掛けて水鉄砲を放った……いやそっちじゃなかったんだけど結果的に火は消えた。
びしょ濡れになったロコンは何が起こったかわからないようだ。
俺はロコンに近づいていき、しゃがみ込んだ

「ロコン、ここは森なんだから火は厳禁だ。
分かってくれるか？」
「コーン……」

分かってはくれたみたいだけど、微妙に機嫌が悪い。
とりあえず頭をワシャワシャ撫でて、抱き上げてニューラ達が居る所へ連れてった。
でもこうしてポケモンが４匹もいると壮観だな。
っていうかピカチュウが凄い静かなんだが、俺もしかしてレベル高い子呼んだか？
基本ポケモンのレベルが高い子は精神的にも成長していて、あまり騒がない。
まぁ伝説とか性格的なものもあるから一概には言えないけど……。

「ピカチュウ、もしかして君電気玉持ってる？」
「ピカ！」

どうやらこの子は俺が育てたピカチュウらしい。
指定しない時は、同じポケモンだとレベルが高い方が出てくるのか？
これは良い発見だな！
俺が切り株に座って、考える人を地でやっていると、ズボンの裾を引っ張るロコンとポッチャマがいた。
ニューラは初めて出てきた子達に譲ってくれたらしく、端っこの方で木に寄りかかって寝ていた。
とりあえず考えるのはそこまでにして、初めて会ったロコンとポッチャマを構うことにした。
近くにある湖まで移動し、遊ぶことにした。
ニューラは俺が抱っこして連れてきた。
ピカチュウは何も言わず、俺の後ろを着いてきた。
この子もそうだけどラオウも執事みたいだったな。
ホロやセレビィ程とは言わないけど、もう少し自分を出してもいいと思うんだが……。

「コーン！」
「ポチャーーーー！！」

あっちではさっきの仕返しとばかりに、ロコンがポッチャマに水を掛けてからかっていた。
微笑ましいと思いつつピカチュウと共に、湖のそばに座りその光景を見守っていた。

「ピカチュウ、お前も行ってきていいんだぞ？」
「ピカピ」

首を横に振られてしまった。
そして俺を指さし、次に自分を指さし、最後に両手を広げた。
最初抱っこでもしてほしいんだろうか？とか思ったが、どうやら俺を警護してくれているらしい。
可愛い……いやそうじゃない！！

「大丈夫だ、これでも魔法使いだからな！」
「ピカ？」

俺はそういって目の前に水の玉を浮かべて、木に向けてはなった。
水球は木に当たって、めり込んで弾けた。
ピカチュウは少し驚いたようだった。

「な？だからお前も一緒に遊んどいで。」
「ピッ！」

なんだかんだ羨ましかったみたいだ。
凄い速さで突撃して行って、高い水柱が出来た。
その後ロコンとポッチャマに文句を言われていたみたいだが、みんな楽しそうだった。
俺はそんなポケモンたちを見ながら森での一日を過ごした。

第２６話　アニマルテラピー（後書き）

Ｌｖの高い子は懐き度が基本的高いです。
故に自分よりレッド君を優先してくれることが多い。
でもあくまで優先なので、レッド君が自由に行動していいと言えば基本自由に動き回ります。
逆にレベルが低い子は、本能を優先させてしまうので戦闘以外はかなり遊び回ったりします。
戦闘ではいうことを聞いてくれるので問題はありません。

第２７話　まだまだ未熟（前書き）

最近空手のフェイズがなかったので……

第27話　まだまだ未熟

空手が上達している実感がない。
父さんのゴーレムとの戦闘訓練ではあまり使う機会がないから、組み手相手が欲しいところだ。
でもこの世界で肉弾戦をするメイジなんかそういないだろうし、居ても知りあう方法がない。
父さんなら知っているかもしれないけど、父さんはあまり空手を使うのを良く思っていないからなぁ。
確かに蹴りや拳を交わされた時に、隙が大きいから剣で切られる可能性があるのは分かる。
でもそのために拳速や引きの速さも鍛えているわけで……。
それに実戦なら俺はガントレット着ける気満々だから結構有効だと思うんだけどなぁ。

組み手相手が欲しかった俺は、格闘ポケモンなら何とかいけるんじゃないかと思って呼びだしてみることにした。
格闘技が使えそうなポケモンは、コジョフー、コジョンド、エビワラー、サワムラー、ナゲキ、ダゲキ、カポエラー位か？
この中からレベルが高い格闘ポケモンを召喚して、組み手相手になってもらおう。
でも空手ならダゲキがいいのかな？
レベルあんまり高くないんだけど……いや今回はコジョンドを呼ぼう！！

「来てくれモモヨ！！」

光の中から人位の大きさのコジョンドが現れた。
コジョンドが使える格闘技的な技は、発勁、膝蹴り、飛び膝蹴り、ローキック、当て身投げ。
あれ？組み手厳しくね？
とりあえずコジョンドの攻撃力を考えると俺普通に死ぬな。

「（なら装備しかないか……ツボツボはレベルがあまり高くなかったはずだから、ハガネールとパルシェンを装備しよう）モモヨ、俺と組み手してほしいんだけど……」

モモヨは目を瞑って一礼した。
了承ってとってもいいんだろうか？
俺はハガネールとパルシェンを装備して、念には念を入れて硬くなるを3回重ね掛けした。

「ルールは禁的、目つぶし、噛みつきは禁止で、頭部へ打撃が入った場合技ありとして、倒れて3秒以内に立ち上がれなかった場合は一本。
時間は……無制限で行います」
「ジョ！」
「それじゃあ今からこの小石を上に投げるから、それが下に落ちたら試合開始ってことで……それ！」

モモヨと俺は向かい合って、構えた。
そして俺とモモヨの間に小石が落ちてきた。

次の瞬間俺の目の前にモモヨの膝が広がった。
俺は急いで横に転がった。

「飛び膝蹴り！？　いきなりヤバい技してくるな……」

飛び膝蹴りってこんなに早い技だったのか……でも外したモモヨが自爆していた。
あぁＨＰの半分減るんだっけ？
このままでは組み手にならなくなるかもしれないので、ルールを追加した。

「飛び膝はもう禁止ね？　次外したら瀕死になるし……」
「……ジョ」

モモヨは少し恥しそうにうなずいた。

「じゃあ再開と行きますか！」

俺はその言葉と同時に右の正拳突きを放った。
しかしモモヨは危うげなく避け、カウンターでローキックを放ってきた。
それは俺の左内腿に直撃し、激痛で俺はその場に膝を着いてしまった。
それに合わせるように俺の顎目掛けて、掌底気味にはたくを決めて

きた。
脳を揺らされた俺は、そのまま意識を失った。

目が覚めると俺は木の根を枕にして、横たわっていた。
どうやらモモヨが運んでくれたらしい。
肝心のモモヨは大きめの石の上に座り、瞑想していた。
瞑想で上がるのは、特攻と特防だから問題ない。
俺は再戦を頼むためモモヨに近づいて行った。
すると俺が起きたことに気付いて、自分から近づいてきてくれた。

「いやぁ瞬殺だったな……面目ない」

モモヨは首を横に振ってくれたが、瞬殺だったのは事実だ。
硬くなるを積んだところで、人体構造上脳は鍛えられないからなぁ……首の骨が太かったら揺れにくいんだろうけど。
それに一応鍛えてきたはずなんだけど、やっぱり内腿は痛みがデカイな。
まぁモモヨの蹴り方が上手かったのも一つの理由かな？
棒などで叩くような蹴りじゃなく、鞭の様にしなる蹴りだったからすげぇ痛かった。
めっちゃ青タンになってるんだが……とりあえずフーディンを装備して自己再生を使って戻す。

「良ければもう一戦頼めないか？」

モモヨは少し悩んでいたが、一応了承してくれた。
ルールはさっきと一緒。
ただし飛び膝は禁止。
俺は再び小石を上に投げ、構えた。
落ちてきた瞬間、今回は俺から速攻を掛けた。
顔面に向けた中高一本拳……をフェイクに意趣返しとしての下段回し蹴り。
俺の意図に気付き、素早く俺の拳を外側に払いローキックを避けようとバックステップする。
しかしギリギリではあるが足の甲の半分くらいは当てることが出来た。
だが流石はレベル１００コジョンド。
防御が低いとはいえ、俺の蹴りくらいじゃ顔に変化はないか……。

「流石に全力で蹴ったのに飄々とされると堪えるぜ」

そういうとモモヨは一瞬苦笑したが、すぐに戦闘用の顔に戻り、今度はこちらからだとばかりに突撃してきた。
やはり速い……目で追えないスピードではないが、フェイントを掛けられるとかなりキツイ。
なんとか足払いの要領でモモヨの進行方向に下段回し蹴り。
しかしそれを見事に跳んで避け、その勢いのまま鳩尾に飛び膝決めてきた。

「ガハッ！！！　い……やだから……跳び膝……禁止って……いったじゃん。」

俺は本日二度目の気絶をした。
薄れゆく意識の中で、モモヨがとても申し訳なさそうにしていた気がした。

二度目の目覚めも木の根の枕だった。
しかし少し違うのは俺の服が少し破れていて、額が少し冷たいこと。
辺りを見回してみると少し日が落ち始めていて、もうすぐ帰らなければ不味い時間になるところだ。
俺はモモヨを探そうと辺りを見回してみると、ちょうど戻ってくるところだったようだ。
モモヨは手に水に濡れた俺の服の一部を持っていた。
どうやら俺が気絶している間湖まで行って、布を濡らし額に当てるという看病を繰り返してくれていたらしい。

「迷惑かけたな？」

俺がそういうとモモヨは首を激しく横に振り、深く頭を下げた。
どうやらルールを破って、飛び膝を使ったことを悔いているらしい。

「いや、お前は悪くない。
確かにお前はルールを守れなかったけど、身についた技なんだから
反射的に使ってしまっても可笑しくは無い。
それに四天王に挑む時あればっかり使ってたからな……俺の落ち度
もなくは無い。
だから気にするな！
それに看病もしてくれてたみたいだしな！」

俺がそういうとモモヨは顔を少し赤らめ、俯いてしまった。
もう少し話していたかったが、流石に帰らないと不味い時間になっ
てきたので、装備を解除してモモヨに帰ることを告げる。

「今日はありがとうな！
また組み手頼むかもしれないから、その時はまたよろしくな！」
「ジョ！」

モモヨは元気よく返事をしてくれた。
その返事を聞いてから俺は、モモヨを還した。

「俺もまだまだ駄目だな」

今日の組み手で思い知った。
痛みに敏感すぎる事は、実戦において致命的に成りかねない。
痛みに耐える訓練も必要なのだろうか……切り傷は父さんとの訓練でよくできるから我慢できるんだが、打撃の痛みは性質が結構違うからなぁ。
なんか考えないと駄目そうだ。
俺はそんなことを考えながら家に急いだ。

家には鬼が待っていた。
遅く帰ってきた＋服ボロボロその後服を脱がされ、胸に青痣。
母さんは俺を風呂に叩きこみ、青痣に薬を塗り、その後正座で説教された。
説教は夜まで続き、青痣の理由を転んだ先に岩があったという何とも嘘臭い理由をつけてごまかした。
俺母さん恐怖症になりそうだよ……はぁ。
心配掛けたのは分かってるから、反論もできない。

故に精神的疲労が半端じゃない。
俺は肉体的、精神的共に限界を迎え、ベットに入った瞬間気を失うように眠りについた。

第２７話　まだまだ未熟（後書き）

やっぱ戦闘って難しいな。
そしてコジョンドはもちろん手加減しています。
幾ら硬くなろうが、レベル４０代のパルシェン、ハガネールとＬｖ１００のコジョンド。
どっちが強いかは明確ですよねｗ
しかしあくまで空手の試合形式のようなものなので、勝つ可能性はではない……はず！
いつか勝てる日が来るといいなぁ、まぁ手加減した状態というのが大前提だけど。

第２８話　精霊と伝説（前書き）

今回の話は結構大事なターニングポイントになります・・・

第２８話　精霊と伝説

ある日母さんに呼ばれ、母さんの部屋に向かうと笑顔の母さんが待っていた。

「ちょっとモンモランシ領まで行ってきなさい」
「え……えっとなんで？」
「マルギッテが呼んでるからよ？」

まさかの呼びだしキターーーーーーーーーーーー！！！！！
この呼び出しは全く嬉しくないぞ？！
まぁ確かにあの人の魔法訓練は為になるんだけど、翌日碌に動けなくなるんだよ？
しかもめっちゃ怪我するし……断れないんだろうけどね！

「でも行ってきなさいって事は、母さんは行かないの？」
「私は今日ちょっとお父さんとデー……お仕事があるのよ」
「（絶対今デートって言いそうになったな……。）そうですか」
「い、いいから早く行ってらっしゃい！」

流石にそれは強引過ぎると思うのだが、いいんですけどね？
確かに日頃俺の訓練とかで時間使わせているから、それぐらい別に！
でも何でこのタイミングなんですか・・・・・・。
マルギッテさんのストッパー役がいないと俺……あれ、あんまり変わらない？

はぁ、観念して行くとしよう。

今回は一人なので、馬車じゃなく馬による移動になる。
結構遠いから途中休憩挟まないと厳しいな。
俺はモンモランシ領までは一気に行くことが出来たのだけど、馬の体力と俺の尻が限界だったため近くにあった湖で休憩することにした。

「はぁ……馬車って偉大だったんだな」

この世界鞍はあっても、そこまで震動を吸収してくれる素材でもないので長時間乗馬してると尻が擦れる。
俺は痔になる恐怖に怯えながら、渇いたのどを湖の水で潤わせた。
顔を直接つけ、ゴクゴクと飲んでいると水面に波紋が出来る。
しかし何故か徐々に波紋が大きくなっていく。
違和感を感じ、俺は湖から少し距離を取って様子を見ることにした。

しばらくすると波は収まり、先ほどの静かな湖へと戻った。
だが次の瞬間湖の中心辺りが盛り上がってきて、徐々に大きな水の玉が浮き上がってきた。
水の玉はゆっくりとこちらに近づいてきている。
俺はヤバいと感じ、身を翻して逃げようとしたが、触手のようなものので足を掴まれた。

「ック！離せ！！」
「落ちつけ、呼びだす者よ」
「！？」

誰だ！？まさかこのスライムもどきか？
水の玉はどんどん脈動して、姿を変えていく。
しばらくして水の玉は、人の姿へと変化を遂げた。
……俺の裸の姿に。

「おい！それは嫌がらせか！？」
「何を怒っている、私は呼びだす者の姿を借りたにすぎない」
「それは別にかまわないが、服まで真似してくれ！！」
「そうか」

彼？は体を構成する水を使って、服を着ている俺の姿になってくれた。

「では話をしてもいいか？呼びだす者よ」
「その前に質問があるんだがいいか？」
「かまわない」
「何故俺を呼びだす者って呼ぶんだ？」
「それは貴様が異界の獣を呼びだすからに他ならない」
「！？　何故それを知っている！！」
「貴様がこの泉の水を飲むときに貴様の記憶を見たのだ」

ってことはコイツやっぱり水の精霊とかいう奴か。
また面倒なことになってきたな。
でも待てよ？ここでアンドバリの指輪について助言しておけば面倒事が少し減るんじゃないか？

「なら俺がこの世界の未来に起こるであろう出来事を知っているのも見たな？」
「見た」
「アンドバリの指輪のことも見たんだな？」
「盗まれる事になるようだな」
「じゃあ盗まれないように対策するんだよな！」
「対策？なぜそんなことをしなければならない。
取られたなら取り返せばよいだろう」
「いや……取られないようにした方が簡単だろう？」
「変わらない」
「いや面倒くさくないか？」
「変わらない」

コイツ、めちゃくちゃ面倒くさい！！
確かに価値観や考え方が違うのは知ってたけど、ここまで違うか。
じゃあ俺の方から頼んでみるか。

「頼む、アンドバリの指輪を取られないようにしてくれ！」
「分かった。
ただし条件がある」
「俺の出来ることなら……」
「そう難しいことではない。

呼びだす者が一体の獣を呼び出してくれれば、それでいい」
「獣……ポケモンのことか。
誰を呼び出せばいいんだ？」
「カイオーガと呼ばれる神獣」
「……え？　マジで？」
「マジだ」
「いや流石にアイツは不味い。
他の子にしてくれないか？」
「駄目だ、カイオーガ以外は認めない」

まだ呼び出したことないんだが……だって海を広げるレベルの大雨降らすんだぞ？
しかも大きさ5メートル近くあるはず。
そんなもの軽々しく呼びだせるわけがないだろ！

「……どうしても他の子じゃ駄目か？」
「駄目だな、それが出来ないなら取られてから対応する」

頑固な子供かこいつは！！
対策するくらい別に問題ないだろうに……。
はぁ……ここは俺が折れるか。

「３０秒だけでいいか？」
「会えるのなら問題は無い」

心なしか水の精霊が嬉しそうにしている気がした。

「（ふぅ、覚悟決めるか！）来いカイオーガ！！」

今までの比較にならない大きさの光が現れ、そこから少しずつ青い巨体が現れていく。
そして出てくるにつれて空に暗雲が立ち込め、、雨が降ってくる。
完全に出てくる頃には、滝のような豪雨になっていた。

「（ヤバい、これは想像以上にヤバい！）カイオーガ、俺の隣に降りてきてくれ」

ゆっくりと俺の隣に降りてくるカイオーガ。
デカイ……威圧感が半端じゃない。
初めて見た人なんか気絶するか、崇め出すんじゃないか？

「おぉ、素晴らしい」
「なぁ、もう戻していいか？」
「駄目だ！　ならん！」

あれ、コイツ口調変わってね？
俺は雨でビショビショになりながら、興奮気味の水の精霊を見ていた。
その後精霊は雨で広がった湖から、カイオーガの近くの水たまりま

で移動し、撫でてみたり突いてみたりしていた。
まぁカイオーガはあまり気にしていにようだ……器がでかいな。
俺は流石に雨の量が気になってきたので、カイオーガを戻すことにした。

「もう限界だ戻すぞ？」
「もう少しだ！　もう少しだけ！」
「いや、もうお前誰だ？！　どっちにしろ駄目だ！
戻れカイオーガ！！
……今日はすまなかったな。」

俺はカイオーガを戻した。
還るときカイオーガは、首を小さく横に振ってから還って行った。
いい子だなぁ……デカイけど。
可愛いなぁ……デカイけど。
俺はまたいつか呼び出してあげたいなぁと思いつつ、静かになった精霊の方を向いた。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「何これ怖い」

なんか最初の雰囲気はどこに行ったやら、四つん這いになってカイオーガの消えていった方に手を伸ばしている精霊がいた。
頼むから俺の姿でやるな！
なんにせよこれでアンドバリの指輪対策は出来たはずだ。

「約束通り指輪を取られないようにしてくれよ？」
「あぁ……わかった」

未だ落ち込んでいる精霊が流石に可哀想に見えてきた。
まぁ俺の都合で動いてもらうわけだし、少しサービスしてあげるとしますか！！

「今回だけだぞ……来いスイクン！！」
「な！？」

水の精霊自体は透き通った身体をしているが、さっきの大雨で湖が少し淀んでしまっている。
俺はそれを綺麗にしてもらうためにスイクンを呼びだした。

「貴様何を考えている？」
「スイクン、ここの湖を綺麗にしてくれないか？」
「そんなことのために呼びだしたのか！？」
「いや、なんとなく申し訳なくてな……」
「それくらいは自分でやる」
「いいから！」

俺はスイクンに目配せをして、綺麗にしてもらうように頼んだ。
それを分かってくれたスイクンは頷き、湖の四隅を飛び回った。
すると泥で濁っていた水がどんどん透明度を取り戻していき、元の

美しい湖に戻った。
そしてスイクンは俺の横に跳んで戻ってきた。
２００キロ近くある体重を持つスイクンは、着地する時に音を立てることがなかった。
流石は伝説のポケモンと感心していると、水の精霊が俺の肩を叩いた。

「スイクンに触ってもいいか？」

なんか目を輝かせて聞いてきたので、ちょっと引き気味に許可を出すと、スイクンを思う存分撫で始めた。
スイクンが若干困った顔をしているが、少し我慢してもらおう。
……今度果物かなんかあげよう。

思う存分撫でまわし終えた精霊は、心なしか艶々している気がする。
逆にスイクンは少し疲れている。
……お疲れ様です。

「スイクンありがとうな？」
「また会おう」

俺と精霊はスイクンに別れを告げ、スイクンを還した。

「レッドよ……いつか必ず今回の礼をしよう」

「（あれ？　今俺の事名前で呼ばなかったか？）それは楽しみだな」

そうして水の精霊も湖の中へと戻っていった。
色々大変だったけど、有意義だったかな？
何か忘れてる気が……あ！

「俺マルギッテさんに呼ばれてたんだ！！！！」

行かないわけにもいかないし……ふぅ、逝ってきますか！

因みにトリステインの一部に突如降り始めた大雨は、アカデミーの研究者たちを大きく戸惑わせたのだが、それはまた別のお話。

第２８話　精霊と伝説（後書き）

この出会いがどんな形で主人公の役に立つかは、まだ分かりません。
でも決して悪い風には転がらない……と思います。
予定は未定だからねｗ

第２９話　決意（前書き）

さてそろそろ本格的に動かしていきますか！
後書き終わってから気付いたんですが、短いです。

修正入れました。

第２９話　決意

あの後遅刻の罰則は、訓練内容の濃密化という俺にとって悪夢の様な内容になった。
避けることが許されない弾幕、それを壁を作って耐えろとの耐久訓練。
的の中心に１００発連続で水球を当てる精密射撃訓練、尚失敗したら最初から。
前に突破できなかった流水の壁の突破を目的とした威力向上訓練。
ｅｔｃｅｔｃ……。
因みに水系統の魔法は先ほどの雨で大分使いやすかったです……これは不幸中の幸いだ。

訓練の濃密化の結果、見事お泊りとなりました！！
着いたのが遅かったのが一番の理由だったのだけど、まさか泊りになるとは……母さんには連絡済みだそうだ。
元から泊める気だったのだろうか？

「今日の訓練はここまでとします」
「ありがとう……ございました！」
「すぐに夕食となります。
それまでに身体の汚れを落としてきなさい」
「ハイ！」

そう言ってマルギッテさんは屋敷へと戻った。
俺は疲れた体を引きずりながら、風呂へと向かった。

「彼は良い軍人になりそうですね。
これからが楽しみです」

ところで広いお風呂は、一人で入ると微妙に怖くありません？
頭を洗っているとき、後ろに誰かいるんじゃないだろうか？と思ったことは無いだろうか？
俺はホラー映画とか大好きだが、基本怖いもの見たさ的な意味合いで見てたから、そんなビクビクしながらの風呂になったことが結構あった。
思い出して怖くなることも結構しばしば……今まさにその状態な訳だけど。

広い風呂に一人きり、幾ら明るくても広い空間に一人っきりというものは不安になるものだ。
無音の中で時折響く水の音、水は出ていない口を開いた獅子の像。
落ちつかない、とっても落ち着かない。
あ～ちょっとぐらいなら召喚してもいいかな？！
俺が入ってるって知ってるなら誰も入ってこないだろうし……。

俺は生前こんな広い風呂に一人で入った経験などない。
ドリュウズ家では、使用人が背中を流すために最低でも一人いる。
恥しいが母さん曰くまだ子供なんだから甘えときなさいだそうだ。
……俺一人でオーク討伐とかやってたんだけどなぁ。
まぁ助かってたって言えなくもないんだが。

「（でもバレたら困る……でも怖い……困る怖い困る怖い困る怖い怖い怖い怖いコワイコワイKO・WA・I！）限界だ！呼ぶね！来いポッチャマ！！」
「ポチャ！」

なんか凄い召喚速度速かった気がするが、火事場のクソ力的な何かだろう。
それにしてもやっぱり自分以外の人？がいると怖さは消えるな。
ポッチャマは広い風呂の中で泳ぎまわっている。
訓練と水の精霊のおかげで疲れた精神は、ほんのり癒された。
まぁ次の瞬間それも儚く消えたわけだが……。

「えっと……なんですかそれ？」
「は？」

何故か目の前にはモンモンがいた。

「……いつから見てたのかな？」
「なんかブルブル震えながら叫んだ辺りから……」

俺オワタ　＼（＾ｏ＾）／

「（いやまだ大丈夫だ！カトレアさんの時みたいに黙ってもらえるように頼もう）あのねモンモ「娘よ！中にはレッドが！……」ン……」

サヨウナラ皆様、俺は今日川を渡ります。
予想外に早く会いそうだね管理者……。
俺は呪文を唱えているマルギッテさんを見た後、顎を水弾で撃たれ気を失った。

ＢＡＤ　ＥＮＤ……

まぁそんなこともなく、目は覚めたわけだが目の前には顔を赤く染めたモンモンと、目がトンデモないことになっているマルギッテさん、そしてソファーで飛び跳ねるポッチャマがいた。
うん……夢かな？
むしろ夢であってほしい。
確かに最近召喚の秘匿が緩かった気がするが、このタイミングでばれるか……しかも両親じゃなくこの人に。
この人の行動を予想できない。
俺の能力を知ったら王宮に報告する？それともアカデミー？
いや母さんの親友らしいから、それは無いと思いたい！

「さぁ状況整理は出来ましたか？」
「何のことでしょうか？」
「この状況で惚けるか……貴様は確かに一人で風呂に向かったはずだ。
それは使用人が証明している。
ならこの……なんだ？
……生き物はなぜあの場にいた！」
「（どうする……どうすればいい。）それは……」
「お母様、レッドさんはこのポッチャマっていう生き物を召喚したのですわ」
「……普通にバラしましたねモンモランシ嬢」
「え？隠していたんですか？」

えぇ隠していたんです……サモンサーヴァントでもなく生物を呼びだす魔法は存在していないはず。
なら召喚っていう時点でかなり怪しまれるだろう。
実際マルギッテさんの眼がさっきの比じゃない。

殺気に近いものを感じる。
これは喋らないと不味いか？
いや！この際母さんと父さんを呼んでもらおう。
何時か話さなければならなかったことだ……転生のことも話そう。
それで勘当されたら……旅にでも出よう。
俺は覚悟を決め、マルギッテさんの方を見た。

「父さんと母さんを呼んでください」
「何故だ」
「この事は父さんと母さんも知らないから……話すならあの二人に話してからじゃないと話せません」
「……わかった」

マルギッテさんは近くにいる使用人を呼び、耳打ちした。
すると使用人は走って部屋を出て行った。
この状況についてこれていないモンモランシ嬢は、俺とマルギッテさんを交互に見ながら不思議そうにしていた。
問題のポッチャマは……爆睡していた。

第２９話　決意（後書き）

感想でも少なくはありますが、ポケモンを隠し続けるのは無理だろうとのコメントがあったので、この際一気にバラしちまえ！という作者の突発性暴走症候群が発動しました。
初め森でポケモン召喚しているところに母さんが来てバレるというのを考えていたのですが、こっちの方が面白そうだから書いちゃったw
これでカトレアの優位性が出会った時期の早さのみに成りました。
この事を彼女が知った場合どんな行動に出るのか……それは俺も知らん！！
まぁ軽くは考えていますが、あくまで構想段階ですので。

あぁあと無理矢理感を感じたかもしれませんが、精神的肉体的共に疲労し、それに不安や僅かな恐怖をトッピングした結果この安易な行動に出てしまったわけです。
そういった経緯があって、レッド君はプチパニックになったわけです。

第３０話　親愛（前書き）

マルギッテの性格緩和ナウ

第３０話　親愛

あれから夜も更け、モンモランシ嬢は眠ってしまった。
俺とマルギッテさんは一言も話さず、一人と一匹の寝息だけが聞こえている。

「……なぜ親に言っていないんだ？」

突然の質問に驚きはしたが、確かに気になるところかもしれない。
この世界にいないポケモンを召喚する技能。
普通の子供だったら、自慢するか不安になって相談するものだろう。
だが俺は違う。
この先起こることを知っていて、しかもこの能力は管理者に与えられたものだから驚きもない。
転生ということを話さなければ理解してもらうのは難しいだろう。

「その理由も両親が来てから話します」
「そうか」

また無言の時間が続く。
正直無理矢理聞いてくることがないのは予想外だ。
てっきり「説明しなさい」と杖を突き付けられながら、聞かれると思っていたんだが……。

「どうして強く聞いてこないか不思議か？」
「はい」
「一応私も貴様を信用しているからな、悪い理由ではあるまい」

この言葉は俺には予想できなかった。
俺信用されるようなことしたか？
もしかして……あのモンモンに説教した時か？
なら若干勘違いなのだが、信用してくれるのは素直に嬉しい。
それからは、少し空気が柔らかくなった気がした。

しばらくして、外が少し騒がしくなってきた。
どうやら父さんと母さんが着いたようだ。

「レッド、話があるということだが？」
「なにかあったの？」
「さぁ話してもらおうか」

俺は覚悟を決めて、話を始めた。
前世のこと、ポケモン召喚のこと、ポケモン自体のこと……全員質

問することもなく、じっと聞いていてくれた。
そして今日の雨が自分の所為であること、バレた理由なども話した。
最後に自分が話さなかった理由も……。

話さなかったのはレベルの概念、装備、そしてゼロの使い魔という物語。
レベルの概念は説明しても良かったのだけど、それを説明し出すとステータスとか相性とかも話さなければならなくなってくる。
それを話したら、万が一敵にこの情報がバレた時に困るかもしれない。
故に見た目だけでは強さが分かりにくいということは説明しなかった。
装備は・・・・・・いざと言うときの切り札ゆえに。

ゼロの使い魔について説明しなかったのは、流石にこの世界の未来が物語として存在していたなんて言えるわけがないし、俺がいる時点で未来がどう動くか分からない。
そんな不確定な情報を渡すことで混乱してほしくないからだ。

話が終わってしばらく無言の時間が続く。
最初の一言はなんだ？
流石にいきなり罵詈雑言が飛んでくることはないだろうけど、もし私たちの子供を返してとか言われたらどうしよう……怖いな。

俺は震えそうになる体を押さえながら、言葉を待つ。
すると父さんが立ちあがって、俺に向かって歩いてきた。
次の瞬間父さんは拳を振りかぶって、俺の頬を全力で打ち抜いた。
椅子を倒し、吹き飛ぶ俺。
正直なにが起こったか分からなかった。
唯頬の痛みだけが父さんに殴られたことを表していた。

「お前にとって、俺達はそんなに信用できなかったのか！！」
「え？」
「異能？　強すぎる力？　そんなものは二の次だ！
お前が悩んでいたのに気付いていないとでも思ったのか？
親を嘗めるな！！」
「でも俺は……」
「お前は母さんの腹から生まれた時点で俺の、俺達の大事な息子だ！
排斥されそうになったら、俺達が命を掛けてでも守る。
例えロマリアに異端認定され、裁判に掛けられそうになろうとも、
お前のことは俺達が守る」
「父さん……」
「そうよ？　貴方は私たちの大切な息子なのだから……」
「母さん……」
「私としても、貴様のような人材を宗教なんぞのために犠牲にする
のは好かん」
「マルギッテさん……」
「俺達はお前の味方だ。
だから信じろ、頼ってくれ。
俺達はお前の親なのだから……」

確かに俺は、父さんと母さんに対して一線を引いていたのかもしれない。
一人称も変えて、自分が転生者であることがバレない様に、異能に関して感づかれない様に……。
それなのに父さんと母さんはずっと俺に愛情を注いでくれていた。

俺は申し訳なくて、嬉しくて、安心して涙が止まらない。
そんな俺を父さんは、優しく頭を撫でた。
母さんとマルギッテさんはどうやらそんな俺を見て、苦笑しているようだ。
そりゃ中身３０超えている男が泣きじゃくりながら、頭撫でられてるんだから苦笑もするだろう。

泣き止んだ俺は恥しくなって、膝を抱えたりしたが結局また頭を撫でられるので、もう諦めることにした。
その後森で見かけたといわれていた風竜も俺が出したのかと聞かれたり、どうやって雨を降らせたのか聞かれたり、その理由となったカイオーガの説明したら引かれたりした。
っていうかマルギッテさんが水の精霊と交渉したと言った時に、俺を獲物を見るような目で見るようになっていたのが怖かった。

流石に夜も遅いので、母さんがマルギッテさんに帰ることを伝えると、泊っていけとの一言。
結局ドリュウズ一家は、モンモランシ邸に一泊することに。
久しぶりに両親と一緒にベットに入り、昔話をして、ゆっくり襲ってくる睡魔に身を任せていく。
俺は眠る直前管理者に「良かったな」と言われた気がした。

翌日モンモランシ家に別れを告げ、朝一でドリュウズ領へと向かった。
一応モンモンには、ポケモンについて話さないように口止めして、マルギッテさんにも念を入れて頼み込んだ。
まぁ変わりに水の精霊に話をつけてくれと言われたが、元からモンモランシ家は契約していた訳だから再契約するのはそれほど苦ではないはずだ。
故に一応話してみると告げると、嬉しそうに隣にいたモンモンの頭を撫でていた。

帰り道に母さんが昨日いたポッチャマを見たがったので、馬車の中で召喚することにした。

「来いポッチャマ！」

いつもの光が出てきてそこからポッチャマが飛び出した。
そしてそのまま顔面から馬車に着地した。

「ポチャ！？」
「……大丈夫か？」
「……ぽちゃ」

母さんは顔面着地を見て心配そうにしていたが、顔をさすっているポッチャマを見ると笑顔で近寄ってきた。
ポッチャマは見知らぬ人が自分に近づいて来るのを怖がって、俺の後ろに隠れてしまった。
俺は苦笑して、ポッチャマに「あの人が俺の母さんなんだ。いい人だから大丈夫だぞ？」とフォローした。
……まぁ母さんが若干悲しそうな顔をしたのがフォローの理由なわけだが。
俺の言葉を聞き、ポッチャマは恐る恐る母さんに近づいていった。
母さんは笑顔のまま、ポッチャマの両脇から手を入れ、膝の上に抱きかかえた。
ポッチャマは最初驚いて暴れそうになったが、俺がジッと見ていると落ち着いてくれた。
母さんは膝の上に乗せたポッチャマにご満悦だ。
なんか蕩けてる……。
あ、ポッチャマが苦しがってる。

「母さん！締めすぎ締めすぎ！！」

「可愛いわぁ～この子。」
「聞いてねぇ？！　母さん、ポッチャマ苦しがってるから！！」
「ハッ！！！」

母さんが腕を緩めた瞬間、ポッチャマは膝の上から下りて、再び俺の後ろに隠れてしまった。
流石にこれは警戒解けないかもなぁと思いながら、ポッチャマの頭を撫でていた。
……母さん恨めしそうに俺を見ないでください。
母さんの自業自得ですよ？
俺はそれから家に帰るまで、母さんの恨めしそうな視線に晒され続けた。

第３０話　親愛（後書き）

さぁバレた！！
そして結構難産だった！！
書くのに４時間くらい掛かったぞ？
文章量は大して変わらないのに、いつもの倍くらい掛かるとか……
なんにせよバレた事だし、家の中でも召喚が出来るようになったな！
これでポケモンの出番が増える……はず。

第３１話　強化された訓練（前書き）

今日の更新は基本短めな話ばっかりだなぁ……
しかも時間がっつり飛んだｗｗ
いざとなれば外伝で空白の３年を……

第３１話　強化された訓練

両親にポケモンの存在を話してから、俺は基本家の中に３匹ポケモンを放している。
俺、父さん、母さんのそばに一匹づつ、護衛兼手伝い兼癒しとして。
俺の近くにいるのは基本ニューラ、時々コジョンド。
母さんの近くにいるのはポッチャマ（あれから餌付けによる懐き度稼ぎをして、どうにか仲良くなった模様。）。
父さんの近くにはグラエナ（父さん犬が好きらしいので……）。
最初ヘルガーがいいと思ったんだけど、見た目が悪丸出しだから遠慮しました。
それぞれ仲良くやっているようだ。
また帰ってきてから、両親にはあのときの暴露で話さなかったことを少しだけ話した。
ポケモンの対人戦における強さ、技の存在・・・・・そして召還できる種類の多さ。
両親はまだ話してないことがあったのか、と少し怒っていましたがあそこで話さなかったのはいい選択だと褒めてもくれました。
・・・・・俺精神年齢中年入りかけなんだけどなぁ。

訓練にも変化が出た。
いつものゴーレムｖｓ俺以外に、父さんのゴーレム３体と俺＆ニューラのタッグバトルが追加された。
どうやら味方がいた場合の訓練らしい。
ニューラ単体でやろうと思えばゴーレム３体倒せるんだが、あくまでコンビネーションの訓練なのでニューラは，こおりのつぶて，し

か使用禁止、尚且つ一発当たったらその場で戦闘不可というルールなため、互いが互いを守らなければならない。
故に結構大変なんだよ。
最近やっと1対1で完璧に勝てるようになったのに、このルールでニューラがいるとはいえ、3体とか……。
お蔭で生傷が絶えない。

魔法の訓練は、ポケモンを装備した状態で行うことが義務付けられた。
大きな力を使う際の手加減をする訓練らしい。
特攻の高いポケモンを装備すると魔法の威力が上がるし、そのポケモンの技も使える。
人を簡単に殺せてしまう技を……。
俺は後3年ちょっとで学園に行かなければならない。
ならそれまでに手加減を覚えなければ、いざという時大変なことになるかもしれない。
特に技は危ないものが多い。
威力100を超える技は全て危ない。
いや、属性によっては50でも危ない。
まぁひっかくで木が半分断ち切れる位だから、分かると思うけど……。
だから手加減の訓練は必須ともいえる。

「もっと小さくしなさい！　このままなら人なんてぺっちゃんこよ？」
「わかってる！」

今は岩なだれを手加減できるかどうか試しているところだ。
とりあえず分かったのは、岩や氷などを出現させる技は大きさを変えることは出来なかったが、スピードを緩めることは出来た。
炎や水は効果範囲を減らすことが出来るが、そのためには結構集中力を使わないといけない。
他の特殊も手加減は集中すれば出来なくはない程度。
要するに現段階では戦闘中の手加減は不可能。

魔法も試してみたのだが、魔法は流石に自分の精神力を使って発動するためか、割と簡単に強弱を変えることが出来る。
まぁロックスピア、アイスニードルの本数を変えたりしていたから慣れていたっていうのもあると思う。
でもやっぱり装備で特攻がプラスされると、本数や発動スピードが格段に良くなる。
ドットのスペルがライン以上の威力に、ラインのスペルがトライアングルクラスになるのはある意味当然だったのかもしれない。
装備したポケモンの属性によっても大分変わる。
使う魔法の属性に合ったポケモンを装備することで、威力はさらに上がる。

「もっと小さく！！」
「わかってるって！」

こうして俺の手加減訓練は続いていく。

他にもうひとつ大きく変わったことがある。
今までも勉強というものをしていたのだけど、その内容は歴史や宗教的な教義、そして魔法について等様々な内容だったが、ここに領土経営や税の設定なども学ぶことになったのだ。
理由を聞いてみると「中身は大人なのだろう？なら理解できるはずだ。」と言いながら不敵に笑いながら俺に言いながら、領内の出費が書かれた紙の束が渡された。

「えっと……こんなにあるの？」
「これでも少ないくらいだ」

それから俺は渡された紙を見ながら、父さんに出費の説明を受けて、前年度との比較や何で使われたのか分からないお金について聞いていく形で講義が進む。
結局その日その講義が終わるのは夕食ギリギリの時間だった。

そうして3年が経過した。
後半年以内に俺は１４歳になる。
なんとか父さんのゴーレムは2体まで魔法なしで倒せるようになった。
マインゴーシュで某南瓜鋏の少尉のようにシャオンシャオン鳴らせるようになった時は本当に感動した。
今まではギリとか、ガキンとかばっかりだったからね。
変則マッチもそれなりに数をこなした。
動けない仲間がいる場合、１対１０以上の場合の逃げ方、普通に2対2……ｅｔｃｅｔｃ
今ならどんな状況でもそれなりに対応できる気がする。

魔法の方も水はラインのままだが、土はトライアングルへと上がった。
おそらく装備することで強い力に慣れたのが上がった理由だと思う。
水はラインのままと言いはしたが、圧縮は使えるようになってきたので、威力は結構ある。
まぁ学院に入るときは土のラインということにするつもりなので、トライアングルスペルは咄嗟に使うことの無い様にあまり使っていない。
コルベール先生とかにはバレるかもしれないけど、理由を言えば大丈夫のはず……あの人は戦うことを嫌っている人だしね。

訓練の成果はこんな感じかな？

次にこの三年に起こったことだけど、これまでとさほど変わりは無い。
ルイズ嬢へのプレゼントが変わったくらいかな？
ただ単に送る花を思い浮かばなくなってきたからなんだけど……普通に装飾品を贈ることにした。
ルイズ嬢もそろそろそういったものに興味を持ち始めるだろうということで、ブローチや髪留めを贈った。
今までより喜びは少なかったが、花の方が良かったのだろうか？
今年は花を模ったブローチにしよう。
……年々公爵夫人が俺に向ける視線がパワーアップしているのは何か理由があるんだろうか？
今度カトレアさんに聞いてみよう。

「お前も後少しで１４歳になり、学院に入ることになる。
その前に依頼を一つ受けてくれないか？」
「別にいいけど、何をすればいいの？」

父さんは横にいるグラエナの頭を撫でながら、俺に依頼の詳細を話し始めた。
どうやらグラモン家の二男を護衛する任務らしい。
なんでもグラモン領にある山に最近ワイバーンが住み着いたらしく、それを退治もしくは捕獲するために次男坊が指揮を執るので、それを手伝って欲しいとグラモン伯爵直々の頼みなんだとか。
俺としても実戦不足だと思っていたため、今回の依頼はいい経験になると思い進んで引き受けた。
まぁ会って後悔するわけだが……。

この時はそんなことは露とも知らず、依頼内容について詳しく聞いていた。
見つかっているワイバーンは1匹、ただし他にもいる可能性は否定できない。
大きさは3メートルほどで、鞍が付いていることから元は飼われていたようだ。
捕獲する場合は、ある程度弱らせなければ眠りの鐘が効かない恐れがあるとのこと。
たぶん捕獲はしないだろうな……捕獲する方が被害でかくなりそうだし。
俺はそんなことを考えながら、ワイバーン対策を頭の中で組み立てていった。

第３１話　強化された訓練（後書き）

あれ？今回で一気に学園まで行く予定だったのに、なんでこんなことに？

第３２話　戦友（前書き）

自分の文才の無さに若干心が折れ掛けたわけですが……。
俺の作品におけるマルギッテさんが酷過ぎるというコメを戴き、それを考えた上で少しだけ修正を入れ、優しくしました。
もしこれからもここ可笑しくね？とか思ったら直せる範囲で直していきたいと思いますのでアドバイスなど戴けると、とてもありがたいです。

第３２話　戦友

「俺はジェイク・ド・グラモンだ！
今回は俺をしっかり守ってくれよ坊や？」
「はい……（えっと微妙に喧嘩売られてる？）」

なんかこの人めんどくさいなぁと思いつつ、俺はジェイクの私兵に混ざって行進していた。

最初この人達に合流した時、こんな子供が？という目を凄い来たわけだが、俺の父さんのことを知っている人がいたらしく、その人が他の人に耳打ちして行くにつれて「あぁあの人の子供か」という納得の視線に変わっていった。
え？この知名度何？
兵たちがザワザワしてきたので、ジェイクさんが登場。
俺を発見して今に至るわけだ。

「念のため聞いておきますが、今回討伐か捕獲のどちらを？（まぁ普通なら討伐何だけどこの人は何となく……）」
「当然じゃないか！捕獲に決まってるだろう！！」
「……理由をお聞きしても？」
「ワイバーンなど恐るるに足らん！討伐なんて簡単すぎる！ならば選択は一つ……捕獲しかあるまい！」

この人危ういな、慢心が過ぎる。

確かに１０人以上の数の私兵を連れた状態なら、ワイバーン一頭を討伐するのは容易いかも知れない……だが捕獲は話が別だ。
殺さないように手加減しなければならないということは、通常以上に気を使わなければならない。
そして手負いの獣程厄介なものは、そういない。
それに腐っても竜の一種だ。
一度噛みつかれてしまったら、その部分は容易く噛み千切られてしまう。

俺は周囲の兵達を見回した。
メイジは５人か……少なくは無いけどどうだろう。
俺の視線に気づいた周りの兵達は苦笑していたが、苦笑の中に覚悟があった。
この人達にもプライドがあるのだろう。
自分たちがジェイクさんに信用されているなら、命を掛けてでもそれに応えて見せようという気概。
この人達が納得しているなら、俺としては言うことは無いだが、俺もそこに組み込まれていると考えると一言言いたくなった。

「簡単でも安全を取った方がいいのでは？」
「なんだ怖いのか？　でもそうだな、子供には厳しい内容かもしれないな！　ハッハッハッハッハ」
「（いや歳３つしか変わんないから！）」
「父さんが連れて行けというくらいだから、どれだけ凄いメイジかと思えば唯の怖がりの子供じゃないか」
「はぁ……」

ヤバい位やる気が失せる。
正直周りの兵たちが俺の肩を叩いて、苦笑いしてなかったら任務ほっぽり出して帰りたいぐらいだよ。
その後俺とジェイクは山に入るまで声を交わすことは無かった。

「そろそろ報告にあった巣穴が見えてくるはずなんだが……あった！お前達警戒しながら散開、巣穴を取り囲むように整列しろ。
レッド君、君は俺の隣にいたまえ」
「え？何でですか？」
「君は俺の隣で確りと俺の兵達と、俺の魔法がワイバーンを捕える様を見ていなさい。
危ないからな！」
「（悪い人ではないみたいだな）そうさせてもらいます。」

一応援護は、しないとな。
あの人たちに死んでほしくないし……。

「それじゃあ3つ数えたら一斉に魔法を放ち、その後出ていたワイバーンに向かって弓を一斉掃射、そして弱ったところで、眠りの鐘を使用し任務終了だ。
じゃあ行くぞ！3！2！1！発射！！」

ファイアーボール３つとエアハンマーが２つ洞窟の中へと飛んで行った。
すると轟音と共に、洞窟内が一瞬明るくなった。
中に一瞬だけ黒い影が見えた。

「みんな気を抜くなよ？」

ジェイクがここからが本番だという感じで、杖を構え出した。
父さんから聞いた話だと彼は土のトライアングルメイジらしい。
俺は先輩と言っても過言ではない人が、どんな魔法を使うのか一時も目を離さずに自分の糧にしようとしてた。

ズシンズシンという音が洞窟から聞こえてきて、徐々に地響きが大きくなってくる。
弓を引き絞り、魔法の呪文を唱え始め、剣を抜く。
こちらはもう準備万端だ。
出てきた瞬間に戦闘は始まる……。

暗い洞窟の中からワイバーンの頭が見えた瞬間、一斉に弓と魔法が

向かって行った。
ジェイクも「アースハンド」と唱えてワイバーンが逃げられないようにした。
俺は小さい声で「ロックスピア」を唱えて足の甲を縫いとめた。
動けなくなったワイバーンは弓の一斉掃射と魔法の直撃を受け、断末魔の咆哮を上げてその場に倒れた。

「あれ？捕獲じゃなかったんですか？」
「まぁ、あれくらいじゃワイバーンは死なないよ。
飛竜の生命力は半端じゃないからね」
「そうなんですか……。」

ジェイクを甘く見ていたようだ。
慢心ではなく、事実だったのか……。
兵たちが眠りの鐘を使ってワイバーンを眠らせているときジェイクが話しかけてきた。

「そういえば、援護感謝する。
先ほどは唯の子供扱いして悪かった」

と言いながら頭を下げた。
俺の援護に気付いたんだ・・・・・・それに謝ってくるとは、正直予想外だった。

「頭を上げてください！

俺が子供なのはその通りですし、周囲の視線も気になります！」
「そうだったな、すまんすまん」
「気付いてたんですね、俺の魔法に」
「生憎耳は良い方でね」

彼はそういうと、指で自分の耳を指さしながら俺にウィンクをした。
様にはなっているが、俺にするなと言いたい。

「アースハンドだけでも事足りたと思いますけど……」
「それでもさ、援護してくれたのは事実だろ？」

普通にいい人だなこの人。
俺はグラモン家が基本根がいい人なんだと感じた。

その後帰り道は土魔法の活用法や、錬金のコツについて延々と話し続け、グラモン邸に着く頃には友達のようになっていた。
この世界初めての男友達。

「もし困ったことがあったら遠慮なく俺に言いに来ればいい。
相談くらいには乗ろう」
「それはありがたいですね。
ジェイクさんも困ったことがあったら言ってくださいよ？」
「ハハハハ、そうだね。
何かあったら頼らせてもらうよ！」
「それじゃあ僕は行きますね……」

「気をつけて帰るといい」

そうして俺の初の護衛依頼は特に何もなく終わった。
俺に報酬は無かったけど、掛替えの無いものを手に入れた気がする。

～ジェイク　ｓｉｄｅ～

レッド君……予想以上だったな。
俺のアースハンドの隙間を縫うように弧を描いたロックスピアを発動するとは、凄い制御能力だ。
確かそろそろ学園に入学するとか言っていたな。
あの子がいるなら楽しい学園生活だったろうなぁ……。
そうだ！　今度会う時に弟達を紹介しよう！
きっと仲良くなれる筈だ。

「ジェイク、依頼御苦労。
疲れただろう、今日は早く休みなさい。」
「いいえ父さん、それよりも俺に新しい友人ができました。」
「レッド君か？」
「はい。」
「あの子は早熟故に、悩みを多く抱えているかもしれない。
偶に相談に乗ってあげなさい」
「言われなくともそのつもりですよ。
なんてったって戦友なんですから！」

短い間でも一緒に戦った友。
そいつが困ってたら助けになるのは当然だ。
いつでも頼ってくれよレッド君！
……金銭面は無理だけどな！！

～side out～

第３２話　戦友（後書き）

ふぅ……もっと傲慢っぽい人にしようかと思ったけど、自重した。
ギーシュの兄っぽさが出てれば嬉しいな。

第３３話　入学（前書き）

やっと学院編に入れた

第３３話　入学

ワイバーン討伐依頼からしばらく経ってついに、学院入学の日へと相成った。
原作開始の地、トリステイン魔法学院。
まだここに原作におけるメインキャラはいないが、序盤の舞台となるこの学院に俺が来ることになるとは、微妙に感慨深いな。
嬉しいかと言えば……微妙？
周りを見れば貴族の子息たちが沢山いる。
堂々としている子もいれば、そわそわしている子もいる。
そういった部分はどこの学校も変わらないと感じさせてくれる。
おっと、オスマン学院長が前に出てきた。

「諸君はこれから、この学院で今隣にいる者たちと共に学び、友好を育み、魔法についての知識や経験を積んでいくことだろう。
ここは君たち貴族の卵が、立派な貴族となるために互いに切磋琢磨し、時に泣き時に笑う生活する場となる。
悩め若人よ！そして困った時は我々教師に相談するがいい！
私たちは君たちよりも長く生きて、経験もある。
君たちの成長のために、どんな相談にも乗ろう！……濃カッコよくね？」

おい！周りの生徒がポカンとしてるぞ？！
流石オスマン、期待を裏切らないな。
まぁ覗きとセクハラはどうかと思うけどな。
あぁロングビルはまだいないか……ま、俺が直接関わりを持つことは無いだろう。

確かオスマンの秘書になるはずだしな。

その後教師の簡単な紹介（とりあえずコルベール先生は凄い眩しかった）があり、在校生の歓迎の言葉を受け、寮へ荷物を運ぶことになった。
俺の荷物はあまり多くない。
必要最低限の服と家具、生活用品と戦闘用の装備だけ持ってきた。
まぁこの学院で使うのは杖だけなんだろうけど、一応指輪型も着けておく予定だ。
剣は目立つから、インテリアとして部屋に置くつもりだ。
鞘に入れた状態ならギリギリインテリアとして見れるだろう。
メイドさんに手伝ってもらって、部屋の整理を終えた。

今日は授業もなく、この後の予定もないから適当に室内でもできる空手の型でも練習するか……。
俺がそんな予定を立てていると、部屋のドアがノックされた。

「誰ですか？」
「お隣さんだよ！」

俺はドアを開け、お隣さんとやらの顔を拝見した。
……やっぱり知らない顔だな。

「で、何か用かい？」
「いやぁ、まだ知り合いもいないことだし、どうせならお隣さんと

仲良くなろうと思ってな」

まぁ別に問題ないだろ。

「僕の名前は、レッド・ド・ドリュウズ。」
「俺の名前は、テリー・ド・ボガード！
弟も来年入学するんで、そっちもよろしくな！」

ちょっと待て……どっかで聞いたことある名前に似てるんだが？！
確かに金髪ポニテで手袋してるから見えなくはないけど……。

「じゃあテリー君」
「君はいらねぇ、テリーでいい。代わりに俺もレッドって呼ぶけどいいか？」
「あぁうん」
「ＯＫ、じゃあこれからよろしくな！
今から学園内探索するんだけど、レッドも一緒に行かないか？」

まぁ別に暇してたし、いっか。

「じゃあいっしょに行こうかな？」
「よし、じゃあ行こうぜ！」

テリーは俺の腕を掴んで、走り出した。
元気だなぁと思いながら、転ばないように俺も足を動かした。

あの後テリーに連れられて、いろんなところを回った。
その間に色々と分かったことがある。
先ずテリーのこと。
弟の名前はアンディ（骨法でも使うのか？）。
両親は共に火のメイジ。
テリー自身も火のドットメイジらしい。
そして身体を動かすのが好きで、父親と一緒に軍の訓練とかをやっていたらしい（微妙に俺に似てるな）。

そして学院の内部構造。
一回勢いで学院長室に入ろうとしたテリーを止めるのは大変だった。
コイツやんちゃすぎる！！
歳は俺と同い年らしいが、落ち着きが足りない。
目を離すと何処かに行ってしまいそうだ。

会話の中でテリーが軍の訓練を受けているという話を聞き、俺も格闘技の話をした。
彼はとても興味深そうに、目を輝かせて聞いていた。

「俺にもそれ使えるか？」
「まぁ練習すれば出来ると思うけど……」
「よっしゃ！！　じゃあ明日の朝中庭で教えてくれ！」
「朝かぁ……まぁ大丈夫かな？
でも中庭は目立つから森に近いところにしよう」
「ＯＫ！」

なんとなくテリー＝格闘技のイメージがあったから、俺は彼にＫＯＦでテリー・ボガードが使っていたような技を使えるようにすることを目標にテリーを鍛えることにした。
マーシャルアーツは日本で言うフルコン空手とされているが、アメリカ軍隊格闘術という意味もある。
フルコン空手なら多少は知っているけど、軍用格闘術なんてほとんど知らない。
故にとりあえず空手の基礎を教えてから、魔法と格闘技の併用、必殺技の再現をしていこう。
ここにいる間はなかなかポケモンとの触れ合いが出来ないから、ちょうどいい時間の使い方になりそうだ。
強くなれば組み手の相手にも困らないしね！
軍の訓練しているなら、最初から型の訓練からでいいか。
明日が楽しみだな！！

学院探検を粗方終えて、自分の部屋へと戻ってきた。
普通に俺の部屋に入ってきたテリーにため息をつきながら、俺の剣を見ているテリーに話しかけた。

「剣が気になるかい？」
「あぁ俺もちょっとは使えるけど、短剣は使ったことがなかったからな」
「そうなんだ」
「それにしても使いにくそうな剣だな……こんなに幅が狭いと切りにくくないか？」
「いいんだよそれで」
「切りにくくていい剣？」
「うん、それは受け流す剣だから」
「受け流す？」

その後マインゴーシュの役割を説明すると、またもや目を輝かせて近寄ってきた。

「面白いなこの剣！！　それにしてもお前珍しいことといっぱい知ってるな！」
「そうでもないよ、でもあんまり僕に教えてもらったって言わないでね？」
「何でだ？」
「剣を使うだけでも野蛮扱いされそうなのに、拳を使うなんて余計騒がれそうだし……僕は学院であまり目立ちたくないんだ」
「目立ちたくない？」

「そう、面倒事に巻き込まれる可能性が増えるから……僕は面倒くさがりだからね」
「珍しいな……普通目立ちたがるもんなのに」
「（それは普通なんだろうか？）」
「なんにせよ分かった。
お前に色々教わったことは内緒にしておく」
「もしバラしたら、格闘技の訓練もなしだからね？」
「それは困る！！　絶対話さないぜ！！」

その後もテリーと夜まで話し続けた。
明日は忙しくなりそうだ。

第３３話　入学（後書き）

俺はＫＯＦでは京よりテリーを使う人です。
餓狼伝説での持ちキャラはジョーだったけどｗｗ
割と簡単にテリーに格闘技のことをバラしましたが、指輪型杖や自分が土のトライアングル水のラインであることは話していません。
マインゴーシュと格闘技はバレても大して問題ないと思って……大きな理由は主人公がリアルテリーのパワーゲイザーが見たかったという安易な理由です。

第３４話　教師からの洗礼（前書き）

明日から更新速度が落ちるかと思います。
それでも最低１日１話は書いていきたいです。

第３４話　教師からの洗礼

入学してからそれなりに時間が経ち、学院での生活にも慣れてきた。
テリーとの格闘訓練もそれなりに進み、やっと空手の型は流れるように出せる位になった。
流石テリー……俺より格闘技の才能はあったようだ。
最近は魔法との併用を試し始めている。
俺はアドバイスをする形で、必殺技の再現をさせようと画策中。

テリーはやっぱり貴族っぽくないらしく、あまり周りに人が来ない。
ボガード家はそんなにお金持ちというわけでもないみたいだから、積極的に繋がりを持ちに来ない。
だからか付き合いをしている貴族は少ないようだ。
見た目はカッコいいから女子生徒からは隠れた人気があるみたいだけど……。
代わりにメイドや厨房の人たちには人気がある。
まぁ偉ぶることもしないし、重いものを持っている人がいたら荷物を持ってあげたりしているみたいだから人気も出るだろう。
厨房の人たちはいつも人並み以上に食べ、美味い美味い言ってるし、残さず食べるのが印象を良くしている。

そんなテリーと良く一緒にいる俺も、仲のいい友達はテリーぐらいだ。
俺の場合は積極的に友達を作ろうとしているわけではないし、平民蔑視がデフォルトの貴族とはあまり深い付き合いをしたくない。
まぁだからと言って表立ってメイドの荷物を持ったり、厨房に乱入してご飯の感想を言いに行くなんてテリーみたいなことは出来ない。

故に俺の評価は普通。
あぁ素晴らしい！！　なんて素晴らしいんだ普通！！

「今日の練習は御終い。」
「えぇ？！　もうかよ！！
あとちょっとで火柱が出せそうなんだぜ？」

なんかいつの間にかテリーがラインクラスにレベルアップしてたんだが、そんなことは置いといて、俺は朝の訓練の終わりを告げた。

「いや、そろそろ準備しないと授業に遅刻しそうだ。」
「もうそんな時間かぁ……授業終わった後もやろうぜ！！」
「それはちょっとなぁ……誰か来るかもしれないし。」
「ちぇ！」

俺があまり目立ちたくないことを知っているテリーは、それ以上言ってはこなかった。
今日の授業が初めての実習だからっていうのもあるかな？
まぁ、ギトー先生の事は嫌いみたいだけど……。
俺も嫌いだけどね！！

それから俺とテリーは一旦部屋に帰り、授業の準備をして教室へと向かって行った。

「今年の生徒は不作だな。
トライアングルが一人もいないなんて、しかもラインの人数も多くない。
そして何より、風のラインがいない！！」
「（いいから早く授業始めろ、この風マニアめ！）」
「風は素晴らしい！　まさに最強の系統だ！」

長い長い風最強説を聞かされて、生徒は皆うんざりし始めていたが、テリーが言い放った一言で一気静かになった。

「そんなの状況次第で変わるんじゃねぇのか？」

ギトー先生は、ピタっと話を止めてテリーのいる方へと首を向けた。

「君は確かテリー君と言ったね？」
「あぁそうだよ。」
「状況次第で変わると言っていたように聞こえたけど……どういう意味かな？」
「その通りの意味なんだが……当たり前のことだろ？」
「じゃあ風こそ最強であることを証明しよう！！
テリー君私に魔法を放ってきたまえ！」
「は？　何言ってんだ？」
「だから君の放った魔法を、私の魔法でかき消してあげようと言っているのだよ！」
「（いや可笑しいから！　あんたスクウェアクラスじゃなかったか？だったら撃ち消せて当り前だろうが！）」

そんな原作っぽい展開が突如発生したわけだが、テリーはとても楽しそうに笑った。

「ＯＫ！じゃあゲドー先生……行くぜ！」
「来なさい……後私はギトーだ！！」

テリーは杖を出して呪文を唱えた。

「ファイアーボール！」
「エアハンマー」

テリーの魔法は少し抗ったものの、ギトーのエアハンマーを相殺するまでには至らなかった。
まるで原作の再現のように、ギトーの魔法はテリー目掛けて飛んでいく。
ギトーはテリーが無残に吹き飛ばされることを想像しているのか暗い笑みを浮かべている。
原作と違って、この場にデルフリンガーはない。
故にテリーに向かう風を止める手段は無い。
普通だったら……。

俺は急いでサーナイトを装備して、一瞬だけサイコキネシスを使ってすぐに解除した。
周りの人には、テリーが体勢を崩して偶々横に転がったように見えたはずだ。
幸い俺の見た目が変わる前に装備を解除したために、今の現象と俺の関連性に気付いた人はいない。
テリーは少し不思議そうにしているが、気付いているわけではないようだ。

「チッ！　でもこれで分かったでしょう？
風こそが最強であると！！」
「……。」

テリーはギトー言っていることを微塵も聞いていないようだ。
さっきのサイコキネシスが気になっているようだ。
その悩んでいる姿がギトーには悔しがっているように見えたらしく、

満足そうに笑いながら去って行った。

「（え？授業しないのかよ……）」

その後周りの子供たちがザワザワしていたが、コルベール先生がやってきて教室に戻るように言った。
俺は未だに不思議そうにしていたテリーを連れて教室に向かった。

「あの時何かに引っ張られたような気がしたんだが……」
「何か？」
「目の前に風の塊が来た時に、俺の身体が横に引っ張られたんだ」
「気のせいじゃない？」
「そうだったんだろうか？」
「僕は特に何も見えなかったから、きっとそうじゃないかな」
「そうか……。」

ふぅ、ちょっとしたアクシデントはあったけど、テリーに怪我がなくて良かった。

第３４話　教師からの洗礼（後書き）

ギトーの駄目教師っぷりは公式でもこんな感じだった気がする。

第３５話　女神の再現（前書き）

学院編での本番は使い魔召喚からだと思ってる！！

テリーの周辺状況を若干変更。
このままではテリーが他の貴族から駄目な子扱いされてしまうとアドバイスがあったために、女子からの人気はあるし、最低限の付き合いはする。
という若干ではありますが上方修正かけました。

第３５話　女神の再現

俺使い魔召喚したら、ポケモンと戯れるんだ……。
そんな死亡フラグっぽいものを立てながら、俺は今馬車に乗っている。
夏休みに入って実家に帰ろうと思ったのだが、突如送られてきたジェイクからの手紙。
内容は弟のことを紹介したいから、夏休みにでも遊びに来てくれとのこと。

「実家に帰れるか？」

まぁそんな遠いところでもないし、大丈夫だろう。
俺は馬車に揺られながら、グラモン領に着々と近づいて行った。

「やぁ、久しぶり！　学院生活はどうだい？」
「慣れないことも多いし、大変な時もあるけど友達も出来たから充実してるかな？」

「そっか、それは良かった。
遠路遥々来てもらったところ悪いんだけど、早速弟たちと会ってくれないか？
君のことを話したら会ってみたいと言って聞かないんだよ」
「そんなに興味引くことなんかやった覚えないんだけど……」
「いや帰り道で君が話してくれた、水晶で作ったゴーレムを見てみたいって４番目の弟が興奮しているんだよ」

４番目……ギーシュか！？
原作でもゴーレムにワルキューレとか名前つけてたし、機能性より見た目重視してたもんなぁ。
因みに俺はルイズ嬢やカトレアさんに水晶を用いた像や、装飾品をプレゼントしていたためか、水晶の扱いが上手くなっている。
地中にある石英の純度を錬金する前に分かる程度には、慣れたわけで……。
それでゴーレムを作ることも可能になった。
まぁ硬度的にも確か硬度７とかだったはずだから、かなり硬めなんだよ？
でも問題は１体作るのに３０秒近く掛かる上に、３体までしか操れない。
これだったら普通のゴーレムを１０体作った方がまだ効率的だ。
故に戦闘時に使うことはほぼ無いだろう。

「今から呼んでくるからそれまでに、一体でいいから作っておいてくれないか？」
「まぁ別にいいですけど……見た面関して何か指定はありますか？」
「出来れば女性型にしてくれると嬉しい」
「（ジェイクもしっかりグラモン家の血をひいているみたいだな…

…）分かりました」

まぁ別に作るのは1体だから奮発しよう。
ギーシュ！これこそがワルキューレというものを見せてあげよう！！
俺は自重というものを何処かに一時的に捨て去り、前世でゲームに出ていたワルキューレを完全再現することに全てを掛ける！！
髪はロングストレートの金髪、胸部と腕に緑と金色の鎧、手に持つものはロングソードと緑と金色の盾、羽のついた赤と金の兜、目の色は青みがかっていて端正な顔立ち！
そう、サンドラとセットで出てくるあのワルキューレだ！
流石に金は錬金出来ないので純度の高くない黄水晶をあえて使い、せめて黄色に見えるように。
肌はミルキークォーツ、赤は水晶砂を使用。
剣は煙水晶で、髪の毛は純度の高い黄水晶。
髪の毛が風になびく様を見たかったが、それは水晶で再現するのは難しすぎる。
故にここら辺で妥協しなきゃならんか……。
問題は青い水晶がないことだけど……黒水晶でどうにかしよう。

「よしこれで完成だ！！」
「「……」」

我ながらいい出来だ！
ここに石英が多く埋まっていてよかった。
流石に人型は結構大きなものだから、多くないと作れないところだった。

「これは……予想以上な」
「う……美しい！」
「ん？　いつの間に来てたんですか？」
「あ、あぁ君が彼女の顔の造形をしていた時かな？」
「そんなに早く来ていたんなら、声を掛けてくださいよ」
「いや、とても集中していたみたいだったからね。
それにしても素晴らしいな、このゴーレムは！！」
「そんなに褒めてくれると嬉しいですね！」
「これを見たら褒めずにはいられないよ……これはまさに戦女神じゃないか。
ん？そういえばギーシュはどこにいった？」
「あぁ連れてきていた子なら、さっきから横でジッとゴーレム見てますよ？」
「この女性にモデルはいるんですか！？」
「（流石にゲームに出てきたとは言えないしなぁ）いや、特にいないけど……」
「凄い！！ぜひ僕にこのゴーレムの作り方を「いや、まず君は誰？」
あぁ申し遅れました。
僕の名前はギーシュ・ド・グラモンです。
でさっきの話の続きですが、このゴーレムの作り方を……」
「そう君がジェイクさんの弟さんか。
ゴーレムの作り方だけど、作るのは環境と時間が必要だし、かなり練習が必要だからお勧めしないよ。」
「練習……どれくらいで出来るようになりましたか？」
「う～ん、僕は１０年以上掛かったかな？」
「１０年以上……。」
「別にこれと同じものを作る必要はないんじゃない？
というよりもあくまでこれはゴーレムだし、しかもこれは余り戦闘

に向かない。」
「え？　でも水晶なら硬いから戦闘向きじゃないんですか？」
「さっきも言ったんだけど、作るのに時間が掛かるんだよ。
それに水晶がある場所でしかこのゴーレムは作れない。
さらに言うと、関節部分も水晶だから動かすのが大変なんだよ」
「そうなんですか……」
「だからゴーレムを作るのにここまで凝らなくてもいいんじゃないかな？
彼女でも作った方が早いと思うよ？」

俺がそう言うと、ギーシュは少し迷っていたが、やがて納得したかのように頷いた。

「そうですね……僕にはまだ見ぬバラ達が僕のことを待っている！！
ゴーレムを作るよりもバラ達を愛でることの方が大事ですね！」
「（うわぁ……ギーシュだなぁ）そうかもしれないね」
「でもゴーレムを女性型にするという考えは真似させてもらってもいいですか？」
「別に構わないけど……」
「何時か僕だけのワルキューレを完成させるぞ！」
「（あれ？　俺きっかけになってない？）」
「今さらだけどレッド君、今日はゆっくりして行ってくれ。」

それからは、いつかの帰り道のようにジェイクとギーシュと夕食まで話し続けた。
まぁ殆ど女性の魅力と魔法についてだったけど……。
夕食を御馳走になり、夜も遅くなってきたから馬車で実家に向かう

ことにした。
ついでに作ったゴーレムも持って帰ることにした。
……実家の部屋に置いておこうと思ってなんかいないんだからな！

「今日は、あまりもてなしもできなくて済まなかったね」
「いいえ、夕食も御馳走になりましたし、ジェイクさんとギーシュ君との会話も楽しかったですから」
「俺のことはジェイクと呼んでくれていいよ」
「じゃあ僕のこともレッドって呼んでください」
「それじゃあまた会おう、レッド！」
「また会いましょう、ジェイク！」

俺はジェイクに別れを告げ、実家への帰り道を馬車で走り始めた。

第３５話　女神の再現（後書き）

ニコ動見て出したくなった。
後悔はしていない！！
まぁこれから先出てくることは、おそらくないですがｗ

第３６話　一時帰郷

久しぶりに会った両親は、何も変わっていなかった。

「やっと帰ってきたなレッド」
「遅かったわね？」
「ただいま！」

特に感動の再会というわけでもないんだけど……やっぱり家は落ちつくなぁ。
帰ってきた瞬間にニューラを召喚したって言うファクターも結構大きい様な気がするけど。
夕食はグラモン家で戴いたので、今は俺の寝室に父さんと母さんが来ている。

「学院での暮らしはどうだ？
何か困ったことは無いか？」
「大丈夫だよ父さん……っていうか俺が精神年齢３０超えてるって知ってるよね？！」
「レッドは何処か抜けている部分があるから心配なのよ」
「母さんまで……」

俺は例え母さんより年上の精神を持っていようと、子供には変わらないようだ。

「ところでポッチャマとグラエナは元気？
さっきから姿が見えないけど……」
「あぁグラエナは良い子にしている。
今は夜だから私の部屋で眠っているだろう」
「ポッチャマも一緒ね。
今頃私の部屋で寝ていると思うわ」

久しぶりにポッチャマに会いたかったが……後で寝顔でも見にいくか。

「学院で友達は出来たか？」
「あぁ！そういえば教えてなかったね。
テリー・ド・ボガードっていう子と仲良くなったよ？
今では朝に一緒に鍛錬する仲かな」
「ボガード？　あぁボガード伯爵の長男か！」
「知ってるの？」
「あぁ、一緒に仕事をしたことは無いが優秀な火のメイジで、確か二つ名は蒸発だったか？」
「（蒸発？どんな火力だよ……）そうなんだ。
テリーも、もうラインになったから、ボガード伯爵に追いつく日も遠くないかもね」
「そうかもしれないな……」

それから父さんと母さんの質問に答えつつ、夜は更けていった。
俺は久しぶりにニューラと同じベットで、ゆっくりと眠りに着いた。

翌朝
久しぶりに父さんとの訓練を行い、朝食を取った後、俺はいつもの森の中へと向かった。

「懐かしい……まぁ半年弱しか経ってないんだけどな。」
「ニャ！」

俺とニューラは良く訓練していた場所で、寝転がっていた。
実は来た時にセレビィとホロも召喚してるんだけど、あの二人は俺達から少し離れて湖で遊んでいる。
前にまた呼ぶって約束してたから、二人を呼び出したわけだが……
ホロは召喚されて早々俺に「セレビィと湖に行っていいか？」聞いてきた。
まぁ別に駄目って言う理由もなかったから普通に許可したんだけど、まさか高速移動使ってまで急ぐとは思わなかったよ。
セレビィの声がドップラーっぽくなってたぞ？
あれは着いた時に目をまわしてるんじゃないか？
俺はそんなことを思いながら二人を見送った。

「これからどうしようか……」

「ニャ？」
「あぁここで何やるかじゃなくて、今からで言うと……6年後か？
ここで父さんの仕事の手伝いをしながら、領地の経営に関わっていくのも一つの選択肢ではあるんだけどな。
でも結局戦争に巻き込まれそうな気がするんだよ……なら積極的に動いてその上で安全を確保した方がいいんじゃないかとも思うわけでさ」
「ニャ～。」
「流石に分からないか……でも考えておかないとな。
未来がどう変わるにしろ、変わらないにしろ、俺は準備を進めておかないとな」

いざという時この国を出る準備を……。
でもカトレアさんはどうなるんだ？
俺は原作を途中までしか知らない。
ルイズ嬢はサイト君がなんとかするだろう……なんか娘を嫁にやるみたいな気分に陥るがな！！
モンモランシ嬢もギーシュがどうにかするはずだ。
だがカトレアさんがどうなったかは知らない。
確かにヴァリエール夫妻に任せていれば安心かもしれない。
でももし、万が一あの二人がいなかった場合に彼女は……。
いや、でもアニメでは元気にトライアングルスペルを使っていたらしいんだよな。
っていうか未だ体調をまったく崩さないところを見るとアニメ版に近いのか？

「あぁどうしたもんか……」
「ＺＺＺ……ＺＺＺ……」

確かにいい友達ではあるけど、一緒に連れて逃げるのはどうなんだ？
そこまで深い仲か？
そしてそれを夫妻が認めるとも思えない。

「ふぅ……もうわかんねぇや！」
「ＺＺＺ……ＺＺＺ……」

とりあえず内容ぼかして、父さんに相談してみるか。
なんか気付かれそうだけど……。
でも頼りになりそうなの父さん位だしな。
まぁ他にも選択肢はあるっちゃあるんだが……あんまり取りたくない手段なんだよなぁ。
危険は伴うし、下手すれば色んな所から目を着けられそうなんだよ！

俺が悶え始めると横で寝ていたニューラを起こしてしまったらしく、
微妙にウザったそうに見られた。
……ごめんなさい。

結局学院を卒業してから考えることにした。
学院卒業してから原作開始まで約４年、その期間で何とか対策を考えよう。
……最悪の事態を想定して。
今できることは自身を鍛えていくことくらいだ。
まだレベル１００の完全制御は出来ていないし、伝説系の制御も甘い部分がある。
ディアルガを装備した時、いきなり目の前に穴があいたときはマジで伝説系の怖さを知った。
まわし受けもまだ完ぺきじゃない……「矢でも鉄砲でも持ってこいやぁ」って言えるレベルにはまだ遠い。
まぁ出来るようになったことも少なくないんだけどね？
とりあえず夏休みの間ずっと装備をして過ごしてみよう。
……５０レベル位のを。
１日完璧に制御出来たら、レベルを上げていこう。
１００までいけたら次は２匹、３匹と増やしていくことにしよう。

「またやることが増えちゃったな……でも夏に出来るところまで頑張ろう！！
学園では自重しなきゃいけないしね！」
「ｚｚｚ……」

俺は寝ているニューラの背中をゆっくりと撫で続けた。
そして遠くでホロとセレビィの遊ぶ声を聞きながら、俺も眠りについた。

第３６話　一時帰郷（後書き）

眠い……なんか隣人が朝５時から大音量でエ〇ビデオ見始めた所為で強制的に起こされたんです。

……なんで朝に見るんだよ！

っていうかヘッドホンぐらい使え！！！

そんなイライラしながらこの話を書いた……少し癒された。

第３７話　新技習得（前書き）

気付けばユニークやＰＶが凄い事に……
誠にありがたい限りです！

第37話　新技習得

夏休みも終わり、また学院に戻った俺。
久しぶりの学校は全く変わりなく、ギトーの残念な授業、時代先取りコルベール、生徒のことを分かってる様で分かっていないシュヴルーズ、そして見ず知らずの水属性メイジ先生の授業を受けながら学院での時間は過ぎ去っていく。
原作に置いて水属性の先生なんていなかった気がするんだが、この先生普通にいい先生なんだよ。
ミスト先生の授業は分かりやすいし、生徒にも親身になって教えてくれる。
……でもこの学園で個性の無い先生なんていないわけで、ミスト先生は授業中普通に寝る。
まぁ寝るのは主に生徒達が何かやっているときだし、危ないことをするといつの間にか起きてきてフォローする。
問題はあるけどいい先生なので、結構人気はある。

あぁ後夏休みが終わってからちょっと経った頃に、カトレアさんの誕生日があったわけだが、今回はパーティに行けなかったので手紙と一緒にプレゼントを送った。
手紙の内容を要約すると、「行けなくてごめんなさい、プレゼント贈るから勘弁してくれ」って言う内容なわけだが、割と早く返信が来た。

「毎年プレゼントありがとうございます。
今回いらっしゃれなかったことは、本当に残念でした。
出来れば会って直接会って話したかったです。

ルイズのことで相談もあったのですが……。
もしルイズの誕生日に来れるようでしたら、その時に話を聞いてもらいたいです」

ここ数年のルイズ嬢は確かに可笑しい。
情緒不安定だし、魔法という言葉に過剰反応する。
……流石にまだ’ゼロ’と揶揄されているわけではないけれど、魔法を上手く使えないことに苛立っているのだろう。
どうするか……このまま全くフォローしないというのも一つの手なんだが、流石にそれは罪悪感が沸く。
確か原作ではフーケ戦で、変な意地を張ったりしていたし、もしあの場でフーケがルイズ嬢を殺してしまったら未来は完全に狂うだろう。
なら爆発を利用することくらいは助言しておくとしよう。
俺はとりあえず次のルイズ嬢の誕生日は無理にでも行かなきゃダメになったな。

「フレイムウェイブ！！！」
「（ついに来た！！パワーウェイブキターーーーーーーーーーーーー！！）」

俺は夏休みが終わったのと同時に、テリーとの訓練を再開させた。
夏休み中もしっかり訓練を続けていたようで、格闘技と魔法に磨きが掛かっていた。
そしてついに俺が意見を出した魔法が完成したと聞き、見せてもらったわけだが……これは良い！！
この魔法は地面から高さ1メートルくらいの炎の刃を出してそれを敵の方に飛ばす技。
まぁ見せ技に近いけど、飛ばれない限り誘導できるのでメイジ以外にはとても有効だ。

これの進化版のパワーゲイ……フレイムゲイザーはまだ使えないとのこと。
流石に地面から2メートル以上の火柱を上げるには火力が足りないらしい。
でももしこれが使えるようになったら一段と強くなるんだろうなぁ。
因みにウェイブは波、ゲイザーは間欠泉という意味を持つことを教えて技の名前にしてもらった。
ここは外せなかった……テリーが苦笑いしていた気がしたが気のせいだろう。

バーンナックルも使ってほしいが、あれの再現は難しい。
あれは手に気を纏って、蟷螂拳や八極拳の箭疾歩を行う技。
手に纏うのを炎に変えれば出来なくはないんだろうが、確実に大火傷する。
故にテリーにも伝えてないし、教える気もない。
俺自身中国拳法に関して深く知らないしね。

「レッド、お前は何か進展したのか？」
「僕？　俺は鎧通しが微妙に出来るようになったよ。」
「何だそれ？」
「あ～本来なら剣の名前なんだけど、一撃目に肘鉄や掌底を胴体に当て、その上からもう片方の手で攻撃を加えることで相手の内部に衝撃を通す技かな？」

最初ネタで練習してたんだけど、意外とファンタジー補正って馬鹿にならない！
流石にまだ気とかは認識出来ないし、使えるかどうかも分からないけどね。
まぁ簡単にそれっぽい事は出来る。
手の平を心臓の辺りに乗っけてその上から拳を叩きつければ、一瞬心臓が止まる。
直接殴っても出来るんだろうけど、これを使えば衝撃が放射状に広がるから後に響くダメージを与えることが出来る。

「極めれば本当に鎧の上からでも人の心臓を止めることが出来るんだ」
「怖い技だな……」
「まだ実戦で使えるレベルじゃないから、未完成ではあるけどね」

あぁ忘れてたけど、モモヨ（コジョンド）を装備して発勁を使うと普通に似たようなことが出来るんだけどね……対人戦には向かないけど。

一回人の大きさ位の岩に使ってみたんだけど、岩の攻撃した向かい側が爆発した。
こんなの人に使ったらグロい事にになるわ！！

「他には何かないのか？」
「魔法もちょっと使えるの増えたかな？」
「へ～見せてくれよ！」
「いや……これはちょっと見せれないかな？
俺の切り札になりそうだから」
「うっわ見てぇーーーーー！！」
「駄目です！」

まぁ水の魔法だから見せれないって言うのもあるんだけどね。
切り札になりえるっていうのは本当なんだけど……。
ウォーターカッターって知ってるかな？
あれって高圧力で水を噴出させることで、鉄すら切断する事が出来るというものなんだけど……。
あれを水の魔法で再現してみたわけだ。
水に圧縮に圧縮を加えていき、小さな一部分だけ圧縮を解く。
すると水がビームのように飛んでいく。
岩くらいなら簡単に切断できる威力で……。
まぁ欠点としては大量に水を使うため溜めが長い事と、めっちゃ精神力を喰うこと。
精々日に二回が限度。
しかも真似もやろうと思えば出来るから大っぴらに使えない。
まさに切り札って感じ？

「あ！そろそろ講義の時間じゃないか？」
「そうみたいだな、今日の先生誰だっけ？」
「あ～……ギトー先生かな？」
「げ！俺アイツ苦手なんだよ～」
「ふっ飛ばされかけたもんね」
「はぁ～」
「いいから行くよ！！」
「行きたくねェなぁ……」

俺はテリーを引きずりながら部屋へと戻った。
そういえばギトーって何で教師になったんだろう……。
子供好きって言うわけじゃないだろうし、今度聞いてみるか。

第３７話　新技習得（後書き）

あぁポケモンが出したい！！
早く使い魔召喚まで進めたい……。

第３８話　テリーの修行

「もっと一歩を大きく！地面を蹴るように！！」
「わかったって！」

今テリーに箭疾歩を教えています。
理由？　いやバーンナックルを諦めきれなかったので……
俺思ったんですよ！
ラインにだったら確り制御すればイケるんじゃないかって。
拳に直接纏わせると火傷する。
なら耐火の手袋着けた上で、拳に炎を纏う際内側の炎を外側に、外側の炎を内側に向けることによって熱さは感じるかもしれないけれど使えるんじゃないかと！！
要するに炎を圧縮して、グローブを作るわけだ。
まぁ包むように下まで覆ってしまうと、熱風で火傷してしまうから拳の上の部分のみのグローブになるんだけどね。

「そこまで！　次は炎を制御する訓練をしよう」
「炎を制御ってどういうことだ？
いつもしている魔法の訓練じゃないのか？」
「炎を精密に制御することで、燃やしたい対象以外を燃やさないように出来るんだよ？
フレイムゲイザーを使うのにも役立つはずだよ！
それに制御が完璧になったら身体に纏わせることだって出来る……かもしれない。
もし制御が完璧になったら僕からプレゼントを用意するよ？」
「身体に炎を纏う……なんかカッコいいな！！

よし、頑張るぜ！
それにレッドからのプレゼントって言うのも気になるしな！」

よっしゃ乗ってくれた！！
実際出来て損になる技術でもないから、ＯＫでしょ。

「じゃあ先ず炎の形を変えてみることから始めよう。」
「ＯＫ、どんな形にすればいい？」
「別になんでもいいんだけど、じゃあ壺作ってみてくれる？」
「壺か……やってみる」

レッドが目の前に火の玉を作り出し、その中心に穴が出来ていく。
余程集中しているのか、額には汗が流れて、眉間にしわが寄っている。
そこから穴が火の玉を貫通しない様に細心の注意を払いながら、穴を徐々に広げていく。
そして壺っぽくなってきた次の瞬間、炎の壺がはじけ飛んだ！
危ないと思い、俺はテリーと俺の前に土で出来た壁を作り出し、爆発から身を守った。

「すまん、制御間違えた」
「一回目だし、しょうがないよ」
「でも悔しいな……もう一回だ！！」

その後も惜しいところまでは行くんだけど、完成まではたどり着け

ない。
まぁ流石に一回目の訓練で出来るとは思ってなかったんだけど、徐々に制御が上手くなってきている。
この調子なら炎のメリケン完成も夢じゃないな！
俺も手袋用意しなきゃな……。

「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ……くっそ！　出来ねぇ！！」
「今日はこれくらいにしておいた方が良さそうだね。」
「あぁ～～～～～～～早く出来るようになりてぇ！！！」

自分でも精神力の限界だと分かったらしく、俺の終了の合図に文句は無い様だ。

「明日も頑張ろう！
もしさっきみたいに爆発したとしても、僕が何とかするから」
「すまない……よし、明日こそ完成させるぜ！」

俺とテリーは明日の訓練に向けて気合を入れながら、今日の講義へと向かって行った。
後ろから自分達を見る目に気付かずに……

～コルベール　ｓｉｄｅ～

「ん？　あれは１年生のテリー君とレッド君じゃないか？」

朝からこんなところで何をやっていたんだ？
私は彼らが来た方向に足を向けた。

「な！！　これは一体……。」

そこには何かが爆発したような痕と盛り上がった土があった。
（実は何時もレッドが訓練後の地面を錬金で元に戻していたんだけど、今回は少し訓練に時間を掛けてしまったために最低限の錬金しか行わなかったのだ。）

「爆発したような痕と言うことは、火の魔法……でもこの規模の爆発はラインに成り立てのテリー君では起こせないはず。
それにこの土の不自然な盛り上がりは、一体どういうことだ？
おそらくレッド君が何かしたんだろうけど……考えても分からないな」

学院長に話してみよう。

～side　out～

特に何事もなく授業を終え、寮に帰る前に朝練した場所を完全に元の状態に戻そうと、俺は森の近くに向かって行った。
俺はいつもの場所に着いて、早速錬金をしようとしたんだが、なにか引っ掛かる。
地面に残る爆発の痕、若干盛り上がっている土、そして俺達の足跡。
本来ならそれだけのはず……だけどここにはもう一つ俺達よりも大きな足跡がある。
しかもその足跡の主はこの近くをグルグル回っていたようだ。

「（これは朝の訓練を誰かに見られたのか？）」

誰だ？先輩か？先生か？

先輩なら目を着けられるのはウザったいが、まぁ大して問題ないだろう。
先生なら……少し面倒くさい事になるかもしれない。
俺達がやっている訓練は結構特殊だから、あまり受け入れられない。
もしかしたら止めるように言われるかもしれない。

「（駄目だ！！　まだテリーは技を完成させていない！！）」

なんとか訓練を続けられるだけの理由を考えるか……はぁ、頭が痛い。

第３９話　不審の目（前書き）

何時もより少し長い気がする。

第３９話　不審の目

どうやらあの足跡はコルベール先生のものだったようだ。
次の日の授業後に俺とテリーを呼びに来たからね。

「えっと……僕達何かしましたか？」
「いや、ちょっと聞きたいことがあってね」
「教室じゃ駄目だったんですか？」
「逆に聞くけれど、教室でよかったのかい？」

気付いたことに気付かれた？！
流石に炎蛇のコルベールは伊達じゃないな。
ところで……さっきからテリーが無言何だが、どうかしたのか？

「どうかしたのかなテリー君？」
「……腹減った」

緊張感ゼロだねテリー。
流石にコルベール先生も苦笑いしてるよ？

「話が終わったら、ご飯を食べに行きなさい」
「そうするわ」
「ところでコルベール先生、俺達はどこに向かってるんですか？」
「学院長室だよ」

学院長室……まぁこの展開は読めなくなかったけど、嫌な展開になってきたな。
学院長は狸っぽい感じがするし、うかつな行動は出来ない。

「失礼します、学院長」
「「失礼します」」

目の前に座る学院長は、目を瞑りゲンドウポーズを決めながら何かを考えているようだ。
原作を知っている俺としては、なんとなく考えていることが何か分かる訳だが……
学院長はカッと目を見開き

「黒か！！」
「えっと学院長？二人を連れてきたのですが……」
「っていうか何が黒なんだ？」

それはたぶん誰かのスカートの中だと思うよ？
正直あのネズミの使い魔かなり偵察向きだよね。
まぁバレた瞬間抵抗も出来ずに死ぬだろうけど……。

「……ツルベール君いつからいたのかね？」
「さっきからいましたよ、それと私はコルベールです！！」
「ツルベール……プフッ！」

テリー笑うな……何かコルベール先生の顔が微妙に怖いことになってるから！！

「で何の話じゃったかな？」
「ですからこの二人のことです！！」

これが演技だとしたら、かなりの狸だな。

「あぁあぁ、森の近くで謎の爆発後と盛り土を見つけたんじゃったか？」
「そうです！その方向からこの二人がやってきたので話を聞きたいと、オールド・オスマン…貴方が言ったのではありませんか！」
「おぉ、そうじゃったそうじゃった！」
「大丈夫かこの爺さん？」

テリー正直すぎるよ？
そういうのは頭の中だけで考えないと、面倒くさいことになったりするよ？

「で、君達その爆発と盛り土に心当たりはあるのかね？」
「あぁそれは俺達の「テリー！」……知らないことだなぁ」

流石テリー正直ものだなぁ……ここでは逆効果だがな！！
このままテリーに説明を任せると、余計なことを言いそうだし・・・・・・。

「僕が説明させてもらいましょう」
「ほぅ、ならばレッド君に説明を頼もうかの」

さっきより幾分か細くなった眼で俺を見る学院長に、先ほどまでのおちゃらけた雰囲気は無い。
テリーの説明を途中で遮ったことで警戒心が増したか……。

「僕達はいつもあそこで魔法の訓練を行っていたんです。」
「何故学院内に訓練するところがあるのに、あんな目立たない場所で隠れるように訓練を行っていたか聞いてもいいかね？」
「僕としては、むしろ何故そんなことを聞いてくるか不思議ですね」
「フム」
「理由は、知られたくないからですよ。
自分がどの程度のメイジか知られる、そして手札を知られるという

ことは対策を練られるということと同義。
いつどのように情報が漏れるか分からない中、あんな目立つ場所で堂々と訓練するのは少し……」
「（この子は……大分慎重じゃな）ところで、テリー君は最近ラインになった様じゃな」
「おう！」
「最近ラインになったにしてはあの爆発の規模は可笑しい！」
「コルベール君、落ちつきたまえ」
「はい……。」
「学院長は何を……言いたいので？」

この爺マジで狸か？
どこまで知っている……まさかあの鏡か！？
いや、あの時点で俺達が目を着けられる理由は無かったはずだ！
なら何を言いたいんだ？

「テリー君、君はレッド君と訓練していたんだね？
その時のレッド君の役割は何だね。」
「レッドの役割なら俺の訓練にアドバイスをくれることか？」

俺を見ながら言うなよ……これは少しヤバいか？

「ふむ……レッド君、君は土のラインメイジだったはずだね」
「はい」
「なら君はテリー君に何をアドバイスしているのかね？」
「それは戦闘の際の気配りとかを……」

これはキツイか？

「ふむ、それはいいことじゃな。
じゃが、それで火力が上がるとは考えにくいのぉ」
「……」

さぁどうする……どこまで話すか。
格闘技に関してはバレていない、なら魔法に関して話してそこで話を切るか？
色々誤魔化しながら言ってみるか！

「ふぅ……流石はオールド・オスマンですね。
では正直に話すことにします」
「ほぅ、では聞こうか」
「僕が教えていたのは、魔法の精密制御ですよ」
「な！　それだけであんな火力になるわけが「コルベール君！」……」
「続けてくれんかの？」
「コルベール先生の言う通り、それだけじゃ火力アップを見込めたとしても大きな変化は見受けられないでしょう」
「……」
「ですが魔法を圧縮したら話は別です」
「圧縮？」
「コルベール先生なら分かるかもしれませんが、力を外側から均等に加えることで物を圧縮することが出来る。

もしその状態で一部分だけ力を緩めたら？」
「均衡は崩れて、加えられていた力がその一部分から外に抜ける？」
「そうです、それを火の魔法で行っただけですよ。
僕は昔土のゴーレムを作った際に、制御を失敗してゴーレムが崩れるのを予想していたのが、制御の甘い部分から土が飛び出したことで圧縮の便利さに気付いたわけですが……」

うん！ノリで説明してみたはいいけど、意外と納得してもらったみたいで何より。
なんとなくマルギッテさんを巻きこむと嫌な予感がプンプンするから、自分で思いついたことにしちゃった……バレたら死ぬかも。
俺的圧縮講義はここまでにして、さぁどう出る学院長！

「そうか、じゃが危ないには変わりないのぅ。
もしその訓練をする際にはコルベール君を呼びなさい」
「はい、そうします」
「話はこれくらいかの？」
「それじゃあ失礼しました」
「失礼しました」

なんとか乗り切ったか……でも微妙に目をつけられた臭いな。
微妙に厄介だ……俺とテリーが部屋を出ようと扉に手を掛けた時学院長が声を掛けてきた。

「あぁ、そうじゃった。
最後に一つ聞きたいことがあるんじゃが、いいかの？」

なんだ？まだ何かあるのか？

「御主たちは自身を鍛えて得たその力、何のために使う？」
「のんびり暮らすために」
「俺は唯強くなって親父を超えたい！」
「そうか……引きとめて悪かったの」

こうして俺達は今度こそ学院長室を後にした。

～オスマン　ｓｉｄｅ～

「テリー君を一人で呼びだした方が良かったかの？」
「そうですね……まだレッド君は何か隠していそうですし」
「じゃが辻褄はあっとる」
「それが厄介ですね」
「流石に次テリー君を一人で呼んだとしても、口止めはされてるじゃろう」
「はぁ……鏡で覗けないのですか？」
「あそこまでは届かんのぅ」

まさかそこまで考えてあの場所で訓練しているのか！？
流石に……そこまではないか。
少し思考に没頭していると、コルベール君が儂の方を見とった。

「何か気にかかるかね？」
「テリー君の鍛える理由は納得できたのですが、レッド君の理由が少し……」
「父を超えるため、そしてのんびり暮らすためじゃったか」
「のんびり暮らすのに何故鍛えなければならないのでしょうか？」
「それは彼にしか分からんだろう。
しかし少なくともまるっきり嘘というわけでもあるまい」
「何故そんなことがお分かりで？」
「ちょっと前にドリュウズ殿にあった時に、聞いていたのじゃよ。
息子は静かに暮らしたいという夢を持つ変わった子供だということをの」
「そうですか……」
「もし気になるのなら、今度レッド君とじっくり話でもしてみたらどうじゃ？
何か分かるかも知れんぞ？」
「考えておきます」

コルベール君は相変わらず力の使い方の話になると過剰反応しおるの……まだあのことを引きずっておるのか。
コルベール君が自分を許せる日は来るんじゃろうか？
儂はそれが心配じゃ。
少し無言の時間が続き、コルベール君は話を変えるように口火を切った。

「それにしてもラインになったばかりのテリー君を、あそこまでの魔法を使えるまでに成長させるなんて……教師としての自信が無くなりますね」
「卒業したら教師にスカウトしてみるかの？」
「いいですね！」

彼なら間違った方向に生徒たちを導くことはないじゃろう。
ドリュウズ殿に話を通すのは少し大変かもしれぬが、それだけの価値はありそうじゃしな。

～side out～

「おおぅ」
「どうした？」
「何か急に寒気が……」
「そういえばレッド、何か学院長に対してちょっと喧嘩腰じゃなかったか？」
「気のせいだよ」
「そっか」
「後駄目だよ！　簡単に訓練のこと話しちゃ！」
「す、すまん」

「もう、僕は目立ちたくないんだからね！
あの訓練場だって今後警戒されるだろうし、魔法はともかく、もうあそこで格闘訓練は出来ないよ」
「何だって！？　まだあの技完成してないんだぞ？！」
「何も止めるとは言ってないよ……でも今後格闘訓練は森の中でやろう」
「わかった」

でもあの寒気は何だったんだろう。
変なフラグが立った気がする。

第３９話　不審の目（後書き）

よし次は使い魔召喚まで飛ばす！！
誰が何と言おうと飛ばす！！
ポケモン分が足りない！！圧倒的に足りない！！！！！

第４０話　使い魔召喚の儀（前書き）

ついに４０話になりました。
ここまで長かっ……そうでもないか。
まだ二週間弱しか経ってない。
十万字行ったのは、ひとえに俺が卒研から現実逃避しているからこ
その数字！！
……やべぇ普通にヤベェ
明日教授に相談しよう……

第４０話　使い魔召喚の儀

ついに念願の使い魔召喚の儀式だ！！
学院長室に呼び出された後、訓練場所を変えたが特に監視が着くわけでもなく、予想よりも緩い警戒で拍子抜けした（因みに学院長たちは教師に引きぬくために、悪印象を与えたくないと思って、監視を緩くしています）。

まぁここまで色々あったような、なかったような気がするけども、それはいつか語るとしよう。
とりあえず訓練の結果だけは説明しておく。
テリーはなんとか魔法の制御技能をアップさせたために、フレイムゲイザーとバーンナックルが出来るようになった。
バーンナックルはやっぱり使いどころが難しいみたいだけど……。
俺があげた手袋はかなり喜んでもらえた。
俺としてはハーフフィンガーグローブにしたかったんだけど、使用方法を考えると普通の手袋に耐火効果を付けたものを贈った。
若干値は張ったが、いい出来だったと思う。
それから俺とテリー以外に訓練仲間が出来た。
それは……。

「兄さん！　僕を置いていかないでくれよ！！」
「悪い悪い！　早くレッドと組み手したくてな！」
「いや……それぐらい待ってあげなよ」

テリーの弟、アンディ・ド・ボガードだ。
兄のテリーから俺の話は良く聞いていたらしく、入学早々俺に会いに来た。
テリーにあまり似てない落ちついた子だ。
アンディは格闘技の基礎をテリーに習ったらしく、空手の基礎はある程度出来ていた。
だけど俺がアンディの技で知っているのは残影拳位だ。
故にとりあえず残影拳は使えるようになってほしいと思って肘打ちを鍛えています。
実際ムエタイをやっている人の肘や膝は人の皮膚を切れる。
それを教えると肘を鍛え始めてくれた。
流石にテリーには勝てないようだが、それなりに強くなってきているとは思う。

「そういえば兄さん達は、今日使い魔召喚するんじゃなかった？」
「そうなんだよ！　何が出てくるか楽しみだな！」
「力み過ぎて失敗しないようにね？」
「何だよレッド！　お前は楽しみじゃないのか？！」
「いや、楽しみだけどテリーを見てると落ち着いてきちゃってね」
「あぁわかるわかる！　兄さんを見てると自分が落ちつかないとって思いますよね！」
「アンディ……お前覚えておけよ？」
「に、兄さん……言葉の綾じゃないか、落ちついて落ちついて！」
「仲いいなぁ……」

こんなユッタリした朝を過ごし、ついに使い魔を召喚する時間になった。

「我が名はテリー・ド・ボガード。五つの力を司るペンタゴン。
我の運命に従いし、”使い魔”を召還せよ！！」

その言葉と共に光が現れ、そこから徐々に姿を現すテリーの相棒。
何を出ててくるのかと目を輝かせているテリーの前に召喚されたのは、小さめの火竜。
小さいとは言っても、テリーと同じくらいの大きさはある。
これから成長するだろうから、成長さえすればかなりいい使い魔になってくれるだろう。

「では契約をしてください」
「ＯＫ！　我が名はテリー・ド・ボガード。五つの力を司るペンタゴン。
この者に祝福を与え、我の使い魔となせ！」

テリーは普通に口づけをして契約を成した。
契約を終えた火竜はテリーに頭を擦りつけ、満更でもないようだ。
周囲の生徒達は、火竜を召喚したテリーに羨望やら嫉妬やらのまなざしを送っている。
さて次は俺の番か……少し緊張するな。

「では次、レッド・ド・ドリュウズ君！」
「ハイ！」
「どんな使い魔が出てくるか楽しみにしていますよ」
「？」

なんで俺にそんな声を掛けてくるのか意味を測りきれなかったので、首を傾げた。
だがテリーと目が合ってサムズアップされたので、俺も覚悟が決まり、召喚のための準備を始めた。
杖を構え、精神を集中する。
今から呼び出す俺の相棒に向けて、心から来てくれと願う！

「我が名はレッド・ド・ドリュウズ。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、”使い魔”を召還せよ。」

目の前が強く光り、ゆっくりと俺の相棒が姿を現していく……出てきたのは二メートルくらいの人型。
真っ白の石の身体に所々オレンジ色のが混ざり、頭部と思わしき部分には七つの眼のようなもの。
俺は出てきたものが想定外だったため思考が停止した。

「レジロック……」

出てきたのはレジ三体の中で最も物理攻撃力が高く、防御の種族値も高いレジロックだった。
まさか伝説級のポケモンが出てくるとは思わなかった俺は興奮と共に混乱していた。

「レッド君……早く契約を！」

コルベール先生はこの見た目普通のゴーレムに、若干の不気味さを覚えた様で、契約を急ぐように告げた。
周囲にいる生徒達は「何だよ、唯のゴーレムか」「実はアイツが錬成したゴーレムだったりしてな！」とか好き勝手言っている。
だが俺にそんな声が耳に入っていなかった。
まるでそうすることが運命づけられていた様に、俺は呪文を唱え始めた。

「我が名はレッド・ド・ドリュウズ。五つの力を司るペンタゴン。
この者に祝福を与え、我の使い魔となせ！」

俺は身をかがめてくれたレジロックに口づけをして、契約を交わした。
レジロックの胸に刻まれた使い魔のルーンに何が書いてあるか分か

らないが、俺はこれから長い間相棒となる彼に告げた。

「召喚に応えてくれてありがとう。
これからよろしく頼むな！」

レジロックは静かに頷いた。
とりあえず授業が終わったら名前を付けよう。
俺は相棒に付ける名前を考えながら、その後の時間を過ごしていった。

～コルベール　ｓｉｄｅ～

何だあのゴーレムは……。
生徒達は気付かなかったようだが、レッド君を馬鹿にした声が聞こえた瞬間とんでもない威圧感が出たぞ？！
しかも握っていた拳から砂が出てきていた……岩が砕けて砂になったのか？
そんな力で人の身体を掴まれたら？
私はその想像を途中で止めた。
昔見た赤い光景を思い出しそうになったからだ。

「（まぁ、レッド君に手を出さない限り暴れることは無いでしょう）
」

私は対応を先送りし、次の生徒の召喚を見守ることにした。

～side　out～

第４０話　使い魔召喚の儀（後書き）

ドリュウズを召喚しようと思ったんだけど、実はもうレベル１００のドリュウズがボックスにいるので遠慮しました。
どうせなら持っていないポケモンがいい！
持っていないポケモンで、でか過ぎず弱くないポケモン、尚且つ地面か岩とくればこれだ！！！
ということでレジロックを召喚しました。
電磁砲や破壊光線を自力で覚え、馬鹿力も覚えるこの子は大分強い使い魔になりそうです。
久しぶりのポケモン登場に俺のテンションは有頂天だぜ！！

第４１話　怒髪天を突く（前書き）

あぁこの話は俺の黒歴史になりそうだ・・・・・・
主人公大暴走の巻
殴らないで、物を投げないで、読み終わり次第静かにコメで責めてやってください。

第４１話　怒髪天を突く

召還の儀式の後。
俺はレジロックに，アイガ，という名前を付けた。
ひっくり返すとガイアになるという安易なネーミングだったが、気に入ってくれたようだ。
名前も付け終わったことだし、俺はアイガの能力を確かめることにした。

「アイガ、お前なにが出来る？」
「ジ！」
「お前喋れたのか・・・・・・っておい！　腕取れたぞ！！」
「ジー！」
「いやジーじゃなくて！！」

アイガの腕はいきなり肘位から先が取れ、地面に落ちた。
流石にいきなりの非常事態に俺はあたふたしていたが、アイガが無くなった腕の部分を地面に向けると、地面から石が浮き上がってきて腕にくっつき始めた。
１０秒くらいで元の腕に戻ったアイガを見て、俺は安堵のため息をついた。

「お前・・・・・・ビックリさせるなよ」
「ジジ」
「いやまぁ出来ることを教えてって言ったから、しょうがないのかも知れないんだけどな？」

「ジ！」
「はぁ・・・・・・まぁいいや。
それでこの取れた手はどうするんだ？」

俺が地面に落ちている岩を指差すと、アイガは真ん中の目を点滅させた。
すると岩が、俺の目の前まで浮かび上がった。
とりあえず俺はアイガの方を見たんだが、何か「ドウダ！スゴイダロ？」って言っているような気がした。
イラッとしたのでとりあえず否定してみた。

「いやぁ・・・・・・浮かばせるだけじゃなぁ。」
「ジ！？」
「せめて飛ばせないとなぁ」

俺がそういうと、アイガは左右６つの目を点滅させて腕を空に向けた。
すると岩はグングンと高度を上げて、見えなくなってしまった。
俺は「いや、高さの問題じゃなくてな？」と突っ込みを入れようとした次の瞬間開いた口がふさがらなくなった。
アイガの目が一瞬強く光ると、アイガの腕だった岩の塊は流星のごとく降って来た。
そして響く轟音。

「・・・・・・・・・いやいやいや、どうすんだよこれ。」
「ジ！」

目の前には１０メートル位のクレーター。
しかも中心には５０センチくらいの大穴が開いている。
これ直撃したらミンチになるぞ？

「凄いけど・・・・・・・・・これ学院で使用禁止な？」
「ジ？！」
「こんなの使ったら退学になるわ！！」
「ジ～・・・・・・」

残念そうにしているが、この子大丈夫か？
俺はこれからの生活に色々と嫌な予感を感じつつ寮へと戻っていった。
てっきり怒られるかと思ったが、何とかバレなかった様でお咎めなしだった。

それから特に何も無く数日が経過、ついに俺に二つ名が付きました！
’石繰’のレッド。
普通！　やったね普通！！
まぁ若干馬鹿にされてる感も否めないけど・・・・・・だってアイガ見ながら鼻で笑う人いたからね。
ぱっと見普通のゴーレムまんまだからしょうがないかも知れないけど、多分戦ったらミンチ量産機になるよ？

ちなみにテリーは、’火柱’のテリー・・・・・・やったね！厨二っぽいよ！！
まぁ授業中にフレイムゲイザーぶっ放したからしょうがないんだけど。
ちなみにその時コルベール先生が俺のことガン見してたけど、気付かない振りをしたのは内緒の話。
結局その後テリーと俺はコルベール先生に呼び出しを食らって、説教2時間くらいされた。
殆どが手加減を覚えなさいとか、周りを見て行動しなさいとかだった。
何で俺は呼ばれたのか終始謎だったわけだが、最後に一言「レッド君も見てたなら、止めなさい」とのこと。
え？俺ストッパーなの？
とりあえず「基本放任主義なんで・・・・・・」と言って逃げました。
流石にテリーの自由奔放な行動にストップかけるのは難しい。

俺とテリーとアンディは、いつも通り朝の鍛錬を終えて朝食を取りに行った。
これまたいつも通りテリーが山盛りのパンを食べ、俺とアンディが

普通に食べる。
ここまでは、何の問題も無かった。
問題は、使い魔の宿舎で起こった。

俺達は授業にアイガ達を連れて行くために、使い魔用の宿舎へと向かっていた。
しかし何故か宿舎前に人だかりが出来ている。
俺達は行かないわけにも行かなかったので、急ぎ宿舎へ向かうとそこには拳を振り上げたアイガの姿があった。

「止めろアイガ！！！」
「ジ？！」

俺の声で何とか拳は振り下ろされなかったが、アイガの前には俺の同級生と思わしき人物がいた。
まぁ尻餅をついて目をつぶっているが、おそらく同級生だったはず・・・・・多分。
そいつは既にアイガが拳を納めていることにやっと気付いたのか、羞恥に顔を赤く染め、急ぎ立ち上がった。
周囲にいた生徒達も笑いが堪え切れなかったようだ。
爆笑の中心にいる彼は、次第にわなわなと震えだし、カッと俺の方を睨んだ。

「貴様のゴーレムは、何を考えている！
いきなり俺に殴りかかろうとするなんて非常識だぞ！」
「は？　いや僕は今来た所なんで状況がうまく飲み込めないんだけ

ど？」

なんか彼が言うには、使い魔を迎えに来た彼に突然殴りかかったという話らしいが・・・・・・それはちょっとありえないな。
一応知能はあるから、いきなり殴りかかったりはしないはずなんだけど。

「えっと・・・・・・とりあえずごめん。」
「謝って済む問題か！
危害を加えようとしたんだぞ！！
即刻壊してしまうべきだ！」
「は？」
「そうだ、それが良いに違いない！
どうせなら俺が壊してやろう！」
「いやちょっと待とうよ」

俺は周囲にいる生徒達を見たが、みんな微妙に顔を歪めている。
なんだ何か知っているのか？
俺は取り合えず近くにいる子に話を聞いてみた。
すると大分話が違うことが分かった。
まず分かったのは彼の名前がリークだと言うこと。
何でも彼はテリーのことが好きだった女の子に振られて、その腹いせに何時もテリーの近くにいる俺の使い魔であるアイガを蹴ったりしていたらしい。
まぁ岩だから逆に自分の手足を痛める結果になったんだが、そこで彼はアイガに向けて俺の悪口を言い始めた。
「テリーの腰巾着」「平凡で何も取り得がない」などの言葉を言っ

ていたが、最初はアイガも特に動くこともせずにジッとしていたみたいなんだが、そのことを良い事にどんどん好き勝手なことを言い始めた辺りから様子が変わっていったようだ。
拳が小さく振るえ、まるで怒りを堪えているようだったそうだ。
そして彼が「あんなやつ別にいなくても誰も困らない」と言った瞬間、アイガはゆっくりと立ち上がって、彼の方に向かっていった。
そして殴ろうとして今に至ると言うことらしい。

「・・・・・・・・」
「あいつウゼェな」
「駄目だよ兄さん！　はっきり言っちゃ！」
「いや要するに八つ当たりして切れられたから、逆切れしてるんだろ？
全部あいつの自業自得じゃねぇか」
「まぁそうだけど・・・・・・」
「そして俺はそれ以上に、あいつがレッドを馬鹿にしたのが気にいらねぇ」
「テリー、僕は別に気にしてないよ？」
「いや、お前が気にしてようが、なかろうが俺は気にいらねぇ！」
「それには僕も賛成かな？」
「アンディまで・・・・・・」
「何せお前は、」
「僕達の、」
「「先生だから（な）！」」

二人の先生発言は周囲の生徒に疑問を抱かせたが、今回は彼の方が悪いと思う人が多く、周囲の目は彼へと集まった。
彼は未だ「ゴーレムは壊してしまうべきだ」と騒いでいるが、周囲

の目はどんどんと冷めていく。
ここに彼の味方はいなかった。
それが分かったのか、彼は突如言い放った。

「決闘だ！！」
「は？」
「お前が負けたら、お前のゴーレムは破壊させてもらう！」
「いや、何で僕がそんなデメリットしかない決闘に応じなければならないの？」
「五月蝿い！　お前は大人しく決闘を受ければいいんだ！」
「レッド、この決闘俺がやっても良いか？」
「いや、僕がやるよ兄さん。」
「二人とも、少し下がっててくれないか？」
「「え？」」
「流石に俺にもね、我慢の限度ってものがあるんだよ・・・・・・。
まず八つ当たりでアイガへの暴行、この時点でアウト。
俺への暴言？　そんなものは如何でもいいし、屁でもない。
問題は自分のしたことを棚上げした挙句、アイガを壊す？
壊すって何だよ！まず認識が間違えてんだよ！
アイガは生き物だ！！自我を持つ生物だ！
そして俺の相棒だ！
てめぇが生き死にを決めていい相手じゃねぇんだよ！
決闘？　上等じゃねぇか、やってやんよ！」
「「（誰これ？！）」」
「・・・・・・・・・ハッ！？よ、よしじゃあヴェストリ広場で待ってるぞ！」

そういってリークは逃げるように去っていった。

俺はその後姿を見て我に返った。

「・・・・・・・・どうしよっかなぁ。」
「いや・・・・・・どうしよっかなっていうか、さっきのはなんだ！！」
「そうだよ、説明してくれないかな？」
「ちょっと怒り心頭って言うか、我を失ったって言うか」
「「だとしても性格変わりすぎだろ！！」」

なんか周りの子達も頷いてる。
あぁ・・・・・・やっちゃったよ。
目立ちたくないのに、駄目なんだよなぁ昔から。
自分の物とか傷付けられると直ぐ頭に血が上る。
事故なら何とか大丈夫なんだけど、故意だとどうしても耐え切れない。

「取りあえず広場に向かいますか」
「はぁ・・・・・・まぁ負けるとは思ってないけど、一応気をつけろよ？」
「油断はしないでね？」

俺はギャラリーを引き連れて、広場へと向かった。

第４１話　怒髪天を突く（後書き）

テンションが上がりすぎた結果がこれ
後悔だらけだが、やりたいことをやらせてみた
ここ直した方がいいよ？等のアドバイスが有ったら気軽に一言物申してやってください
この回は自分でもヤバイかなぁと思っていますので、案があれば普通に修正入れます。
ただし決闘する事に関しては変えたくないのでそこら辺はご了承ください。

第４２話　決闘（前書き）

やったーーーーーーーーーーー！！！！

ピックアップに乗ったぞーーーーーーーーーー！！！！

第４２話　決闘

ヴェストリ広場には既にリークがいた。
ここに向かう途中で彼の情報は聞いたんだけど、風のラインということ。
普段からテリーに敵対心を抱いてはいるのだが、直接喧嘩を売る勇気はない。
だからテリーの悪い噂とかをでっち上げて流しているらしい。
小物臭がプンプンする奴のようだ。

「レッド……お前まさか本気出したりしないよな？」
「迷ってるかな？」
「兄さんなに言ってるの？」
「レッドの本気は不味いんだ」
「何が不味いの？」
「あいつが本気になると、多分リークは何も出来ずに終わる」
「え？でも彼はレッドと同じラインなんじゃ？」
「あいつの本気は……」
「そこまでだよ二人とも。
それと大丈夫だよテリー、もう落ち着いてるから」

俺はゆっくりとリークに近づいていき、５メートル位手前で止まった。

「よく逃げなかったな、テリーの腰巾着」
「はぁ、俺もラインなんだけど知ってた？」

「フン、どうせ見栄を張ってたんだろ？
目立たないお前が、ラインなんて信じられるか！」
「（目立たないっていう印象は若干嬉しいなぁ）まぁそれはそれでいいんだけど、君が勝ったらアイガを殺すって言うんだね？」
「そうだ！あの無礼な使い魔を許すことは出来ない！」
「じゃあ僕が勝ったらどうするの？」
「お前が俺に勝つ？ハッハッハ、面白い冗談だ。
もしお前が俺に勝てたらお前の言うこと何でも聞いてやるよ！」
「別に言うこと聞いてくれなくても良いから、二度と僕に関わらないでくれるかな？」
「な！？・・・・・いいだろう！お前が勝つことができたらな！」
「（よっしゃ！　言質取った！）」
「それじゃあこの石が下についたら開始だ」

リークはそういって、小石を上に投げた。
俺は取りあえず膝を軽く曲げ、いつでも動き出せるようにした。
そしてついに地面に小石が到着した次の瞬間。

「ラナ・デル・ウィンデ！」

エアハンマーか・・・・・。
取りあえず動きを止める！

「イル・アース・デル」

俺は錬金で目の前に土の壁を出し、エアハンマーを防いだ。
そしてリークに次の魔法を放たれる前に、俺は急ぎ魔法を唱える。

「アース・ハンド！」

リークの足を掴んだ土の腕は、彼をがっしりと地面に縫い付けた。
その事に動揺し、彼は唱えていた呪文を止めてしまい、俺に絶好のチャンスが舞い降りた。
俺はそのチャンスを逃さないために、素早くリークに接近して杖に狙いをつけた。
突然特攻を掛けてきた俺に何の対策も打てずに、彼は俺に呆気なく杖を奪われてしまった。

「どうする？続ける？」
「・・・・・・・・・参った」
「「「

この後俺とリークは学院長室に連れて行かれ、厳重注意を受けた。
まぁ決闘禁止されてるから当たり前なんだけど、1時間くらいの説教で開放された・・・・・・リークはね？
俺はリークが帰された後も、残された。
どうやら言いたいことがあるらしい。

「決闘の理由については他の生徒から話を聞いておる。
大変じゃったのう」
「確かに大変でしたが、もう彼と争うことはないですから」
「あぁ勝ったら、自分に関わることを禁じると言っておったらしいの？」
「何回も八つ当たりされては困りますので・・・・・・」
「テリー君に関わるのも禁止しなかったのは何故じゃ？」
「それはテリーが決めることです。
それにリーク君は、強いものに逆らうほどの勇気を持っていないみたいですから問題ありませんよ」
「辛辣じゃのぅ」
「流石に楯突いてきた人間に優しくするほど、人間が出来ていませんからね」

俺がそういうと学院長は苦笑いをして「その通りじゃな」と一言言った。
その後少しだけ教師の役割を語られた・・・・・・なんでそんな話になったかは分からなかったが、教師は子供を導く光とならなければならないと言う言葉は心に残った。
ギトー先生は如何なんですか？と聞きたかったが、話が長くなりそうだから自重した。

学院長室を出ると、ドアの近くの壁に寄りかかってたテリーとアンディがいた。
もしかしてずっと待ってたのか？

「待ってなくてよかったのに」
「俺達が待ちたくて待ったんだ」
「そうそう！」
「ところで罰とかあったか？」
「大丈夫！何とか厳重注意だけで済んだよ。
今まで真面目に授業受けてきた甲斐があったよ」
「今回はレッドに非はないから、そこも考慮されたんじゃないか？」
「そうかもしれないね」
「何にせよ良かったな！
怪我もないし、罰もない」
「・・・・・・でも目立ったよ」
「あ～・・・・・・それはあと一年で卒業だから、我慢しろ」
「そうだね」

俺達はそんな会話をしながら寮へと戻っていった。
だが俺は寮に戻ってから、静かにアイガの元へと向かっていた。
今日の事で少し話すことがあったからだ。

アイガは宿舎の中で壁に寄りかかって、静かに座っていた。
俺はそんなアイガの元へ近づいていき、アイガの横に腰を下ろした。

「お前、俺の為に怒ってくれたんだろ？」
「・・・・・・」
「それはとても嬉しいんだ。
でもな、手を出してはいけない」
「・・・・・・」
「お前の力は人を簡単に殺してしまう。
もしあの時俺が止めなかったら、彼は肉塊になっていた。
ここは戦場じゃないんだから、そんな力を軽々しく振るっちゃ駄目なんだ」
「・・・・・・ジ」
「俺も自分を抑え切れなかったから、人の事言えないんだけどな？」

俺はそう言って立ち上がり、アイガのことを正面から見た。

「俺はこれから確り自分の感情をコントロールできるように努力する。
下手をすると命取りに成りかねないからな。
だからお前も俺と一緒に成長していこうな・・・・・・アイガ」
「ジ！」

俺は、その日そのままアイガの横で夜を過ごした。

第４２話　決闘（後書き）

戦闘難しいよぉ。
戦闘描写は本当に難しい。
とりあえず俺はこの小説を書いてて、レジロックが欲しくなってきました。
あぁそして合間合間にポケモンのレベル上げやってたら、レベル１００のポケモンが増えてきました。
現在ｌｖ１００が２３匹
ｌｖ７０以上が３９匹……ビークインのレベル上げがキツイ。
殿堂入り回数が９７回……四天王？良いレベル上げになります！！
後今作ポイントマックスが割と手に入るのでＰＰ増加もできていい感じ。

第４３話　使い魔品評会（前書き）

前の二話で俺の文才の無さがまた発覚してしまったわけですが……
俺頑張る！
ＰＶが怖い数になってきたから頑張る！！

第４３話　使い魔品評会

もうそろそろ使い魔品評会の時期。
フリッグの舞踏会？そんなものは知らん！！
……俺は壁の花通り越して、食べる機械だったよ。
仲のいい女の子いなかったしね。
因みにテリーとアンディは、最初俺の隣で料理を摘まんでいたんだけど、女の子達が勇気を出して連れて行ってしまった。
……くそう、リア充め！！
結局マリーとマイという女の子が争奪戦に勝利したらしく、二人はそれぞれ連れたってどっか行った。
俺は聞いたことがある名前のような気がしたが、気にしたら負けだと思ってスルーした。

とりあえず使い魔品評会まで１週間切ったわけだが、俺はとても悩んでいる。
あの決闘から微妙に周囲から向けられる目が変わった。
悪い方に変わったわけじゃないし、戦い方は少しメイジっぽくなかったかもしれないけど、しばらくしたら元の状態に戻るだろと放置している。
それはあまり関係ないのだが、今の俺の悩みは品評会で何をやるかということだ。

「なぁアイガ、どうしようか？」
「ジ！」
「いや、それは駄目だ！」
「ジ～」

アイガは自身の腕を取り外そうとしていたので、即効で止めた。
皆の前でクレーター作れって言うのか？！
それは目立つっていうより、怖がられるだろ。

「なんか品評会で使えそうな技あったかな……あ！　ロックオンって使えたよな！」
「ジ！」
「それを事前に用意した的に掛けておいて、それを空中で打ち抜くってどうだろうか？」
「ジジ！」

アイガも首を縦に振り、賛成してくれたようなので、俺達は次の日の夜から練習を始めた。
夜を選んだのは、テリー達にも隠しておくためだ。
テリーも何やるか俺に言わないみたいだし、何をやるかは本番でのお楽しみということだろう。
ならば俺もそれに乗ろうということで、俺はテリーと時間が被らないように夜に森の中で練習している。

「何個までの的ならいける？」
「ジ……ジ！」
「7個？」

アイガは自身の顔を手で指し、目を点滅させた。

俺はそのことを聞いてから、俺は木一本から錬金で的を出来るだけたくさん作った。
的の山になったが、まだ5日ある。
むしろこれで足りるか心配なぐらいだ。

「じゃあ始めるか！」
「ジ！」

そこから俺とアイガの射撃訓練が始まった。
俺が的を上に向かって投げ、それをアイガが打ち抜く。
ひたすらそれの繰り返し。
品評会前夜くらいになると、ロックオンを使わなくても4枚までなら撃ち抜けるようになった。
流石に俺の肩も限界が近い。

「今日はこのくらいにして明日に備えよう。」
「ジジ！」

そして俺とアイガは最後の特訓を終えて明日に備えるため、それぞれの寝床へと戻った。

翌日、ついに使い魔品評会当日。
俺とアイガが会場に到着すると、既に結構な人数が揃っていた。
そこにはテリーの姿もあった。
ここ最近は格闘訓練もお休みしていたので、授業以外であまり会うことが無かったが、一体何をやるのかとても楽しみだ。
そんな俺の視線に気づいたテリーは、俺に向かってニカっと笑い、口パクで「楽しみにしてるからな」と言った。
俺も「そっちこそ」と返して品評会に集中した。

その後次々と色んな使い魔が現れては、その特技を披露して行く。
コカトリスの石化、イービルアイの透視、他にもジャイアントモールの穴掘りやドリアードの踊りなんて言うのもあった。
そしてついにテリーの番になった。

「23番テリー、召喚した使い魔は火竜です。」
「それでは始めなさい。」

テリーはその声を合図に、火竜の背中をポンと軽くたたくと火竜は、強く羽ばたき始めた。
そして次の瞬間飛び立ったのだが、その軌道は曲芸飛行に限りなく近いものだった。
その軌道はジェットコースターが描くような軌道から、ハンマーへ

ッドのような本物の曲芸飛行まで様々だ。
あまり目にすることの無い飛び方に観客達の眼は釘付け。

「流石テリーだ……でも曲芸飛行なんて良く思いついたなぁ。
まぁきっと色々試して、カッコ良さそうとかいう理由で選んだんだろうな。
でも俺達も負けてない。
方向性は違うけど、有用性は分かる人は分かってくれるからな」

テリーの発表も大歓声の中終了し、俺の番がやってきた。

「２４番レッド、召喚した使い魔はロックゴーレムです」
「それでは始めなさい」

俺達の発表は長いものではない。
むしろ一瞬で終わる。
俺は手に持っていた7枚の木の的を、しっかり握った。

「じゃあ行くぞ、アイガ！」
「ジ」

俺は深く息を吸うと、勢い良く息を吐くのと同時に、上向かってに木の板全て投げた。
空でバラける木の板をしっかりと目視し、自身の腕から小さな石の

弾丸を浮かばせるアイガ。
木の板の上昇が終わり、落下し始めたところでアイガは、的のある方に向け腕を突き出した。

「アイガ、射出！」
「ジ！」

俺の掛け声と共に、浮かばせていた石の弾丸を放つと、それぞれが違う軌道を描きつつ的へと向かって行く。
数秒もしない内に、全ての的を打ち砕いた弾丸はそのまま飛んでいくと危ないから、アイガに落としてもらった。

「以上です」
「……わかりました。
凄い腕ですね」
「ありがとうございます」

俺の発表が終わった時、殆どの生徒は特に感じたものはなさそうだったが、ごく一部がジッとアイガの方を見ていた。
弾丸の軌道が一個一個違うことに気付いた人たちだろう。
昔やった実験で特殊技が命中率によって効果範囲が変わることが分かったんだが、今回の射撃訓練で物理射出系は絶対命中するということが分かった。
その軌道は物理法則を無視して、不可解な軌道を描き必中する。
要するにホーミングってわけだ。
……ロックオンは予想以上に有用な技だった。

きっとアイガをジッと見ている人達は、避けられない弾丸を放つゴーレムが敵にまわった時にどれだけ厄介か分かったのだろう。
そんな視線を感じていると、テリーが近づいてきた。

「アイガ凄いな！　あの石つぶては避けれそうにないぜ！」
「テリーこそ、いつの間にあんな飛行覚えさせたんだ？
あんな軌道描かれたら魔法なんて当たらないぞ？」

俺とテリーは互いを讃えながら、その後の品評会を二人で鑑賞した。

第４３話　使い魔品評会（後書き）

次は主人公自分の理想の姿になるの巻

第４４話　舞踏会（前書き）

目立たないなんて無理さ！
レッド君には無理さ！

第４４話　舞踏会

今日は仮面舞踏会ならぬ、変身舞踏会。
その名もスレイプニルの舞踏会！
この舞踏会は，真実の鏡，という魔法のアイテムを使うことで、自身の理想の姿に変身して、参加する。
自分の素性が相手に分からないために、普段話さないような相手とも気軽に話すことが出来るというイベントだ。
俺もこの舞踏会はとても楽しみにしていた。
自分自身がどんな姿になるのか、そして周りのみんなはその姿を見てどんな反応をするのか。
この時の俺は、ワクワクして始まるのを待っていた。

真実の鏡は周囲をカーテンで遮っており、会場に着くまで他の人に見られることは無い。
要するにその人の正体を知りたいなら、話しかけなければならないということだ。
故に社交界の練習の場とも言えるだろう。

「今からこの中に入って、真実の鏡に自分の姿を映してもらいます。
すると鏡が光り、その人の理想の姿が映し出されます。
そうなればその人の姿自体も、理想の姿に変化されるので、そのまま会場に向かいなさい。
会場には知らない人に見える生徒達がいるだろうが、正体を知りたいなら話しかけなさい。
そうして新たな友好関係を築いていきなさい」

コルベール先生は、そういうと自分自身がそのカーテンの中へと入り、そのまま会場へと向かって行った。

「じゃあ行くとしますか！」
「テリーは先に行っててくれない？」
「どうかしたのか？」
「いや、少しトイレにね」

俺は自分の順番がテリーにバレない様に時間をずらすことにした。
俺がテリーの前後に入っちゃうと、どちらかの姿がバレてしまうからね。
どんな姿になるにせよ、テリーを探すのは楽しそうだし、テリーにも俺探しをしてほしい。

「じゃあ早く分かった方の勝ちな！」
「負けないよ？」
「こっちこそ！」

テリーはそういうとカーテンの向こうへと消えていった。

「さて、どれくらいで行こうかな……」

俺はテリーの5人後に入ることに決めた。

一人、また一人とカーテンの向こうに消えていく。
そしてついに自分の番が来た。

「ついに俺の番か……。
よし！」

俺は気合を入れて、カーテンを潜った。
正面には大きな鏡があり、俺の姿が映っている。
すると鏡が発光し、俺の姿が一瞬見えなくなる。
光が収まって、鏡に映っていたのは……。

「え？　あの、え？」

鏡に映っていたのは、スラッと高い身長、真っ赤なトレンチコートに帽子、中には真黒な執事服を着込んだ黒髪長髪赤眼の男性。
某機関最強の吸血鬼アーカードの姿が映っていた。
強さ、思考、そして何より死ににくさ！
もし彼が守りに入ったら、その守りを抜くのは万の軍勢を抜くのに等しい難易度を誇るだろう。
だけど……怖い。
長身に鋭い瞳、まるで血のように赤い瞳は本能的な恐怖を引きずりだす。

「俺この姿で舞踏会出るの？っていうか真っ赤なトレンチコートってめちゃくちゃ目立つじゃないか！！

そして何よりこの姿は中田譲治ボイス以外は許されないだろ！！！！」

俺はアーカードがかなり好きだったので余計に悲しい。
このまだ子供っぽさが抜けきらない声で、この姿は似合わない。
まぁそれでも舞踏会には出なければならない。
テリーとの約束もあるしね……。
俺は深くため息をつくと、会場へと重い足を進めていった。

会場の中は穏やかな空気だった……俺が入る前までは。
中に入って俺は先ず料理のあるテーブルへと向かったわけだが、俺がテーブルに着く前にそこにいた何人かの人はものすごいスピードで何処かに行ってしまった。
流石に気まずかったが、目の前の料理に集中することで何とか自分の気持ちをごまかした。
この姿で行儀悪くするわけにもいかないので、テーブルマナーを気にしながらの食事だった。
食事を終え、一息つくと全ての人が出そろったのか、舞踏会が本格始動していた。

とりあえず俺は約束通りテリーを探すことにした。
まぁすぐ分かったんだが……だってまんまテリーの大人版なんだもの！
理想の姿が大人版テリーとはね……もしかして父親か？
俺は何となく悪戯してみたくなったので、たった今ダンスを終えたテリーに声色を変えて話しかけた。

「素敵だ　やはり人間は　素晴らしい。」
「！？誰だ！」
「なんてね！僕だよテリー！」
「……レッドか？！」

大分驚いてくれたようだ。
まぁそりゃいきなり後ろから、長身の男性が現れたらビックリするわ。

「勝負は僕の勝ちだね」
「それはいいけど、それ誰だ？」
「この人？　なんていえばいいのかな？」

本当になんて言おう？
物語に出てきた最強の吸血鬼？
いやそんなこと言ったら、なんて作品か聞かれたら困る。
とりあえず昔あったことある旅人ってことにしよう！

「あぁ、昔あったことある旅の人かな？」
「何でそんな人が理想なんだ？」
「少し話したんだけど、自分の信念をしっかり持ち、一人でなんでもできる人だったからね。」
「へぇ～。」

間違ってはいない……よね？
一人で軍とか相手出来るし、人を取り込むことでその人の能力も使えるようになる。
ならなんでもできると表現しても大丈夫！！

「テリーこそ、まるで大人のテリーみたいな見た目だね」
「あぁ、親父なんだ。
いつかは超えてやると思ってるんだけど、まだ超えれてないからな！」
「そっか、早く超えられるといいね！」

その後俺の所為かもしれないけど、テリーをダンスに誘いに来る女性はいなかった。
お蔭で普段話すことの無い家族についての話題とかを話せて、有意義な時間になった。
それにしても怖さだけじゃなくて、普通にカッコいいと思うんだけど、何で俺に話しかけてこないんだろう？
なんか2人ぐらいは俺のことをガン見してたが、どうせ学院長とコルベール先生だろう。

後でテリーに聞いてみると、威圧感が半端じゃなかったらしい。
まぁアーカードさんだから仕方ないか……。

～コルベール　ｓｉｄｅ～

なんだ？！あの男は！？
誰の理想なんだ？
そんなことよりあんな危険そうな男を理想とするなんて！

「テリー君の近くにいるということは、まさかレッド君か？」

ということはもしかして外見が怖いだけなのか？
いやでも……

この後コルベール先生は延々と思考の海に沈んでしまい、周りの生徒から変な眼で見られ続けることになったが、見た目が髪があったころの自分だったため、誰だか気付かれることは無かった。

(side out)

第４４話　舞踏会（後書き）

今回レッドは目立つというよりも、謎の多い人という印象を強めました。
テリーの近くにいた所為でアーカード＝レッドと分かってしまったので、なんであんな人が知り合いにいるんだ？
余裕を持って、ラインメイジに勝った実力。
自我を持つゴーレム。
周囲の印象はおかしな方向に進み続ける。

第４５話　炎蛇からの問い（前書き）

コルベール先生との対談イベント発生！
何時もより短い……あまり思いつかなかったんです！
……ｏｒｚ

そして気付けば１００万ＰＶ突破！
ありがたいですね！

第４５話　炎蛇からの問い

「レッド君、少し話をしないか？」
「はぁ……」

スレイプニルの舞踏会からしばらく経ったある日。
俺は授業の後にコルベール先生の部屋へと招待された。
部屋の中はコルベール先生らしく、発明品が至る所に転がっている。
ヘビ君とかヘビ君とかヘビ君とか……。

「あぁ少し片付いていないが、そこら辺に椅子があると思うから、
そこに座ってください」
「はい」

少し……少しか？
まぁコルベール先生だし、しょうがないね！

「今失礼なこと考えなかったかい？」
「いえ、そんなことはありませんよ？」
「そうか……ならいいんだ」

いやぁビックリしたぁ！
所で俺は何で呼ばれたんだ？
今回は俺何もやってないんだけどな。

「今回呼んだのは、少しレッド君と話をしてみたくてね」
「そうなんですか」

話ねぇ……。

「いきなりだけどレッド君、君は力の使い方についてどう思う？」
「えっと……ちょっと話の意図が見えないのですが」
「君は鍛えている、それこそ他の生徒たちとは段違いな位に……。その力は何のために使う気なんだい？」
「（そういうことか……）前に話したと思うんですが？」
「確かに聞きましたが……のんびり暮らすのに何故あれほどの力が必要なのですか？」
「これほどと言うと？
僕は唯のラインメイジですが？」

なんのことを指している？
格闘技？いや危険な技は学園で練習していないからあり得ない。
魔法か？確かに圧縮は高威力だけど、そこまで騒ぐほどじゃないだろう。
じゃあなんだ？

「君自身の魔法もそうだが、それ以上に君の使い魔……アイガ君と言いましたか？
彼の能力は正直異常だ」

見せていない自己修復機能が一番ヤバいんですが……言えねぇ、絶対言えねぇ。

「品評会の時に披露した同時射撃は、弾の一つ一つが違う軌道を描きながら、動く的へと吸い込まれるように当たって行った。
もしあれが人を的にしたのなら、容易に命を奪うことが出来るだろう。
君は一体何処を目指しているんだ！！
そうだ、この間の舞踏会で見た君の理想の姿も気になった！
何だあの人物は？！」

アーカードさんです……。
やっぱりあの時の視線の一つは、コルベール先生だったか。

「まるで化け物じゃないか！！
あんな威圧感を放つ相貌に今まで私は会ったことが無い！
君は彼の何処を理想としているのだね！」
「いや、それは……」

それはある意味当然です。
あの人吸血鬼ですし、数えるのが馬鹿らしくなる位人殺しまくってますから。
それでも彼は化け物としてのプライドがあるから、無駄な殺しはしませんよ？

っていうかこの世界にあの方居ないし、いたら大変なことになってますよ。
主にロマリア辺りが……。

「いや、それは良いとしよう。
私が聞きたいのは君の力の使い方についてだ！
君はまだ力の使い方を間違ってはいないが、間違ってしまってからでは遅いんだ！」

コルベール先生……貴方の心配は分かりますよ。
でも貴方は自身の過去に捕われ過ぎていると俺は思う。
軍において上官の命令は絶対なのだから……。
まぁコルベール先生のような経験をしたことがあるわけじゃないから、ハッキリは言えないんだけどね。

「僕の力の使い方は、のんびり暮らしていくためですよ。」
「本当のことを言いなさい！」
「貴方は俺に何をさせたいんですか……。
本当のことですよ」
「……なら詳しく聞いてもいいですか？」
「のんびり暮らすといっても、もし盗賊や魔獣が領に攻めてきたらのんびり所じゃないですからね。
もし飛竜が来たりしたら今の僕じゃ撃退出来ないかもしれない。
ならもっと鍛えなければ、静かに暮らすことなんかできない！」
「……本当にのんびり暮らしたいというのが理由みたいですね」

何を当り前なことを言うかね。
俺信用なさすぎだろ……。
まぁ隠しごとも少なくないしね。

「一応舞踏会で成った人は、自身で何でもできるという万能性に憧れていたので、あの人の姿になったんだと思います。
因みに威圧感とかは、きっと傭兵とかやってたせいだと思います」
「そうだったのですか」

ごめんコルベール先生。
これに関してはボカシまくってる。
流石に吸血鬼って言ったら正気を疑われそうだし、下手にロマリアに情報がバレたら俺異端審問されるよ。
コルベール先生は、原作でフーケことロングビルにめっちゃ情報漏らしてたし……あんまり口が堅くなさそうだもの。

「どうやら私の考え過ぎのようでしたね。
疑ってしまってすいません」
「いえ、気にしてませんから」
「それはありがたいです」

その後は延々と火の力を使った発明品の説明や、今作っているものの説明をされた。
……凄いとは思うんだけど、如何せん長い。
しかも下手に反応すると、話が伸びていくから相槌も考えなきゃならん。

話が終わる頃には、俺の精神疲労はＭＡＸに近かった。
お疲れ俺……今日は早く眠ろう。

第４５話　炎蛇からの問い（後書き）

微妙に難産だった……。

第４６話　卒業（前書き）

そろそろ卒業させます。

第４６話　卒業

ついに俺が学院から卒業する日が来た。
長いようで短かった学院生活。
思い出されるのは……テリーとアンディとの訓練の日々。
あとアイガとの触れ合い。
他？知らんがな！！
決闘や舞踏会なんてなかった！

「レッド、どうした？」
「いや、なんでもないよ？」

実は現在卒業パーティの真っ最中。
俺はテリーとアンディと一緒に食事を摘まみながら、過去を懐かしんでいた、

「レッドはこの三年間どうだった？」
「僕は結構楽しかったよ。
そういうテリーは？」
「俺も楽しかったぜ！
レッドにも会えたしな！！」
「……ぼ、僕もだよ」

そんなストレートに言うなよ！
照れるだろうが！！

「レッド、兄さん……何か危ない空気になってる気がするよ？」
「ん？　なにがだ？」
「……」

ん？さっきから変な視線が……何を見ている女子！！！
そんな目で俺達を見るんじゃない！！
そこ！　頬を赤らめるな！！！

「なんかレッドの顔色が凄く赤いんだけど……」
「どうした？　風邪か？」
「いや、なんでもない。
とりあえずこの話はもう終わりにしよう」

終わらないと俺が困る。
俺はノーマルなんだ！！

「ところでテリーは卒業したらどうするんだ？」
「あぁ俺は実家に戻って、親父の手伝いしながら、色んな事学ぶつもりだ」
「以外とマトモで、僕はビックリだよ。
てっきり全てぶん投げて旅にでも出るかと思ったよ」
「俺は、お前がどんな目で俺を見ていたか気になるぞ？」
「もちろん頼れる友人さぁ」
「うっわ、凄い腹立つ顔しやがって！」

笑顔でドツキ合う俺とテリー。
そしてそれをちょっと離れた位置から、微笑みながら見ているアンディ。
周囲には女子がなんか危ない表情で俺達をジッと見ている。
何だこのカオス。

「はぁはぁはぁ……ところでレッドは卒業してからどうするんだ？」
「僕も似たようなものだよ」
「ほぉ……俺はてっきり森にでも引きこもって、隠居するのかと思ったぜ？」
「へぇ……テリー、君覚悟できているよね」
「上等だ！！」
「「表に出ろ！」」
「まぁまぁ、落ち着きなよ二人とも」

そんな馬鹿話ばっかりしながらパーティの時間は過ぎ去っていく。
途中コルベール先生と学院長が今度家の両親に挨拶に行くという宣言があったりした。
そしてそんなパーティも終わり、学院最後の夜がやってきた。

最初はベットに入ってすぐに寝ようとしたんだが、３年間を思い出すとなかなか眠れずにいた。
俺は気分転換に、アイガに会いに行くことにした。
アイガとはこれでお別れと言う訳ではないが、アイガにとってここは短い間ではあるが最初の住処になるわけだ。

何か思い入れもあるのかもしれない。
そんなこと思いながら使い魔宿舎へと向かって行った。

「アイガ、お前は学院生活楽しかったか？」
「ジ？……ジ！！」
「そっか、俺も楽しかったよ」
「ジジ」
「そういえばアイガには、まだ俺の家のこととか話してなかったな」

俺はその後、父さんと母さんのこと、俺の昔話とかをアイガに話して聞かせた。
アイガは言葉を喋ることは出来ないが、相槌や首振りで俺の話に反応してくれていたので、とても話しやすかった。
俺は眠気に襲われながら話していると、いつの間にか眠ってしまっていた。
そんな俺にアイガは周囲から干し草を集めて掛けてくれた。

「ジジジジ……」

俺が学院を出る朝。
それぞれが自分の家の馬車なり、何なりで帰っていく。
良く見るとテリーに告白している女の子達がいた。
殆どが断られていたが、マリーの返事だけは色よい返事を返したらしい。
なんか顔と顔が近づいて行ったので、俺はマッハで顔を背けた。
しばらくすると、テリーはマリーを見送ったのか、こっちに近づいてきた。

「よぉレッド、なんでそんな目でこっちを見るんだ？」
「いやぁ、お幸せにね？」
「あぁ見てたのか……」
「まぁね……それは良いんだけど、もうあまり時間なさそうだね」

テリーの家の使用人がこっち見てるし。

「あぁ、でもお前に言っておきたいことがあってな」

「？」
「今日俺達は学院からでて、家に戻る。
だが……いつでも会いに来てくれよ！
お前は俺の相棒だからな！」
「テリー……。
うん！そうだね！
テリーこそ何時でも来てくれていいから！」
「「また会おう！」」

俺はテリーを見送って、テリーの乗る馬車が見えなくなるまで手を振り続けた。
横にいるアイガも小さく手を振っていた……微妙に萌えたのは俺の中だけの秘密。
テリーも見えなくなってしばらく経つと、俺の家の馬車がやってきた。

「レッド！迎えに来たわよ！」
「母さん！？何で母さんが！？」
「なによ～迎えに来ちゃいけないって言うの？
私の知っていたレッドはもういないのね……よよよ～」
「（テンション高くね？）いやいや！母さんが迎えに来てくれて嬉しいなぁ！
すっごくうれしいなぁ……」
「ワザとっぽいけど許してあげるわ。
それよりその子が貴方の使い魔？」
「ジ？！」

母さんのテンションについていけていなかったアイガは、いきなり自分のことに話が飛んで驚いているようだ。

「あ、うん。アイガって言うんだ。
アイガも挨拶して？」
「ジ！」
「あらあら」

アイガは、上半身を９０度曲げてお辞儀をした。
母さんは見た目に似合わずコミカルな動きをしたアイガに興味津々だ。
これは馬車の中で色々聞かれそうだ……頑張れアイガ！
俺はアイガに重量操作の魔法を掛けて馬車へと乗せた。

こうして俺の学院生活は幕を閉じた。
相棒とのしばしの別れを経験し、俺はまた少し成長できた気がする。
今度会う時までにもっと強くなろう……テリーに笑われない様に！

「ジーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

「あらあら、もっとお話をしましょう？」

……とりあえず今は母さんからアイガを助けることに集中しよう。

第４６話　卒業（後書き）

さぁまた実家フェイズだ！！！！

第４７話　新旧相棒対決（前書き）

久しぶりのニューラ！

第４７話　新旧相棒対決

長い間馬車に揺られて、やっと家に到着した。
長期の休みには帰ってきていたけれど、やっぱり家は良いな！
すると母さんは俺より先に馬車を降りて、両手を広げた。

「おかえりなさいレッド」

なんか凄く嬉しかった。
でも恥しかったから抱きつきはしなかったけど、出来うる限りの笑顔で

「ただいま母さん」

と一言だけ返した。

とりあえず母さんとはそこで分かれて、俺は父さんに帰って来たことを伝えるために、父さんの部屋へと向かった。
因みにアイガは俺の後ろをついてきてる。
父さんにも顔合わせしておきたいしね。
俺は父さんの部屋のドアをノックし、部屋へと入って行った。
父さんは、休憩中だったらしく、椅子に座りながらグラエナの頭を撫でていた。

「ただいま父さん」
「あぁ、おかえりレッド。
後ろにいるのは、お前の使い魔か？」
「うん、俺の相棒アイガだよ」
「ジ！」

父さんとグラエナもやっぱりアイガが気になるらしい。
まぁ見た目はゴーレムだしね。
それにグラエナにとっても興味深い存在だろう。
なんてったって会ったことの無い伝説級のポケモンなのだから。
それに前回の休みの時は、馬車の大きさの問題でアイガを連れてこれなかったから話だけはしていたから、ゴーレムと間違えることは無かったようだ。

「本当に見た目ゴーレムのままなんだな」
「見た目だけだよ……実質この子殆ど無敵だから」
「どういうことだ？」
「この子にコアは存在していないらしくて、一度に欠片も残さず消

滅させなければ、周囲から石を手繰り寄せて自分の身体を再生できるから……」
「……何だその凄まじい能力は？！」

しょうがないじゃないか……本来ならクリアボディっていう特性のはずなんだけど、図鑑の説明が特性になってしまってるんだもの！

「いや、他にも凄まじい攻撃方法を持っていたりするんだけど？」

試してないけど大爆発、破壊光線、アームハンマー、電磁砲辺りは威力がとんでもないことになってそうなんだよ。

「いや……もういい、充分だ。
アイガとやら、あまり派手なことをするなよ？」
「……ジ」
「レッド！！　コイツ絶対何かやらかすぞ！」
「いや、父さん。
アイガの茶目っ気だよ……たぶん」

確かにアイガは、派手にぶっ放すの好きだからなぁ……。
指示を正確に与えないと、とんでもないことになるかも知れない。
流石に味方に被害を与えるほど、馬鹿じゃないのが唯一の救いかな？
その後学園でどんな事があったとかを父さんに説明してたんだけど、ある程度話が終わったので一旦部屋に戻ることにした。

「じゃあとりあえず、俺部屋に戻るよ」
「あぁ夕食の時にまた会おう」

俺はそういって、アイガを連れて部屋を出た。
アイガは何かを考えるように若干下を向いていたが、特に問題は無いと思ったのでそのまま自分の部屋へと向かった。

そして自分の部屋に戻った俺は、久しぶりにこの世界における、初代相棒ことニューラを呼び出すことにした。
しばらく会ってないから、俺も会うのが楽しみだ。

「来いニューラ！」

いつも通り光の中から俺に向かって飛び出すニューラ。
だがそこからはいつも通りじゃなかった。

「ジ」
「ニャ！？」

ニューラの進行方向、俺の前にアイガの大きな手が翳されたからだ。
飛んできたニューラは、ベチャっとアイガの手に顔からぶつかった。
それはまるでアメリカンコミックの様に……。

「……大丈夫か？」
「ニャーーーーーーーーーーーー！！！！！」
「ジ！」

何かアイガが誇らしげに胸を張っているのが気になるが、とりあえずニューラは顔を押さえながらゴロゴロと転がっている。
そりゃ痛いわ……石の壁に突っ込んだ訳だからな。
ニューラもしばらく転がっていたが、痛みが治まったのか立ちあがって、再び俺に向かおうとしたが、やはり立ちはだかる石の壁。

「……ニャニャ！」
「ジ！」

なんか視線で熱いバトルをしている気がする。
たぶん「どきなさい！」「だが断る！」と言ったところかな？
……なんでアイガはニューラをこんなに敵視する？

「アイガ？ニューラは敵じゃないぞ？」
「ジ……チッ」

舌打ち！？
なんか異様に腑に落ちないんだが……。
何かニューラも機嫌が悪そうだし、とりあえず自己紹介させようか。

「とりあえず俺の使い魔でレジロックのアイガ」
「……ジ」
「俺が最初に呼び出した子のニューラ」
「……」
「ニューラ？」
「……ニャ」
「これから二人は良く会うことになると思うから、仲良くな？」
「「……チッ！」」

だから何で舌打ち！？
っていうかアイガは舌ないだろ……どうやってんだ？
こんな感じにいきなり波乱が起こったが、ニューラの姿を見て改めて実家に帰ってきたなぁと感じた俺だった。

その後も夕食の時間までまだ時間があるので、ニューラに学園での話を話して聞かせていると機嫌は段々戻って行った。
しかしそれもアイガの召喚をするまでの話。
アイガが出てきてからは、少しずつ頬が膨らんでいき、顔もソッポを向いて行った。

なんかそんな姿も可愛かったから、とりあえず頭を撫でていたら、
今度はアイガが微妙に機嫌が悪い気がする。
具体的に俺の肩を小突いている。
地味に痛い。

「どうしたアイガ？」
「……ジ」

アイガが機嫌悪い理由も分からないまま、ニューラを撫でていると、
ニューラが一瞬アイガの方を向いて笑った。
瞬間二人は立ちあがって距離を開けた。
アイガは腕をニューラへと向け、ニューラは爪を伸ばした。
俺はいきなり始まった一触即発の空気に戸惑いながらも止めるために動いた。

「待て待て！なんでそんなに仲が悪いんだ？」
「ジジ！」「ニャー！」
「いや、分からないから……」

俺はとりあえず翻訳を頼むために、ホロを呼び出した。
すると二人の言い分は「新入りが生意気」「私こそが相棒にふさわしい」ということだった。
正直嬉しいが、仲たがいは困る。
故にとりあえず苦笑いしているホロに礼を言ってから戻し、二人に話しかけた。

「俺は二人とも相棒だと思ってるし、大切だ。
だから仲たがいされると……その、困る。」

俺の言葉を聞いてくれたのか、なんとか戦闘態勢は解いてくれたが、
互いの顔は見ようとしない。
ちょっとずつ仲良くなってもらうしかないか……俺はこれからの苦
労を思うと少し頭が痛かった。

第４７話　新旧相棒対決（後書き）

もうそろそろＰＶが百万……何これ怖い。
嬉しいけどね！！

第４８話　湖に響く歌声（前書き）

ラプラス可愛いよラプラス。
今度友人手伝ってもらって、ミロカロスを作りたいと思っています。
この作品にも出せるといいなぁ。
因みに名前はハク。
元ネタは……みんなわかるな？

あとプチスランプ入りましたぁ……書けても１話２０００字以内になってしまう。
スランプの早期脱出を目指します！

第４８話　湖に響く歌声

実家はやっぱりいいなぁ……。
とりあえずこの家において、俺があまり隠しごとをしなくても大丈夫という点が最も大きい。
学院ではポケモンのことも話せなければ、魔法も土のラインまでしか使えないという縛りつき。
お蔭で水の魔法が衰えている可能性がある。
ということで何時もの森にＧＯ！
まぁ家でもいいけど久しぶりに行ってみたいしね！

そうしてついた森は、前来た頃と何も変わっていない……。
俺は水の魔法の訓練のために来たので、湖へと向かった。
因みに今回アイガはお留守番。
水との相性が良くないからね。
それじゃあとりあえず貯水持ちのポケモンを呼ぼう。
呼んだことがない子がいいかな……ラプラスにしよう！！
育てていたから愛着もあるしね。
ラプラスは一応Ｌｖ１００の子と５０位の子がいるんだけど、１０

０の子は貯水じゃなくてシェルアーマーだからから５０の子にしよう。

「来いラプラス！」

すると湖の上に光が現れ、そこから３メートルの首長竜が現れた。
背中の甲羅とつぶらな瞳がチャームポイント！
ラプラスは周囲を見渡して俺を見つけると、目を輝かせて俺に近づいてきた。
俺の眼の前まで来ると、背中を向けて首だけ俺の方を向けた。

「俺に乗れって？」
「ラース」

声自体は綺麗なんだけどなぁ……鳴き声がなぁ……。
俺のそんな考えがラプラスに伝わってしまったのか、少し悲しそうな顔になってしまった。
俺は慌ててラプラスの背に乗って首を撫でた。

「ごめんな？
ちょっと聞いたことない鳴き声だったからビックリしたんだ。」
「ラー……」

微妙に嘘をついてしまったが、少し機嫌が戻ったから良しとしよう

！！
俺はそのままラプラスの背の上で魔法の練習をすることにした。

「何から始めようか……。
とりあえず圧縮から入ろう。」
「ラー？」

ラプラスは俺が何をやろうとしているのか理解していないみたいだ。
まぁ魔法なんてあの世界になかったしな。
ラプラスは最初首を傾げていたが、杖を出した辺りから興味深そうにジッとこっちを見ている。

「アクアボール」

先ずは１５０センチ位の水球を作り、宙に浮かべる。
そしてそれを徐々に小さく、より小さく圧縮して行く。
ここで制御を失敗すると、大変なことになる。
まぁ今回はそんなに大量な水を圧縮してないからそうでもないんだけど……。

「もっと小さく……」
「ラ～……」

俺が今考えているのは圧縮した水の玉を出来る限り小さくして、そ

れを口、鼻、耳のどれかにＩｎして解放！って言うのを出来るようにしたい。
対人戦ならかなり有効かつ、大きさが小さければ小さいほど成功確率は上がる。
まぁかなりの精密制御が必要になるから、一度にたくさんの水球は作れそうにないんだけど……。

「まぁ今はこんなところかな？」
「ラー！！」

俺は手の平サイズまで圧縮した水を、ラプラスの頭の周りに周回させて、制御の練習と共にラプラスの機嫌を取ることにした。
いやね？どうせなら歌聞いてみたいじゃん？
機嫌良くないと歌わないって図鑑に書いてあったはずだし……。
人を乗せるのが好きとも書いてあったから、魔法の訓練も甲羅の上でやっているんだけどね。

その後俺はラプラスの目の前で圧縮した水の一部を開放して魔法の噴水作ってみたり、虹作ってみたりした。
途中加減を間違えて、水球が破裂して俺とラプラスに水が掛かりまくったんだが、なんか楽しそうにしてたからＯＫだ！
虹を作った辺りで気分がノッてきたのか歌を歌い始めた。

「ランラン、ランララランランラン、ランラン、ランララ「ちょっと待った！！！！」」
「ラ？」

あぶねぇ……危うく金色の野原が見えるところだった。
っていうか何で知ってるんだよ。
因みに俺としては青い衣纏った姫様よりも、金色の鎧を纏った姫様の方が好きです。

「とりあえず別の曲にしてくれると俺的にも助かるかな？」（作者的にも助かります！）
「ラ～」

何か微妙に納得できてないみたいだけど、とりあえず曲は変えてくれるようだ。
でも次に歌い出した曲は……。

「ら～ららら、ら～らら、ら～らら～ら～。」
「うん、これなら……もんだ……い……な……ＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺＺ」

てんてんてれてん！
レッドは全回復した！
周囲はもう赤く染まっている！
……あれって某ふっ飛ばしバトルのピンクの球体が歌うやつだよね。

「……歌ってくれたのは良いんだけど、本当に，うたう，だったのな」
「ラ！」

いや誇らしげにするところじゃないから！！
まぁ滅びの歌とかじゃなくて良かったよ……。

「今日はもういいけど、今度歌ってくれるなら眠たくならない様にしてくれよ？」
「ラース！」

首を縦に振ってるから分かっているんだろうけど、出来るのか？
まぁ多分できるんだろう。
出来なかったらまた俺寝ることになるしね。

「さてと、そろそろ暗くなってきそうだから、帰るとしようかな」
「ラ〜……。」
「また今度呼ぶからな？」
「ラース！」

俺はそう言ってからラプラスを還した。
そして俺自身も、フライで家へと向かって飛び立った。

第４８話　湖に響く歌声（後書き）

あぁ因みにレベル１００のラプラスはセイレーンという名前にしています。
歌→人魚？→セイレーンだ！！！
……こんな感じに連想ゲームや直球で名前を付けるのが俺クオリティｗ
今まで出てきた名前持ちの由来は設定に随時加えていきますので、暇だったら覗いてみてください。

第４９話　石化の蛇王（前書き）

ハリーポッターのバジリスクってめちゃくちゃでかかったなぁ……

第４９話　石化の蛇王

ある日俺は父さんに呼ばれて、朝から領内の村に向かっていた。
何やら村の近くに魔獣がいるという話を聞いて、先に父さんが向かったのだが想定以上に厄介らしく、俺にお鉢が回ってきた訳である。

「それにしても父さん一人でどうにか出来ないっていうことは、かなりヤバいのか？」
「ジ？」

今回はアイガも連れてきている。
ある意味初の実戦となるアイガなのだが、特に気負いはしていないようだ。
俺としては４戦目になるのか？
風竜、オーク、山賊、リークと来た。
ゲームの難易度的に言うと、ハード、ノーマル、イージー、チュートリアルか……あれ？順番可笑しくね？
まぁ風竜は俺が倒したわけじゃないけど、対峙したのは事実だしね。

「それにしてもまたあの村か……おっちゃん元気にしてるかな？」
「ジジ？」
「あぁおっちゃんて言うのは……」

俺はアイガに酒場のおっちゃんのことを話した。
アイガとしてはあまり興味の無い内容だったらしく、相槌はしてい

たが深く聞き返してくることは無かった。

「遅かったなレッド」
「いや、これでも急いだんだよ？」
「ジ！」
「ところで父さん、厄介な魔獣ってなに？」
「あぁ……バジリスクだ」
「バジリスク？！　それは厄介すぎるでしょ……」
「しかも成体だ……本当に何でこんなところにいるのやら」

バジリスクとは、猛毒を持つ大蛇なのだが、最も厄介なのは成体まで育った個体が持つ石化の蛇眼。
まぁ見たら即死ってわけじゃないけどかなり危険なのには変わりない。
石化を解く薬も売ってはいるんだが、その薬を作るためにバジリスクの毒が必要なので、否応なく値段は高く設定されている。
そのため家にもあるにはあるが、片手で数えるくらいしかない。

「村に犠牲者は出てるの？」
「いや今のところ出ていないらしい……奇跡に近いがな」
「父さんは、姿確認したの？」
「あぁ、体長６メイルくらいのが一匹だ」
「いや……そんなの沢山いたら危なすぎるでしょ」
「それは言えてるな！」

父さんはまるでアメコミのように「ＨＡＨＡＨＡＨＡ」と高笑いをした。
……余裕あんじゃん父さん！

「はぁ……で、どうするの？」
「あぁ流石に正面から行くのは、厳しいからな……風下から近づいていって、先ず目を潰す」
「それが一番いいね」
「その後は……お前に任せる」
「は？！幾ら石化の恐れがなくなったからって、即死級の猛毒もちなんだよ？
実戦経験が少ない俺の手には余るよ……」
「誰だって始めてはあるもんだ。
俺も援護してやるから頑張ってみろ」

想像以上に厳しい戦いになりそうだなぁ……。
不意に俺は肩を叩かれたので、後ろを向くとアイガが自身に腕を向けて立っていた。

「アイガも手伝ってくれるって言ってる様だし、頑張ってみないか？」
「わかったよ……やるよ！」

どっちにしろ戦わなきゃいけないんだから、援護か前衛かの違いだろ！
なら何にも問題ないさ……んなわけないだろ！！！！
一発噛まれたら即死亡とか怖すぎるぞ。
でも父さんにしてもそれは同じだ。
なら父さんより動きが速い俺の方がまだ安全なのかもしれない。
それにまだ試してないから分からないけど、特性めんえき持ちの子を装備すれば毒は効かないはずだ！
俺はそう自分を勢いづけながら、父さんがバジリスクを見たという場所の辺りに向かって行った。

しばらく歩いた先にあった沼地にその姿はあった。
その姿はまさに蛇の王。
６メートルにもなる巨体をうねらせて、その沼が自分の物だと主張しているようにも見えた。

「あれか……そういえば聞いてなかったけどどうやって目を潰すの？」
「あぁ教えてなかったか、これだよ。」
父さんはそういって、自分の杖を指さした。
まぁそうだとは思ってたけど……でもどうやって？

「ゴーレムで気を引いて、ブレットで狙撃する」
「そっか……」
「レッドの方は準備出来ているのか？」

装備は一応しておいた。
死にたくないから今回はいつも以上に強いのを装備した。
Ｌｖ１００のカビゴン……その名もト〇ロだ！！
なんか伏字にされた気がする。
まぁいい、実はＬｖ１００でも１体までなら制御出来るようになったのだ！！
因みに地味に手の色が変わっているんだけど、手袋しているので父さんにもバレていない。
今ならアイガと力比べできる位の力はあると思う。

「出来てるかな？」
「よし！じゃあ１０数えてからバジリスクの前にゴーレムを出して気を引く。

そしてタイミングを見て、目を潰すから、そこからはお前の仕事だ。
気を抜くなよ？」
「了解！」
「ジ！」
「１０、９，８，７，６」
「アイガ気合入れていくぞ！」
「ジジ！」
「５，４」
「（ふぅ、俺は死なない俺は死なない俺は死なない俺は……死なない！）」
「３、２、１」
「「０」」

父さんは０の合図とともにバジリスクの前に石製のゴーレムを５体作り出し、撹乱し始めた。
そして父さんはバジリスクの眼を見ない様にしながら、顔に向かって散弾銃よりも高い密度の石の弾幕を放った。
父さんはバジリスクが凄まじい声を上げながら苦しんでいるのを確認し、目が潰れているのが分かったらしく、俺の方を向いて一度深く頷いた。
こうして俺の５回目の実戦が幕を開けた。

第４９話　石化の蛇王（後書き）

正直石化は卑怯だと思います。
まぁ見たら死ぬ目の方がヤバいけど……そんなの直死の魔眼より質が悪いから！！！

第５０話　蛇王の最後（前書き）

ついに５０話……もうゴールしてもいいよね？
まぁまだ続くけどねｗ
っていうか５０話で未だ原作に入らないとかどんだけぇ～
キンクリするか？

第５０話　蛇王の最後

父さんのおかげで一番の脅威になる蛇眼は潰せた。
ここからは俺の仕事になる。
流石に怒りながら、周囲に尻尾をぶつけまくっているバジリスク相手に無策というわけにもいかない。

「アイガ、尻尾を掴んで動きを止めてくれ」
「ジ！」

アイガはバジリスクに向かってゆっくりと近づいていき、振り回している尻尾をガシッと両手挟んだ。
そのことでアイガの位置を把握したバジリスクは、アイガに巻きついて絞めつけようとした。
しかしアイガはそのまま６メートルもある蛇をブンブンと振り回して、地面に叩きつけた。

「……俺いるのか？」
「……いいから行きなさい」

俺と父さんはアイガの無茶っぷりに茫然としたが、俺も参戦するために慎重に近づいた。
俺はとりあえず手始めに未だ暴れているバジリスクの尻尾に狙いを定めて、ロックスピアを放ったが、オークの時とは違って貫通するどころか尻尾の半分くらいまで刺さって止まってしまった。

「硬いな……。
やっぱりここは内部から攻撃するのがベストか？」

俺は暴れるバジリスクを観察しながら、アイガの方を見た。

「アイガ、少し時間を稼いでくれ！」
「ジ！」

俺は慎重に、且つ素早くアクアボールを発動し、その直径をどんどん広げていく。
その大きさが約3メートルになった位で大きくするのを止める。
ここからが大変だ。

「圧縮！」

バジリスクも俺が何かやっているのは気付いたようだが、目も見えないし尻尾に岩が刺さっている。
さらにアイガが真ん中辺りを押さえているから、大きく動くことも出来ない。
俺は徐々に圧縮率を上げていき、水球の大きさが小さくなるにつれ、俺も集中しなければ危なくなってくる。

「クソ！　まだこの圧縮率じゃ駄目だ！
スマンアイガ、もう少しだけ耐えてくれ！」

アイガの腕がバジリスクが暴れるたびに、少しずつ欠けていく。
まぁその都度何処からともなく、石が飛んできてその部分にくっついているが……。
何にせよ急ぐに越したことは無い。
最低でも後5センチは圧縮しないと駄目だな。

「後少し……。」

俺は脂汗を流しながら、水球を圧縮していく。
後2センチだ！
杖を握る手に力が入る。

「後1センチ！！」

自分の限界が近付いている。
訓練ではもっと早く水球を圧縮できたが、やはり実戦で使うのは話が別だな……。
精神力の減りが半端じゃない。
これを外したら魔法で倒すのはおそらく無理だろう。
頭部の硬さは尻尾よりも硬かったはず……ならその硬さを突破する魔法は今の俺には使えない。
自分の力で倒したかったら、ミスは許されないわけだ！

上等じゃないか！

「圧縮完了！
アイガそいつを放して、一気に後退。
後は俺がやる！」
「ジ！」

アイガがその拘束を解くと、バジリスクは少し暴れただけで、俺のロックスピアを砕いた。
もう見える範囲からアイガは離れていたから、今アイツの近くにいるのは俺だけだ。
目の見えないバジリスクに自身のことを認識させるために俺は、足元に落ちていた石を蹴っ飛ばしてぶつけた。
そのことで俺の存在に気付いた、バジリスクはものすごい咆哮を上げながら俺に向かって口を開けながら、突撃してくきた。
１０メートルあった距離もみるみる内に縮められる。

「よし、飛んでけコンプレッションボール！」

俺は、大きく開いた口の中に圧縮したアクアボールを放り込んだ。
そして突撃を避けるために、横っ飛びして転がった。

「解放！！」

俺がこの言葉と共にアクアボールの圧縮を解除すると、バジリスクの体はその長い身体の真ん中辺りから水の刃に両断され、周囲にバジリスクの血が溶けた大量の水が飛び散った。
一応血にも毒があると困るので、俺は自身を取り囲むように石のドームを作って、水を防いだ。
１０秒くらいしてからドームを解除するとそこは、血の海だった。

「生臭い……」
「当たり前だ馬鹿もの！」

俺は突然父さんに拳骨をされた。

「イタッ！なにするんだよ父さん！」
「危うく俺に血が掛かるところだったじゃないか！
即死はしなくても具合悪くはなるんだぞあれ！！」

あぁそうだったんだ……。

「それはごめんなさい。」
「それとこの沼をどうするつもりだ！
まったく村長になんていえば……。」
「あぁそれならなんとかなるかも？」

俺はスイクンを召喚し、沼を綺麗にしてくれるように頼むと、特に嫌がることもなく綺麗にしてくれた。
まぁ目立つからお礼を言って、すぐ還したんだけどね。
因みに父さんは横でスイクンをジッとみていた。

「なんとかなったよ？」
「……それはいいんだ。
あれはなんだ？」
「あぁスイクンのこと？前話さなかったっけ？」
「あぁ……聞いてはいたが目で見ると印象が大分違う。
伝説といったか？
確かにあの神々しさは伝説になっても可笑しくない。
だからこそ他の子達よりも召喚する時には注意しなさい」

そんな父さんの助言を胸に刻み村へと戻った。
その後バジリスクの死骸を村まで持って帰って倒したことを証明すると、村長はホッとしたようにため息をついた。
そしてやることを終えた俺達が村から帰ろうとすると、夕食を食べていかないかとおっちゃんに誘われた。
しかし今から帰れば夕食までに帰れるので、丁重にお断りして帰路についた。

帰り道の馬車の中。
父さんは俺に一言言った。

「良くやったな」

その一言は俺の心に深く響き、今さら自身が生死を掛けた戦いを無事に終えたということを実感した。
そして俺も今日のお礼をアイガへと言った。

「ありがとうアイガ。
今日は助かったよ。
これからもよろしくな！」
「ジ！」

俺はアイガと拳同士をぶつけて、絆を改めて確認した。

第５０話　蛇王の最後（後書き）

あぁぁぁぁやっぱり戦闘きついよぉ。
ギブミィ臨場感ｗ

外伝　ルイズの憂鬱（前書き）

ワルドなんかいなかった！！

外伝　ルイズの憂鬱

また今年も誕生日の時期が近づいてきた。
昔は楽しみな日だったのに、今では少し憂鬱な日だわ。

「はぁ、またあの鬱陶しい視線に晒される日が来るのね……。」

昔の蝶よ花よと持ち上げられた私は、魔法を上手く使えないことを知られ始めた途端に見る目が変わっていった。
ちぃ姉様はトライアングルクラスの魔法使い、エレオノール姉様はアカデミーの優秀な研究者なのにこの子はみたいな目で見られる。
でも私は公爵家の娘だから、表立ってそれを口に出されることは無い。
それが余計に腹が立つ。

「もう！言いたいことがあるならはっきり言いなさいっての！」

私はここ数年の誕生日を思い出して、その憤りを枕にぶつけた。
枕をバスバスと殴っていると、家族以外で唯一見る目が変わらなかった一家を思い出した。

「レッド兄様……。」

ドリュウズ家の長男、レッド・ド・ドリュウズ。
私にとっての兄のような人……私に好意を抱いてくれた殿方。
ドリュウズ家の人達だけは、私に向ける目が変わらない。

「今年は何をくださるのかしら？」

私は兄様から貰った手作りのブローチを撫でながら、兄様のことを思い出していた。

〜回想〜

あの日私は今以上に不安定だった。
他の貴族の子供たちは、既にコモンスペルを使えていたのにも関わらず、私はいつになっても魔法を上手く使えない。
物を浮かせようとすると爆発、光を照らそうとすると爆発、重さを軽くしようとすると爆発。

爆発……爆発……爆発……何をやろうとしても爆発ばっかり。
自分が何の属性を持っているかすら、わからなかった。
母様からも物覚えが悪いと叱られて、幼かった私は泣きながらその場から逃げた。

そうして逃げた末にたどり着いたのは、私が良く来る，秘密の場所，。
中庭にある池は、昔舟遊びするため作られた場所だったのだけど、姉様達も大きくなって誰もここに気を止める者はいない私だけの秘密の場所。
私はそこにある小さな船に乗って、船に用意していた毛布に潜り込んだ。

私以外に誰もいないこの場所は、水の流れる音だけが聞こえる静かな空間だった。
そこで私は自身を責め続けていた。

怒られるのは私が全部悪いんだ。
姉様達よりも馬鹿な私が悪いんだ。
全部、全部、全部！！
私はそう思いながら、静かに泣いていた。
すると不意にレッド兄様の声が聞こえた気がした。

「……。」
「やっぱり気のせいよね……誕生日でもないのに兄様が来る事なんて今までなかったもの。」

「……う！」
「何も出来ないからって兄様に頼るなんて……最低だわ。」
「……嬢！」
「こんな女の子なんか幾ら優しい兄様だって嫌いになってしまうに違いないわ。」
「……ズ嬢！」
「……嫌！それだけは嫌！」
「…イズ嬢！」
「嫌われたくない！！」
「ルイズ嬢！！」

突然私の乗っている船が揺れて、毛布が誰かに剥ぎ取られてしまった。
一瞬逆光でだれか分からなかった。
目が慣れてきて、私は自分の眼を疑ったわ。
そこには誕生日以外に会う機会がなかったレッド兄様の姿があったのだから。

「にい……さま？」
「どうしたんだ、ルイズ嬢？
目が赤いけど……泣いていたのか？」

今いるはずの無い兄様に、頭を撫でられて私はようやく兄様が今ここにいることを実感した。
そして私は何も考えず、兄様に抱きついた。
最初兄様は戸惑っていたようだけど、私が胸元で肩をしゃくり上げているのを見ると、何も言わずに抱きしめてくれた。

その後しばらく兄様の胸で泣き続けていたのだけど、次第に涙も引いてきてこの状態を改めて把握すると私はドンドン顔に血が上ってくるのを感じた。

「お？泣き止んだか……。
全く公爵夫人が心配していたぞ？」
「……。」
「ところで何で泣いてたんだ？
……まぁ話したくないならいいんだけどな？」

私はその言葉を聞いて、今まで感じてきた思いをぶちまけてしまった。
魔法が使えないこと、母様に叱られたこと、怒られる理由が全て自分にあることを全て……。
口調も荒く、兄様に当たり散らすように感情をぶつけていった。
兄様はその間一言も話さずに、ジッと何かを考え込んでいるようだった。

全てを話し終えた私は我に返り、顔を青ざめさせた。
未だ無言でこっちを見ている兄様。
あぁ、完全に嫌われてしまったなとまるで人ごとの様に考えていると、兄様が一度だけ頷いて私の方へ手を伸ばしてきた。

「（叩かれる！？）」

私は目を瞑って、来るであろう衝撃を待った。
しかしいつまで経っても痛みはやってこない。
代わりに頭に載せられたゴツゴツしているけど暖かい手。

「そっか……大変だったな。
だがルイズ嬢、君は間違えている。」
「え？」
「努力したのだろう？勉強してきたのだろう？」
「……うん。」
「なら君に落ち度なんかないさ。
それに爆発するなんて凄いじゃないか！
物を爆発させる魔法なんて、少なくともドットクラスのスペルじゃないぞ！」
「でも！！」
「他に魔法が使えない？そんなことは関係ない。
他のが使えないのなら一つを極めてしまえばいい！
爆発しか使えない？なら爆発ではだれにも負けない魔法使い成ればいい！」
「……。」
「それにまだ絶対他の魔法が使えないと決まったわけじゃない。
なら現状で使える爆発の使い方を考えた方が効率的だろう？」
「私に……。」
「ん？」
「私に出来るかな？」
「出来るかもしれないし、出来ないかもしれない。」
「え？」
「それはルイズ嬢次第だよ。」

私はその言葉で光明が見えた気がした。
出来ないから諦めるんじゃなくて、先ず出来ることを知る。
そこから始めよう。
レッド兄様は、最後にもう一回だけ私の頭を撫でて、船から離れていった。

「兄様……ありがとう。」

私が兄様の後ろ姿に向かってそう言うと、後ろを向いたまま手を上げて横に振った。
まるで自分は何もしていないという様に……。
いつかこのお礼をしようと私は胸に決めた。

～回想　ｅｎｄ～

外伝　ルイズの憂鬱（後書き）

どうせだからワルド許婚フラグを叩き折ってみたw
まぁこれが後にどういう結果をもたらすか……俺にもまだ分からないw

第５１話　人生の岐路（前書き）

迷う主人公の巻

アドバイスが合ったので３年の期限付きで教師にスカウトする形に

……

それに加えて３１話に加筆しました。

第51話　人生の岐路

あのバジリスク戦から1年。
ついに俺は水のトライアングルへと進化を遂げた。
まぁ成ったばっかりだから出来ることが凄く増えたわけではないけど、一つの目標だったから嬉しさは大きい。
しかしその嬉しい気分に水を差す事態が起こった。
なんと家にオスマン学院長がやってくるという手紙が来たのだ！
理由は分からないが、なんか父さんに相談があるらしい。

「父さんって学院長と知り合いなの？」
「あぁ、本当に知り合い程度だがな」
「父さんの交友範囲の広さは凄まじいね……もしかしてガリアやゲルマニアにも知り合いいたりするんじゃないの？」

俺がそう冗談めかしていうと、父さんは何も言わずに俺から目を逸らした。
……いるのかよ！！
なんか突っ込んでもいいことなさそうだから、とりあえずスルーすることにした。

「ところで今回どんなことを相談されるの？」
「いや、俺も知らん
手紙にも書いていなかったからな……」

学院でなんかあったのか？
俺としては微妙に嫌な予感がするんだけど……。

それからしばらくして、家の前に馬車が到着した。
俺と父さんは、オスマンを出迎えるために、玄関へと向かった。

「突然の来訪となりましたが、出迎えていただけるとは、申し訳ないですな」
「いえいえ、こちらこそしっかりとした出迎えも出来ずに申し訳ない」

そんな社交辞令の応酬を横で見ていた俺なわけだが、ちょいちょいオスマンが俺の方に目線を向けてくるのが気になる。
今回の訪問は俺に関することなのか？

「レッド君も元気そうじゃな」
「はい、学院長こそ元気そうでなによりです」

「まだまだ若者には負けんよ！ホッホッホッホ」

こうしてみると好々爺なんだけどなぁ……。
学院ではただのセクハラ爺なんだよなぁ。
普段からずっとこうだともっと威厳出るのに。

「ところで今日は何の相談でこちらに？」
「少し長くなりそうな話がありましてな……」

二人は話を進めるために、客間へと向かって行った。
まだ話の中身は分からないが、学院長から父さんに話ねぇ。
なんだかんだ言ってやり手のオールド・オスマンから父さんに相談となると……なんだ？
あぁわからねぇ！！
でも学院長の表情を見るに、あんまりいいことじゃなさそうだ。

その後客間に到着すると、椅子に座って、使用人が入れてくれた紅茶を人数分配り、とりあえず全員一口飲む。
俺と父さんは学院長の向かい側に座り、オスマンが話し始めるのを待った。

「今回儂がドリュウズ殿を尋ねた理由は、レッド君をスカウトに来たのじゃ」
「スカウト？！」

「ほう、スカウトとは……」
俺は思わず立ちあがって、驚きをあらわにした。
学院長がスカウトということは、秘書か教師ということだろう。
だがオスマンの性格上秘書は外せる。
なら教師ということになる……だとしたら何故俺？

「オールド・オスマン、貴方は何故家の息子を教師にしたいと？」
「それはレッド君が、教育者としての才能を持っていると感じたからの。
レッド君は学院にいた時にテリー君とアンディ君と共に授業以外の時間に、魔法の訓練をしていたのじゃが、その際にレッド君は二人にアドバイスという形で指導を行っていた。
するとどうじゃ！3年間でテリー君は学園屈指の火属性の魔法使いに、アンディ君も目覚ましい成長を遂げた」
「テリー君達のことは少し聞いていたが、本当なのかレッド？」
「いや、アドバイスしただけで僕は特に何も……。
あれは二人の才能だと思うんですけど？」
「確かに二人に才能があったのは事実じゃ……しかしその才能を見つけ、開花させたのはお主じゃ！
頼む！教師になってくれんか？」
「どうするんだ、レッド？」
「それにもう一つ理由があっての……来年先生が一人自領に戻ってしまうので教師が一人足りなくなってしまうのじゃ。
新しい先生が見つかるまで……三年！三年だけ教師をしてみないじゃろうか？」

これはちょっと想定外の展開だな……。
でも原作まで学院に近づくのはちょっとなぁ。

どうしようか？

「何も今すぐにというわけじゃない。
来年までに決めてくれればいいんじゃ」
「でも１８の教師となると、流石に厳しいんじゃ……」
「確かに厳しいかもしれん。
しかしお主以外の適任者が思い浮かばんのじゃよ。
それにお主本当は、土のトライアングルじゃろう？」
「！？」
「気付いておらんと思ったのか？
伊達に長生きしとらんわい。
お主が実力を隠してた事なんぞお見通しじゃ」
「そうですか……でもやっぱりすぐに返事は出来ません」

確かに原作の舞台に近づくのは危険が大きい。
でも未来がどの様に動くか、ある程度分かっているのは大きい。
危険と言えば危険だが、虎穴に入らずんば虎児を得ずとも言うしな……。
せっかく一年猶予をくれるなら、じっくりと考えてみよう。

「それでもいいんじゃ、お主の意思が最優先じゃからの。
それじゃ儂は学院に戻るとするか」
「オールド・オスマン、夕食でも食べていきませんか？」
「いや仕事も残っておるし、折角じゃが今回は遠慮させてもらうことにする」
「では玄関までお送りしましょう」

そう言って父さんと学院長は客間から出て行った。
俺はどうしたらいいかな……。
これから先戦争になるこの国において、何処も安全ではないかもしれない。
なら学園にいた方が少しは展開が読めるか？
俺はそんなことを考えながら、ぬるくなった紅茶を飲んだ。

第５１話　人生の岐路（後書き）

これでも無理矢理感があるかもしれませんが……

第５２話　相棒との日常（前書き）

今回の話はクオリティがいつも以上に低い気がする。

第５２話　相棒との日常

オールド・オスマンが学院に戻った後、家では家族会議が開かれていた。
広間の大きなテーブルに見える人影は3人と3匹。
俺と両親、そしてアイガ、ポッチャマ、グラエナだ。
もちろん議題は学院長が持ってきた話。

「レッドはどう考えているんだ？」
「迷ってるかな……貴族の子息達との繋がりが出来るのもいいと思うんだけど、やっぱり父さんの仕事を手伝うっていうのも魅力的なんだよね」
「そうか……折角オールド・オスマンも考える時間を1年もくれたんだから、しっかり悩んでから決めるといい。
ところでもし教師になるとしたら、水のトライアングルであることは隠すのか？」
「気付かれるまでは話す気ないかな……二つの属性のトライアングルなんて目立ちそうだし」
「相変わらず目立つのを嫌っているみたいだな」
「当然！」

俺は胸を張ってそう言った。
父さんと母さんは苦笑していたけど……。
その後俺は部屋に戻って、今日の出来事を思い返していた。

「俺が教師ね……面白そうではあるんだけどな」

でもやっぱり原作は怖い。
正直装備さえしてしまえば先ず負けることは無いんだけど、不意打ちされれば分からないからな。
まぁこれでも父さんとの訓練のおかげで、気配を探知することはある程度出来るようになったけど……流石に遠距離から魔法で狙撃されたら危ないかもしれない。
もし原作に関わることになったら常にツボツボ装備しようかな……
いやいや！まだ関わると決まったわけじゃない！！！

「そうだ！まだ俺のゆったりのんびり暮らすという夢は、壊れていないはずだ！！」
「……ジ」

アイガは何か言いたそうにしているが、気のせいだ。
絶対気のせいだ・・・・・・きっと！

それからしばらく、特に何もない日々が続いていた。

まぁ鍛錬をしたり、漫画とかの技をなんとか再現しようとしてみたり、ポケモンと戯れたりはしていたんだけどね。
これはそんなある日の話。

俺は久しぶりにアイガと遊ぶため、森へと来ていた。
遊ぶと言っても、どっちかと言えば訓練に近いんだけどね。

「今日はどうするか……ダーツでもする？　それとも組み手？」
「ジー……。」

アイガは悩んでいたようだけど、どっちか決めたらしく、目の前に細い石の針を作り出した。

「ＯＫ、ダーツね！
じゃあ準備しようか。」

俺は近くの木に錬金を掛けて、ダーツの的を作り出した。
まぁダーツと言っても本格的なものではなく、夜店とかで見かける的当てに近いものだ。
中心に近いほど点数が高く、最高は１００点で外に外れていくほどに８０、５０、３０、１０と点数は下がっていく。
しかしこのままだと簡単すぎて面白くない。
故に的に紐を通して動かす。
片方がやっているときにもう片方が操作することによって、縦横無尽に動く的が出来上がる。

「じゃあ今日は3回の合計点で勝負だ！」
「ジ！」
「表、裏どっち！」

俺はポケットから銅貨を取り出して、アイガに尋ねると表を選んだ。

「じゃあ俺は裏か。
それじゃ、よっと！」

コインはくるくると回りながら、真上に飛んで行った。
そして数秒後落ちてきたコインを、手の甲でキャッチした俺はゆっくりと結果を確認した。

「表か……じゃあアイガが先行だな」
「ジジ！」

アイガは近くの地面から石を浮かせると、ロックカットで石を削って弾を作った。
俺はそれを確認しながら的をどう動かすか考えていた。
そしてアイガは用意が出来たのか、俺の方を向いた。

「じゃあ行くぞ！」

俺は掛け声と共に的に軽くレビテーションを掛けて、まるで生き物のように動かす。
これは射撃の訓練にもなるという優れた遊びなのだ！！
……品評会の時に味をしめたから続けているわけなんかじゃないんだからな！

しばらくアイガは様子を見ていたのだが、やがてなんとなく動きが読めてきたようで、一発目の弾丸を的目掛けてはなった。
ギッという甲高い音がして的に突き刺さる石の弾丸は、的の中心を逃さなかった。

「１００点か……もうちょっと動きを考えないと駄目みたいだなぁ。じゃあ次だ！」

俺はアイガの弾を的から引き抜いて、的に空いた穴を埋めた。
紐で繋がれることで、的の動きがある程度制限されてしまう……なら次は速さを重視してみよう。
自身がレビテーションを使って出せる限りのスピードを出して、的を動かす。

「（アイガ、これをどう狙う？）」
「……ジ！」

アイガは目を一瞬点滅させて、俺の動かす的よりも速い弾丸を放った。
すると中心は外したようだけど、８０点の部分に当たり、そのまま的を貫通していった。

「残念！貫通したから１０点マイナスだ。」
「ジ～……」

このダーツは力加減も訓練の一部のため、貫通したり的を壊してしまうとマイナスになってしまう。
まぁそれでも現状１７０点……高得点だな。

「じゃあ次で最後だ。」

俺は貫通した的を再び直し、今度は緩急をつけて動かすことにした。
速いだけなら反応できる、最初も緩急をつけていたつもりだったんだけど、あれじゃ温かった。
じゃあ最高速から低速、低速から最高速の繰り返しでいくと狙いにくいはずだ！

「ジ！」

と思ったのだが普通に低速になった瞬間を狙われて、ど真ん中を撃ち抜かれた。

「２７０点かぁ……これは無理臭いな」
「ジジ！」

結局その後やった俺の点数は１００、５０、８０と合計２３０点と４０点差で負けてしまった。
なんか腰に腕を当てて胸を張っているアイガがウザかった……。

「くっそ！　次こそ勝つからな！！」
「ジ～ジ～。」

今のところ戦績は５８戦５勝５３敗と、かなり負け越している。
いつか常勝出来る様になるんだろうか……いやなって見せる！！
負けっぱなしは悔しいしな！

第５２話　相棒との日常（後書き）

あぁビリヤードやりてぇ……

特に深い意味はないですよ？

第５３話　公爵夫人からのお願い（前書き）

またやっちまった……書いたやつが消えた。
消えた、消えた消えた消えた消えた消えた消えた消えた！！！！！！！！！！！！！
５秒くらい俺の時間が止まった……ｏｒｚ
一瞬心が複雑骨折しそうになったけど、ギリ耐えて書きなおしたのがこれ。
クオリティは……

第５３話　公爵夫人からのお願い

学院長が来訪した日から約一カ月立った頃。
一通の手紙が家に届いた。
宛先を見るとヴァリエール公爵夫人から俺にあてた手紙の様だ。
内容は簡潔。

少し話したいことがあるので、貴方を家に招待したい。

俺に話がある？
カトレアさんやルイズ嬢に関係することか？
あぁ！　分かんないなぁ！
どっちにしても行かないという選択肢は取れないのだから、行くことは確定している訳だ。

俺は父さんと母さんに公爵夫人からの手紙を見せて、ヴァリエール邸に行くことを告げた。
すると父さんには手紙に書いてあった話の内容に心当たりがあるのか、苦笑していたので父さんに尋ねてみると「行けば分かる」と一言言って話を切った。
これ以上問いただしても応えてくれないことは明確だったので、諦めてヴァリエール領へと馬車を走らせた。

「流石ヴァリエール……情報が早いな。
それにしても変わらないな、カリーヌ殿は。

頑張れよレッド……精神的に」

そう俺の背中に向けて小さくつぶやいた父さんの言葉を聞くことが出来なかった。

俺とアイガの短い二人旅。
馬車に揺られながら、ヴァリエール邸までの道のりをのんびりと進んでいく。

「アイガは今回呼ばれた理由思いつくか？」
「ジ？」
「分かんないよなぁ……っていうかそれ以前にアイガは公爵夫人に会ったことなかったよな」
「ジ？」
「あの人は怒らせると怖いから、絶対怒らせるなよ？
例えるなら……人間版レックウザだと思え！」
「ジ！？」

それからヴァリエール領に着くまで、アイガは小さく震えながら隅っこに座っていた。
ごめんアイガ、でもそれぐらい怖い人なんだよ。
一人で竜巻作れる位なんだから……。
そのことを思い出した俺も少し怖くなってきた。
俺とアイガは馬車の揺れに関係なく揺れながら、目的地へと着々と近づいていた。

短い旅の終着駅であるヴァリエール邸に着いた俺達を出迎えてくれたのは、もうすっかり大人なカトレアさんだった。
カトレアさんは俺を見つけるや否や、俺の腕を掴んで邸内へと歩き始めた。

「ちょ！？」
「お久しぶりですね、レッド君！」
「あぁ、お久しぶりです」

なんかテンション高いですねカトレアさん……。

っていうかアイガが使用人さん達に連れられて何処か行ったんですけど！？
しかもアイガ自身手を振ってたから、自分からということか？
あいつ……逃げたな！？
俺はアイガへのお仕置きを考えながら、カトレアさんに客間へと案内されていく。

「今回はどんな御用でいらっしゃったの？」
「公爵夫人から話があるという手紙が届いて来たのですが、何か聞いていませんか？」
「いえ、私は聞いていませんね」
「ですよね」

そして客間の前まで案内された俺だったが、そこでカトレアさんは「また後で」と言って何処かに行ってしまった。
俺はとりあえず客間のドアをノックして中へと入って行った。
中には紅茶を飲みながら、俺の方を見ている公爵夫人が座っていた。

「突然呼び出して御免なさいね？」
「いえ、そんなことよりも何か話があると手紙に書いてありましたが……」
「そうそう、貴方が学院の教師になるって言う話を風の噂で聞いたので、来年入学するルイズのことをお願いしようと思って呼んだの」

……何でその話を知っているんだ？！

あの時は学院長と俺と父さんしかいなかったはずだ。
学院長が話したのか？
俺がそんなことを考えているのを察したのか、公爵夫人は「風の噂よ？」と釘を刺してきた。
公爵夫人が発するプレッシャーで俺は、それ以上そのことを考えるのは危険と判断して、話を逸らした。

「確かに学院からのスカウトは来ましたが、来年まで考える時間をくれたので、ギリギリまで考えようと思っています。
なのでまだ教師になるかは分かりません」
「そうなの……大きな選択だもの当然ね。
それとは関係なく、ルイズと仲良くしてあげてね？
あの子も昔ほど自分に自信がないわけじゃないけれど、やっぱり魔法のことを気にしているみたいだから……」
「はい」
「本当なら今日も会ってほしかったのだけど、少し用事があって出かけているのよ。
本当にタイミングが悪かったわ……」

いい母親なんだよなぁ……普段は。
だけど公爵夫人は偶にする暴走が怖いんだよ！
俺も少し前に「カトレアに相応しいかどうか試します」とか言いながら俺に決闘申し込んできたことがあったんだよ……あの時は父さんがなんとか抑えてくれたから、なんとか助かったけど危うく死ぬところだった。

「話はこの位にしておきましょうか。

ドアの前に待ち人もいるみたいだしね？」
「え？」
「いいから、今日はゆっくりしていきなさい」
「はぁ……」

俺は公爵夫人の謎の言葉に疑問を覚えつつも、俺は一礼して客間を後にした。
部屋から出た俺は先ほどの言葉の意味を理解した。
突然腕を掴まれれば嫌でも気付く。

「カトレアさん、どうして僕の腕を掴んでいるのでしょうか？」
「お母様とのお話は終わったのでしょう？
なら私の部屋に来てください！
お友達たちもレッド君が来るの楽しみにしているの！」
「は、はぃ。
ところで歩きにくいので腕を離しては……」
「い～や！」
「そう……ですか」

胸が当たっているんだが……言えねぇ。
俺は自分の顔が赤くなるのを感じながら、カトレアさんに引きずられていった。
カトレアさんの顔も夕日の様に、赤くなっているのにも気付かずに……。

第５３話　公爵夫人からのお願い（後書き）

書き終わったのが消えるのは半端じゃなくダメージがデカイ。

第５４話　相棒の顔見せ（前書き）

前回の続き

第５４話　相棒の顔見せ

「あぁ！そう言えばアイガ！！」
「アイガ？」

俺は、ふと俺の使い魔のことを思い出した。
カトレアさんに、ちゃんと紹介していないのもあったので、俺は部屋に行く前にアイガを連れてくることを提案した。
彼女としても俺の使い魔に興味があったらしく、部屋に向かうのを一時中断し、アイガが連れて行かれた場所を近くにいた使用人に聞いて、その場所へと向かった。
どうやら馬小屋の辺りに連れて行って、そこにいてくれるように頼んだらしい。
まぁアイガは普通に賢いから、そこにいるのだろう。

何分か歩いて、馬小屋に着いた俺とカトレアさんは、木にもたれ掛かって座っているアイガを見つけた。
それほど長い時間話していた訳ではないが、暇を持て余していたらしい。
周囲に少し岩が転がっている。
おそらく浮かばせて遊んでいたのだろう。

「アイガ！　話は終わったぞ！」
「……ジ～？」

反応が遅かったが、まさか……寝てたのか？
数秒周囲を見渡してたが、思考が徐々にしっかりしてきたのだろう。
俺の横にいるカトレアさんに首を向けて、首を少し傾げた。

「ジ？」
「あぁこの人がカトレアさんだ。」
「よろしくアイガちゃん」
「ジ」

アイガはカトレアさんからの挨拶に、頷いて返事をした。
そのコミカルな動きに、カトレアさんも無意識にしていた警戒を解いて、アイガへと徐々に近づいていった。
そしてカトレアさんは、アイガの目の前で止まって右手を差し出した。

「ジ？」
「カトレアさん？」
「アイガちゃん、私はカトレアって言うの。
よろしくね」

どうやら握手をしたいらしい。
アイガは分かってないようだけどね。
まぁ握手なんかしたことないから、しょうがないんだけど……。

「アイガ、カトレアさんは握手を求めているんだよ？」
「……ジ！」

俺の言葉でやっと理解したらしく、アイガもそっと右手を差し出した。
アイガには指がないから、しっかりとした握手は出来なかったけれど、カトレアさんがアイガの手を握ることで、握手は成立した。
握手を終えた二人はしばらく見つめ合っていたが、しばらくするとカトレアさんが俺の方を向いて「じゃアイガちゃんにも私のお友達紹介しなきゃね？」と言って、再び俺の腕を掴んで歩きだした。
因みにアイガの重量は軽くしておいたので、邸内に入っても大丈夫だろう。
一応「泥や石を邸内に持ちこんじゃ駄目だからな？」と言っておいたので問題ないはずだ。

カトレアさんの部屋は相変わらず、小さなムツ〇ロウ王国成らぬカトレア王国だった。
ベッドの近くには大小様々な動物がカトレアさんを囲むように座っ

ていた。
アイガも最初は驚いていたようだが、俺とカトレアさんが動物たちの頭を撫でたりしていると、だんだん慣れてきたのか俺の隣に座り込んで、動物たちをジッと見ている。
しばらくジッとしていると、アイガの方に鳥が飛んできて、肩に止まった。
1羽止まると、それを境に5羽くらいの鳥がアイガの肩と頭に殺到した。

「アイガちゃんの肩に鳥が……ふふふ、気に入られちゃったみたいね？」
「良かったなアイガ」
「……ジ」

俺とカトレアさんはアイガの方を見ながら笑い、アイガ自身はどうすればいいか分からずオロオロしている様な気がする。
そんなアイガに諭すようにカトレアさんは、そっと話しかけた。

「もし嫌じゃないなら、そのままでいてあげて？
その子たちは貴方のことが気になっているみたいだから……」
「ジジ」

その言葉を聞いて次第に落ち着いてきたアイガは、そっと肩の方に手を近づけていった。
俺はビックリしてそれを止めようとしたのだが、カトレアさんに手で制されて見守ることにした。

そのままアイガは手を肩へ近づいてて行き、肩に触れる直前で手を止めた。
すると一羽の鳥が首を一度傾げて、その手に乗り移った。

「あ……」
「ふふふふふ、すっかり気に入られてしまったみたい」

アイガは手に一羽の鳥を乗せたまま、その手を自身の顔の前へと持っていく。
そして目が合う一羽と一体。
そのまま数秒見合ってたかと思うと、ほぼ同時に首を傾げる。
その姿を見て、俺とカトレアさんもお互いを見合って、次の瞬間その場は笑いに包まれた。

しばらく笑い続けていた俺とカトレアさんが、やっとのことで落ち着くとアイガがジッと俺達を見ていた。
なんか不貞腐れたような空気を醸し出しながら……。
そんな空気に気付いたのでとりあえず、謝罪をすることにした。

「ごめんごめん、偉く微笑ましくて……」
「ごめんなさいね？
あまりにも貴方達が可愛らしくてつい……」
「ジ……ジ！」

なんとか許してもらえたみたいだ。

その後も俺が熊のじゃれ合いに巻き込まれて押し倒されたり、アイガに群がる動物が増えたり、それを見ながらカトレアさんが笑ったりした。

そんな楽しい時間も終わり、俺が家に帰る時間がやってきた。

「もう帰ってしまうの？」
「えぇ……でもまた来ますから！」
「そう……ですよね。
じゃあ今度は泊りに来てくださいね！」
「え？！」
「まだまだ話したいことは、いっぱいありますから……」
「そ、そうですね。」

後ろから公爵夫人がジッと俺を見て……杖に手を！？

「そ、それじゃあ！また遊びに来ますので！」

俺は素早く馬車に乗り、馬を走らせた。
俺としても微妙に後ろ髪をひかれる思いがするが、後ろにいた公爵夫人の威圧感に耐えられず、玄関まで見送りに来てくれた公爵夫人とカトレアさんに、別れを告げて俺は馬車を走らせた。

第５５話　久しぶりの学院（前書き）

ついに人生の岐路に立つ主人公。
一気に進んだが……これはキンクリさんの仕業ですｗ
今回誤字が……多かった様で申し訳ない！！

第５５話　久しぶりの学院

ついに学院長が俺の返事を聞きに来る日がやってきた。

「それであの時の返事を聞きに来たんじゃが……その返答や如何に！」

「まだ若輩ですが、その生徒を導く仕事、引き受けさせていただきたいと思います」

俺は結局学院で働くことにした。

やっぱり分からないところで物事が進むよりも、自分の見える範囲で進んだ方が対策を立てやすい。

それに、もしサイト君が召喚されなかったり、ガンダールヴじゃなかったら原作知識は役に立たなくなってしまう。

そう言ったイレギュラーがあった場合学院にいた方がいいのではないかと考えた結果がこの答えだ。

「それではレッド・ド・ドリュウズ君の準備が出来次第、学院の方に来てくだされ。

新しい生徒が入学するまでに、教師の仕事を説明するのでの」

「はい。」

そうして学院長は学院へと戻って行った。

両親には前日に俺がどっちを選ぶか決めたか伝えてあったので、この場に両親はいない。

因みにその時の両親の言葉は……。

「そうか……3年間頑張れよ」
「身体に気をつけてね？」

の一言だった。

「え、それだけ？」
「それだけもなにも、お前が決めたことだ。
俺は何も言うことは無い。
一つ言うなら、目立ちたくないなら召喚はするなよ？」
「私からは、とりあえず身体に気をつけて位しか言うことないわね。
レッドなら何でもそつ無くこなすでしょ？
頑張ってきなさい」

かなり信頼してもらってるようだ。
でも母さん俺そんな何でもできるキャラじゃないと思うんだけど…
…と昨日の夜に思ったり思わなかったりした。

結局荷物選びや、父さんと母さんに挨拶してたりしたら夜になっていたので、出発は翌日になってしまた。
そして俺は翌朝アイガと共に馬車に乗っていた。
アイガはある意味故郷ともいえる学院に行くのが楽しみなのか、少しそわそわしてた。
そうして学院に着いた俺は、とりあえず学院長に到着を伝えるために学院長室に向かったのだが……。
ノックして中に入った俺を待っていたのは3人の人だった。

「おぉ、レッド君かの？
開いとるから入って来なさい」
「久しぶりだね。
改めて自己紹介するけど、私の名前はジャン・コルベール。
これから同僚となるわけだけど、分からないことがあったらいつでも聞きに来ていいですよ？」

この二人は分かる。
今思えば俺がここにいた頃から、教師の仕事の説明とかしてたから多分その頃から俺を教師として連れてこようと考えていたんだろう。
問題はこの場にいるもう一人……。

「初めまして、私はこの度オールド・オスマンの秘書になりましたロングビルと申します。

今後会う機会が増えると思いますので、よろしくお願いします」

……この時点でいたのか、この人？！
ヤバいぞ、これは想定外だ。
俺表情に出てないよな……。

「あ……はぃ、レッド・ド・ドリュウズです。
これから3年間よろしくお願いします」

でもまぁ、現状何か起こるわけじゃないからスルーしておこう。
まだ原作が始まるまで二年以上ある。
それまで俺が目立たなければ大丈夫なはずだ……。

「それではここでのレッド君の仕事を説明するとじゃな、君には今年で自領に戻ってしまうミスト先生の代わりに水魔法の講義をしてくれないだろうか？」
「水ですか……土じゃなくてですか？」
「土の授業はミス・シュヴルーズが担当しておるしの。
それに君は水の魔法も使えるんじゃろ？」

何処でバレたんだ？
この人の前で使った覚えは無いんだが……。

「いやの、ドリュウズ邸に行く前に小腹が空いて寄った村で魔獣の

討伐をした水属性メイジの話を聞いたんじゃが、その話に出てきたゴーレムの容姿が君のアイガ君そっくりだったのでな……やはりそうだったか」
「（カマ掛けられたのか……やるなこの狸！）もし僕が水の魔法使えなかったらどうするつもりだったのですか？」
「その時はミス・シュヴリーズの助手という形を取るつもりじゃった」
「（うわぁ……そっちの方が目立たなくて楽だったなぁ。）そうですか……今からそっちを選ぶというのは「もちろん駄目じゃ♪」ですよね……」

うぜぇ……この爺ウゼェ。
何にせよ俺の仕事は、水の魔法についての講義をしなければならないらしい。
まぁ教える内容は前にミスト先生がやった授業をやればいいらしいし、そのための資料も残していってくれたみたいだ。
ありがとうミスト先生……多分もう会うことないでしょうけどありがとう！

「お主の授業は新学期から始めてもらうことになるから、それまでにミスト先生が残してくれた資料をを読んでおいてくれ」
「はい」
「今日のところの話はこれくらいじゃな。
それでは解散するとするか」

学院長の解散宣言で初の顔合わせは終了した。
まぁギトーやシュヴリーズ先生との顔合わせは新学期になってから

になるらしいけどね。
俺は学院長室を出て、そのまま真っ直ぐ使い魔用宿舎に向かった。

「アイガ……いきなり予定が崩れたよ」
「ジ？」

俺は自身が水メイジでもあることがバレた事、そしてその結果土の授業ではなくて、水の授業を受け持つことになってしまったことを告げた。

「俺の二つ名，石繰，なのに……絶対変わるんだろうなぁ。
っていうかあの場では聞かれなかったけど、コルベール先生も驚いてたなぁ。
そしてそれ以上にギトーがウザそうだ」
「ジィ～」

なんかアイガに軽く肩を叩かれているが、慰められているのだろう。
俺はこれから起こるであろう面倒事を思うと胃が締め付けられる思いだった。

第５５話　久しぶりの学院（後書き）

ｉｎ学院教師編

ここまでのオリジナルキャラ設定（前書き）

何となく俺自身が確認するために書いてますw
随時更新あり

ここまでのオリジナルキャラ設定

ロジャー・ド・ドリュウズ
役柄：主人公の父
軍人で、なんかとてつもなく交友範囲が広い。
異様に武勇伝が多く、グラモン家やヴァリエール家とのつながりが強い。
土のトライアングルメイジであり、奇襲急襲が得意。
見た目はＭＧＳ３のスネーク眼帯なしを思い浮かべてください。

クシャナ・ド・ドリュウズ
役柄：主人公の母
父に比べると目立つところは無いが、決して弱いわけではない。
モンモランシ家の夫人と友人で、良く会いに行く間柄。
水のラインメイジで、水魔法の放つ速度には目を見張るものがある。

マルギッテ・シェーン・ラ・フェール・ド・モンモランシ
役柄：モンモランシ家の夫人
ガチガチ軍人
学院で母と知り合い少し柔らかくなったが、それでもガチガチ。
因みに若干修正する前に幾らなんでもこのキャラは無いと言われるくらい傍若無人だったため、急遽緩和させた俺にとっても微妙にトラウマキャラｗ
元となったキャラがいたのだが、そのキャラの良さを表現しきれなかった自身にめっちゃ凹んだ。

見た目は、真剣で私に恋しなさいのマルギッテさん

ミスト先生
役柄：主人公が学院に通学していた時の水に関する魔法の授業を担当していた先生
常に眠そうにしているが、やるときはやるいい先生。
しかし生徒に問題を解かせるとき等は寝ているのでプラマイゼロ。

ドリュウズ領のおっちゃん
役柄：酒屋の主人
まだ名前が出ていないが、特に今後大きな役割を持たせる予定はない。
気がいいおじさんで、ロジャー行きつけの酒場でもある。
一応元傭兵という隠れ設定があったりするのだが、今後出てくるかは不明。

テリー・ド・ボガード
役柄：主人公の友人
主人公の友人をどうしよう……流石にこの時期に原作キャラは学院にいないなぁ。
ならオリキャラを出せばいいじゃない！！というアントワネット的発想で出てきたキャラ。
しかし俺が格ゲー好きだったのでテリーボガードが思い浮かび、彼を元に作ったキャラです。

他には鉄拳の三島、ＳＦのリュウ、ＧＧのソル等も思い浮かんだんだが……友人作るタイプか？という疑問が出てきたのでテリーになりました。

アンディ・ド・ボガード
役柄：テリーの弟
テリー出すならアンディ出さなきゃ！！と思って出した……反省はしているが後悔はしていない！
まぁ実際はあまり出番が多くなかったけどね。

ジェフ・デューク・ド・ボガード
役柄：テリーの父
餓狼伝説の原作設定では息子との血の繋がりは無い。
この作品においては普通に実の親である。
しかし似ていない。
テリーとアンディが甘いマスクしているにもかかわらず、ジェフは強面である。
サングラス掛けたらマフィアと間違われるくらい強面だが、普通にいい人。

ジェイク・ド・グラモン
役柄：ギーシュの兄
土のトライアングルで主人公の男友達。
主人公よりは歳が少し上だが、彼自身も主人公のことを頼れる友人

と思っているため仲は良い。
また近接戦闘は主人公に劣るものの、ゴーレムの出来は素晴らしい。

チャン
役柄：黒の鉄球団団長
見た目はＫＯＦのチャンコーハンそのもの。
武器は鎖付き鉄球。
普通にいい奴なんだが、見た目で悪人に間違えわれることも多々ある。
主人公のことは変な格好の友人と思っている。

第５６話　演習内容の確認（前書き）

主人公お勉強タイム
今回は水魔法の説明をしていきます。

原作に出てきた魔法の説明を主人公成りに解釈していく回となります。

第５６話　演習内容の確認

学院に来た翌日。
俺は特に予定もなかったので、ミスト先生が残してくれた資料を読むことにした。

「水の魔法は攻撃には向いておらず、回復や防御にこそ真価を発揮する。
また戦闘のサポートにも向いており、水のメイジがいるのといないのとでは大分状況が異なる」

ここら辺は常識か……まぁ水も使い方次第で攻撃に向くと思うんだけどなぁ。
お？ここから先は教えるべき初歩魔法一覧か？

コンデンセイション：大気中の水蒸気を液体にする魔法。
ヒーリング：怪我や病気を治すことが出来るが、より高い効果を得たいなら秘薬と合わせて使えば良い。
スリープクラウド：雲を作り出して、それに包まれると眠ってしまうが、術者よりもＬｖが高ければ耐えられる。
アイスウォール：文字通り氷の壁を作り出す。
ウォーターシールド：水の壁を作り出す。
ウォーター・ウィップ：杖に水を絡ませて鞭を作り出す。

「学院で習ったのはここら辺だな……。

まぁスリープクラウドは実習じゃなく知識だけだったけど」

って言うか俺も実習の監督とかするんだよな？
うわぁ嫌だなぁ。

昔実習の時アイスウォールを制御しきれなかったやつがいた。
下の部分の強度が足りなかったみたいで、術者の方に倒れてきたのだ。
その時ミスト先生はいつもの眠たい目ではなく、鋭い目で倒れてきた氷の壁にウォーター・ウィップを巻きつけて反対側に引っ張り倒した。
あの時はミスト先生すげぇとだけ思ってたけど、今思えば反射神経と魔法を使うスピード共に凄まじいものだったのではないか？

「もしかしてミスト先生ってかなり高位のメイジだったのか？
今度学院長に聞いてみるか……」

俺はとりあえずミスト先生への考察は後に回して、資料の続きを読んでいった。
俺自身この学院では水の魔法を使わなかったので、水の攻撃魔法とヒーリング位しか使えない。
そう言えばヒーリングってまだ試したことないんだけど、俺のヒーリングってどの位の効果があるんだろう？
スクウェアクラスが使えば、切断された腕をくっつけることが出来ると教わったが……トライアングルになってそんなに経ってない俺なら？

これはいくらなんでも試せないしなぁ……機会があったら使ってみよう。
俺自身だったら装備してから自己再生の方が効率は良いんだけどね。

「あぁそうだ！この学院にいる間ずっとツボツボを装備していよう……いつ何が起こるか分からないし！」

俺はそう思い、思い立ったが吉日とばかりに速攻でツボツボを装備した。
試しに机に思いっきり脛をぶつけてみたが、デコピン位のダメージしか受けなかった。

「流石ツボツボ！まぁこれで少々の事故なら巻き込まれても大怪我しないだろう」

とりあえず今日は資料にある魔法試してみるとしよう。

まずは……アイスウォールかな？
さてどの位の大きさの壁が出せるかな？

「アイスウォール」

ピキピキピキという音と共に目の前に氷の壁が出来上がる。
厚さ５０センチ縦横ともに３メートルの壁ができた。

「まぁちょうどいいかな？
寒いけど……もっと着込んでくれれば良かった」

俺は寒さを堪えながら目の前の壁を崩すと、氷の塊はみるみる溶けていった。

「じゃあ次はスリープクラウドか……これは普通に使い勝手がいいな」

目の前に出てきた人の頭よりも少しだけ大きい雲を色々と動かしてみる。
予想以上に自分の思い通りに動かせるようだ。
そこにタイミング良くウサギが現れたので、ウサギにスリープクラウドを掛けた。

すると3秒もしないでウサギは眠ってしまった。
雲は役目を終えたというように静かに消え、残ったのは横たわっているウサギだけ。

「これは……即効性だな。
人間がどのくらい耐えるか分からないけど、３０秒は掛からないだろう。」

俺はこの魔法の予想以上の有用性に驚きつつ、危険性を危惧した。

「相手に使われたら厄介だな……水のスクウェアクラスを敵に回す予定は無いけど、もしこれを使われたらかなりキツイ戦いになるな。」

俺はそんなことを考えながら、不眠持ちのポケモンを頭の中で探していった。
しばらく思考し続けていると、もう辺りが夕焼けで赤く染まっていることに気付いた。

「今日はこの位にしておくか……。
まぁこれで教えるべき魔法は使えることが分かったから問題はないな。
後はどうやって教えていくかだけど……普通に教科書通りに教えよう。
それで質問を聞きながら、それに応える形にして授業をすれば生徒

の頭にも入りやすいだろう。」

そんな風に授業構成を考えながら、俺は歩いて部屋へと戻って行った。

部屋に帰ってから資料の続きを読み進めて、やっと最後のページまで来た。

「これで最後か……結構俺自身のためにもなったな。
学院でやったときより覚えやすいのは、水の魔法を使えることを隠さなくてもいいということも大きいのかな？」

俺は資料を机の上において、ベットに横になった。
天井を見ながら考えるのは、俺が今後どうするか・・・・・・。

「（原作開始まであと2年弱・・・・・決して長くない。
それに新学期はもう直ぐだ。
そうなれば主要メンバーが入学してくるだろう。）
はてさてどうなるかな？」

俺はもうすぐ入ってくる妹分とモンモランシ家の女の子のことを思い浮かべて、如何対応しようか考えながら眠りについていった。

第５７話　逆鱗（前書き）

また決闘……

第57話　逆鱗

新学期開始まであと数日と言うところで、俺は学院長に呼び出しを受けた。
どうやらシュヴルーズ先生とギトーに顔合わせするらしい。
俺はいつも通り指輪、杖、ローブを装備して部屋を出た。
学院長室に近づいていった俺だが、何か声が聞こえてくる。

「あ……に教……勤ま……は思え……！」
「じゃか……、彼はト……グル……った…じゃ。」

何やら揉めているようだ。
まぁとりあえず呼ばれてたから入らないとな。

「失礼します」
「おおぉ、いいところに来たの！」
「え？　何のことですか？」

部屋に入った俺を待ちかまえていたのは、おどおどしているシュヴリーズ先生と俺のことを不審げに睨んでいるギトーだった。
なんとなく嫌な予感がしたのでとりあえず一回戻ろう……。

「うっ！お腹か急に痛くなってきましたので、部屋で寝ることにし

ます。
失礼し「させんよ！」うぉ！学院長おろしてください！！」

帰ろうとする俺をレビテーションで浮かせるなよ！
足が地面に着かなくて落ち着かないじゃないか！！

「いやぁ、今丁度お主の話をしておったのじゃよ！
そうしたらギトー先生が、2年かそこらでトライアングルになるわけがないと言って聞かなくてのぅ」
「その通り！レッド君、君は学院にいた頃は土のラインだったはずだ……なのに今度会ったら水のトライアングル？そんなことはあり得ない！！」
「（うわぁやっぱウゼェ……）いや、何か偶々シックリきたというか、血筋の覚醒と言いますか……」

俺としてはなんとか落ち着いてもらって、面倒事を起こさないで欲しい、
しかしやはり甘かったようだ

「君は自分が本当に水のトライアングルだというのだな？
ならば私と決闘をしようではないか！」
「なんでそうなるんですか！？」
「トライアングルなら勝てないまでも、対抗は出来るだろう？
ならそれを持って君をトライアングルと認めよう」

あぁ……いきなりこんな展開かよ。
俺は救いの手を差し伸べてくれている人を探して、周囲の人たちを見回すとみんな目を背けている。
唯一オスマンだけがこっちを見ながら親指を立てて、俺に笑顔を向けている。

「（あの爺これを狙ってたのか？！）いえいえ、スクウェアのギトー先生には敵いませんよ。
僕はまだ魔法を使いこなせてませんから。
それに怪我だってしたくありませんし」

……めんどくさいからという理由から話を切った訳じゃないんですよ？
ホントですよ？

「確かに私の魔法は君には強すぎかもしれないなぁ……」
「そうですよ、僕には強すぎますよぉ……（死ね！）」
「しかし君の実力は確かめなければならないのだよ。
故に魔法は当たる寸前で止める模擬戦の様な形で行おうじゃないか！
それなら怖くいないだろう？」

はぁ……本当にウザったいなこの人。
適当にやって負けるか？
俺がうんざりして黙っていると、ギトーは怖がっていると判断したらしい。

「いやぁロジャー殿の息子とはいえ、その様な逃げ腰なら今まで聞いた彼の噂話も嘘かも知れませんなぁ！
ハッハッハッハッハ！」
「……ア？」

いや聞き間違えかもしれないな……。
気のせいだろう。

「ましてやクシャナ夫人でしたか？あの歳でラインなんてどうかと
「ギトー先生！！」……なんですかなコルベール先生。」
「少し言いすぎではないでしょうか？」
「私は事実を語ってるにすぎないでしょう？」
「ですが！」
「コルベール先生、もういいです。
……いいですよギトー先生。
決闘でしたか？　お受けしますよ」
「おや？　大丈夫ですか？」
「えぇ、ですがそのままでは面白くありませんから、相手に勝った方が相手に一つだけ言うことを聞かせるというのはどうでしょうか？」
「ほぅ……それは面白いですね。
ですがそれではこちらが有利過ぎますねぇ、それでもいいのですか？」
「えぇ、負けるつもりなんか微塵もありませんからね。
例え僕がドットクラスだろうが、あなたには負けませんよ」
「き……君は馬鹿にしているのか！？」

俺が馬鹿にしている？今さら何言ってやがる。
人の力量すら見切れねぇ阿呆が！
ピーチクパーチク囀りやがって……調子こいてんじゃねぇぞ？

「いいだろう、表へ出たまえ！！」
「上等！」

俺の周囲の人たちはこの展開についていけていない。
唯一学院長だけがジッと俺の方を見ていた。
俺とギトーはそのまま決戦の地となる中庭へと向かった。

「っは！？　学院長！　どうするんですか？！」
「そうですわ！」
「落ち着くんじゃ二人とも。
二人は中庭に向かったということはこの鏡で見れるということじゃ。
ならじっくり観戦しようではないか」
「「なぜそんなに落ち着いてるんですか！」」
「おぉ……二人には話とらんかったかの？
レッド君は確かにトライアングルじゃ……ギトー君には勝てんかもしれんの？
しかし彼は手助けがあったとはいえ、２人でバジリスクを倒すほどの手練じゃ」
「バ……バジリスク！？
あの剣も通らない硬い鱗に包まれた蛇の王を！？」
「レッド君がそこまで……」

「それにギトー君は確かにスクウェアかもしれんが、実戦経験が少なすぎる。
儂としてはレッド君が負けるとは思えんのじゃ」
「しかし万が一というものがあるのですよ！？」
「それもそうじゃな……ならコルベール君に、審判兼見届け人になってもらうおうかの？」
「……分かりました。
いざとなれば二人を止めます」
「頼んだぞコルベール君」
「頑張ります」

そう一言言ってコルベールはレッドとギトーを追いかけて、急ぎ中庭へと向かった。
後ろで今までの表情とは違った真剣な表情で呟くオスマンに気付かずに……。

「見定めさせてもらうぞ？　お主の力……。
お主が2年でどれだけ成長したのかを……の」
「オールド・オスマン今何かおっしゃいまして？」
「いんや？何にも言っておらんよ。
二人とも怪我がないといいのぅ」
「そうですねぇ」

第５７話　逆鱗（後書き）

教師陣のなかで反対しそうなギトーを力押しします。

第５８話　慎重な戦い（前書き）

作者はギトーが好きくないｗ

第５８話　慎重な戦い

～コルベール　ｓｉｄｅ～

コルベールが中庭に着いた時にはもう、二人は向かい合っていた。

「レッド君、ギトー先生！落ち着いてください！」
「あぁ、コルベール先生。
僕は落ち着いていますよ？
今から決闘するから離れていた方がいいと思いますよ？」
「ちょうど良かった。
コルベール先生に見届け人を頼みます。
彼の負け様をしっかり見届けてくださいよ！」

駄目だ……この二人止まらない。
ならせめて危なくなったら私が止めよう。
それにこの決闘でレッド君がギトー先生を納得させれば今後こういったことは起こらないだろう。
唯でさえ１８歳で教師になるんだから、実力を示さないと認めてもらえないかもしれない。

「分かりました……しかしルールは守ってもらいます。
一つ、相手を死に至らしめるような攻撃をしない。
二つ、気を失った場合、その時点で相手の勝ち。
三つ、杖を折られた時点で負け。

以上の三つを守ってください。」
「……分かりました」
「いいでしょう！」
「では、私が合図をしますので……」

私は諦めて、なんとか怪我がない様にすることを心に決め、この決闘を見守ることにした。

～side　out～

コルベール先生は、本当に戦いが嫌いなんだな……。
でも今回は止まる気がない。
コイツは両親を馬鹿にした！
俺自身変わってるのは認めるし、１８歳で教師になるということに疑問を抱くのも分かる。
だが、両親は関係ないだろうが！
原作でも人を下に見たり、上にあがっていく人間を妬んだりするといった小物だったが、こんなにウザったいとは思わなかった。
もし今回キレなかったとしても、いつかこういった形で決闘の様なことになっていただろう。

「私が投げたコインが地面に着くのが開始の合図と言うことで……」
「分かりました。」

こいつは腐ってもスクウェアだ。
実戦経験はあるのか知らないけど、俺より上のランクの魔法使いだ。
なら俺が勝つためにどうすればいい？

「では……ふっ！」

コインがそれに向かって飛んでいく。
俺がコイツに勝つにはコイツが油断している内に一気に決めることか……。
それともアイツが知らない魔法で攻めるか？
とりあえずは、速攻かける！

そうして地面にコインが落ちる。
チンという音と同時に俺とギトーは動きだした。
俺はその場から動かなかったが、ギトーは一回下がって詠唱を始めた。

「（ライトニングクラウドか！？）アースハンド！」
「っ！？」

俺はアースハンドでライトニングクラウドが発動する前に、ギトーの体勢を崩した。
そしてすぐに解除し、今度は逆に俺が攻勢に移る。

「ボトムレス・アース！」

俺は地面に杖を向け、少し前に出来るようになったネタ技というかネタ魔法を放った。
するとギトーの足が徐々に地面に沈んでいく。

「な、何だこれは！？」
「土土水のトライアングルスペルですよ……」

ギトーはそこから抜け出そうと足を動かすが、もがけばもがくほど身体が沈んでいく。
次第に沈んでいくギトー先生だが、今は気付いていないようだが、フライで抜けだされるかもしれない。
しかしそんなことはさせない。

「よいしょっと！」
「な！　グッ！？」

俺は近くにある石を掴み、思いっきり投げつける。
痛がって背中を曲げるギトー。

しかし投げ続ける。

「やめっ！　い！　やめろ！」

「……」

5回ぐらいの投石が終わると、腰まで地面に埋まったから、そこで一旦投石を止める。

そして一回魔法を解く。

すると地面は元の地面に戻り、ギトーは土に下半身を埋めた状態で動けなくなった。

しかしこれじゃ抜けだされるかもしれない。

「錬金」

「なにをするつもりだ？！」

俺はギトーの埋まった辺りの土を鉄に錬金した。

「どうしますか？」

「何がどうしますか？だ！私はまだ魔法を唱えられ「アースハンド」る……」

土で出来た手で杖を叩き落として、腰にある剣を抜いて首に添える。

「どうしますか？」
「わた……だ」
「はい？」
「私の……だ」
「聞こえませんよ？」
「私の負けだ！」

俺はその言葉を聞いて、コルベール先生の方を見た。
コルベール先生は苦い顔をしながら、俺の勝利を告げた。

「レッド君の勝ちですね……。
では彼の拘束を解いてください」
「分かりました」

まぁ今となっては拘束する必要もないので、普通に錬金を解く。

「すみませんギトー先生、やり過ぎたかも知れません。
しかし自分を馬鹿にする分には構いませんが、両親を馬鹿にするのは止めてください。
僕は両親を尊敬しています。
なので深く知りもしない人に馬鹿にされるのは耐えられないのです。
言うこと聞く云々の話は二度と両親を馬鹿にしないでくれるだけでいいです」
「……」

悔しそうに俺を睨むギトー先生。
コイツ絶対覚える気ねぇな……次喧嘩売ってきたら装備してでも潰そう。
そして未だ座り込んでいるギトーを置いて、俺とコルベール先生は学院内へと戻って行った。

「レッド君……勝つためとはいえあの戦い方はどうなんだい？」
「どれのことでしょうか？」
「投石のことです！」

確かにやりすぎと感じるかもしれないけど、もしあの時石を投げなかったらフライで逃げられたかもしれない。
魔法で手痛い反撃を受けたかも知れない。

「しかし投石で集中を途切れさせなければ、魔法で反撃されたかもしれません」
「ですが！」
「僕としては絶対負けられなかったので、念には念を入れたんですが……気分を害してしまったならすみません」
「……いえ、勝つために最善を尽くすということ自体は分かりますから」

それからコルベール先生は何かを考えている様な表情で、学園長室に戻るまで終始黙っていた。

第５８話　慎重な戦い（後書き）

主人公の勝ち方がセコイとかいうのは聞きません！！
っていうかギトーの実力が分からないので、めっちゃ慎重に戦った結果がこれです。
最初速攻掛けて拳でフルボッコしようか迷ったんだけど、風のメイジに早さで勝てるか分からなかったんで、足を止め、身体を拘束し、杖を奪うという形にしました。
次回やっと原作キャラ達入学

第５９話　教師生活の始まり（前書き）

やっと原作が近づいてまいりました！！

第５９話　教師生活の始まり

ついに来るな……原作キャラ達が。
ここからあの物語の前哨戦が始まるのか。

「入学おめでとう！
お主達は未だ貴族の卵だが、ここにいる3年間で同年代の貴族の有り様を知り、友好を築いていきなさい。
時には衝突することもあるだろう……しかしそこで終わってはいかん！
相手が何故そういう反応をしたのか？自分の発言を振りかえり自身に非がなかったか？
相手に全ての理由を押し付けている内は大物にはなれん！
お主たち一人一人が英雄になりうる資格を持っておると儂は信じておる。
以上で儂の挨拶は終わりとする……どうじゃ？儂カッコよくね？」
「そうですね、３０点ですね」
「厳しくね？！」

……相変わらず厳しいなロングビル。
まぁ日頃下着覗かれればそうなるか。
現代の日本なら……逮捕だな。

「次はお主たちに魔法を教える教師たちを紹介する。
先ずは火の授業を担当するコルベール先生」
「私と火の破壊以外の有用性について学んでいきましょう！」

コルベール先生ぇ……生徒がキョトンとしていますよ？
まぁ火のイメージは攻撃って感じだからな。
頑張れコルベール先生！貴方の教義は決して間違っていないですよ。

「次は土の授業を担当するシュヴルーズ先生」
「私もまだまだ未熟ですが、貴方達よりは人生経験が長いですから悩み等があれば聞きに来てくださいね」

保険の先生か貴方は……。
出来れば美人で白衣だったら満点だったんだけどなぁ。
っていうか決め台詞言わなかったな……私はただのトライアングルですから発言楽しみにしてたんだが。

「次は風の授業を担当するギトー先生」
「……フン。風のことなら私に聞きなさい。
風の真髄を教えてあげましょう」

相変わらず上から目線だな……っていうか壇上に上がる前に俺の方を見るなよ。
根に持ってるのか？

「次は今年から教師として働いている水の授業を担当してくれるレッド先生」

「本当だったんだ…」「え？」「レッドさん？！」

ついに俺の番か……。
っていうか聞き覚えがある声がしたな。
まぁ今は自己紹介しないとな。

「今ご紹介に預かったレッドです。
近い年齢の僕に教えてもらうのは違和感を感じるかも知れませんが、
精一杯頑張っていきますのでよろしくお願いします」

なんか生徒たちの中に三人ほど目つきが違う子がいるな。
ワクワクしている目、疑問を感じている目、驚いている目。
まぁそれぞれルイズ嬢、モンモランシ嬢、ギーシュ君何だけど……。
これは後で部屋に来るかもなぁ。

「彼らは儂が認める優秀な教師たちじゃ！
きっとお主たちの道しるべになってくれるじゃろう。
進め若人達よ！そしてお主達が進む道を儂に見せてくれ！
……今度はどうじゃ？」
「３５点」
「５点上がったの！！」

喜ぶのか学院長……っていうか生徒達が冷めた目で見てますが、い
いんですか？
生徒たちの眼を知ってか知らずか、学院長は入学式の終了を告げた。

まぁ俺はこのままだと目立ちそうだったから、急ぎ部屋に戻った。

～ルイズ　ｓｉｄｅ～

お母様の言っていたことは本当だったんだ……レッド兄様が教師になるなんて、てっきり冗談かなんかだと思っていたけれど。
でもこれでこれから三年楽しくなりそうね！

「なんかツェルプストーがいるのが気になるけど、兄様がいるなら……」

とりあえず後で兄様の部屋に行きましょう！
でも他にも兄様の自己紹介の時に声を上げた人がいた気がするんだけど……誰かしら？

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～モンモランシ　ｓｉｄｅ～

あの人は……レッドさん？
なんでこんなところで教師なんてやってるのかしら？

「でもあの人は、人を導く仕事が似合いますね。
私も導かれた一人ですしね」

私は自分の悩みをぶちまけた時のことを思い出しながら、後で部屋にお邪魔しようと決めた。

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ギーシュ　ｓｉｄｅ～

「レッドさんじゃないか！！
そんなことより、なんで水の授業なんだ！？」

彼は土メイジじゃなかったのか？
兄さんは彼が土のメイジだと言っていたから、もしかして水と土のメイジなのか？
でも確か二つ名は石繰……どういうことだ？

「あぁ分からない！こうなったら直接聞こう！」

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第６０話　恩師の娘と幼なじみの妹（前書き）

ユニークが１０万突破！！
ＰＶは……１６０万アクセスだと！？
本当に読者の皆様には感謝してもしきれませんね。
これを糧に、これからも頑張っていきます。

第６０話　恩師の娘と幼なじみの妹

入学式も終わり、部屋に帰った俺は机の上で授業資料を整理していた。
しかしドアの外に人の気配がしたので、資料を仕舞い、来客の到着を待った。
するとノックが三回聞こえたので、「どうぞ？」と一言告げた。

「失礼します……ってそれよりレッド兄様！
本当に教師になったんですね！」
「あぁ……成り行きに近いんだけどね？」
「それでも会えて嬉しいわ。
この間は留守にしているときにいらっしゃったと聞いて、本当に驚いたのよ？」

そう言えばいなかったなぁ……カトレアさんの記憶が強すぎて頭の隅に追いやられてたよ。

「ところで兄様は「ストップ」え？」
「ここでは先生だからね、プライベートの時は良いんだけど、学院では気をつけてね？」
「あ、そうですね」
「（まぁそれ以上に目立つしな……ヴァリエール家の３女に兄と呼ばれると目を着けられるかもしれない）分かってくれたなら何にも問題ないかな」
「そう言えば入学式の時に私の他にも何人か声を……」

その時ドアを叩く音が俺の部屋に響き、ルイズ嬢の話が中断された。
ドアは俺が返事をする前に開けられ、その人物が明らかになった。

「失礼しますレッドさ……ん？」
「あぁ、久しぶりだねモンモランシー嬢」
「……誰？」
「あぁ二人とも初対面なのか……なら紹介しようかな？
今入ってきたのはモンモランシ家の長女でモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ」
「……よろしく」
「そしてこっちが、ヴァリエール家の三女でルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」
「……どうも」
「二人とも同じ新入生みたいだから、これから仲良くね？」
「「……」」
「どうかしたのか？」
「「何でもないわ（ですわ）」」

なんか微妙に空気がおかしい気がする。
なんでだ？
まぁそれはいずれわかるだろ……それよりもモンモンは何か用かな？

「ところでモンモランシ嬢は何故僕の部屋へ？」
「あぁ！忘れてましたわ！！
なんでレッドさんが教師をしているのですか？！」

「あなたそんなことも知らないの？」
「何ですって？！」

え？何でいきなりこんな展開？
っていうか普通にルイズ嬢が喧嘩売りにいったけど、仲悪いのか？

「兄様は学院長直々の交渉で教師にスカウトされたのよ！」
「そうだったの……ってそれより兄様って何なの？！」
「兄様は兄様よ！小さな頃から家族ぐるみで親交があったから、兄様を兄様って呼んじゃ可笑しいって言うの？（最近だと兄弟って言うよりも……）」

この子……いきなりバラしたな。
まぁ学院っていうより寮だからさっきの話に当てはまらないのかもしれないんだけど、この速度は想定外ですよ。

「まぁそれなら納得できました（少し羨ましいけど……）」
「そう、なら私と兄様は話があるから、他に用がないなら部屋を出てくれると嬉しいのだけど？（この子今は問題ないけど、何かの拍子でライバルに成りかねない気がするのよ）」
「な！？　何で貴方にそんなことを言われなければならないの！」
「久しぶりの兄妹の会話なのだから気を使ってくれてもいいじゃない？」（要約：邪魔どっかいけ）
「あら？　私も昔レッドさんに大きな悩みを解決してもらった時のお礼をしっかりしていないから、その話をしたいのだけど？」（要約：なんか二人にさせるのは嫌！）

なんか部屋が寒いっていうか、熱いっていうか、黒い空気に包まれてきている気がする。
アイガに会いたい……っていうか助けてくれ！
俺がそんなことを考えていると二人は同時に俺の方を向いて、一斉に言い放った。

「「どっちと話すんですか！？」」
「……とりあえず今日はもう遅いから、部屋に帰った方がいいと思うよ？」
「今日はここまでね……」「……今度はこの子がいない時に来よう」
「とりあえず今度からはいきなりじゃなくて、先に言っておいてくれると助かるかな？
今日はお茶の用意も出来なかったからね。
それじゃあ明日は僕の初めての授業だから、また明日ね？」
「おやすみレッド兄様」「おやすみなさいレッドさん」

二人はそう言って俺の部屋から退出した。
俺はそこでやっと今日が終わったと感じ、気を抜くことが出来たのだった。
余り長い時間じゃなかったけど、疲労は大きかったから、とりあえず資料整理は明日の朝に回して、今日は早めに寝ることにした。
実は俺の部屋の外には、男友達の弟君がいたのだが疲れていた俺はそんなことに気付くこともなく、ベットの上で目を閉じていた。

～ギーシュ　ｓｉｄｅ～

ドアから漏れるあの二人の舌戦を聞いていた僕は、ノックしようとした手を止めた。

「レッドさん……貴方はクレイとゴーレムの腕だけでなく、バラの扱いまで僕より上手なんて！
これはやはり彼に師事を受けるしかない！
……それにしてもモンモランシーといったかな？　あの子可愛い子だったなぁ。
もしよければレッドさんに紹介してもらおう」

僕はレッドさんの部屋から出てきた金髪の女の子に思いを馳せながら、自室へと戻って行った。

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第６１話　初めての授業（前書き）

授業タイム

第６１話　初めての授業

朝起きて、授業の準備をする……何か俺教師って言う感じがする！！
まぁ資料読んで授業計画立ててた時点で大分実感してたんだけどね？
やっぱり直前となると緊張するもんだ。
俺はどんな授業をしていくか頭の中で確認しながら、ゆっくりと教室へと歩みを進める。
教室の前で一回深呼吸をして、俺はドアを開けた。

「今日からあなた達の水の授業を担当するレッドです。
授業を始める前に言っておきますが、分からない部分があれば質問してくれて結構なので、挙手してください。
それでは授業を始め「ちょっと待ってください！」はい、何ですか？」
「やっぱり同い年くらいの貴方に教えられるというのは納得いきません！」

やっぱこういう意見が出てきたか……。
って言うか誰だこの子？
まぁいい、とりあえず他の生徒達も同じ意見の様だな。
例外はモンモランシー嬢、ルイズ嬢、ギーシュという俺の知り合いと、俺に興味の無いタバサ嬢位か？
モンモランシー嬢が心配そうに俺を見ているが、他の二人はジッと俺を見ている。
タバサ嬢は本を読んでいるが……。

「ならどうすれば納得しますか？」
「先ずレッド先生は何クラスですか？」
「隠していてもしょうがないですから言いますけど、水と土のトライアングルですね」

俺のクラスを聞いて半分くらいの生徒が納得してくれた。
っていうか俺のクラスを聞いて一瞬だけどタバサ嬢が俺を見た。

「そうですか……なら実力はあるみたいですね」
「（あの子何様なの？　レッド兄様に向かって……）」
「でも私は貴方を教師として見れません」
「それはこれから私が行って行く授業の中で認めていってください。僕自身先生として出来上がっている訳ではないので、成長しなければ成りませんしね？」

まぁ想定の範囲内かな？
っていうか半数が納得してくれただけでも多いくらいだ。
それじゃあ授業を始めるとしますか！

先ずクラスのメンバーに自己紹介をしてもらったのだが、キュルケとルイズ嬢が微妙に喧嘩したりして少し波乱はあったが、つつがなく終わった。
そしてここから俺の授業が始まる。

「まず君たちの中にある魔法の認識を変えてもらいたい。
水が攻撃に向いていない？　そんなことはありません。
確かに火の様に見た目大きな怪我を負わせるのは、簡単ではないですね。
ですが不可能ではないのです。
治療やサポートの影に隠れているせいで、水の残酷さが隠れてしまっているのです」
「水の残酷さってなんですか？」
「いい質問ですね。
貴方は一瞬で焼け死ぬのと、じわじわと息が出来なくて死んで行くならどっちが辛いと思いますか？」

俺の質問を聞いた男の子……っていうか殆どの生徒は顔を青くしている。

「それは……息が出来ない方が辛いと思います」
「そうですね……まぁ水が氷になったりした場合話が変わってくるのですが、火だって超火力で一気に焼かれてしまえば苦しみは少ないかもしれませんが、そんな火力は早々出せません。
故に先ほどの質問の意味など殆どないようなものです。
しかし水の魔法だろうと人を傷つけることが容易にできるというこ

とが分かってもらえたと思います」

先ほどからタバサ嬢の視線が気になる。
本から偶に顔を上げて黒板を見ているということは、多少授業に興味を持ってもらえてるのかな？
一応成り立てとはいえ教師になったからには授業を聞いて欲しいから頑張らなきゃな。

「攻撃力では火に負け、隠密性では風に負け、材料の多さでは土に勝てない。
しかし水は決して戦闘で無能なんかではない！
サポートを馬鹿にしている人は今すぐその考えを捨ててください。
例えばスリープクラウド、これは相手に眠りをもたらす雲を作り出す魔法ですが、これを使えば自分よりランクの低い相手を眠らせることが出来る上、同レベル以上の敵が相手だとしても当たったら眠気は訪れる。
要するに集中力が下がるということだ！！
魔法に大切なのはイメージと集中力、そして精神力だ。
その一部が欠損すれば魔法は不完全なものに成り果てる」

割とみんな真剣に聞いてくれているみたいだけど、やっぱり実感が沸かないのだろう。
首を傾げている子も何人かいる。

「まぁ要するに絡め手を使えばクラスが上の相手にも勝てる可能性があるということだよ。

そして水の奇襲は避けにくい。
風も厄介だが、水も厄介なのです。」
「え？でも水何て目に見えてしまうし、風に比べれば……」
「確かに風の魔法は隠密性に優れていますね。
しかしそれは晴れの日に限ります。
もし雨の日ならば、雨の粒が風に飛ばされて風の通り道が見えるのです。
他にも相手が水上、または水中にいた場合は風の様に見えない攻撃を加えることが可能になるのです」

「おぉ～」「確かにそうかも……」とか言う声が聞こえてくる。
タバサ嬢ももう確り俺の授業を聞いている。
そして俺の知り合い群は、俺が予想以上に真面目な授業をしているので驚いているようだ。

「そろそろ時間かな？……今日はここまでとします。
次回は水の秘薬の有用性とその副作用について説明します」

俺はそう言って教室を出て行った。

「ふぅ……なんとか無事に授業を終えたな。
まだ若干俺が教師で納得いかない子がいるようだけど、これからの態度で表すしかないからな！
頑張るとしよう」

こうして俺の初授業は幕を閉じた。

第６２話　赤髪に向けられた風の刃（前書き）

特にイベントが思い浮かばなかったので、とりあえず原作イベントの一つ目発動！

第６２話　赤髪に向けられた風の刃

授業も順調に進んで、一カ月ほどが経過した。
しかしこの頃教室内の空気が微妙におかしい気がする。
具体的に言うなら二人の生徒を中心に……。

確かあの男子生徒はヴィリエとか言ったかな？
なんか劣化ギトーみたいな性格してるんだよなぁ。
俺はとりあえず薄れつつある原作知識を元に記憶を探ってみた。

「あぁ～思い出せないなぁ。
でも何か頭に引っ掛かる……」
「レッドさん？　どうしたんですか？」
「あぁギーシュ君か。
そうだ！　最近教室の空気が可笑しい理由わかる？」

自室に向かう途中、ぼやきながら歩いているとギーシュ君が話しかけてきたので、ちょっと尋ねてみることにした。

「そうですね……多分ですがヴィリエじゃないでしょうか」
「やっぱり彼か……彼は何故あんなに苛立っているんだ？」

話を聞いてみると、どうやらギトーの授業で風の実習を行った時に自身よりもタバサ嬢の方が風の扱いが上手いと気付いて決闘を申し

込んだのだが、あっけなく敗退した上に歯牙にも掛けられなかったようだ。
それを逆恨みして何かを企んでいるらしい。

「それは……面倒くさいな。
でも何か起こりそうなのが余計に面倒くさい」
「やっぱりレッドさんもそう思いますか……」

今思い出したけど、これタバサとキュルケの決闘のやつか……。
なら俺は手出しできないな。
あの二人が仲良くなるきっかけを壊すわけにはいかないからな。

「そう言えばレッドさんは今夜のパーティどうするんですか？」
「（って今日がパーティってことはイベントが起こるじゃねぇか！！）ご飯食べに行くかな？」
「相変わらずですね！」
「（一応気合入れとくか）バイキング形式だから色んな物食べられるしね」

俺はその後ギーシュともう少しだけ話をして、パーティの準備に取り掛かった。

「今日は1年生にとって初めての学院パーティになるじゃろう。
授業や先のことは一旦置いて、この短い宴を精いっぱい楽しみなさい！
それではＬｅｔ'ｓ　Ｐａｒｔｙ！……今回はちょっとは若しく言ってみたんじゃが？」
「２０点ですね。」
「下がった！？」

相変わらず辛口だなロングビル。
それにしても流石に3年のパーティ程ハッチャケてねぇな。
まだ初々しさがあふれ出てる。
所々で普段話したことない相手とコミュニケーションを取ろうとしているのが見える。
そして全体を見渡してみると……やっぱりか。
ヴィリエと数人の女子が窓の近くで何か話している。

「（やっぱりキュルケに風魔法を放ってその罪をタバサに押し付けるのか……胸糞悪いな。）クソ！もどかしいな！」
「兄様？どうかしたんですか？」
「！？あ、あぁ知り合いが見つからなくて暇だったのが、表に出てきてしまってね。

それにしてもルイズ嬢は大分大人っぽくなったね」
「兄様ったら！」

そんな会話をしつつも俺は、キュルケとヴィリオから気を逸らさなかった。
なにか間違いがあって、怪我でもあったら困るからな。
あ！ヴィリエが動き始めたな。
カーテンに穴をあけて杖だけ表に出して魔法を使う気か……周囲を女生徒達が囲んでいるせいで誰も気づいていないな。

「……ま！」
「（一応ポケットの中に予備の小さな杖を入れてあるから、いざとなればそれで）」
「…いさま！」
「（幾らあの二人が仲良くなるためとはいえ、止めたいなぁ）」
「兄様！」
「あ、あぁルイズ嬢……何の話だったかな？」
「兄様がちぃ姉様と何時も部屋でなにをやっているかよ！」
「だから何時も言っているだろう？　動物たちと遊んでいるんだよ。」
「嘘よ！　だったら何でその時に私も呼んでくれないの？！」
「それはッ！？　ちょっとルイズ嬢、話は後にしよう。
僕はやることが出来たようだ」

カーテンが揺れ始めている。
そろそろ打つ気だな……。
そして杖が微妙に動いたとき、そこから風の刃が飛び出してキュル

ケのドレスを切り裂いた。
突然のことに一瞬場の空気が固まった。

「キャーーーーーーーーーーーーーー！！」

流石に悲鳴を上げるキュルケをそのままにも出来ず、とりあえず応急処置だけでもしようと俺は杖を出した。

「プリズンロック」

その言葉と共に、キュルケの周囲を取り囲むように白い石の壁が出来る。
本来は上も完全に塞いで逃げられなくした後で、下から追加攻撃するんだけど如何せんこの魔法も使用回数に大分制限があるからなぁ。
ギトー戦で使わなかったのは、殺しかねなかったからという理由が一番大きいかな？
周囲の生徒は突然現れた石の箱に驚きながら辺りを見回していた。
ヴィリエ達だけは俺の方を睨んでいたけど、そんなの微塵も気にせず俺はキュルケの元へと向かった。

「大丈夫ですかキュルケさん？」
「大丈夫なわけないじゃない！！」
「ですよね、今そちらにカーテンで作った簡易服を投げますので、それを着たら呼んでください」

俺はそう言って、ヴィリエ達のいない方の窓に行ってカーテンを引きちぎった。
そして錬金で簡単なバスローブの様なものを作って、上から放り入れた。
しばらく待っていると、小さな声で「終わりました。」という声が聞こえたので、石の壁を崩す。
すると中から扇情的な格好のキュルケが現れた。

「え……あの壁はレッド先生だったんですか？！」

なんか目を見開いてビックリしてるなぁ……新鮮かも。

「そうですよ、誰かが放った魔法までは止められませんでしたが、一応あのままにしておくのも一寸と思いましてね？
それに美女の裸は安売りしちゃいけないでしょ？」

と俺が慣れていないウィンクをすると、キュルケは吹きだしたように笑ってくれた。
少しは気が紛れたかな？
でも笑いが収まってから顔をゆがめて何かを考え込んでいるようだ。
ここから先は原作通りになりそうだな。

「（しかしさっきからタバサ嬢がキュルケを見ているのはどういうこと……いや見ているのは俺か？）それでは僕は一応学院長に説明

に行かなければならないので、ここら辺で失礼するよ」
「そう？　お礼にダンスのお誘いでもしようかと思っていたのに」
「そんなことをしたら、君を想っている男性たちに恨まれてしまうから遠慮しておくよ」

俺はそう言って学院長に今回のことを教えに行った。
まぁ犯人のことは告げなかったけど……ここで犯人が捕まってしまうと二人が親友にならなくなるかもしれない。
仲直りした後なら普通に報告するんだけどね。

第６２話　赤髪に向けられた風の刃（後書き）

いきなりかな？いやでも設定上入学直後だったはずだから時間軸はこの位だったはず。

第６３話　赤と青

翌日の授業は、昨日よりも空気が悪かった。
キュルケのそばに昨日ヴィリエと一緒にいた女子生徒がいることから、おそらく昨日のことはタバサがやったとでも言っているのだろう。

「（本当に度し難い）今日の講義はここまでにします」

俺はそう言って教室を出ようとすると、タバサが俺に近づいてきた。

「今日の放課後中庭に来て」
「突然だね、何でか聞いていいかい？」
「決闘の立会いを頼みたい」

何で俺？っていうか立会いなんかいらないんじゃないのか？
って言うかもうキュルケは決闘を申し込んだのか……。

「どうして僕に声を掛けたのかな？」
「……」
「話したくないなら、まぁ別にいいんだけどね」

まぁいいか、怪我を未然に防げるならそれはそれで。

それにこのイベントに俺がいたところでたいした問題じゃないだろう。

「分かったよ、放課後に中庭に行けばいいんだね」

タバサはコクッと一回だけ頷いて教室を出た。
放課後か……まだ時間があるけど、部屋に帰って用意しておくか。

「どうやら逃げないで来た様ね！」
「逃げる必要性を感じない」
「そうよね！　あんな喧嘩の売り方してきたんだから！」
「何のことを言っているかわからないけど、決闘は受ける」
「……ところで何でレッド先生がいるのかしら？」
「あぁ立会人として呼ばれてね、まぁ出来ればあまり怪我をしないでくれると嬉しいかな？」
「それは難しい相談ね」「難しい」
「（なんだかんだいって仲いいんじゃないか？）それじゃあ二人とも準備はできている？」
「えぇ」

「……」（コク）

俺はとりあえず辺りを見渡して、ヴィリエ達が何処かで見ているのではないかと探してみると、普通にいた。
草場に隠れているようだけど、女の子のスカートが少しはみ出ているぞ。
後で二人に教えてあげよう。

「それでは……始め！」

俺の声と当時に二人はバックステップして、距離を離した。
どうやら先ずは撃ち合うらしい。

「ファイアー・ボール！」
「エアカッター」

キュルケの放った大きな火球は、タバサの放った風の刃に切り裂かれ消滅した。
しかしタバサの放ったエアカッターも同じく消滅したため一旦仕切り直しになった。

「（思ったよりやるわね……）甘く見てたわ」
「（意外と強い）本気で行く」

二人を包む空気が変わり、より実戦的な雰囲気を醸し出し始めた。

「フレイムボール！」
「ウィンディアイシクル」

先ほどより規模の大きな撃ち合いが始まったが、ここからは流れが違った。
氷の矢が相手目掛けて無数に飛んでいくが炎の弾の勢いは落ちない。
しかし一発の炎球が防げるのにも限りがある。
いくつかの矢がキュルケへと飛んでいき、身体をかすめていく。
ここで俺はタバサが走り出していることに気付いた。

「（何をする気だ？）」

その小さな体を最大限に生かして、凄まじい勢いでキュルケへと近

づいていくが、キュルケはウィンディアイシクルを避けるのが精いっぱいで、タバサのことが見えていない。
気付けばタバサはキュルケの真後ろに立っていた。

「貴方の負け」
「何時の間に！？」
「貴方が必死に避けている間に、身をかがめて後ろに回った」

やっぱり実戦経験の差が大きいか……。
キュルケの背中に杖を突きつけて勝利宣言をするタバサは少し誇らしげだった。

「勝者はタバサ！」
「……負けちゃったわね。
でも貴方が犯人じゃないことは分かったわ。
貴方だったらあんなことをする必要がないもの。
正面から私に決闘を申し込めばいいものね」
「それに関しては僕に心当たりがあるかな？」
「どういうこと？」

俺はもうバラしても大丈夫だろうとヴィリエ達が隠れている場所を指さした。

「なんかあそこに隠れてる人がいるみたいなんだよね？」
「……へぇぇ、怪しいわねぇ」

「怪しい」

3人でそこをジッと見ると、彼らもヤバいと思ったのか後ろに向かって走り出したのだが、流石に逃がす訳にはいかない。

「アースハンド」
「うわっ！」「「キャッ！」」

三人の生徒が足を掴まれて転んだので、そのまま土の腕で拘束する。

「貴方達は、タバサが犯人だと言っていた……。」
「わ、私たちはヴィリエにそう言えって言われて……しょうがなかったのよ！」
「な、何を言っているんだ！君たちこそキュルケに好きな人を取られたから仕返ししたいと言っていたじゃないか！」
「……まぁどっちもどっちだな。
とりあえず君たちのことは学院長に伝えておくので、こってり絞られるといい。
もちろん親御さんにも手紙を送ることになるから覚悟しておくように」

俺がそう言うと3人は項垂れたように、そこに座りこんだ。

「この3人の処遇はこれでいいとして、二人はどうしようか。」

「へ？」「……？」
「あ、説明してなかったかな？この学院決闘禁止されてるんだよね」
「な、何ですって！？」「……」
「……なんてね、今回は見逃しておくよ。
でも次は見逃さないからね？」
「もう、驚いたじゃない！」
「ビックリした」
「ごめんごめん、でも二人ともとりあえず怪我の治療をしようか。
かすり傷とか結構あるみたいだからね」

俺はそう言って二人にヒーリングを掛けていった。
二人の傷がなくなるのを確認すると、二人が向かい合っていることに気付いた。

「今回は巻き込んでしまってごめんなさい」
「気にしてない」
「それにしても貴方強かったわね、正直驚いたわ」
「貴方も強かった」
「もしよかったら今度一緒に買い物に行かない？
美味しいケーキのお店見つけたのよ！」
「……」（コク）

どうやら二人は原作通り仲良くなったみたいだな。
良かった良かった。
二人を尻目に、俺は黒幕三人を連れて学院長室へと向かった。

第６３話　赤と青（後書き）

原作イベントを一つ消費
タバサに若干目をつけられました。
キュルケからはいい人だと思われてますが、フラグが立つほどではありません。

第６４話　姦し三人娘＋１（前書き）

後日談〜

第６４話　姦し三人娘＋１

あの後学院長室に三人を連れていって、今回のことを説明した。

「その二人も呼び出した方が良いのじゃないかの？」
「いえ、あの二人には僕の方から厳重注意をしましたので、もし次に何かしたときは連れて来ます。
ですから今回は許してあげてください」

これで呼び出しされたら俺の言葉が嘘になっちゃうからな。
それに今頃きっと仲良くご飯でも食べてるだろう。
邪魔したら悪い。
唯でさえタバサ嬢は特殊な立場ゆえに、友達が作りにくいのだから……。

翌日授業を終えるとキュルケに呼びとめられた。
なんか連鎖的にチラッとタバサ嬢を見ると、偶々目が合ったので会釈をしておいた。

「昨日はありがとうね？」
「僕がした事なんて殆どないよ」
「それでも……あいつらを捕まえてくれたのはレッド先生だしね」

本当に昨日はヴィリエ達を捕まえるくらいしかやってないしなぁ……。
そんなことより教室内でこういった話をしたのは不味かったな。
ルイズ嬢が立ちあがってこっちに近づいてきている。

「ツェルプストー！　あんた兄様に何の用よ！」
「兄様ってどういうこと？
たしかレッド先生は、ドリュウズ家の長男だったわよね？」

学院ではそう呼ぶなって言ったのすっかり忘れてるなこの子・・・・・・。
まぁどうせいつか口滑らすと思ってたけど、早すぎないか？

「兄様は兄様よ！」
「貴方には聞いていないの、私はレッド先生に聞いているの」
「確かに俺はドリュウズ家の長男だけど、まぁ……長い付き合いで、妹みたいな存在だからね」

なんか微妙にルイズ嬢に睨まれているのが謎なんだが、キュルケは納得したようだ。
しかしキュルケはその後ルイズをちらっと見て薄く笑いながら俺の腕に自分の腕を絡ませた。
これは……嫌な予感がするぞ？
男子からの目線が厳しくなったし……。

「あ…あんた、何してんのよ！（羨ましいじゃないの！！）」
「この間助けてもらったお礼がまだだったわね。
今夜私の部屋に来ませんこと？」
「な、ななな！！」

勘弁してくれ……ルイズ嬢をからかいたいなら俺を巻き込まないでくれ。
っていうかモンモランシー嬢も微妙に睨んでいるのはなんでだ？

「いい加減にしなさいよ！
それにレッド兄様があんたなんかの部屋に行くわけないじゃない！」
「別に貴方には関係ないでしょう、妹分さん？」
「あ～～～～～！！！！　ムカつく！！！！　やっぱりツェルプストー家はヴァリエール家の天敵ね！！」

なんか俺放置されてね？
でも腕掴まれてるから逃げれない。

周囲の視線が痛い……特に男子の。
俺はとりあえずキュルケの腕を俺の腕から外して、二人を落ち着かせるために喋り出した。

「二人とも先ず落ちつけ。
とりあえず僕の答えはだ……まず礼はいらないよ。
それに部屋に行くなんて、君の彼氏に悪いだろうしね」
「あら、レッド先生ったらそんなことを気にしてらっしゃったの？
それに彼らは彼氏じゃなくてお・と・も・だ・ちよ」
「（夜に部屋で会う約束とかしてたら普通にお付き合いしてると思うんだけど……）」

あぁやっぱり何人か机に突っ伏した。
そりゃ凹むよなぁ、幾ら自分以外にも彼氏がいると分かっていても、その根底から覆されればそりゃ凹む。
っていうか普通に刺されても可笑しくないんだけど、大丈夫かキュルケ？

「なんにせよ遠慮しておくよ」
「そう、残念ね」
「当り前じゃない！！」
「ルイズ嬢も落ち着いて」
「でも！」
「いいから」

俺はそう言いながらルイズ嬢の頭を撫でた。

すると借りてきた猫の様に静かになって、言うことを聞いてくれた。
あれ？モンモランシー嬢の眼がさらに険しく……。
後でご機嫌取りしとかないと、マルギッテさんが攻めてくるかもしれない。

「僕はそろそろ部屋に戻って、明日の授業の準備をしようと思うから、ここら辺で失礼しようかな？」
「そう、じゃあ気が向いたら私の部屋に来てね？
待ってるわ」

と一言残し、投げキッスをして教室を出て行った。
微妙に嬉しかったのは内緒。
男子生徒からの視線がまた一段と痛くなったよ……。
そして何より痛いのは横にいる女の子の視線なんだけどね。

「兄様？」
「な、何かな？」
「今デレデレしてませんでした？」
「そ、そんなことないよ？」
「そうですか、もし兄様がツェルプストーの部屋に行く気だったら……」
「……だったら？」
「縄で縛ってそんな気がなくなるまでＯＨＡＮＡＳＨＩします」

……なのは式オハナシ！？
怖すぎるわ！！

「大丈夫だよ、少なくとも本気で好きにならない限り女性には手を出す気はないからね」
「信じますよ兄様？（ということはまだ私にも、ちぃ姉様にも本気で好きになってないということ？　それとも他に理由が……）」
「あぁ大丈夫！　信じてくれ」

なんとかルイズ嬢も納得してくれた様で、俺はやっと針のむしろと化していた教室からの脱出に成功した。
結局その後部屋に帰りはしたが、授業資料の整理をやる気力もわかず、そのままベッドに直行。
精神的疲労に引きずられた身体をベットに横たえて、睡魔に身を任せていった。

第65話　レッドへの興味

なんか俺の二つ名が変わったようです。
正確に言うと変わってたようだ。
その名も泥水。
……何で？
どうやら発信源はギトーらしい。
あの野郎、決闘の時に足の一本でも折っておけば良かった！！

今日は虚無の休日。
部屋でまったりしたり、アイガと戯れたりする日なわけなんだが……。
今俺は町にいたりする。

「何でこうなった……」
「どうかしたの？」
「？」

俺の休日に突如予定を入れたのはこの二人。
微熱のキュルケと雪風のタバサ。
あの決闘の後に話していた美味しいケーキの店とやらに俺も一緒に行こうと言って俺の部屋に突然入ってきて、引っ張り出されて今は馬の上。

「今日はなんで僕を連れてきたんですか？」

「あの時のお礼を思いつかなかったから、これをお礼にしようかと思うの。
どう？嬉しいでしょ？
美女二人とダブルデートなんてそうそうできないわよ」
「あぁ……アリガトウゴザイマス」

確かに二人とも魅力的な女の子かもしれないけど、まだ恋愛対象ではないな……。
特にタバサ嬢は小動物に抱くような保護欲が沸く位だ。
キュルケもなんだかんだ言って、まだ高校生くらいだからな。
ちょっと背伸びしてる感じがする。

「ところでまだ聞いてなかったんだけど、ケーキは好き？」
「あぁ、甘いものは割と好きかな？」
「そう！　なら大丈夫ね！」

先ほどから喋らない子がいるが、タバサ嬢はキュルケの後ろに座って、キュルケの腰に抱きついている。
まぁ相乗りだからそうしないと危ないんだけど、なんかコアラみたいだ。
そんなことを思っていると、タバサ嬢が口を開いた。

「ギトー先生に勝ったって本当？」
「そうだ！聞いたわよ。
一応あんなのでもスクウェアなのにどうやって勝ったの！？」
「何処でそんな話を聞いたのかな？」

「コルベール先生の授業の時に誰かがレッド先生「あぁ僕のことはプライベートの時はレッドでいいよ」レッドが実力的に大丈夫なのか？という質問をしたんだけど、その時に言ってた」

別に話すなとは言ってなかったけど、授業で話すなよ。
まぁコルベール先生なりに俺の評価を上げようとしたんだろうけど……。

「……一応本当だよ」
「凄いわね！！　どうやって勝ったの？」
「唯体勢崩して、足元に泥沼作って、パニクっているうちに拘束して、杖奪って剣突き付けただけだよ」
「剣？　レッドって剣使うの？」
「あぁ少しだけね。
攻撃用って言うか防御用なんだけど」
「防御用の剣って……」

キュルケとそんな会話をしていると、タバサ嬢が俺を見ていることに気付いた。

「どうかしたかい？」
「泥沼にハマっただけなら、フライで抜け出せる」

あぁ……あえてそこ言わなかったのに、聞くか。
コルベール先生に聞かれると他にも色々言いそうだから、教えるか。

「魔法を使う集中力を削ぐために、石を投げたんだよ」
「石！？　そんなの……。」
「まぁあんまり綺麗な戦い方とは言えないし、貴族としてはどうかと思うよね」
「でも効率的」
「……そうね、負けられない戦いなら手段を選べないものね」

意外と納得してくれたな……てっきり否定されると思ったんだけど。
まぁ嫌われないならそれはそれでいいや。

「でもそんな泥臭い戦い方するなんて、傭兵みたいね。
剣も使えるみたいだし」
「まぁ自領で魔獣退治とかもしてたからね。
躊躇してたら死んでしまう。
だから戦う時は相手の無力化を最優先に考えて、手段は二の次だったから手加減が苦手なんだよね」
「まだ１８歳よね？　それなのに魔獣退治の仕事やってたの？」
「家の領はそれほど戦力が揃ってるわけじゃないからね……必要に迫られてって感じかな？」

その言葉を聞いてタバサ嬢とキュルケも納得してくれたようだ。
でもまだ聞きたいことがある様だ。
なんだ？

「まだ何か聞きたそうだけど……答えられることなら答えるよ？」
「最近火のメイジの中で出世頭とも言える人がいるんだけど……ボガード家って知ってる？」
「あぁテリーか……最近会ってないなぁ」
「やっぱり貴方だったのね！　彼の師匠って！！」
「……何処でそれを？」
「学院に入る前にボガード家の開いたパーティに行ったのだけど、その時に酔った彼が言ってたの。
「今の俺があるのは家族と相棒のおかげだ……まぁ師匠みたいな存在でもあったけどな」って！」
「何故その相棒が俺だと？」
「コルベール先生がレッドは在校してた時は火のメイジと何時も一緒にいて、互いを高め合っていたって言ってたの。
それでレッドの在校記録を図書室で調べてみたら、テリーさんと同じクラスだったみたいじゃない！」
「（またコルベール先生か……今度何か仕返ししよう）確かにテリーと一緒に朝練とかしてたけど、師匠って言うほどのことはしてないよ。
唯魔法の案を出したり、特殊な接近戦の練習をしただけ」
「なんだぁ、そうだったの？
てっきり実は火のメイジでもあるのかと思ってドキドキしたのに。」
「特殊な接近戦……それはなに？」
「（これは隠しておこう……これに関してはボガード兄弟と両親以外知らないからな）それは内緒かな？ある意味僕の切り札みたいなものだからね」
「そう……」

流石タバサ嬢。
これ以上聞いても聞き出せないことが分かってる様だ。

「お、そろそろ町が見えてきたみたいだ」
「そうね、私としてはもう少しレッドのことを知りたいけれど、続きはケーキを食べながらにしましょう」

まだ聞く気か……。
何処まで話すかなぁ。
はぐれオーク退治の話は大丈夫かな？
あぁあとジェイクとの共闘も大丈夫だな。
そこら辺にしておこう。
その後は町のケーキ屋さんで、ケーキを摘まみながら雑談をして、休日の時間は過ぎていった。

第６５話　レッドへの興味（後書き）

キュルケの主人公評価がアップ
タバサの主人公の戦闘力と経験を上方修正
タバサ主人公に若干の興味。

外伝　タバサの興味（前書き）

タバサのキャラが掴みきれてない気がする……っていうか原作キャラを動かすのは難しいなぁ。

外伝　タバサの興味

初めて見た時は特に何も感じなかった。
初めての授業を聞いて、彼は恐らく実戦経験があるのだろうと思い少し興味が出た。
そして……。

学院に来て初めてのパーティ。
今まで北花壇騎士団の仕事で何回かパーティに潜入したりしたことはある。
でも任務に関係なくパーティに参加するのは初めてだ。
何をしていいのか分からない。
とりあえず夕食を食べてなかったから、夕食をここで済まそう。
私は先ず目の前にあるサラダに手を伸ばし、口に運んで行った。

「！？」

苦い！……でも美味しい。
私は気付いたらサラダのボールを抱えて、食べていた。
ボールの中にあったサラダを全て食べ終えてしまうと、お腹がいっぱいになったので、辺りを見回して観察してみる。
異性に話しかける人、ダンスを踊る人、そしてご飯を食べる人。

「（特にやることはない……帰ろう）」

私が帰ろうとしたその時、会場の中心で何かが起こったようだ。
近づいてみると、どうやら女生徒の一人の服が風魔法で切り裂かれたらしい。

「服だけ切り裂く……器用。」

私は的外れな感想を述べつつ、その生徒を見ていた。
するといきなり彼女を取り囲むように石の壁が現れた。
私がその魔法を放った人を探したら、意外とすぐに見つかった。
本人がその壁へと近づいていくからだ。

「あの人は……水の授業の教師？
あのクラスの魔法を使うということは、得意なのは土の方。
ならなんで水？」

若干の疑問を覚えつつ、いつもの癖で、もし敵対した場合のシュミ

レーションを行う。
とりあえず上空からのウィンディアイシクルで先制攻撃を……そうしてシュミレーションをしているといつの間にか騒ぎは収まり、パーティは終わった。

翌日教室で本を読んでいた私に、昨日服が切り裂かれた女生徒が近づいてきた。
そして読んでいた本を取り上げられた。

「昨日はよくもやってくれたわね！」
「？」
「あんな場所で私の服を脱がすなんて……どれだけ恥しかったか貴方に分かる！？」
「なんのこ「決闘よ！今日の放課後中庭で昨日やったことを後悔させてあげるわ！」……。」

私の本……ふぅ。
返してもらいにいこう。

そんなことを考えていると、昨日彼女を助けた教師が入ってきた。
確か……レッドって言ったはず。
そうだ、彼に立会いを頼もう。
それなら手加減を間違えた時でもどうにかなるだろう。
私は授業が終わってから、彼を呼びとめた。

「今日の放課後中庭に来て。」
「突然だね、何でか聞いていいかい？」
「決闘の立会いを頼みたい。」

彼は不思議そうにしていたけど、今日の教室の状況を見てなんとなく状況を理解したようだ。

「どうして僕に声を掛けたのかな？」
「……。」
「話したくないなら、まぁ別にいいんだけどね。」

特に話したくないわけではないけど、いざという時のストッパーと言うと来てくれないかもしれないと思い口を開かなかった。

「分かったよ、放課後に中庭に行けばいいんだね。」

彼は特に疑うこともなく、了承してくれたので私も頷きで返した。

決闘は私の予想以上に苦戦した。
まさか彼女がここまで強いとは思わなかった。
でも実戦経験が足りない。
あれでは唯の砲台、戦場では的になってしまうだろう。
結局私の勝ちで決闘は幕を閉じたけれど、どうやらこの場には私たち以外にも人が隠れていたようだ。
彼女の誤解が解けた時に彼が草むらを指さしながら「あそこに隠れている人がいるみたいなんだよね？」と言われて見てみると、スカートがはみ出ていた。

「……へぇぇ、怪しいわねぇ。」
「怪しい。」

三人でその草むらを見ていると、そこから人が飛び出した。
私はエアハンマーで吹き飛ばそうと思ったけど、彼の方早く対応し、アースハンドで彼らを拘束した。
早い……私なら反応できただろうか？
距離にして４０メイル位……相手の姿が見えなかったら厳しいかも

しれない。
改めてレッド先生の戦闘能力を見ると非常に高いことが分かった。
確かに上を見れば彼よりも上の人はいっぱいいるのかも知れない。
でもまだ何か隠し玉がある気がする。
私がそんなことを考えていると、彼が隠れていた三人から話を聞き出していた。
どうやらこの間私に決闘を申し込んだ男子生徒が私に罪をなすりつけて決闘させたらしい。
少し腹が立ったが、レッド先生が学院長の元に連れて行って説教すると言っているのでその怒りを呑み込んだ。

その後決闘した彼女……キュルケと一緒にケーキを食べる約束をした。
これが友達？
何か暖かい感じがする。
今までは任務ばかりで人との友好的な関わりなんて殆どなかった。
私も寂しかったのだろうか……お母さん。

そして次の虚無の日にキュルケに誘われて、ケーキを食べに行くこ

とになった。
その際にキュルケがこの間のお礼をするために、レッド先生を呼ぼうという提案をした。
私としても彼には興味があったので、コクリと一度頷き了承の意を示した。

町に向かう途中彼に色々聞いたのだけど、予想以上に実戦経験豊富の様だ。
そしてなにか特殊な戦闘技能を持っているらしい。
それが何かは教えてくれなかったが、実戦で使えるレベルなのだろう。
話の中で、有名な火のメイジの相棒で師匠ということが分かったけれど、それ以上に風のスクウェアにほぼ一方的に勝ったというのには驚いた。
確かにあのギトーとか言う先生は実戦経験が少ない、または無いのかもしれない。
でもクラスの違いは決して小さくない。
聞いてみれば、魔法を止めるために投石したと言っていたが、確かに効率的だ。
相手の集中力を削いで、自身が一方的に攻撃できる。
普通の人はしない戦法だろうけど……。

ケーキを出すお店に着いてからも色々と話を聞いたが、なかなか聞いていてためになる話もあった。
彼に接近戦の訓練を頼んでみようか……そうすれば特殊な接近戦というのも分かるかもしれない。
私はそんなことを考えながら、レッドを見ていた。

第６６話　弟子一号（前書き）

ギーシュの様子が……てってってってってってってってってってー、てーれーれーてれれれってててーギーシュは漢に進化した！！

第６６話　弟子一号

虚無の日、あの後普通に寮に帰ったのだが、夜に部屋にギーシュが部屋に突如やってきた。

「レッドさん！　モンモランシーのことを紹介してください！！」
「へ？」

いきなり来た上に自分に紹介を頼むというギーシュらしくない行動に戸惑っている俺に、矢継ぎ早に言葉を続ける。

「彼女は僕にって他のバラ達とは違う！！　彼女はまるで咲くはずの無い金のバラ。
僕には彼女が輝いて見える！！
一目見たその時から彼女のことが頭から離れない！
こんなに一人の女性が気になったことは今までないんです！
だからお願いします！！」

ギーシュはそう言い切ると俺に深く頭を下げた。
……これギーシュか？
なんかこんな熱い奴じゃなかった気がするんだけど。

「自分から声を掛ければいいんじゃないか？」
「今までだったらそうしたんです……でも彼女に話しかけようとす

ると胸が痛くなって、話そうと思った言葉が頭から飛んでいく。
だからレッドさんに仲介をお願いしたいと思ってきました！！」
「（これは……マジみたいだな。）紹介するのは良いけど、その前に聞きたいことがある」
「何でしょうか？」
「もしギーシュ君がモンモランシー嬢とお付き合いすることになったとする」
「彼女と付き合う……」
「まぁ最後まで聞いてくれ。
それはもちろん結婚とかまで考えているんだよね？」
「彼女と結婚……キ、キキキキキキスとかしたり……！！」
「（あぁ青春してるなぁ……）だから最後まで聞いてくれ。
っていうか俺の質問に答えてくれ」
「っは！！　はい、結婚を前提にお付き合いを……」
「なら君の表現で言うと、他のバラ達を愛でるのが御法度なのは分かるな？」
「！？」
「（あぁ、ここ驚くとこなんだ？！）当り前だろう？　付き合っている男性が他の女性に心ひかれているのを見て喜ぶ女性なんていないよ？」
「そ……そうなのか」
「後彼女と付き合うなら魔法を、というか戦闘で強くならなければ恐らく駄目だ」
「そ、それなら大丈夫だと思いますよ？
なんてったって今の時点で土のラインですから！！
確かにレッドさん程ではないですけど、そこそこ強い自信はあります」

ギーシュ君……そこそこじゃ駄目なんだよ……。

あの人はそんなに甘くない。
っていうかあの人はカリーヌさんと同じ匂いがする。
娘と結婚するなら私を超えていきなさい！とか素で言う人だ。

「そこそこじゃ……多分駄目だ」
「駄目？」
「一応はっきり言っておくと、僕は彼女の家と面識がある。
そしてモンモランシー嬢の母親にあったことがある……っていうか少しだけど魔法を教えてもらっていたんだ」
「はぁ……？」
「そこで分かったのは凄腕の水メイジであることと、モンモランシー嬢を溺愛していることだ」
「いいことじゃないですか。」
「じゃあその娘に突如彼氏が出来たらどう思う？」
「！？」
「確かにマルギッテさんはモンモランシー嬢の幸せを願って許可を出してくれるかもしれない。
だが最低条件は出されるはずだ」
「そ……それは？」
「多分だけどマルギッテさんとの決闘に勝つこと」
「……その人はどの位強いのですか？」

どの位か……流石に公爵夫人まではいかない。
父さんと割といい勝負か？
でもギーシュは俺の父さんの強さを知らないからなぁ。
……強さで表すと何が妥当かな？

「成体の水竜位かな？」
「竜種！？しかも成体ですか！？」
「（まぁブレスの代わりに魔法、爪の代わりに剣と思えばこんな感じだったはず）僕の母さんと話しているときに竜種を倒したって言ってたからそのぐらいだと思うよ？」
「……」（ガタガタガタ）

……頑張れギーシュ！
君の明日は明るい……といいな！！

「な、なら僕を鍛えてくれませんか！」
「僕が？」
「はい！兄さんから聞いた話だと、トライアングルクラスの土メイジなんですよね！
それに近接戦闘も目を見張るものがあるとか……」
「（確かに少し前に模擬戦して勝ちはしたけど、そこまでの腕じゃないと思うんだが……剣は受けがデフォだったし）別にいいんだけど、僕の戦闘方法は結構特殊だから近接の指導は基礎しかできないよ？」

格闘技を教えるのはあんまり気が進まない。
あれはテリーを見てテンションが抑えられなくなったから教えただけだしね。
だから近接なら立ちまわりと剣の基礎位しか教えられない。

「それでもいいです！！」

「魔法はコツを教えるから、後は自己鍛錬が主になるよ？
僕自身も修行中の身だからね」
「それでもいいです！！」
「ふぅ……なら朝早くに森の入口で待っているから、動きやすい格好で来てくれるかな？」
「はい！　よろしくお願いしますレッド先生！！」

あぁやることが増えちゃったなぁ。
ま、人に教えるのは結構楽しいし好きだからいいか。
ギーシュが俺に一礼して部屋から出ていくと、俺は椅子の背もたれに身を預け、ギーシュ強化計画を脳内で組み立て始めた。

「先ず魔法はクリエイトゴーレムを主軸に考えていこう。
剣技についても先ずは、突きと薙ぎのメリットデメリットを教えて……」

俺は明日教える内容を考えながら、夜を過ごした。

第６６話　弟子一号（後書き）

ギーシュ改造計画始動！！
まぁテリー程付きっきりではないから、そこまで進化はしませんが、
ラインの中なら上位クラスまでイケる位までは……。

第６７話　薔薇のための修行（前書き）

ギーシュはじめてのしゅぎょう　ｐａｒｔ１

第67話　薔薇のための修行

朝になって、俺が森に向かうと既にギーシュはそこにいた。

「早いね」

「ハイ！彼女のためですから！！

……それでレッドさんの横にいるゴーレムは一体何ですか？」

「あぁ、教えてなかったっけ？

僕の使い魔でアイガって言うんだ。

今回はギーシュ君の訓練に参加してもらおうと思ってね」

「ジ！」

「は、はぁ」

まぁパッと見普通のゴーレムだしね。

自我を持つゴーレムって少ないみたいだしな。

それにしても暑苦しい……見た目に合わないぞそのキャラ。

まぁとりあえず始めますか！

「じゃあ先ず一番得意な魔法を使ってみてくれ」
「ハイ！」

ギーシュはバラの花びらを一枚取ると、地面に投げた。
すると地面から原作通りの青銅のワルキューレが出てきた。

「どうですか！？
前にレッドさんが作ったあの美しいゴーレムを目標に作ったのですが！！」

……あれ？俺が切っ掛けでこのゴーレム出来たの？
それは予想外だなぁ。

「はは……とりあえず見た目は良いんじゃない？
でも実戦では微妙かな？」
「な、なんででしょうか？」
「一つ、素手なら攻撃力に欠けるし、一撃の重さが岩のゴーレムにはかなわない。
これじゃ岩のゴーレムより動きが速いのが生かしきれてないよ？」
「そう言われてみれば……」
「二つ、ゴーレムを作る演出は確かに綺麗かもしれない。
でもバラの花弁を千切って投げるというアクションよりも、普通に杖でやった方が早い。

戦いにおいて速さは勝敗を分ける重要なファクターの一つになる」
「……はい」

ハッキリ言いすぎたかな？
少し凹んでるみたいだ。

「別に落ち込む必要はないんだよ？
今言ったことは確かに戦闘においてのデメリットになるけど、今僕がそれを君に教えたことでギーシュ君は自信のゴーレムの欠点を知った……なら改良もできるだろう？」
「……そうですね！！
俯いているより、前向きに先に進む方がいいですよね！」

やっぱりこの子誰？
俺と言うイレギュラーの所為か？

「そ、そうだね。
とりあえず青銅のゴーレムは良いんだけど、先ずその攻撃力不足は問題だから武器……持たせてみようか」
「武器ですか……。」
「そう、武器だよ。
長剣、短剣、ナイフに槍、斧やハルバート。
武器の種類は沢山ある。」
「あれ？　弓や銃は無いんですか？」
「ゴーレムにそこまでの精密動作させるなら、大分大変だよ？
それだったら自分でやった方がまだ楽じゃないかな？」

「……それもそうですね」
「それでギーシュ君はどの武器を持たせるのかな？」

しばらく悩んでいたようだけど、結局長剣を選んだようだ。
俺としてはナイフがおススメなんだけど、ギーシュが選んだのだからそれでいいか。

「長剣を選んだのは分かったけど、ところでギーシュ君は剣の心得有るのかな？」
「兄さんが使っているのを見たことがあるくらいで、本格的に習ったことは有りませんね」

そっか……なら基礎から一応講義しよう。

「まず剣についてなんだけど、あまりキレ味に過度の期待はしない方がいい」
「え？　剣って切るものですよね？」
「確かにそうなんだけど、剣のキレ味って言うのは直ぐに落ちてしまうんだ。
鎧等を切ろうとすれば刃が欠けることもあるし、血でキレ味が鈍ることもある」
「……」
「まぁ上段で構えて、剣の重さと自身の力で振り下ろせばあまりキレ味が良くなくても叩き斬ることは可能なんだけどね。
さらに言うなら刃が薄ければそれだけキレ味は上がるんだけど、その代わり強度は下がるから諸刃の剣になる。

ここまでは分かったかな？」
「はい」

ここまでが長剣の説明になるかな？

「じゃあ次は剣の使い方についてかな？」
「はい」
「とりあえず人間が剣を持って闘う場合は、斬られないことが必須になるのは分かるよね？
だから剣はまっすぐ構えて、姿勢もまっすぐに。
足は左を前にして肩幅に開いて、膝をリラックスさせる。
そして肘を張って、裏刃を使えるようにする。
これが基本の構えになる。
そして剣を前に構えて、小さく振る様に斬ると相手が多人数の場合にも対応できるんだ。」
「へぇ～」
「次は斬りおろし、突き、斬り上げの特性について説明しようかな」
「それは何となくわかります！」
「なら簡単に説明しようかな？
斬り下しは自分の力以外に剣の重みが加わるから威力が高いが、剣線を読まれやすい。
突きは線の攻撃ではなく、点の攻撃になるために何処かを狙いたい場合は使えるけど、少しズレただけで相手に刃が刺さらずに鎧の表面を滑ってしまう可能性がある。
最後に切り上げは、斬りおろしから繋げる場合が多いが、腕にかかる負担も大きいし勢いは斬りおろしに比べて落ちてしまう」
「はい……。」
「ここで問題！

相手が一人の場合ゴーレムに向いている剣を用いた戦法はなんでしょう？
ゴーレムは五体まで使用可能とします」
「え？！　突然すぎませんか？！」

いや何となく唯聞いているだけだと面白くないかなって思って。

「チックタックチックタック……」
「しかも時間制限付き！？」
「早く答えないとギーシュ君を地面に埋めて、横に筋肉質の男の裸体像錬金するよ？」
「え！？え～と……はい分かりました！」
「はい、ではギーシュ君回答は？」
「取り囲むように五体を配置して、同時攻撃……でどうでしょうか？」
「……まぁいっか。
一応正解かな？」
「ふぅぅぅぅ、良かったーーーーーーー！」
「（どんだけ嫌だったんだよ）まぁ正解なんて有ってないようなもんなんだけどね」
「え？！」
「もし竜巻を相手中心に発動させたら？
もし相手がそれに対応できるだけの身体能力を持っていたら？
なんてことを考えて行くと答えなんかないんだよ」
「じゃ…じゃあこの問題の意味なんてないんじゃ……？」
「でも咄嗟に最善、またはそれに準ずる答えを導き出すのは戦闘において大切なことだよ？」
「……もしレッドさんならさっきの答えをなんて答えますか？」

俺？俺かぁ……。

「僕なら一体で正面から行かせて上段で斬り込んで、横から二体で胴体の辺りを突く。
そしてそれを一体で回避される可能性を考えて後ろから足の辺りを斬る。
最後の一体は僕本体の守りに置いておくかな？」
「そ……そうですか」

何で若干引いてんの？
これぐらい普通だと想うけど・・・・・・。

「どうかした？」
「い、いえ何でもないです。」
「そっか、ならいいや。
じゃあ早速アイガと模擬戦でもしようか」
「い、いきなりですか！？」
「まぁ習うより慣れろっていう感じ？」
「……僕判断間違ったかも」
「ん？　何か言った？」
「いえ！　何にも言ってません！！」
「じゃあアイガの身体を少しでも削ったらギーシュ君の勝ちね」

とりあえずアイガに鉄壁三積みさせておこう。

それなら、ちょっとやそっとじゃ傷つかないだろう。
俺は小声でアイガに指示を伝えた。

「（アイガ、鉄壁三回積んでおいてくれ。
あとゴーレムは壊してかまわないけど、ギーシュには手加減してあげてくれ）」
「ジ」

まぁこれで大きな怪我はしないだろ。
さぁてどこまで善戦できるかな？

第６７話　薔薇のための修行（後書き）

誤字修正……

第６８話　訓練の結果（前書き）

ギーシュはじめてのしゅぎょう　ｐａｒｔ２

第68話　訓練の結果

ギーシュとアイガの模擬戦が始まった。
ワルキューレを5体作り出し、アイガを取り囲む。

「僕のワルキューレ達！　アイガ君を一斉攻撃だ！！」
「……ジ」

いやぁ……それは流石にアイガ舐めすぎだろ。
アイガは地面に拳を叩きつけ、砂埃を舞わせた。
視界が悪くなりこちらからアイガの姿が見えなくなったが、それに構わずワルキューレ達は突貫する。
ガンッという音が鳴ってこちらに何かが飛んできた。
それはひしゃげて元の形が分からなくなった青銅の塊だった。

「な！？　ぼ……僕のワルキューレが？！」
「……ギーシュ君、それはアイガを甘く見過ぎだよ。
あんな見た目してるけど、それなりに動きは速いんだよ？」

また一つ青銅の塊が飛んでくる。

「だからあんな抽象的な指示じゃアイガは捕らえきれない」

砂埃がなくなり視界がはっきりしてきたが……アイガの周りには何もなかった。

「え？　僕のワルキューレ達は？！」
「アイガの周りを良く見てみれば分かるよ」
「ま、まさかあの青い板は……。」

アイガの周りの地面には青い板状の金属が3枚転がっていた。
……アームハンマーか？
なんにせよギーシュのゴーレムは全滅、アイガは無傷。

「勝負有りだね。
明日はもっといい勝負になるといいね。」
「明日？」
「そう、模擬戦はこれから一日一回訓練の最後にやることにするからね？
でも賞品があった方がやる気でるかな？
じゃあもしアイガの身体を少しでも削れたら、モンモランシーを紹介しよう」
「！？　ということはアイガ君との模擬戦に勝たなければ紹介はしてくれないと？」
「う～ん、紹介してもいいんだけど強くなってからの方が印象強いと思うよ？」
「そ……それもそうですね！！
頑張ります！！」

……今度から鉄壁は外してあげよう。
唯でさえ厳しいからね。
頑張れギーシュ君。

「さて、そろそろギーシュ君は部屋に帰って授業の準備をした方がいいかな？」
「もうそんな時間ですか……」
「明日もこの位の時間に来てくれればいいから、また明日ね？」
「はい！ありがとうございました！」

そう言ってギーシュは俺に一礼して寮へと戻って行った。
俺はその場に残って後片付けをすると、そのまま森の中に入って行った。

「さてここからは俺自身の訓練タイムだ。
とりあえず空手の型と魔法の訓練を少しやろう」

俺は先ず大きく深呼吸をした。
俺の言う空手の型と言うのは某喧嘩漫画の中であったコンビネーションのことだ。
７種類のコンビネーションを繋ぎ合わせることで相手に反撃の余地を与えず、自分が止めるまで永遠と攻撃を続けられるという鬼畜な型だ。
俺は現状このコンビネーションを４分続けることが出来る。

「今日はＡの型から始める煉獄にしよう。」

鳩尾に向けた裏拳から顔への裏打ち、そして金的への鉄鎚、側頭部への肘打ち、最後に顔への手刀。
これがＡの型になる。
俺はそのままＢ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｇの型まで続けてまたＡに戻ることを繰り返した。
そして４分が経過したところで、手を止めて深呼吸をした。

「よし、問題ないな。
じゃあ次は魔法の訓練だな。
そう言えばクリエイトゴーレムってあんま使ったことなかったなぁ。
これから使う機会が増えるかもしれないしやっておこう」

ギーシュとのゴーレム戦とかいい訓練に成りそうだ。
先ず俺は水と土で泥のゴーレムを作ってみた。

「……維持するのが大変だなぁ。
しかも動きは普通のゴーレムより遅い。」

足で歩くというよりも、ベトベトンに近いな……。
でもそれでこそ出来ることもある。

「腕を伸ばせ」

その言葉に応じてゴーレムは6メートルほど腕を伸ばして手を握ったり開いたりしている。
これは使い方次第ではなかなかいいことが出来るんじゃないか？

「手の中に小石を詰め込んで、思いっきり振りかぶれ」

指示道理に動くゴーレムは、地面に手を付けてズズズという音と共に小石を手の中に入れて行く。
そして腕を思いっきり振りかぶった。
すると、手の中に埋め込まれた石が泥の手の中からすごいスピードで飛びだした。
無数の小石が木にめり込んでいく様は、まるで散弾銃の様だった。

「これは……想像以上だな」
「ジ……」

流石に木をへし折るまではいかないけれど、木の中ごろまでめり込んだ小石は、もし人に当たったら見るに堪えない状態にしてしまうだろう。
とりあえず実験は済んだので、ゴーレムを地面に戻す。

俺は次にアイガの見た目を模したゴーレムを作れる限り作った。
そして出来たゴーレムの数は１２体。

「……これは怖いな」

目の前にいるのは伝説のポケモンもどきが１２体並んでいるんだよ？
これが全部本物だったらヤバすぎる。
ところでさっきからアイガがプルプルしてるんだけど……。

「あ……アイガ？」
「ジーーーーーーーー！！」

勢い良くアイガはゴーレムの塊に突貫していく。
殴り、蹴り、撃ち、ドンドンとゴーレムは唯の石に戻っていく。
全てを壊し終えたアイガは俺に向かって胸を張った。

「ジ！！」

「……あぁ凄いね」

もうあのゴーレム作るのやめよう。
なんかアイガが凄い暴れる。
俺は周囲を見渡してため息をついた。

「はぁ……木に被害がなかったからまだマシか」
「ジ？」

俺はとりあえず地面に出来たクレータやら何やらを、錬金で直していく。
全てを直し終わったときにはもう授業直前だった。

「ヤバい！！急ぐぞアイガ！！」
「ジ！！」

時間に余裕がないことに気付いた俺とアイガは学院に向けて走り出した。

第６８話　訓練の結果（後書き）

クオリティが低い気がするよ……ごめんなさい
とりあえずごめんなさい

第６８．５話　鍛錬を覗く者（前書き）

家政婦じゃないけど……み～た～わ～よ～？
いつもより短いですが、ごめんなさい。

第６８．５話　鍛錬を覗く者

私がそれに気付いたのは偶々だった。
ドンという音と共に少し揺れた地面。
その振動の源を探ってみるとそこにはレッドとクラスメート?、そして石で出来たゴーレムがいた。
ゴーレムの近くにクレーターがあることから、あの音と揺れの原因はあのゴーレムだろう。

「人ぐらいの大きさで地面を揺らすほどの力を持つゴーレム?
そんなの聞いたことない……」

私はあのゴーレムを作り出したであろうレッドに、より興味が深まっていった。
クラスメートが寮の方へと戻っていく。
しかしレッドはその場の後片付けをしてから、森の中へと入って行った。

「なんで森の中に?」

私は彼のことが気になって、そのまま気付かれない様に後を付けて行った。
しばらく歩くと少し開けたところで彼は止まって深呼吸をしているようだ。

「（何をするつもりなんだろうか？）」

私が疑問に思っていると、彼は見たことの無い構えで拳を握り、構えた。
次の瞬間私が見たのは暴力の嵐だった。
人間の急所と言われる場所を躊躇なく攻撃することを前提とした拳での攻撃。
その激しく攻撃するレッドは容赦がなく、狂気的な動きをする鬼の様だった。

「（あんな攻撃をされたら何も出来ずに殴り殺される）」

私は初めて彼に恐怖を覚えた。
優しく生徒に授業をするレッド、キュルケを助けた時のレッド、そして一緒にケーキを食べた時のレッド。
そのどれとも違う彼がそこにはいた。
敵対した相手を容赦なく屠るであろう彼の姿が・・・・・・。
しかし恐怖と同時に尊敬もした。

「（彼は恐らく人を殺めたことがある）」

何となくだがそう感じた。
しかし彼はそんなことをおくびにも出さずに、生意気な態度を取る生徒達にその力を微塵も振るうことは無い。

それどころか実習中なら守ろうとさえしてくれる。
彼のその在り方は、まるで勧善懲悪のヒーローの様だ。
実際は違うのかもしれない。
でも私にはそう見えた。

「（拳一つで人を壊すことが出来る力を持つ人間。
しかも彼は剣もそれなりに使えるといっていた。
ならもし私が彼と戦うことになったら……勝てる？
遠距離からの魔法攻撃？　それとも奇襲？）」

頭をめぐる戦闘思考。
しかしそのどれもが成功するように思えて、失敗するようにも思える。
彼のことが分からない。
情報が足りなすぎる。
彼は、まるでビックリ箱だ。

その後も泥のゴーレムや、１２体のゴーレムを作り出してそれを一体のゴーレムで壊すという謎の行動をしたり見ていて飽きなかった。
特にあのアイガというゴーレムの強さは目を見張るものがあった。
一撃の重さも、石の弾丸の速度も決して侮れるものではない。

「あのゴーレム、人を壊すことを目的とした体術、守りに特化した剣。
そのどれもが初めて見聞きするもので、どれもが私を驚かせる。
彼のことが知りたい。

何のためにその力をふるうのか知りたい」

私の様に任務を淡々とこなすためではないだろう。
虚無の日の様に、また彼の話を聞きたい。
気付けば私は彼のことを目で追うようになった。
あの実戦を想定した訓練を終えた彼が授業に向かったように、私も教室へと足を進めた。
授業に来た彼は、いつも通り他の先生とは違う戦闘に関して役立つ知識を私たちに与える。
時には他の生徒が顔を顰める様な内容の授業をすることもあるけれど、それもいつか彼らのためになるだろう。

「タバサ？最近レッドのことをよく見ているけどどうかしたの？
……もしかして恋？！」
「違う、でも気になる」
「ふ～ん、そうなんだぁ」

キュルケは私を見ながら微笑ましいものを見るように笑っていた。
私は何故笑っているのか分からなかったから首を傾げたけど、キュルケはより笑みを深くした。

「今はそれでもいいと思うわ。
でももし気持ちに気付いたなら行動に移すのに躊躇しては駄目よ？
……あの爆発娘も好意を抱いてるみたいだし」
「・・・・・・？　わかった」

何を言いたいのかは分からなかったが、私のことを考えてくれているのは分かったから頭に入れておくことにした。
……とりあえず明日接近戦の訓練を付けてくれないか頼んでみよう。

第６９話　弟子二号（前書き）

６９……いやなんでもない。
やったねレッド君、弟子が増えるよ！
朝の分を補って少し長いよ！！

第69話　弟子二号

翌朝もギーシュ君と訓練するために森の近くに行くと、そこにいたのは二人の生徒。
一人はギーシュ君……そしてもう一人はタバサ嬢か？
ギーシュ君も何故彼女がいるのか分からないらしく、困惑しているようだ。
俺はとりあえず事情を聴くために、アイガを引き連れて二人に近づいていく。

「おはようギーシュ君、今日もしっかり来ているね」
「あ！レッドさん！おはようございます。
当り前ですよ！彼女のためですから！！
……ってそうじゃなくて彼女は何故ここに来ているのでしょうか？」
「それは僕も知らない。
だから今から聞こうと思ってね。
そう言うことでタバサ嬢、君はどうしてここに？」

俺は少し腰を曲げ、タバサ嬢の目線に合うようにしながら話かけた。
すると彼女は確りと俺の眼を見て、告げた。

「私に接近戦の訓練をつけてほしい」
「……随分急な話だね。
理由を聞いても？」

まぁ何となくわかるんだけどね。
恐らく任務に行く際に自身がより強くなることで、死ぬ可能性が減るからだろう。
彼女はそう簡単に死ねる身じゃないからね。
お母さんのことにジョゼフ王のこと。
分からなくもない……かな。
復讐云々に関しては俺に言えることは無い。
それは彼女が片づけなければならない案件だから……まぁ頼られれば多少力を貸すのは構わないけどね。

「前から考えていたこと。
貴方は接近戦において私より強い」
「それは……どうかな？
買いかぶりかもしれないよ？」
「あの素手での連撃は最初の一撃が当たったらもう抜けだせない」

見られてたのか？！
まぁ一目見ただけなら覚えられないだろうし、タバサ嬢に煉獄は厳しいだろう。
すっかりギーシュ君がポカンとしているが、今はそのままでいてもらおう。

「覗き見とは……少し趣味が悪いね」
「それに関しては否定できない。
ごめんなさい」
「いや、別にいいんだけどね。

但し他の人には内緒にしてくれれば嬉しいな（特に保護者の方にはね）」
「わかった」
「まぁそれに関してはもう終わったことだし、いいんだけど今後は覗かないでね？
僕としては手札を知られるのは好ましくないからね」
「……分かった」

本当に分かってるのかな？
なんかまた見に来そうだな……もっと森の奥でやろうかな。

「ところでタバサ嬢は接近戦の訓練を御所望だけど、僕は剣しか使えないよ？」
「？素手で戦える……」
「あれは切り札に近くてね。
教えるのは少し戸惑ってしまうよ」
「……残念」
「それにあれはあまり女性向きではなくてね（公爵夫人やマルギッテさんは別だが）」
「……」

落ち込んでいる……のか？
何だこの罪悪感は！！　まるで子供を苛めている様な気持ちは何だ！！！

「え、えっとタバサ嬢はトライアングルメイジなわけだし、もし戦

うことがあっても接近させずに攻撃することが出来るんじゃないかい？」
「……もし近づかれた時に対処できないのは致命的」
「……それは正論だね」

さぁどうしようか……もし鍛えるとしたら彼女は実戦経験があるから、そう言った講義は必要ないだろう。
彼女に必要なのはより多くの経験と、近接技能。
しかし小柄な体の女性に使えて、尚且つ実戦でも役立つもの……
あるっちゃあるが教えていいもんかな？
まぁ近接戦に持ち込まれた時に防げればいいなら、確かにあれは適している。
でも正直俺にとっても持ち札の一枚だ。
教えるなら俺が納得できる言葉が欲しい。
だから俺はタバサ嬢を試すことにした。
原作の中でどんな境遇だったかは、知っている。
だがここにいる彼女の気持ちは聞かなければ分からない。
故に俺は問いかける。

「タバサ嬢」
「……」
「俺は教えること自体……あまり気が進まない」
「……そう」
「だが君が力を欲しているのも分かる。
なら君は力を何に使う？」

これは以前コルベール先生に俺が聞かれたことだ。

俺が出した答えは平穏を守るため。
彼女の答えは俺を納得させてくれるだろうか？

「私の……力の使い方？」
「そうだ。
僕の夢は大切な人と平穏な日々を暮らすこと。
その平穏を守るための力を、理不尽なことに抗えるだけの力を僕は求め鍛えている。
ギーシュ君を鍛えているのは、彼が好きな子のために力を欲しているから、少しだけ鍛えてあげているだけだ」

後ろでギーシュ君が凹んでいるが、そんなの知ったことじゃない。
なんか「あれで少し？」とか聞こえるが、そんなもん知らん。

「君は自身の力を何に使う？」
「私は……母様を、一人の女性を守るために、もうこれ以上理不尽な目に遭わない様にしたい」
「（まぁ復讐のことは言わないか……話せる内容でもないしな）まだ他に理由がありそうだけど、まぁいい。
じゃあタバサ嬢君は守る力を欲するということでいいね？」
「守る力？」
「俺が教えるのは守るための剣。
筋肉が多い男性に近接戦闘を持ち込まれても、女性が防ぐことが出来る剣技。
簡単じゃないけどやるかい？」
「……」

タバサ嬢はコクリと力強く首を縦に振った。

「なら教えよう！僕の持ち札の中でも最も信用している一枚（まぁポケモンを除いてだけど）。
マインゴーシュを！！」
「「マインゴーシュ？」」

オイギーシュ君？君には関係ないのだからそこで凹んでいなさい！！
君は大人しくゴーレムの使い方を考えるお仕事してればいいの！！

「そう、相手の剣線に自分の剣をそっと添えて、自分に当たらない様に軌道を逸らす剣技。
タバサ嬢は身体が大きくないために、基本相手は突くか振り下ろしを主に使うだろう。
上下からの斬撃はこれが出来ればどうにかなる。
きっとこれが出来れば早々斬られることは無いでしょう。
突きに関しては練習中に対処法を教えて行くから覚えてください」
「……分かった」
「では明日私が昔使っていたマインゴーシュ用の剣を持ってきますので、この時間に来てください」

あれなら俺が子供の時使ってたやつだからあんまり重くないし、握りも細い。
俺も剣持ってこないとなぁ……いや錬金で刃を潰した剣を作った方がいいかな？

「今日は？」
「今日はギーシュ君の訓練を見ててもいいですし、何か聞きたいことが「話が聞きたい」あれば……答えますよ。
ふぅ……ではこの間の話の続きをしますか。
ギーシュ君はアイガ君との模擬戦をお願いします。
ルールは昨日と同じですが、昨日と同じことはしないでください。
ああいった同時突撃は確かに有効な時もあるのですが、それは相手が格上の場合通用しません。
君は最終的に歴戦の猛者を相手にするのですから、もう少し作戦を練ってから攻撃した方がいいですよ？」
「はい！出来れば作戦に関してアドバイスが欲しいんですが……」
「それを考えるのも訓練の内ですよ」
「……はい」

さぁて今日は少しでも削れますかね？
まぁアイガの長所はその防御力と再生力、そして物理攻撃力ですから……スピードで翻弄して、同じところを何回も攻撃すれば少しは削れるかな？
一応広域攻撃は制限してますし、近接攻撃しかしない様に言っているから、ギーシュ君の頑張り次第ですかね？
さてと……それじゃあ目を輝かせて俺の話を待ってくれている幼子に、俺の経験を含めたお話を聞かせますかね。

第６９話　弟子二号（後書き）

最初杖が大きいから棒術や槍術を教えようかと思ったけど、あの小さな身体で槍とか使うと……某アニメにもなった無双の娘みたくなりそうだったから自重した。
他にも合気道とか考えたんだけど、あれって一朝一夕で実戦利用できる技能じゃないんですよね。
そこであまり筋力を使わないこれにしました。

第７０話　精霊再び（前書き）

そろそろポケモンを出さないと俺に禁断症状が出そうなので夏休み入りします！！

第７０話　精霊再び

ギーシュとタバサ嬢に訓練を付け始めて約四ヶ月。
ギーシュは何とかアイガの腕を少し欠けさせる事に成功した。
その時の喜びっぷりは形容しがたいものがあった。
ちゃんを約束は守って、モンモランシーに紹介したけど……いきなりのことだったしポカンとしてたのが印象的だったな。

タバサ嬢に教え始めたマインゴーシュは、流石にまだ完全とはいえない。
おそらく実戦ではまだ使い物にならないだろう。
でも俺の昔の剣を渡したときジッとその剣を見つめていたのには何か意味があったのだろうか？
あと俺が一応手本としてやって見せたときに、タバサ嬢がギンッという音で行うものを、シャオンという音で行っていたためか、微妙に目が輝いていたように思える。

そして今俺は学院長室にいる。
その理由は・・・・・・。

「オールド・オスマン。
では僕は夏休みの間帰郷しますので、何かあったら連絡してください。
急ぎ戻ってきますので」
「うむ、できれば早く戻ってきてもらえると助かるのぅ」
「分かってますよ。

でも少し寄る所があるので・・・・・・」
「出来ればで構わんよ。
レッド君とてまだ十八歳じゃしの」
「それではまた」
「気をつけての？」

俺は夏休みに色々予定が入っているのを学院長に伝えると、そのまま馬に乗って、学院を離れた。

「ふぅ、今回は行く所が多いな。
まずはモンモランシ領かな？」

俺は以前水の精霊に渡りをつけて欲しいと言われていたので、今回その事についてマルギッテさんと話し合うため彼女の領へと向かっている。
一応精霊に挨拶した方がいいのかな？

「せっかく通り道だし、挨拶していくとするか！」

俺はそのまま馬を走らせて、湖へ向かう。
しばらく馬を走らせて、着いた湖は相変わらず静寂に包まれている。

「でもどうやって呼び出せばいいんだ？
湖に入るっていうのはちょっとなぁ。」

俺がそう呟くと、前と同じように湖の中からスライム状の俺が出てきた。
何度見ても微妙な気持ちになるな。

「久しぶりだな、呼び出す者よ」
「お久しぶりです」
「此度は何の用で来た」
「昔貴方と契約を結んでいた一族がいたと思います」
「あの単なる者か」
「その一族が貴方と再び契約を結びたいと言ったらどうしますか？」
「・・・・・・あの者は我を使役しようとした。
その傲慢さには敬いが感じられぬ。
故にかの一族に再び手を貸すのは断る」
「どうしてもですか？」
「しかし条件次第では考えなくもない」

おい・・・・・・まさかとは思うが・・・・・・。

「カイオーガを「またか！！！」良いではないか」
「あの後どれだけ大変な事になったと思ってるんですか！！」
「知らん」
「（この野郎・・・・・・）突然の集中豪雨でアカデミーが怪しんでたらしいんですよ！！
あんなこともう勘弁して欲しいです！」
「そうか・・・・・・なら先の話も受け入れられん」

何だこの子供みたいな奴。
でもそれはそれで困る。
水の精霊との契約を再度結べるようになった場合にもらえる事になっている、水の秘薬各種は後々必要になるはずだ。
それに精霊の涙があれば精神干渉系の効果を打ち消す秘薬が作れるはずだ。
それがあればいざと言うときに・・・・・・。

「どうにか他の子じゃ駄目ですか？」
「・・・・・・・・・スイクンとマナフィを召還したなら、かの一族と話し合う場を設けても構わん」

カイオーガよりはマシだけど、それでも伝説級２匹か・・・・・・。
っていうかやっぱり水属性のポケモンか。
ここら辺が限界かな？

「分かりました。
ただし先ほどの約束違えないでくださいよ？」
「分かっている」

なんか心なしかウキウキしてないかこの精霊。
まぁ前回あんだけカリスマブレイクかましたから何となくこれから先の展開は読めるんだけどな。

「（なるようにしかならんよな）来い！マナフィ、スイクン！」
「おぉ」

湖の手前に光る球体が二つ表れ、その中から別世界において幻と呼ばれる蒼海の王子と伝説と呼ばれるオーロラの化身が姿を現す。
二匹は俺の方に近づいてきて、それぞれ挨拶した。
スイクンは頭を軽く垂れて一礼、マナフィは片言ながらに「こんにちわ？」と首を傾げながら言った。

「え？　喋れるのか？」
「ちょっと」
「そっか・・・・・・それは嬉しいな。
取りあえず今日呼び出したのはあそこにいる精霊と少し遊んで欲しいんだ」
「それだけ？」

マナフィは再び首を傾げる。

まぁいきなり言われれば戸惑うか・・・・・・でもスイクンは大分理解しているな。
俺の話を聞いて一歩後ろに下がった辺りよく理解していると思う。
頑張れスイクン！！

「あぁそれだけだ。
但し周囲に影響のない程度にしてくれよ？」
「わかった」

二匹ともやることはわかったみたいだから、大丈夫だろう。
水の精霊も近づいてきたマナフィを腕に抱えてご満悦みたいだし・・・・・。
なんか「くるしい」って聞こえた気がするが、気のせいだろう。
スイクンが俺を見ている気がするのも気のせいだろう。

しばらく水の精霊は二匹と戯れていた（ほぼ一方的に）が、マナフィが疲れて眠ってしまったので、そろそろ終わらせる事にした。

「水の精霊さ～ん？」
「なんだ！　今撫でるのに忙しい！」
「（いや・・・・・・もう撫で続けて１０分以上経ってるんだが？）
マナフィが疲れてるみたいだから還してあげていいか？」
「そうか・・・・・・ならしょうがないな。」

目に見えてテンション下がったな。
はぁ・・・・・・しょうがない今回もおまけしてあげるか。

「ありがとうな二人とも。
戻れ！マナフィ、スイクン！」
「あぁぁぁぁ」

凹んでるみたいだけど、これで機嫌直してくれよ？

「来い！ハク！！」
「え？」

二匹と入れ替わるように出てきたのは６メートルもある龍。
美しい鱗と染みひとつないミルク色の体は、見るものを魅了する。
俺が呼んだのはポケモンの中で最も美しいとされる水ポケモン。

「ミロカロスは、流石にサービス過ぎるかな？」
「美しい・・・・・・・・・。」

この子は俺がレベル１のヒンバスを通信進化させてから手塩にかけて育てた子だ。
故に思い入れも結構ある。

「おいでハク」
「ホァーーーー」

身体を引きずりながら俺にゆったりと巻きついてくるハクは凄く可愛い・・・・・デカいけど。
頭を俺の頬に摺り寄せてくるこの子はとても可愛い・・・・・デカいし鱗が微妙に痛いけど。
それより水の精霊が口を小さく開けて動かなくなっているのが気になる。

「ハク、あそこの精霊のところに行ってあげてくれ」
「ホァ？」
「あの人の為に呼び出したようなものだからね。
俺と遊ぶのはまた今度にしよう。
今度俺のお気に入りの場所で遊ぼう」
「ホァ！」
「元気のいい返事だ」

俺はハクの頭を軽くなでると、水の精霊の方へとハクを促した。
水の精霊を取り囲む様に、とぐろを巻くハクは本当に伝説の龍のよ

うだ。

「あ、え？」
「ホァ」
「我も触れてよいのか？」
「ホァ！」

おっかなビックリしながらハクを撫でる姿は、本当に人と変わらない。
・・・・・見た目が俺じゃなくて女性の姿だったらヤバかったかも知れないな。
俺はそんな馬鹿なことを考えながら、嬉しそうにハクを撫でる精霊を見守った。

第７０話　精霊再び（後書き）

ポケモン出した！！
しかも好きなポケモン出した！！
よし少し満足したぞ！

第７１話　恩師の気持ち（前書き）

今回後書きで少しだけアンケートがあるのでご協力いただければ幸いです。

第７１話　恩師の気持ち

ミロカロスを召喚してから、１０分位経ったかな？
なんかさっきからミロカロスの背中に乗って湖爆走してる水の精霊がいるわけだが……そろそろモンモランシ領に向かわないと駄目だ。

「ハク！　そろそろ行くぞ？」
「ホァ……。」
「もう終わりか……」

いや、俺が悪者みたいになってるのは何でさ。
俺サービスでハクのこと召喚したんだけど……。

「また来るからその時に遊べばいいだろ？」
「……呼び出す者よ」
「ん？　何ですか？」
「何か入れ物を持っていないか？」
「あぁ、それなら水の入ってた水筒がありますけど……それがどうかしましたか？」
「少し貸せ」

俺が水筒を馬に乗せていた荷物から出すと、精霊は腕を伸ばし俺から奪った。
まぁ特に高いものでも重要なものでもないからいいんだけど……。

「欲しかったのなら言ってくれれば「違う」？」
「これに我の分体を入れる」
「へ？」

この精霊今何て言った？
分体を入れる？
何の？
水の精霊の？
俺が思考整理している間に、精霊は自身の腕を半ばまで切り取り、水筒に入れた。
直ぐに腕は元に戻ったが、自分の姿で腕が突然取れると流石にいい気分ではないな。

「えっと……理由を聞いてもいいですか？」
「主の領には湖があるだろう」
「え？　あ、はい。」
「そこにこの分体を混ぜろ。
そうすれば我はそこに移動することが出来る」

……いや、だから何でそんなことをしたがる？
確かにメリットは大きいし、色々助かるかもしれないけど。

「だから理由を……」
「そんなものは、我が主を気に入ったからだ」
「それは光栄ですね」

絶対ポケモンと会う機会増やすためだ！
絶対だ！！
まぁ、基本こっちにいるみたいだし問題ないか？

「分かりました。
領に帰ったら湖に混ぜます」
「うむ、それでよい」
「（心なしかホッとしてないか？）それでは今日はここでお暇させてもらいます。
早ければ明日にでもモンモランシから人が来ると思いますので、その時はよろしくお願いしますね？」
「うむ、わかった」

俺はミロカロスを還して、湖を後にした。
俺の背中に向けて精霊が呟いたのにも気づかずに……。

「また会おう、レッドよ」

そう一言つぶやいて水の精霊は湖の中へと戻って行った。

モンモランシ領に着いた俺を待っていたのは仁王立ちしたマルギッテさんだった。
どうやら契約の件でいてもたっても居られなかったらしい。
俺が水の精霊との契約の渡りを付けたことを話すと、珍しく純粋な笑みを浮かべて、俺の手を握り一言「ありがとう」と礼を述べた。

その後は、そのまま屋敷の客間に連れて行かれ、契約が切られてからどれだけ苦労していたかという話を2時間ほど語られた。
なんか途中から娘自慢の割合が少し増えてたけど……。
契約については、明日マルギッテさんが湖に行くらしい。
約束の秘薬各種は実家に送っておいてくれるとの話。

「ところで、レッド」
「何でしょう？」
「貴方は学院の教師になったそうですね。
うちの娘はどうですか？」
「僕が担当しているのが水の授業って言うのもありますが、優秀ですよ？
特に秘薬に関する知識は僕が敵わない位です」

「そうですか」

相変わらず娘を溺愛しているな……。
少しギーシュのことをぼかして話してみるか？

「あぁそう言えばモンモランシに最近仲の良い男子生徒「へぇ」が出来まして……。」

おっと、急に寒気がしてきたぞぉ。
っていうか俺を睨んでいるのは気のせいか？

「それで貴方はそれを見て、何をしているのですか？」
「へ？　何をですか？」
「そうです。
家の可愛い娘を誑かしている男なのでしょう？
ならもちろん何か対策をしているのでしょう？」
「いや、モンモランシ嬢と彼はまだ唯の友人ですし、いい子ですよ？
そこに恋愛感情は無いですし（っていうか今は一方通行なんだけど）
」
「そうですか……。
ですがもし……もし家の娘を傷つけたりした場合は……」

続く言葉が気になるような気にならないような……とりあえずギーシュ、早まった真似をするなよ！
多分原作でサイトがやったようなことをしたら、お前の命は多分デ

ンジャラスなことになる。

「そういえば……この間来た手紙に貴方のことが書いてありましたね」

「え？」

「何でもクラスにいるスタイルの良い女性にデレデレしていたとか……。

娘は自分が兄の様に慕っている貴方のそんな姿を見て大層不快な思いを感じた様です」

ここで矛先が俺に来るのか？！

っていうか忘れてた！！

あの後フォロー入れようと思ってたのに、ギーシュとタバサの修行、なんか偶に部屋に侵入してくるルイズ嬢への対処で忙しくてすっかり……。

あぁこれはヤバいな。

「久しぶりに戦闘訓練をしましょうか。

ここ数年で貴方が何処まで強くなったか楽しみです」

「ははは……お手柔らかに頼みます」

その後俺は訓練と言う名の何かで、ボロボロにされてしまった。

なんとか直撃を貰うこともなく、魔法の余波で軽い怪我や服が破れてしまったりした位だけど、精神的に大分厳しかった。

流石に水の絨毯爆撃されれば心もすり減るさ。

しかも禍々しい笑顔で魔法を放つ姿はさながら魔王だったよ。

流石にここで休むと、宿泊してしまいそうだったので、早々とモンモランシ領を立ち去った。

「私の本気に気を失わずに耐えますか……流石ロジャー殿のご子息。あの子になら……」

第７１話　恩師の気持ち（後書き）

あれ？いや……まだ大丈夫。
モンモンフラグは立っていないはずだ！
むしろ変なフラグが……。

ここからアンケートです
各話に題名があった方が良いとの意見がありました。
俺としては確かに作品確認がやりやすくなるという点ではいいのですが、題名で本文のネタばれしてしまう可能性があるのです。
どちらが良いでしょうか？
？あった方がよい
？なくても問題ない
このどちらかを選んで一言に書いてくれれば、最終的に多い方にします。
どうかご協力お願いします。

第72話　分霊の住む湖

実家に帰ってきた翌日。
俺は朝一で水筒の中にある水の精霊を湖に移すために、森の中に来ている。
結局昨日は家に着いたのが夜になってしまったから、湖に行けなかった。
家に帰ってきてやれたことと言えば両親への報告位の物だ。
まぁまだ半年位しか経ってないから、報告と言っても話すことは少なかったけど……。

「さてと……湖に着いたわけだが、普通に入れればいいのかな？
混ぜろとしか言われてないから大丈夫だとは思うけど」

俺は仄かな不安を胸に抱えつつも、水筒の中身を湖へと流しこんだ。
すると湖が一瞬光輝き、中心辺りが泡立ち始めた。
その水泡がなくなると、いつも通りの湖に戻ったが……。

「大丈夫か、これ？」
「問題ない」
「え！？」

俺が湖の変化に驚いていると、何処からか声が聞こえてきた。
周囲に人の気配はなく、目の前にあるのはいつもと変わらない湖だけ。

もしかして幻聴か？
それにしてはハッキリ聞こえたけど。

「それにしても少し驚いたなぁ……まさか湖が光るなんて。
人がいたら怪奇現象として噂に成りそうだな」
「水の精霊が怪奇現象とは、不遜な輩がいるものだな」
「……やっぱり貴方ですか」

目の前に水で作られた俺の姿があった。
何度見ても慣れないな。
色が付いていない自分を見るのは気持ちいいものではない。

「これで良かったですか？」
「これでいい。
知ってはいたが、ここは良い湖だな」
「そう言ってもらえて嬉しいですね。
俺のお気に入りの場所ですから」

まぁなんか新たな住人が増えたけど……。
悪い人じゃないからいいか。

「こっちの湖ではあまり派手なことしないでくださいね？
国に目をつけられそうなので」
「分かっている。
主は目立ちたくない、平穏に暮らしたいというのが夢。

その夢を邪魔するつもりはない」
「それなら良かったです」
「我としてもこのような湖が血や泥で汚れるのは好かない。
もし単なる者がこの森に攻めてきたなら、力を貸すのは吝かではない」

そんな仮定したくないなぁ……。
でもポケモンのことがバレたら、ロマリア辺りが異端を排するとか言いながら攻めてきそうだしな。
ある意味力強い味方が出来たのか？

「但し」
「但し？」
「今後森で召喚を行う際は我を呼べ。
特に水に関係するものなら絶対だ」

やっぱりポケモン目的だったかこの精霊！
っていうか大分ストレートに言ってきたな。

「それぐらいなら構いませんが、その際には周囲の索敵任せてもいいですか？
僕が索敵するよりも、貴方が水を使って索敵していただけた方が精度が高いと思いますので……」
「分かった」
「そうですか、助かります」

こうして俺の事情を知っている仲間？が一人増えた。

森から帰ってきた俺は使用人から、母さんが俺を呼んでいたことを聞き、部屋へと向かった。

「おかえりなさいレッド」
「ただいま母さん」
「突然だけど本題に入るわね。
貴方ここに帰ってくる前に、マルギッテのところに寄ってきたでしょ？」
「はい、寄ってきましたね」
「その時に水の精霊に渡りを通したんですって？」
「そうですね」
「彼女とても感謝していたわ。
そのお礼という形で、水の秘薬が送られてきたの」

早いな！
まぁ嬉しいんだけど、母さんは結局なんの用なんだろう？

「そしてここからが本題なんだけど、貴方確か秘薬の勉強殆どしてなかったわよね？」
「そうですね、資料も少なかったですし」
「それでここに秘薬の実物がある。
ということで夏休みの間秘薬の勉強をしましょう！」

確かに俺は傷を治すための水の秘薬位しか作れない。
っていうかそれ以外の情報が家の本になかった。
俺としてもモンモランシ嬢程の秘薬作りを目指してるわけではないけど、戦闘で役立ちそうな秘薬をつくることが出来れば、俺に出来ることも増える。
今後何が起こるか分からないので秘薬の知識はあって困るものではない。

「そうですね！
僕としても他の秘薬に興味がありますし、いい効果の秘薬を店で買うと安くありませんからね」
「そうね～、特に戦闘に使える位効果が強いものとなると余計に高い。
なら作った方が安く済むわね。
家も裕福な貴族とは言えないから、秘薬の勉強はとても役立つでしょう」

それに水の精霊の協力も得られそうだから、秘薬作りの勉強はやっておいた方がいいだろう。
もし原作キャラが病で倒れでもしたら、俺の知っている未来とはかけ離れてしまう。
戦闘も大事だが、サポートも出来るようになっておくのがベストだ。

「じゃあ今日の夜から始めましょう」
「え？　なんで夜なの？」
「昼ごろの強い日差しに照らされることで、材料が渇いたり、気化したり、変質してしまったら秘薬は出来ないからよ。
それに明るい間は私とお父さんとの訓練が有るでしょう？」
「そう……でしたね」

忘れてた……家にいる間は訓練をつけてもらうという話だったんだ。

「うふふ、この半年でどのくらい成長したか楽しみだわ」
「（こういうところはマルギッテさんに似てるなぁ）お手柔らかに」
「それはレッド次第ね」

そう言って母さんは少女の様に笑った。

第７３話　友からの共闘依頼（前書き）

アンケートの結果は
題名あった方がいい：８票
題名なくてもいい：９票
僅差で題名なくてもいい派の勝利！
なので今回は見送らせていただきます。しかし１００話超えた時点で一回何話が何の話かまとめておこうと思います。

第７３話　友からの共闘依頼

久しぶりにテリーから手紙が来た。
なんだかんだ言って卒業してから殆ど連絡取ってなかったから、とても驚いた。
そんな学院時代の相棒の手紙に何が書いてあったかって言うと、どうやら領内に出てきた魔獣を倒すのに協力してほしいという話。
一応報酬も出るらしいし、久しぶりにテリーとも会いたい。
そんな軽い考えで俺はテリーの手紙に返答した。
そのことを両親に話しても反対は特になく、俺は馬車でボガード領へと向かった。

「それにしても、テリーが手を焼く魔獣か……バジリスクより弱いといいなぁ」
「ジ！」

アイガは微妙に弱気な俺を見て、自身の胸を拳で軽くたたいた。

「ハハハ、そうだな！お前もいるから大丈夫だよな！」
「ジジジ！」

ボガード領に着いた俺を、テリーは嬉しそうに出迎えてくれた。

「久しぶりだなレッド！」
「久しぶり！」
「今回はいきなり呼び出して悪かったな……でも今回はちょっと俺の手だけじゃ足りなくてな」
「テリーだけじゃ無理な魔獣か……何なんだ？」
「あぁそれについては俺の家で説明する。俺に着いてきてくれ」

テリーは自分が乗ってきた馬に乗りなおして、馬を走らせた。
俺もそれに倣い、馬車を走らせてテリーの後を追う。
そうしてしばらく走らせていると大きな屋敷が見えてきて、そこでテリーの馬が停止して、俺に向き直った。

「ここが俺の家だ」
「いい家だなぁ」
「よせやい。
馬車はそこに止めといてくれれば、帰りまで責任を持って預かる。
それじゃあ客間までついてきてくれ。
そこで今回の件について説明する」

「わかった。
アイガはどうする？」

俺がそう聞くと、アイガは馬車の横に立ち、話しが終わるまで待ってくれるようだ。
俺はアイガの肩を軽く叩き、「ありがとう」と一言だけ告げた。
ボガード邸の中を軽く案内された後に、客間へと連れて行かれた。
そこには強面の４０代位の男性が一人、目を瞑りながら待っていた。

「親父！　レッドを連れてきたぞ！」
「あぁ……君がレッド君か？」

親父？……あぁテリーが超えたがっている父親ってこの人か。

「はい、僕がレッド・ド・ドリュウズです。」
「俺はジェフ・デューク・ド・ボガード。
コイツの父親だ。
コイツから色々話は聞いている」

ジェフさんはテリーの頭を少し強めに撫でながら俺に視線を向けた。
渋いなぁ……テリーもこうなるのか？

「……不躾ですがどんなお話をお聞きに？」
「君が家の息子たちに特殊な戦い方を教えたり、君の使い魔のこと

を馬鹿にした貴族と決闘したこととか……色々と面白い話を聞かせてもらったよ」
「テリー……後で少し話があるから、時間を取ってくれ」
「レ、レッド！少し待ってくれ！
今はそれどころじゃないだろ！？」
「（後で覚えてろよ？キュルケに口を滑らした件のこともあるから、ネタ技の実験台になってもらうからな！）それもそうですね……結局今回僕に手を貸してもらいたい内容って何ですか？」

ジェフさんとテリーは先ほどまでの表情を引き締め、真剣な顔になった。
おいおい、なんだこの空気は？

「君は優れた土メイジらしいね」
「え？　一応トライアングルではありますけど……」
「クラスのことじゃない。
君の実戦経験のことだ。」
「……一応はぐれオーク2体、山賊2人、父さんと一緒でしたがバジリスクも倒しました」
「レッド凄ぇな！」
「君の実戦経験は理解した。
それに君は水のトライアングルでもあると聞いている」
「お前水の魔法も使えたのか！？
でも学院の時は一度も使ってなかったじゃねぇか！」

あぁテリーに話してなかったっけ？
まぁそれもそうか、学院に通ってた時は土しか使ってなかったしね。

結局そのせいでギトーに絡まれたような気がするけど！

「あの時は実戦レベルで使えるものでもなかったし、前も言ったかもしれないけど、僕目立つの嫌いだからさ……水はここぞって言う時の切り札にしようかなって思って」

「確かに誰にも知られていない自分のもう一つの属性と言うのは、切り札に成りえるな」

「賛同いただいて嬉しいですねジェフさん」

「この件が片付いたら是非模擬戦をしてほしいくらいだ」

……この人バトルマニアか？！

テリーが勝てないってことは大分強いだろ。

それは遠慮したいな。

「テリー……別にレッド君はお前に隠したくて隠していた訳じゃない。

切り札は他の人に知られると切り札足り得なくなってしまう。

だから隠していたんだ」

「分かってる……分かってるさ！

でも何で親父が知ってるんだよ？」

「あぁ、それは彼が今学院で水の魔法教師をしているからだよ。」

「はぁ？！　レッド、お前教師なんてやってたのか！？」

「まだ一年も経ってないけどね？

それにミスト先生が教師辞めちゃったから、穴埋めの臨時教師だよ」

「そっか、あの先生辞めちまったのか。

それにしてもレッドが教師か……結構似合うな！」

まぁテリーとアンディに格闘技と魔法の講義もどきしてたしな。
そう言えばアンディがいないな……。

「ありがとう。
ところでアンディは？」
「あぁあいつなら、マイのところに行ってて今はいない。
それに今回の件は少し手に余るだろうから、呼び出してない」
「そっか……でその肝心な件って言うのは何なんだい？」

俺がそう聞くと、ジェフさんが机の上にあった紙を俺の方に動かした。
どうやら何かの報告書の様だ。

「これに書いてあるから読んでみてくれ」
「……確認されているだけでも火竜の成体五頭？！」
「そうだ……俺と息子は共に火のメイジ。
少し相性が悪くて五体は厳しい。
俺の方でも知り合いに協力を仰いでみたんだが、知り合いの手錬も火のメイジが多くてな。
息子に駄目元で話を聞いてみると、君の名前が出てきたから協力を頼みたいと思ってな」
「流石に一人で五頭は無理ですね」

まぁ方法を選ばなければやれるんだけど、流石に一人でやったことがバレると今以上に目立つって言うか、国に目をつけられそうだ。

「それは流石に放り投げ過ぎだろう。
私とテリーで三頭受け持つ。
出来れば二頭の足止めを頼めないだろうか？
こちらが三頭倒したら、直ぐにそちらに向かうので、それまで堪えてくれるだけいい。」

二頭の足どめなら大丈夫だけど、ここは……有名なセリフで返しておこうかな？
一度言ってみたかったんだよね。

「それは構いませんが、別に倒してしまってもいいのでしょう？」

第７４話　火竜退治（前書き）

パソコンの糞スペックが俺の心を折りに来た。
いきなりの再起動で書きかけが消えた……。
なんなの？一瞬画面に頭突きかますところだったんだけど？

第７４話　火竜退治

あの後作戦について話した後、馬車に乗って火竜のいる山へと向かっているのだが、今馬車の中は大分カオスになっている。

「自我のあるゴーレムなんて本当に珍しいな」
「親父、アイガって名前があるんだから名前で呼んでやれよ」
「おぉスマンスマン、それにしてもこの子がバジリスクを強引に抑えつけるだけの力があるとは、本当に見た目は当てにならないな！」

ジェフさんは本当にアイガが気になって仕方がないようだ。
アイガのことを触ったり、テリーに話を聞いてみたり、俺に話を聞いてみたりと興味は尽きないようだ。
こんなテンションになったのには理由があって、テリーが俺にバジリスクと戦った時の話を聞きたがったので話していると、アイガが暴れているバジリスクを無理矢理押さえこんでいたという話をしたところで、ジェフさんが俺に近寄ってきて「このゴーレムが！？」と言ってきたのが始まりだ。
そして話を聞いていたテリーもアイガの能力の高さに驚いているようだった。
テリーの前でアイガは戦闘したことなかったからなぁ。
そんなこんなで今は若干興奮したジェフさんと微妙に凹んだテリーが目の前にいる。
こんなんで大丈夫なんだろうか？

どうやらそんな考えは杞憂に過ぎなかったようだ。
目的地に近づけば近づくほどボガード親子の口数は減っていき、顔

からは笑みが消えていく。
流石に火竜五頭に三人＋一体で対抗しようって言うんだから当然か。
体長６メートル以上の空飛ぶ蜥蜴が、火を吐きながら五匹飛んでくると思えばこの緊張感は理解してもらえるだろう。
そんな静かに集中している俺達だったが、ジェフさんが最後の作戦確認のために口を開いた。

「もう一度作戦を確認するぞ？
先ずレッド君が二頭の火竜に魔法を放って群れから離す。
俺とテリーは残りの三頭を素早く倒してレッド君の加勢に向かう。
これが大まかな作戦内容だ」
「分かっています」「分かってる」
「そろそろ目的の山の入口だ。
そこからは歩いて巣を探す。
山に入ってからは何時火竜が現れてもおかしくない。
気を抜くなよ？」
「「了解」」

山に着いてからは殆ど喋ることもなく黙々と山を登ることになった。
火竜は基本山の高い場所に巣を作る。
それに基本的巣にいる場合が多い。
しかし狩りに出てきてないとは限らない。
その場合先ほどの作戦は変更される。
一頭から三頭が狩りに出てきている場合は三人で一気に倒す。
それ以上なら先ほどの作戦通り、二頭を俺が引きつけて倒す。
そういった単純な作戦。

「あの洞窟が怪しいな……。
周囲に不自然に欠けた岩がある。
恐らくあそこが火竜の巣だろう」
「あの中に火竜がいるのか。
腕が鳴るな」
「あんまり一人で突っ込まない様に。
幾らテリーでも火竜に噛まれたら食いちぎられるよ？」
「それにしてもこの洞窟の大きさなら二頭同時に出てくることは無いな…。
なら一頭ずつ倒して言った方が良さそうだな。
よし！作戦変更だ！
一頭ずつ出てきた順に倒していくぞ！」

ジェフさんの作戦変更の言葉を聞きながら、俺は火竜の顎の強さをテリーに説明しつつ、先に進んだジェフさんの後を追った。
目の前にあるのは高さ６メートル位の大きな穴。
奥は暗くて見えないが何かの呼吸音が響いてくる。
やっぱりここが火竜の巣か……。
ボガード親子も呼吸音が聞こえることから、ここが巣であることを確信したようだ。

「それじゃあ開幕の一発は俺が撃とう」
「火竜を引っ張り出せる位派手なの頼むよ？」
「ＯＫ！」

テリーは杖を取りだして、前に構える。
そうして杖の先を洞窟の奥へと向けた。

「はぁぁぁぁぁぁ！フレイムゥゲイザァーーーーーー！！！！」

テリーの渾身の魔法が洞窟へと放たれる。
洞窟の奥の方で火柱が上がり、洞窟内が明るく輝く。
中では火竜の声と思われる咆哮が聞こえてくる。
どうやら洞窟から出てくるようだ。

「ここからが本番だぞ……行けるかテリー？」
「当り前だぜ親父！」
「レッド君達はどうだい？」

俺達？　そんなのは言うまでもない！
俺とアイガは一回目を合わせて頷く。

「もちろん大丈夫ですよ！」
「ジ！」

ドンドン近づいてくる足音。
咆哮も大きくなってきた。
いよいよか……。
俺は杖を前に出し、何時でも攻撃できるように準備した。
ボガード親子も同じだ。
アイガも拳を前に構えている。

さぁいつでも来い！
そうして準備が完了した数秒後。
洞窟の中から炎が襲ってきた。

「アースウォール！
長続きはしませんので、攻撃の用意をしてください！」

俺は全員の前に土の分厚い壁を作り出した。
それぞれが出てくる火竜に魔法を放つ準備をする。
そうしている間に火を吐きながら火竜の一頭目が洞窟から出てきた。

「デカイな……でも負けねぇ！
食らえ！フレイムボール！」

テリーの魔法は上手い具合にブレスを吐いている口に直撃し、ブレスが止まった。
よし今のうちだ！！

「各自散開して、洞窟を囲むように並べ！」
「ＯＫ！」「了解！」「ジ！」

俺達は散開して洞窟を取り囲んだ。
さぁここからが本番だ！！

第７５話　三人の戦士と一体の伝説（前書き）

ふぅ……意外と長くかかったなぁ

第７５話　三人の戦士と一体の伝説

一頭目の火竜も流石にこちらを警戒しているのか、グルルと唸るだけで攻撃を仕掛けてこない。
これはやり難いけど、チャンスでもある。今火竜の視線はテリーに向いている。
なら反対側にいる俺が行くか。

「ロックスピア！」

俺の言葉と共に火竜の足元から翼に向けて、計１６本の石の槍が飛び出した。
石の槍は火竜に当たったが、貫通までは至らなかった。
この攻撃で火竜は俺を認識した。
こちらに向かってこようとする火竜。
俺は油断せずに石の槍を増やしていく、最初の槍が当たった場所を狙って次々と槍を打ち込む。
１６本、３２本、４８本……そして合計６４本の槍が翼に当たると、漸く火竜の翼に穴をあけることが出来た。

「よし！　これで飛ぶことは出来ない！」
「ヒュ～、やるねぇ！」
「それでは締めは俺がやろう。
レッド君、俺の前に大きめの土の壁を作ってくれ！」
「え？　はい、分かりました」

俺は言われた通りジェフさんの目の前に5メートルくらいの壁を作り出した。
それを確認したジェフさんは俺に向かって笑い、目の前の壁に向かって杖を向けた。

「本来なら俺自身が壁を作るべきなんだろうが、如何せん土は得意ではなくてね。」

ジェフさんが俺とテリーに話しかける。
その間にも火竜は何かをしようとしているジェフさんに向かっていく。

「ジェフさん火竜来てますよ！？」
「昔は妻に土の壁を作ってもらっていた。
結構思い入れのある技なんだ。
是非テリーには見てほしい。
行くぞ、フレアボール！」

ジェフさんは土の壁に向けて小さな太陽の様な火の玉を打ち出した。
フレイムボールの上位魔法である魔法に俺の壁は容易く溶ける。
しかし溶けた土は火の玉に押され火竜へと飛んでいく。
質量をもった火の玉は火竜の頭に当たり弾けた。

「ジェフさん？！フレアボールが解けてしまいましたよ？！」

「良く見ててくれ……」

俺とテリーはジェフさんの言葉で火竜へと視線を向ける。
そこには顔に張り付けたマグマを必死に剥がそうとしている火竜の姿があった。

「え？　何で剥がれないんだ？！」
「俺があれを操作しているからな。
幾ら暴れようと剥がれることは無い」

少しずつ動きが小さくなっていく火竜。
そうしてしばらくして動かなくなった。

「そう……死ぬまでマグマに包まれる。
火竜を焼くことは難しいが、窒息させることはできる」

ジェフさん普通にすげぇな……。
これで一頭。
一頭ずつならこれで全部いけるんじゃないか？
しかしそうは問屋が卸さない。
洞窟から二頭目が出てくるのとほぼ同時に、上から咆哮が聞こえてきた。

「上？！」

「これは元の作戦を実行も考えないとな……。
とりあえずレッド君、翼を頼む！」
「分かりました！　ロックスピア！！」

俺は洞窟から出てきた火竜の翼をさっきと同じ要領で使えなくする。
そしてジェフさんの前に土の壁を作り出し、もう一頭の飛んでいる方を向き直った。

「アイガ！　手伝ってくれ！」
「ジ！！」
「よし、火竜が降りてきたところでストーンエッジだ！」

火竜は着々と高度を下げてきている。
あと少しでストーンエッジの攻撃範囲内だ……。

「今だ！！」
「ジ！」

アイガの眼が点滅し、火竜の真下から高速で打ち出される石の刃が次々と火竜に突き刺さる。
流石に俺の魔法とは威力が段違いか……。
体中を撃ち抜かれて空中で絶命する火竜からテリーとジェフさんが相手している火竜に注意を向ける。
しかしそれも無駄だったようだ。
丁度火竜が地面に倒れたところだった。

「これで残りは二頭だな。」
「そうですね……それにしても残り二頭が出てきませんね。」
「そうだな……確かにこの遅さはおかしい」

むしろ洞窟にはもう何もいないんじゃないだろうか……。
その予想は当たったようだ。
確かに洞窟にはいなかった。

「まだ狩りに行っていた奴らがいたのか……」
「しかも一頭多いし……」

三頭の火竜は群れをなしてこちらに向かってきている。
ふぅ……まだ終わらないか。

「一頭は俺がやろう。
レッド君、3つ壁を作っておいてくれ」
「分かりました。
あと僕も一頭もらいますよ?」
「それじゃあ俺も「テリーは少し火力不足だ」な!?」
「だからアイガ君とコンビで一頭相手にしろ。」
「……分かったよ!」

こうして分担も決まったところで、俺は先ずジェフさんの近くに土

の壁を作る。
これでジェフさんの用意は出来た。
次は俺の番だな。
水を目の前に集められるだけ集める！
そうして目の前出来た大きな水の塊に均等に圧力を掛けられるだけ掛けて行く。

「くっ！！　キツイな……でもまだまだ！」

俺はそのまま自分の限界まで圧力を加えて行く。
水球の表面が波立ち、既に限界が近い。
もう俺には標的の火竜しか視界に入らない。
後約２０メートル……１５メートル……１０メートル。

「よし、今だ！
アクアレーザー！！」
「フレアボール！」
「フレイムゲイザー！」
「ジ！」

ほぼ同時に全ての攻撃が三頭それぞれに当たった。
一匹はマグマの波に襲われ、一匹は炎の柱に視界を遮られてアイガに地面に叩きつけられ、一匹は物騒な水鉄砲に撃ち抜かれて……こうして火竜の討伐は完了した。

第７５話　三人の戦士と一体の伝説（後書き）

やっぱり戦闘は難しい。

第７６話　戦いを終えて（前書き）

後日談……って言うかあの少し後

第７６話　戦いを終えて

あの後一応周囲を探索して、まだ火竜が残っていないか探してみたが、あれで最後だったらしい。
こうして火竜の討伐を終えた俺達は、ボガード家へと向かう馬車の中にいた。

「レッド君ありがとう。
君がいなかったら俺達は死んでいたかもしれない」
「いいえ、僕は手伝いをしたにすぎません」
「二頭倒した時点で手伝いを通り越してるけどな」

テリーの言葉もその通りかもしれないが、実際一頭はアイガ……っていうかアイガは二頭倒している。
一番多かったのはジェフさんだけど、アイガはやっぱり伝説なだけあるな。

「俺もまだまだだな……俺だけが一頭も倒していない」
「テリー……お前はまだまだだな」
「ジェフさん！？」
「だからもっと強くなれ！
俺よりも、レッド君よりも、そして誰よりも強くなれ！」
「親父……当たり前じゃねぇか！！
俺はテリー・ド・ボガードだぜ！」

ふぅ……元気になったようでなによりだ。
やっぱりテリーは元気いっぱいじゃないとな！

ボガード邸に戻った俺は、夕食を御馳走になり、食事が終わり次第客間に来てくれと言われたので、客間に向かっていた。

「今日は本当にありがとう。
報酬は、はずませてもらうよ」
「ありがとうございます」
「それにしてもアイガ君は本当に凄まじいな……。
火竜の身体を貫く攻撃……確かストーンエッジといったか。
他にも頭蓋を叩き割った一撃は人が受けたらどうしようもないだろう」
「アイガの力のことは人に話さないでください」
「どうしてかな？
あれだけの力があれば色んな所から引っ張り凧だろう」
「……それが嫌なんです。
俺は平穏に暮らしたい。
それを信条に生きていますから」
「そうか……君は変わっているな！
……だがいい夢だ！」

その後少しだけ話をして、俺はテリーの部屋へと向かった。

「テリー、今日は大変だったね」
「そうだな……でも親父とお袋のコンビネーションを生で見たかったな」
「……お母さん亡くなってるんだったっけ」
「あぁ……アンディを生む時に逝っちまった。
そのことをアンディは今も気にしてる。
昔は何時も自分のことを責めてばっかりだったんだけどな、ある日親父がその姿に耐えられなかったのか自分の部屋にアンディを呼び出したんだ。
親父はそこで「自分を責めるな！自分が生まれたことを後悔するなんて母さんへの侮辱にしかならねぇ！」そう言って思いっきり殴った。
それからは自分を責めることは無くなったんだが、やっぱりどこか気にしてる。
俺はそれがいつか爆発するんじゃないかって心配だ」
「いい兄貴してるじゃないか……。
しょうがないな……それに免じてキュルケに僕のことを話したのは許すよ」
「まだ覚えてたか……今度からは気をつけるぜ」

俺とテリーは笑い合いながら夜遅くまで話し続けた。

翌朝俺は長居するのも悪いと思い、ボガード邸を出ることにした。
そうしてボガード邸の玄関に向かうと、そこにはテリーとジェフさんが立っていた。

「水臭いな……挨拶もなしかよ！」
「そうだぞレッド君。
君は短い間とはいえ共に戦った仲間だ。
戦友ともいえる相手を見送らないなんて不義理を、俺たち親子にさせる気か？」
「すみません。挨拶しなかったのは、こんな朝早くに起こすのも悪いかなって思ったので……」

そこまで考えてなかった……これは俺が悪いな。

「気を使ってくれるのは嬉しいが、時にはそれが仇となることも覚えておくといい。
まぁ今回は仇って言うほどでもないけどな」
「今度から気をつけます」
「それにまだ報酬について詳しく話してないだろう？」
「あ！」

「ハハハ、君は本当に欲がないな。
君はお金よりも別の物の方が良さそうだな……。
よし、昨日倒した火竜の爪や牙を好きなだけ持っていくといい」
「え?!でもあれを売れば結構なお金に……」
「いいんだ、売るよりもレッド君の役に立てた方がいいだろう」
「それじゃあ2頭分だけ戴きます」

俺はアイガに頼んで火竜の身体から、爪や牙を取ってきてもらった。
なんか予想より報酬が多くなったなぁ。
嬉しいけど少し申し訳ない。

「それではロジャー殿によろしく」
「また来いよ!」

こうしてテリーからの依頼は完全に終わった。
馬車の中には俺達の他に、小さな山になった火竜の一部。
これを何に使うか考えながら俺は自領へと向かって行った。

～ジェフ　ｓｉｄｅ～

レッド君は噂通り中々の実力者だったな。
伊達にテリーとアンディを鍛えたわけじゃないな。

「レッド君はいい子だったな」
「当り前じゃねぇか！　アイツは俺の相棒なんだからな！」
「そうだったな……」

妻と性別は違うが、テリーとレッド君を見ていると昔の俺達を見ているようだ。
もしテリーが女だったら許婚にしたいくらいだ。
まぁ今息子たちはそれぞれ付き合っている女性がいるみたいだけどな！

「ところでマリーとの仲はどうなったんだ？」
「お、親父には関係ないだろ！！」

俺達はそんな馬鹿話をしながら家へと戻って行った。

「（レッド君位の力を持っていながら平穏に暮らすのは難しいかもしれない。
いつか何かに巻き込まれてしまうだろう。
その時にテリーが助けになれればいいのだが……）

テリー、もしレッド君が困った時は「もちろん駆けつけるぜ！」そうだな……お前ならそう言うと思ったぞ。
流石俺の息子だ！」

第７７話　専用防具注文（前書き）

夏休みはここで終わらせます。

第７７話　専用防具注文

ドリュウズ領に戻ってきて最初にやったことは、父さんに火竜の素材を何に使うか相談することだった。

「僕が最初に考えたのは、剣に属性を付加出来ないかなって……」
「そういった技術はアカデミーで研究中だと思うが、一個人のために最新鋭の魔剣を作ってもらうのは王族クラスじゃないと無理だろう。」

やっぱり無理か……っていうかそんなものいっぱいあったら平民でも貴族に勝てちゃいそうだしな。
表立って出てくることはないか。
俺としては地下水みたいな剣が欲しいけど、意識を乗っ取られるのは勘弁だな。

「大人しく売るっていうのはどうだ？」
「それだったら最初から、ジェフさんにお金で報酬貰ってるよ」
「それもそうだな」
「やっぱり服とかに装飾するのがいいのかな？」
「そこらが妥当だな。
明日にでも武具屋に行ってみるか」
「そうだね！」

翌日朝家を出ると、昼に到着することが出来た。
防具屋は路地裏にあり、薄暗い細道を行ったところにひっそり佇んでいた。
入り口のドアには兜のプレートが張り付けられており、ぱっと見は普通のお店だ。

「ここ？」
「あぁ、俺が昔からお世話になっている防具屋だ」

父さんは特に戸惑うこともなくドアを開けた。
ドアの内側にあった来客を知らせるベルが店内に鳴り響く。

「へ～い、いらっしゃ……ロジャーの旦那じゃないですか！！
お久しぶりです！」
「久しぶりだな店主。」
「いつ以来ですかねぇ。
昔は旦那の部下連中も一緒に来て、色々買っていってくれましたねぇ。
今日は何が御入用で？」
「あぁ今日は俺の息子が火竜を狩ってきたんだが、その素材を使って防具を作ってくれないか？」

店主さんはそこで初めて俺の存在に気付いたようだ。
そして大分驚いているなぁ……。

「えっと……聞き間違いじゃなければそこの坊ちゃんが火竜を倒したって聞こえたんですが？」
「あぁ、そう言ったんだが？」
「はぁぁぁぁ、驚きませんよ？
旦那の話にいちいち驚いていたら心臓が持ちませんからね。
それでどれくらい素材は有るんですか？」
「よっと、これくらいだな。」

父さんは軽量化の魔法を掛けておいた火竜の牙と爪をカウンターに置いた。
流石に成体二頭分となると結構な量なんだよね。

「……旦那？一応聞きますがこれ何頭分ですか？」
「レッド、何頭分だ？」
「二頭分です。」
「ってことは成体を二頭も倒したって言うんですかい？！
しかも一人で！？」
「倒したのは三頭ですね。
一頭は自分で、使い魔が二頭……。」

詳しく言うと全六頭中ジェフさん一人で三頭倒しているんだけど、

まぁ別に詳しく話す必要はないだろう。

「蛙の子は蛙ってことか……分かりました。
これだけあれば耐火装備一式揃えられますね。
値段は若干張りますが、性能は保証します」
「そうか、出来るまでどれくらい掛かる？」
「ざっと二カ月ってところですかね。
火竜の素材は火に強いもんで、加工が難しいんでさぁ。」
「レッド、学院に送ることになるが大丈夫か？」
「大丈夫だと思うよ」
「じゃあ店主それで頼む」
「ローブと手袋、そしてマスクと靴を作りますが、何か要望は有りますかい？」

店主は俺の方を見ながら要望を聞いてくる。

「出来れば手袋の拳の部分に鉄板入れてくれませんか？
もし殴った時にその鉄板が当たる様に。
そして靴の先端と踵の部分にも鉄板を入れてください。」
「鉄板ですか……いいですけど、珍しいこと頼みますねぇ。
他に要望は有りますかい？」
「あ～色は黒ベースであまり目立たないものにしてください。
デザインは任せます」
「分かりました。
それじゃあ代金はドリュウズ家に請求しときますぜ？」
「それで問題ない」
「それじゃ旦那と坊ちゃん。

楽しみに待っててて下せぇ。
最高級品の装備を作って見せるんで！」
「店主の腕は知っている。
信用しているからな」
「楽しみにしています！」

俺と父さんはそのまま武具屋を後にした。
二ヶ月後か……楽しみだなぁ

「レッド、もうそろそろ学院に戻ることになるが、困っていることとかないのか？」
「（正直授業内容をいつも迷ってるかな？）今のところ先生の一人に嫌われていること以外は問題ないかな？」
「なんだ、何かしたのか？」
「……なんか教師になるにふさわしいか見てやるって言って決闘申し込まれて、それに勝ったら嫌われた」
「……そうか」
「うん」
「頑張れ」
「・・・・・・うん」

なんか空気が重くなった。
おのれギトー！！その場にいなくても家族の団欒まで邪魔するなんて……なんていう卑劣！！
父さんも流石にこの空気は……と思ったらしく、露骨に話題を切り替えた。

「そう言えばお前の二つ名が変わったらしいじゃないか。
俺はまだ変わったってことしか聞いてないんだが、どんなのに変わったんだ？」
「……泥水」

そして広まる静寂空間。
またか……またなのかギトー！！
お前いつか杖と牛蒡すり替えてやるからな！！

結局家に帰るまで殆ど喋ることもなく、気不味い空気のまま馬車で過ごしてしまった。
やっぱ二つ名，泥水，は印象良くないよなぁ。
でも泥を使うのも事実だしな……ままならないなぁ。

第７７話　専用防具注文（後書き）

後一カ月後にＭＨＰ３出るなぁ……。
楽しみだけど、俺上手くないんだよ。
大剣使いなんだけど、ミラ系倒せないレベルｗ
村の最終クエもクリアしてない……。
復習しといたほうがいいかな？

第７８話　漢を目指す男対ゴーレム六体（前書き）

眠い中書いたのでミスが有る可能性が結構高いです。
一応見直しはしたつもりですが……

第７８話　漢を目指す男対ゴーレム六体

微妙に濃いイベントがあった夏休みも終わり、学院に戻ってきた俺を待っていたのは講義、そしてタバサ嬢とギーシュの訓練だった。どうやら夏休み中も頑張ってたらしく、少しではあるが二人とも進歩していた。

「そう言えばギーシュ君、モンモランシ嬢とはどうだ？」
「……まだデートに誘えてません。」
「まだ誘ってないのか！？」

夏休みに入る前に紹介したから、てっきり遠乗りくらいには誘えていると思ったが……大分奥手だな。
原作ギーシュは何処へ行ったのやら。

「タバサ嬢は夏休みどうだった」
「……忙しかった」
「そっか、忙しかったか」

任務かな……まぁ俺も夏休み微妙に忙しかったけど。
はたして何をやってきたのやら。
聞くわけにもいかないから、流すしかないな。

「よし、二人とも夏休みで鈍ることもなく寧ろ冴えている。

ということで新しい訓練にしようか」
「やっとアイガ君に勝てる様になったと言うのに……」「……楽しみ」
「（正反対の反応だな。）まぁやること自体は大して変わらない。
少しだけ実戦的になるだけだよ。
二人には順番に僕の作ったゴーレムと戦ってもらう。
僕は今から六体のゴーレムを作る。
そのうち一体に角を付けるのでそいつをメイジと見立てる。
そいつを時間内に倒せたらその訓練が終わる。
但し一撃でも攻撃を受けたらその場で負け。
制限時間は五分とする。
分かったかな？」
「分かりました」「分かった」
「じゃあ先ずはギーシュから」

俺はギーシュの前にアイガもどきを六体作り出した。
因みに今ここにアイガはいないため、前みたいなことは起こらない。

「ア、アイガ君がいっぱい……」
「あぁそれに関しては大丈夫！アイガよりもかなり弱いから、もしかしたら楽かもね？」

まぁ、まだギーシュは多人数戦をやったことがないからなぁ。
それに今まで散々ワルキューレを叩き潰してきたアイガに似たゴーレムが六体も出てくればそりゃ引くか。
でもそんな気構えじゃ勝てるもんも勝てなくなる。
少し発破掛けるか？

「諦めるのかい？僕としてはどちらを選んでもかまわない。
しかし今のままでマルギッテさんに勝てるなどと甘い考えを持つのは、お勧めできないかな。
今ギーシュ君に与えられた選択肢は、訓練を止めてモンモランシ嬢を諦めるか、訓練を続けて力をつけるかの二択しかない。
さぁ君はどちらを選ぶ！！」
「……やります。
ここで諦めるのは彼女にも失礼だ！
僕の思いが薄っぺらなものじゃないと認めさせるだけの力をつけてから、彼女のお母さんに会いに行くんだ！」
「よし、じゃあ早速いこうか！
因みにゴーレムに剣とかは持たせないから、殴る蹴る投げる位しかゴーレムはしない。
でも石の塊に殴られたらどうなるか……分かるよね？」
「……はい」
「僕も一応秘薬を持ってきてはいるけど、頭とかは自分で守ってね？
頭は狙う気ないけど、何かあったら大変だから気をつけてね？」

ギーシュの顔がまた少し青くなったけど、今度は弱気を吐くこともなくゴーレムをしっかり見ている。
そうだ、それでいい。
相手を観察しろ、弱点が有るなら把握しろ。
相手の情報を少しでも多く手に入れることで勝敗が分かれることもある。

「それでは今から五分で角付きを倒せばギーシュ君の勝ち。

じゃあ……始め！」
「先手必勝、ブレット！」

他の五体に目を向けることもなく、角付きに石の弾丸を飛ばす。
直撃した石の弾丸は、アイガもどきを壊すことなく……胸の一部を欠けさせるだけで地面に落ちてしまった。
しかしそれを読んでいたかのように、ギーシュは追撃を加える。

「アースハンド」
「あぁ……倒したね」
「ですよね」

確かに倒したな、足を掴んで引っ張った訳だから、そりゃあ倒れるわ。
でも俺が言っていた倒すって言うのは……。

「でもこの倒すじゃないんだよなぁ。
破壊してくれないと訓練で勝ちにはならないよ？」
「やっぱりですか？」

ギーシュは少し恥しそうに頬を掻く。
そして再び真剣な顔になると、転んだゴーレムの周りに集まっているゴーレム達に目を向けた。

「やっぱり威圧感が大きいですね。
でも負けられない！
仕切り直しといきましょうか！！」

ギーシュはそう言うとワルキューレを呼び出し、角付き以外に突撃させていった。
やはり石のゴーレムより動きが速いな……。
そしてワルキューレに混ざって、ギーシュ本人も突っ込んできている。

「（それは……悪手じゃないか？
ギーシュ君に岩を砕く力が有るのだろうか？）
さぁここからどう出る！」

ギーシュはワルキューレ達を犠牲にすることで角付きに接近する機会を経た。
アイガもどきも自身の拳が届く範囲にギーシュがきた瞬間に拳を振りおろしたが、ギーシュはそこでバックステップして拳を避けた。
地面に叩きつけた拳の所為で砂埃が舞い、ギーシュを見失った角付き（俺操作）は辺りを見回したが、ギーシュは見つからない。
ここは王道通り後ろに来るかもしれないと思って裏拳を放たせた。
予想通り後ろで剣を突き刺そうと立っていたギーシュも、流石にこの攻撃は読めなかったようだ。
なんとか防御は間に合ったが、ギーシュの手に持っていた剣は真ん中辺りから折れ、数メートル吹っ飛ばされた。

「ここでタイムアップだ。
ギーシュ君、今回は残念だったね。
でも後少しだったから意外と直ぐに出来るかもしれない。」
「ゲホ、でも少し悔しいですね。」

俺は倒れているギーシュに手を貸して、立たせる。
それにしてもフェイントっていうか戦闘の駆け引きが上手になったなぁ。
夏休み中に兄弟に鍛えてもらったのかな？
なんにせよこの時点で原作で最初にサイトが戦った時よりも強くなっているのは確かだろう。

「さぁ次はタバサ嬢の番だ。」
「分かった。」

彼女を相手にするならギーシュを相手にするよりも気合入れないと、訓練にならないかもしれないな。
ギーシュの時に手を抜いたわけではないけれど、より一層の気構えが必要だ。
実戦経験の数なら下手すれば俺より多いだろう。
そして俺はゴーレム戦に慣れてない。
だから全力でいこう！

第７８話　漢を目指す男対ゴーレム六体（後書き）

後少しで一つのボックスがレベル１００で埋まるｗ
なんとかモンハンが出るまでに埋めたいな。
……卒研ェ

第７９話　母を想う少女対ゴーレム六体（前書き）

タバサ戦

そして２０万ユニーク突破ぁ！！
あと少しでＰＶも３００万だぁ！！
・・・・・・・・ヤバイ何これ。
そして週間ユニークで検索かけたら１Ｐ目にこの小説があるんですが・・・・・本当に読者の皆様に感謝ですね。
もうちょっとで原作ですし、俺も頑張っていきます！

第79話　母を想う少女対ゴーレム六体

「コインが下に落ちたら開始だ」
「分かってる」

俺は6体のゴーレムを整列させる。
前衛三体、後衛二体そして角付きの護衛対象。
これで最低でも二体倒さなければ角付きは倒せないだろう。

「……厄介」
「まぁ手は抜けないからね」

俺はコインを上に投げてからタバサ嬢の声に答えた。
まぁ上からトライアングルスペル乱射すれば倒せる可能性はゼロじゃないけど、もし空中にいるときに投石や魔法を受けたら落下死してしまうということも教えているので、そう簡単にその手段は取らないはずだ。
それに現状シルフィードがいないから、空からの攻撃は出来ないはずだ。
そしてついにコインが地面に落ちた。

「（タバサ嬢の魔法の中でこのゴーレムを砕く魔法はないはずだ。さぁどう出る！）」
「エアハンマー」

彼女が放った風の槌はゴーレムには当たらずにゴーレムの足元の地面を抉った。

「（外した？いや……そんなはずは……）」
「フライ」
「飛んだ！？」

飛んでいる間は他の魔法を使えないのに、何故空に？
そんなことを考えている内にドンドン速度を上げて高度を上げて行くタバサ嬢。
ある程度まで高度を上げると停止して、どうやら深呼吸しているようだ。
そして次の瞬間タバサ嬢は自由落下を始めた。

「何を考えている！？」
「ウィンディ・アイシクル！」

そう言うことか！！
フライ中に魔法が使えないなら落ちながら撃つ……確かに出来なくもないけど賭けすぎるだろう。
タバサ嬢の目の前には本来なら無数の氷の矢が出るはずなのだが、矢の代わりに一つの大きな氷柱が出来て行く。

「考えたね……確かに自由落下＋風で加速させたその氷柱ならゴー

レムも壊せるだろう。」

そのまま二メートル以上にもなる氷柱を角付きに向けて発射した。
俺のゴーレムのスピードじゃ回避できそうにないな……。
氷柱は見事目標を貫通し、ゴーレムは地面に還っていった。

「よっと、但し着地をもう少し考えた方がいいかな？」
「……考えておく」

咄嗟に落下地点に走った俺はタバサ嬢をキャッチして、苦言を一言。
流石にタバサ嬢も勝ちにこだわり過ぎたことに気付いたか、少しだけ頬を赤らめてそっぽを向いた。
とりあえずタバサ嬢を地面に立たせて、他のゴーレムを地面に戻していく。

「今回の訓練をクリアしたのはタバサ嬢だけ。
ギーシュ君は明日もこの訓練をやろうね」
「……はい」
「タバサ嬢はとりあえず結果を重視し過ぎているから、手段も少し気にするようにしようか。
確かに結果も大事なんだけど、結果は上出来だけど終わったらこっちも瀕死だと予期せぬ事態があった時に対処しきれないからね」
「分かった」

二人ともいい子だ。

俺が鍛えることで少しは彼らが危険を回避出来るようになればいいな。

～タバサ　ｓｉｄｅ～

今日の訓練を終えて、部屋に戻った私を待っていたのは赤い髪の彼女だった。

「おはようタバサ」
「おはよう
何でここに？」
「偶には一緒に教室行こうと思って来たら、いないじゃない？
でも教科書とかはここにある……なら待ってれば戻ってくるかなって。
予想以上に時間が掛かったけど、何やってたの？」
「訓練」
「真面目ねぇ……まぁいいわ。

一緒に教室に行きましょ！」
「分かった。」

今日は……レッドの授業。
少し楽しみ。

～side　end～

部屋に帰った俺を待ちかまえていたのは、俺のベットの上で転がっているルイズ嬢だった。
……何やってるんだこの子は。
っていうか俺の部屋のドアノブが爆破されてたんだが？
俺が部屋に入ってきていることに気付いたルイズ嬢は、素早い動きで起き上がってベットの端に腰かけた。

「……何時から？」
「ゴロゴロしてた時からかな？
それとお願いだからドアを爆破するのは止めてくれ」
「だって鍵掛かってるんだもの……」

顔を赤く染めながら言ったからって許されると思うなよ？
っていうかそれは理由になってない。

「今度爆破したら公爵夫人に手紙送るからね？」
「それだけはやめて！
そんなことされたら……（ガクガクブルブル）」

あぁ……トラウマになってるのか。
確かに竜巻の中に放り込まれればそうもなるか。

「分かってるよ。
でも鍵が掛かっているときは普通に諦めてくれ。
僕が部屋にいるときなら普通にノックしてくれれば開けるから」
「分かってるわよ」

ルイズ嬢が俺に対する遠慮がなくなってきたなぁ。
少し前までは昔と同じ可愛い妹みたいだったのに……。

「レッド兄様は朝から何をやってたの？」

「あぁ少し身体を動かしてきたんだ」
「身体を動かす！？　誰と！？　もしかしてツェルプストー！？」
「は？　何でここでキュルケの名前が？」
「ハッ！　そう言えば兄様がそんなことするわけないわよね……ごめんなさい。
少し取り乱したわ」
「あ、あぁなんか納得してもらえたみたいでなにより」

なんでキュルケの名前が出てきたんだろう？
とりあえずなんか訓練のことはルイズ嬢にバレたら面倒なことになりそうな気がする。

「それにしてもドアノブだけ爆破するなんて、制御が上手くなったんだね」
「当り前よ！伊達に，爆発，のルイズって呼ばれてないわ！」

そう、ルイズの二つ名がゼロじゃないんだよ！！
爆発を一つの魔法と意識し始めた辺りでコモンスペルを使えるようになったらしい。
故にゼロになることはないんだけど、爆発って言う二つ名は結構凄いな……俺なんて泥水なんだが？

「はぁ……とりあえず一緒に教室に向かうとしますか」
「そう言えば今日は兄様の講義かぁ……今日は何やるの？」
「あぁ今日は天候や環境の変化が及ぼす魔法への影響かな」

俺とルイズ嬢は授業のことを話しながら教室へと向かって行った。

第７９話　母を想う少女対ゴーレム六体（後書き）

また〇〇ｓｉｄｅ書いちゃった……出来れば止めてくださいって言われてたのに。
すいません、出来る限り気をつけますが、どうも書きやすくて。

第８０話　水魔法演習（前書き）

あぶねぇ……アドバイスがなかったら普通に1年キンクリしてたよ。

とりあえず今までなかった実習内容

第８０話　水魔法演習

夏休みが終わってから2週間が経過した。
正直未だにルイズとキュルケに訓練のことがバレていないのは奇跡だと思う。
まぁ別にばれても問題ないとは思うんだけど……言う必要もないかな？って思っているので話していない。
モンモンにはギーシュ経由で知られてしまったために、偶に見に来るようになった。
でもそう言う時に限ってギーシュ失敗するんだよ……何でクリエイトゴーレムで下半身だけ作り出すとか愉快なミスかますんだよ。
モンモン笑ってたけど、俺としては苦笑いだよ。
カッコいいところを見せて、モンモンを惚れさせるんだ！
応援しているぞ！！

今日は俺の授業で実習をするから、現在中庭にいます。
やっぱり自分の今までの成果がはっきり分かるから、貴族の子供たちは期待半分不安半分と言ったところかな？

「今日はこれから水の魔法のみを使って模擬戦をしてもらいます。
但しライン以上の魔法の場合水の属性が入っていればＯＫとします。

後模擬戦とは言っても二人一組になって片方が離れた位置に壁を作り、もう片方がそれを打ち破るというだけの単純なものです。
水魔法に適性の無い子達もしっかり見学して、水の特性を見て感じてください」
「「「「「はい」」」」」
「それでは水属性のメイジは前に出てきてください」

俺の声で一列に整列していた生徒たちの中から9人の子が出てきた。
その中にはタバサ嬢の姿もある。

「特に組む人は指定しませんが、出来れば力の近い人と組んでくれた方がいい経験になると思いますよ？」

俺の言葉を聞いて、徐々に二人組が出来て行く。
そして4組のチームが出来た時残っているのはタバサ嬢だけだった。

「あぁ奇数でしたね……ならタバサ嬢は僕と組みましょうか」
「分かった」
「それでは確り距離を取ったら、各自始めてください。
見学している人達も巻き込まれないように気をつけてくださいね？」

そうして中庭に散らばっていく生徒達。
そしてこの場に残ったのはルイズ嬢、キュルケと他数人である。
因みにギーシュはモンモンのところに迷わず行った。

「さぁてどっちが最初に攻撃側にしますか？」
「先攻」

どうやらタバサ嬢が先攻らしい。
なら俺が最初守りか。

「……本気でいく」
「それはちょっと……」
「あんたの本気なんて兄様に掛かれば簡単に「少し黙っときなさい」何よ！！」
「タバサは水と風のトライアングルクラスなのよ……だから二人の集中を削ぐようなことを言うのはやめなさい」
「え？」

俺が嫌がっているのも聞かずにタバサ嬢は詠唱を開始した。
ルイズとキュルケの声が聞こえたが、それどころじゃない。
気を抜いたら容易く壁を破られそうだ。

「（よりによってトライアングルスペルかよ）スパイラル・シールド！」
「ウィンディ・アイシクル」

タバサ嬢が本気で放った無数の氷の矢は、俺の水の壁に向かって飛んでいく。

しかしそんな簡単に突破させない？

「なにあれ？！　タバサの魔法が外側に逸らされていく……」
「流石兄様！……でもなんであんな状態になってるの？」

タバサ嬢にも見せたことないから、少し目を見開いてるな。
さてと、そろそろ答え合わせと行きますか。

「タバサ嬢、このまま撃っててもあんまり意味ないよ？
そこら辺で一回止めない？
止めてくれたらこの壁の説明「分かった止める」するよ。」

……興味津々みたいだね。
まぁ他の二人も近づいてきたけど、ついでに説明しとくか。

「それじゃあ説明しようか。
とりあえずあれは簡単に言うとウォーター・シールドの改造魔法なんだ。
制御が大変だから一応トライアングルスペルになるのかな？」
「あれがウォーター・シールド！？
そんなはずないじゃない！
なんで唯の水の壁で氷の矢を防げるのよ！」
「だから改造っていってるのに……（それに水に圧を掛けた状態で受ければ何本かは防げるんだけど）」
「どんな改造？」

タバサ嬢は直球だな。
まぁその方が話しやすいんだけどね。

「簡単なことだよ。
遠くから見てたからわかんなかっただろうけど、あのウォーター・シールドは前方が若干球面になっている上に、前面の中心から外側に向けて水が高速で流れ続けているんだ。
外側に向けて流れた水も壁の内部を通って循環しているから水はあまり使わないんだけど、欠点としては前面からの攻撃しか防げないことかな？」
「十分でしょ……」
「あれは私にも使える？」

やっぱりそうなるかぁ……まぁ問題ないか。

「大丈夫だと思うよ？
今度教える」
「分かった、待ってる。」
「そこ！！　二人だけの空気になるんじゃないわよ！」
「いいじゃない、そんなだから胸も大きくならないのよ」
「むむむ、胸は関係ないじゃない！！」

なんかいきなり賑やかになったけど、今授業中なんだけどなぁ。
とりあえず他の生徒達も大丈夫そうだし、しばらく放っておいてあ

げるか。
あれもコミュニケーションの一種だしな。
タバサ嬢もなんか考えているみたいだし、俺はここから他の生徒たちのことを見ることにしよう。

第８０話　水魔法演習（後書き）

原作キャラを上手く表現できているだろうか……

外伝　レッドの評価（前書き）

何となく入れてみたw

外伝　レッドの評価

とある日の自由時間。
生徒たちは次の授業までの時間を、雑談することで過ごしていた。

「タバサ、最近貴方レッド先生といること多くない？」
「……気のせい。」
「いや、一緒にいるじゃ「気のせい。」……そうね。」

二人が話していると、手洗いに行っていたルイズが教室に戻ってきた。

「レッド先生と言えば、あの人ギトー先生に勝ったのよね……。
あれでもスクウェアクラスなのに。
この学院の中で一番強いのって結局誰なのかしら？」
「多分学院長。」「レッド兄様じゃない？」

サラッと入ってきたルイズ。
なんか二人の視線が微妙に冷めている。

「なによ？」
「あんた本当にレッド先生好きね……何でレッド先生が最強だと思うの？」
「だって二つの属性のトライアングルクラスの上に、実戦経験もあ

って、近接戦闘も出来るのよ？
オールラウンダーじゃない。」
「まぁ確かにそれを聞くと凄く強そうだけど、タバサは何で学院長？」
「経験の多さと確か学院長はスクウェアクラスだったはず。」
「へぇ！あの覗きが趣味のお爺さんがスクウェアクラスだったなんて知らなかったわ。
でもそれぐらいじゃないと学院長には成れないでしょ。」
「さっきから聞き役になってるけど、そう言うツェルプストーは誰だと思うのよ？」
「私？私はコルベール先生かしらね？
やっぱり戦闘向きなのは火だと思うわ。
それに炎蛇と言うぐらいだからきっと攻撃特化のメイジなはずなのよ。
まぁ今はなんか変なもの作っている唯のツルベールだけど……。」

キュルケの予想は確かに正しい。
しかし最強はやはりレッドだろう。
まぁ手段を選ばなければという条件がつくが……。
魔法だけならオスマンは謎が多すぎるが実力者であるのは確かだろう。
ギトーだってスクウェア、慢心がなければ決して弱い男ではない。
しかしギトーはコルベールに勝てないだろう。
コルベールは戦闘経験が多すぎる。
魔法だけならレッドもコルベールには勝てないだろう。
シュヴルーズ？あぁそんな先生もいたなぁ。

「コルベール先生はないわね。」「保留。」

「そうかしら……。
タバサは保留なのね。」
「まだ実力の片鱗が見えないから保留。」
「それじゃあ一番授業が面白い先生は誰かしら？」
「レッド兄様。」「レッド先生。」
「やっぱりこれは一致するのね……。」
「寧ろ他の授業が残念。」

確かにこの世界において、コルベールは時代を先取りしすぎている。
故に普通の人には理解されないだろう。
恐らくレッドとサイトがいなければこの学院に理解者は出てこないほどに……。
シュヴルーズの授業は良くも悪くも教科書通り。
偶に言う「私は所詮トライアングルですから」っていうセリフにイラっとしている生徒も何人かいる。
ギトー？そんな先生はおりません。
っていうか何であの人教師に成れたんだろう？
生徒に向けて魔法放つとか……抗議が来ても可笑しくないんだけど。

「あぁ、それは確かにあるかも。」
「特にギトー先生の授業は酷い。」
「あれは確かに酷いわね。
それにレッド先生の二つ名ってギトー先生が負けた腹いせに広めたっていう噂よ。」
「あの泥水って言う二つ名あの先生発信だったんだ……兄様結構気にしてるんだけど。
っていうか前いつか仕返ししてやるって言ってたんだけど。」
「それはしょうがない。

二つ名はそうそう変わらない。」
「裏でこそこそ嫌がらせする人なんて、私嫌いだわ。」

いやいやそれを好きって言う人は、そうそういないと思いますよキュルケさん。

「じゃああんた、どんな人が好きなのよ。」
「私の好み？そ・れ・は、私のハートに火を灯してくれる人！
そう言う貴方はどうなのよ？」
「私は……肝心な時に守ってくれる人かな？」
「そんな物語の主人公の様な人なんていないわよ。」
「（私にはいたのよ。）私のことは良いじゃない！
まだ聞いてない子がいるでしょう！」
「……それもそうね。
タバサ、次は貴方の番よ？」
「……考えたことない。」
「へ？」「え？」
「特に考えたことない。」
「ウソでしょ？！生まれてから今まで全く考えたことがないっていうの？」
「……（コクリ）。」

まぁしょうがないよね。
タバサはそれどころじゃないだろうし……。

「驚いたわね……まぁでもあり得ない訳でもないし、無理に好きな

人を作るのも可笑しいし、貴方はゆっくり見つけていくのがいいのかもしれないわね。」
「でも兄様は駄目よ？！
あんたたちにあげないからね！！」
「あらぁ？何でそんなに必死なのかしら？」
「ひ、必死になんかなっていないわ。
ただちぃ姉様が……。」
「でもレッド先生は独身よねぇ、なら別に私がアプローチ掛けてもいいんじゃなくって？」
「百歩譲ってタバサがアプローチ掛けるのは……嫌だけどいいわよ。
（あり得ないでしょうし。）
でもツェルプストー！！あんたは絶対駄目！！」

ここからまたしばらくヴァリエール家とツェルプストー家の因縁関係の話が延々と話されるわけだが、授業の間の休み時間というものは定められているので……。

「皆さん席についてください。
これから火の授業を始めますよ。
ミス・ツェルプストーとミス・ヴァリエールも席についてください。
」

この声を合図に二人はほぼ同時にそっぽを向いて席へと座った。

これはとある日常の出来事である。

外伝　レッドの評価（後書き）

ノリは大事だと思う。
……正直結構外伝のネタは考えているんだけど、なんかハッチャケちゃいそうなんだよね。
ギトーとの決闘のＩＦとかね……最初ポケモン装備全開でいこうとしてたからｗ

第８１話　火竜装備到着（前書き）

もうそろそろ原作入りしようかな。

第８１話　火竜装備到着

ある日授業を終えて部屋に帰ると、部屋の前に荷物が立て懸けてあった。

「ん？メモが……，部屋にいらっしゃらなかったのでここに置いておきます　ｂｙロングビル－。」

良く盗られなかったな……まぁ中身何か分からないし、あくまで狙いは宝物庫だったから目立つようなことは控えてるのか？
っていうかなんなんだこれ？
微妙に重いんだけど……。
俺は部屋に入って、早速荷物を開けてみることにした。

「よいしょっと！
え～っと何々？
あぁ防具屋さんに頼んだやつか。」

そりゃ重いわな。
靴と手袋に鉄板入ってるし、ローブ自体も特注だからなぁ。
ロングビルさん大変だったかな？
今度お礼言っておこう。
そんなことを考えていると、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「誰だ？　開いてるよ～」

ドアを開いて入ってきたのはタバサ嬢とキュルケだった。
まぁ偶に話や授業のこと聞きに来るから、珍しくもないんだけど今日は何しにきたのかな？

「こんばんわ。
今日は何を聞きに来たのかな？」
「「こんばんわ」」
「今日は風の噂の真偽を確かめに来たんですけど……お忙しかったみたいね？」
「ん？　あぁこれのこと？」

キュルケの視線をたどると、俺が開け掛けの荷物が目に入った。
まだ中身出してなかったなぁ。

「これは僕が注文していたローブ各種だよ。
ちょっといい素材が手に入ったから加工してもらったんだ」
「何々、面白そうじゃない！
見せて！」
「……気になる」

俺も中身気になってたし、出してみるか。
そうして箱から取り出したローブは俺の想像を右斜め上に突き進んだ。

「これは……凄いな。（色んな意味で）」
「何これ！！　すっごくカッコいいじゃない！！」
「……」

俺の想像では黒主軸で少し赤いラインが入ってる程度かなぁって思ったら、黒主軸位しか予想通りじゃない。
黒いローブの所々に赤く加工された火竜の牙や爪がついていて、左右の二の腕の部分に火竜の頭部を模した刺繍が施されており、その刺繍の竜の牙は本物の牙が使われている。
……これ目立ち過ぎるだろ。
タバサ嬢はこの明らかに隠密性が皆無のローブをジッと見ている。

「ローブがこれってことは……靴と手袋は……」

俺は箱の中から二つを取り出してみると、やっぱりそこには何処のRPGの装備だよこれっていうものが出てきた。
どちらも黒主軸になっているんだけど、所々に竜を模した何かがある。
手袋……っていうか手甲の手の甲の部分には竜の手を模した彫り物があり、拳の部分に爪がくっ付いていてメリケンサックみたくなっている。
靴の先端には短いけど三本の爪がくっついているし、脹脛の部分まで竜の鱗に見えるように加工された爪や牙が……これ全部付けたら厨二病っぽいかも。

「それにしても、どれも最高級品じゃない……もしかしてあの噂はやっぱりレッドなの？」
「そう言えば僕の部屋に来た理由が、噂の真偽がどうとか言ってたね。
どんな噂なんだい？」
「ゴーレムを連れた若いメイジが、仲間と一緒に火竜の成体を六頭も倒したって言う話」

……明らかに俺とボガード親子のことだな。
でも誰か見てたのか？
いや……馬車の中にあった火竜の首六本を町を通った時に見られた可能性が高いな。

「いや、違うよ？」
「でもこのローブに着いている装飾……火竜の物じゃないの？」
「僕は父さんと防具屋に行った時に、いい素材が手に入ったからって言われてこの装備一式を注文しただけ」

なんか手遅れかもしれないけど、とりあえずまだバレてないなら隠そう。
タバサがこっちをジッと見ているけど、まだ確証はないはずだ。

「そんなことより、もう数カ月もしたら二人も二年生だね。」
「そうねぇ、意外と短く感じるものね。」
「はたして二人はどんな使い魔を召喚するのかな？」

「私は珍しい子がいいわね！」「……何でもいい」
「珍しい子って言うのは君らしいけど、タバサ嬢何でもいいって……」
「何が来ても長所はある。
だから何でもいい」

まぁ二人が何を召喚するか予想っていうか、知ってるんだけどね。
まだ確定してるわけじゃないけど、多分サラマンダーと風の韻竜を召喚するのだろう。
ルイズ嬢はまだ未確定だけど、サイト君が来たらどうしようかな……。

「……ド」
「（俺としては帰るのに協力してあげたいところだけど、流石に七万人突撃に参加とかになるとヤバい）」
「…ッド」
「（なんか既にさっきみたいな噂が流れている時点で、戦争になったらお声が掛かる気がするんだよなぁ）」
「レッド」
「（俺何処で道間違えたんだろう……平穏何処行った？）痛っ！」

俺が考え事に熱中していると、後頭部を鈍器で殴られたような衝撃が走った。
後ろを振り返ってみると、タバサ嬢が杖を構えていた。

「なんか頭が痛いんだけど……。」

「そう」

あれ？なんか怒ってない？
会った当初に比べれば、表情豊かになったなぁ……まぁ僅かにだけど。

「レッドはアイガを召喚してどう思った？」
「僕？　そうだなぁ……凄く嬉しかったなぁ」
「何故？」
「（う～ん流石に捕まえたことないポケモンだったからって言うのが大きいんだけど……）僕も何が召喚されても嬉しかったんだよ。生涯の相棒になる相手が出来たら嬉しくない訳がないからね」

何とか納得してもらえたらしい。
そろそろ夜も遅くなってきたな。

「二人ともそろそろ夜も遅いから、部屋に帰った方がいいよ。変な噂がたつのもなんだしね」
「あらぁ、私は別にかまわないわよぉ？」「もう少し話を聞きたい」
「キュルケには彼氏がいっぱいいるじゃないか……彼らに恨まれるのはちょっとね。
話ならいつでもできるから、また今度ね」
「意気地無しねぇ」「残念」
「それじゃあお休み」
「「お休みなさい」」

俺は二人を廊下まで送り、部屋に戻ってきた。
それにしても……。

「この装備一式どうしようかな……よし、いざという時に着よう」

俺はとりあえず仕舞い直して、クローゼットの中に入れた。
このローブを羽織る機会がないことを願いながら、俺はそっとクローゼットを閉めた。

第８１話　火竜装備到着（後書き）

ついに届いた厨二装備
滅多に着ませんが……

第８２話　動き始める王宮（前書き）

次で原作入りかな？

第８２話　動き始める王宮

もう使い魔召喚の時期が近づいてきていた。
教師全員が学院長室に集められ、一年の進捗状況をそれぞれが報告していく。
コルベール先生が進行役となって会議は進む。

「先ずはミス・シュヴルーズ、お願いします」
「私からですか……。
とりあえずギーシュ君の成長が目覚ましいですね。
彼もラインに成り、ゴーレムの数や操作も成長しています」
「そうですか……グラモン家の子息なだけありますね」

確かに土のメイジとしてはギーシュが頭一つ分抜けている。
一年生に土メイジがあまり多くないのもあるけど、やっぱり模擬戦とかしてるから魔法の効率化が大きい。

「では次にギトー先生」
「風のメイジとしては、まだまだですね。
唯一タバサという生徒がトライアングルクラスなだけあって、いい腕ですが……やはり私程ではありません。
他に見込みがあるのはヴィリエという生徒ですが……やはりまだまだ」

いや、そんなこと聞いてない。

っていうかタバサ嬢とお前が戦ったら、多分お前負けるぞ？
やっぱり実戦経験の数は馬鹿に出来ないからな。

「では次はレッド先生」
「目覚ましい成長をしている子はモンモランシーですかね。
まだドットクラスではありますが、何か光るものを感じますね。
そして攻撃魔法に関してはタバサ嬢がやっぱり頭一つ抜けています」

やっぱり実戦で磨いた魔法は違う。
まぁ最近は防御魔法の訓練もしているんだけど、今まであまり使うことがなかったのか、攻撃魔法ほどの練度は感じられない。
モンモンは授業で習うようなことよりも、秘薬の知識に特化している。
俺も夏休みで少し学んできたけど、やっぱり彼女の知識量は半端じゃない。
偶に分からないことがあるときは、個人的に話を聞きに行く時が……
……いやこんな話はどうでもいい。

「最後に私ですが、私の発明に対する生徒たちの反応が悪いのが気になりますけど、皆さん頑張っていますね。
魔法の成績的には、やはりキュルケさんが一番高いですね。
学科ではルイズさんが高いんですが……」
「あぁ彼女ですか……私の授業でも学科の成績は高いですね」
「ですが如何に学科が良くても、コモンスペルしか使えないなんて落ちこぼ「ギトー先生」フン」
「彼女に関しては今後に期待しましょう。
爆発と言う二つ名に恥じない爆発を起こすことが出来るのですから、

いつか頭角を現すでしょう」

やっぱりギトーとは分かりあえそうにないな……。
っていうかコルベール先生も大変だな。
学園主任的な立場だから、まとめ役しないといけない。
故にギトーの発言のフォローもしなければ駄目。
……俺には出来そうにない。
だってギトーも俺のこと気に入らないみたいだし、今も睨んでる。

「なんにせよ以上が進捗状況に成ります。
学院長何かありますか？」
「ん？　うむ、順調のようでなにより」

学院長……話聞いてなかったな？
今学院長の使い魔モートソグニルが足元を走っていったから、覗きでもしてたんだろう。
……後でミス・ロングビルに話しておこう。

「それでは次に使い魔召喚の儀について話し合いたいと思います。
先ず誰が立ちあうかですが……」

コルベール先生は教師の顔を一人一人見渡していく。
シュヴルーズは引き攣った笑顔……見た目キモい使い魔出たりすることもあるしな。
ギトーはそっぽを向いて腕を組んでいる。

俺は学院長の奇行を見ていた。
いや、だって若干上を見ながらニヤニヤしている爺がいれば気になるでしょ？
コルベール先生は深くため息を一回ついて、学院長の方を見た。

「使い魔召喚の儀は私が監督することにします。
いいですね、学院長」
「ふぉ？！　いいんじゃないかの？」
「それではそう言うことで」

その後は各自の近況状況やらを報告する時間になり、解散するまでそれほど時間は掛からなかった。
俺も他の先生達の様に部屋を出ようとすると、学院長が俺を呼びとめた。

「えっとなんでしょうか？」
「いやの？　お主ボガード領で火竜倒したじゃろ？」
「（うわぁ……嫌な予感がする。
とりあえず惚けとこう。）人違いじゃないですか？」
「ふむ……人位の大きさの岩の７つ目があるゴーレム、ボガード家と懇意の土属性魔法が使える若いメイジ……それがお主ではないと？」
「……」
「まぁ、いいのじゃが。
一応伝えておこうと思っての」
「……何をでしょうか？」
「王宮がそのメイジを探しておっての？

どうやらシュバリエの称号を与えたいとのことらしい」

うわぁ……いらないわぁ。
って言うかやっぱり目を付けられたか。
もし姫がルイズ嬢に俺のことを聞いていたら……ヤバいな。
まぁ直接俺に召集が掛からないから、それは無いんだろうけど、ヤバいことには変わりない。
とりあえず自分からバラす必要はないだろう。

「そんな名誉なことを避けるなんて、そのメイジには余程の事情があるんでしょうね。
もしそのメイジがここにいたら、きっと王宮には自分のことを知らせないでくれと頼むのでしょうね」
「そうかの……お主がそう言うのならば、そう言うことにしておこう。
話はこれで終わりじゃ」
「そうですか、それじゃあ失礼しました」
「うむ。
……しばらく目立つ行動は避けた方が無難じゃぞ？」
「……心がけます」

火竜討伐はやり過ぎだったのか？
もしかしてバジリスクの時から目を付けられていたとか？
考えても分かんないな……でも原作開始が近いし、もっと考えて行動しないとな。
もう遅いのかもしれないけど……自分に降りかかるものを少しでも少なくするために！！

第８２話　動き始める王宮（後書き）

ヤバい……ドンドンギトーが教師として最低になっていく。
まぁいっかw

でも原作かぁ……イベント早見表とかないかな？
時系列が結構分かんないんですよね。
特にタバサ外伝の辺り。

第８３話　同じ様で違う場所の異世界人（前書き）

ついに始まる原作

第８３話　同じ様で違う場所の異世界人

ついにこの時が来てしまった……。
使い魔召喚の儀。
二年への進級条件、生涯の相棒の召喚。
そして恐らく一人の青年が平和な日本からこのファンタジーな世界へと連れてこられる日。

「まだ彼が召喚されるとは決まってないけど、きっと彼なんだろうなぁ」

頑張れよサイト君。
応援しているぞ！……出来る限り巻き込まないでくれると嬉しいなぁ。

「次はミス・ツェルプストーの番ですね」
「彼女なら恐らく火竜を召喚するのじゃないかのぅ」

今は召喚の儀の真っ最中だが、その場にレッドの姿はない。
まぁ監督ではないのだから当たり前なのだが、学院長室で学院長と一緒にその場を覗いていた。

「やっぱり色んな使い魔がいますね」
「そうじゃな。
毎年見ているが、皆個性があって面白い」

そんな話をしている間にキュルケの召喚が終わり、彼女の前にはサラマンダーがいた。
ここは変わらないか……。

「火竜じゃなかったけど、大きなサラマンダーですね……彼女にピッタリだ」
「お主が倒した火竜の成体よりは小ぶりじゃろう？」
「何の話か分かりませんねぇ」

言質でも取りたいのか？
どうせ分かっていて言ってるんだろうけど……なんかニヤニヤしてるし。

「それにしても壮観ですね。
フクロウやジャイアントモールと言った動物たちもいれば、サラマンダーやバジリスクの幼体と言った幻獣の類もいる」
「そうじゃのう」
「おっと、次はタバサ嬢だ」
「お主の弟子４号じゃな」

やっぱり学院長は知っていたか……遠見でもされたかな？
まぁテリー達に教えてたような格闘技を使ってたわけじゃないから問題ない。

「それってテリーとアンディ入れてますね？
彼らは弟子じゃなく……なんて言えばいいのかな。
修行仲間って感じですかね？」
「彼らはお主が師匠と公言しているんじゃがの……まぁお主がそう言うならそうなんじゃろう」
「それにギーシュとタバサ嬢は、唯模擬戦や戦い方を教えているだけで授業の延長線上のことしかやってませんよ」
「そうじゃの、タバサ嬢に変わった剣を少し教えているが、昔教えていたものとは違うじゃろう。
……お主どれだけ手札隠しておるんじゃ」
「それは秘密ですね」

また話している間に召喚が終わってた。
ん？

「風竜ですね……契約を結んだのにまだ離れませんね」
「何かあったのかの？」
「タバサ嬢がビックリしてますが……」
「じゃがコルベール君が動かないということは、問題があるわけじゃないじゃろ」

韻竜ってわかって驚いたのかな？
それにしてもシルフィードって結構デカイな。
戦った火竜より少し小さいくらいか？
あれ？　あの首に巻いている布はなんだ？

「学院長、あの首に巻いている布って何か分かりますか？」
「ん？　どれどれ……大分ボロボロじゃが人の服じゃないかの？」

なんか見覚えがある気がするんだよなぁ……。
まぁ会ったことあるはずないんだけど。

「お、次はついにルイズ嬢の番だな」
「お主にとっては妹分じゃったな。
心配か？」
「いえ、信じてますから」

それに原作よりもクラスに馬鹿にされていないために、若干余裕が

ある。
コモンスペルは問題なく使えるはずだから大丈夫だ。
そんなことより何を召喚するかの方が大事だな。

「爆発特化のメイジが召喚する使い魔……どんなものを呼び出すのかのぅ」
「（本当は爆発特化じゃないんだけどね。）予想できませんね。でもきっと彼女に相応しい使い魔が出てくることでしょう」

俺と学院長は今までとは違い、ルイズ嬢が前に出た瞬間から一言も声を発さずに、ジッと見ている。
ここから，ゼロの使い魔，は始まる。
物語としての冒険活劇は面白い。
しかしここは俺にとって既に現実世界。
彼らを中心に起こる様々な出来事は油断なんて許されないものばかりだ。
俺はちゃんと状況を見ながら動かないと、あっけなく死んでしまうかもしれない。
まぁ常にツボツボを装備しているから一撃で死ぬことは余程のことがない限り大丈夫。
しかし慢心はいけない。
今の俺の立場は既に大分ヤバい位置にある。
原作キャラ達との友好関係は自業自得だが、火竜討伐の情報漏れがヤバい。
恐らく近いうちに俺の仕業と言うことがバレるだろう。
その時にしっかり自分の立ち位置を守らないと、国にいい様に使われるだろう。
それだけは駄目だ。

いざという時はゲルマニアに別人として亡命することも考えておこう。

「なんじゃと?！　平民を呼び出しおった?！」
「（やっべ、また見てなかった）……流石ルイズ嬢。
予想の斜め上を爆走しましたね」

学院長は目をひんむいて驚いている。
そして呼び出されたサイト君も目が点になっている。
ルイズ嬢はやはり、コルベール先生に再度召喚することはできないかと聞いている。
周りの生徒達も段々この状況が飲み込めてきたのか、ルイズ嬢をからかい始めた。

「ミス・ルイズが何か呟いておるの……」
「あ、キスしましたね」
「呼び出された少年は気絶してしまったようじゃな」

あぁあれって痛いんだっけ……。
まぁ一気に刺青彫るみたいな感じか？それとも焼き鏝的な感じか？
どっちにしても拷問に近いな。
それにしてもやっぱり妹分とは言え、目の前でキスされるとなんか嫌だな。

「さてと、これで全員終わった様じゃな」

「……そうですね」
「なんじゃ不機嫌そうじゃな。
ルイズ嬢の接吻が気に食わんかったのか？」
「……少しだけ」
「青春しとるのぉ」

その後は特に話すこともなく普通に解散したが、部屋に帰ってもやっぱり少しモヤモヤした。

第８３話　同じ様で違う場所の異世界人（後書き）

現場に居られないなら、覗けばいいじゃない！
原作ギーシュとの決闘の時に覗いてたなぁと思って今回こんな話にしました。

第８４話　懐かしい顔（前書き）

続き

俺はタバサが好きですが、だからと言ってすんなりは行かせません。

第８４話　懐かしい顔

その日の夜。
俺は部屋で次の日の授業の準備をしていたのだが、それは部屋に響くノックの音で中断された。

「開いてますよ？」
「……こんばんわ」
「こんばんわタバサ嬢。
何かご用でしょうか？」

どうやらノックしたのはタバサ嬢だったらしい。
でもこんな夜に一人で来るのは珍しい。
何の用だろうか？

「着いて来て」
「へ？ちょ、ちょっと待って？！」

俺の手を掴んで外へ連れ出そうとするタバサ嬢をなんとか止めると、
一旦椅子に座らせた。
何でこんなに焦ってるんだ？

「まず落ち着いて。
……落ち着いたみたいだね。

それなら改めて聞こうかな？
僕に着いてきてほしい場所ってどこ？」
「私の部屋」

こんな時間に？
なんかあったのか？

「この間の話の続き？
それならここでも「違う」……それじゃあ何があったんだ？」
「彼女が呼んでる」
「彼女？誰のこと？」
「イルククゥ」

いるくくぅ？……イルククゥ……イルククゥって俺が小さい時にあの森で倒れてた全裸の女性か？！
何でこんな場所で彼女の名前が出てくる？

「なんで彼女がこの学院に来てるんだ？
それに彼女は俺が小さい頃にあった人で、今になって呼び出される理由が分からないんだけど……」
「彼女は今日偶々ここに来た。
でも呼んで来てと頼まれた理由は分からない。
それは本人に聞いて欲しい。
だから私の部屋まで会いに来て」

何で俺の部屋に直接来ないんだろう？
まぁなんにせよ久しぶりに会ってみたいという思いもあったので、
俺はタバサ嬢の部屋へと向かうことにした。

「入って」
「それじゃあ、失礼します。」

部屋の中にはベットでゴロゴロしている青髪の女性がいた。
何しているんだこの人は……。

「藁なんかよりも全然気持ちいいのね、きゅいきゅい！」
「連れてきた」
「人間の寝床は凄いのね！！」
「……」

未だにベットの上でゴロゴロ転がっている彼女は横に立って杖を振り上げているタバサ嬢に気付いていないようだ。
あ、振り下ろした。

「（ゴンッ）イッ！？　痛いのねーーーーーーーーーー！！
いきなり何するのよ！」
「レッド、連れてきた」

タバサ嬢が俺の方を指さして、イルククゥはゆっくりと俺の方へと視線を動かしていく。
それにしてもこの人あの頃から歳とったのか？
全く変化してない気がするんだけど……。
そんなことを考えている内に、彼女の視線は確りと俺を捉えていた。
そして徐々に彼女の表情が笑顔へと変わっていく。

「レッド……レッドーーーーーーーー！！」
「うわっ！！」

ベットの上から勢いよく俺に飛びかかったイルククゥを、身体全体で受け止めながら転ばない様に踏ん張った。
最初は「いきなり何をするんだ？！」って言いたかったんだけど、俺の首に腕を回しながら胸元に顔を埋めて本当に嬉しそうにしている顔を見ると、注意する気が失せた。

「本当に久しぶりなのねーーーーーーー！！」
「あ、あぁそうだね。
それにしても行き成り学院に来たからビックリしたよ」
「私としても来る予定はなかったんだけど、目の前に鏡が出てきて、その鏡を潜ったらここに着いたのね！

あと一寸でお肉にありつけたのに……るーるー」
「鏡を潜った？」
「そうなのね！　鏡を潜ったらそこにおねえさまがいて、おねえさまとキスして契約結んだのね。」

そういってイルククゥはタバサ嬢を指さした。
タバサ嬢は軽く目を押さえながら、少し俯いた。
……鏡を潜って今日タバサとキスをして契約を結んだ？
ということは、シルフィード＝イルククゥ？
そうなのか？
やっぱり大まかなイベントしか覚えてないなぁ。

「彼女が私の使い魔」
「でも彼女は人間……」
「私は人間じゃないのね！　イルククゥなのね！」
「いや、そう言うことを聞いてるんじゃなくてね？」
「彼女は風の韻竜。
今は人間に化けているに過ぎない」

タバサ嬢は少し覚悟を決めて俺に風の韻竜であることをバラした。
……イルククゥおしゃべりだからいつか俺に話しかけてただろうしなぁ。
そういえばそんな能力あったなぁ。
でもイルククゥって言う名前は覚えていなかった……，タバサの使い魔はシルフィードだ，って覚えてたから、その名前で連想できなかった。

「そうだったのか……」
「彼女のことは秘密。
普段は喋らないように言ってるから、貴方も話さないで」
「あぁ、分かった」

目立ちたくない気持ちは俺も分かるから、その願いには答えよう。

「ところでイルククゥ、君は何で僕を呼んだんだ？」
「久しぶりに会いたかったのね！
それにあの時のお礼をまだしてなかったのね！」
「あの時？」
「あぁ彼女がドリュウズ領の森で傷を負って倒れてたところを介抱したんだよ」
「火竜の縄張りに入ってしまった時に後ろから引っ掻かれて、危うく死んじゃうところだったのをレッドが直してくれたの」
「大怪我を小さな子供がその場で治した？
……どうやってやったの！？」

タバサ嬢は急に俺の胸倉を掴んで自分に引き寄せようとしたが、体格や体重的に無理があったために自身が近づく形になった。
しかしそんなことお構いなしに、タバサ嬢は俺をしっかりと見つめている。
いや、しっかりと言うより鬼気迫る感じがする。

「それは……話せない」

「何故！！」
「これを話してもし、他の人に知られると困るからだよ」
「それでも……絶対に話してもらう！」
「きゅい！？」

タバサ嬢は俺を突き飛ばして、俺に向かって杖を構えた。
はぁ……どうしようかな。
タバサ嬢がここまで聞きたがっている理由は恐らく、母親の治療だろう。
エルフの薬で心を壊された母親を治す方法は、エルフの薬しかない
……しかしそれはあくまでこの世界のルールだ。
ポケモンの技を使えば治る可能性はゼロではない。
しかしそれがジョセフにバレたら？
彼の興味が俺に向くかもしれない。
それは非常に困る。
それに確かにタバサ嬢の助けになってあげたいが……この状況は気に入らない。

「これは……脅しかな？」
「……そう」
「お姉さま止めるのね！！　こんなこと良くないのね！！」

確かに自分の母親を助けたいという気持ちは素晴らしいと思う。
しかしそのために脅しという方法を取ったのは、悪手だな。
俺の協力する気が若干ではあるが薄れた。
そしてこの距離なら俺は魔法を使われるより早く、タバサ嬢の首をへし折ることが出来る。

しかしタバサ嬢も俺の秘密が他者にバレる事でどの様な未来が生まれるのか予想がつかないから、焦ってこんな方法を取ったのかもしれない。
ならば情報を小出しすることで反応を見て、その対応で判断しよう。
最悪ジョゼフ、シェフィールド、ビダーシャルと戦うというデメリットを無視してでも、彼女に手を貸す価値があるかを……。

第８４話　懐かしい顔（後書き）

ここで主人公は人生の岐路に立ちます……これから先もありますがw

レッド君はタバサ嬢を気に入っていますが、だからと言って自身を危険に晒してまで協力するかと言われれば迷うレベルです。

因みに両親相手なら迷わず助けますし、カトレアさんやモンモランシ家ならある程度力を貸します（ポケモンのこと知ってますし）。

ルイズは現状サイト君がいるので、基本サイト君に任せます。

……まぁ妹分なので目の前で本当に危なかったら情に流されるでしょうがw

ギーシュとタバサは弟子の様な存在ですので基本は助けますが、今回の様に行動を起こすことで自身に途轍もない被害が来る可能性がある場合は状況次第で断る可能性もあります。

第８５話　葛藤（前書き）

今回は色々迷いながら書きました。
未だに自分でもこれでいいのか迷ってます。
でも……タバサが……
俺の葛藤の理由は本編を読んでくれば分かると思います。

第８５話　葛藤

とりあえずまずこの状況をどうにかするとしますか。
俺は右手を少し動かして、タバサ嬢の視線を右手に送らせる。
そしてその隙に左足で杖を蹴り飛ばす。

「よっと！」
「！？」

これで俺に対する脅しは意味を成さない。
蹴り飛ばした杖も壁に当たって、俺の足元にある。
俺は杖を軽く踏んで、自分の杖を抜く。

「これで状況は逆転した……」
「くっ！」
「レッドも止めるのね！　似合わないのね！！」

まぁ俺としてもやりたくてやっているわけじゃないんだけど……聞かなきゃならないことがあるから、もう少しだけ我慢してくれ。

「俺の近接戦の腕を忘れてたのか？
それとも間合いを間違えたのか？
どっちにしろ訓練の強化が必要だな」
「どうするつもり？」

「どうするも何も、どうしてほしい？」
「……」

正直ここからどう行動するかあんまり考えてなかったんだよね。
とりあえず説教タイムだな。

「はぁ……先ず少し話をしようか。」
「話？」
「説教みたいなもんだ。
先ず幾ら気になる情報があったとしても、冷静さを失うな。
急ぎじゃない限り脅迫や拷問は序盤にすることじゃない。
相手が自分より強いなら余計にな」
「……」
「次に交渉の際は相手へのメリットを教えることで気を引け。
交渉の初めは感情に訴えるか、メリットで相手の気を引かなければ、
突っぱねられることもある」
「……」
「最後に相手の状況も考えろ。
そうしなければ相手にとってのメリットを知るのは難しい。
それ以前に交渉自体が成り立たない場合もある」
「……それで」
「ん？」
「それで……貴方にとってのメリットは何？」

直接聞くか……愚策だな。
悪人なら吹っかけてくるな。
まぁ、いきなりのことだししょうがないか。

「お前が知りたいことがもし他の人にバレたら、もしかしたら俺は国から追われるかもしれない」
「え？」

流石にそこまで予想してなかったか？
まぁそんな人間が教師やってるとは思わんわな。
……コルベール先生も俺とは追われる理由が違うが、際どいところだな。

「知ってるかもしれないけど、どの国にも黒い部分は存在する。そこに俺の存在を知られると、面倒なことになる。両親に迷惑かけるのは嫌だしな」
「……そう。」

少し落ち着いたかな？
そして俺が両親の話をしたら、目に見えて顔を歪めた。
イルククゥも少し安心したようだ。
さぁここからだ。
ここからが本番！

「ところでお前は何で、怪我を治す方法を知りたがる？」
「それは……」
「母親があったという理不尽な目と言うのが関係するのか？」
「覚えて……いたの？」

覚えてたって言うか……ある意味記憶にあったから覚えてたに入るのか？
まぁそんなことはどうでもいい。

「私の母様は薬を盛られて心が壊れてしまった。
今まで色々な薬で治そうとしてみたけど、どれも効果がない……」
「そっか……」
「だから……私に出来ることなら何でもする！
だから母様を、私の母様を助けて！」
「私からもお願いするのね！
お姉さまのお母さんを助けてあげて！」

どうする……どうするどうするどうする！
ふと管理者の言葉を思い出した。
’自由に生きろ’
何故このタイミングでこの言葉を思い出す……。
俺は今まで自由に生きてきたはずだ。
平穏に暮らしたいという願いを持って、その願いが叶う様に頑張った。
しかし結局王宮には目を付けられ始めている。
このままではどっちにしろ戦争に巻き込まれずに暮らすなんて無理だろう。
なら一人の人を助ける位、大して問題ないんじゃないか？
……ははは、なんだよ俺自身助けたがってるんじゃないか。
何が判断するだよ……答えは決まってたようなもんじゃねぇか！

「詳しくは話せないが、確かに俺ならその症状を治すことが出来るかもしれない」
「なら！！」
「ただし条件がある」
「……それはなに？！」
「俺が治したということを人に話さないでくれ。
誰にもだ。
それが受け入れられない場合はこの話はなかったことにしてもらう」
「わかった」
「それと１００％治せると決まったわけではないことは覚えておいてほしい。
一応色々と試してみるが……」
「それでもいい！　母様が良くなる可能性があるのなら……それだけで……」

その場で静かに泣き始めたタバサを、イルククゥが抱きしめて頭を撫でていると余程疲れたのかいつの間にか眠ってしまっていた。

「お姉さま寝ちゃったのね……きゅいきゅい」
「あぁそうだな」
「それにしてもレッド……口調変わってるのね」
「これか？　普段は基本猫かぶってるんだよ」
「猫なんか何処にもいないのね？」
「例えだよ例え。
それにしてもタバサが呼びだしたのが俺の知り合いとは……予想外だよ」
「私もビックリしたのね！

そう言えばあの時のお礼まだしてなかったのね！！」
「気にしなくてもいいよ。
俺も忘れてたし」
「それじゃ私の気が済まないのね！
私のできることなら何でもするのね！！」
「それじゃあ何時か必要になるときまで取っておくことにするよ」

俺はそう言って床にあるタバサの杖をイルククゥに渡し、部屋を出ようとした。

「レッド！私はシルフィって呼んでほしいのね！
……お姉さま以外に人がいなかったらイルククゥって呼んでほしいかも？」
「なんだそれ？でもわかったよ。
人前ではシルフィって呼ぶことにするよ。
それじゃあ、お休みシルフィ。
タバサをよろしくな」
「任せるのね！おねえさまは私が守るから！
レッドは大船に乗ったつもりでいてほしいのね、きゅいきゅい！」

俺はシルフィに苦笑いを返しながら、タバサの部屋を出た。

第８５話　葛藤（後書き）

まァ予想はついていたでしょうが、手を貸すことにしました。
無理がある？すみません、タバサ外伝書くために甘く見てください！！

小説書くのって大変だな。
オリジナル小説ってもっと大変なんだろうなぁ。
とりあえず次はサイトとの出会いです。

第８６話　ファーストコンタクト（前書き）

やっぱり……前回の話は受け入れられにくいか？
タバサ外伝に関わらせるためにこう言ったイベントが必要だったので、ゴリ押してしまった感がありますが、決して主人公が両親を軽く見ているというわけではありません。
両親に対する信頼と最終手段を考えているので……今回は冒険しました。

第８６話　ファーストコンタクト

朝マルトーさんの所に行く途中、そこには俺の妹分と昨日呼び出された異世界の青年がいた。
あぁ原作始まったんだなぁって改めて実感させてくれる光景だな。
とりあえず周りからの視線を集めまくっている二人に声を掛けるために俺は歩きだした。

「どうしたんだ？」
「兄様！！　こいつ、私が分けてあげた朝食を断ったのよ！！」
「だってコイツ床に皿を置いてそこで食えって言うんだぜ？
こんなに席が余ってるって言うのに酷いと思わないか？」

あぁそっか……床においてある皿はそう言うことか……。
サイト君はまだ貴族が平民に対してどの様な対応をするか分かってないからなぁ。
とりあえず厨房に連れていくか。

「ルイズ嬢、少し彼を借りてもいいかい？」
「何処でも連れて行って！！」
「それじゃあ君、少し着いて来てくれるかな？」
「あ、はい」

原作でも厨房のお世話になってたから大丈夫だろ。
俺は元々それが目的だったしな。

「ところでアンタ、アイツに兄様とか呼ばれてたけど……兄妹の躾位しっかりしてくれよ」
「何かあったのかい？」
「そうなんだよ！いきなりこんなとこに呼び出して、夜は藁で眠らせる。
そしてさっきのこと……もうなんなんだよ！」
「ルイズ嬢も大変なんだよ。
言っちゃ悪いかもしれないけど、人間を召喚するなんて思わなかっただろうしね。
それに貴族は平民を下に見るのが普通なんだよ。
君は貴族ではないだろ？」
「確かに違うけど……」
「ルイズ嬢はいい子だから、感情的にならないで言えば聞いてくれると思うよ？
とりあえず食事に関しては今から行くところでもらえるはずだから勘弁してくれ」

そうして俺とサイト君は厨房の中へと入って行った。
そこはいつも通りに忙しそうに料理を作るコックたちが一生懸命働いている。

「マルトーさん！　この子に賄いを分けてあげてくれないか？」
「おぉ！誰かと思えば我らの恩師じゃねぇか！」
「その呼び名は勘弁してくださいって言ってるじゃないですか」
「がっはっはっは！いいじゃねぇか！
それでどうしたって？」

「この子に賄いを分けてくれませんか？」
「おぉどうしたんだ坊主！
見かけねぇ顔だな……」
「彼は昨日ルイズ嬢に召喚された使い魔ですよ」
「ほぉ、あの嬢ちゃんか……相変わらず変わってんなぁ。
それでなんで賄いを分けてほしいんだ？」
「流石に食堂で堂々と食事すると他の生徒が騒ぎだしそうなので……」
「それもそうだな……よし！飯はここで食ってきな！
最高に美味い飯食わしてやるぜ？」
「サンキュー……えーっと？」
「マルトーだ！ここのコック長やってるマルトーだ」
「サンキュー、マルトーさん！
俺の名前は才人、平賀才人だ」

これでサイト君の食事問題は解決したな。
それじゃあついでにお仕事でもしますか！

「マルトーさんいつも通りここにある壊れた調理器具直しておくよ？」
「何時もすまねぇな、レッド！」
「いつも美味しい食事を御馳走になってますからね」
「今度いい酒御馳走するぜ！」
「それは楽しみだ」
「シエスタ！サイトに飯持ってきてくれ！」
「はい、今持っていきます」

そんな声を聞きながら俺は厨房を後にした。

今日の授業は後ろに使い魔達がいる。
やっぱりこうやってみると壮観だな……。

「今日も授業を始めようと思うけど、その前に皆さん使い魔召喚の儀お疲れさまでした。
皆さん一人一人個性的な子を呼びだしたようですね」

俺の言葉で喜ぶ子もいれば、顔を微妙に顰める顔もあった。
一番顔を顰めたのはルイズ嬢だった。

「，爆発，のルイズ！お前爆発で脅してその平民連れてきたんじゃないだろうな！」
「黙りなさいよ，風邪っぴき，のマリコルヌ！」

「ぼ、僕は，風上，のマルコリヌだ！！」

あれ？この展開俺デジャブなんだけど……。
まぁ流石に口に土詰めるのはどうかと思うから、注意だけにしておくか。

「二人とも静かにしなさい。
授業中なので、邪魔になりますよ？」
「，爆発，の癖に生意気な！」
「，風邪っぴき，は部屋で寝てなさいよ！！」
「……コンデンセイション」

俺は二人の頭上に水を出しぶっ掛けた。

「キャッ！」「うわっ！」
「頭は冷えたかな？
とりあえず授業を続けさせてもらうよ。」

二人は一旦視線を交わして、若干膨れながら顔を背けた。

「今日は水に関する幻獣について話していこうと思う。
このクラスにも何人か水に関する使い魔を召喚した人がいるみたいですね。」

俺は教室を見渡した。
モンモンも原作通り凄い色の蛙を召喚したようだ。
……あれ毒ありそうだよね。

「とりあえずここにいる水の使い魔の特性から行きますか。」

俺はそれから幻獣の特性やもし敵対した場合の対抗策等を説明していった。
途中俺の使い魔に関して質問してきた子がいたが、まぁゴーレムとさして変わらないと言っておいた。
その言葉を聞いて「え！？」と声を上げたのが五人いたが……。
それに関してはスルーすることにした。
時折サイト君がルイズに質問して、その度ルイズ嬢が苛立つという現象が起こってたけど。
あぁそう言えば……ギーシュとサイトの決闘ってどうなるんだろうか？
でもギーシュは浮気なんかしないし……でもあれがないとサイトがガンダールヴって言うことに気が付かないかもしれない。
どうしたもんか……。

第８６話　ファーストコンタクト（後書き）

修正

第87話　突如ガリアへ（前書き）

さぁここから先書く自信がないぜw

第87話　突如ガリアへ

突如俺の部屋のドアを乱暴に開けたのは、シルフィ（人間版）だった。

「レッド、ついて来てほしいのね！！」
「はぁ？　俺は授業の資料を纏めないといけないから忙しいんだが……」
「いいから来るのね！」

そう言って俺を引きずりながら森まで連れこられたわけだが……何故タバサが驚いている？

「なぁタバサ」
「何？」
「何で俺はここに連れてこられたんだ？」
「……知らない」

二人でほぼ同時にシルフィの方を見たら、そこには既に竜の姿に戻った彼女がいた。
彼女もこちらの視線に気付き、こっちに近づいてきた。

「何故彼を連れてきたの？」
「レッドなら絶対お姉さまの力になってくれるのね！」

おいおい……まさかとは思うが……これ任務に行くのか？
それはヤバいだろ！
がっつりガリア領じゃねぇか！！
俺は静かにその場から去ろうとしたが、服の首元をシルフィに咥えられて防がれた。

「えっと……シルフィさん？」
「どうしたのねレッド？」
「俺少し用事を思い出して……」
「大丈夫！　きっとすぐ終わるのね！」
「いやだから、俺は何のために連れて行かれるんだ？
それにもし時間が掛かるようなら学院長に話を通さなければいけないんだけど……」

まぁ俺の授業は三日後だから問題ないって言えば問題ないのかもしれない。
でもやっぱりガリア領に行くのはリスキーすぎる。
俺が困っていることが分かったのか、タバサがシルフィの頭を杖で叩いた。

「きゅい！？　痛いのね！！　るーるー」
「困ってる」
「でもお姉さまもレッドが一緒だと嬉しいでしょ？」
「それは……」

タバサ嬢がこちらを見る。
そして無言でシルフィの頭を叩く。

「痛い！　何で叩くのね？！」
「うるさい」

はぁ……しょうがないな。
でも流石に変装ぐらいはさせてもらおう。

「はぁ……一回部屋に戻らせてくれ。
学院長に報告して、変装してくるから……。
あと何かするんなら俺はあんまり手伝わないからな。
それでもいいか？」
「いいの？」
「よくないけど……シルフィが俺を呼んでくるってことは危ない可能性があるんだろ？
流石に生徒を危険なところに一人では行かせられないからな」
「ごめんなさい」
「きゅい？　なんでお姉さま謝ってるのね？」

この駄竜……一回土に埋めてやろうか？
まぁまたタバサに叩かれてるからいいか。
さぁ変装はどうしようかな。

「やっぱり似合わないのね。」「……」
「うるせぇ！」

この会話もこれで四度目だ。
俺は今あの厨二装備に身を包まれている。
そして即席の仮面を作って顔に付けている。
仮面は黒の契約者の主人公が付けていたあれを意識した単調なものだ。
これで顔がバレる事はない。

「とりあえずなんか依頼を受けに行くのは分かった。
でも俺はそこまでは行けないぞ？」
「きゅい！？　何でなのね！　ここまで来ていきなり何なのね！！」
「いや、少しでもバレる可能性減らしたいんだよ。
だから途中で下して、任務受けたら拾って行ってくれ」
「む～……分かったのね」

多分イザベラとやらに任務を受けに行くんだろう。
もし不敬だから仮面を取れとか言われたら困るしな……。

流石にここは譲れない。

「もうそろそろ着く」
「そっか、ならここら辺で下してくれ」
「分かったのね。
後で迎えに来るからここら辺にいてね、きゅいきゅい！」

シルフィは静かに地面に降り立って、俺を下ろすとタバサ嬢と一緒に飛び立っていった。
俺は二人を見送って、近くにある街へと入っていった。
流石にこの装備は目立つようで、道行く人の視線が凄く気になる。
視線を気にしない様にしながら、俺は酒場へと向かった。
一応情報収集でもしようかと思ったわけだが……入って早速後悔した。

「がっはっはっは、お前が俺に盾突くなんて１００年早いんだよ！」
「調子に乗んなよ髭野郎！！」
「なんだなんだ喧嘩か？！おいお前どっちに掛ける？」
「俺は髭に１０だ！」
「俺も髭に７だ！」
「おいおい、掛けになんねぇじゃねぇか」

なんだこの世紀末……。
関わり合いに成りたくないな。
俺はとりあえずカウンターに座って、エールを注文する。

「マスター、ここら辺で魔獣か何かを見たっていう情報知らないか？」
「……知らねぇな」
「はぁ……本当に知らないのか？」

俺はため息をつきながらエール代以外にお金を支払った。
まぁ唯で教えてもらえるとは思ってなかったからね。

「……近くの村に翼人の集団が出たって話だ。
何やら討伐隊を近々送るって話を聞いた」
「（翼人？原作イベントにあったか？）そうか、ありがとう」

俺はそう言って店を出ようとすると、野太い声が俺を呼びとめた。

「ちょっと待ちな、そこの兄ちゃん！」
「……なんだ？」

振り向いてみるとそこには、さっきまで喧嘩していた髭がいた。
どうやら禿は後ろに転がっているようだ。

「何の様だ？」
「お前さん強そうだな……俺の団員にならねぇか？」

うわぁ……厄介そうなのに絡まれた。
すっげぇ関わり合いになりたくないなぁ。

第87話　突如ガリアへ（後書き）

オリ展開を混ぜつつタバサ外伝の翼人編を進めます！
因みに主人公はタバサ外伝はあまり深く知りません。
ちょっと知識があるくらいです。

第８８話　鉄球対拳（前書き）

髭はＫＯＦのチャン・コーハンを思い浮かべてください。
黒くてもっさりした髭で、太ってます。

第８８話　鉄球対拳

「お前は俺の団員に相応しい気がする！
だから黒の鉄球団に入れ！」

うわぁ……凄く嫌だな。
背中に黒い鉄球背負っているから、こいつがリーダーなのか？
って言うよりコイツ……チャン・コーハンなんじゃないか？

「断る」
「即答とは……もう少し考えてくれてもいいんじゃねぇか？」
「断る！」
「そうか、なら力づくしかねぇな！
もし俺が勝ったら団に入れ！」
「……何で俺にこだわる」
「お前からは強い奴が発するオーラみたいなもんを感じるんだよ。
如何に胡散臭い奴とは言え、お前のオーラはホンモンだ！」

正直団に入るのは絶対遠慮するけど、コイツいい奴っぽいな。
周りの騒いでたメンツも静かに見守っている。

「その黒の鉄球団とやらは何をしているんだ？」
「俺達か？　俺達は賞金首や盗賊倒して回ってる集団よぉ！」
「強奪とか侵略とかはしないのか？」
「そんなことして何が楽しいんだよ。

賞金首の方が強くて、戦ってて面白ぇじゃねぇか！
どうだ！　入る気になったか？」
「確かに面白そうではあるけどな……断る」
「なら力づくでいくぜ！
もし俺に勝てたら、一回言うこと聞いてやるよ！」

正直要らないけど……コイツと戦ってみたい。
接近戦を実戦で試してみたい。
そんな欲求に俺は負けた。

「武器を取れ」
「アン？」
「その鉄球が武器なんだろう？
なら使え。
俺も本気でいく」

俺は最も信頼している空手の構えをとった。
すると髭は先ほどまで浮かべていた笑みを消し、背中から鉄球を取った。

「お前メイジじゃねぇのか……」
「俺はどっちもイケるタイプでな。
今回は拳一つでいくことにした」
「っは！　舐めてやがんな……後悔すんなよ！！」

髭は鎖付きの鉄球を振り回し始めた。
あれに直撃すると、俺の身体は粉砕骨折するだろう。
簡単に言えば砲丸投げ用の砲丸を五つ熔かして一つにしたものを、
振り回している様なもんだ。
頭に当たれば即死、胸に当たっても即死。
まぁ胸はこのローブがあるから大丈夫かもしれないが……。

「オラァ！！」
「フッ！」

上から振り下ろされた鉄の塊を俺はサイドステップで避け、そのまま距離を詰めようとした。
しかし髭がニヤッと笑って思いっきり鎖を引っ張ると、背後から鉄球が飛んできた。
俺は急いで回避して元の場所に戻った。

「……凄い力だな」
「あったりめぇよぉ。」
「もし当たったら死んでいたんだが？」
「オメェなら避けんだろ？」

俺は恐らく仮面の下で笑っていたはずだ。
今まで自身の格闘能力を使うことは早々なかった。
ましてや実戦なんて……俺はバトルジャンキーになったのか？
まぁ今はそんなことどうでもいい……こいつを倒そう。

「次は俺が驚かせよう」
「出来るもんならやって見やがれ！」

俺はどっしりと腰を据え、髭の正面に構えた。
髭は最初躊躇したが、俺に向かって正面から鉄球を投げ付けてきた。

「（大丈夫！俺はできる！訓練の時は出来たんだ……ここでも出来る！！）ハァッ！！」
「何！？」

今まで練習した中で使いどころが難しいネタ技の一つ、剛体術。
インパクトの瞬間に全身の関節を完全に固定化し、体を硬直させ、体重の全てを拳に乗せて放つ。
人間が打撃を放つ時、その動作で稼動する関節は数十箇所にもおよび、その全てがクッションになってしまう。
もしその打撃に必要な関節の稼動を完全に固定化したとき、人は鉄球になれる。
自分の体重が６０キロならば、６０キロの鉄球になれるという技。
俺としても練習し始めた時は出来ると思っていなかったけど、丸太で練習している内にコツが掴めてきた。
そして練習開始から3年で岩を砕くことに成功した。
前世だったら絶対無理だっただろうな……。
しかし今の俺なら、純度の低い鉄球くらいなら！！

「俺の鉄球を……砕いただと！？」

「どうする、まだ続けるか？」
「……いや俺の負けだ。
俺の出せる限りの力で打ち込んだんだ。
それを鉄球ごと打ち砕かれたらな……」
「そうか……それじゃあ俺は人を待たせてるからな」

俺はそのまま酒場を後にしようとドアに向かった。
しかし髭が俺を呼びとめた。

「おい！　命令はしないのか？！」
「あぁ……そんな話だったな。
それじゃあいつか俺が困っているときに助けてくれ」
「ハッ！　そんな約束破っちまうかも知れねぇぞ？」
「まぁその時は俺の見る目がなかったってことだ」
「……チャンだ」
「ん？」
「俺の名前だ、覚えておけ」
「そうか、俺の名前は……」

どうするか……流石に本名は不味いな。
ならこの仮面の持ち主に名前を借りますか。

「ヘイだ」
「じゃあヘイ！お前が困っているとき、俺はお前の力になろう！
困った時はこの酒場に来い。
俺達黒の鉄球団は基本的にここにいる。

なぁ同志たちよ！！」
「「「「「「「「「おおおぉぉぉぉぉぉ！！！」」」」」」」」」
「客の殆どが団員か……わかった。
もし困ったらここに来よう」
「おう！　用事なんてなくてもお前はもう俺達の仲間みたいなもんだからな！
いつでも来い！」
「あぁ！　いつかまた会おう！」

そうして今度こそ酒場を出て、タバサ達と合流するべく町の外へと歩き始めた。

第８８話　鉄球対拳（後書き）

名前はストレートに行きました。
そして初めての接近戦の本格的な実戦。
コジョンドとの肉弾戦練習は行ってましたが、実戦使用は本編初ですね。

第８９話　翼人と青年（前書き）

ふぅ……次で翼人編終了かな？

第８９話　翼人と青年

しばらく村の外で待っていると、タバサとシルフィが飛んできた。

「お待たせなのね～！」
「……遅くなった」
「いや、有意義な時間を過ごせたよ」
「「？」」
「あぁ気にしなくていいよ。
ところで依頼内容はもしかして翼人退治か？」
「何で知ってるのね、きゅいきゅい！？」
「ちょっと情報収集をね」
「依頼は、エギンハイム村の近くにあるライカ欅の森林を占領している翼人を退治すること」

やっぱりか……。
たしか翼人って魔法使えるんだよなぁ。
しかも先住魔法。
攻撃されたらどうしようかね。
退治が依頼内容だけど……とりあえず正当防衛以外は自重しよう。

「それじゃあ早速エギンハイム村に行くのね～」

シルフィはそう言って、俺を背中に乗せると村に向けて飛び始めた。

しばらく飛んでいると目的の村へと近づいてきたが、何か様子がおかしい。
一部の木が激しく揺れている。
もしかしてもう何か起こっているのか？

「タバサ、急いだ方がいいんじゃないか？」
「急いで」
「きゅい！」

タバサはシルフィの首を軽く叩き、シルフィに指示を伝える。
近づけば近づくほどはっきり分かってきた。
どうやら翼人の魔法で木の葉を刃に変えて村人に向けて飛ばしているようだ。
タバサ嬢は村人を助けるために、魔法を放った。

「エア・ストーム」
「何？！」

村人の前に巨大な竜巻が現れ、翼人が放った葉の刃を防いでいく。

そのまま竜巻は翼人の方へ向かって行き、何人かの翼人を巻き込んで行った。
村人たちは大規模な魔法戦闘を見て驚いているようだ。

「みんな止めて！」

その声が聞こえた瞬間翼人の動きが鈍った。
その隙を逃さない様にタバサは追撃しようと杖を振ろうとしたが……。

「貴族様！どうか…杖を収めてください！」

村人の青年がタバサに待ったの声を掛けた。
翼人はその隙に飛びあがって、姿を消してしまった。

「どうして止めたの？」
「そ、それは……」

二人の会話を遮る様にオジサンが話しかけてきた。

「もしかして……騎士様ですか？」
「ガリア花壇騎士団のタバサ」
「従者のヘイだ」

俺はとりあえず従者ということにしておいた。
村人は仮面を付けた上に物騒な装備をした俺を見て一瞬眉をひそめるが、直ぐにタバサに目を戻す。
そうして俺達は村に案内されて食事を御馳走になることになった。
……決してタバサの腹がなったからとかではないよ？

食事があると、案内された場所は村長の家だった。
そこには山となった料理がテーブルの上にあった。

「どうぞ騎士様！村で最も料理が上手な者に作らせた品です。
心行くまでご堪能ください！」
「……ありがとう」

そう一言言ってタバサは物凄い勢いで料理を口に詰め込んでいく。
……ハムスター？
俺も仮面の下部分を外して、食事をし始めた。

「タバサはどれが好きなんだ？」
「もぐもぐもぐ……ン」
「ハシバミ草か、渋いチョイスだな」
「ヘイは好き？」
「あぁ、好きだよ」

俺がそうタバサの方を見て返すと、タバサの頬が少しだけ赤くなった。
なんだ？　怒ったのか？
ハシバミ草取る気ないんだけどなぁ。
そんな賑やかな食事を終えて、各自に用意された部屋に向かった。

「ふぅ……なんかタバサ一人で何とかなるんじゃないかこの案件」
「そうかもしれないのね」
「ッ！？　いつの間に入ったんだ！？」
「窓からこっそり入ったのね、きゅいきゅい」
「……タバサにバレたら怒られるぞ？」
「大丈夫なのね、今お姉さまは部屋にいるのね！
ねぇレッド、折角ベットあるから、ここで寝てもいい？」
「はぁ？　じゃあ俺何処で寝ればいいんだよ？後ヘイって呼べ」
「一緒に寝ればいいのね、きゅいきゅい」
「いやいや！　それは無理だろ！」
「私はレッドの匂い好きだからいいのね！」
「だからヘイだって！後そういう問題じゃ……！？
シルフィ！話は後だ！
今タバサの部屋に翼人が入って行ったぞ！」

窓の外に翼人が見えて、そのまま翼人はタバサの部屋に入って行った。
俺は急いで仮面を付け、シルフィと即座に部屋を出て、タバサの部屋のドアを勢いよく開けた。

「大丈夫かタバサ！」「お姉さま無事？！」
「「！？」」「レ……ヘイ、シルフィ？」
「男性の方は見たことありますが、その女性は？」
「彼女はもう一人の従者。
先ほど彼の部屋に到着した」

そこには戦闘の時にタバサを止めた青年と、翼人を止めた翼人がいた。
どう言う状況だ？

「何故タバサの部屋にこの二人が？」
「僕は翼人討伐を止めてもらおうと頼みに……」
「ヨシア……いいの。
このままここにいたらまた戦闘になってしまう。
私たちは精霊の力を戦闘に使いたくないのよ……」
「そんなこと言わないでくれ！
騎士様！どうか上司の方に話を付けてくださいませんか！？」
「それは……難しい」
「なんでですか！！話をする位いいじゃないですか！！」
「落ち着いてヨシア！」

「君は命令でしか動けない人形なのか！どうしても駄目だというなら、ここであんたたちを殺せばアイーシャと……」
「調子に乗るなよお前？」

俺もまだまだ精神が幼いな。
俺は気付くと、ヨシアのことを殴り飛ばしていた。
でもコイツあまりに自分勝手すぎるだろ……。

「お前はタバサが何故お前のめちゃくちゃな要望に文句を言わないのか、考えられねぇみたいだな」
「何を？！」

俺はゆっくりとヨシアに近づいていく。
俺が追撃を加えると思ったのか、アイーシャが俺とヨシアの前に割り込んだ。

「ヨシアが心ない言葉をタバサさんに言ったのは私が謝ります。だからヨシアをこれ以上傷つけないでください」
「そうなのね！落ち着くのねヘイ！」「……落ち着く」
「……分かってるよ。
別にもう一回殴ろうと思ったわけじゃないさ。
唯胸倉掴んで立ち上がらせようとしただけだ。」

ヨシアはさっきの自分の発言がこの事態を起こしたことに後悔しているようだ。

「すいませんでした騎士様……」
「別にいい。」
「でもどうにか討伐は、中止できませんでしょうか？」
「ヨシア……」
「それは……」
「……この任務は村からの依頼だったはずだな？」
「そう」
「なら翼人が村に危害を加えないということが分かれば依頼を取り消せるだろう」

タバサは少し考えてから俺の顔をしっかりと見て、頷いた。
そんな俺達を見て、アイーシャとヨシアは抱き合って喜んだ。
それから俺達は村人と翼人の仲を取り持つ作戦を話し合った。

第８９話　翼人と青年（後書き）

あははは……これでいいのかなぁ？

色々修正

第９０話　仲違い解消計画（前書き）

翼人編御終い……と思わせて後一話ｗ

第９０話　仲違い解消計画

翌朝俺は一人で森に居た。
正直取りたくない手段だったが、思いついた策の中でこれが一番成功率が高い。

「来い、ギドラ」

三本の首、三対の翼を持つ２メートル弱の竜。
６００族の一匹サザンドラだ。

「今日呼び出した理由は頼みごとがあるんだ。
これから一時間後ぐらいにこの先にある村に飛んで来てくれないか？
そこで俺の仲間がお前のことを軽めに攻撃をする。
その攻撃を余裕といった感じで受けて、俺達の手前にりゅうのいかりを放ってくれ。
そうしたら多分翼の生えた人が攻撃してくると思う。
多分それほどダメージはないだろうけど、数発当たってから地面に落ちてくれ。
そうしたら俺が還す。
これが頼みごとなんだけど……引き受けてくれるか？
もし引き受けてもらえたら、夏休みに家に帰った時に何かしてほしいことがあったら叶えよう」
「グルルッ」
「そっか、ありがとうな。」

これが昨日の夜に俺が考えた策。
まぁ俺が何か強大な魔獣を連れてくるから、それを翼人と協力して倒してハッピーエンドという作戦が昨日出た中で一番あり得る作戦だ。

「それじゃあ時間まで穴の中に隠れてくれ」

俺はそう言って錬金でギドラの身体がすっぽり入るくらいの穴を作り出した。
ギドラは何も言わずにその穴に入ってくれた。

「ありがとうな、今度絶対お礼するから！」
「グルッ！」

ギドラは首の一本を手の様に振り、気にするなとジェスチャーして伝えてくれた。
本当に……ありがとうな。

村長宅に戻った俺はタバサ達に準備が出来たことを伝えた。

「あの……本当に大丈夫なんですか？」
「あぁ、大丈夫だ。
今は森の中で捕まえておいている」
「そうですか……」

ヨシアはやはり不安なのか、どうも落ち着かない。
アイーシャがヨシアの肩を支えている……いい伴侶だな。

「ところで何を連れてきたのね？」
「ん？あぁ飛んで探し回ってたら、見たことない竜がいたから捕まえた」
「りゅ……竜ですか！？」
「あぁ、２メイル位の大きさだけどな（攻撃力、防御力共にヤバいけど）」
「そ、そんなの倒せるんでしょうか……」

今度はアイーシャが不安そうな顔になってしまった。
まぁフォローしておくか。

「大丈夫ですよ。
一応弱らせておきましたから」
「それなら安心かも知れませんけど……」

少しは落ち着いたようだな。
それにしてもさっきからタバサが一言も話さないのが気になる。

「タバサ？」
「……」
「タバサ！！」
「ん？！　何？」
「どうしたんだ？
何か考え事か？」
「どうすれば自然に負けられるか考えてた」
「あぉ、そのことなら気にしなくても大丈夫。
竜の攻撃はあまり命中精度が良くなかったからな。
少し避けるだけで十分当たらない。
だからその余波で倒れれば問題ないだろう」
「そう……」

これで準備は完了した。
後はアイツが来てくれれば作戦は開始する。

「うわぁぁぁぁぁぁ竜が飛んできたぞーーーーーーーー！！！」
「始まったか、行くぞ！！」
「「はい」」「分かった」「分かったのね！」

「グルルルル、ガァァァァァァ！！」
「村人の人達は何か遮蔽物を盾にしてください！」
「エア・ストーム！」
「あ、あれは昨日翼人たちを吹き飛ばした魔法！
あれなら幾ら竜だって……。」

まぁアレ見かけだけで、昨日より全然威力弱いんだけどね。
竜巻はギドラに向かって進んで、その身が竜巻に巻き込まれたと思ったら、大きく翼を羽ばたかせると、竜巻はあっけなく解けてしまった。

「そ……そんな……」
「ガァァァァァァ！！」

予定通り俺達目掛けて竜の怒りが飛んできた。
まぁブレスみたいなもんだけど……俺はタバサと竜状態のシルフィに目配せして、竜の怒りが地面に当たった瞬間に自分から後ろに転がった。

「グッ！」「きゅい！」「痛い」
「なんてこった……騎士様が負けちまった……もう御終いだ！！」

村人たちが絶望に染まりそうになった時、ヨシアが勢いよく声を張り上げた。

「みんなまだ諦めるにはまだ早い！！」
「でもどうするんだよ！！」
「たしかに僕たちの力じゃ竜を倒すことはできない。
でも翼人たちなら……」
「でもあいつらが俺達を助けてくれるわけなんて……」
「それは頼んでみないと分からないだろう！！
頼む翼人たち！今までのことを水に流せとは言わない！
でも今は、今だけは力を貸してくれないだろうか！」

ヨシアがそう言うと、森の方から翼が羽ばたく音が聞こえてくる。

「このまま放っておくと森の危機になるかも知れんしな」
「ヨシア、助けを呼んできたわ！！」

「さぁ村人たちよ！共に竜を倒そう！！」

村人たちも急展開についていけてないが、徐々に状況を理解し始め、弓などを持ってきた。
さぁここからはタイミングがシビアだな……。

「村人たちは弓で竜の気を引いてくれ！
私たちは魔法で攻撃する！」
「分かったぜ！」「任せときな！」

そこからは傍から見ると一方的なものだった。
弓は刺さらないが気を引くのに成功し、翼人たちの度重なる魔法で竜は地に伏せて、光となって消えてしまった。
まぁ実際は魔法は殆どダメージ通ってなかったんだけど……だって葉っぱカッターがＬｖ１００のサザンドラ相手に大したダメージを与えることはできない
まさか消えるとは思ってなかった村人と翼人だったが、倒したことに変わりはないので次第に歓声が大きくなり始めた。
そんな翼人と村人合同の宴ムードの中、俺とタバサは小声で話していた。

「作戦は成功みたいだな……」
「良かった」
「それにしても、シルフィ普通に気絶してる様に見えるんだが……」
「竜の攻撃が地面に当たった時に石が飛んできて、頭に当たった」
「あぁ……それは不運だな」

「運がない」

俺達はシルフィの運の無さを嘆きながら、この件が無事に終わってよかったと安堵していた。

第９０話　仲違い解消計画（後書き）

原作イベントはやっぱり短く終わらせにくいな。

第９１話　任務を終えて（前書き）

今度こそ翼人編ラスト！

第９１話　任務を終えて

翌日、昨日の宴会で酔った勢いでヨシアとアイーシャの結婚式をしよう！ということになったため、今俺達は結婚式に参加している。

「おめでと～！」
「幸せにしてやれよ！！」
「アイーシャを泣かせたら、その時は……」

村人と翼人から祝福の言葉をもらっている二人はとても幸せそうだ。そんな二人を見ていると、その輪の中から村長が出てきて、こちらに近づいてきた。

「騎士様、怪我は大丈夫ですか？」
「幸い大きな怪我はなかったので……それにしても異なる種族の二人が愛し合って結ばれる。
とても素晴らしいことですね」
「村としてもあの二人が結婚するということは、とても良いことに繋がりました」
「というと？」
「私たちエギンハイム村一同は、翼人との共存を目指すことにしました。
元からライカ欅が絶対必要と言うわけでもないですから。
それに森を切り開かなくても、翼人たちがライカ欅を偶に持ってきてくれるといってくれました」

そうか……最もいい形で終幕を迎えたのか。
良かった。

「村長、一つ頼みごとがあるんですが・・・・・・」
「はい、なんでしょうか？」
「あの竜のことなんですが、俺達が乗ってきた竜が暴れていたのを取り押さえたって言う事にしてもらえませんか？
流石に竜が消えたと報告するとまた派遣されて、要らぬ諍いが起こるかもしれませんので」
「そうですね、そういうことでしたら村人や翼人たちにも話を通しておきます」

これでもし怪しまれても何とかなるだろう。
さてと・・・・・・。

「俺達は、そろそろ出ようと思います。
もうここに俺達は必要ないでしょうし……」
「それに用事もある」
「そうですか……もう少しゆっくりしてもらいたかったですが、急いでいるなら仕方がありませんね」
「それでは、仲良く暮らしてください」
「お気遣いありがとうございます」

こうして今回の件は完全に幕を閉じた。
俺はまた、タバサ達が報告している間、黒の鉄球団の溜まり場に足を向けた。

「おぅ！　ヘイじゃねぇか！！」
「元気そうだな」
「お前こそ」
「今日は特に用はないんだが、待ち合わせまで時間が余ってな」
「おぅ、幾らでも時間潰して行けや。
そう言えば近くの村の翼人が村人と和解したっていう話聞いたか？」
「（情報が早いな）いや、初耳だな」
「亜人だからって排斥すんのは俺ァ可笑しいと思ってたんだよ。
だからよ、今回の話は正直めでてぇ！」
「そうだな、俺もそう思うよ」

俺はまたカウンターに座って、エールをちびちびと飲んだ。
やっぱり現代日本と違って、微妙な味だが……。

「そう言えばお前って幾つなんだ？」
「１９だな」

「なんだと！？お前まだそんな歳だったのか？！」
「あぁ……言ってなかったか。
なんだ、若造に負けるのは気に食わないから再戦だとでも言うか？」
「ハッ！　俺を馬鹿にすんなよ？
負けたこたぁ事実だ。
そこに歳何か関係ねぇ！」
「そうか……疑って悪かったな」

まぁそう言うと思ってたんだけどな。

「それじゃあチャンは何歳なんだ？」
「あぁ？　俺の歳は２８だ。」
「よ……予想より若かったな。」
「お前何歳だと思ってやがったんだ？！」
「いや、てっきり三十代後半位だと……。」

俺の言葉を聞いて周りに居た団員は爆笑しだした。
やっぱり老けて見えるよなぁ……。
そんな中背の小さい猫背の男が近づいてきた。

「あんちゃんは、何処に住んでるんだ？」
「アンタは誰だ？」
「俺はチョイ。
この団の副団長務めてるんでヤンス」

オイオイ、今度はチョイ・ボンゲかよ。
この世界ＫＯＦキャラに似た奴多すぎんだろ。

「おぉこの間は丁度いなかったからな！
紹介するぜ。
コイツぁ、チョイ。
黒の鉄球団創立当初からの最古のメンバーだ。
因みに俺の相棒だ」
「ヤメロって照れるじゃねぇか」
「コイツの長所は速さを生かした連続攻撃だ。
ヘイでも防げねぇんじゃねぇか？」
「へぇ、それは頼りになる副団長だな」
「あんちゃんもあんま褒めんなって！」

チョイはどうやら褒められることに慣れてないようだ。
でも語尾にヤンスはやっぱり小物臭いな……。
その後しばらく三人で世間話をしていると、そろそろタバサ嬢が来る時間になった。

「そろそろ時間みたいだ。」
「おぉもうそんな時間か。
またいつでも来いよ？」
「いつでも来るでヤンス！」
「ありがとう！」

俺はしばらく会うことがないであろう二人に別れを告げて、待ち合

わせ場所へと向かった。

結局学院に帰ってこれたのは、夜になってからだった。
途中シルフィがタバサに恋人の一人でも作れとか言って、一悶着あったが……それ以外には特に問題はなかった。
学院に着いた俺は取りあえず、タバサを部屋に送り届けてから自分の部屋に戻ろうとした。

「レッド」
「ん？」
「迷惑かけてごめんなさい」
「あぁ、気にするな……とは言えないけど、まぁ過ぎたことだ。とりあえず今後は気をつけてくれよ？」
「……ありがとう」
「……今回は怪我がなくて良かった」

そう一言だけ言って部屋を出た。
その後俺は自分の部屋に戻って服を着替えて行く。

「ふぅ、やっとあの装備を外せたか。
やっぱりいつも通りの服の方が楽だな」

それにしても……先住魔法ってあんなもんだったのか。
いや、エルフの反射とかがヤバいだけなのか？

「今回はデメリットしかないと思ったんだけど、面白い人達と知り合いになれたのは良かったかな？」

まさかまだＫＯＦキャラっぽい人と出会う機会があるとは……予想してなかったよ。
しかもマイナーな部類のキャラに似てる人達だったし、でも普通にいい人だったな。
いつかまた変装して会いに行こうかな……。

第９１話　任務を終えて（後書き）

次のイベントは決闘か……。

ところでもうそろそろ１００話に成りますが、記念に外伝でも書こうかなって思ってます。

こんなの書いて欲しいっていうものがあれば参考にしますので、何かあれば書いてください。

第９２話　原作との違い（前書き）

決闘の相手は……。

そして１００回目の投稿・・・・・・まだ１００話じゃないけどねｗ
これからも頑張ろう……１２月入ったら更新落ちるかもしれません。
それでも日に一回はするつもりなので、勘弁してください

第９２話　原作との違い

俺は最近の日課である学院長との雑談をしながら過ごしていた。
いやぁ結構聞いてて面白い話多いんだよ？
伊達に歳食ってないよね。

「でな、そこで儂は……「学院長！」なんじゃツルベール君、今いいとこじゃったのに……」
「そんなことよりも、大変なんです！
後私はコルベールです！
あぁレッド先生もここにいたのですね？」
「それでどうかしたんですか？」
「そうですよ！中庭で決闘を行おうとしている生徒がいるのです！！」

おぉついに来たか……って誰が決闘するんだ？
ギーシュはないだろうしなぁ。

「なんじゃ、何処の馬鹿息子が力を持て余したんじゃ？」
「一人はヴィリエ・ド・ロレーヌと……」
「フムフム、彼はプライドが高いからのう……で相手は誰じゃ？」
「そ、それがミスヴァリエールの使い魔なんです」
「ほぉ……それは少々不味いのぅ。
コルベール君、眠りの鐘の使用許可を出す。
万が一片方が大きな怪我をしそうになった場合、強制的に止めるのじゃ！」

「分かりました！」

そう言ってコルベール先生は、学院長室から走って出て行った。
それにしても……。

「大きな怪我をしそうになった場合……ですか。
俺の記憶が正しければ、決闘は校則違反じゃありませんでしたか？」
「ホッホッホッホ、確かにそうじゃの。
じゃが……あのヴァリエールの使い魔のルーンが気になるのでな」
「ガンダールヴですか……」
「知っておったのか！？」
「いえ、コルベール先生が……」
「相変わらず身内には口が軽いのぅ。
そうじゃ、もし彼が本物のガンダールヴならばここで負けることはないじゃろう」
「ですが、もし違った場合彼は大怪我どころでは済まないのではないですか？」

俺としてもガンダールヴの能力があるから大丈夫だとは思うんだけど、不安がないわけじゃないからな。
俺がそう言うとオスマンは小さく笑い、俺に言った。

「そのためにコルベール君を現場に行かせたんじゃよ。
彼ならどちらかが大怪我する前に決闘を中断できるじゃろうしの」
「そうですか……信頼していらっしゃるんですね」
「彼も結構重い過去を背負ってるからの……」

少し空気が重くなったが、それも短い間だった。
遠見の鏡に二人の青年が向かい合って立っているのが映ると、俺と学院長はそっちに集中し始めた。

「確かヴィリエ君は風のラインメイジじゃったな」
「そうですが実戦経験はありませんし、慢心も見えます」
「まぁお主の弟子たち以外にそこまで求めるのは酷じゃないかの？」
「タバサはともかく、ギーシュも若干甘さがありますけどね」
「お主は本当に１９歳か？」
「失礼ですね！
そんなことよりも始まりますよ？」

もう鏡の中では今にも戦闘が始まりそうな雰囲気がプンプンしていた。
お？　ギーシュが何か喋ってるな……。

「ギーシュ君は一体何を言っているのかのぅ。
ホ？　ヴィリエ君が何か怒っておるの」
「まぁヴィリエ君は沸点が低いですからね。
あ、ギーシュがサイト君に剣を渡した」
「素手じゃ無理じゃろうしのぅ……」

でも剣をもった瞬間にヴィリエが勝てる可能性が一気に下がったわけだが……。

なんかサイト君も剣を持った瞬間に何か戸惑っていたようだけど、今はヴィリエを強い眼差しで睨みつけている。

「そう言えば彼らって何で決闘しているんですかね？」
「さぁ、儂にも分からんが、多分使い魔君がヴィリエ君の癪に障る事でも言ったんじゃろ？」

あぁ、あり得る。
まだサイト君は貴族に対する口調が荒いからな。

「お、始まった様じゃな」
「ヴィリエ君が何か喋ってますね……まぁ恐らく平民がどうとか言っているんでしょうけど」
「どうも生徒たちの平民蔑視が目立つのぅ。
まぁ親がそうならそうなってしまうのも仕方がないのぅ」
「そうですね……悲しいことですが。
あ、ヴィリエがサイト君に向けて魔法を使いましたね」
「エアハンマーじゃな……まぁあれなら当たっても大きな怪我はせんじゃろ」

まぁそうなんだけど……先ず当たらないんじゃないか？
あぁやっぱり避けた。

「速いな……（素の俺とどっちが早いかな？）」
「……彼は本当に唯の平民か？」

「歩き方とか剣の構え方から見ると素人ですけど……動きの速さや剣速だけは一流ですね」

鏡に映っているのは、一気に接近したサイト君に杖を真っ二つにされて茫然としているヴィリエの姿だった。

「勝負あった様じゃの……。

周りにいる生徒達も信じられんものを見たような顔をしておるの」

「それはそうでしょう。

普通の平民がラインメイジを圧倒したのですから」

そう言えばルイズ嬢の姿が見えないんだが……あ、今来た。

シエスタも一緒か。

シエスタが呼んできたんだろうなぁ。

「お主の妹分は随分とお怒りじゃの？」

「……彼女は素直じゃありませんからね。

多分危険な行為をして心配掛けたことに怒っているのでしょう」

「……お主少しイライラしてないか？」

そんなことは……多分ない。

多分……。

「それにしても、恐らく彼がガンダールヴであることは明らかじゃ

な」
「そうですね、剣を振る時にルーンが光っていましたし……。
王宮に報告はしますか？」
「まさか、王宮の連中にそんな報告をしたら使い潰されるのが関の山じゃろう」
「そうですね、じゃあ後でコルベール先生にも内密にすることを伝えてくださいね？
俺は彼らのところにお説教にいってきます」
「程々にの」

さぁてと一応表面上怒っておかないと、決闘は一応校則違反だからな。
それにしてもヴィリエはこれで二回目なんだが、親も呆れるだろうな。
まぁ自業自得ってことで。

第９２話　原作との違い（後書き）

次回は違う目線で。

第９２．５話　貴族と平民の使い魔（前書き）

今回は決闘の視点違いです。

第９２．５話　貴族と平民の使い魔

俺は朝いつも通り厨房で賄いを分けてもらった。
流石に何時も何時も世話になって、何のお返しもしないのは流石に気が引ける。
俺はそう思って一つの提案をした。

「俺に配膳を手伝わせてくれ！」
「なんだいきなり、お前さんは貴族様の使い魔なんだろう？
なら勝手に働くのは不味いんじゃないか？」
「あとで伝えれば大丈夫だって！
それに何時もただ飯食わしてもらってるから、なんか恩返ししたいんだよ！」

おっちゃん迷ってるなぁ。
もしかして迷惑だったか？

「いいじゃねぇか、手伝ってくれるって言うんならよ」
「マルトーさん！」
「いいのか？！」
「まぁ大丈夫だろ。
但し料理をこぼしたりすんなよ？」
「分かってるよ！」

俺は意気揚々と料理を持って配膳の手伝いを始めた。

しばらく配膳を続けていると、何か騒ぎが起こっているようだ。
俺は野次馬根性で少し覗いてみることにした。

「だから、僕が一方的に振られたなんて事実は存在しない！」
「おいおい、ヴィリエ。
みんな知ってるんだぜ？
お前がキュルケに告白して振られたこと」
「何回も言っているだろう！
僕は告白したんじゃない！
提案しただけだ！」

どうやらヴィリエって言うやつが告白したとかしないとかの話らしい。
やっぱり恋愛関係の話は盛り上がるもんだな。

「提案？」
「そうだ！

僕は君は特定の人と深い付き合いをしていないようだね。
なら僕が付き合ってあげようって言っただけだ！」

なんだそれ……マジかよ？
流石にそれはないだろ、ヤベッ笑いが……。

「プッ…」

俺は少し口から笑いが漏れてしまった。
するといきなりその場が静寂に包まれた。

「今、僕を笑ったのか？」
「い、いやそんなことは……」
「平民のお前が、風の名門ロレーヌ家の僕を馬鹿にしたのか！」

あれ、これもしかして不味いのか？
なんかさっきと空気が違う。

「良く見ればお前は……，爆発，のルイズが召喚した使い魔じゃないか！
主が非常識なら使い魔も非常識だな！
平民は貴族に逆らうなよ！」

なんだこいつ……。
すっげぇムカつく！

「お前感じ悪いな」
「な……それは僕に言ったのか？
平民風情が？
この僕を侮辱したのか？」
「侮辱じゃねぇよ、本当のことを言ったまでだよ」
「そうか……ならば決闘だ！！
この平民に立場と言うものを教えてやろう！」
「上等だ！　ぶちのめしてやるぜ！」

俺は勢いでそう言った。
しかしシエスタが俺の服を引っ張って何かを言っている。

「サイトさん、謝った方がいいです！！
貴族様と戦うなんて……勝てっこない！」
「どうせ決闘って言ったって喧嘩みたいなもんだろ？
なら殴り飛ばしてやる」
「サイトさん殺されちゃいますよ？！」
「殺……される？」
「貴族と平民の違いは身分だけじゃないんですよ！
魔法にどう対抗する気なんですか？！」

魔法ってそんなに危険なのか？
俺はそんな危険な相手に喧嘩を売ったのか？

でも……それでもアイツは許せない！

「アイツは平民は貴族に逆らうなって言ったんだ。
なんだよそれ。
俺はそんな考え大嫌いだ！
……大丈夫、きっとなんとかなる！」

俺はそうシエスタに言った。
でも本当は自分にそう言ったのかもしれない。
怖い、でもさっきの発言は気に入らない。
俺は大きな不安を抱えながら、中庭へと足を進めた。

中庭に着くと、そこには沢山の学生がいた。
どうやら野次馬らしい。

「なんだ、逃げなかったのか？
今なら平伏して許しを請えば許してやらなくもないんだがな」

ヴィリエは周囲の野次馬を見ながらそう言った。
大勢の前で俺の情けないところを見せようとしてるのか……。

「誰が謝るか！
俺は……何も間違ったことを言った覚えはない！」
「き、貴様・・・・・・平民風情が大口を叩くな！！」

ヴィリエは鬼の様な顔で俺を睨む。
喧嘩の経験なんてほとんどない。
でも一発、一発でもいいからアイツを殴りたい！
そんなことを考えていると、野次馬の中から一人が前に出てきた。

「ヴィリエ、君は恥しくないのか？
武器すら持っていない平民を魔法で嬲る……そんなのは唯の弱い者いじめじゃないか？」
「ギ……ギーシュ！　貴様まで僕を馬鹿にするのか！」
「馬鹿にはしていないよ。
だが、決闘と言うくらいなら相手に剣の一つも持たせてあげたらどうだい？」
「フン、いいだろう！
平民、剣を持ってもいいぞ！」

剣を持ってもいいぞって言われても、俺剣なんか持ってないぞ？
するとさっきギーシュって呼ばれていた人が俺に近づいてきた。

「君も無謀だな」
「成り行きで……」
「成り行きで命がけか……なんにせよ死なない様にな！
剣は……錬金！
っとこれでいいかな？」
「魔法ってすごいな……ありがとう！」

俺は彼が今作った剣を受け取った。
その瞬間頭に剣の情報が入りこんできた。
材質、この剣の制作者名、重量。

「なんだ……これ？」
「どうかしたのかい？」
「い、いやなんでもない。」

なんだ今の？
それになんか身体がすっげぇ軽い。
これなら……誰にだって負ける気がしない！

「それじゃあこのコインが地面に落ちたら、決闘開始だ！」
「上等だ！」

第９２．５話　貴族と平民の使い魔（後書き）

予想より長くなった……。
もう一話掛かります。

第９２．７５話　レッドの実力（前書き）

続き

第９２．７５話　レッドの実力

コインが空に向けて投げられた。

「平民は大人しく貴族に従ってればいいんだよ！」
「平民平民ってそんなに貴族が偉いのかよ！」
「当り前だろう！！」

そんな会話をしている内に、コインが地面に落ちた。

「一発で決めてあげよう！
エアハンマー！」

なんか飛んでくる？！
俺は急いで横っとびした。

「俺今すっげぇ飛ばなかったか？」
「僕のエアハンマーを避けた？」

なんかよくわからないけど、隙だらけだぜ！！
俺は全速力でヴィリエに近づいていって、剣で杖を斬った。

「あ……」
「俺の勝ちだよな？」
「そんな、そんなはずがない……この僕が平民なんかに負けるなんて……」

なんか話しかけても反応がないな……とりあえずギーシュに剣を返しに行くか。
そう考えていると、遠くからシエスタと……ルイズが来た。

「アンタ何考えてんのよ！！
魔法を使えないのに貴族と決闘だなんて、今直ぐ止めなさい！」
「いや……」
「ルイズ、もう決闘は終わっているよ」
「へ？　だってコイツ何処も怪我してないわよ？」
「まぁ……それは僕も驚いているんだけど……」
「魔法を使わないで魔法使いに勝てる人なんて、私兄様位しか知らないわよ？」
「レッドさんってそんなに強いのか！？」
「あぁ君は知らなかったのか、あの人は僕の師匠でもあり、学院最強の一角を担っているんだよ？」

あの人が……そんなに強かったのか。
世の中分かんないもんだなぁ。

「なんにしても勝手に決闘するなんて、アンタ馬鹿じゃないの？！」
「だってアイツが平民は貴族に大人しく従えって言うんだぜ？！

ムカつくじゃねぇか！」
「アンタ本当に何処から来たのよ……」
「だから月が一つしかない世界だって言ってるだろ！！」

そんな感じでしばらく口喧嘩していると、不意に後ろで物音がした。

「平民が……平民が……平民が平民が平民が平民が！！！！！
死ね！！　エアカッター！！！！」
「な？！」

ヴィリエが何処に隠していたか分からないが、新しい杖を持って俺の方に向かって魔法を放ってきた。
ヤバい、さっきみたいに身体が軽くない。
寧ろいつもより重い……これは死ぬかも。

「アース・ウォール」

俺は死を覚悟して目を瞑ったが、何時まで経っても痛みどころか衝撃すら来ない。
不思議に思って目を開けると、目の前に大きな土の壁があった。
誰がこの壁を……。

「勝利の余韻に浸っている相手に魔法を放つ。
確かに戦場でなら有効的な攻撃だな。

しかし決闘で既に負けた後にやることじゃないな……。
（それにしてもコルベール先生は何してるんだ？）」
「兄様！」「「レッドさん！」」
「君たち後でまとめて説教ね？」
「「「え？！」」」

助けてくれたと思ったら、後で説教……。
っていうかなんで説教？

「決闘は校則で禁止されてるから……。
あぁそれとヴィリエ君」
「……またお前か！！
またお前なのか！！」
「いやいや、前回の事も今回の事も自業自得だと思うのだがね？
後一応僕も教師だから敬語を使ってくれないかな？」
「前回ってなんだ？」
「いいからアンタは黙ってなさい！」

何で怒られてんだ俺？
っておい！　またヴィリエの奴魔法使おうとしてるぞ！！
レッドさんは……杖を構えてない？！

「レッドさん危ない！」
「はぁ……一回お灸をすえないと駄目かな？」
「え？」「レッドさん、何する気ですか？」

レッドさんがそう呟くと、俺は驚くような光景を目にした。
ヴィリエが放つエアカッターを避けながら、徐々にヴィリエの元へと進んでいる……。
見えないはずの風の刃を、まるで飛んでくる場所が分かってるかのように回避している姿は、まさに達人って感じがした。

「来るな！！来るなよ！！
何なんだよお前！！」
「凄ぇ……」
「「流石兄様（レッドさん）」」

レッドさんはそのままヴィリエのすぐ近くまで行くと、軽く顎を殴った。
すると人形の糸が切れたように、ヴィリエの意識が飛んだ。
あれって……良く漫画とかである様に脳を揺らしたのか？
あの人本当に何者だよ……。

「さぁてと、これでこの件は御終いだ。
みんな教室に戻りなさい。
授業の時間が近づいているからな」

レッドさんはそう言って、ヴィリエを肩に担いで学院に戻っていった。
あの人凄いな……漫画のキャラクターみたいだった。
野次馬達も最初レッドさんの鎮圧劇をみて驚いていたが、授業の時

間が近づいて来ていることに気付き、教室に戻り始めた。
するとレッドさんと入れ違いになる様に、髪の毛が薄い人が走ってきた。

「決闘を止めなさい！」
「コルベール先生……もう色々と遅すぎです」
「はい？」
「もう決闘は終わっちゃいましたし、その張本人であるヴィリエ君も暴れたので、レッド先生が気絶させて連れていっちゃいましたよ？」
「やっぱり遅かった……眠りの鐘の置き場所が変わっていたのが悪いのですよ！！
なんで宝物庫の奥の方にあるんですか！！」

なんか最後は締まらなかったけど、怪我しなくて良かった……。
それにしてもあの剣をもった瞬間に感じたやつは、なんだったんだ？

「サイト！　アンタ速く来なさいよ！！
授業に遅れちゃうじゃない！！」
「あ、あぁごめん」
「私に髪がないからミス・ロングビルは振り向いてくれないのですか！？」

延々と独り言言ってるけど……大丈夫かあの人？

第９２．７５話　レッドの実力（後書き）

やべぇ主人公自重してねぇｗ
でもこれぐらいなら……ＯＫか？

第９３話　行動の責任（前書き）

敵役は基本とことん敵っぽくしますｗ

第９３話　行動の責任

ヴィリエを担いだ俺は、そのまま学院長室に向かった。
特に怪我はないみたいだから、起きてすぐ説教タイムに入れるように今はソファーに横たえている。

「今回の罰はどうしますか？」
「そうじゃのう……二回目じゃからのぅ」
「取りあえず親への連絡は決定としても……」
「謹慎が妥当かの？」
「そうですね」

そうやって話している内に、コルベール先生が学院長室に掛け込んできた。
なにやってたんだ？

「コルベール君、君は何をやっていたのかね？」
「違うんです学院長！
私が眠りの鐘を置いてある場所に行ったら、何故かなくてですね？
そして色々なところを探し、宝物庫の奥にあった眠りの鐘を持って現場に向かったら、もうすでに決闘が終わっていたんです！」
「あれ？眠りの鐘についてはこの間宝物庫に置いておくと会議で話があった気がするんですが……」
「あぁコルベール君はあの時ロングビル君と話し込んでおったからの。
聞き逃したんじゃろぅ。

……これは減給かの？」
「そ、そんな……」

コルベール先生は漫画ならば顔に三本線が入るほど落ち込んでいた。
ドンマイ！

「う……ん」
「あれ？彼はミスタ・ロレーヌじゃないですか。
何故ここに？」
「特に怪我もないので、起きてすぐに今回の件の処分を伝えるために真っ直ぐここに連れてきました」
「そう言えば暴走した彼をレッド先生が止めたんでしたか……」
「あの時のレッド君の動きは見事じゃったのぅ」
「やっぱり見てたんですか……でもあれはそんなに難しいことじゃないですよ？
ヴィリエ君は杖を振った方向に風の刃を出していたので、杖の先を見ていればある程度の身体能力があれば出来るはずです」
「（そんなことできる者は早々おらんと思うのじゃがのぅ。）そうか」
「何の話ですか？」
「いや、別になんでもないんじゃよ」
「そうですか？」

そっかコルベール先生はあの場に居なかったからヴィリエの暴走を見てなかったのか。
あの時眠りの鐘があったらもっとスマートに事態を終結出来たのに……。

俺はそんなＩＦを思い浮かべて、少しだけコルベール先生を恨んだ。

「う、あ、あれ？」
「フォ、どうやら目が覚めた様じゃな」

どうやらヴィリエが目を覚ましたようだ。
なんか俺を見たら、また騒ぎだしそうだから死角に移動しよう。

「僕は……確かルイズの使い魔と決闘して……」
「お主は負けて、その事を認められず彼を後ろから殺そうとした」
「な？！　彼はそんなことをしたのですか！？」
「コルベール君、少し黙っていたまえ」
「は、はい」

まぁコルベール先生の反応も分からなくもないか。
殺すという行為に大きな嫌悪感を抱いているし……。

「そうだ！あの平民はどうなったんですか！？
死にましたか！」
「お主は……もし彼が死んでいるとしたらどうする」
「どうする？　特にどうもしませんが？」
「彼はミス・ヴァリエールの使い魔だったのじゃが？」
「使い魔ならまた呼び出せばいいじゃないですか。
アイツは僕を、貴族の僕を馬鹿にしたんですよ？
死んで当然です」

うわぁ……ギトーも酷かったけど、それ以上にコイツ腐ってるな。
ここまで来ると怒る気も失せるな。

「はぁ……サイト君は生きとるよ」
「なんだって？！」
「それにお主覚えていないのかね。
何故お主が意識を失っていたのか」
「僕が意識を失った理由……」

ヴィリエは少し考え込むと、次第に身体が震えてきた。
そして勢い良く学院長の方を向くと、叫びだした。

「そうだ！！レッド先生、いやレッドに殴られたんだ！
アイツは生徒を殴ったんですよ！
首に、首にしてください！！」
「「……」」

流石にコルベール先生と学院長も開いた口が塞がらないようだ。
まぁ殴られたって言っても青タン一つないからなぁ……。
それに学院長はあの一部始終を見ていた。

「（どうしたもんかのう……）君はレッド君を首にしたいのかね。」
「当り前じゃないですか！

前々から気に食わなかったんだ……僕たちとあんまり歳が変わらない癖に偉ぶって、癪に障る！」

え？俺偉ぶった態度とったっけ……。

俺は確認のためにコルベール先生を見るが、コルベール先生は苦笑しながら首を横に振った。

ですよね……。

「彼の生徒からの評価はかなり高いんじゃが……」

「それはそいつ等の程度が低いんですよ！」

「そうか……もういい加減面倒じゃし、姿を見せていいじゃないかの？」

「何を言って……「いや、なかなか耳に痛い話だね」！？」

俺は学院長の横に移動して、彼と相対した。

突然現れた、っていうか俺の存在に気付いたヴィリエは口をパクパクして後ずさった。

「な、なんで……何時から……」

「いやね、見えるところに僕がいると冷静に話せないかなって思ってね。

見えない位置に立っていたんだ」

ドンドン青ざめていく彼の表情を見ていると怒りの代わりに憐れみの感情が沸いてくる。

一応今後こういうことがない様に色々話しておきますか。

「取りあえず殴ったことに関してはすまなかった。
でもあぁするしか止める方法を思い浮かばなくてね。
それに痛くはなかったろう？」
「……」
「それに君がもし彼を殺していたら、君の家はもしかしたら多大な損害を受けていたかもしれない」
「なんの話……ですか？」

無理矢理丁寧に話したな。
まぁしょうがないけど……。

「君は忘れているのかもしれないけど、ルイズ嬢はヴァリエール公爵の娘なんだよ。
その相棒ともいえる使い魔を背後から不意打ちで殺したとしたら……どうなるかな？」
「え？」
「それに君は前にタバサ嬢とキュルケさんをハメて、決闘させたね？
あの二人は片やガリア、片やゲルマニアからの留学生。
その二人を嘘の情報で決闘させた。
もしかしたら国際問題になっていたかもしれない」

もうヴィリエの顔の色は青を通り越して、白くなってきている。
全部自業自得だけどな！

「君が起こした二つのことは正直大問題なのだよ」
「そ……そんな……そんなこと僕は……」
「それに君はサイト君に言っていたね。
平民の癖に！と何度も何度も」
「それは……当然じゃないか！」
「でも平民がいない領土に発展はあるのか？」
「え？」
「君は平民を物みたいに思っているのかもしれないが、彼らのおかげで貴族は成り立っているんだよ」
「……」
「一気に考え方を変えろとは言わないけど、そう言ったことを頭に入れておいてほしい」

その後ヴィリエは学院長から一週間の謹慎を命じられ、親にも連絡がいった。
でもそれが命じられているときも、ヴィリエは一言の文句も言わずにただ俯いていた。
彼が学院長室を退出した後も、３人は残っていた。

「これで彼も少し考えを改めてくれるでしょうか？」
「さあのぅ、それは彼次第じゃろ」
「それにしても貴族の平民蔑視はどうにかなりませんか？」
「難しいのぅ、親にそうと教えられてきている場合は、そうそう考えは変わらんよ」

俺の知り合いは、そんなに平民がどうとか気にしない人が多いから

な。
あそこまで露骨な平民蔑視思考を持った人と関わりを持ったことがなかった。
まぁきっとサイト君の活躍が平民に対する感情を和らげてくれるはずだ。
俺では授業で少しずつ変えていくこと位しかできないから……。

第９３話　行動の責任（後書き）

ヴィリエ改心？

第９４話　魔法の世界の吸血鬼（前書き）

吸血鬼編はっじまっるよ～

第９４話　魔法の世界の吸血鬼

決闘の後処理も終わり、しばらく経って虚無の曜日の前日を迎えた俺だが……、俺はまたシルフィに乗ってガリアへの空路を進んでいる。

「はぁ……結局今回も流された……」
「どうかしたのね？なんか元気ないのね？きゅいきゅい」
「いや、お前のせいなんだよ？」

なんか勢い良く俺の部屋に入ってきて、休日にガリアにお出かけしたいからレッドにもついて来てほしい。
その後外出届を学院長に提出させて、あの装備をさせた時点でもう唯の外出じゃないのは分かってたんだよ……。
でも……なんかコイツ行かないっていうと泣きそうな顔するんだよ。
コイツが泣くと子供泣かしている様な罪悪感に包まれるんだよ……。

「はぁ……」
「きゅい？」
「ごめんなさい」

タバサも俺が渋ると少し俯く。
片や見た目子供、片や精神子供。
胃薬……探そうかな？
学院長もこの事を知ってか知らずか

「もし彼女が死ぬようなことになったら国際問題になりかねんから気を付けるんじゃぞ？」
とか小声言うし……。
いやもちろん文句は言ったんだよ？
それだったら俺じゃなくてもいいじゃないか！って言ったよ？
でも「彼女よりも弱い者を連れていっても護衛にならんじゃろ？」って返された……まぁ正論だけど。
コルベール先生やギトーなら大丈夫じゃないのか？とも聞いてみたんだけど、
「コルベール君は今だ戦闘に拒否感を強く持っておる。
ギトー君は……あの……分かるじゃろ？」
そんなわけで学院長の頼みもあり、俺が渋々着いていくことになった。

「おぅ、ヘイじゃねぇか！
意外と早い再会になったな！」
「……あぁ予想外だがな」

なんかタバサが任務を受けに行っている間、基本的にここにきているなぁ。
まぁ俺としてもここの連中は親しみやすいから居心地いいんだけど……。

「そういえばお前って何時も誰と待ち合わせしてんだ？」
「あぁそうでヤンス！！
そう言えばヘイが町の外で小さな女の子と一緒にいるのを見たって団員が言ってたでヤンス！！」
「「「「「何ーーーーーーー！！」」」」」
「……いや、なんだこの驚きようは？」
「お前……恋人いたのか？」
「いやいない」

俺がそう返すと、団員達＋チャンは安心したかのような深い息をついた。
なんか腹立つな。

「そうだよな！お前はそうだと信じてたぞ！」
「……チャン、お前どうしたんだ？」
「いや、何でもないぞ？
チョイが実は美人の奥さんいるからとか全然関係ないぞ？」

あぁ奥さんいたのかチョイ。

なんか何時も猫背なのに、今は胸張ってるな。
チョイ……威張るのは良いんだけどな？
お前の後ろに団員達が凄い顔で立ってるぞ？

「ん？な、なんでヤンスか？！
もしかしてお前たち……羨ましいんでヤンスか？」
「「「「「……」」」」」
「お前達も何時か綺麗な奥さんもらえるでヤンスよ。
まぁ家の奥さん程可愛い奥さんは、いないかもしれないけど……。
な……なんでヤンスか、皆拳を振り上げて……」
「「「「「「ふざんけんなーーーーーーーー！！」」」」」」
「ギャーーーーーーーーーーーーー！！」

あ～あ、フルボッコだな。
俺も一応一発入れとくか。
ところでチャン……お前真っ先に相棒殴りに行ったな。
いいのかそれで！？

あの後好きなタイプとかの話を延々と話していた訳だが……中学校の修学旅行か！？
まぁ予想外な情報とか聞けて面白かったけど……だってチャンの好きなタイプが小柄な可愛い子だよ？
いやいや、なんて犯罪っぽゲフンゲフン……予想外だよね！

「レッド？」
「あぁ……いや、なんでもない。
で、今回は何処で何をするんだ？」
「今回はサビエラ村に出た吸血鬼の退治」
「……吸血鬼？」
「そう」
「ヴァンパイア？」
「そう」
「ノーライフキング？」
「そう」
「そっか……よし！　帰ろう！」
「もうちょっとで着くのね」
「嫌だ！　帰ろうぜ！　直ちに帰って部屋の隅でガタガタ震える準備はＯＫだよ！？」
「何言ってるの？」

だって……吸血鬼だろ？！
確かにアーカードの旦那に憧れはしてるよ？
でもね、戦えって言われたらマッハで逃げるよ！！
……ってあれ、そう言えばこの世界の吸血鬼ってどんなんだっけ？

「タバサ、吸血鬼の特徴ってどんなの？」
「日の光に弱い、聖水、銀、流水、火に弱い。
胸に白木の杭を刺されると死ぬ。
魔力と身体能力は極めて高いため、とても危険」
「えっと、なんか変な能力とか持ってない？
真黒な犬を自分の身体から出したり、世界を限定的に作り出したりしない？」
「？　そんな能力はない」

……はは、はっはっはっは！！
何だ！なら大丈夫だ！！
どんとこいやーーーーーーーー！！！！！（自棄）

第９４話　魔法の世界の吸血鬼（後書き）

この時主人公はこれがヤバいフラグになることを微塵も知らなかった……。

吸血鬼編は大分オリ展開で行きます。

理由は……後ほど。

第９５話　吸血鬼の出る村（前書き）

もう一度言っておきます。
俺はタバサ外伝を読んだことがありませんw
故にオリ展開で突っ走ります。

第９５話　吸血鬼の出る村

サビエラ村に着く前に俺は念のためＬｖ４０位のハガネールも装備しておいた。
このレベルなら俺の見た目に変化は起きない。
噛まれてグールの仲間入りなんて御免だからな。
それと今回はシルフィが人間に化けて、従者として顔合わせするらしい。
服を着るのが嫌って言って渋ってたけど、タバサに杖で一回叩かれると変身した。

「今回も俺は傭兵という立場にしてもらう」
「分かった。
でも今回は私は従者」
「どういうことだ？」
「彼女を騎士役に据えて、様子を見る」
「あぁ、吸血鬼が何処にいるのか分からないんだっけ……」
「うぅ、ゴワゴワしてるのね……るーるー」

こら、スカートを持ち上げるな！！
見えるだろうが！！
と思いながらも口には出さない俺……俺も男ってことで。

「うぉ！？　何だいきなり？！」
「……なんとなく」

突然杖で小突かれたわけだが、何故に？
取りあえず俺達は村長の下に、到着したことを伝えるために村の中を歩いて行った。

「ようこそいらっしゃいました騎士様！
私が村長のアイザックです」

村長は結構歳を召した白髪の男性だった。
心なしか目の下の隈が濃い。

「私は花壇騎士のシルフィード！」
「シルフィード？」

なんか村長が不思議そうな顔をしている。

そう言えばシルフィードって人の名前には少ないんだっけ……。
一応フォローしとくか。

「花壇騎士の特性上、偽名を使って動いた方がいい場合も少なくないのです」
「あぁ、そうだったのですか……これは失礼いたしました！」

何とか納得してもらえたようだ。
シルフィも冷や汗を拭っている。

「それで、そちらのお二人は……」
「彼らは私の従者なのね」
「どうも、傭兵のヘイと申します。
仮面は、幼い頃に顔に火傷をしてそれを隠すためにしております」
「同じく従者のタバサ」
「そうだったのですか……大変だったのですね」

同情の視線が痛い。
そしてタバサとシルフィの視線も痛い。
うっ……罪悪感が……。

「そ、それでは吸血鬼について教えていただけますか？」
「あ、はい」

話を聞いてみると、少し前に森の近くで吸血痕がある死体が見つかったのが最初だったそうだ。
それからも偶に森の近くで死体が見つかる様になった。
村人にも被害が出ているために討伐を依頼したということらしい。

「そうですか……吸血鬼の姿を見た人は今のところいないんですか？」
「も、もしかして、私たちが嘘をついているとでも？！」
「あぁ、いえいえそう言うことを言いたいわけじゃないんです。
ただ人間と吸血鬼の見た目は殆ど変わらないものですから、少しでも情報が欲しいと思いまして」
「そうですか……」

この人結構精神疲労してるな。
まぁ当り前か、自分の村に吸血鬼がいるかもしれないって思えばな。

「おじいちゃん？」
「おぉ！エルザ！
身体は大丈夫かい？」
「うん、少し良くなったよ」
「村長、彼女は一体？」
「あぁ私の娘のエルザです」

娘？それにしては歳が離れてないか？
タバサも少し目の色が変わった。

「歳のことですよね……少し前に彼女は森で倒れているところを、私が見つけて保護していたのですが、身寄りもないとのことなので、私の子供として引き取ったのです」
「そうでしたか……優しいですね」

俺は一応そう言ったが、何か引っかかる。
タバサとシルフィは露骨に彼女を疑っている。
やっぱり森で見つかった身元不明の人間は怪しすぎる。
幾ら子供に見えても、吸血鬼なら見た目なんか当てにならないからな。

「ほらエルザ、騎士様達に挨拶は？」
「あ、あの……私エルザって言います」

こう見る分には色白で病弱な少女にしか見えない。
もう少し調べてみないと分からないな。
俺達がエルザのことを見ていると、急に村長が話し始めた。

「そう言えば村人たちは、皆マゼンタさんとアレクサンドルが怪しいと言っていました。
マゼンタさんは歳のせいか寝たきりで、アレクサンドルもその看病で外に出てきませんから……」

それは確かに怪しいかもしれない。

取りあえずその二人から調べてみるか……。

そして俺達はマゼンタさんが住んでいる家に向かったのだが、そこには沢山の村人が家を取り囲んでいた。

「出て来い吸血鬼！
いるのは分かってるんだぞ！」
「止めろ！俺達は吸血鬼なんかじゃない！」

村人が家に石を投げながら叫ぶと、家の中からがっしりした体の男性が出てきた。
彼がアレクサンドルか？

「ならなんで夜しか外に出てこないんだ！
日の光に当たるのが嫌だからじゃないのか！」
「何度も言ってるじゃないか！
おっかあが寝付くまで看病してるから、明るいうちは外に出てないだけだ！」
「そんなの言い訳に決まってる！」

そう言って村人の一人がアレクサンドルの服を掴んだ。
流石に止めないとヤバいか？

「落ち着くのね！」
「誰だアンタ達？」
「私は花壇騎士のシルフィード！
後ろの二人は私の仲間なのね！」
「アンタ達が村長が呼んだ騎士様か！
ならとっととこいつ等やっつけちまってください！」
「それは待ってください。
まだ彼らが吸血鬼である証拠はないのですから」
「だけどよぅ」
「取りあえず私たちが調べるので、村人の皆さんは取りあえず今日は家に戻ってくれませんか？」
「騎士様がそういうってんなら今日は帰りますけど……しっかり調べてくださいよ！」
「はい、それが任務ですから」

なんとか村人たちは納得したようで、家から離れて行った。
さてと、この二人は本当に吸血鬼なのか調べないとな。

「アンタ達騎士様なのか……頼む信じてくれ！俺もおっかぁも吸血鬼なんかじゃねぇ！」
「そう信じたいですが……おや、首に包帯を巻いているんですね。
どうなさったんですか？」

アレクサンドルの服はさっき村人に掴まれた時に、首の部分が伸びてしまったようだ。
そこから白い布が見える。

「あぁこれか？　これは森に山菜を取りに行った時に葉っぱで切っちまったんだ」
「少し見せていただけますか？
私も水メイジの端くれなもので、治せると思います」
「そうだったのか？
ならお願いしようかな……」

彼はそう言って包帯を外していく。
すると首筋が顕わになったのだが、そこには二つの穴が開いていた。
俺とタバサ、そしてシルフィードは顔を見合わせ、状況を確認した。
……彼はグールだ。

第９５話　吸血鬼の出る村（後書き）

次回へ続く！

第９６話　偽りの吸血鬼（前書き）

総合評価５０００ｐｔ突破！
このポイントの基準はお気に入り登録一人につき２ｐｔ
プラスのストーリー、文章評価点らしいです。
なんか……凄い嬉しい。

第９６話　偽りの吸血鬼

アレクサンドルは自身がグールである自覚がない。
そしてマゼンタさんのことも同意の元調べてみもしたが、一応手に隠し持っていた銀の装飾品を手に当ててみたが何の反応もなかったし、牙もなかったことから彼女はグールではないのだろう。
吸血鬼本人と言う線も消えた。
なら誰が吸血鬼なんだ？
何時吸血鬼にアレクサンドルが操られるか分からないが、元凶の吸血鬼をどうにかしないとこの件に終わりはない。
取りあえず他の家も回ってみることにした。

「やっぱり敵意のこもった視線に晒され続けるのは嫌なもんだな」
「彼？」
「マゼンタさんを調べると言った時から、彼の視線は一気に刃物の様に鋭くなったからな。
母親が疑われるのが気に入らないのは確かに分かるんだが、それが証明にもなるっていう説明で納得してもらえなかったら、眠りの雲で眠ってもらうことも考えたくらいだ」

少しでも変な真似したら殴ってやるって顔に出てたからなぁ。
後タバサが母親って言う単語が出るたびに少し表情が変わるのが気になる。

「それにしてもマゼンタさんは大丈夫だって言った時の、彼の顔は凄く嬉しそうだったな」

「確かに」

そんな母親思いな彼が実はグールだってことがマゼンタさんに知られたら……どう思うだろうか。
取りあえず他の村人に知られるわけにはいかないな。

「取りあえず一回部屋に戻って作戦会議をしよう」
「分かった」「分かったのね！」

一先ず俺達は村長に用意された部屋に向かった。

「取りあえず現状を整理すると、アレクサンドルがグール。
マゼンタさんは村人には怪しまれているが、銀に対する反応から恐らく白。
他の村人も特に反応はなかった。
残っているのは村長と……」
「エルザ」
「あの娘怪しいのね、なんか血の匂いがするのね！」

「そう言うことは早く言え！」
「てっきり気付いていると思ったのね……るーるー」
「お仕置き」
「嫌なのねーーーーーーーーー！！！」

まぁ漫才は置いといて、多分エルザが吸血鬼なのだろう。
だとしたら、騎士が派遣された今はとても焦っているはずだ。
なら近いうちに行動を起こすはずだ……。

「痛い、痛いのね！」
「……」
「レッド止めてーーーーーーー！」
「……俺はヘイだ」

そんな話をしていると、夜も更けてきた。
俺は二人を部屋に帰すと、ベットに横になった。
エルザは何時仕掛けてくるかな……。

「ヘイさん！　アレクサンドルが！！」
「なんだって？！」

俺の部屋に突如入ってきたのは村長だった。
どうやらアレクサンドルが暴れているらしい。
タバサとシルフィは既に現場に向かっているという話だ。

「分かりました、急いで向かいます」
「お願いします！」

俺は急いでマゼンタさんの家に向かった。

俺が着いた時には既にマゼンタさんの家は燃えていた。
アレクサンドルも既に倒された後らしい。

「やっぱりアレクサンドルの野郎がグールだったのか！」
「ということはマゼンタ婆さんが吸血鬼だったってことか……やっぱりな！」

野次馬にきた村人たちは好き放題言っているが、まだ吸血鬼はいなくなっていない。
一先ずタバサやシルフィと合流しなくては……。

「あ、レ……ヘイ！そこに居たのね！」
「もう退治し終わった」

「……そうか」
「従者さん遅かったな！
ついさっきそこ小さい従者の子が毒の雲を杖から出して、アレクサンドルを退治したところだ！」
「いや～あの手際は素早かったな！」

毒の雲？いやそんな魔法は……。
俺はタバサの方を見ると、小さく首を縦に振る。
眠りの雲か？！

「そうですか……遅くなったようですみません。」
「良いってことよ！
どっちにしろ、吸血鬼は退治しちまったんだ。
今日は宴だぜ！！」
「「「「うぉおおおおおおお！！！！」」」」

俺はタバサとシルフィを連れて、一旦その場を離れた。
人影がいない場所まで来ると、俺は今回の件の事情を聞いた。

「で、どういうことなんだ？」
「先ずアレクサンドルがマゼンタさんの家の前で暴れてたのね」
「あぁ、そこまでは村長に聞いた」
「だから私が気絶していたマゼンタお婆ちゃんを裏から外に連れ出したの」
「そうだったか」
「そしてその間お姉さまがアレクサンドルに眠りの雲を使って眠ら

せたの」
「二人は今どこに？」
「今アレクサンドルは縄でぐるぐる巻きにして、私の部屋にいるのね、きゅいきゅい」
「マゼンタさんは私の部屋」

そっか……でも疑問が一つある。

「タバサ……何でグールになったアレクサンドルを殺さなかったんだ？」
「……吸血鬼本人にグール化を解かせれば、彼はまたマゼンタさんと暮らせる」
「退治する前に捕える気なのか？」
「（コクリ）」
「簡単じゃないと思うぞ？
それでもか？」
「（コクリ）」
「大丈夫なのね！私も手伝うのね！」

二人は近接戦がそれほど達者じゃない。
もし組みつかれでもしたら、そのままグールにされるかもしれない。
なら……俺がどうにかするしか……。
殺す手前まで攻撃して、交渉するか。
問題はどうやって呼び出すかだな。

「ヘイ、どうしたのね？」

「？」
「あぁいや、ちょっと授業計画を考えててな」
「今そんなこと考えるときじゃないのね！」
「空気呼んで」
「あぁすまんすまん。
取りあえず今日はもう大きな動きはないだろうから、部屋に戻るか。
マゼンタさんとアレクサンドルは眠りの雲で眠らせたままにしておいてくれ。
一応ベット二つあるから問題ないだろ？」
「そうね」
「（こくり）」

本当なら俺の部屋で預かるべきなんだろうけど、何があるか分からないからな。
二人にはあの二人への対応に集中力を割いてもらおう。
早めにどうにかするから勘弁してくれよ？
そうして自分の部屋のすぐ近くまで来ると、俺は部屋の前に誰かが立っていることに気付いた。

「お兄ちゃん……吸血鬼いなくなったの？」
「……エルザちゃん。」

まだ俺の夜は終わらないようだ。

第９６話　偽りの吸血鬼（後書き）

タバサが原作に比べて対応が甘いですが、友人と協力者が出来たことにより少し心に余裕が出来た。
故に母親のことを愛していたアレクサンドルと、息子を愛しているマゼンタさんに幸せになってもらうことで、自分と重ねている部分がある。

第９７話　二人の吸血鬼（前書き）

原作とは全く違う展開になりました

第97話　二人の吸血鬼

何故このタイミングで俺に接触を図るんだ？
取りあえず警戒しておいて損はないだろう。

「こんな遅くにどうしたの？」
「村のみんなが、アレクサンドルさんがグールでマゼンタお婆ちゃんが吸血鬼だったって。
そして騎士様が二人を倒したって言ってたから、お礼に来たの」
「そっか、でも俺は今回何もしてないからね。
お礼ならあの二人に言ってあげてくれ」
「うん！　明日言うね！」

こう話している分には普通の女の子だな。
でもこの子が吸血鬼なんだよな……どうしたものか。

「ところでお兄ちゃんに一つお願いがあるんだけど……聞いてもらえる？」
「あぁ、俺に出来ることならね」
「あのね？私森で落とし物したみたいなの。
大事なものだから探しに行きたいんだけど、私一人で夜に探しに行くと怒られちゃうから、お兄ちゃんに着いて来てほしいなと思って……いい？」

これはチャンスか？
恐らく何らかのアクションを起こすだろう。

「分かった、一緒に行こうか」
「やった〜！」

俺はエルザと二人で森の中へと入って行った。
吸血鬼（仮）とのデートか……殺伐としそうだな。

森の中を少し歩くと、ちょっと開けた場所に出た。
そこでエルザは足を止め、俺を方を向き直った。

「ここ、私のお気に入りの場所なの！」
「そうなんだ？」
「うん、私とお兄ちゃんだけの秘密だよ？」
「あぁ、分かった。
ところでここに大事なものとやらを落としたのかい？」
「多分そうだと思うの……一緒に探して？」

「ここまで来たからね、見つけるために一肌脱ぐよ」

俺は一先ずしゃがんで地面を探すふりをした。
しばらく探していると、ふと背後に気配を感じ、振り返るとそこには俺の首筋に狙いを定め、大きく口を開いたエルザの姿があった。
やっぱりこの子が吸血鬼だったか……。
俺は一先ず横に転がって吸血行為を避けた。

「残念……あとちょっとだったのに」
「一応聞いておこうかな？
どういうことなのか……教えてくれるかい？」
「もう分かってるんでしょう？
私が吸血鬼だってこと……困るのよねぇ、私の餌場で暴れられると」

餌場か……話し合いで解決は無理そうだな。
でも一応提案だけはしておくか。

「アレクサンドルのグール化を解いてくれないか？」
「あぁ、あれのこと？
あれは私のせいじゃないわよ？
私が来た時にはもうグールだったもの」
「なんだって？！」
「あぁ、それで私の誘いに簡単に着いてきたのかぁ。
大方あの可愛らしい騎士様達を守るためってところかしら？」
「気付いてることもバレてたか……」

それにしてもこの子がグールにしたんじゃないとしたら……一体誰が？
おっと！　あぶない。

「いきなり飛びかかってくるなんて淑女にあるまじき行為じゃないか？」
「いいのよ、ここにはあなたしかいないのだからッ！」

そう言い終わると再び、俺に飛びかかってくる。
避ける、来る、避ける、来る……それを何回か繰り返すと、エルザは大きく距離を取った。

「あなた……一体何者？」
「いたって普通の傭兵だよ？」
「普通の傭兵が吸血鬼の攻撃を余裕を持って回避できる訳ないじゃない！」
「じゃあちょっと異常な傭兵ってことで……。
さて、お前の攻撃は当たらない。
そろそろ俺のターンに移らせてもらおうか」
「くっ……でもまだ私の魔法は味わってないでしょう？」

そうだった！吸血鬼は魔法が使えるんだった！
どんな魔法を使う気だ？！

「ふふふ、喰らいなさい！
，チャーム，！」
「うおっ！？……あれ？」

俺に向かってなんかピンク色の光が来たが、特に異常はない。
何がしたかったんだ？

「え？なんで！？，チャーム，，チャーム，，チャーム，！
ハァハァハァ……これでどう？！」
「……何がしたいんだ？」
「そんな……アンタもしかして女？」
「れっきとした男だ！！」

でもなんで効かないんだ？
……もしかして装備しているポケモンの性別か？
確かに今装備しているのはどっちもメスだけど……まさかそんな理由で？
俺が何故魅了の魔法が通じないのか考えていると、エルザはズーンという擬音がピッタリな表情で凹んでいた。

「動物相手だったら大丈夫だったのに……。」
「人に試したことなかったのか？」
「だってバレたら危ないじゃない！」
「お前もしかして……「そうよ！まだ生まれて５０年も経ってない若輩者よ！」……そうか」
「人の血だって小さい頃にお父様とお母様のお零れしか貰ったこと

ないし……一人立ちしてこの村で少しずつ眷属を増やそうと思ったら、既に他の吸血鬼が手を付けてるし！
気付けば騎士まで派遣されて、今はアンタと戦ってる！
私はどうすればいいのよ！」

俺に聞かれても……なぁ？
俺が戸惑っていると、第三者の声が森に響いた。

「これが同族とは……全く嫌になるな。」
「誰！？」「誰だ！」
「先ほどから見ていたが、エルザとか言ったな？
お前は私たち吸血鬼の恥だな。
人間に存在を知られることを恐怖し、今そこの人間に恐怖している。
見ていて不愉快だ」

誰だこいつ……そんなことより、俺が微塵も気配を感じなかった？
父さんの隠密行動でも多少は気配を感じるのに？

「さっきから言いたい放題言ってくれるわね……だからあんた誰よ！」
「貴様に名乗るのは気が進まないが、そこの人間には興味がある。
故に名乗ってやろう、私の名前はドラコ・ツェペシュ！
三百年の時を生きる吸血鬼だ！
ヘイと言ったな、貴様に私の配下に成る権利をやろう」

……いきなり何言いだすんだコイツ？

第９７話　二人の吸血鬼（後書き）

ツェペシュはヴラド・ツェペシュからとってます。
オリ敵出しましたが、そんなに長い間出すつもりはありません。
っていうか次回でサヨナラします。

第９８話　今出せる全力の力（前書き）

吸血鬼編長いなぁ。
っていうか今回が少し長いかな？

第９８話　今出せる全力の力

突然の勧誘に戸惑っている俺にかまわず、ドラコと言う吸血鬼は言葉を重ねて行く。

「私の眷属たちは最近狩られてしまってな。
丁度強い人間を探していたのだ。
どうだ名誉なことだろう？」
「いや……何言ってんだお前？」
「……何？」
「嫌に決まってんだろうが、何処が名誉なんだよ」
「三百年も時を重ねた最強種の吸血鬼に、その命尽きるまで仕えるのだぞ？
名誉なことではないか！」

俺は反応に困ったのでエルザの方を見ると、ドラコを怖がっているのか震えていた。
同族として恥しいと言われて、悲しんでいるのかもしれない。
どちらにせよ、今はドラコの方が危険だな。

「配下云々にはあまり関係ないが、３つ聞いておきたい」
「なんだ？」
「アレクサンドルをグールにしたのはお前か？」
「アレクサンドル？……あぁあの体格だけデカイ男のことか。
グールになってもそれほど使えなかったので放置していたが、それがどうかしたか？」

「そうか、じゃあ次の質問。
森の辺りで人が血を吸い取られて死んでいたんだが、それはお前の仕業か？」
「小腹がすいてな。
全く美味くない血だったがな」
「そうか、じゃあ最後の質問だ。
彼のグール化を解く気はないか？」
「何故私がそんなことをしなければならん。
それに幾ら役立たずでも、肉壁位には成るだろう？」

あぁ、コイツとは分かり合えそうにないな。
グール化は解けそうにないか。
いやそれ以前にコイツ……手加減できる相手じゃなさそうだな。
アレクサンドルの件は諦めるしかないか……タバサになんて言おうか。

「ＯＫ、分かった」
「そうか、なら貴様を私の眷属に「お前はここで消す」して……なんだと？」
「聞こえなかったか？
ここで、お前は、消す。
俺はそう言ったんだ」

ドラコは俺の言葉が想定外だったのか、目を見開いて茫然としている。
まぁ価値観が違いすぎるし、俺はグールになんかなりたくない。

「アンタ！分かってんの？！
相手は三百年生きた吸血鬼なのよ？！
私と一緒だと思ったら大間違いなのよ？！」
「なんだ？　心配してんのか？」
「そんなんじゃないわよ！
アンタは私の眷属にする予定だったんだから、グールにする前に木っ端みじんにされたら困るじゃない！」
「……いや、お前の眷属になる気は微塵もないぞ？
アイツの眷属になる気もないが」

っていうかこいつ、こんなこと考えてたのか……ドサクサにまぎれて噛まれないように気を付けよう。

「はは……ははは……中々舐めたことを言ってくれるなぁ、人間」
「あぁ再起動したのか？」
「たかが人間風情が、この私を消す？
ははは……あまり私を怒らせるなよ？
最後のチャンスだ人間。
私の眷属に成れ」

さっきまでは気配が稀薄だったが、今は凄まじい殺気が俺の方に向けられている。
バジリスクの時に感じた獣じみたものではなく、俺を殺すという意思が凄まじいくらいに込められている。
恐らく断った瞬間に戦いが始まるだろう。

「答えは……ＮＯだ」
「そうか、残念だ。
なら貴様が死んだ後、その死体を駒として使うことにしよう」

そう言ってドラコはエルザよりも数段速いスピードで、俺に接近して爪を振るってくる。
俺も伊達に反射速度は悪くないけど……これは少しヤバいか？
一応今のところ当たっていないけど、このローブじゃなかったらもう服はズタボロだっただろう。

「ほぅ……貴様もまだ力を隠していたというわけか。
ますます貴様のことを欲しくなった」
「いや、気持ち悪いから勘弁してくれ」
「本当に残念だ」

俺は腹部に向かって放たれた抜き手をバックステップで避ける。
しかしそこで予想外のことが起きた。

「な？！……グッ！」
「人間は脆いなぁ……腹を貫かれただけで致命傷になるのだから！」

アイツ、抜き手の瞬間に爪だけ伸ばしやがった！
くっそ……すっげぇ痛ぇな。
取りあえず前蹴りで距離を取ったけど、このままだと出血死しちま

う。
それにしても防御特化のポケモン二匹でも貫通するってドンだけ爪鋭いんだよ。

「貴様はもう動けまい……さて次は貴様だな？」
「え？　私？」

奴は俺から視線を外し、エルザへと向き直った。
どういうことだ？

「何で……私も吸血鬼なのよ？」
「貴様は吸血鬼ではない。
只の臆病者だ。
そんなものが我らの同族と思われると、困るのだよ。
人間が我らに向ける感情は恐怖でなければならない。
決して自分が上位と思わないほどの恐怖……貴様はそれを感じさせるだけの力も才能もない。
ならここで同族としての優しさで、引導を渡してやろう！」
「そ……そんな……嫌！」

エルザはドラコに背を向け走り出すが、速さで奴に勝てるはずもなく、あっけなく足を切り落とされてしまった。
走った勢いそのままに転がったエルザを、ドラコはまるでボールの様に蹴り飛ばした。
流石にこの光景は見ていてキツイものがあるな・・・・・・。
先ほどまで命のやり取りした仲だが、見た目は可愛い人間の女の子

に過ぎない。

「あぁスマナイ、貴様が小さくて手が滑ってしまった」
「アァァァァ！！！！」
「しかし五月蠅いな……もう少し傷めつければ静かになるか？」

そう言って奴はエルザの頭を掴み、自分の眼前まで持ち上げた。
そして手を小さくふるうと、地面に白く小さな４本の指が落ちる。
また大きな悲鳴が響く。
その声が不快だと言い、また指を落とす。

なんだこの光景は……。
子供が壊されていく？
あぁ駄目だ、これは駄目だ。
不快だ、不愉快だ。
目の前の存在が不愉快だ。
ならどうする？……全開で叩き潰す。
俺は今まで人の眼と力の大きさを気にして、使ってこなかったものを使うことにした。

「（装備ＡＩＤＡ、こうてつ、セレビィ）じこさいせい」
「なんだ？」

俺の声を聞いて奴がこっちを振り向く。
既に腹の傷は表面上塞がっている。

「……誰だ貴様？」
「さっきお前が腹に穴開けた奴だよ」

今俺の姿は髪の毛がセレビィの様に緑に成り、腕はギラティナを模した黄色と黒の鉄鋼の様なものに包まれ、ローブの下はメタグロスの特徴、胴体に×印が付いて青く染まっている。

「へ……イ？」
「正直助ける気は毛頭なかったんだけどな……やっぱり子供が壊されていくところは見たくない」
「幾ら貴様の姿が変わろうとも、人間には変わりなかろう！」

ドラコはエルザを投げ捨てて、俺に向け先ほどよりも早いスピードで爪を突き立てる。
奴は先ほどの様に俺が倒れると思い、笑みを浮かべている。

「やはり人間は所詮「で？」にん……げん？」
「今度はこっちの番でいいな？
アームハンマー」

俺は今だ腹部に突き立てている奴の腕に拳を叩きつけた。
すると何の抵抗もなくその腕は殴った部分だけが千切れ、物凄い勢いで地面に叩きつけられた。

「何？」
「あぁ済まない、手が滑ったんだ。
あまりに触れられていることが不愉快で、ついやっちまった」
「私の……腕が……私の腕、私の腕がーーーーーーーーー！！！！！」

ドラコは自身の腕を押さえながら俺から距離を取った。
エルザも突然の展開に目を見開いている。

「人に見られると困るから、早めに終わらせるぞ」
「なん・・・・・・だと？」
「シャドーダイブ」

俺は自身の影に潜り移動を始めた。

「何処に行った！！」
「ここだよ」
「な？！」

奴の影から素早く出てきて、抜き手で奴の胸を貫いた。
意趣返しと言うわけではないが、少しだけスッとした。

「追撃だ、シャドークロー。」

「ガハッ！」

俺はそのままドラコの胴体を影の爪でなぎ払って、上半身と下半身を分断した。
奴の息はまだあるようだが、念には念を入れることにする。

「かいふくふうじ、そして……。」
「止めろ！私は三百年の時を生きた吸血「関係ないな」貴様！」
「じゃあな、サイコキネシス」

サイコキネシスで奴の身体に圧力を加えて、磨り潰していく。
ギチギチと言う音と、時折聞こえるボキッという骨が折れる音。
しばらくするとそこには赤い血溜まりしか残っていなかった。
一応錬金でその場を元の状態に戻し、血は水で流した。

「これでやっと終わりか……。
あぁ痛かったな。
一応もう一回掛けておこう。
じこさいせい」

これでダメージは飛んだ。
さて次はエルザをどうするか……。
俺は今だ状況が掴めずに、血溜まりがあったところをジッと見ているエルザを見ながら、これからのことを思った。

第９８話　今出せる全力の力（後書き）

はい、ドラコしゅ～りょ～

第９９話　無償の愛（前書き）

吸血鬼編もそろそろ終わる。
ふぅ……

一つ読者の皆さんに質問があります。
後書きに書いておきますので、もしよろしければ読んでください。

第９９話　無償の愛

ドラコを倒し、ポケモン三体の装備を外した俺は、もう一人の吸血鬼を前に非常に困っていた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな「いや、もういいから」ヒィ！」

こんな感じで怖がられ続けてます。
はぁ、どうしようか。

「取りあえず足と指持ってきたけど、自分で治せるか？」
「は、はい」
「じゃあホレ」

俺がエルザの眼の前に足と指を置くと、エルザは一回俺の顔を見てから足と指を自分の方に動かした。
じゃあ治している間に少し話しておくか。

「治しながらでいいから答えてくれ」
「はい」
「吸血鬼は人間の血を吸わなければ生きていけないのか？
っていうか人間の食事じゃ駄目なのか？」
「いいえ、でも人間の血は他の食べ物に比べて美味しいですね」

嗜好品ってことか・・・・・・。

「そうか、では次の質問。
眷属を作ったことは？」
「まだ人間の眷属は作ったことない・・・・・・」
「人間以外も眷属にできるのか」
「ヘイさんは・・・・・・私を殺すの？」

それを考えているんだよ。
本人曰く人に危害を加えてないからな・・・・・・まぁ俺は襲われたが。
でも一般人にとって吸血鬼の能力は危険すぎる。
やっぱり殺した方が良いんだろうか・・・・・・。
そんな俺の考えを読みとったのか、身体が震え始めている。

「わ、私何でもしますから！
殺さないで！！」
「あ～・・・・・・じゃあ村長に話してから決めるか？」
「え・・・・・・おじいちゃんに？」

正直今回エルザは任務対象外の可能性結構あるんだよな。
俺としても亜人と言う理由で迫害するのもなんかな・・・・・・。

「今までお前がどれだけ猫かぶってたかを、想像することは難しくない」
「・・・・・・」
「でも村長がお前に向けていた愛情は、曇りの無いものだったと俺は思う。
だからお前が吸血鬼であるということを村長に話して、おじいさんの対応次第で決めることにする」
「・・・・・・どうせ、殺してくれって頼まれるからいいよ。
なら今殺して・・・・・・貴方なら一気に殺す方法もあるんでしょ？」

エルザは俯いてそう呟いた。

「何でそう思う？
村長はお前に愛情を注いでいただろう」
「だって！・・・・・・だって私吸血鬼じゃない！
直ぐ近くに捕食者がいる状況を許す人なんているわけないじゃない！」
「確かにそうかもしれない。
でもそれは話が通じない場合だ。
・・・・・・お前が嫌がっているのは、村長に拒絶されることじゃないか？」
「ち、ちが・・・・・・・・違わないのかもしれない。
おじいちゃんは、私のことを本当の孫の様に可愛がってくれた。
最初は何回も後ろから血を吸おうと思って近づいたんだけど、その度におじいちゃんはタイミング良く私の方を向いて、頭を撫でてくれた」
「（もしかして・・・・・・）ならどっちにしても村長に会った方

がいい。
きっとここで居なくなったら村長は死ぬまで心配し続けるだろう」
「・・・・・・分かったわ。
でももしおじいちゃんが私の討伐を頼んだら、苦しくないようにしてね」
「……あぁ、分かった」

多分大丈夫だと思うけどな。
俺の予想が正しければの話だけど・・・・・・。

「おじいちゃん・・・・・・ただいま」
「おぉ！エルザ！
何処に行ってたんだ、こんな夜更けに！
心配したじゃないか」
「そ、それは・・・・・・「そこから先は私が説明します」ヘイ」

「ヘイさん？
貴方も一緒だったのですか？」
「はい、でもそんなことより重要なお話があります。
吸血鬼は退治されました」
「え、えぇ。
そうですね、先ほどまで宴を開いていたくらいですからね」
「マゼンタさんとアレクサンドルのことですか？
あの二人は違います。
確かにアレクサンドルはグールでしたが、マゼンタさんは吸血鬼ではありませんでした」
「！？……そうだったのですか。
では吸血鬼は一体どこに？」

エルザはさっきから下を向き続けている。
吸血鬼と言う単語を聞くたびに肩を震わせながら……。

「森の中で先ほど出会いました。
苦戦はしましたが、なんとか倒せましたので、もう問題はないでしょう」
「そうですか、それは良かった！
大変なお仕事お疲れ様です……あぁ私としたことが、今何か飲み物でも「いえ、今は話を聞いてください」・・・・・・」
「確かに俺は村人を襲っていた吸血鬼を倒しました。
ですがこの村にはもう一人吸血鬼がいます。」

俺の言葉を聞いて、村長の動きが止まった。
そしてドンドン顔が無表情になっていく。

これはやっぱり・・・・・・。

「今回はその吸血鬼につい「エルザ！逃げなさい！」・・・・・・」
「おじいちゃん！？」
「ここは私がなんとかする！
だから早く逃げなさい！」
「やっぱり知っていらしたのですね・・・・・・」

俺は村長に羽交い絞めにされながら、会話を続ける。
エルザはこの状況についてこれていない。

「エルザは・・・・・・エルザは確かに吸血鬼かもしれない！
じゃがこの子は私の命だ！
その子を殺させるわけにはいかん！」
「お・・・・・・おじいちゃん・・・・・・」
「じゃあ今後も村長は、この子が吸血鬼であることを村人に隠し続けるんですね？」
「もちろんだ！
もしもバレたとしても、私の命を掛けてでも逃がして見せる！」

もうエルザは膝をついて、ただ泣き続けている。
これでエルザの処置は決まった。

「分かりました。
俺達は森で本当の吸血鬼を倒し、村には平穏が戻った。

そう言うことにしておきます」
「え？」
「おじいちゃん・・・・・私頑張るから！
他の人にバレない様に頑張るから！
だから・・・・・だからまた一緒に暮らしてくれますか・・・・・？」
「後は村長、貴方次第です」
「ヘイさん・・・・・分かりました」

村長は、俺の顔をしっかりと見つめ、深く頷いた。

「エルザ・・・・・これから一層大変な生活に成るかもしれない。
それでも良かったら・・・・・また私と一緒に暮らしてくれないか？」
「うん・・・・・うん！」

ふぅこれで一件落着かな？
今回はキツイ一件だったなぁ。
あ・・・・・そういえばアレクサンドル今頃灰になってるんじゃ・・・・・。
後で大変なことになりそうだな。
まっ・・・・・でも一応ベストではないが、ベターなエンドだろう。
俺は抱き合っている二人を見ながらそんなことを考えていた。

第９９話　無償の愛（後書き）

次で吸血鬼編が終わる。
そして１００話目になる。
……外伝案多くて迷うなぁ。

感想で「後書きの部分に何も書かないでください。」という意見がありました。
もし後書きを書かない方が良いという意見が多ければ、今後後書きには何も書かないようにします。

第１００話　吸血鬼の少女（前書き）

ついに本編１００話目到達。
次に外伝挟んで、デルフ購入イベントに行くか……。
正直本当は地下水イベントとかあるんだけど、あれはスキップします。

第１００話　吸血鬼の少女

あの後シルフィードの部屋にアレクサンドルがどうなったか確認しに行くと、部屋にはタバサも来ていた。

「あ！レ・・・・・・ヘイ！
アレクサンドルが！」
「あぁ、そのことについて話がある」
「・・・・・・捕まえられなかった？」
「あぁ、予想以上に強くて捕まえる余裕がなかった」

後俺の精神状態的に。
やはりタバサは少し沈んでしまったか……。

「残念だったのね・・・・・・ってヘイ！
お腹の部分に穴開いてるのね！」
「！？」
「あぁ、一回爪で貫かれてな・・・・・・流石に死ぬかと思「大丈夫？！」った」

タバサが服の袖を握りながら聞いてくる。
心配してるのか？

「あぁ・・・・・・もう治ってるしな。

でも出会ったのが、タバサやシルフィじゃなくて良かったよ。」
「・・・・・・何で？」
「そうなのね！　私とお姉さまなら負けないのね！」
「三百年生きた吸血鬼が相手でもか？」
「「・・・・・・」」

あ、黙った。
確かにあれともう一回戦えって言われたら遠慮したいな。

「流石に２０年位の経験じゃ厳しかったよ」
「エルザってそんなお婆ちゃんだったのね、きゅいきゅい！」
「いや、エルザは違った。
俺が倒したのは森であった男の吸血鬼だ。
名前は確かドラコ・ツェペシュだったかな？」
「ドラコ・・・・・・串刺しドラコ？！」
「有名だったのか？」

っていうか串刺しでツェペシュって・・・・・・どっかの貴族だったのか？

「最近、村丸ごと眷属にしたドラコを討伐するため、一個中隊で向かったけど取り逃がした」
「アイツもそんなこと言ってたな・・・・・・眷属に成れって誘われたし」
「・・・・・・無謀」
「それは俺がか？それともドラコがか？」

「両方」「両方なのね」
「そりゃ手厳しいな。
なんにせよ、もうこの任務は終わったんだろ？
なら明日の朝一でこの村を出よう。
いい加減授業の準備をしないとヤバい」
「分かった」

翌日の朝。
俺は一人村長の家に居た。

「もうそろそろ俺は行きます」
「そうですか・・・・・・残念です」
「あとマゼンタさんはどうするんですか？」

「昨日話したところ、親戚の家にお世話になると言って、朝日が昇りきる前に村を出ました・・・・・・。
自身が吸血鬼として疑われたこともショックだったようですが、それ以上にアレクサンドルがいなくなったのが村を出る理由だったみたいですね」
「そうですね、仲の良い親子のようでしたから・・・・・・。
あぁ注意を一つ、エルザのことは話してませんが、バレたらまた騎士が派遣される可能性が高いです。
本当に気を付けてください」
「ヘイさん！」
「はい？」
「エルザのこと本当にありがとうございます！」
「いいえ、偶々ですから・・・・・・」

本当に大事なんだな。
良かったじゃないかエルザ。
吸血鬼としては半端ものと馬鹿にされても、どんな時でも味方になってくれる人が一人出来たんだ。
それは誇るべきことだ。

「ヘイさん、もし私に何かあったら、あの子を頼みます」
「それは・・・・・多分厳しいです。
実は俺はガリア住まいではないのです。
故に直接的に力になることは難しいかもしれませんが、どうしても助けが必要なら黒の鉄球団を頼ってみてください。
彼らなら力を貸してくれるかもしれません」
「黒の鉄球団ですか・・・・・・分かりました」

後でチャンに話しておかないとな。
流石に投げっぱなしは不味いだろうし・・・・・・。

「おじいちゃん、誰か来てるの？」
「エルザ、ヘイさんがもうそろそろここを出るって、言いに来てくれたんだ」
「・・・・・・もう行くの？」
「あぁ、村長と仲良くな？」

俺は小さく「後あの時のことは誰にも話さないでくれよ？」と彼女に耳打ちした。
言いふらすとは思えないが、装備のことは本当にバレたら不味いからな・・・・・念のため念のため。
エルザは少し俯き、悩んでから俺の顔見た。

「一つ条件があるわ・・・・・少ししゃがんでくれる？」
「なんだ？　俺の血を吸う気か？」
「あなた、私がそんな事した瞬間に殺す気でしょ。
私も死にたくないもの、しないわよ。
ちょっとしたお礼よ」

お礼？
なんだ子供らしく花の首飾りでもくれるのか？
俺はそんな風に考えながら、しゃがんでエルザを見た。

「じゃあ目を瞑って」
「・・・・・本当に血を吸う気じゃないだろうな？」
「どれだけ信用ないのよ私は・・・・・・いやまぁ当たり前なんだけど、少し位・・・・・・。
良いから目を瞑る！！」
「はいはい」
「良いって言うまで目を開けちゃだめなんだからね！
すぅ～はぁ～・・・・・・よし！」

何をする気やら・・・・・・。
なんだ気配が近づいてきて、な！？
俺は頬に柔らかい感触を感じて目を見開いた。
偶々朝食の時下半分の仮面を外してたから・・・・・・ってそれどころじゃない！

「い、命の危機を救ってくれたお礼なんだからね！」
「あ、あぁ」
「くすくす、エルザ？　お顔が真っ赤だよ」
「おじいちゃん！」

俺は少し茫然としていたが、さっきされたことを思い出して、顔が一気に赤く染まる。
二人で顔を真っ赤にしている中、村長はずっと微笑んでいた。

「また・・・・・・来なさいよ？」

「頻繁には来れないけど、ガリアに来た時は寄らせてもらうよ」
「後・・・・・・何か困ったことがあったら、一回だけ助けてあげる」
「寧ろ俺が助ける側に成りそうだけどな。」
「良いから！　分かった？！」
「あぁ、分かったよ。
これから大変だろうけど・・・・・・頑張れよ？」
「分かってる、この日常は壊さないわ。
折角拾った命だもの、大切にするわ」
「それなら良かった。
じゃあ、またな」
「・・・・・・またね」

あの後俺はいつも通り黒の鉄球団が集まる酒場で、タバサとの待ち合わせの時間まで時間を潰した。
その時にチャンに亜人について、どんな感情を抱いているか聞いてみると「見た目が面白い人間」と言った素晴らしい回答を返してきた。

その回答を信じ、俺は「何時かここに亜人の子が来るかもしれないから、その時は匿ってやってくれ」と頼み込んだ。
チャンは少し悩んで「いい子なのか？」と聞いてきたから、俺は「あんないい子はそういない」とチャンの顔をジッと見てそう答えた。
結果「じゃあ、分かった。その時が来たら任せろ」と頼もしい答えが返ってきた。
これでエルザはきっと大丈夫だろう。

その後はいつも通りドンチャン騒ぎして、タバサと一緒に学院に帰った。
そう言えば最近ルイズ嬢と授業以外で会ってないな・・・・・よし、今度の休日はルイズ嬢を誘って、何処かに出かけるかな？

第１００話　吸血鬼の少女（後書き）

次は外伝だ。
何書くかな……。

若干修正。
そして、忘れてましたよ仮面あったらキス出来ねぇじゃねぇか！
そこも若干修正。

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……（前書き）

今から外伝タイムです。
予定は今回のｉｆ他世界進出
ｉｆレッドｖｓ烈風
の二話を予定しています。

取りあえず有名どころに飛ばしてみます。
あと基本会話文でこの話は形成されます。
文間は頑張って読んでいってねｗ

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……

～ネギまな世界へ～

その１　日常

「……ザジさん、どうして俺に着いてくるのかな？」
「……。」
「いや出さないよ？！
こんなところで出したら大騒ぎになるでしょうが！」
「……。」
「はぁ……分かったよ。
今度サーカス見に行った時に出してあげるから、それで勘弁してくれよ？」
「……（コクリ）」

「ザジさん？
先ほどレッド先生と何を話していらしたの？」
「……。」
「ポケモンってなんですの？」
「……。」
「そんな生き物聞いたことないですわ！」
「……。」

「いいんちょとレッド先生って、何でザジさんと普通に会話できる

のかなぁ？」
「何も喋ってない様に見えるのに、会話出来てるなんて不思議です。
」

その２　バトル

「お前の力を私に見せてみろ！」
「吸血鬼との戦いはこりごりなんだけどな……。」
「来たれ氷精、闇の精。」
「氷系か……なら鋼かな？」
「闇を従え」
「装備、こうてつ。」
「吹雪け常夜の氷雪！」

「流石に痛寒いな。」
「何で貴様、直撃でその感想なんだ！？
普通は凍りつくなり、貫通するんだぞ？！」
「まぁＬｖ１００のメタグロスは伊達じゃないってことで……。」
「なんだその理由はーーーーーーーーー！！！！」
「じゃあ今度はこっちの番かな？」
「なんだ杖も持たずに手を突き出して……。」
「防御するなり、避けるなりしてくれよ？
破壊光線。」

「いやぁ……やりすぎちゃった♪」
「貴様！！私を殺す気かーーーーーーー！！」
「信用の現れ？」
「思ってもないことで誤魔化すな！
掠ったものが消滅するようなものを人に向けて放つな！！」
「いや、エヴァ吸血鬼じゃ「五月蠅い！！」……理不尽だなぁ。」

その３　無双

「レッド先生の実力見せてもらうよ？」
「出来れば見ないでくれれば嬉しいかな？」
「レッド老師の本気？見てみたいアル！」

「流石にリアル百鬼夜行を見る羽目になるとは……長生きするもんだね。
まぁまだそこまで長生きしてないけどね！」
「なんじゃ、応援かのう？」
「レッド先生！ここは大丈夫だからネギを追って！」
「それは良い提案だ……まぁ一発かましてからそうすることにするよ。」
「え？」
「さぁ久しぶりの全開だ！

神楽坂、桜咲、どっかに隠れてた方がいいぞ？
装備ラオウ、ＡＩＤＡ、こうてつ、ギドラ、ハク！」
「レッド先……生？」
「さぁ、バトルしようぜ！」

「……あれはなんだい？」
「あれは歩く天災アル。」
「あぁ良い例えだね。
バカレンジャーとは思えないね。」

「はっはっは！！纏めて潰す！
りゅうせいぐん。」
「なんや、何もおこらんやんか……見かけ倒しか？。」
「ちょっと待て、何か音がしないか？」
「上見てみ上。」
「「上？」」
「星が……降ってくる？」
「ガンバ！」
「ふざけんなやーーーーーーーーー！！！」

「……地形が変わったよ？」
「……老師を怒らせるのは絶対駄目アル。」
「そうだね……。」

～リリカルな世界～

その１　日常

「いやね、俺としてもそんなつもりなかったわけで……。」
「だが実際この状況は引き起こされている。」
「どうすんだよレッドォ。」
「取りあえず逃げるか？」

「出来ましたよ～シャマル特製オムライス！」

「「「「（遅かった！）」」」」
「御代りもあるからドンドン食べてくださいね？」
「あ、あぁ美味しそうな色だなぁ！」
「そ、そうだな！」
「この紫色のソースが、黒いオムライスに毒……いや色を添えているな！」

「……この場に主がいなくて良かった。」

「「「レッド、お前が最初に食え！」」」
「何でお……いや言いだしっぺだしな。
よ～し、ふ～……戴きます！」
「ハイどうぞ？」
「骨は拾ってやるぞ……。」
「お前はまさに漢だ……。」
「貴様の犠牲は忘れない。」

「いや……ふつ……ふ……ふつふつふつつつつつつつつ。」
「どうしたのかしら？」
「「「（やっぱり駄目だったか！）」」」
「それじゃ皆も食べましょ！」
「「「（こっちに矛先が？！）」」」
「はやてちゃんまだかな～。」
「「（このままだと主が？！）戴きます！」」
「おい！シグナム！ザフィーラ！」
「……我が人生一片の悔いなし！」
「ワンワンワン、キャインキャイン！」
「全くみんなどうしたの？」
「（ヤバい、あれは明らかにヤバい）私はちょっと出かけて「駄目よ～折角作ったんだしご飯食べてからにしてね。」……。」
「（え～いままよ！）パクッ！」

「どうしたのかしら皆？」
「皆～帰ってきたで～。」

「はやてちゃんお帰りなさい！」
「「「「（逃げろ！急いで逃げるんだはやて！）」」」」
「実は私オムライスを……。」

その２　バトル

「なのは嬢、ここで何をしているのかな？」
「にゃ？！何でここにレッド先生がいるの？！」
「ここには結界が張っていたはずなのに……もしかして魔導師？」
「いや最初からここに居たんだが、まぁいい。
あのでっかい木はなんだ？
なんか凄く暴れてるんだが……。」
「そうだった！先生は危ないからここにいて！
行くよレイジングハート！」

「なぁイタチ君……あれは危なくないの？」
「とても危険ですが、僕にはあれを倒すだけの力がないんです。」
「はぁぁぁ……ここでも魔法とやらに関わるとはな。
じゃあ教え子を助けに行くとしますか！」
「え？でも貴方はリンカーコアが……。」
「そんなものは知らない。
でも俺には相棒達がついているんでな！
来い、テルー！」

「召喚魔法？！」

「なのは嬢、危ないことは大人に任せないと駄目じゃないか……唯でさえ御両親が怖いんだから。」
「にゃ？！なんで先生がここに？！
あれ？これさっきも言ったような……そんなことはどうでもいいの！
それにその大きな鳥さんはなんなの？！」
「あぁこの子？
テルーって言うんだ。
よろしく。」
「あ、よろしくなの……って違う！
危ないから先生達は下がっててて！」
「いやね、むしろ下がるのはなのは嬢だと思うよ？」
「え？」
「燃えたくなかったらね！
行け、だいもんじだ！」
「魔法……？」
「いや、技だよ。」

その3　無双

「と言うことはあの防衛プログラムとやらを壊せばいいんだな？」
「だから今から衛星軌道上に上げて、アルカンシェルを撃つって言う話になっただろう！」
「ＯＫ、じゃあ俺が一番槍行かせてもらうわ。

でも……別に壊してしまっていいんだろ？」
「なんか危ない発言の様な気がするが……やれるものならやってみるといい！」

「レッド先生は何をする気なの？」
「ねぇなのは？あの人はそんなにすごい人なの？」
「私にもよく分かってないけど、凄い召喚魔法を使えるってことだけは知ってるかな？」
「アイツは肉弾戦も出来るぞ？」
「そうだな、私の剣を受け流していたから、なかなかの腕だろう。」
「要するに凄い人みたいだね。」

「じゃあ特攻系で固めるか。
装備ギドラ、カイリュー、テルー、ナズチ、セレビィ。」

「先生の見た目が変わった……バリアジャケット？」
「いや、違う。
魔力は検出されていない！」
「色や形はちぐはぐ、でも凄いプレッシャーを感じる。」
「アイツはあんな力を隠していたのか……。」

「あれはタイプ的に何タイプなんだろう……悪かな？
じゃあきあいだまが効くかな？
ま、一発じゃなくてもいいならいっぱい撃つとしますか！
行くぞ！」

「あの人は何個属性変換技能を持っているんだ？」
「最初の丸い玉はなんの属性か分からないけど、火は確定ね。」
「次に撃ったやつはなんか葉っぱが飛んでったぞ？」
「最後のは……隕石？」
「何なんだアイツは！」

「よし、消滅までは行かなかったけどこれでどう……ってどうかした？」
「「「「「さっきのは何！」」」」」
「技？」
「「「「「あんな技があってたまるか！」」」」」

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……（後書き）

飛ばした先はネギまとリリなの
一応他にも、とある、恋姫、東方辺りも少し考えたんだけど、それらはもし機会があれば書きます。

テルー：ホウオウＬｖ１００
ナズチ：ジュカインＬｖ１００

ついにＬｖ１００が２８匹になりました。

ＩＦ外伝　レッドｖｓ烈風（前書き）

これは二戦します。
一戦目は泥水ｖｓ烈風
二戦目自重？何それ美味しいの？ｖｓ烈風

ＩＦ外伝　レッドｖｓ烈風

「それではお二人には、これからここで決闘してもらいます。
ここでの戦いは本編には関係ないので、本気で戦って結構です。
一応私作者ですので、作品内ならザオリクとか使えます。」
「いや、無理だろ……勝てるわけないぞ？」

だってこの人一人で高さ二百メートルの竜巻作れるんだよ？
もう桁がおかしいもの。

「面白そうですね、一回レッド殿とは戦ってみたかったので……良い機会です！
貴方がカトレアに相応しいかどうか、ここではっきりさせましょう！」
「うわぁノリノリだぁ……。」
「あぁ逃げるのは無理ですよ？
ここは閉鎖空間ですから。
情報思念体とかいないので、介入は誰にもできません。」
「なんか聞いたことあるネタだな……。」
「気のせいです。
それでは私はこの辺で……また会いましょう！」
「オイ！ちょっと……。」
「レッド殿、合図はコインが地面に着いたときでいいですね？」
「本当にやるんだ……なら出来る限り頑張るとしますか！」

第１戦　泥水ｖｓ烈風　Ｒｅａｄｙ　Ｆｉｇｈｔ！

「行きますよレッド殿。
これぐらいは防いでくださいね？
エア・カッター！」
「まぁ、この位な……いやいやサイズが可笑しいですよ！！！！」

俺に向かって飛んできてるのは直径６メートル風の刃。
それが凄いスピードで飛んでくる。

「ロック・ウォール！」

目の前に分厚い石の壁を出したのだが、風の刃が触れた瞬間にドンドン削り取られていく。
３メートルの厚さがあった、石の壁も十秒ちょっとしか持たなかった……化け物かあの人は？
俺は石の壁を両断した刃をしゃがんで避けたが、既にカリーヌさんは次の手をうち始めていた。

「守るだけじゃ私には勝てませんよ？
カッタートルネード！」
「今度はスクウェアスペルですか……。

俺を竜巻で囲むとか……俺にどうしろと？」
「努力なさい！」

うわぁ無茶ぶり～！
しかもこの竜巻段々狭まってきてない？
確かこの魔法って、触れたものを切り刻むんじゃなかったっけ？

「殺す気ですか！？」
「死んでも生き返るのなら大丈夫でしょう。」
「マジかよ……流石にそれはやり過ぎでしょうが！
プリズンロック！」

ヤられる前にヤってやる！
俺はカリーヌさんを石の箱で包み込むとその内部に棘を生やして、
ドンドン内側に進めて行く。
そして針が反対の壁に着いたのでそこで進行を止めた。

「ふぅ、俺の勝ちだ……あれ？なんで竜巻が残ってるんだ？」
「それは私が生きているからですね。」
「！？」

気付けば俺の背後にカリーヌさんが俺の首に剣を添えていた。
……遍在か。
これだから風のスクウェアは！！！

「貴方の負けですね？」
「……そうですね。」
「はーい、お疲れ様です！
一回戦はこれで御終いに成ります。
続いて二回戦の準備をしてください。」
「は？二回戦？」
「今私が勝ったので御終いじゃないの？」
「はい、次はレッド君に全力を出してもらいます。」

まさかとは思うんだが、ポケモンのことか？
いやいや、だからあれバレたらヤバいって作者知ってるだろうに……。

「……それはどういうことかしら？
さっきの戦いでは手加減をしていたってこと？」
「簡単に言えばそうなりますね。」
「おい作者！お前何考えてやがる！！」
「大丈夫ですよレッド君！
ここでのことは本編には関係ありませんから！」
「……レッド君？
説明お願いできるかしら？」
「いやぁ……それは……。」
「まぁ取りあえず切り札が解禁になったとでも思ってください。
それでは二回戦の準備を始めてください。
私はここら辺でドロンします。
頑張ってくださいね～。」
「またか！！」

第２戦　レッドｖｓ烈風　Ｒｅａｄｙ　Ｆｉｇｈｔ！

「あのですね、カリーヌさん？
手加減とかそういう訳ではなくでですね……？」
「分かってますよ？
貴方にとって私が本気を出すに相応しくなかったということですね？
なら私も自重を捨てましょう。」

や……ヤバい。
殺気が、殺気が飛んでくる。
しかもしょっぱなから遍在四体出してるんだけど……。
本当に自重しないなこの人……じゃあ俺だって！！

「装備ガイガン（アーマルド）、みずち（ダイケンキ）！」
「装備？……なに、それ？」

今俺の見た目は両手が鎌の様になり、額には角の様な巻き貝が生えて、髪の毛の色は青く染まった。
俺の突然の変身に驚いて、カリーヌさんは一瞬動きが止まったが、そのまま突撃かましてきた。
そして四方を取り囲まれた俺だが……何もできないわけじゃない。

「なみのり。」
「な？！これだけの水の召喚はスクウェアでも……。」

俺は波の上に胡坐をかきながら、カリーヌさんの偏在を波に飲み込ませる。
流石にt単位の水は耐えられなかったか……。

「なるほど……確かにさっきは手加減していたと言われても納得ですね。
ですが、私も負けるのは好きではないので、勝ちに行きますよ？」
「いえいえ、そんな本気にならないでください。
俺困りますから……。」
「謙遜も過ぎればよくありませんよ？
（あれだけの水を召喚しても精神力が切れない。
と言うことは持久戦はレッド君に分がある。
なら一気に決める！）」

何か考えてる……今がチャンスか？
なら今度は俺から攻めよう。

「ハイドロポンプ。」
「！？ストーム！！」

カリーヌさんは横っ跳びして転がった。
ハイドロポンプ直撃はヤバいと感じたんだろう……実際当たったら骨折は確実だからな。
ハイドロポンプを避けながらも、カリーヌさんは魔法を放ってきた。
それも規格外の魔法を……。

「竜巻四本に囲まれた気分はどう？」
「ははは……凄い圧迫感と風を感じますね。」
「その４本は徐々に中心に向かって進んでいるの。
もしすべてが中心に集まってぶつかりあった時、その中にあるものは切り刻まれて粉になるわ。」

……やっぱり殺す気じゃねぇか！！
っていうか粉になるってなんだよ！
肉片すら残らないとか……オーバーキルだぞ？

「ならこっちも自重を止めます。
殺す気でいきます。
つるぎのまい。
つるぎのまい。
そしてストーンエッジ！」
「何をする……え？」

超高速で地面から飛び出た石の刃が、カリーヌさんの肉体を容赦なく壊していく。
初弾で右腕を掠った……結果右腕がはじけ飛んだ。

次弾で左足から左肩まで一気に切断。
後はただただ目の前でミンチが作られていく。

「作者！！早く！！
早くカリーヌさんを治してくれ！！」
「は～い。
うわ……グロッ！！」
「良いから早く治せ！！」
「ザオリク。」

目の前に眩い光が現れ、カリーヌさんが光に包まれた。
すると怪我ひとつないカリーヌさんが現れた。

「すみません……やりすぎました。」
「？なんのこと？」
「え、ついさっき俺がカリーヌさんを……。」
「あぁ、あの時の記憶は消してあります。
じゃないと、とんでもない痛みの記憶が残ってしまいますから。」

そっか、良かった。
自分でやっといてなんだけど、なんであんなことを……。

「あぁそれは私が、二人が本気で戦えるように罪悪感を薄めたからです。
相手を殺すような攻撃をしても、心が痛まないように。

出ないとレッド君は本気を中々出せないでしょう？」
「……お前、ろくなことしないな。」
「だって、二人の戦いを見たかった人もいた様ですから……。」
「……。」
「おっと、そろそろタイムアップですね。
では今回のことは完全に記憶から消しておきますので、あの世界での生活頑張ってくださいね？」
「おい！」

作者がその場から消えると、世界が白に塗りつぶされていく。
カリーヌさんはもう既にここに居ない。
残っているのは俺だけだ。

「崩れて行く世界を体験するなんて……要らない経験だな。」

俺はそう呟いて、世界と共にその場から消えた。

ＩＦ外伝　レッドｖｓ烈風（後書き）

あれ？俺最低なキャラになってね？
……いやこれは作者と言う新キャラクターだ！
俺じゃない、俺じゃないんだ！！
……もう作者を作品内に出さないからな！！

本当は外伝四話書く予定だったんですが、構成が思いつかなかったので、今回は二話にしておきました。
今後ＩＦ外伝についてはノリでアップするか、感想で求められた場合に書きます。
ＩＦ外伝は結構書くの大変だった……終わらせるのが難しいですね。

第１０１話　追跡する者される者

虚無の休日の前日。
夜、俺は久しぶりにルイズ嬢の部屋に居た。

「兄様、今日はどうしたの？」
「あぁ、明日予定入っているか聞きに来たんだけど・・・・・・お邪魔だったかな？」

俺は視界の隅っこに、サイトがボロ屑の様な状態で転がっているのを見て、苦笑した。
何をやったのやら・・・・・・。

「明日？　特に予定はなかったけど・・・・・・どうかしたの？」
「あぁ、ちょっと一緒に買い物に行かないかい？」
「何？！レッドさん・・・・・・それはデートの誘いってやつか？！」

俺がルイズを買い物に誘った瞬間、いきなりサイトが会話に乱入した。
流石ギャグ補正だな・・・・・・。

「アンタは、話に入ってこなくていいの！！」
「あぁ、サイト君も来てほしいな。

君の剣を買いに行くのがメインなのだから」
「「え?!」」
「いざという時のために、武器は持っておいた方がいいよ?
それに見栄えもよくなるしね。
あぁそれからサイト君、君は文字の読み書きが出来ないんだったね?」
「あ、あぁ」
「文字の読み書きと貴族については勉強しておいた方がいい。
特に貴族に対する態度は、そのままルイズ嬢の評価としてみなされることもあるからね。
毎日授業が終わってから図書室で僕が教えよう」
「えぇ、面倒くさ「アンタ兄様の好意を無駄にする気?!」・・・・・・分かったよ」

まぁ一から外国語習うようなもんだから大変だよな・・・・・・俺も大変だったよ。
でも必要不可欠だからね。
頑張ってもらわないと。

「それじゃあ、明日の朝に外に馬を用意して待ってるよ?
じゃあお休みなさい」
「はい、お休みなさい」
「お休みなさい」

俺はそのままルイズの部屋を後にした。
明日のことを考えながら自分の部屋に向かう俺は、俺の姿を見ていた赤髪の女性に気付かずに・・・・・・。

翌朝、馬を用意して待ち合わせの場所に向かうと、既に二人は来ていた。

「おはよう！
遅くなったかな？」
「いえ、今来たところです」
「あぁ、丁度今来たんだ」

タイミングは丁度良かったみたいだな。
一応三頭連れてきたけど・・・・・・サイトって一人で馬乗れるよな？

「サイト君は馬乗れる？」
「・・・・・・多分」
「まぁ、それほど遠いわけじゃないから大丈夫だと思うけど、どう

しても無理と思ったら相乗りの形になるけど僕の馬に乗るといい」
「ありがとう！・・・・・・正直言えば乗ったことなくてさ。
あんまり自信ないんだよ」
「そっか、でも馬は乗れた方がいいから、暇な時にでも練習しといたほうがいいよ？」
「そうするよ」
「サイト！兄様早く行きましょ！」
「「分かった！」」

そうして俺達は町へと向かい始めた。

～タバサ　ｓｉｄｅ～

イーヴァルディ・・・・・・カッコいい。
私はその日、もう擦り切れるくらい読んでいるイーヴァルディの勇者という本を、再び読み返していた。
虚無の休日は何時も読書か任務をしているから、ある意味習慣みたいなものになる。
そんないつも通りの休日に、今日はイレギュラーが現れた。

荒々しくドアがノックされている。
でもロックが掛かっているから入っては来れない。
だがノックは鳴り響いたまま・・・・・・私は取りあえずサイレントを唱えて読書に戻った。

「続き・・・・・・」

私が本に目を戻したのと、ほぼ同時に突然ロックが解除されドアが開いた。
こんなことをするのは唯一人しかいない・・・・・・私は部屋に入り込んだ彼女に気付きながらも、本を読み続けた。

「・・・・・・・・・・・・！！」

何か叫んでいるようだが、サイレントが掛かっているので何も聞こえない。
故に読書を続けようとしたが、本を奪い取られてしまった。
・・・・・・彼女じゃなかったら，丁重，にお帰りいただくところだ。
私は小さくため息をつくと、サイレントを解除した。

「タバサ！！」
「・・・・・・何？」
「風竜を貸して！！」
「・・・・・・何で？」

「ダーリンとルイズが出かけたのよ！
きっとデートよ？！
追いかけないと！！」
「・・・・・・頑張って？
私は読書」

そう言って本を取り返そうとするが、彼女は本を頭よりも上に持ち上げている。
ジャンプしてみたが、届かない。
何でこんな意地悪をするんだろう？

「そんなに睨まないでよ・・・・・・でも二人を追いかけたいのよ！
あ・・・・・二人じゃなくて、もう一人男の人がいたわね。
遠くて見えなかったけど・・・・・・」
「もう一人？」

ルイズと仲の良い男子は数が限られている。
と言うよりもいないに等しい。
ギーシュは普通に接しているが、系統魔法を使えず、コモン以外の魔法は全て爆発する彼女に近づきたがる男子はいない。
でもギーシュはこの間、虚無の休日はモンモランシと遠乗りすると、朝の訓練の時にレッドに話してた。
なら誰だ？

「昨日の夜レッドがルイズの部屋に居たみたいだから、レッドだと思うわ」

「・・・・・・・・・・」

レッドが、ルイズと町に？
何故だろう・・・・・・モヤモヤする。
私はキュルケから本を奪い取り、しおりを挟んで閉じた。
そして杖を持つと、窓を開けてシルフィを呼んだ。

「きゅいきゅい（どうしたのね？）」
「タバサも気になるのね・・・・・・。
でもダーリンは譲らないわよ？」
「いらない。
シルフィ、馬三頭を追って・・・・・・食べちゃ駄目」
「きゅい！（食べないのね！！）」
「待ってなさいよルイズ、ダーリン！
今微熱のキュルケがそこに行くからね！」

・・・・・久しぶりにレッドの体験談の続きを聞こう。
最近暇が無かったので、続きを聞く機会がなかったレッドの昔話を
聞くことを目的に、シルフィに乗って三人を追いかけた。
でも・・・・・・さっきのモヤモヤはなんだったんだろう？

第１０２話　喋る魔剣（前書き）

デルフ購入～

第１０２話　喋る魔剣

しばらく馬で走り続けた俺達は、ついに街に到着した。

「あぁぁぁぁ、尻が・・・・・・尻が割れるぅぅぅ！！」
「なな、何言ってんのよ！！」
「尻は最初から割れてるよ・・・・・・だから途中で相乗りしようかって言ったのに」

サイトの馬は結構気性が荒かったらしく、途中何回かロデオっぽい動きをしていたので、流石に不味いかなと思って一回聞いたんだよ。でも「いや、まだ行ける！」って言ってここまで我慢してたんだけど、降りた瞬間今の状況になったというわけだ。

「くっそ！　何時か乗りこなしてやるからな！！」
「ブルルルッ！」
「何馬と張り合ってんのよ・・・・・・」

ルイズ嬢が微妙に引いてるからそこら辺にしといた方が良いぞサイト？
俺達は馬を預けて、街の中へと足を踏み入れた。

「おぉ・・・・・・意外と狭いし、人も少ないな」
「何言ってんのよ！

広いし、人もいっぱいいるじゃない！」
「いや、俺の暮らしてたところじゃあ、この何倍も広い道がいっぱいあったし、人の多さもこの比じゃないぞ？」

まぁ当たり前だろう。
サイトが言っているのは東京だろ？
なら人は腐るほどいるし、道も道路のことを言っているなら、軽く3倍位のとこもあるしな。
ルイズはそれを想像できないのか、サイトの話を信じていないようだ。

「まぁその話は置いといて、サイト君。
財布には注意しておいた方がいいよ？」
「何でだ？」
「おっと、とこういう風に意外とスリが多いからね」

なんてタイミングでスルかなぁ・・・・・・。
まぁ説明に信憑性が出たから良いんだけどね？

「は、離せ！」
「謝罪は？」
「気を抜いてたお前が悪いんだろ？！」
「・・・・・・有罪」
「ガッ！」

俺は速やかに、顎を片手で掴んで、左右に高速で動かした。
するとスリの意識は、綺麗に飛んだ。

「兄様・・・・・・今何をやったの？」
「ん？あぁ頭を高速で揺らすと、人の意識は直ぐに消えてしまうんだ。
まぁ前に僕がヴィリエ君にやったのが近いかな？」
「そうなの・・・・・・私にもできる？」
「う～ん、少し難しいかな？」
「・・・・・・残念ね」

ルイズ嬢・・・・・・君は一体どこを目指しているんだ？
なんかサイトが引いているぞ？

「よし、僕は彼を衛兵に渡してくる。
武器屋には先に向かっていてくれ」
「分かったわ」「分かった」

俺は急いで衛兵にスリを引き渡し、二人を追った。
二人の背中が見えたところで声を掛けようとしたが、ふと誰かの視線を感じた。
・・・・・・誰だ？
俺は二人を歩いて追いかけながら、途中でバッと振り返った。
歩行者は何事かと思って俺の方を見たが、俺は壁に隠れている見覚えのある赤い髪を見つけた。
何で彼女が・・・・・・と少し思ったが、原作を思い出して納得し

た。

「キュルケ、君はここで何をしているのかな？」
「レッド？！　何でここがバレたの？！」
「いや、髪の毛がはみ出てたよ？」
「もう、そうならそうと教えてくれればよかったのに！
タバサも意地悪ね？」
「珍しいな・・・・・・タバサも来ているんだ？」
「えぇ、さっきまで一緒に居たんだけど・・・・・・」

俺は周囲を少し見渡そうとしたが、マントを引っ張られたことでその行動をキャンセルした。
ゆっくりと振り返った先には、いつも通りの青髪の少女がそこには立っていた。

「タバサまでひきつれて、君は何をしようとしてたのかな？」
「何もしようとなんてしてないわよ？
只ルイズとダーリンが、出かけたのが気になって追いかけてきたのよ。」
「・・・・・・タバサは？」
「レッドの昔話の続きが聞きたい」

それは学院に戻ってからでも良かったんじゃ・・・・・・と思ったが微妙に目をキラキラさせてたから、突っ込めなかった。
はぁ、この容姿は反則だと思うんだ。

「取りあえず、ルイズ達と合流するかぁ」
「いいわね～、それじゃあレッツゴ～！」
「・・・・・・ご～」

なんか微妙に一波乱ありそうだな。

俺達が武器屋に着くと、既にサイトはデルフリンガーを見つけ出していた。
あ～・・・・・・出会いを見逃したか。

「兄様、遅かったで・・・・・・・・・後ろの二人はどういうことかしら？」
「あぁ二人は「偶々街でレッドを見かけて、声を掛けたら貴方達も一緒だって言うから、ついてきたのよ、ね？」・・・・・・あぁ」

まぁいいんだけどね？
取りあえずルイズ嬢・・・・・・顔が怖いぞ？

「そう、じゃあもうアンタ達はアンタ達の用事を済ませに行けばいいじゃない！」
「別に急ぐことでもないから、私達も一緒に見て回ることにするわ。別に良いでしょう？」
「良くないわよ！」

俺は二人が揉めているのをスルーして、サイトが持っているデルフを見に行った。
はた目から見るとやっぱりボロいな・・・・・・。

「サイト君、剣は決まったのかい？」
「あぁ、これが良いかなって思って」
「おうおう、俺様をこれ呼ばわりなんて失礼じゃねぇか！
俺にはデルフリンガーっていう立派な銘があるんだよ！」
「インテリジェンスソードか・・・・・・面白い剣を見つけたね？」
「だろ？」

まぁ面白いだけじゃなくて、大分メイジ殺しな能力持ってるんだけどね。
人は見掛けによらないっていうか、剣は見掛けによらないってところだ。

「おい、兄ちゃん」
「ん？僕かい？」

「そうだ、アンタだ。
アンタ剣使うだろう？」
「まぁ・・・・・・多少ね」
「レッドさんって剣も使うのか？！」
「多少ってレベルじゃないだろうが・・・・・・。
使い手もこれくらい出来りゃ良かったのによぉ」
「サイト君には今後に期待と言うことで・・・・・・ね？」
「分かった。
使い手！　お前も剣を使う気なら、困った時はそこの兄ちゃんに聞きな」
「あ、あぁ分かった」

ガンダールヴのルーンがある限り、早々困ることはないんだけどね。
それに攻撃用の剣術はそんなにないから教えるのもなぁ。

第１０３話　盗賊の狙い（前書き）

ケーキ食べたいな……シブースト食べたい

第１０３話　盗賊の狙い

あの後はキュルケがサイトのために、ルイズに隠れて剣を買ったり、ケーキ屋で皆で喋ったりした。
そして学園に帰ってくると、もう夜になっていた。

「もうすっかり遅くなってしまったね」
「タバサがあんなに御代りするから！」
「・・・・・・美味しかった」

ケーキ屋でタバサはビックリするほど食べた。
フードファイター顔負けに食べた。
かなりカカオが効いていて苦かったのだが・・・・・・。

「そう言えばダーリン！貴方剣持ってなかったわよね？」
「え？いや、今日ルイズに買ってもらった剣があるんだけど・・・・・・」
「あんなボロボロの剣よりも、こっちの剣を使った方がいいわ！」

そう言ってキュルケは店主曰く、有名な鍛冶屋のシュペーと言う人が打ったという大剣をサイトに手渡した。
明らかに装飾が多いその剣を見て、デルフが喋り出す。

「そんなの剣じゃねぇ。

インテリアだ！」
「何よ？」
「確かにこの剣は、戦うために作られたものじゃないみたいだ」

デルフだけじゃなく、サイトにも駄目だしされた剣を薦めたキュルケは、店主への恨みごとを呟き始めていた。
タバサはそんな親友の姿を華麗にスルーして、普通に本を読んでいた。

「何を読んでいるんだい？」
「口調・・・・・・・」
「・・・・・・学院ではこのままだよ」
「そう」
「で、何の本を読んでいるんだい？」

俺がそう聞くと、彼女は背表紙を俺の方に向けてくれた。
そこに書いてある文字は「イーヴァルディの勇者」。
この世界における有名な英雄譚だ。

「面白いかい？」
「とても」

普段のタバサを見ていると、もっと硬い本を読んでいる印象があるんだけどな・・・・・・。
気付けばサイトがぐるぐる巻きにされて、建物に吊るされていた。

あれ・・・・・・この展開知っている気がする。

「シルフィ、彼が落ちそうになったら助けて」
「きゅい！（分かったのね！）」
「何であんな状況に？」
「あの剣を受け取るかどうかで二人が勝負する。
彼を繋いでいるロープを切った方が勝ち」

普通に考えて狂気の所業なんだけど・・・・・。
まぁシルフィが助けるなら大丈夫だろう。
それにしても・・・・・なんだっけか。
考え事をしていると、爆発音が聞こえてきた。

「幾ら爆発の二つ名を持っていても、こういったことには向いてない様ね！」
「うるさいわね！」
「私なら外さない。
ファイアーボール！」

キュルケが放った火の玉は見事にサイトを繋いでいたロープを焼き切り、サイトはノーロープバンジーをする羽目になった。
まぁシルフィがキャッチしたわけだけど・・・・・。

「私の勝ちね。
ダーリンにはこの剣を貰ってもらうわ」

「直ぐに捨てなさい！
主命令よ！」
「貰うくらいいいじゃねぇか。
そんなことより死ぬかと思ったぁ・・・・・・。
レッドも止めてくれよ！」

あぁ一応サイトに、プライベートでは呼び捨てをさせることにした。
なんかさん付けが、し難かったみたいなんだよね。

「いや、見てなかったので・・・・・・」
「マジかよ・・・・・・」

見事に凹んでしまったサイトだが、俺はさっきからずっと原作を思い出そうとしているので、余り頭に入っていない。
既にこの世界に来てから十九年経っている。
流石に記憶も薄れてきている。
偶に記憶を掘りなおしているんだけど、それでも思い出せない部分も少なくない。

「何を悩んでいるの？」
「いや・・・・・・何でもないんだ」
「・・・・・・」

タバサは深くは聞いてこない。
しかし心配そうに見てくるので、俺も困る。

そんな時地響きと共にゴーレムが俺達の前に現れた。
そうか！ここがフーケ編の最初だったか！！

「何なのアレ？！」
「デカい・・・・・・逃げるぞルイズ！」
「レッドどうするの？！」

タバサ以外の皆が一斉に慌てだす。
そりゃそうだよな・・・・・・目の前に出てきたのは１０メートル級のゴーレム。
俺とタバサがいればなんとか出来るけど……俺の場合あまり火力があるタイプじゃないし、相性が微妙なところだ。
水で斬り倒すのはいい手なんだが、すぐ直されてしまうだろう。
土系魔法では刺し貫いても、それを吸収されたら状況は悪化する。
あのサイズで限界なら良いんだけど、確かフーケはトライアングルメイジ。
なら２０メートル以上のゴーレムも作れるはずだ。
ならば結構な回数壊さなければ・・・・・・。

「レッド、考え事なら後にして！」
「あ、あぁ。
取りあえずルイズとサイト君は他の先生を呼んできてくれ！
僕とキュルケ、タバサ嬢はあのゴーレムを止める」
「私も残る！」
「いや・・・・・・ルイズ嬢の爆発は、まだ精度に難があるようだからね」
「そうよ、ここは私たちが何とかしておくから、早く他の先生を呼

んできなさい！」
「・・・・・・・・・分かったわよ！行くわよサイト！」
「お、おぅ！」

二人は急いで、学院に走って行った。
今ゴーレムは宝物庫に大穴を開けて、その穴を守る様に立っている。
動いてないってことは、中にフーケが入ったか？

「取りあえず僕があのゴーレムの足を止める。
だから二人は追撃してくれ」
「「分かった（わ）」」
「よし、ボトムレス・アース！」

俺はゴーレムの真下に底なし沼を作り出し、行動を制限する。
ゴーレムは自らの重さで、勢い良く沈んでいく。
腰のあたりまで埋まったが、これを解くと土に戻ってしまう。

「今ね、フレイム・ボール！」
「ウィンディ・アイシクル」

二人の魔法は見事ゴーレムの上半身を半壊させたが、直ぐ元に戻ってしまった。
どうする、正直ゴーレムを幾ら倒してもすぐに直されてしまう。
やっぱり術者を倒すのがベストなんだけど……。

「駄目ね・・・・・・」
「・・・・・・」
「やっぱり術者を直接叩かないと駄目か」

俺がそう言うのとほぼ同時に、宝物庫から人影が出てきてゴーレムの方を向いた。
一瞬動きが止まったが、フーケはゴーレムを分解して、今度はさっきよりも小さめのゴーレムを作り、それに乗って走り去った。
正直追っても良かったんだけど、相手は手錬の土のトライアングルメイジ。
父さんを相手にするぐらいの気迫で行かなければならない……。
俺は今回は見送ることにした。
恐らく明日、フーケを捕らえに行く人を募るはずだ。
それについていくことにしよう。
今回の借りは、そこで返そう。

第１０４話　盗賊討伐隊（前書き）

自分で書いといてなんだけど、ギトーうぜぇ

第１０４話　盗賊討伐隊

翌朝、俺と昨日あの場に居た四人は学院長室に呼び出されていた。
学院長室に入ると、学院の教師が全員揃っており、一斉に俺達に目を向けた。

「話は分かっておるじゃろうが、昨日の話じゃ
昨晩お主達が見た泥棒の正体は、土くれのフーケと言う怪盗じゃ」
「土くれのフーケ？」
「アンタは知らなくてもしょうがないわね」
「土くれのフーケ・・・・・土のトライアングルクラスで貴族から高く売れそうなものを盗んでいく」
「そうなのか」

フーケのことを知らないサイトへの説明も終わったところで、キュルケが疑問に思ったことを質問する。

「何で犯人がフーケだと？」
「それは本人が書き置きを残していったからのぅ」
「「「は？」」」
「宝物庫の壁に，破壊の杖を頂戴しました　土くれのフーケ，と書かれていたから分かったんじゃよ」

なんでフーケはそんなことするんだろう？
普通に盗むだけの方が明らかにいいと思うんだが。

俺がそんなことを考えていると、その場にいたギトーが口を開いた。

「現場に居ながらそんな賊を取り逃すなんて・・・・・・レッド先生は一体何をしていたんですかねぇ？」

「それは・・・・・すみませんでした

捕まえようとはしたのですが、逃げられてしまいました」

「謝って済むことなんですか？

破壊の杖と言えば学院長の恩人から戴いた大切なものそれをみすみす盗まれてしまうなど、言語道断！

学院長、彼に処罰を！」

ギトーは学院長に詰め寄ると、俺への処罰を提案した。

他の先生達は我関せずを貫いている。

一人の先生を除いて・・・・・・。

「それはあんまりじゃないでしょうか？」

「コルベール・・・・・先生」

「確かにレッド先生は、目の前で破壊の杖を盗まれてしまいましたでも土くれのフーケは土のトライアングル

それも凄腕だ」

「・・・・・それがどうかしましたか？」

「レッド先生もトライアングルですが、フーケの方が場数は踏んでいる

なら情状酌量の余地はあるんじゃないですか？」

「しかし！」

「それに！！

昨晩の見回り担当は誰でしたかな？」

「クッ！」

あぁそう言えばギトーだったか。
結構皆サボるからな・・・・・・俺はちゃんと回ってるよ？
ギトーは勢いを削がれたのか、そのまま引きさがっていった。
変わりにシュヴルーズ先生が前に出てきた。

「オールド・オスマン
王宮に報告しないのでしょうか？」
「それは・・・・・・出来ん」
「何故？！」
「ではなんて説明するんじゃ？
貴族の子息たちいるこの学院にトライアングルクラスの賊が入り込み、マジックアイテムを強奪したと報告するのか？」

そんな報告をすれば、子息たちの親から賠償請求されるだけでなく、王宮から責任を取らされるかもしれない。
そのことに思い至った教師陣は、揃って顔を青くした。

「幸いここには優秀なメイジが揃っておる
誰か、我こそが土くれを捕まえて見せるという気概を持った者はいないか？！」

学院長はそう言って周りを見渡すが、教師陣の顔色は優れない。
それはそうだろう・・・・・・ここに居る教師の殆どは実戦経験が

あるわけじゃない。
ましてや高位メイジ相手の戦いなんて早々経験するものではない。
教師の中でトライアングルクラスは俺とシュヴルーズ先生、コルベール先生。
スクウェアはギトーと学院長だけ。

「ミス・シュヴルーズ、お主はどうじゃ？」
「わ、私ですか？！
いえ、私は攻撃魔法をそれほど得意としてませんし・・・・・・コルベール先生こそどうですか？！」
「・・・・・戦いはちょっと」
「そうか・・・・・・じゃあミスタ・ギトー、お主は？」
「私なら土くれ如き一ひねりでしょう！」
「おぉ！なら「ですが」む？」
「たまたま杖を新調している最中でして・・・・・いやぁ本当に残念だ」

うわぁ・・・・・そんな言い訳で断るなよ。
っていうかお前が予備の杖持ってるの知ってるんだぞ？
俺がギトーに呆れの顔で視線を送っていると、ギトーはふと俺の方を見てニヤリと笑った。

「私は無理ですが、レッド先生ならいいんじゃないですか？
彼なら昨晩の汚名を返上することもできますし、丁度いいじゃないですか！」
「僕ですか・・・・・・」

教師の視線が俺に集まる。
そして学院長も少し考え込んで、俺に向かって一回頷いた。
これは・・・・・・断れない空気だな。
まぁ、断る気はなかったけど、ギトーに言われたのが微妙に嫌だ。

「分かりました僕が「ちょっと待ってください！」？」
「私も行きます！」

俺の言葉を遮ったのはルイズ嬢だった。
顔には決意の色が見える。

「危険じゃぞ？
それでも行きたいと言うのか？」
「ハイ！　それに兄様もいますから！」
「俺も行くぞ！　レッドには借りがあるからな」
「ダーリンが行くなら、私も行くわ！」

続々と旅の道連れが増えて行く。
そしてタバサも自身の杖を上げた。

「ミス・タバサ、お主もか？」
「・・・・・・心配」

彼女はキュルケの方を見てそう呟いた。
順調に仲良くなってるんだな・・・・・・良かった。

「学院長！　危険すぎます！
幾らレッド君がトライアングルメイジとはいえ「待つのじゃ、コルベール君」・・・・・・」
「確かに生徒を危険な目に会わせるのは心苦しい
じゃが生徒を信じるのもまた教師の役目じゃろう
それに・・・・・・」
「それに？」

学院長は俺達を順に見て言った。

「ミス・ヴァリエールは爆発の名を冠する、攻撃に特化したメイジ
その使い魔の彼は、ラインメイジを単身倒した剣士
ミス・ツェルプストーは火のトライアングル
ミス・タバサは風と水のトライアングル・・・・・・そしてシュバリエの称号も持っている」
「タバサあんたそんなの持ってたの？！」
「・・・・・・シュバリエってなんだ？」
「そんなことも知らないの？」

ルイズはサイトにシュバリエについて説明している。
まぁ現代日本にそんなもの居ないしな。

「確かに彼らなら大丈夫かもしれませんが・・・・・・ですが肝心なフーケの居場所が分からないではないですか！」

コルベール先生がそう言うのとほぼ同時に、学院長室の扉が勢いよく開かれた。
そうして入ってきたのはロングビルさんだった。

「ミス・ロングビル？！」
「すみません、怪盗の情報を集めていたら遅れてしまって・・・・・・でも手掛かりはありました
怪しい人影が森の方へ向かった、という情報を手に入れることが出来ましたから！」

こうして俺達は破壊の杖奪還へと向かうことになった。

第１０５話　破壊の杖奪還への道（前書き）

眠い……あぁ目がしばしばする

第１０５話　破壊の杖奪還への道

あの後一旦部屋に帰ってから待ち合わせの場所へ向かった。
但しアイガを連れて。
もう待ち合わせ場所には全員が揃っていた。

「遅くなりましたね」
「いえ、皆さん今来たところです。
所でそのゴーレムは・・・・・・」
「あぁ、僕の使い魔のアイガです。
きっと役立てると思いますよ？」
「そ、そうですか」

ロングビルは引き攣った顔でアイガの方を見ている。
誰かにアイガの話でも聞いたのか？
俺の視線に気付いたのか、ロングビルは軽く首を横に振って俺達のことを見渡した。

「それでは全員揃ったので、馬車に乗ってください。
皆さんが乗り次第、怪しい人影を見たという森に向かいます」
「「わかったわ」」「「わかった」」

全員が馬車に乗ると、ロングビルが馬に指示をして馬車を進ませた。
因みにシルフィは上空を飛んでついて来ているらしい。

「ねぇミス・ロングビル。
貴方は何故学院長の秘書を？」

キュルケは移動し始めて、しばらく経つとそんな質問をロングビルに投げかけた。
どうやら暇だったらしい。

「え？えぇ、そうですね・・・・・酒場で給仕をしていたところをスカウトされまして、一応私もメイジですし・・・・・」
「へぇ～そうだったんだ。
でも何で貴族なのに給仕なんて？」
「アンタちょっと考えなさいよ！」
「だって気になるじゃない？」

確かに不躾な質問だな。
メイジなのに酒場の給仕をしているということは、普通没落したか勘当されたかだろう。
ストレートに聞くことは時に良いこともあるけど、今回はちょっと

な。

「いいんです、ミス・ヴァリエール。
私の家は没落してしまったので、生活のために働いていたのです」
「そうなのところでなんで没落「アンタホントにいい加減にしなさいよ！！」何よ別にいいじゃない！」

なんか何時も通りの口げんかに発展したんだけど……。
まぁ気負うよりは良いと思うけど、緊張感ないなぁ。
所でタバサとサイトはどうしてるんだ？

「なぁ、何読んでるんだ？」
「・・・・・・本」
「いや、確かにそうなんだろうけど・・・・・・どんな内容の本なんだ？」
「英雄譚」
「・・・・・・そうですか」
「そう」

中々会話に難儀しているな。
俺は取りあえずアイガの隣に座って目を瞑ることにする。

「アイガ、何かあったら起こしてくれ。」
「ジ！」

俺はそうアイガに頼んで目を瞑った。

俺が目を覚ますと目的地は直ぐそこだった。
・・・・・・所で何で俺にもたれかかって寝ているのかな、タバサ？
そして出来れば睨まないでほしいよルイズ嬢。

「そろそろ目的地に着きます。
寝ている人は起こしてくださいね？」
「分かりました。
タバサ嬢、そろそろ目的地に着くらしいですよ？」
「ん・・・・・・分かった・・・・・・起きる」

俺はタバサを起こすと、外の様子を窺った。
森が見える・・・・・・っていうか目立つものが森しかない。

「ミス・ロングビル、怪しい人影を森で見かけたという情報を聞いたって言いましたよね？」
「はい」
「具体的にはどの辺りとか聞いてませんか？」
「そうよ！森って言われても範囲が広すぎるわ」
「私の聞いた話では森の中に少し行くと、小屋があるらしいです。そこがフーケのアジトなのではないでしょうか？」
「そうですね・・・・・・一先ずその小屋を探してみることにしましょう」

森に着いた俺達は、馬車を降りて小屋を探し始めた。
まぁ直ぐに見つかったんだけどね。

「あれじゃないですか？」
「そのようです。
それでは誰があの小屋の中に入りますか？」
「何かあっても対処できる実力があった方がいいですね・・・・・・
僕が行きましょう」
「私も行くわ！」
「いや、ルイズ嬢はここで待っててくれ。
もしゴーレムが出てきた場合爆発で牽制してくれ」
「分かったわ、でも・・・・・・気をつけてね兄様」
「分かってるよ」

俺はルイズ嬢の頭を軽く撫で、アイガを連れて小屋へと向かった。
小屋の中は意外と綺麗で、驚いた。
もしかしてロングビル昨日ここで寝たのか？

取りあえず俺はアイガに警戒を任せて、破壊の杖を捜した。
すると少し大きめの箱を見つけ、開いてみるとそこには未使用のロケランがあった。

「やっぱりこれか・・・・・・アイガ目的の物は見つけたから、ここを出「兄様！早くそこから出て！」・・・・・・こうなるか。
アイガ、ゴーレムが出てきたら任せても大丈夫か？」
「ジ！！」
「ＯＫ、それじゃ任せたぞ？」

アイガが首振りで俺の問いに答えてくれるのとほぼ同時に、小屋の屋根を突き破ってゴーレムの拳が襲いかかってきた。
アイガはその拳を横から殴りつけて、矛先を強引にずらした。
そして俺とアイガは急いで小屋から飛びだした。

「兄様！」「「「レッド！」」」「きゅい！」
「僕とアイガは無事だ！
そんなことよりもあのゴーレムをどうにかするぞ！
取りあえず破壊の杖は見つかったから、後はあのゴーレムをどうにかして、フーケを見つけ出せば解決だ！」

さて、ここからが正念場だな。
サイトにロケランを使ってもらわないと、もしフーケに奪われると厄介だ。

「取りあえずゴーレムの足止めを僕とアイガでするとしますか！」
「ジ！」
「皆は上から援護してくれ！」
「俺も手伝うぜレッド！」
「サイト君・・・・・・あぁ！
でも無理はしない様にな？」
「分かってるって！」
「兄ちゃんの言うとおり、無茶すんなよ相棒」

こうして俺達はフーケのゴーレムと戦うことになった。

第１０５話　破壊の杖奪還への道（後書き）

修正

第１０６話　フーケの正体（前書き）

この間ハリーポッター見てきた
めちゃくちゃ人多かった
そして……ロンいらねぇ

第１０６話　フーケの正体

やっぱりでけぇな・・・・・・フーケのゴーレム。
アイガの三倍以上デカイとかどうよ？

「レッド、作戦はどうするんだ？」
「あぁ、サイト君は陽動を頼む。
この中で一番動きが早いからね」
「分かった」
「あぁ後この杖、僕は使い方が分からないんだけど、サイト君は分かるかい？」

俺はサイトに破壊の杖と言う名の兵器を手渡した。
彼は受け取った物を見て凄く驚いていた。

「これは・・・・・・ロケットランチャーじゃねぇか！」
「ロケットランチャー？それはなんなんだい？」
「あ、あぁ平民でも使える魔法の杖と思ってもらえれば・・・・・・」
「それは凄い！」

大丈夫かな？
俺白々しくない？

「でも、これがあれば・・・・・・・レッド！」
「どうかしたのかい？」
「あのゴーレムの動きを止められるか？」
「出来なくはないよ・・・・・・どうして？」
「破壊の杖を使う」
「使い方が分かるのかい？！」
「あぁ、だからアイツの動きを止めてくれ！」
「分かった」

俺達はゴーレムの攻撃を避けながら、作戦会議を終了した。
動きはそんなに速くないから避けるのはそれほど難しくない。

「キュルケ、ルイズ、タバサ！
シルフィードの上から援護を頼む！」
「「「分かった！」」」

三人は俺の指示にしたがって、上空からの援護射撃を開始した。
空から降り注ぐ氷の槍、炎の弾丸、そして爆発。
ゴーレムの身体は砕けるが、直ぐに再生してしまう。
ルイズ嬢達の表情は強張っている。

「僕達も参加するとしますか！
アイガ、ストーンエッジ！」
「ジ！」

ゴーレムの真下から石の刃が高速で飛びだしていく。
石の刃は容赦なくゴーレムを穿っていく。
腕が飛び、足が飛び、胴体を貫通したが、再生してしまう。
しかしその再生中は動けない。

「再生してしまうならこれはどうだ？
プリズンロック！」

俺はゴーレムの周囲に石の壁を作り出し、閉じ込めた。
このまま押しつぶすこともできるけど……。

「サイト君、動きは封じたよ！」
「了解！
じゃあ今から三秒後に前面の壁を崩してくれ。
そこに破壊の杖を使う！」
「ＯＫ、じゃあ３・２・１・・・・・・０！」
「発射！」

俺が前面の壁を崩すと、そこに向かってボヒュという音と共にロケランの弾が飛びこんでいく。
そして着弾。
続く轟音。
その結果ゴーレムは俺の作った壁と共に木っ端微塵に吹き飛んだ。
その光景を見た三人はシルフィードから下りて、こちらに駆け寄ってきた。

「今の爆発は何？！」
「凄い音だったわね？！」
「・・・・・・バラバラ」
「あぁ、サイト君が破壊の杖を使ったんだ。」
「「えぇ！？」」「ビックリ」
「アンタ何で破壊の杖使えるのよ！！」
「何でも何もあれは、俺の世界の兵器だからなぁ・・・・・・」
「兵器？」
「あぁ皆さん無事だったんですね！」

サイトが何故破壊の杖を使えるのか言及されそうになっていたが、今まで何処に行っていたのか分からないロングビルが登場したことで、話は途切れた。

「ミス・ロングビル？
今まで何処に？」
「私は怪しい人影が見えた気がして、その影を追い掛けていたんです。
でも凄く大きな音がしたので、皆さんが心配で戻ってきたんです・・・・・・あ、それは破壊の杖じゃないですか！
良かった・・・・・・一応確認させていただけますか？」

ここからは気が抜けないな・・・・・・。
彼女がどんな行動を取るかは分かっているんだけど、もしかしたらイレギュラーがあるかもしれない。

「はい、どうぞ」
「どうもありがとう」

ロングビルは破壊の杖を受け取って、少し後ろに下がるとこちらに銃口を向ける。
最初皆は状況が理解できていなかったが、次第に理解出来てきたようだ。

「アンタ達、杖を捨てな！」
「ミス・ロングビル・・・・・・それはどういうことでしょうか？」
「いやぁ、助かったよアンタ達。
あのままだったら二束三文にしかならなかったからねぇ」
「まさか・・・・・・アンタが土くれ？！」
「そうさ！
全く長かったよこの時まで・・・・・・あのエロ爺の秘書を続けて数年。
漸くこれを手にすることが出来た！」
「でも何で・・・・・・盗んでそのまま逃げなかったのよ！」
「私だってそうしたかったさ！
でもねぇこの破壊の杖の使い方が分からなくてね・・・・・・駄目もとでアンタ達に賭けたんだけど賭けには勝ったようだね！」

ルイズとキュルケは憤りを顕わにしている。
タバサは隙を見て、攻撃しようとしている。
しかしフーケも馬鹿ではない。

「杖を捨てなって言っただろう？
捨てないなら、ゴーレムすら木っ端微塵するこの破壊の杖の餌食になることになるよ！」
「クッ！」「しょうがないわね」「不覚」

俺は別に杖を捨てても指輪型発動体があるから、特に問題ないんだけどね？

「そこのアンタ達も剣を捨てな！」
「分かった」「分かりました」

俺達は地面に剣を刺して、少し離れた。
デルフは空気を読んで喋らない。

「それじゃ・・・・・アンタ達には死んでもらうとするかね」
「「な！？」」「「・・・・・・」」
「何を驚いているんだい？
正体がバレた以上生かして返すわけがないじゃないか」
「始めからそのつもりで・・・・・・最低！」
「それはそれは心が傷つくねぇ・・・・・・それじゃあ原因を消すとしますかね！」

フーケは俺達に向けて破壊の杖の引き金を引く・・・・・・

硬直しているロングビルをサイトがデルフを地面から引き抜いて、剣の腹で一閃した。
上手い具合に入った剣での打撃は、フーケの意識を容易く奪い去った。
またも状況についてこれていない女性三人。

「・・・・・・えと、何で破壊の杖は発動しなかったの？」
「あぁ、あれは単発式なんだよ」
「単発式？」
「一回使うともう使えないってことだよ」

まぁ弾があれば別だけどと小さく呟いていたのを聞いたのは俺だけの様だな。
なんにしてもこれで一件落着かな？

「なんにせよ破壊の杖も戻ってきたし、フーケも捕まえた。
これで一件落着ですね」
「そうね！」「早く帰ってお風呂に入りたいわ・・・・・・」「本の続き」
「じゃあ帰るとしますか！」

俺達はフーケを縛って、馬車に寝かせるとそのまま学院の帰路へとついた。

第１０６話　フーケの正体（後書き）

修正

第１０７話　タバサとの最後の任務（前書き）

次の次はカジノでイカサマ暴きをしに行きます。

第１０７話　タバサとの最後の任務

学院に戻ってきた俺達は、報告のために一先ず学院長室に向かうことにした。

「おぉ皆無事の様じゃな・・・・・・ん？ミス・ロングビルの姿が見えないが？」
「それについても含めて今から説明させてもらいます」

俺は森での出来事を説明していった。
破壊の杖を手に入れたこと、ゴーレムと戦ったこと・・・・・・そしてロングビルがフーケだったこと。
最初は無言で聞いていた学院長だったが、フーケの正体について話した時は流石に目を見開いて驚いていた。

「そうじゃったか・・・・・・ロングビルが・・・・・・」
「そう言えば酒場で働いているところをスカウトしたと聞きましたが、何故スカウトを？」
「それは尻を触っても怒らな・・・・・・ゲフンゲフン。生活が厳しいからもっといい仕事が欲しい、と呟いておるのを聞いてのぅ」

・・・・・・本音漏れてたぞエロ爺。
まぁ後半も理由の一つだろうけど、前半が駄目すぎる。
俺以外の皆も冷めた目で学院長を見ている。

学院長もその視線に気付いて、慌てて話題を変える。

「お、お主達に褒美を与えなければならんの！
取りあえずミス・ヴァリエール、ミス・ツェルプストーにはシュバリエの称号を戴けるようにしておこう。
ミス・タバサは既にシュバリエの称号を持っておるので、別に何か用意しておこう。」
「ありがとうございます・・・・・・あれ？サイトと兄様は？」
「レッド君は給金のアップ、サイト君は・・・・・・・・・スマン何も用意しておらんのじゃ。」
「そんな！？」

流石にそれはどうかな……。
でもきっと何かしらの褒美を出すんだろう。

「いや、俺は別にいらねぇよ。
でも代わりと言っちゃなんだけど、この破壊の杖について聞かせてくれないか？」
「良いじゃろう、他の者たちはこれにて解散。
夜にあるフリッグの舞踏会の準備をすると良いじゃろう」

サイトを一人残し俺達は自室へと戻っていった。
いや・・・・・・一人を除いて。

部屋に帰ってきた俺はローブを脱いで、一旦部屋着に着替えた。
するとドアをノックする音が聞こえた。

「はい、開いてますよ」
「失礼します」
「タバサ？」

俺の部屋に入ってきたのは、さっきまで一緒に居たタバサだった。
何の用だろう？

「どうしたんだ？
何処か怪我でもしたのか？」
「違う」
「じゃあどうしたんだ？」
「任務」

いや、俺にそれを言ってどうする。
まさかとは思うが……

「何で俺にその事を？」
「・・・・・・・・・着いて来てほしい」

やっぱりか、でもいつもはシルフィが強引に連れて行こうとするのにどうしたんだ？
すると俺の考えていることが分かったのか、少し申し訳なさそうな顔をして頭を下げた。

「いつもごめんなさい・・・・・・・」
「・・・・・・」
「貴方の協力でとても助かっている・・・・・・レッドが自分の存在を他者に知られたくないのは分かってる。
任務を手伝ってくれるのは今回が最後でいい・・・・・・だから今回は手伝ってほしい」
「・・・・・・何でそこまで俺の手を借りたい？」
「・・・・・・今回は違法カジノの調査、男女のペアの方が疑われにくい」
「今回で最後なのか？」
「・・・・・・（コク）」

はぁ・・・・・・まぁ良いか。
今回は戦闘とかなさそうだしな。

「分かったよ・・・・・・で何時行くんだ？」

「今夜」
「今夜！？
それは・・・・・急だな。
ってことは舞踏会の途中で抜けるのか」
「ごめんなさい」
「あぁ、受けたからにはしょうがないさ。
それに踊る相手もいないだろうしな」

ルイズの相手はサイトがするだろうし・・・・・なんか少し嫌だけど。

「わた・・・・・・」
「わた？」
「何でもない」
「そっか？・・・・・・じゃあ要件はそれで終わりかな？
それじゃそろそろ舞踏会の準備しないと間に合わないぞ？」
「・・・・・分かった」
「じゃあ後でな」
「また」

俺はタバサを見送って、自身の用意を始めた。

「取りあえず舞踏会用の服を久しぶりに出すとしますか！
それに一応あの装備も持って行った方がいいかな・・・・・いや、
かさ張るからいいか。
でも仮面だけは持っていこう」

そろそろ時間か・・・・・・そうだ、舞踏会で肉を少し拝借してシルフィにあげるとしよう。
あの子は参加できないだろうからな。

～タバサ　ｓｉｄｅ～

私はさっき何を言おうとしたの？

「私がいる？」

何でそんなことを言おうと思ったのだろう？
私はどうしたんだろう？
私をそんな疑問が埋め尽くしていく。
でも今夜には任務がある。
こんな心理状況では失敗してしまうかもしれない。
それは許されない・・・・・・この事については後で考えることにしよう。

「舞踏会の料理・・・・・・楽しみ」

「私もなのね、きゅいきゅい！」
「あなたはお留守番」
「何でなのね？！」
「竜が舞踏会に出るのは駄目」
「なんなのね！
竜差別なのね！
私は断固抗議するのね！」

シルフィは不貞腐れてしまった。
どうもこの子は少し子供っぽい部分が目立つ。
今回の任務では気をつけないと・・・・・・疑われるのは今回の任務では一番気をつけなければならないことだ。

「お肉持ってきてあげる」
「ホント？！
やったのね！！るーるー
レッドにも分けてあげるのね！」
「・・・・・・何でここで彼の名前が出てくるの？」
「レッドと一緒にご飯の食べると、胸が暖かくなるのね！」

何故か・・・・・・少し感情が乱れた。
取り合えず持ってくるお肉にハシバミ草を乗せて食べさせよう。

第１０８話　二人のフロイライン（前書き）

卒研がヤバい……スペクトログラムって何ぞ？
もう死ぬる
来週にはモンハン出るっていうのに！！
あぁ、全て投げ捨ててモンハンやろうかな……

第１０８話　二人のフロイライン

フーケを捕らえた夜、俺はフリッグの舞踏会に出ていた。
まぁ当たり前だが俺だけじゃなく、生徒達、そして一緒に破壊の杖を取り換えしに行ったメンバーも一緒だ。
既に舞踏会は始まっており、俺とタバサはこの後楽しい楽しいお出かけなので、夕食を食べる暇がないためここでひたすら料理を食べている。

「タバサ嬢、ちょっとそこの肉取ってくれないか？」
「もきゅもきゅ・・・・・・ん」
「ありがとう」

なんか凄い勢いでハシバミ草が無くなっていくな・・・・・。
俺は最初に少し分けて貰ったし、この苦みを好む人はそう多くはないために、それ程問題はない。
そんな会話も少なく、黙々と夕食を食べていると少し会場がザワザワしてきた。

「なんだ？」
「誰か来た」
「ヴァリエール公爵の息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・プラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな～り～！」

何度聞いても長いな・・・・・それにしてもずいぶん綺麗になっ

たな。
俺が時の経過を感じつつ、ルイズ嬢を見ていると足に衝撃がやってきた。

「・・・・・・痛いんだけど？」
「きっと気のせい」
「いや、僕の足の上にタバサ嬢の踵が・・・・・・」
「気のせい」

ツボツボ付けてるからそこまで痛くないけど・・・・・・何でいきなり？
俺は首を傾げながら再び料理に集中した。
しばらくすると再び会場が賑わってきたようだ。

「ルイズ嬢とサイト君か・・・・・・」
「目立ってる」

先ほど会場の視線を一気に集めた彼女が、使い魔とは言え平民と踊る姿は生徒たちの度肝を抜いた。
何処からかおでれぇたという声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。
俺は知らず知らずの内に拳を軽く握っていた。
この感情は娘は嫁にやらん的な感情なのか、それとも・・・・・・
俺が自分の感情を持て余していると、タバサが俺の袖を軽く引っ張り、俺の視線はタバサに向いた。
するとそこには一礼したタバサの姿があった。

「踊ってくださいませんか？」
「・・・・・・僕とですか？」
「・・・・・・・嫌？」

俺がサイトを見て羨ましがっていると思ったのかな？
俺はそんな彼女の気遣いに、小さく微笑み一礼を返した。

「いえ、滅相もない。
今宵壁の花に成りつつある僕に声を掛けていただき、ありがとうございます。
もしよろしければ僕と踊っていただけませんか？」
「・・・・・・私が誘った」
「こういうときは男が誘うものかなと思ってね」
「・・・・・・・そう」

俺は小さな彼女の手を握り、隅の方で小さく舞踏会を楽しんだ。
二人とも決して上手とは言えないが、基礎は出来ているために無難なものになったが、久しぶりのダンスは楽しかった。
音楽が一旦止み、パートナーを変えるタイミングになった。
俺とタバサは互いに一礼して、俺は少し笑い、タバサは恥しくなったのか赤い顔を少し顔を背けた。

「食事に戻る」
「僕は少し会場を回ってくるよ」

「後一時間で任務に向かう」

そう呟いて彼女はテーブルに早足で戻っていった。
俺は小さくありがとうと呟いて会場を回り始めた。
生徒たちはかなり楽しんでいるようで、ギーシュはモンモンとダンスを踊り続けている。
ギーシュの表情は至高の喜びの様な顔になっている。
キュルケは相変わらずとっかえひっかえ男子と踊っているようだ。
今はサイトと踊っているようで、周囲の男子の視線がヤバいことになっている。
そしてルイズ嬢は・・・・・・今俺の眼の前に居る。

「こんばんわ兄様」
「こんばんわルイズ嬢」
「兄様は何時までも私を呼び捨てにしてくれませんね・・・・・・少し寂しいです」
「この呼び方で慣れてしまったからね」
「何時かルイズと呼んでもらいたいです」
「・・・・・・頑張ってみるよ」
「で、兄様？
目の前に美少女がいて、ここは舞踏会。
何かやることがあるのじゃなくって？」

やること・・・・・・あぁあったな！

「綺麗になったね、ルイズ嬢」

「な！？
そ、そうじゃないわよ！
・・・・・・・・・嬉しいけど」

違うのか・・・・・・あぁそっかダンスに誘えってことか？
昔は誕生日会のたびに部屋で踊ってたからな。
なんか踊っている途中でカトレアさんが乱入してきたりしたけど・・・・・・。

「ではレディ、一曲踊っていただけませんか？」
「喜んで」

ゆったりとした曲に合わせて、俺達は流れるように足を動かす。

「ねぇ兄様」
「なんだい？」
「兄様猫かぶってるでしょ？」
「・・・・・・何のことかな？」

キュルケ辺りが口滑らしたか？

「何でキュルケの前では出して、私の前だと猫を被るの？！」
「僕は猫を被らないと、口が少し荒くて貴族っぽくないからね。
ルイズ嬢の前で素の口調じゃないのは、昔からこの口調だったから

中々変えられなくてね？」
「でも！」
「でも、そうだね・・・・・・少しずつ治していくことにするか。
それで勘弁してくれないか？」
「・・・・・・・・・分かったわよ」

俺が嘘を言っていないと分かってくれたのか、渋々引き下がってくれた。
でもテンションは下がってしまったようだ。

「それにしても、さっきは会場の視線を一人占めだったな」
「さっき？・・・・・・・あ？！」
「いやぁ・・・・・・・まるで物語の様だったよ」
「ち、違うの！
さっきのは今回サイトが頑張ったからご褒美に踊ってあげただけで！」
「平民の剣士と公爵家の御令嬢・・・・・・滅多にない組み合わせだから周りの生徒達も目を疑っていたよ」
「だから違うの！」

その後必死になって弁解しようとしているルイズ嬢と、俺は曲が終わるまで踊り続けた。
でも何であんなに必死だったんだろう？

第１０９話　大人の遊技場（前書き）

１２月に入ったら更新速度が落ちることが確定しました
一日一回に落ちます
じゃないと卒業出来なくなるかもしれない
申し訳ない

第１０９話　大人の遊技場

舞踏会の途中で俺とタバサは、会場から静かに抜けだした。
シルフィと合流すると、彼女は目に見えて不機嫌だった。

「二人ともズルいのね！
二人だけ美味しいものお腹一杯食べて！」
「貴方は竜」
「やっぱり竜差別なのね！
断固としてこの扱いの改善を求めるのね！」

まぁ気持ちも分からなくもないかな？
俺達は華やかな場所で暖かい飯を食ってたけど、シルフィは外で使い魔用のご飯。
そりゃ怒るわな。
アイガは人用の飯が口に合わないから大丈夫だ。

「まぁ落ち着けって、ほら料理持ってきてあげたからさ」
「私も持ってきた」
「そ、そんなもので許したりなんか・・・・・・・・・まぁ折角だから食べるけど！」

俺とタバサは持ってきた料理をシルフィの眼前に置き、彼女の食事を見守る。
しばらくして綺麗に食べ終わると、彼女は大きく羽を広げて背中に

乗るように目配せした。
それに従い仮面を付けた俺と、タバサはシルフィの背中に乗って目的地へと飛び立った。
飛び始めて少し立つと、タバサが今回の任務について話し始めた。

「今回私はド・サリヴァン伯爵の次女、マルグリッドと名乗る」
「レッドはヘイ、私はシルフィとしてお姉さまの従者としていくのね」
「了解。
所で今回は何でカジノの調査なんて？」
「支配人のギルモアが、貴族からイカサマでお金を巻き上げている。その証拠を探すことが今回の目的」
「それは・・・・・・直接的な戦闘と言うよりも、頭脳戦に近いな。俺はあんまり役に立てないかもしれないぞ？」
「大丈夫、貴方の動体視力に期待している」

期待に応えられるか自信ないなぁ。
いや・・・・・・もしかしたら見破るが役に立つか？
もし単純なテクニックなら、頑張って自分の眼で見破るしかないけど、もし幻術の類なら見破るでどうにかなるはずだ。

「期待を裏切らないように頑張るよ」

目的地がある街の手前で俺達は降りて、シルフィは人型に成る。
毎回人型に成るときは裸なので、俺は基本後ろを向く。
でも最近シルフィが悪戯心か何か知らないが、その状態で俺の背中に抱きついてくることがあるんだよ。
背中にたわわに実った・・・・・・いや思い出すのは止そう。
何故かタバサの視線が痛いしな。
シルフィが着替えを終えると俺達はカジノ目指して歩を進め始めた。

「で、今回の目的地は何処に」
「あそこ」
「え？」

タバサが指さした先は・・・・・・宝石店だった。
どういうことか理解できていない俺は、そのままドンドン進んでいくタバサに置いて行かれないように、足を早めた。
店内を見ても、そこは普通の宝石店だ。

「いらっしゃいませお客様、本日は何を御所望でしょうか？」
「これ」
「・・・・・・お客様、これは売り物ではないのです」
「でもこれ」
「もしお買い上げに成る場合は、二千万エキューに成りますが？」

「買う」
「では手付き金を戴きます」
「これ」

俺は状況についていけてないが、タバサは銅貨を三枚を出した。
いや、少ないんじゃ・・・・・・と声に出そうと思ったが、店員はそれを受け取った。

「確かに・・・・・・ではこちらへ」

店員は関係者以外立ち入り禁止のドアを開け、地下への階段を下りて行く。
階段を下りて行くとドアがあり、そこにはドアマンが立っていた。

「メイジの方は杖をお預かりします。
そちらの従者の方の剣も一緒にお預かりします」
「「分かった」」

これは非合法っぽいなぁ。
入るための合言葉、地下、武装の解除。
まさか自分がこんなところに来ることになるとは思いもしなかったな。

「確かに、それでは地下の社交場，天国，にようこそ！」

ドアマンはそう言ってドアを開いた。
天国か・・・・・・勝つ人にとっては天国だろうな。
だが負けた人にとっては地獄だろう。
非合法という位だ、レートがヤバいやつもあるんだろう。
そこで負けたら破産するかもしれない。

「これはお客様方、この度はようこそおいで下さりました。
私は当カジノの支配人、ギルモアと申します」
「私はド・サリヴァン伯爵の次女、マルグリッド。
後ろの二人は私の従者」
「ヘイと申します」
「シルフィなのね」
「マルグリッド様ですね、このカジノは初めてですか？」
「初めて」
「では私が自ら説明させていただきます。」

そこから始まったのは延々と要らない話。
ここがいつできたか、どんな有名な人が来たか、そしてここが合法であるということを何度も言っていたと思う。
俺は殆ど聞き流してた。
シルフィに至ってはもうちょっとで寝るところだったよ。

「あぁ、話が長くなってしまいましたね。
それでは楽しんでいってください」
「ありがとう」

「いえいえ、それでは良い夜を」

そう言い残し支配人は去っていった。
さてここからが本番だ。

「マルグリッド様、どれをやりますか？」
「サイコロ。
貴方達は別のをやっていてもいい」
「了解しました」「わかったのね」

俺とシルフィはタバサから少し離れ、何をやるか探すふりをした。

「シルフィ、マルグリッド様が見える位置で不自然にならないようにギャンブルをしよう。」
「分かってるのね」
「じゃあ俺はあっちの方にいる」
「じゃあ私はこっちに居るのね」
「何かあったらマルグリッド様の所に集合でいいな」
「良いのね」

俺達はそう言ってバラけた。
シルフィが向かった先はルーレット。
俺の向かった先はカード。
あんまりギャンブルに集中しないようにしないとな。
それにしても・・・・・・タバサは、どうやってギルモアの尻尾を

掴むつもりなんだろうか？

第１１０話　賭け事

タバサ達と別れてから少し経った。
一応タバサが見える位置にいるが、特に進展はないようだ。
・・・・・・まぁなんかチップの束は順調に増えてる様だけど。
因みに俺は今ポーカーをやっている。

「（今のところワンペアだな、少し勝負に出てみるか？）二枚チェンジ」

ディーラーは顔色を変えずに俺にカードを二枚寄こした。
流石はプロだな。
俺は渡されたカードをゆっくりと捲った。

「どうなさいますか？」
「そうだな・・・・・・勝負しよう」
「分かりました」

そう言って手札をオープンした。
彼の役はツーペア。
俺の役は・・・・・・・・・フラッシュだ。

「おめでとうございます。
お続けになられますか？」

「いや、ここら辺で止めておくよ」

一応持ち金倍になったからね。
シルフィがどうなってるかも、気になるしな。
俺はカードの台を離れると、シルフィがいるルーレットの台へと向かった。

「またハズレ？！」

俺の進行方向から、そんな声が聞こえてきたのは気のせいかな？
若干行きたくなくなってきた・・・・・でも一旦合流したいしな。

「シルフィ、どうしたんだ？」
「あ、ヘイ！
聞いて欲しいのね！」
「あ、あぁ」
「赤か黒に毎回賭けてるんだけど、全く当たらないのね！
もうお姉さまから貰ったお小遣い無くなっちゃうのね！」

そう言ってもう残り三枚しかないチップを俺に見せる。
・・・・・一体どれだけ負けたんだ？
っていうかほぼ二分の一の確率で当たるはずなんだが？
なんにせよ一回この場から離すか。

「シルフィ、一旦話がしたいからここから離れよう」
「でもヘイ！」
「後で肉奢ってやるから！」
「・・・・・・・・本当なのね？
嘘だったら今日の夜一緒に寝てもらうのね！」
「な！？　こんなところでなんてことを言うんだ？！」

周囲の眼が痛い・・・・・男性からはモゲロとでも言いたそうな視線、女性からはアラアラ程々にね的な視線。
俺は視線に耐えきれずに、シルフィの手を掴んでその場を急いで離れた。

「この間はなんだか有耶無耶になっちゃったから、今回は逃がさないのね！」
「いや、だから今はそれどころじゃないだろ？！
任務に集中しろよ？
一応俺はマルグリッド様を見ていて、特に変わったところが見えなかった」
「私も気になるところは、なかったのね」
「だよなぁ」
「取りあえずお姉さまと合流するのね、きゅいきゅい！」
「そうだな」

俺達はタバサに合流するために、サイコロの台へと向かった。

俺達がタバサの元に着くと、遠くからでは分からなかったチップの全容が分かった。
・・・・・・すげぇ勝ってるな。
ディーラーの顔引き攣ってるぞ？

「マルグリッド様」
「ヘイ、シルフィ？
まだ楽しんでてもいい」
「いえ、私たちはもう十分遊ばせてもらいました」

実際普通に楽しかったし・・・・・・。
シルフィは少し膨れてるけど、特に文句は言わなかった。
タバサはそれを聞いて少し俯いたが、直ぐに顔を上げた。

「そう、じゃあ帰る」
「え？」

帰る？
いや任務は？
俺の考えてることが分かったのか、タバサは俺の方を向いて小さく頷く。

いや・・・・・分かんないんだけど？
タバサは自分が稼いだチップをディーラーに渡して言った。

「チップを現金に換えて」

するとディーラーはチップを持って何処かに走って行った。
しばらくそこに居ると、ディーラーは帰ってきた。
人を一人連れて・・・・・・。

「これはこれはマルグリッド様。
随分と大きく勝たれましたね？」
「支配人」
「ですがもうお帰りになられるのですか？」
「もう十分楽しんだ」
「そうですか・・・・・・ですがもう少し遊んでいかれませんか？
私ども取っておきの台を用意しましたので」

とっておき？
もしかしてこれがタバサの狙いか？！

「とっておき？」
「えぇ！
取って置きも取っておき、他の台とは比べ物にならない位レートが
高い台です！」
「・・・・・・面白そう」

「そう言っていただけると思っていました！
それでは私は用意してきますので、もう少ししたら来る私の従者に案内してもらってください」
「分かった」
「それでは少々お待ちください」

そう言ってギルモアはその場から立ち去った。
俺は小声でタバサに尋ねる。

「これが目的で、帰る芝居を？」
「（コクリ）」
「そうですか・・・・・・少し驚きましたよ」

俺がそう言うとタバサは小さく笑い、直ぐにいつも通りの顔に戻った。
珍しい表情が見れて、少し得した気分になったな。
でもそんなほのぼのとした空気は、ギルモアの従者が来るまでの短い時間だけだった・・・・・・。

「初めましてマルグリッド様、私が案内させていただくトマと・・・・・・・・・シャルロットお嬢様？」
「・・・・・・・・・トーマス」

誰だこの人？
なんかタバサの知り合いっぽいけど。

「大きく・・・・・・なられましたね」
「トーマスも」
「ははは、私も歳を取りましたからね。
所で後ろのお二人は・・・・・・」
「二人は従者」
「そうですか、二人はシャルロットお嬢様のことを？」
「・・・・・・知らない。
それに今の私はタバサ」
「そうですか・・・・・・。
ではタバサ様と従者の御二方、私の後に着いて来てください」

一応知ってるんだけどね、タバサ改めシャルロットのこと。
その事をタバサは知らないだろうけど。
取りあえず彼は執事かなんかだったのかな？
まぁ俺はイカサマ見破らなきゃいけないから、任務のことに集中しておこう。

第１１１話　イカサマ（前書き）

本来ならサンクというカードゲームらしいですが、ここはポーカーに変えさせてもらいます
サンクのルール分からないので……

第１１１話　イカサマ

トマに案内されて、俺達はカジノの奥へと足を進めて行く。
俺はその途中、歩きながらイカサマを見破るための策を実行する。
みやぶるを覚えたモルフォンの装備だ。
レベル的に見た目に変化はない。
まぁどっちにしても仮面付けてるから大丈夫なんだけどね。

「トマはお姉さまを知っているのね？」
「えぇ、お嬢様が小さな頃お世話をさせていただきました」
「そうなの・・・・・・なんでギルモアの所で働いてるのね？」
「昔ちょっと色々あって、お嬢様の下から御暇を戴くことになってしまったので、行き場もなく困っていたところをギルモア様に拾われて、それ以来仕えております」

・・・・・命の恩人か。
それは、厄介な楔だな。
トーマスさんは未だにシャルロットに仕えたいと言う思いは捨てていない。
でも命の恩人を放っておくわけにもいかない。
しかも主の悪事を止めることも出来ない・・・・・・辛い立場に居るな。
でも、ギルモアを守ろうとするなら任務の障害になるだろう。
タバサは大丈夫だろうか？

「ここでギルモア様が御待ちです」

「分かった」

そう言ってトーマスは、目の前にある大きなドアを開いた。
するとそこには大きめの台が三台有り、既に二台は埋まっている。

「おかしいじゃないか！！
何でそっちの役ばかり凄い役が揃うんだ！？
イカサマじゃないか？！」
「お客様、それは言いがかりと言うものですよ？」
「イカサマされて黙ってられるか！
金を、金を返せ！！」

突如始まった騒動に周囲は少し驚いているが、誰も止める気はないようだ。
だが俺の横に前に立っていたトーマスは違った。

「お客様、天国での暴動は困ります」
「何が天国だ！
地獄の間違いじゃないか！」

客はそう言ってトーマスに掴みかかろうとしたが、軽やかに避けられて首筋にナイフを突き付けられて硬直した。
・・・・・・結構早いな。

「お客様・・・・・・暴れられては困ります
私は暴力は嫌いなのですが、ギルモア様に迷惑を掛けられるのであれば・・・・・・」
「わ、分かった！」

客は急いで自分の荷物を引っ掴んで、部屋を出て行った。
それと入れ違うようにギルモアが部屋に入ってきた。

「さぁ皆様、気を取り直して楽しんでください！」
「ギルモア様」
「遅くなってしまって申し訳ありませんね。
色々と用意があったもので・・・・・・」

用意？
俺がそう疑問に思ってると、ギルモア自身がこちら側から見て、台の向かい側に立った。

「さぁマルグリッド様、高レートのギャンブルを始めましょう。
賭け金に上限はなし、ゲームはポーカー、チェンジは一度のみ。
何か質問はありますか？」
「特にない」
「あぁ、念のためイカサマ等が無いように、この中が見えない箱の中からカードを引いてもらいます」

いや、怪しすぎるだろこの箱。

でも中を調べさせろっていうと逃げられるか、追い出されるだろう。
取りあえずは様子見だな。

「今マルグリッド様のチップは１２００エキュー。
一先ず一回目は４００エキューから行きましょうか」
「・・・・・・分かった」

４００エキューって平民の年収の３倍以上なんだけど・・・・・・。
っていうかタバサそんなに稼いでたのか？！
俺が驚いている間に、タバサは五枚のカードを引いた。
手札はワンペア・・・・・・しかも他のカードは数字もマークもバラバラ。

「三枚チェンジ」
「ほぅ、では私は一枚です」

三枚を捨て札置きに置くと、新たに三枚引く。
恐らくタバサの狙いはスリーカード、中々勇気のある決断だな。
そしてその賭けは・・・・・・。

「ではオープン、私はツーペア」
「スリーカード」
「おぉ、素晴らしいですね！
では賭け金をマルグリッド様のチップに足させていただきます」

なんとか勝ったか・・・・・いや別に勝つ必要ないんだけどね？
これでタバサのチップは１６００エキューになった。
その後も順調にタバサは勝ち、２５００エキューまでチップは増えた。

「いやぁ、お強いですね！
ではここら辺でレートを上げてはどうでしょう？」
「構わない」
「では次のレートは・・・・・・１２００エキューで」
「１２００！？」

いやいや、レート高すぎるから！！
周りの客もビックリしてるぞ？

「分かった」
「そうですか！
いやぁ、きっとマルグリッド様ならお受け戴けると思いましたよ」

こうして馬鹿みたいにレート高い賭けが始まった。
俺とシルフィは互いに目配せして、イカサマが行われないかジッと箱を見続けた。
タバサがカードを引く・・・・・・特に何もない。
次はギルモアのも番だ。

「？・・・・・・ヘイ、あの箱から何か声が聞こえるのね。」
「声？　俺には聞こえないぞ？」
「小さかったけど確かに聞こえたのね、きゅいきゅい！」
「分かった分かった・・・・・・やっぱり俺には聞こえないな。なぁシルフィ、その声はなんて言ってるんだ？」
「良く聞こえないけど、下のカード取ってとか聞こえるかも・・・・・・」

それはイカサマやってる人の声だろうなぁ・・・・・・でもあの箱の中に入れる人なんて人じゃありえない。
一応みやぶる使ってみるか？

「みやぶる」
「ヘイ、何を言っているのね？」
「良いから少し黙っててくれ」

俺の眼に映っていた箱がドンドン形を変えて行く。
最終的に俺の眼に映っていたのは、小さなイタチの様な生き物が四匹、カードの前に並んでいる姿だった。

第１１２話　恩と過去（前書き）

明日からは一日一話になります
本当に申し訳ない
俺、卒論、書く
実験やる
じゃないと死ぬ……

第１１２話　恩と過去

あれはイタチか？
いや、普通のイタチは自分の姿を変えることなんてできない。
妖怪じゃあるまいし・・・・・・ん？
あぁ！幻獣か！？

「シルフィ、良くやった！」
「なんなのね？」
「イカサマの種が分かったぞ！」
「ホント？！」
「あぁ、どうやらあの箱は、エコーが変身してるみたいだ。
さっきギルモアがカードを引く時に、エコーがカードを渡してたのを見た。」
「見たって・・・・・・どうやって？」
「それは企業秘密」

シルフィは微妙に不思議そうにしてたけど、鼻をピクピクさせて臭いを嗅いでいるようだ。
目を瞑り、嗅覚に全神経を集中しているかのような雰囲気で・・・・・・。

「微かに、本当に微かにだけど獣の匂いがするのね。」
「これで信じてもらえたか？」
「もちろんなのね！
じゃあ早速お姉さまに「ちょっと待て」どうしたのね？」

「このまま直接言っても逃げられるかもしれない。
だから俺はもし逃げてきたときのために出口を見張る」
「分かったのね」

シルフィはタバサにエコーのことを耳打ちすると、俺に一度視線を向けて首を縦に振った。
俺はそれを確認して出口へと向かった。
宝石屋が入り口で、出口は裏路地。
本当に非合法っぽいなぁ。

「それにしてもエコー可愛かったなぁ」

久しぶりにポケモンと戯れたい。
そう言えば前は俺自身がミロカロスと遊べなかったからな・・・・・・夏休みに湖で一緒に遊ぼう。
そんな考え事をしていると、カジノが騒がしくなってきた。

「おっと、俺の仕事有るかな？」

俺は一応指輪型魔法発動体でスリープクラウドを唱え、出口のドアのすぐ横に配置しておいた。
何度見ても綿飴みたいだな・・・・・・今度綿飴作ってみようかな？
あぁまた思考が逸れた。
するとバンッと勢い良くドアが開きギルモアとトーマスが飛び出してきた。

「糞！　あの小娘・・・・・・いずれこの借りは「いやいやそれは八つ当たりじゃないですか」！？」
「今まで貴族相手に腐るほど稼いできたんでしょ？」
「き、貴様はヘイとか言うあの小娘の従者！」
「ギルモア様少し下がってください！」
「トマさんか・・・・・・貴方はそれでいいのか？」
「何を言っている！
トマ！　早くアイツを始末しろ！」
「・・・・・・分かりました」

ギルモアの命令を聞いて、トマは表情を一瞬歪めたが、懐からナイフを取り出した。
凄い忠誠心だな・・・・・・それが良いかどうかは別としてな。

「お嬢様には申し訳ないですが、ヘイさんには死んで貰います」
「俺を、そのナイフで？」
「そのつもりですが？」
「ふぅ・・・・・・まぁ取りあえず捕縛対象は沈黙させますよ」
「どういうことですか？」

俺は扉の横に待機させてたスリープクラウドで、ギルモアの頭を包みこんだ。
すると一瞬で意識を失い、地面に倒れ込んだ。

「ギルモア様！？」
「さぁどうする？
今アンタに取れる選択肢は二つ。
一つ目・・・・・・二人が来るまでに俺を倒して、そいつを背負って逃げる」

俺は指を一本立ててそう言った。
この間にもトーマスは隙あらば俺に向かってナイフを投げるか、飛びかかってくるだろう。

「二つ目・・・・・・ここで大人しくそいつを明け渡す。
さぁアンタはどっちを選ぶ？
考える時間はあまりないよ？」

この問いを聞いてもナイフを下げないということは……戦闘か？
さぁてと、だとすると殺すのは避けたいなぁ。

「ＯＫ、一つ目を選ぶのな？」
「例え悪事をなされていようと、ギルモア様は私の命の恩人ですから・・・・・・」
「損する性格だよアンタ」

もう話すことはなさそうだ。
トーマスのナイフを握る手に、力が入り始めているのが分かる。

「それでは・・・・・・私の手品堪能してください！」
「手品？」

そう言ってトーマスは、俺に向けてナイフを投擲した。
手品っていうことはなんか有るんだろうなと思いながらも、取りあえずナイフの横っ腹を拳で叩いて弾き飛ばす。
しかしそこで手品を理解した。

「ナイフの後ろにナイフか・・・・・・良い手だな。
でもこの位じゃ「大丈夫ですよね」？！」

ナイフに注意を割かれていたのか？！
いやそれだけじゃない！
姿勢を低くして、俺の視線から逃れたのか？！
トーマスは、既に俺の懐に入り込んでいた。

「さようならです、ヘイさん」

俺の胸元にナイフが突き立てられる・・・・・・前に左腕を盾にした。
流石にツボツボを装備していても、二センチくらい刃が刺さってしまった。
俺は痛みを堪えながら、無事な右腕で相手の胸倉をつかんだ。

「痛いだろうが！！」
「な！？・・・・・・ガハッ！」

俺は胸倉を掴んだままトーマスを思いっきり引っ張って、その勢いのまま背中に背負って、地面に叩きつけた。
ちょっと変則の背負い投げ、この世界には柔道なんてないからな・・・・・受け身も取れないだろう。

「カヒュ・・・・・ヒュ・・・・・カヒュ」
「流石に石畳に背負いはヤバかったかな？
でも死にはしないから勘弁な？」

気絶しながらも呼吸が微妙におかしいトーマスに謝りつつ、腕に刺さるナイフに目を向ける。
俺は刺さっているナイフを引っこ抜いて、痛みに顔を歪めながらユンゲラーを装備して、自己再生をした。
あのローブ着てればナイフ刺さらなかったのになぁ。

「ギルモア待つのね！
・・・・・・・・アレ？　何でここで寝てるのね？」
「ヘイ」
「あぁ、遅すぎるぞ！」

やっと二人が来たか、俺は錬金で服を直して二人に近づいて行った。

第１１２話　恩と過去（後書き）

修正

第113話　優しい約束（前書き）

明日実験だ……ヤダなぁ

第１１３話　優しい約束

遅れてきたタバサとシルフィは、手際よく二人を拘束した。
まぁギルモアは未だ寝てるし、トーマスは気絶している。

「何でこんなに遅れたんだ？」
「煙幕」
「簡潔すぎるけど把握した
でもシルフィの嗅覚は？」
「食べ物の匂いが強すぎて、当てにならなかった」
「だから謝ってるのに・・・・・・るーるー」

まぁ過ぎたことだしな・・・・・・。
これで任務達成だけど、タバサの視線がトーマスから離れない。

「仲良かったのか？」
「・・・・・・友達」
「そっか」

友達だったのか・・・・・・。
俺はタバサの頭に手を置き、軽く撫でる。

「・・・・・・捕らえるのはギルモアだけでいいんだぞ？」
「どっちにしても貴族の恨みを買ってる。

平民の彼には逃げ切れない」
「お気遣い・・・・・・ありがとう・・・・・・ございます」
「もう意識が戻ったのか？！」
「いえ・・・・・・直ぐにでも意識を失いそう・・・・・・ですよ」

顔色は青く、呼吸も今だ不規則だ。
本当に今意識を保っているのが不思議な位だよ。

「お嬢様・・・・・・御見苦しいところをお見せしてしまいましたね」
「・・・・・・」
「ギルモア様を御止出来なかったのは・・・・・・一重に私に度胸がなかった故のこと」
「貴方の所為じゃない」
「違うのです！
私が早い段階で止めていれば・・・・・・。
私は・・・・・・私は臆病者なのです。
シャルル様が亡くなり、夫人が御心を病んでしまった時に貴方様の傍から離れたのは、己が身の可愛さ故でした。
ジョゼフ王を恐れ、友と呼んでくださった貴方を見捨てて逃げたのです！」

難しいところだな。
確かに逃げたのかもしれない。
でも自身の命が最も大切なのは普通のことなんじゃないか？

「・・・・・・」
「幻滅したでしょう・・・・・・だから私はもう貴方の友を名乗る資格が「手品」え？」
「貴方は手品がとても上手だった」
「唯一の取り柄でしたからね・・・・・・」
「私はまだ・・・・・・タネを見抜いてない」
「何を・・・・・・「だから」」
「だから何時か・・・・・・何時かまた見せてほしい」
「・・・・・・・・・」

納得しないか・・・・・・なら発破掛けるか。
タバサのためだからな！
トーマス、あんたのためじゃないからな！

「トーマスさん、アンタは友達の願いを聞いてあげないのか？」
「ヘイさん・・・・・・」
「それにアンタは後悔してるんだろ？
過去の自分の行動を悔やんでいるんだろ？」
「・・・・・・はい」
「ならそれを繰り返さなければいい。
間違いなんて誰だってやるさ。
問題はそれをやった後に、相手に謝れるかどうかだ！」
「謝れるかどうか・・・・・・」
「アンタは自分が悪い。
だから許されないと自己完結しているが、まだタバサに謝ってない・・・・・・。
それともアンタは、自分が悲劇の主人公にでもなったつもりか？
だから謝らないのか？」

「違う！
私はシャルロット様に・・・・・・謝りたい」
「トーマス」
「あの時、逃げてしまって・・・・・・すみませんでした」
「・・・・・・許さない」

うぉ？！
マジか？！

「そう・・・・・・ですよね、虫が良すぎま「トマが今回の罪を償った時」・・・・・・」
「私に手品を見せに来たら許す」
「お嬢様・・・・・・」
「幸い今回は首謀者はアンタじゃない。
決して水に流せるものではないけど、そこまでキツい罰はないだろう。
アンタの得意っていう手品、俺も気になるから見せてくれると嬉しいな！」
「ヘイさん・・・・・・ありがとうございます」

この後直ぐトーマスは意識を失った。
俺達は二人を衛兵に引き渡して、シルフィで城の方へ向かう。

「タバサ・・・・・・いやシャルロットだったな」
「・・・・・・人には話さないで欲しい」
「分かってるよ」

会話が止まってしまったな。
やっぱりトーマスのこと気にしてんのかな？
そんなこと考えていると、前に座ってたタバサが俺の方に体を傾けた。
丁度頭の位置が胸の辺りにある。

「どうした？」
「・・・・・・少しこのままで」
「・・・・・・了解」

俺はタバサが落ちないように後ろから手をまわして、頭に顎を乗っけた。

「トーマスの手品楽しみだな」
「・・・・・・とても」

俺達はそのまましばらくの間シルフィの上でくっ付いていた。

俺はあの後いつも通り、タバサが報告しにいっている間、チャン達に会いに来ていた。
予想外の相手がいたが・・・・・・。

「レッド！」
「エルザ？！
何でここに居るんだ？！」
「おじいちゃんと一緒に、何時か世話になるかもしれないって人達に会いに来たんだけど・・・・・あの人達本当に大丈夫なの？」

エルザは、なんか隅っこの方でブツブツ言っている厳ついオッサン・・・・・チャンを指さしている。

「えっと、アイツがどうかしたか？」
「あの人、私がここに入ってきた瞬間にあそこに走って行って、ずっとあぁしてるの」

「他の人は話しかけてこなかったのか？」

俺は周囲を見渡して、団員達を見たんだが・・・・・・物凄い勢いで首を横に振っている。
事情を聴くべくチョイに話しかける。

「で、これはどういう状況なんだ？」
「チャンの好みを前話したでヤンしょ？
あの子がチャンのストライクゾーンだっただけでヤンス」
「エルザが・・・・・・ストライクゾーン？
・・・・・・・・犯罪じゃないか？」
「・・・・・・・・言わない約束でヤンス」
「他の団員がエルザに話しかけない理由は？」
「チャンに殴られると思ってるかなんかでヤンしょ？」
「・・・・・・あり得るな」

理由は分かったけど、結局チャンは何をブツブツ言ってんだ？
そっと近付いてみると、段々明確に聞こえてくる。

「可愛すぎじゃねぇか、オイ。
天使か？　天使なのか？
いや、でも前にヘイが言ってた亜人ってあの子のことか？
あの子を保護・・・・・・オイオイこのむさ苦しい酒場が天国になっちまうじゃねぇか！
ヘイに感謝しなけりゃならねぇな・・・・・・いや待てよ？
あの子が入ってきた瞬間に言ったのは，ヘイは居る？，だったな・・

・・・・アイツまさかあの天使に手を出したのか？！
もしそうだったら如何にアイツでも許さねぇ！
いや・・・・・・でもアイツに限ってそんなことはしないだろう」

・・・・・・聞かなかったことにしよう。
取りあえずエルザをこっちに近づけちゃ駄目だな。
チャンのためにも・・・・・・。

「エ、エルザ、どうだ元気だったか？」
「何をいきなり言いだすのよ。
・・・・・・元気よ」
「村長と一緒に来たって言ってたけど、村長は何処に？」
「知り合いの家に行ってるみたい。
多分もう少ししたら来ると思うけど」
「そっか・・・・・・」
「じゃあ次は私が質問する番ね？」
「え？　あ、あぁ何でも聞いてくれ」

正直チャンの方に注意が行かなければ問題ない！

「店主に聞いたんだけど、ヘイって滅多にここに来ないんだね」
「そうだな・・・・・・」
「じゃあ今日は何でここに？」
「ちょっと友人の付き添いでな」
「・・・・・・・・・女？」
「あ～・・・・・・・一応な」

「ふ～ん」

おぉ、何か寒くないか？
いきなり寒くなってきたような気がするぞ。

「ヘイの友人がどんな人か気になるな～」
「背はエルザよりちょっと大きい位かな？
無口で偶に小動物みたいな感じがする子だよ。
ハッキリ言えばタバサなんだけど・・・・・・ってエルザ？」
「・・・・・・ながら」
「ん？　良く聞こえなかったんだけど・・・・・・」

俺はエルザに耳を近づける。

「私と言うものがありながら！！！」
「ウオッ！？」
「アンタが村を出るとき勇気を出してキスまでしたのに！」
「ちょっと！？　それを今言うと「ヘイ？」・・・・・・ヤバいな」

後ろに凄い圧力を感じる。
振り向きたくない・・・・・・すげぇ振り向きたくない。
でも・・・・・・俺は振り向かずには居られなかった。

「チャ・・・・・・チャン。

違うんだ！
あれはお礼だってエルザも言ってたし、そう言う意味じゃ「ほぉ」」
「酷い！　私恥しいの我慢してしたのに！」
「エルザ！？　お前顔が笑ってるんだけど？！」
「ヘイ・・・・・・俺はお前を信じてたんだ。
だがお前は俺の信頼を裏切ったな？」

何か団員達が店の外に出て行くんだけど？
アレ……チャンがドンドン近づいてくるよ？
エルザ、お前声出さないで笑うなよ・・・・・・声出してくれれば
チャンが落ち着くかもしれないのに！

「なぁヘイ・・・・・・ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩしようぜぇ」
「嫌だーーーーーーーーーーーーー！！！」
「待てやテメェーーーーーーーーーーーー！！！」

それから俺がチャンを宥めるまで１時間掛かった・・・・・・・・・・・・・。

第１１３話　優しい約束（後書き）

なんか書いてて微妙に恥ずかしくなりました
っていうかアレ？
これタバサルート入ってね？
いや、まだ大丈夫だ！

第１１４話　ギトーの授業

非合法カジノの調査が終わり、数日が経過した。
今俺は学院長に呼び出されて、学院長室に向かっている。
特に何もヤらかしてないから、何で呼ばれるのか分かんないんだよなぁ。

「失礼します」
「フム、入ってきてくれ」

俺はドアを開けて、学院長室に入って行った。
他の先生はいない・・・・・と言うことは俺だけか？
視線を動かして周囲を見渡す。

「お主だけじゃよ」
「そうですか」
「まぁ畏まることはない。
今回呼んだのは、二年生の生徒に連絡を伝えてほしいのじゃ」
「連絡？
っていうか何で僕なんですか？」

本来ならこういう役は俺じゃなくて、コルベール先生じゃないのか？
俺の考えてることが予想出来たのか、学院長は苦笑しながら説明してくれた。

「最初今日授業があるギトー君に、授業前に話す予定じゃったんじゃが、呼び出す前に教室に行ってしまってのぅ。
コルベール君は実験中に失敗して気絶しておる」
「何やってるんですか・・・・・・。
分かりました、お引き受けします。
肝心な連絡内容はなんですか？」
「おぉまだ教えとらんかったな！
連絡内容は使い魔品評会に姫様がお見えになるということじゃ」
「・・・・・・・・・・・・そうですか」

うわぁ・・・・・会いたくねぇ。
どうも前世の時から好きになれなかったんだよ。
何で友達って言っておきながら戦場に行かせるかな？
何で国を捨てて恋人の下に走るなんて選択肢を出せるのかな？
どうもあの姫好きになれない。

「今はギトー君が授業をやっているころじゃが、連絡だけじゃから今から行っても大丈夫じゃろう」
「そうですね」
「じゃあ頼んじゃぞ？」

はぁ・・・・・・気が進まないけど、行くとしますか。

教室前まで来たけど、やっぱり授業中に入って行くのは度胸がいるな。
なんだろう、遅刻したような気分？

「そこの平民、貴様は最強の系統を知っているか？」
「知らないです」
「フンッ、だろうな・・・・・・・
ではミス・ツェルプストーは答えられるか？」

この声はサイトか？
あれ、これ原作でもあったような気がする。
確かこの後は・・・・・・。

「それなら火に決まってますわ。
全てを情熱の炎で焼き尽くす事が出来るのですから」
「違うな、そうではないのだよ。
論より証拠だ・・・・・・君の魔法を私に放ってみなさい」

そうだ、この後キュルケの炎をギトーが・・・・・・。
止めないとな！

「では胸を借りるつもりでいきますわ！」
「来たまえ！」
「ちょっと待ってください！」
「ファイヤーボール！」
「エアハンマー！」
「クッ、アースハンド！」

俺はキュルケの身体を引き倒して、炎を纏ったエアハンマーから避けさせた。
あぶねぇ・・・・・・もし当たってたら火傷だけじゃ済まなかったぞ？！
俺は壁に轟音を立てて当たった風の槌を一瞥して、ギトーを睨む。

「ギトー先生・・・・・・今何をなさったか分かってるんですか？！」
「レッド先生、今は私の授業中です。
邪魔をしないでいただきたい！」
「僕は、今、何をしたか、聞いているんです」
「見ればわかるだろう？
風こそが最強だということを身をもって証明してあげたのですよ」

いや、クラスが違う時点でその比較なりたたねぇぞ？
お前スクウェアだろうが・・・・・・。
っていうかそれ以前に生徒に向かって怪我するような魔法を使うな！

「貴方はあくまで今のを授業と言うのですね？」
「当り前だろう」
「では学院長に今のことを報告してもよろしいですね？」
「な？！　なんだと？！」
「これは貴方の教育方針で、学院長の許可を得てやっているのでしょう。
なら僕が学院長に確認を取っても大丈夫じゃないですか？」

さぁどう返してくる？

「今のはギリギリの所で、エアハンマーを解く予定だったのだ！
貴様が来なければそうするつもりだった！」
「（いやいや俺が引き倒さなかったら、普通に直撃だったぞ？）そうだったのですか・・・・・・どちらにしても報告はしますけどね？」
「何故だ？！」
「教室の壁・・・・・・壊れてしまいましたからね。
理由を話さなければなりませんから。」
「クッ！・・・・・・そうだ、貴様こそ人の授業中に教室に入り込んで授業妨害ではないか！」

授業妨害・・・・・・最強の系統聞いて、尚且つ生徒に向かって教室内で攻撃魔法使うことが授業ね？
ははは、笑わせてくれるなよ？

「それは、申し訳ありませんでした」

「全く誰の許可を得て、私の授業を妨害「ですが」なんだ・・・・・・」
「学院長から至急連絡事項を伝えてきてくれ、と言われて来ましたので大目に見てほしいです」
「なんだと？」
「皆さんも聞いてください。
もう少しで使い魔の品評会がありますね？
今年は、何とアンリエッタ姫がいらっしゃるそうです！」

ザワザワし始めたな・・・・・・まぁしょうがないけどな。
そんなことよりギトーの視線がウザったすぎる。
調子に乗りやがって的な目が対応に困る。

「僕の連絡は以上です。
皆さん品評会に向けて頑張ってくださいね？
あぁ後ミス・ツェルプストーは怪我とかないと思いますが、もしどこか痛かったら僕に言ってください。
薬を渡しますので」
「ありがと、レッドせんせ！」
「ではギトー先生・・・・・・授業の続きをお願いします」
「・・・・・・邪魔だから出て行きたまえ！」
「それではみなさん頑張ってください」

俺が教室を出ると、何かを硬いものを思いっきり叩いたような音が聞こえてきたが、聞かなかったことにした。

第１１４．５話　魔法の相性考察

レッドが教室から出て行った後のギトーの授業。
それはもう凄まじい空気の中で行われていた。

「糞！」

そう言って教壇を思い切り叩くギトー。
その姿を見て、同情する生徒は誰一人としていなかった。

「今日の授業はここまでだ！
後は各自自習していろ！」

そう言ってギトーは、凄い勢いで教室を出て行った。
皆呆れすぎて声も出ない。

「兄様苛立ってたみたいね」
「そうなのか？」
「多分・・・・・前に聞いたことあるんだけど、昔クラスの友達が同じようにギトーに吹き飛ばされそうになったんだって。
多分その時のことを思い出したんだと思うけど・・・・・」
「あぁ、それ聞いたことあるわね・・・・・その吹き飛ばされそうになった本人からだけど」
「キュルケ！　アンタいきなり会話に入ってくるんじゃないわよ！

・・・・・・怪我はなかったの？」
「な～に～、心配でもしてくれてるのかしら？」
「そ、そんなんじゃないわよ！
もしアンタが怪我したなら、しばらくアンタの顔見なくて済むから、
気になっただけよ！」

顔を赤くして、顔を背けながら言ってもなぁ。
そう思ったサイトは悪くないと思う。
そんなサイトの考えを感じ取ったのか、ルイズは弁慶の泣き所にトゥキックをかました。

「イッテェ！！！！！
何すんだよ！」
「なんか不愉快なことを考えていた気がしたのよ！」

サイトドンマイ！

「所でルイズ。
貴方なら最強の系統なんて答えたのかしら？」
「私？・・・・・・虚無かしら」
「虚無？」
「ダーリンは知らないのね・・・・・・良いわ私が教えてア・ゲ・ル！
虚無っていうのは伝説の系統で、どんな魔法があるのかよく知られてないの。
でも始祖ブリミルがこの系統だったことから、生半可なものじゃな

かったんだろうって言い伝えられてるわ。
伝説によればエルフの先住魔法すら打ち破ったとか・・・・・・」
「（良くわかんないけど・・・・・・）凄いんだな！」
「ってルイズ、虚無は抜きなさいよ。
四系統の中ならどれだと思うのよ？」
「四系統の中で・・・・・・う～ん」

ルイズは少し考え込んだ。

「相性次第かしらね・・・・・・」
「「相性？」」
「火は攻撃に特化してるからある意味最強かもしれないわ。
風は攻撃が不可視だったり、凄く速かったりする。
しかも遍在っていう凄い魔法もあるわ」
「そうね」
「でも土だって錬金は凄く色々な使い方があるから、弱いとは言えないし、ゴーレムだって高位のメイジが作ればとても強い
水だって攻撃に向いてないとか言われてても、使い方次第でどうにでもなるって兄様も言ってたでしょ？」
「そうだったわ・・・・・・レッドの水魔法の攻撃力は、確かに高いわね」
「でしょ？
だから簡単に最強なんて決められないのよ」

キュルケはその結果に納得したのか、その話を続けることはなかった。

ところ変わって、ある日の暗い地下牢でのお話。
そこには一人の女性がいた。

「全く・・・・・・土くれのフーケ様ともあろう者が、あんながきんちょ達にしてやられるなんてね。
焼きが回ったのかね？」

その女性はついこの間レッド達が頑張って捕まえたオールド・オスマンの秘書、ミス・ロングビル改め土くれのフーケだった。
レッド達に気絶させられて、衛兵に捕まり、今はここに居る。
杖は勿論のこと、装飾品からメガネまで持っていかれてしまった。

「ふぅ、どうしようかねぇ」
「ならば、私たちに手を貸すというのはどうかね？」
「誰だい！？」

牢屋の檻越しに仮面を付けたメイジが立っている。
何時の間にあそこに居た？

「私は名乗るほどの者ではないよ。
所でさっきの話はどうだね？」
「アンタ達に手を貸すって話かい？
ハンッ！　牢屋に捕らえられた盗賊なんてどうするっていうんだい！」
「こんな牢屋など有ってないようなものだ。
もし手を貸す気があるのなら、ここから出してやろう」
「それはそれは・・・・・・魅力的すぎて怪しいね？」

牢屋から罪人を自由に出来る立場にある人がこの組織には、いると言うことだ。
バックがしっかりしている組織は途中で抜けることが難しい。
どうする・・・・・・？

「悩んでいるようだな・・・・・・私たちは優秀なメイジが必要なのだ
そう土くれのフーケ・・・・・・いや、マチルダ・オブ・サウスゴータ」
「なんでアンタがその名前を？！」
「ちょっと調べさせてもらったよ」
「・・・・・・」
「私たちに組みすれば、憎きアルビオンの王族に復讐が出来るぞ？」

「なんだって？」
「私たちは今度、アルビオンを攻める。
その際に王族を一人たりとも生かすつもりはない」
「何で私にそんなことを・・・・・・・まさか？！」
「いや、口が滑ってしまった。
これは困ったな・・・・・・仲間にならないなら始末するしかなくなってしまったな」
「・・・・・・最低だねアンタ」
「それは褒め言葉かい？」

フーケは顔を歪めて仮面の男を睨んだ。
これで選択肢は一つしかなくなった。

「元からここに居ても恐らく死罪だっただろう？
なら私たちのために力を使いたまえ」
「しょうがないね・・・・・・アンタ達に従うよ。
で、一体アンタ達は何者なんだい？」

フーケはそう尋ねた。

「私たちか？
私たちは・・・・・・・レコンキスタだ」

仮面の下の表情はきっと歪んだ笑いだっただろう……。

第１１５話　姫と獅子身中の虫

今日は使い魔品評会がある・・・・・・あのアンリエッタ姫が来る日でもある。
姫様が来ると生徒たちも浮足立っている。
今はアンリエッタ姫が来ると言っていた時間に近づいているので、生徒たちは今か今かと校門に目を向けている。

「兄様も姫様が気になるの？」
「ん？　いや、忙しくなりそうだなって思ってね。
そう言えば今日の品評会は大丈夫かい？」
「・・・・・・多分」

俺にとっては姫様云々よりも、生徒が使い魔品評会でどんな事をしてくれるのかという方が気になる。
特にシルフィ、サイトの二人には凄く期待している。

「そう言えば兄様は品評会で何をしたの？」
「気になる」
「タバサ？！」「タバサ嬢・・・・・・何時の間に」
「アイガは何をしたの？」
「まぁ、隠すことはないからね。
僕とアイガがやったのは、空中に投げた的を射抜いただけだよ」
「それだけ？
兄様のことだからもっと凄いことやったと思ったのに・・・・・・」

ルイズは少し拍子抜けした様だ。
でもタバサはまだ俺の方をジッと見ている。

「タバサ？」
「・・・・・・何個？」
「何のことだい？」
「射抜いた的の数」
「あ！」

ルイズは恐らく一個だけだと思ったんだろう。
まぁ枚数は言わなかったからしょうがないんだけどね。

「七個だよ」
「七・・・・・・それは同時？」
「そうだよ」
「・・・・・・凄い」

タバサはアイガの力を模擬戦で見ているからな・・・・・・。
七個の対象を同時狙撃出来るっていうことが、どんな意味を持つのか分かったのだろう。
やろうと思えば竜の体さえ貫通する石の弾丸が、七発同時に精密射撃出来ると思えばタバサの驚きも分からなくない。
ルイズはあんまり理解してないみたいだけど・・・・・・。

「タバサ嬢はどんなことをやる予定なんだい？」
「秘密」
「そっか・・・・・・じゃあ本番を楽しみにしているよ」
「頑張る」

そうして話していると周りが騒がしくなってきた。
どうやら姫が乗ってる馬車が校門についたらしい。

「どうやらおいでなさったみたいだね」
「・・・・・なんかそう言われると、来てほしくなかったみたいに聞こえるわ」

まぁ、来てほしくなかったからね。
でも確かルイズは姫と友達だったはず。
流石に来てほしくなかったとは言えないな。

「来て欲しくなかったわけじゃないけど、僕はそこまで姫様に傾倒してないからね」
「そうなの？」
「まぁね」

俺たちはジッと校門を見つめた。
馬車から次々と人が降りてくる。
馬車の周りには、グリフォンが数頭いて警戒している。

「あそこにいるのはグリフォン隊かな？」
「そうみたい」
「先頭に居るのが隊長みたいだね・・・・・・・」

アイツがワルドか・・・・・・髭で長髪の見た目渋い男。
その実レコンキスタに所属しているスクウェアメイジで、近接戦闘も出来る。
流石にルイズのお母さん程じゃないだろうけど・・・・・・敵対するならそれなりに準備が必要だな。

「あ！　姫様が降りてきたわ！」
「あぁそのようだね」

見た目可愛いけど、常に厄介事が後をついてくるアンリエッタ姫。
関わり合いになりたくない。
あ、今ルイズを見て手を振った。
ルイズも笑顔で手を振り返しているな。
俺はそっとその場から離れた。

無事品評会も終わり、俺は部屋で授業資料を整理しながら、これからのことを考えていた。
姫が来たってことは、ルイズ達のアルビオン行きは近い。
でも気になることが一つある。
ワルドだ。
原作ではワルドはルイズの許婚という立場だったが、今は違う。
この事がどんなイレギュラーを招くか分からない。
メインメンバーが死なないとは言い切れないのだ。

「どうすればいい・・・・・・」

ルイズやサイトがいなければ、この国は終わるかもしれない。
そうなったらいつか平穏に暮らすなんて夢のまた夢。
ついて行った方が良いんだろうか？

「一応何時でも動けるように、準備だけはしておこう」

俺は一旦資料整理を止め、マインゴーシュ用の剣を砥ぐことにした。
自分の手ともいえる剣を、使わないで済むことを祈りながら、無言で砥ぎ続けた。

第１１５話　姫と獅子身中の虫（後書き）

次回は何となく外伝

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……ｐａｒｔ２（前書き）

今回はＨ×Ｈに行ってきます
行ってきま～すって言えば何となくＧＧを思い出すのは俺だけだろうか？

因みにうろ覚えですｗ
今手元に漫画ないので……
ゴンが難しい

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……ｐａｒｔ２

～Ｈ×Ｈの世界へ～

日常編

「本が好きなんですか？」
「！？あぁ昔から本を読むのが好きでね……」
「へぇ……気が合いますね！
俺の名前はレッド・ド・ドリュウズです」
「俺の名前はロロ・ルシル。
面白いね君。
もしよかったらホームコードを交換しないか？」
「（面白い？）良いですよ、同好の士に会えたのは久しぶりなので！
いつでも連絡して下さい」
「そっか！
今日は忙しいからここら辺でお暇させてもらうけど、時間が出来たら連絡する」
「そうですか……それじゃあまた！」
「あぁ」

「良い人だったな……でもなんか聞いたことある名前の様な気がするんだよなぁ」
「レッド君！　また店番中に本を読んでいたのかね！」
「あぁ店長！？」
「いい加減にしないと減給するよ？」

「それだけは勘弁してください！」

「アイツ面白いやつだったな……っと電話か（ピッ）。
なんだ……分かった。
アジトで合流する。
さて、レッドって言ったな。
絶している俺に気付いたってことは、念能力者か？
それにしては……どっちにしても面白い。
しばらく様子を見ることにするか」

イベント編

「確かに証明書的なものないんだけどさ……だからってハンター試験はおかしくないか？」
「お前も大変な人生送ってたんだなぁ」
「レオリオ、お前医者目指すなら俺の心をどうにかしてくれ！」
「無理だな、不可能だ、諦めろ」
「お前！？」
「だってお前と出会ったの、ついさっきだぜ？」
「それでも頑張ってくれ！」
「無茶言うなよ……」

「おぉ、ここがハンター試験会場……か？」
「早く入ろうよ！」
「オイ、待てってゴン！」
「やれやれ……私達も行くとしようか、レッド」
「（この店のネーミングセンスカオスすぎるだろ！）……そうだな」

「うわぁ……人がいっぱいいるよ！」
「ゴン！　睨まれてるから……」
「？」
「だからね？皆の迷惑になるからあんまり騒がないようにしようってこ「ギャーーーーーーーーー！！」……勘弁してくれ」
「アイツはヒソカ、前回のハンター試験で試験管半殺しにして失格になった危ない奴だ……近寄らない方が良いぜ？」
「そう言うアンタは？」
「俺か？　俺はトンパだ。
一応ハンター試験常連だぜ？」
「（それって良いことじゃないんじゃ……）そうなんですか？」
「あぁ、分からないことがあったら俺に聞きな！
これはお近づきの印だ」
「（来たな、トンパジュース）いえ、喉渇いてませんから」
「そうか？　残念だな……坊主はどうする？」
「俺飲む！」
「そうか！　じゃあほれ」
「ありがとう！……エレエレエレ～。
おじさんこれ痛んでない？」
「（無味無臭の下剤だぞ？！）あ、あぁ済まなかったな！
じゃあ俺はこの辺で」
「（野生児相手に薬はなぁ……）」

バトル編

「第3試合ヒソカ対レッド……始め！」
「君はあまり美味しそうじゃないね♪」
「……ご期待に添えず申し訳ない」
「でも殺すと負けになっちゃうから手加減してあげるよ？」
「（念を使える相手に素の状態で勝てるとは思えないし、何よりヒソカだしな）それはありがたいですね」

「なぁ、レッド大丈夫だと思うか？」
「分からない……彼の戦っている姿は、今の所見る機会がなかったからな」
「だよなぁ、でもヒソカには勝てないんじゃねぇか？」
「そうかもしれないが……動いたぞ！」
「おぉ！ヒソカのトランプを切り落としたぞ？！」
「（レッド……意外と強かったのだな）」
「でもやっぱり防戦一方だな……ん？なんだ？」
「ヒソカがレッドに何か話しかけているな」

「君意外と強かったんだ♪」
「いえいえ、偶々です」
「でも君……本気出してないでしょ？」

「？！……何でそう思うので？」
「何となくかな？」
「（きめぇし、怖ぇ）いえいえ、これが本気ですよ？」
「ふ～ん……でもこのままだと君殺しちゃうよ？」
「え？　いやいや、そうしたら貴方の負けですよ？！」
「だから本気を出してくれると嬉しいなぁ？」
「殺されるのは困ります……ッ！？（バンジーガム？！）」
「ほら、防がないと死んじゃうよ？」

「オイ！？　レッドの奴今不自然に体勢崩さなかったか？！」
「そのようだが……原因が分からない」

「（くっそ！　やっぱり狂人の相手は困る！装備、ツボツボ、パルシェン、ハガネール）グッ！」
「？！へぇ……面白いこと出来るんだね？」
「ちょっと身体が頑丈なもので……ガッ？！」
「うん……君面白いね？」

「おい……今顔にトランプ当たったよな？」
「……そうだな」
「あれって、二次試験で人斬ってたやつだよな？」
「……そうだな」
「レッドって……なにもんだ？」
「……私にわかるか！」

「特に念も使ってない様だし、どうやってるのかな？」

「念？」
「あぁ、別に気にしなくても良いよ♪
でもどうしようかな……そうだ！
一回本気で攻撃してきなよ、それで僕が納得出来れば君の勝ちにしてあげるよ？」
「（本気か……見た目が変わらない程度のポケモンを装備して、格闘系の技かな？）」
「どうしたの？」
「いえ、その提案ありがたいです（ハリテヤマ、ゴーリキー、コジョンド装備！）。
では行きます」

「なんだ？」
「急にレッドが立ち止ったな……何かする気なのか？
「走り出したぞ！」

「（何をする気なのかな♪）」
「ガードしてくださいね？
メガトンパンチ！」
「グッ！？（これは……想像以上だねッ！）」

「ヒソカが吹っ飛んだ？！」
「だがダウンはしないか……（怪力だな）」

「どうでしょうか？」

「フフフ！合格だよレッド君！！
審判、僕の負けで良いよ」
「え？は、はい！
勝者レッド！」
「（念を使ってないのにこの力……良いねぇ？）ぜひ君とはルールなしで戦いたいよ？」
「（凄い寒気を感じるよ？！）え、遠慮します！！」

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……ｐａｒｔ２（後書き）

こんなところかな？ハンター世界では無双編は書きません。
無双出来るか微妙ですから……ＴＨＩＳ　ＷＡＹ！

第１１６話　草葉の陰から（前書き）

取りあえず村クエはクリア
ジエンモーランは良いお金になります

第116話　草葉の陰から

今朝ルイズ達はアルビオンに向けて、旅立って行っただろう。
俺は、今だ迷ってる。
取りあえず学院長に呼ばれているので、一旦考え事は後にするか……。

「失礼します、学院長。
今回はなんの御用でしょうか？」
「おぉ来てくれたか！
急ぎ頼みたいことがあるんじゃ！」

なんだ？
そんな焦るようなことが・・・・・・いや、あるけども。
まさか？！

「お主、今朝ミス・ヴァリエール達が、学院を出たのを知っておるか？」
「いえ、初耳ですね」

流石に知識としては知ってますなんて言えないしな。

「先ほどここに姫様がいらっしゃっての？
グリフォン隊の隊長が護衛としてついていくが、念には念を入れて

学院から一人、影からフォローしてくれるように頼まれたんじゃ」
「はぁ・・・・・何故普通に合流しては駄目なんですか？」
「何があるか分からないからの・・・・・もし捕えられたりした場合に敵に存在を知られるのは不味いじゃろ？」
「理由は分かりましたが、何故僕なんですか？」
「生徒たちには実戦経験がないし、いざという時に動けんかもしれん。
なら教師の中から選ぼうと思って、コルベール君に声を掛けたのじゃが、やっぱり断られてしまったんじゃ」
「じゃあギトー先生は？」
「彼は……ほら、分かるじゃろ？」

確かに影からサポートするのに不向きだからな・・・・・あの人。
風だから遍在とかフェイスチェンジとか向いてるんだけどなぁ。

「分かりましたけど、何処に向かえば良いんですか？」
「おぉ、受けてくれるか！
依頼料は弾ませてもらうぞ！
彼女たちはアルビオンへと向かっておる・・・・・今朝出かけたからまだ間に合うじゃろうが、念には念を入れて、飛竜を使った方が良いじゃろう。
費用は儂が出すから気にせんでもいいぞ」
「分かりました・・・・・」
「頼んじゃぞ！」

結局行くことになったか・・・・・悩んでいたから良い切っ掛けになったと思おう。

「行くことが決まったのは良いんだが、どう行くか・・・・・・」

問題はルイズとワルドは恐らくグリフォンで先を急いでいるだろう。
まぁ馬で移動している、サイトとギーシュに追いつければ問題ないんだけど・・・・・今から追いかけるとしたら、馬を使い潰す気で走らせないと駄目だ。
流石にそれは避けたい・・・・・学院長は飛竜を借りろって言ってたけど、借りるには遠回りして街に行かなきゃならない。
そうしている間に何かあったら？
確かサイトたちは傭兵に襲われたはずだ・・・・・なら最速で追いかけよう。
俺は取りあえず剣を持って学院を出て、森に入った。

「来いギャロップ！」

出てきたのは真っ赤な燃えるたてがみを持ったユニコーン。
正直気は進まないが、まだあり得る手段だろう。
もし見られたとしても、突然変異のユニコーンと言えば誤魔化せるだろう。

「ギャロップ、その火を抑えることは出来るか？」
「ブルルルル」

どうやら大丈夫なようだ。
確かギャロップは本気で走ると、炎が凄まじい勢いで燃え盛るらしい。
ならば本気じゃなければ、どうにかなるんじゃないかと思ったんだよ。
本気のギャロップの背中に乗るのは正直自殺行為だろうしな……だって新幹線と同じ速度なんだぞ？
落馬＝即死だろうが！！

「じゃあアルビオンに行くために、港に向かうとしますか！」
「ヒヒーーーン！」

俺は白いユニコーンと化したギャロップに跨って、走り始めた。
速い・・・・・・・・って言うかヤバい。
なんて言えば良いかな、高速道路をオープンカーで時速１５０キロ位出してる感じかな？
正直めっちゃ怖い！！

「もっとスピード落としてくれ！」
「ブルルル」
「首を横に振るなぁぁぁぁぁぁ！！！」

そのままギャロップは走り続け、俺の悲鳴を普通に無視し続けた。
勘弁してくれ・・・・・・。

走り続けた結果、やっとサイトたちが傭兵に襲われるであろう森についた。
俺達は森に入り、ギャロップにはお帰りいただいた・・・・・・。

「遠くに小さくサイト達が見えるな・・・・・・そして傭兵達も。
ちょっと遅かったか？
いや、でも大丈夫そうだな・・・・・・」

忘れてたよ・・・・・・タバサとキュルケが、サイトたちと合流するのってこのタイミングだったな。
あれ？　俺急いだ意味有ったんだろうか？

考えないことにしよう・・・・・・悲しくなる。
確かこの後は特に何もなかったはずだから、ゆっくりついていくことにしよう。

「そう言えば、サイトたちの馬は傭兵に殺されたけど、どうやって移動・・・・・・あぁシルフィか？
ってことはめちゃくちゃ早いってことだよな？」

ま、またか？
またギャロップタイムなのか？
そうだ！今度はゆっくり走る様に厳命しよう！

「もう一度来い、ギャロップ！」
「ブルルル？」

どうしたんだ？とでも言いたそうな顔をしているギャロップ。
俺は今度はゆっくり走って、シルフィに見つからない様に走ってくれと頼んだ。

「ヒヒーン！」
「そうか！　分かってくれたか！」

やっぱり確り話せば分かってくれるんだな！
次の瞬間ギャロップは、確かにさっきよりは遅く走ってくれた。

但し森の中で木を避けながらだけどな！

「確かに見つかるなとは言ったけど、これは想定外だ！！」

「ヒヒーーーーン」

左右に揺さぶられながら、俺はギュッとギャロップの首に掴まりながら耐えた。

なんかギャロップはさっきよりも楽しそうである。

どうやら障害物競走の様な気分を味わっているようだ。

確かにハートゴールドでそういう競技に出してたけど・・・・・・・・・・気合入り過ぎだろう？！

うぷっ、酔いそうだ。

第１１７話　運悪く遭遇

無事？にラ・ロシェールという、アルビオンに向かう便が出ている村についた。
アルビオンは空に浮いている。
故にこの町から出ている風石を利用した乗り物で行くのが一般的だ。
行こうと思えば竜に乗って行くこともできる・・・・・あまりやらない方が良い方法だけどな。
高度が高いと風は強くなる。
人を乗せて飛行するには少し厳しいだろう。
因みにギャロップには村に入る前に帰ってもらった！

「さてとルイズ達は女神の杵亭に泊ってるから、他の宿に泊まらなきゃな。
でも何かあった時に直ぐ動けるよう、近くなくちゃ駄目だろう・・・・・」

周囲を見渡して俺の目に入ったのは、とある酒場だった。
あの酒場はどうやら休憩所も兼ねているようだ。
ならあそこにするとしよう。
そう思って酒場に入ったのだが、そこは厳つい男たちの溜まり場だった。
特に注目もされなかったので、カウンターに向かう。

「何にするお客さん？」
「部屋を借りれるか？」

「休憩かい？」
「いや、宿泊で頼む」
「一晩８０スゥだ」

意外とするんだな・・・・・・まぁこれは経費で落ちるから何の問題もないんだけどな。
俺はマスターに宿代を渡し、二階の部屋へと向かった。
どうやら俺は運が良かったらしい、丁度女神の杵亭がばっちり見える部屋だ。
これで何時でも対応できる。

特にやることもなかったから、ベットに横になっていると……なにやら下の階が騒がしい。
耳を澄ませてみれば、どうやら酒場に入ってきた女性に傭兵達が絡んだらしい。

「どうでもいいか・・・・・・」
「アン・・・・・・みたいな・・・・・・・に出来る・・・・・・・がない」
「なんだとこのアマ！」

なんか揉めてるな……。
取りあえず気になったから、ドアを少し開けて階下を覗くと、何処かで見たことある顔が傭兵達をノシていた。

「あれ、フーケじゃん・・・・・・」

静かにドアを閉めて、ドアに耳を付けた。
話を聞けば明日の夜に女神の杵亭を襲撃する話をしているようだ。
二階まで聞こえる声でそんな話すんな！
まぁこっちとしては助かるけど・・・・・・。
俺はその後もしばらくの間、ドアに耳をくっ付けていた。

翌朝、窓から外を見た時に見えた光景は髭の紳士っぽい人がサイトを吹っ飛ばしているところだった。
え？何で決闘してんだ？
許婚でもないんだから、君に相応しい云々のくだりはないはずだ。
あぁ、ただ単に戦力確認か・・・・・ルイズもいないしな。
サイトはどうやら落ち込んでいるようだ。
いや、負けるのが普通なんだけどな？
ガンダールヴがあれば最強とでも思っていたのだろうか？
何となく見ていたくなくなり、窓から目を背けて昼食を取るために下に降りた。

「マスター、昼食は用意できるか？」
「あぁ、そこに座って少し待っててくれ」

「分かった」

取りあえず勧められるまま、カウンターに座って待つ。
昼は傭兵ここに居ないんだな・・・・・・っていうか客がほとんどいない。
まぁ昼に酒場で飯食うなら、普通に定食屋行くよな。

「出来たよ」
「ありがとう」

俺の前に出てきたのは、トーストとソーセージ二本、そしてスクランブルエッグだ。
朝食の残りか？
まぁ食べれればいいか。
その後出された食事を食べ終えた俺は、喉が渇いたので水を頼むと、表に井戸があるからそこで汲めばいいと言われた。
流石に酒を飲むわけにもいかないので、水を汲みに外に出た。

「あぁ、意外と近くにあるんだな・・・・・・・あ」
「・・・・・・レッド？」

なんてタイミングだよ……。
急いで俺はタバサの手を掴んで、酒場の中に戻った。
そしてそのまま部屋まで引っ張って行った。

「・・・・・・痛い」
「あ・・・・・・ごめんな？」
「何でここに居るの？」

まぁタバサなら話しても大丈夫かな？

「学院長からの依頼でな。
ルイズ達を陰から助けるっていう・・・・・・な」
「そう・・・・・・」
「だからルイズ達には秘密な？」
「秘密・・・・・・分かった」

何で少し嬉しそうなんだ？
いや別に良いんだけど。

「あぁそう言えば、今日の夜に襲撃があるかもしれないから、気をつけろよ？」
「何で知ってるの？」
「昨日この酒場にフーケが来てな、傭兵達と一緒に女神の杵亭を攻める計画を立ててたんだ」
「フーケ？！」
「多分脱走したんだろう」

本当ならワルドのことも話した方が良いのかもしれないけど、万が

一・・・・・本当に万が一だけどワルドがレコン・キスタに属してない可能性もある。
確実じゃない情報は話せないからな。

「だから宿に戻ったら、何か対策をしておいた方がいい。
一応俺も外で援護するけど、あくまで援護だからな・・・・・・。
どうしても危険だと感じたら合図をしてくれ」
「合図は？」
「俺の部屋の窓に向けて、ライトを飛ばしてくれ」

まぁ照明弾的な扱いだな。
分かりやすいし良いだろう。
所でタバサさん？
何で君は、ベットに座ってくつろぎ始めてるのかな？

「戻らなくていいのか？」
「今は自由時間」
「そうか……」
「昔話」
「へ？」
「レッドの昔の話が聞きたい」

なんでタバサは俺の過去を知りたがるんだろ・・・・・・まぁタバサは、俺の話を楽しそうに聞いてくれるから、話してて楽しいんだけどな。

「じゃあ今日は、俺の学院時代の話をしようか・・・・・・」
「楽しみ」

第１１８話　傭兵たちの強襲（前書き）

なんかあんまり筆の進みが良くない

第１１８話　傭兵たちの強襲

気付けば夕方になっていたので、タバサを宿へと帰す。
話が微妙なところで終わってしまったので、微妙に不満そうだったが・・・・・・。

「下の階が騒がしくなってきたな。
そろそろフーケ達も動き始めるかな？」

俺はここから傭兵の数を減らすのが、主な仕事になりそうだな・・・・・。
もしかしたらタバサから救援要請が来るかもしれないが、意外と負けず嫌いなところがあるからな。

「お、動きだしたな」

酒場からフーケを筆頭に、傭兵達がドンドンと出て行く。
フーケは宿の側面に立つと、ゴーレムを作り始めた。
傭兵達も入口に張り付いている。
開戦は近い・・・・・・。

フーケはゴーレムを作り終え、傭兵に手で指示を与え始めた。
そしてフーケ本人は杖を振り、ゴーレムの拳を振りかぶらせ、そのまま宿の一室を殴りつけた！

それと同時に傭兵達が宿に雪崩込んでいく。
俺も仕事しますか！

「ロックスピア」

石の槍が、宿に突入しきれなかった傭兵達の手足を貫いていく。
これでもまだ半分以上残ってるな……。
突然の攻撃に傭兵達も困惑しているが、フーケが何かを言うと傷ついた仲間を放置して宿へと歩を進める。
大方成功報酬の話でもしたんだろう。

「まぁ、成功を許す気はないけどな
もういっちょ、ロックスピア」

再び傭兵の何人か石の槍に貫かれ、行動不能になる。
でも一回目程じゃないな・・・・・流石に警戒されてるか？
フーケも周囲を見回している。
どうやら中でも動きがあったようだな。
宿から火の手が上がっている。

「お？　タバサ達が出てきたな・・・・・」

キュルケとギーシュはなんか驚いてるな。
フーケはギーシュを睨みつけている。

あ、ギーシュがやったと思ったのか？
フーケが何か騒いでる。

「傭兵はほぼ全滅、フーケはあの三人に任せれば大丈夫だろう」

なんかタバサこっち見てるし・・・・・・。
取りあえず口パクで頑張れって言って、俺は酒場を後にした。

～タバサ　ｓｉｄｅ～

レッドはルイズ達の様子を見に行った？
少し残念な気持ちが、私の中に生まれる。

「やってくれたねアンタ・・・・・・傭兵相手に奇襲なんてやるじゃないか！」
「奇襲？」

フーケは周囲に転がる傭兵達に目を向けながら、ギーシュに向かってそう言い放った。
ギーシュは不思議そうな顔をしている。

「白々しい真似を！
アンタが傭兵達の手足を、魔法で貫いていったんだろうが！」

今ギーシュの頭の中は疑問でいっぱいだろう。
自分がやった覚えのないことを怒られている様なものなのだから。

「ねぇ、タバサ・・・・・・これ誰がやったの？
ギーシュじゃないわよね？」
「・・・・・・知らない」

ここにレッドがいて、私たちの援護をしているのは、レッドと私だけの秘密。
そう思うと私は頬が緩むのを感じた。

「タバサ？」
「何でもない」
「でも貴方笑ってるわよ？」
「気のせい」
「アンタ達！　私を無視するんじゃないよ！」
「今はフーケの相手をするのが先決ね・・・・・・後で笑っている理由聞くからね！」
「・・・・・・秘密」

こうして締まらない始まり方をしたフーケとの戦いは、終わり方も締まらなかった。
ギーシュが薔薇の花びらを油に錬金して、それに火を着けることでフーケのゴーレムを燃やしたのだ。
その後はキュルケとフーケのキャットファイト・・・・・女同士の戦いはフーケの勝利、彼女は煙幕を使って逃げてしまった。
ここで深追いをすると言う選択肢は取れない。
手負いの獣は何をしてくるか分からないし、今はルイズ達の方が気になる。
彼らの方に奇襲はなかっただろうか？

～side　end～

俺がルイズ達の様子を見に来た時には、既にサイトがワルドの遍在と戦っていた。
そしてサイトは・・・・・・・ライトニング・クラウドで撃たれた。
痛そうだ・・・・・だけどこれでサイトは戦闘に対する甘えを消せるはずだ。

サイトはまだ人を殺したことがない。
そんな甘い考えではワルドを相手にするのは厳しい。
原作では勝ったかもしれないけど、今回はルイズとの結婚式イベントは起こらない。
故にアルビオンに行った後は、何があるか分からないのだから。
今一番ルイズの近くに居ることの出来る人間はサイトだ・・・・・・
俺は影からの援護が任務内容だし、表立って守るのはサイトの役目になる。
だから油断をしないで欲しい・・・・・・自身がこれほどの怪我を負えば、ここが戦場で、何時死んでも可笑しくないと理解したはずだ。
俺の妹分を頼んだぞ・・・・・・サイト。

ルイズ達がアルビオン行きの便に船に乗るのを見届け、一旦酒場に戻った。
部屋でアルビオンにどうやって行くか考えるためだ。
タバサ達はシルフィに乗って飛んでいくはずだ。
だが一緒に行くのは選択できない。
ならどうする・・・・・・飛竜で飛んでいくか？

「それが妥当だな」

飛竜の代金は学院長が持ってくれる。
ならこれが一番良い方法のはず・・・・・・多少危険は伴うけどな。
本当ならプテラとかに空を飛ぶで連れて行ってもらうのが良いんだが、如何せん目立つだろう。

「今日はもう飛竜を扱ってる店が閉まってるか・・・・・明日だな」

俺は明日やることを頭の中で整理しながらベットに横になると、ゆっくりと睡魔に身を任せていった。

第119話　空の相棒（前書き）

卒論ヤベェ
モンハンヤベェ

第１１９話　空の相棒

翌日、俺は朝一で酒場を後にした。
もう既にタバサ達もアルビオンに向けて、出発したようだ。
少し急がないといけないか？
取りあえず飛竜を調達するために店を探すとしよう。

街を少し歩きまわると、目的の店を見つけた。
店の看板には，馬から王宮払下げの飛竜まで何でもござれ！，と書かれている。
店の大きさは馬や飛竜を扱うだけあって結構な大きさだけど、見た目は年季を感じると言うか微妙にボロいというか・・・・・なんにせよ店の中に入らないと始まらないな！

「すいません！」
「・・・・・・・・・んぁ？」

勢い良く店内に入ったが、俺を出迎えたのは物凄く眠そうな目でこっちを見る店番の女性だった。
なんか出鼻を挫かれた気がしたが、気にせず飛竜を注文することにした。

「飛竜が欲しいんですが・・・・・・」
「んぁ～・・・・・・・・うん」
「いや、だからですね？

飛竜が欲しいんですが」
「ん～・・・・・・んふふふ」

なんか会話にならないんですが！！
あ、立ちあがって奥に入ってった。
ドアの向こうへ消えた店員を見送っていたら、ドアが少し開いて店員が顔だけ出してきた。

「来ないの？」
「え？」
「飛竜・・・・・・ほしいんでしょ？」
「あ、はい！」
「んふふ、変なの」

変なのはアンタだ！！
その言葉を口に出しそうになったが、なんとか我慢して俺は彼女の後を追った。
店の奥は飛竜や馬の餌がズラッと並んでおり、彼女はそこで米俵の様なものを肩に担いで裏口らしきドアから外に出た。
置いていかれては微妙に困るので、俺も急いで外に出る。
外に出た俺の眼前には、小さな牧場が広がっていた。
馬、飛竜、ユニコーン、ラクダ・・・・・そこには様々な動物たちがいた。
店員はさっきまで担いでいた何かを地面に置くと、手際良く俵をバラす。
俵自体は草食動物の餌になるのか、餌場と思われる場所に積み上げられている。

そして中にあった何かの肉や果実は、大きな皿に載せて目の前に置いていく。
彼女は彼らの食事のついでに、俺が飛竜を選べる状況を作ったのか？

「あの子は怖がりだけど飛ぶのが速い。
あの子は飛ぶのはあんまり速くないけど勇気がある。
あの子は「ちょっと待ってくれ！」？」
「ちょっと早すぎるよ・・・・・・。
頭に入ってこない」
「そう？」

俺の方を見ながら首を傾げる姿は、かなり幼く見える。
まぁ身長は俺より少し低いくらいだから、小さくないんだけどな。
俺が食事を食べている飛竜たちを見ながら、どれを選ぶか悩んでいると、彼女が俺に質問してきた。

「何で飛竜が必要なの？」
「アルビオンに行きたいからかな？」
「ならあれに乗ればいい」

そういって彼女は、ルイズ達が乗った便のある方を指さす。
まぁ確かに急ぎじゃなければそうするんだけどね・・・・・・。

「急がなければならない理由があってね・・・・・・次の便まで待てないんだ」

「ふ～ん・・・・・・それじゃあの二頭のどっちかかな？」
「あの二頭？」
彼女が選んだ二頭は他の飛竜たちとは違って、この場所で浮いてる。
片や左目の辺りに切り傷があり、他の場所にも傷がある歴戦っぽい竜。
もう片方は隅の方で、身体を丸くして寝ている。

「傷いっぱいの子は軍で使われてたけど、傷が多すぎて偉い貴族の子供を怖がらせたためにここに売られた。
あの寝てる子は寝るのが好きで、一度式典最中に眠った所為で売られた。
でもスタミナはピカイチ」
「どっちも訳ありですね」
「他の子達だと少し荷が重いかもしれない。
でもあの子たちなら、アルビオンまで飛んでいくことが出来る」

実戦経験ありの飛竜か・・・・・・確かにそれなら大丈夫かもしれない。
あまり飛びなれていない飛竜が、アルビオンまで飛んでいくのは簡単じゃない。
もしかしたら途中で飛竜が疲れてしまうかもしれない。
高度が高くなれば高くなるほど、風は強くなり、体力も必要になる。

「そうですね・・・・・・僕としても空から飛竜と一緒に身投げするのは御免ですからね」

「じゃあ、どっち？」
「空をよく知っている竜か、スタミナでごり押しするかのどちらかか・・・・・・」

迷うな・・・・・・。
空中戦を想定するなら傷付き、寝てる方なら・・・・・・いやメリットがあるか？
もしかしたらワルドと鉢合わせる可能性があるから、どっちか選ぶなら傷付きのほうかな？
俺は傷だらけの飛竜を見ていると、店員は俺の考えが読めたらしい。
彼女は傷付きに近づいていき、一言二言話すと飛竜はゆっくりとこちらに首を向けた。
隻眼の竜は俺の顔をジッと見ている・・・・・・まるで俺を見定めるように。
見定める視線と見定める視線はぶつかり合い、互いに小さく口を歪めた。

「（面白い飛竜だ・・・・・人間味が強いな）」
「彼も貴方が気に入ったみたい」
「それは光栄って言えばいいのかな？」

何時の間にかすぐ傍に店員が来ていたようだ。
俺は飛竜から目を逸らし、店員に苦笑した。

「あの飛竜幾らになりますか？」
「値段？　あぁ、値段かぁ・・・・・・千二百エキューだね」

「（流石に高いな・・・・・・）請求書は学院のオールドオスマン宛てに送ってください」

一応払ってくれるって言う話だったしな！

・・・・・・一応今度半額払おうかな？

こうして俺は空中戦における相棒と出会った。

第１１９話　空の相棒（後書き）

取りあえず村クエ☆５まで全クリしました
卒論は……頑張ってますよ？

第１２０話　想定外の傷害

なんとか大っぴらに出来る航空手段を手に入れた俺。
取りあえず飛竜を連れて、街を出ることにした。
先ずは名前を付けようか・・・・・・。
これから長い付き合いになるだろうしな。

「なんて名前にしようか・・・・・・」
「グルルルル」

緑っぽい鱗、飛竜・・・・・・リオレイア？
よし、レイアにしよう！

「お前の名前はレイアだ！
これからよろしく頼む」
「ギュイ！」

気に言ってもらえた様でなによりだ。
あれ、所でレイアって性別どっちだ？
メスじゃなかったら、リオレイアの名前は・・・・・・ま、まぁ本人が気にしてないならＯＫだな！

「じゃあレイア、あの島まで飛べるか？」
「・・・・・・ギュイ！」

少し悩んだようだが、行けるようだ。
なら準備をしようか。

「流石にこのままレイアの背に乗ってアルビオンに行くのは、少し厳しいから鞍を付けさせてくれ」
「ギュイギュイ！」
「ＯＫ、じゃあ錬金！」

俺は近くにあった木を錬金で鞍にして、レイアの背に乗せたが、若干大きさが合わなかったので、もう一度錬金を掛けてピッタリのサイズにした。
レイアは若干拘束される感じが微妙に気になるようだが、そこは我慢してほしい。
硬い竜の鱗の上に直で座ると、股に途轍もないダメージを受けそうなんだ！
俺が鞍に跨ったのを見計らって、レイアは勢いよく翼を動かし始めた。

「よし、じゃあ行くとしますか！
目的地は天空の城ならぬ、浮遊大陸アルビオンだ！」
「ギュィィィィィィイ！」

そうして俺達は、気ままな空の旅とは程遠い空中散歩を始めることとなった。

アルビオンはハルケギニアの上空三千メートルに存在する浮遊大陸だ。
国土はトリステインと同じ程度で、浮遊大陸なだけはあって空軍が強いようだ。
ルイズ達はアルビオンの港ともいえるロサイスから、首都ロンディニウムに向かうはずだ。
なら俺もロサイスからアルビオンに入って、少し情報収集を行うとしよう。
恐らくルイズ達は目立ってたはずだから、分かることもあるだろう。
何故俺が今こんなことを考えているかと言うと・・・・・・。

「寒い・・・・・・めちゃくちゃ寒いぞ！！」
「ギュ・・・・・・イ」
「寝るな！　お前が寝たら俺も死ぬ！！」

そうか、飛行距離が問題じゃなくて寒さが問題だったのか！
と先ほど理解したわけだが、それで寒さをどうにかできるわけもなく、俺は薄着のまま真冬の様な気温の中強い風に吹かれながら空を飛んでいます。
飛竜は種によっては寒さに強いのかもしれないが、流石に高度三千

メートル以上で空中戦する竜騎士はアルビオン以外には殆どいないだろう。

「寒いと思うからきっと寒いんだ・・・・・・あぁ暑い、暑いなぁ！！
もう焼け死んでしまいそうだよ！？」
「・・・・・ギュイ？」
「何言ってんだコイツみたいな顔で見るな！
ちゃんと前見て飛びなさい！」
「ギュ～イ」
「やっぱりお前・・・・・見た目にそぐわず人間味溢れすぎだぞ？！」

まぁ接しやすいから良いんだけどな？
いや、それにしても寒い・・・・・えらい寒い。
もう正直リザードンでも呼ぼうかと迷うくらい寒いぞ？
早くアルビオンに着かないと俺が、そしてレイアが死ぬ。
プリーズ陸地！

「それにしても、見えてるのに中々着かないな・・・・・」
「グルルルル」
「いや、お前の所為だって言ってるわけじゃなくてな？
アルビオンがデカイのは知ってたけど、やっぱり遠くからも大きく見えるから距離感が分かりにくいんだよ。
まぁそれでも大分近づいて来てるのは分かるんだけどな」

流石に結構な時間飛んでるからな・・・・・・多分、後十分位飛んでれば着くだろう。
でもやっぱり普通は飛行船で行くところを飛竜で行くのは無謀だったな。

「レイアも御免な？
こんな強行軍に連れてこさせて・・・・・・今度お見合いさせてやるからな？」
「ギュイ？！」
「うぉ？！　いきなり首をこっちに向けるんじゃない！
身体が微妙に捻じれて落ちるところだったぞ？！」
「ギュイ！」
「見合いの件ならこの仕事が終わってからな？
っていきなりスピード上げるなぁぁぁぁぁ！！！」
「ギュィィィィィィィィィィイ！！」

ギャロップの時もそうだったけど風が痛い！
ギャロップの時は葉っぱや、砂とかが顔に当たって痛かったんだけど、今回は寒い風が肌を突き刺す様に俺を襲うんだ・・・・・・ロサイスに着く前に俺は死ぬかも知れん。
あぁ光が見えるよ・・・・・・天国かな？

「いや、あれは・・・・・・ロサイスだ！！
やっとだ、やっと着くんだな！」
「ギュイ！！」
「急げ！　急ぐんだレイア！！」
「ギュィィィイ！！」

寒い！　痛い！　眠い！
でも・・・・・後少しで暖かいスープが・・・・・・・・・暖かい料理が・・・・・待ってるんだ！！
スピードを上げるレイア、寒さに負けそうだが目の前の光に導かれるようにドンドンとロサイスの港へと近づいていく。
そしてついに・・・・・・・・・。

「着いた・・・・・・着いたぞ！」
「ギュイ！！」
「ようこそ浮遊大陸アルビオ・・・・・・って君大丈夫か？！」
「寒いです・・・・・」
「それは当り前じゃないか！！
何でこんな薄着で、しかも飛竜で飛んできたんだ！
飛行船に乗れば良かっただろうに・・・・・」
「ははは、ちょっと無茶したくなりまして・・・・・」
「取りあえずあそこで身体を温めた方が良い！
飛竜はそこに預けてられるからね？」

俺は彼の言う通りに、港の建物に入って行った。
取りあえず言えることは、外に比べて建物の中はまるで天国の様だった。

第１２１話　空中都市

無事？アルビオンに着いた俺は、取りあえず一旦温まってから情報を集めることにした。
因みにレイアは普通に預けました。
暖かい飛竜用の宿舎で、肉を食っているだろう・・・・・・。

「さてと、取りあえず情報収集するとしますか」

取りあえずこの港で話を聞いておくか。
お？さっきの人じゃないか！

「すいません！」
「ん？あぁ君はさっきの・・・・・・もう暖まったようだね」
「先ほどはありがとうございました！
ところで少し聞きたいことがあるのですが・・・・・・」
「私に答えられることなら良いですけど・・・・・・」
「貴方はここで桃色の髪をした少女と男性二人を見ませんでしたか？」
「う～ん・・・・・・見てないなぁ」
「そうですか・・・・・・ありがとうございます」

・・・・・・あぁそうだった、ウェールズが空賊に扮してルイズ達を人質にするんだっけ？
ってことはもう既にルイズ達は城に居るのか。

なら先にタバサ達を探すか。

「では青い髪の少女と赤い髪の美女、金髪の青年を見ませんでしたか？」
「あぁ、それだったらちょっと前に見たなぁ」
「そうですか！
それで彼らが何処に行ったか分かりますか？」
「確か宿を探すとか言ってたと思うけど・・・・・・」
「ありがとうございます！」

俺は彼にチップを渡すと、宿を探すことにした。
港の周りを少し散策すると、宿自体は意外と早く見つかった。
しかしここにタバサ達はいるんだろうか？
流石に受け付けに聞いても、守秘義務とかで答えてくれないだろう。
ならここでちょっと張るか。
一応ヘイ用の仮面を持ってきたから、これを付けてればタバサは俺の存在に気付くだろう。
俺は一先ずこの宿に部屋を取ることにした。

「い、いらっしゃいませお客様」
「部屋を頼む」
「滞在期間はどれ位になりますでしょうか？」
「一泊二日で頼む」
「分かりました。
それではお部屋の方へ案内させていただきます」

カウンターで手続きを終えた俺を、ボーイが部屋へと案内する。
それにしても意外と良い宿だな。
アルビオンは木材が豊富と言うだけあって、所々に木の彫像等が置いてあったりする。

「お客様のお部屋はここになります。
ごゆっくりとしていってください」
「ありがとう」
「後お客様に一つお教えしておくことがあります。
最近はあまり治安がよろしくないので、夜の外出は控えた方がよろしいと思います」
「不必要に厄介事を引き寄せる気はないからな・・・・・・そうさせてもらおう」
「それでは私はこの辺りで失礼します」
「ありがとう、これは少ないがチップだ」
「ありがとうございます！」

ボーイが帰った後、俺は取りあえず仮面をつけたまま、宿で昼食をとることにした。
宿の食堂は学院よりは小さいが、結構立派なところだった。
既に何人かの宿泊客が席について、食事をしているようだ。
ん？何やらあそこに人だかりが出来ているな。
行ってみるか。

「どうしたんですか？」
「うぉ！？なんで仮面なんか付けてんだ？」
「少し顔に傷がありまして・・・・・・」

「そうか、大変だな」
「ところでこの人だかりは何なんですか？」
「あぁ、あそこの女の子が凄まじい勢いでハシバミ草を食べててなぁ。
あんな苦いものをよくあんなにたくさん食べれるもんだと皆で見てたんだ」

ハシバミ草をたくさん食べる女の子・・・・・・まさか？！
俺は人垣をかき分けて、中心へと向かった。
するとそこには頬をハムスターの様に膨らませながら、ハシバミ草を頬張る青髪の少女がいた。

「・・・・・何やってるんだタバサ」
「もきゅもきゅ・・・・・・んっ、食べる？」
「後でな。
他の連中は？」
「お出かけ」
「そうか・・・・・・俺もこの宿に居るから、何かあったらこの部屋に来てくれ。
後明日で良いんだがギーシュに使い魔を使って、ルイズを探すように伝えておいてくれ」
「どうして？」
「ワルド子爵とかいったか？
どうも怪しくてな」
「でも彼はグリフォン隊隊長・・・・・・」
「だからと言って絶対安全とは言えないだろう？」

まぁ彼がレコンキスタだと知っているから言っているんだけどな。
流石にそこまで知っていることを話すと何で知っているのか聞かれてしまうだろう。
それには答えられないしな。

「・・・・・・分かった、伝えておく」
「頼んだ。
じゃあ俺も昼飯食うとするかな」

そう言って俺はこの場所から立ち去ろうとしたが、何かに袖を掴まれたようだ。
・・・・・・いやまぁ、誰の仕業か分かってるんだけどな？

「離してくれないか？」
「ここ」
「いやな？
ここで一緒に食べたらキュルケ達と会うかもしれないだろ？」
「二人は当分戻ってこない。
買い物行った後に外で昼を済ますって言ってたから」
「いや、だからと言って・・・・・・・・・分かった分かった。
分かったから睨むな」

なんか罪悪感沸くじゃないか・・・・・・。
っていうか周囲の視線が断るなんてありえないって言ってるんだよ。
特に俺が最初に話しかけた人の顔が特に・・・・・・。
でもまぁ腹減ってたのは事実だし、早く食べれば大丈夫だろ。

そして俺はタバサの正面に腰を掛けた。

「食べたら俺は部屋に戻るからな？」

「分かった」

そう言ってタバサは、自分と俺の中間あたりにハシバミ草のサラダを置き、小皿に自分の分のサラダをとりわけ始めた。

取りあえず俺も食うとしますか！

第１２２話　念には念を（前書き）

卒論進まない……

第１２２話　念には念を

なんとかタバサとの食事を終え、部屋に戻ることが出来た俺。
いやぁハシバミ草も肉と一緒に食べれば、凄く良いアクセントだった。
ピーマンの肉詰めを思い出したよ。

「さてと、じゃあどうしようかねぇ」

俺は明日起こるであろうワルドの行動をどうするか考えていた。
流石にルイズとの結婚云々はないから、手紙とウェールズをどうにかするだけか？
いや・・・・・でも原作だとどうだった？
あの時サイトが来なかったらヤバかったんじゃないか？
俺の頭を渦巻いているのは、原作通りにいくかどうか分からないこの状況で俺がどう動けば被害が少なくて済むかと言うことだ。
表立って動けば目をつけられる。
かと言って動かないとルイズとサイトがどうなるか分からない。
どうする・・・・・危機感を感じないままに後ろから襲われれば、サイトはルイズを助けに行くのに間に合わない。
不確定要素ばっかりだな。今日の内に首都に移動するか？
・・・・・そうだな、そうした方が良さそうだ。

「折角部屋借りたんだがな・・・・・」

まぁしょうがないだろう。
タバサと何時会えるか分からなかったからな。
さてと、じゃあレイアを迎えに行くとしますか！
俺はタバサに一言言ってから宿を後にした。

レイアは宿舎で普通に寛いでいた。
俺が入った瞬間顔を上げてこっちを見て、近づいてきた

「首都に用事が出来たんだ・・・・・・・飛べるか？」
「ギュイ」
「そうか、じゃあ行こうか」

俺は宿舎の管理人に料金を支払って、レイアを連れて宿舎を後にした。
またあの寒い中飛ぶのか・・・・・・・一応防寒具は買っておいたけど、こんな装備で大丈夫か？
大丈夫だ問題な・・・・・・ゲフンゲフン、きっと大丈夫だ！

「早めに首都に行って、城の近くの宿を探さなきゃいけない。

明日何が起こるか分からないからな」
「ギュイ？」
「あぁこっちの話だ」

再び俺は鞍に乗り、レイアが羽ばたき始める。
あぁ、やっぱり顔は寒い。
仮面付けようかな・・・・・いやあれはガリアに行く時だけにしないとな。
ヘイ＝レッドがバレル可能性は極力減らさなければならない。
ガリアに目を付けられるのだけは避けたい。
考え事をしていると、気付けば首都が見えてきた。

「お、意外と早く着いたな」
「ギュイギュイ」
「首都にそのまま降りるのは駄目だから、あの森に降りてくれ。
それと明日迎えに来るから、この辺りで一泊してくれると助かる」
「・・・・・・・・・グルルルル」
「嫌なのは分かるが、我慢してくれ！
今度霜降り肉持ってきてやるから！」
「・・・・・・ギュイ？」
「本当だ！」
「・・・・・・・・・ギュイ」

なんとか機嫌を直してくれたか。
一応暖を取れるように、木を何本か錬金して掘立小屋を作ったからこれで我慢してくれ。

そうしてやっと俺は首都に入ることが出来た。

「それにしてもやっぱり首都は慌ただしいな」

レコンキスタが攻めてくるからな・・・・・・国民も不安が大きいだろう。
ポケモンをフルで使えば、レコンキスタからこの国を守ることも出来るのかもしれない・・・・・・でも俺は見知らぬ他人のために命を掛けるほど人間出来ていない。
俺はアルビオンがどうなるか知っていながら、ルイズ達にしか目を向けることはない。
ウェールズ王子が死ぬであろうこと、そしてその亡骸がレコンキスタに操られることも知っていながら、俺は・・・・・・いやこの事について考えるのは止そう。
取りあえず宿を探さないとな。

王宮の近くには結構な数の宿があった。
だが何処も宿泊客は殆どいなかった。
取りあえず門が見える宿の一室を取り、俺は明日の朝から門を見張って、ワルドが動き始めたら後をつけようと思っている。
ルイズを呼び出すなり、ウェールズを呼び出すなりして門から出てくるだろうからな……。
ルイズの危機にサイトが間に合わない様だったら、俺がワルドを・・・・・・まぁどちらにせよ俺はワルドをここから逃がすつもりはない。
危険は極力排除したいからな。

「よし、ここが良さそうだな」

俺は良い場所に立っている宿屋に入り、カウンターへと向かった。
やはり客は少ないようで、閑散としている。

「あ、ご宿泊ですか？」
「あぁ」
「それではここに御記名ください」

俺はサトシと記入しておいた。
この世界に置いて、アニメ版ポケモンの主人公の名前を知ってる人はいないだろう。
因みに俺はアニメ版ポケモンは小さい頃しか見てなかった。
サトシの最初のポケモン、ピカチュウがかみなりを使った時は強すぎるだろと子供ながらに思ったもんだ。
だってゲーム版なら最初Ｌｖ５スタートだぞ？
他にもアニメ版は色々とおかしい部分があったりするんだよな・・・・・・イワークにスプリンクラーの水を掛けて、感電させるとかね。
それがありだったら、ジムの壁壊してそれ相手にぶつければ大ダメージじゃね？とか思った俺は悪くないはず。
・・・・・・思考が逸れたな。

「はい、ご確認いたしました
それではサトシ様のお部屋にご案内させていただきます」

ふぅ、今度こそゆっくりできるかな？
明日はかなり忙しそうだしな・・・・・今の内にしっかり休んでおこう。

第１２３話　負けられない戦い

翌日の早朝・・・・・・というかまだ日が昇りきってない内に俺は目を覚ました。
念のため早めに起きて様子を見ることに決めていたためだ。
正直眠いが、ルイズに何かがあったら困るからな。
取りあえず窓に張り付いて、城の様子を見ている。
何かあれば直ぐにでも飛びだせるように、杖も準備しながら・・・・・・。

しばらく何も起こらない城の様子を見続けたが、何かが起こる前兆すらない。
ワルドは何もしないのか？
それとも城の中で既に何かが起こったのか？
そんなことを考え始めた瞬間、門から人影が現れた。
帽子を被った髭で長髪・・・・・ワルドだ。
あの肩に担いだ小さな影は！！

「ヤバい！
サイトは何をやってたんだ？！」

俺は急いで宿を飛び出し、ワルドの後を追った。
ワルドに連れて行かれたルイズを助け出すために・・・・・・。
俺はこんな役割じゃないはずなんだけどな。

しばらくワルドの後をつけて行くと、廃墟のような場所に入っていった。
・・・・・・まさか尾行がバレたのか？
なんにせよここから先は慎重にいった方が良さそうだ。
俺は取りあえずツボツボに加え、ハガネール、イワークを装備した。
これで不意打ちに対処できるはずだ。
ワルドの歩く音が廃墟に木霊する。
俺はレビテーションで少し浮きながら進んでいる。

「これ・・・・・・無の力・・・・・・・・・・ンキス・・・・・・・・・・だ！」

やっぱり虚無の力欲しさにルイズを・・・・・・サイトはルイズが助けを求めていないと、ここには来れないだろう。
それに今ルイズは目を瞑っている。
と言うことはこの状況をどうにかできるのは俺しかいないか・・・・・・。

「そろそろ出てきたらどうかね？」

「？！」

やはりバレていたか・・・・・・グリフォン隊の隊長は伊達じゃないな。
取りあえず遊びで作った赤い彗星っぽい仮面をつけて、隠れていた柱から身体を出した。

「何時から気付いていた？」
「門を出てから少し経ったところだよ・・・・・・少し殺気を感じてね」
「敏感ですねぇ。
ところでそこに居る少女を解放していただけませんか？」
「解放？　彼女はこれから我らの導き手の一人となるのだ！
エルフの地に進行するためのな！」
「彼女がそれに従うと思っているのか？」
「別に彼女の意思は関係ない。
いざとなれば魔法で操ってしまえば良いのだからな」

頭がスッと氷でも入ったかのように冷めた。
あぁ、ならこっちもそれなりの対応をさせてもらおう・・・・・・。
俺はさっきの三匹に加えて、Ｌｖ７０のナットレイを装備した。
流石に身体に変化が出てしまった。
まぁ胴体部分だからワルドにはバレていないだろうけど、今俺の服の下は鋼に包まれた様になっているはずだ。

「彼女を道具の様に扱う気なんだな？」

「道具なんてものではない！
聖女になるのだ！
我らの聖女に！」
「あぁ・・・・・・もういい。
お前は不愉快極まるな・・・・・・取りあえず苦しんで死ね。
プリズンロック」

先ず俺がしたのは床に寝ているルイズを岩の壁で囲み、危害が加わらないようにすることだった。
これからやることは直接的な攻撃力があるものではないが、苦しみを与えて殺すための手段だ。

「君は何処に向けて撃っているんだ？」
「彼女に被害を出すわけにはいかなくてね……俺の攻撃はこれからだよ。
どくどく」
「？！」

俺がワルドに杖を向けてどくどくを放つと、もちろんワルドは避けようとした。
しかし飛沫までは避けきれずに何滴かの毒の滴が、ワルドに付着した。
紫色に染まる服と皮膚・・・・・・そう言えばこれは人に使うの初めてだったな。

「この程度の攻撃避けられないとで・・・・・・ガッ！？」

「うん・・・・・・痛みは結構大きいみたいだな」
「き・・・・・・貴様一体・・・・・・何をした！」

ワルドはどくどくの当たった部分を押さえながら、俺を凄まじい表情で睨みつける。
なんだろう・・・・・・普段なら俺もキレているはずなんだけど、何か頭が冴えるだけで冷静だ。

「毒だよ・・・・・・猛毒」
「なん・・・・・・だと？」
「だから毒だよ・・・・・・一応駄目押ししておくか。やどりぎのたね」
「当たるか！！」

横っ跳びで転がる彼だが、俺は別に一発しか打てないわけではない。
連続してタネを飛ばし続ける。
まるでマシンガンの様に・・・・・・。
最初は余裕を持って避けれていたが、毒を貰った状態でそれほど動けるわけでもなく、ついにはヒットした。

「グアッ！」
「痛いか？」

ワルドの上半身に何発かの種が辺り、皮膚の下へと潜り込んでいく
……そして本来ならあり得ない速度で芽吹く。

体内に根を張り、体外に出ている部分を千切っているようだが、根がある限り葉は復活する。

「貴様ぁぁぁぁぁ！！！」
「人一人の自由意思を強引に奪い、好き勝手に使おうと考える奴は死んだ方がいい」
「ライトニング・クラウド！」

俺に向けてワルド渾身の雷が飛んでくる。
流石に避けられないな・・・・・・だけどな？

「なんで・・・・・・貴様何で無傷なんだ？！」
「雷とは相性がいいんだよ」

イワークやハガネールに電気は効かない。
装備した場合は全く効かないわけじゃないが、静電気程度のダメージしか通らないんだよ。
まぁそこまで教える気はないけどな。

「クッ、これが駄目なら遍在！」
「流石スクウェアだな・・・・・・四体か」

本体含めて五人。
本体は遍在に比べて動きが鈍いな・・・・・・。

だが、これが罠の可能性もある。
故に俺は負けないために準備を整える。
剣を抜き、何時でも対処できるよう構える。

「てっぺき、てっぺき、てっぺき」
「この状態でおまじないか？
今だったら見逃してやっても良いぞ？」

ワルドの顔色はあまり良くない。
ポケモンでヤドリギどくどくコンボは、割と有名だが人間にどのくらい効くのかは知らない。
故に慢心なく、万全のスクウェアメイジを相手していると考えて戦う。
負けられない戦いなのだから・・・・・・。

「俺はお前を逃がさない。
お前は・・・・・・ここでゲームオーバーだ」
「戯言を！！」

こうして弱ったスクウェアメイジ一人＋遍在四体ｖｓトライアングルメイジの戦いが幕を開けた。

第１２４話　オーバーキル（前書き）

気付けばソロで上位まで行っていた……なんだろう少し切ない
卒論は取りあえず金曜までにＷｏｒｄ１５ページ埋めなきゃいけない……まだ半分未満しか書けてないんだけどな！！

第１２４話　オーバーキル

ワルド自身は痛みで動きが鈍いため、後ろで指示に徹するらしい。
四体の偏在が俺に突撃を掛けてくる。

「「「「死ね」」」」

流石閃光っていう二つ名だけあって、早いな。
一対一なら負けないだろうが、四体一で魔法なしなら厳しいだろう。
・・・・・・ポケモンがなければの話だけどな。
遍在達の剣がほぼ同時に四本とも俺の胴体に突き刺さる。

「あんな大口をたたいて・・・・・・その程度か。
ゲームオーバーは貴様の方だったな。
クッ・・・・・・早く治療をしなくて「ヤドリギは取れないぞ？」
？！」

俺は隙だらけの遍在一体の顔に剣を突き刺し、勢いそのままにもう
一体の首を取ろうとするが、流石に避けられてしまった。
まぁそんなに甘くないか。

「貴様・・・・・・何故生きている！」
「・・・・・・正直に話すとでも？」
「クソッ、一度で駄目なら何度でも貫いてやる！」

再び偏在を特攻させてきたが、早々俺も喰らってやるわけにはいかない。
俺は突きをはなってきた一体の手首を掴んで、そのまま引っ張り体勢を崩す。
そしてわき腹に剣を突き刺し、捻った。
剣と言うものは刺しただけだと急所でない限りは、直ぐには死なない。
しかし捻ることで傷口は広がり、失血量も増える。
まぁそこまでしなくても遍在は消えるんだけどな・・・・・・癖でね。
その間にもあと二体の遍在は攻撃を仕掛けてきている。
首を狙う一体と、胴に向けて突きを放とうとする一体。

「確かに早いが、まだ知覚出来る範囲内だな」
「「戯言を！」」

首を狩ろうとする剣をマインゴーシュで逸らし、突きは剣の腹に掌底を放って逸らす。
剣の腕は父さん程じゃないな・・・・・・父さんなら剣の軌道を変える位はやってくるからな。
だがワルドは見たことのない技術に目を見開いている。

「何を……した？」
「剣の軌道を逸らしただけだ。
ところで攻めてこなくていいのか？

時間が経てば経つほどお前は死に近づいていく」
「クッ、私は・・・・・・私はこんなところでは死ねないのだ！！」
流石にこのまま戦っても勝ち目がないと悟ったのか、ワルドは背を向けて逃走を始めた。
遍在は本体を逃がすため、俺に襲いかかってくる。

「「時間を稼がせてもらう！」」
「ここで逃げられるのは困るな・・・・・・」

俺は突っ込んでくる一体の顔目掛けて剣を投げつけ、動きを止める。
そしてガラ空きになった胴体に拳を打ち込む。
拳は肋骨を叩き折り、そのまま折れた肋骨を押し込むと遍在は消えた。
後一体……急いで倒してワルドを仕留めないといけないというのに。
最後の一体は、かなり慎重になってしまっているためやり辛い。
あくまで接近戦だけだがな。

「パワーウィップ」
「草だと？！」

地面から建物の床を突き破ってきた草の鞭が遍在を狙い、振り下ろされる。
決して太くはない鞭が凄まじい速度で振られると、パンッという音と共に遍在の首が落ちた。

そしてそのまま遍在は消えて行った。
後はワルド本体だな・・・・・・。

～ワルド　ｓｉｄｅ～

何なんだアイツは?!
カッコいい仮面をつけた只の目立ちたがり屋かと思えば、あの戦闘能力の高さ・・・・・・グッ！腕が酷く痛む。
胸の辺りも針で刺されるように痛い！
奴は毒とヤドリギと言っていたな・・・・・・ヤドリギは寄生植物だが、人間に芽吹くことなどありえるのか?！
水の秘薬で治すことが出来るだろうか・・・・・・？
取りあえずウェールズの暗殺、手紙の確保は完了した。
あわよくば虚無の担い手を確保できれば最良だったのだが・・・・・・今回は諦めるとしよう。
?！遍在がまた一体減った・・・・・・急がなければ奴が来る！
なっ?！最後の一体もだと?！

「幾らなんでも早すぎる・・・・・・奴は何をしたんだ!!」

マズイ・・・・・このままでは奴に追いつかれてしまう。
少し目立つがグリフォンで逃げるしかないか・・・・・・。

「来い！」

廃墟の窓からそう言うと、遠くからグリフォンが飛んでくる。
そのまま窓の外にグリフォンを停滞させると、ゆっくりと背中に乗った。
ゆっくり乗っても腕と胸に凄い痛みが襲いかかる。

「ググッ・・・・・・アルビオンから・・・・・・出るぞ」

グリフォンは軽く頭を縦に振り、廃墟から離れ始めた。
ふぅ、これで任務は完了、これから忙しくなるな・・・・・・。
そうフッと気を抜いた次の瞬間、凄まじい衝撃と共に足の付け根に激痛が走った。

「何だ?！」

私は衝撃を受けた方向に目を向けると、連続して飛来している鋭い石が見えた。
それが私の見た最後の光景となった。

～side　end～

廃墟の窓からワルドが飛んで行こうとするのが見えた俺は、急いで撃ち落とすことを決めた。
ワルドの進行方向には建物もなく、二次被害が起こることもないだろう。

「ストーンエッジ」

俺は廃墟の壁を使って、ワルドに向けて石の刃を放った。
最初の一発でワルドの足とグリフォンの胴体を貫いた。
そこで狙撃に気付いたワルドだったが、既に次弾は放っている。
計十発の石の刃が次々とグリフォンとワルドを貫いていく。
オーバーキルかもしれないが、アンドバリの指輪で生き返らせる訳にもいかない。
故に俺は念入りに穿っていく。
五発目が当たった時点で、既にワルドは地に落ちていて四肢は殆ど繋がっていない状態だ。
しかし俺はそこで手を止めない。
残りの五発をワルドの身体に当て、身体を磨り潰していく。
撃つのを止めた時には、既にワルドの身体は地面の染みになっていた。

「・・・・・・やり過ぎたかも知れない」

取りあえずワルドのことを放置して、ルイズを回収に向かうことにした。

・・・・・・後でサイトには説教だな。

第１２４話　オーバーキル（後書き）

修正

第１２５話　国王の決意（前書き）

何となくこの間ツタヤで「べるぜばぶ」と「野生の王国」を購入しました。
野生の王国は一巻が一番好き
べるぜばぶは、読んでて何となくエンジェル伝説を思い出しました。
勘違い物が好きな人はエンジェル伝説お勧めｗ

第１２５話　国王の決意

ルイズを回収したのは良いんだけど・・・・・・意識の無いまま城に連れて行くわけにもいかないしなぁ。
そんなことしたら明らかに俺疑われるしな。
取りあえず起こすか。

「ルイズ嬢」
「・・・・・・・・」
「ルイズ嬢！」
「・・・・・・・う・・・・・・・ん」

俺が肩を揺すりながら声を何回か掛けると、少し身じろぎをしてゆっくり目を開け始めた。
焦点の合わない目で俺の方を見ると、徐々に意識がしっかりしてきたのかドンドン目を見開いてくる。

「なんで兄様がここに？
・・・・・・って此処何処？！」
「無事そうでなによりだね。
ここは首都のはずれにある廃墟で、僕がここに居る理由はルイズ嬢達の影からのサポートを依頼されたからかな？」
「サポート・・・・・・ってそれどころじゃないの！
私の部屋にワルド様が来て、ウェールズ王子が暗殺されたって！
・・・・・・あれ？　それからどうしたんだっけ？」
「そうか、そこから記憶がないのか」

スリープクラウドでも使ったのか？
いや、薬の類か？
どちらにしろ手際が良かったんだな。
それにしても・・・・・・ウェールズは既に殺した後だったのか・・・・・・。
なら今ルイズが城を離れているのは駄目なんじゃないか？！

「ルイズ嬢！
急いで城に戻れ！
そして自分がワルドに連れ去られかけた事を話せ！」
「ワルド様が私を？！
何で私を・・・・・・」
「それに関しては後でだ！
今は一刻も早く城に行かなければならない！
このままではルイズ嬢が王子殺しを疑われてしまうぞ！」
「王子殺しって・・・・・・やっぱりウェールズ王子暗殺の話は本当だったの？！
誰がそんなことを！」
「ワルドだよ！」
「そんな！　だって彼はグリフォン隊の隊長で・・・・・・」
「それと同時にレコンキスタの一員だったんだ！」
「なら捕らえないと！」
「いや・・・・・・もういない」
「逃げられたの？！」
「・・・・・・少し離れた場所に転がっている」
「・・・・・・殺してしまったの？」
「あぁ」

「・・・・・・そうなんだ」

ルイズは顔を青くしながら、俯いてしまった。
人の死に触れたのは初めてだったのか？
だがここはもうすぐ戦場になる。
早く報告を済ませて、この国を後にしないと俺達が躯になってもおかしくない。

「取りあえず城の人に真実を伝えて、早くこの国を発つんだ。
ここはもうすぐ戦場になる」
「・・・・・・そうね」

まだルイズ嬢は俯いているが、ここでジッとしている訳にもいかないと分かったようで、城に向かって歩み始めた。
廃墟から出た俺は時間を短縮するために、ルイズ嬢を背負って全速力で走った。
その結果城には直ぐに着いた。
流石に俺は城に入れないと思っていたんだが、何故か入っても良いらしい。
しばらくルイズと共に城の中を歩いていくと、大きな扉の前に着いた。

「ここは？」
「王座の間です。
兄様の話を王様が直接聞きたいって言っているみたいで・・・・・・」

「そっか」

王様と話すことになるとは・・・・・・。
取りあえず気合を入れないとな！

「ドリュウズ様、ヴァリエール様が参られました！」
「うむ、入ってもらえ」

王様と思わしき声がそう言うと、ドアがゆっくり開いていく。
俺とルイズは報告をするために、王様への謁見を始めた。

「今朝方、我が息子ウェールズが暗殺された・・・・・・お主達はその下手人を知っているということだが？」
「はっ！
犯人はジャン・ジャック・ド・ワルドでした。
彼はレコンキスタの一員で、ウェールズ王子を殺害した後、ルイズ嬢に罪を着せるためか彼女を誘拐し、水の秘薬か何かで彼女を操ろうとしていたようです」
「そんな・・・・・・」
「レッドと言ったな・・・・・・お主は何故ワルドの動きを察知できたのじゃ？」
「私は学院からの依頼により、ルイズ嬢達を影からサポートする任務をしていました。
故に城の門が見える宿を取っていたのですが、朝方門を見張っているとルイズ嬢を抱えて出てきたワルドを発見し、追跡した後戦闘を行った際に、本人が語って居たためです」

「・・・・・・ワルドは今何処に？」
「北の廃墟の近くに躯・・・・・・と言えるかどうか分からないものがあります」

王様は騎士を呼び付け、耳打ちするとその騎士は走って城から出て行った。
騎士が帰ってくるまでしばらく掛かるだろう。
無言の時間が続く・・・・・・しかしふと王様が口を開いた。

「ウェールズも無念じゃったろう・・・・・・」
「御悔やみ申し上げます」
「民を一人でも多く守るために命を掛けると息巻いておったからの・・・・・・死んでも死にきれなかったじゃろうな。
ドリュウズ殿、息子の敵を取ってもらってありがとう・・・・・・
そしてすまない。
こんな状況でなければ礼の一つでもしようかと思うのじゃが、如何せん今は何もない。
寧ろこの国から早く出た方が良いじゃろう」
「私は自分の妹分を助けたに過ぎません。
故に礼は必要ありません。
・・・・・・やはり戦争は避けられませんか」
「奴らはこちらが何もしなくても攻めてくる・・・・・・もう逃れられん」
「そうですか・・・・・・」
「そうじゃった・・・・・・これをアンリエッタ姫に渡してくれんか？」
「これは？！」

王様から渡されたのは風のルビー。
アルビオン王家に伝わる秘宝。

「ここに有っても奴らに盗られてしまう・・・・・・ならば息子の・・・・・・ウェールズの想い人に持っていてもらった方が良いじゃろう」
「・・・・・・分かりました。
責任もってアンリエッタ姫に渡させていただきます」

そう言うと再び無言の時間が続く。
しばらく経つと息を切らせた騎士が戻ってきて、王様に耳打ちをした。
王様は目を瞑って、一回ため息をつくと、確り目を開けて俺とルイズを見た。

「確認させてもらった。
確かに酷い状態だったようじゃが、ワルドと確認した。
お主達も報告御苦労じゃった・・・・・・早くこの国を脱出するが良い。
間もなくこの国は戦争になる。
お主達は自分の国に帰るのじゃ！」
「でも！「良いんだルイズ嬢」兄様・・・・・・」
「では失礼します」

俺はルイズを連れて外へ歩を進める。

しかし部屋を出る少し手前で止まって、振り返った。

「御武運を・・・・・・」

「ありがとう」

俺とルイズはそのまま部屋を出た。

時間がないな・・・・・・サイトを連れて早くこの国を出ないと！

第125話　国王の決意（後書き）

修正

第１２６話　アルビオン脱出

ルイズを連れてサイトの部屋まで向かっている途中、俺はルイズに道中何があったのか聞くことにした。
聞いている限り、ワルドがルイズを口説こうとしない以外は殆ど原作と変わらないようだ。
ただサイトとワルドの決闘の経緯については、結構変わっていた。

「私が広場に着いた時にはもう向き合っていたの。
そしてワルドが話し始めたのよ・・・・・広場に関する逸話と、これから向かう場所が危険に満ち溢れてるということを」
「結局は奴の傍に居るのが一番危険だったんだけどね？」
「今思うと怖いことしてたのね・・・・・って話が逸れちゃうじゃない！
兄様は静かに聞いてて！」
「はい・・・・・」
「そこまではサイトも特に変化なく聞いていたの。
でもワルドは次に魔法も使えない平民が有事の時にメイジを守る事なんてできない！って言ったの。
その台詞が気に食わなかったみたいで、アンタだって杖を奪われたら平民と変わらないじゃないか！って・・・・・そうしたら一瞬ワルドの顔が無表情になって、また普通の顔に戻ったんだけど明らかに空気が変わった」

まぁそりゃそうだよな。
学院帰ったらサイトに貴族についてミッチリ教え込まないと駄目だな・・・・・。

「そこからは一方的だったわ。
サイトの剣は確かに早かったんだけど、一撃も当たることはなかった・・・・・・」
「サイト君は特に剣術を学んだことがないみたいだからね」
「そうなの？」
「サイト君の剣は確かに早いけど、剣を振る先に視線が行くから避けようと思えば出来なくもないんだ」
「そうだったんだ・・・・・・あ、でその後はワルドの突きを剣で受けて吹き飛ばされて御終い」
「あれ？　ギーシュ達はその時何してたんだい？」
「ギーシュは私の横で決闘を見てたけど、キュルケは部屋で寝てたみたいだし、タバサは多分朝御飯食べていたんじゃないかしら？」
「ギーシュは何か言っていなかったかい？」
「ギーシュが？
・・・・・・そう言えば彼も訓練に誘うべきだろうか？とか言ってた気がするかも。
でも訓練ってなんのかしら？」

ギーシュ・・・・・・俺はいきなりサイトを連れてこられて訓練に入れてくださいって言われても、多分断るぞ？
俺は自分が訓練をつけるのに納得できる理由がないなら訓練を付ける気はない。
只ワルドに負けたから強くなりたいとか言う理由なら、絶対に認めることはできない。
まぁワルドにルイズが誘拐されたことを聞いて、ルイズを守れるだけの力が欲しいとかだったら・・・・・・まぁ考えるけどね？
でも俺としてはもしかしたら何かの拍子で、サイトに前世のことが

バレる可能性がないわけではないから出来ればサイトを訓練に加えるのは好ましくない。

「その後で気絶してたサイトが目を覚ましたんだけど、目に見えて落ち込んでたの。
私もワルドはグリフォン隊の隊長何だから負けてもしょうがないって言ったんだけど、不貞腐れちゃって・・・・・今も機嫌が悪いみたい」

まぁ今まで学院の決闘で勝ち、フーケ戦で活躍してたからなぁ。
少し天狗になっていたところを、綺麗にへし折られたんだろうな・・・・・。
決闘の後も基本的には原作通り、空賊に扮したウェールズに人質にされたり、ウェールズの戦争に行く理由に憤ったりしたらしい。
話が終わるとほぼ同時にサイトが寝ている部屋の前に着いた。

「入るわよ！」
「へ？」

ルイズは特にノックをすることもなく、扉を開けるとその状態で固まった。
取りあえず俺はルイズを持ち上げて、ドアを閉めた。
普通逆だろ・・・・・・サイトも着替えの時ぐらい鍵掛けろよ。
少しの間廊下で待っていると、部屋のドアが内側から開いた。

「入ってくれ」
「・・・・・・」
「じゃあお邪魔しようかな？」

流石王宮だな・・・・・・部屋が広い。
まぁそんなことより、この沈黙をなんとかしないとな。

「取りあえず要件から言わせてもらうと「ちょっと待ってくれ」何だい？」
「今さらかもしれないけど、何でレッドがここに？」
「あぁ、その事か。
僕は学院長に頼まれて、君たちを影からサポートしてたんだ。
一応フーケが宿に襲撃掛けてきたときに、傭兵の数減らしたりしてたんだよ？」
「そうだったのか・・・・・・」
「で肝心な要件なんだけど、急ぎこの国から出ないといけない」
「・・・・・・戦争が始まるのか？」
「そうだね」
「そうか・・・・・・」

一瞬静かになったが、サイトはここを出る準備を始めた。
因みにウェールズとワルドのことは、聞かれたら応えようと思う。
取りあえずアルビオンを出たらのことだけど・・・・・・ここでレコンキスタが気に入らないから戦うとか暴走されても困るからな。

「ところでレッド・・・・・・どうやってアルビオンから出るんだ

？」
「そう言えばそうよね・・・・・・どうするの兄様？」
「多分そろそろ来ると思うよ？」
「「来る？」」

俺達はそのまま歩いて城を出ると、門の前に三人の人影が見えた。
タバサは確り伝えてくれたみたいだな。

「アンタ達無事だったのね！」
「来るってキュルケ達のことだったのか・・・・・・」
「シルフィードは街の外で待機してる」
「来る途中で戦艦が飛んでるのを遠くに見かけたから、急いだ方がいい！」

俺達はキュルケ達と合流して街の外に向けて歩き始めた。

第１２７話　韻竜の気持ち（前書き）

なんとなくシルフィをライトアップ

第１２７話　韻竜の気持ち

アルビオンから脱出するために、シルフィードの待っているらしい場所に向かっている俺達だったが、俺は向かう先がレイアに待機を命じた場所に近いことに気がついた。
まぁそれがどうというわけはないんだけど・・・・・・・ん？

「何か聞こえませんか？」
「特に何も聞こえな「しっ！静かに」・・・・・・」

一旦ルイズ達は歩みを止め、全員耳を澄ませる。
すると遠くから何かの鳴き声が二匹分聞こえる。
片方はどうやらシルフィードの声の様だが・・・・・・もう片方の声は？
なんか聞いたことあるんだよなぁ。

「シルフィードの声みたいね？」
「何かと争っているみたいだな・・・・・・」
「とりあえず行ってみましょう！」
「そうですね」

シルフィに何かあったら大変だからな・・・・・。
俺達はシルフィの声がする方に歩いているんだけど、近づけば近づくほどはっきり声が聞こえてくる。
どうやら戦闘をしているわけではないようだ。

それにしてもやっぱり聞き覚えのある鳴き声だ。

「あれシルフィードじゃないか？」
「前に居るのは飛竜？」
「野良かしら・・・・・・」

俺はルイズ達の後ろから少し身を乗り出して、その飛竜の姿を確認した。
・・・・・・・・何やってるんだレイア？

「あれは僕の飛竜だよ・・・・・・」
「え、兄様の？！」
「なんでレッドの飛竜がシルフィードと睨みあってるんだ？」
「それは僕にも分からない。
取りあえず止めないと！」

俺は二匹を止めるために間に入った。
すると俺達に気付いた二匹は同時に俺に目を向けた。

「きゅいきゅい！」「ギュイギュイ！」
「・・・・・いや分からないから。
取りあえず喧嘩は後にしてください。
今は一刻を争う事態なんです」
「きゅい？」「ギュイ？」

若干不満そうだが二匹から険悪な空気が取れ、同時に首を傾げる。
俺はこれからアルビオンが戦火に包まれることを二匹に言い、急いでこの国から出たいと告げた。
そうすると二匹とも首を縦に振ると、ゆっくりと俺達に背中を向けてくれた。

「それじゃあ俺はレイアに乗っていくから、皆はシルフィードに乗って「きゅい！」・・・・・・これは何かな？」

俺は服の裾をシルフィードに咥えられている。
なんかレイアの眼が険しくなってる気がする。

「シルフィード・・・・・・僕はレイアの主人なんだ。
だから僕はレイアに乗って行く」
「きゅきゅい！」
「シルフィ、駄目」
「きゅ？！」

タバサの杖での一撃でシルフィは口を離してくれた。
なんかじと～ってした目で見てくるんだけど・・・・・・そこはスルーしておく。
因みにその時のレイアは勝ち誇った顔をしていた。
皆がシルフィの背に乗って、俺はレイアに跨った。

「多分飛ぶスピードは一人しか乗っていないレイアの方が早いと思うから、ラ・ロシェールで待ち合わせしよう」
「きゅい？！」
「それじゃ、先に行かせてもらうよ？」
「ギュイ！」

俺の合図を受けて、レイアはラ・ロシェールに向かって飛び始めた。

～シルフィ　ｓｉｄｅ～

なんなのねあの子！
私の方がレッドとの付き合いは長いのに！！

「シルフィ、貴方もラ・ロシェールに向かって」
「きゅい！」

私はお姉さま達を乗せて飛び立った。
それにしてもあのレイアとかいう飛竜・・・・・・偶々私が空中散歩していた時にバッタリ会ったんだけど、レッドの匂いが付いてい

たから、レッドを知っているか聞いてみたら何の迷いもなく相棒って答えたのね。
私を放っておいて、新しい竜に乗るなんて・・・・・・浮気なのね！！
学院に帰ったら埋め合わせを要求するのね、きゅいきゅい！！
それにしても、あの子が相棒なら、私はレッドにとってなんなのかしら？
お姉さまの使い魔？　昔助けた相手？　それとも友達？
きっと友達に近いのね！

じゃあ私にとってのレッドは・・・・・・・・なんだろう？
知り合い・・・・・・・もっと親しいと思うのね！
仲間・・・・・・何かしっくりこないのね。
友達・・・・・・これもしっくりこないのね。
じゃあなんだろう・・・・・・・・・番い？
な、何考えてるのね！！！
レッドは人間、私は韻竜！
種族が違うのね！！
でも・・・・・・・・・・・・レッドのことを考えると胸がポカポカしてくる。

初めて出会った時は命を救ってもらった。
その恩を返そうと出会った場所に何度も行ってみた。
でもいつも会えなかった・・・・・・居ないことが分かる度にレッドの服の匂いを嗅ぎながら、彼を思い出した。
あの森に行かなくなってからも、レッドを何度も探そうと思った。
もうその時には恩返しよりも会うことが目的だったと思う。
数年が経って、レッドの服もボロボロになってきちゃって、もう会

うのも諦めかけてきたところで、お姉さまに召喚された。
鏡を通ったのは正直自暴自棄だったのかもしれないのね・・・・・・
でもお姉さまからは、もう忘れかけていた懐かしい匂いがした。
その匂いを嗅いだ瞬間、世界が輝いた気がしたのね。
お姉さまにここにレッドがいるかどうか聞いてみたら、教師をやっていると答えてくれた。
正直何をやっているかとかはどうでもよかった・・・・・・ただ彼に会えるならそれだけで良かった。

そこから先はお姉さまの任務で一緒に行動したり、レッドが使い魔に会いに来た時に一緒に遊んだりして楽しい毎日を送ってきた。
でもそれだけじゃ少し物足りないような気もしていた。
何が足りなかったのか、私も何回か考えてみたのね・・・・・・でも分からなかった。
只レッドと触れ合っている間は充実していたと思うのね。
私はレッドと一緒に居たい・・・・・・触れあっていたい。
これが発情なのか、それとも人間で言う恋なのかは分からない。
最近はお姉さまもレッドが気になっているみたいだし、一回お姉さまと確り話をした方がいいのかな？

「なぁギーシュ、なんかシルフィードが百面相している気がするんだけど・・・・・・」
「僕に聞かれても困るよ・・・・・・それよりも僕としては、ヴェルダンデの扱いが気になるんだけど？」
「しょうがないだろ、背中に乗せたら落ちちゃうかもしれないんだから」
「だからと言って、手で握られたままって言うのは・・・・・・」
「最初は咥えて運ぶって言う話だったんだから、それよりはましじ

ゃないか？」
「当り前だよ！
何かの拍子でシルフィードのご飯になってしまう可能性がある運び方なんて、危険すぎて駄目に決まってるじゃないか！」
「お前本当にヴェルダンデが好きなんだな・・・・・・」

第１２７話　韻竜の気持ち（後書き）

ノリで書いた結果がこれだよ……

修正しました

第１２８話　悲しみに暮れる（前書き）

難産だった……

第１２８話　悲しみに暮れる

～サイト　ｓｉｄｅ～

シルフィードの奇行を見ながら俺は、一つ思い出した。

「ルイズ、ところでワルドはどうしたんだ？」
「・・・・・アイツは死んだわ」
「「「え！？」」」「・・・・・」
「何時？！」
「今朝よ」
「誰に殺されたんだ？！」
「兄様よ」
「「「レッド（さん）が？！」」」「（彼の勘は正しかった）」

何でレッドがワルドを殺したんだ？！
考えても分からないから、ルイズに直接聞くことにした。

「なんでレッドがワルドを殺したんだ？」
「それは・・・・・アイツがレコンキスタの一員だったからよ」

なんだって？！
確かにムカつく奴だったけど、裏切り者だったなんて・・・・・。

「兄様は私たちを影からサポートする任務についていた。
だから今朝私を連れ去ろうとしたアイツを見かけて、戦闘になったの」
「誘拐されそうになったのか？！」

俺が寝ている間にそんなことが・・・・・・。

「でも何でルイズを誘拐しようとなんて・・・・・・」
「それは知らないけど、アイツの目的は三つ有ったって兄様は言ってたわ。
一つはウェールズ王子の暗殺、一つは手紙の回収、そして最後が私の誘拐。
ウェールズ王子は・・・・・・アイツに殺された。」
「ウェールズさんが？！」

幾ら戦場で散るつもりだったとしても、暗殺されるなんて・・・・・・クソ！！

「ウェールズ王子ってどんな人だったんだい？」
「あぁ、ギーシュ達は会ってないんだもんな・・・・・・カッコいい人だったよ」

俺はギーシュ達にウェールズさんのことを語っていく。
アンリエッタ姫への気持ちを抑え、国民を一人でも守ろうという強

い意志を持っていた王子のことを・・・・・・。

～side　end～

俺がラ・ロシェールに着いた時、まだシルフィは到着していなかった。
今回も寒かったけど、滑降に近い形だったから行きよりは短い時間で済んだ。

「お疲れ様、レイア」
「ギュイ」

俺はレイアを撫でながら、ここまで飛んでくれたことを褒めた。
レイアを撫でていた俺だったが、ふと疑問に思っていたことを聞いてみることにした。

「そう言えばレイアってオスなのか？
それともメスなのか？」

「ギュイ・・・・・・」
「あぁ、こういう聞き方だったら答えられないよな。
じゃあ・・・・・・オスだったら首を縦に、メスだったら横に振ってくれ」

レイアは首を横に振った。
・・・・・良かった！！
メスならレイアって名前で大丈夫だな！

「じゃあ夏休みになったらオスの竜を紹介してあげるよ」
「ギュイギュイ～！！」
「ウオッ？！　痛い痛い！」

竜を紹介するって言った瞬間に頭を俺の腹の辺りにグリグリし始めた。
竜のじゃれ付きは普通に痛い・・・・・普通の時なら加減してくれるんだけど、テンションが上がったりすると若干加減が出来なくなるんだよなぁ。
まぁツボツボ装備しているからそこまで痛くないんだけど、衝撃は変わらないんだよ。
故に俺は今・・・・・竜に押し倒されております。

「あぁ、もう落ちつけ！」
「ギュイ？」
「今直ぐ紹介出来るわけじゃないんだから、喜びはその時に取っておけ！」

「ギュ～イ」
「やっと離れてくれたか・・・・・・」

ここが街中じゃなくて良かったなぁ・・・・・街中だったら俺が竜に襲われてるって勘違いされそうな状態だったもんな。
それにしてもまだシルフィの影も見えないな。
どうやって時間を潰そうかなぁ。

「像でも作るかな・・・・・・」

俺は地面に座って杖の先を地面に付ける。
そして目を瞑って、出来る限り純度の高い水晶を錬金で地表に持ってくる。

「流石に即席だとこんなもんか」
「ギュイ・・・・・・」

目を開けた俺の前には、拳一個分くらいの結晶があった。
レイアは水晶を見たことがないのか、目を輝かせて見続けている。

「さて何を作ろうかなぁ」

レイアやシルフィを作りたいところだけど、このサイズだとちょっ

とな……。
この大きさなら小動物だな。
前に見たエコーをモデルに作ろうかな！
それから少し地面に座ったまま、錬金を使って水晶の形を自分の作りたい形へと変えていく。
十分ほど掛けて形を整えて行くと、やっと納得のいくものが出来た。

「ふぅ、完成かな」
「ギュイ～」
「お、丁度シルフィ達も見えてきたな」

取りあえず作った水晶像をポケットに入れて皆を待つ。
でも見えてきたのは良いんだけど・・・・・・なんか皆の表情が暗い。
何かあったのか？
シルフィの背中から下りた皆に近づいて、取りあえず話を聞いてみることにした。

「なんか皆暗いんだけど、どうしたんだい？」
「・・・・・・ワルドのことを話したの」

あぁ、そういうことか・・・・・・じゃあしょうがないか。
ワルドのことを話したってことは、ウェールズ王子のことも話したんだろう。
ならルイズとサイトのテンションが異常に低いのは分かる。

「そっか・・・・・・それで皆がこんなに暗いのか。
でもこれからルイズ嬢達は王宮に報告しに行くんだろう？」
「うん・・・・・・って兄様は行かないの？」
「あぁ、僕は学院長からの依頼だったから学院にそのまま向かうよ。
それに僕はあくまで影からのサポートだから・・・・・・ルイズ嬢も僕のことは話さないでくれるかな？」
「そうなんだ・・・・・・」
「ルイズ嬢・・・・・・きっとアンリエッタ姫はこの報告を聞いて悲しみにくれると思う。
それを慰めることが出来るのは、友達の君だけだと僕は思うよ？」
「兄様・・・・・・」
「後僕は王宮には行けないから、この指輪を姫様に渡してくれるかい？」

俺はそう言って風のルビーをルイズに渡した。
もしルイズ嬢の慰めでウェールズ王子のことを思い出に出来たなら、原作で来たウェールズの偽物に騙されることもないだろう。
原作で起こったあのイベントは、正直国のトップがやることではないと思う。
あまりに無責任すぎる行動だったから・・・・・・この世界の姫が、原作での姫よりも王族としての自覚があることを俺は心から望む。

第１２８話　悲しみに暮れる（後書き）

加筆

第129話　報告

ルイズ達と別れて学院に戻った俺は学院長室に報告に来ていた。
飛竜に乗って学院に戻ってきたために、多少注目されたが貴族の子息達にとってはそれほど驚くことでもなかったので、あんまり問題はないだろう。

「レッド・ド・ドリュウズ、ただいま戻りました」
「御苦労じゃったな。
それでは報告を頼もうかの？」
「分かりました」

俺は学院長にアルビオンで起こったことを話始めた。
フーケが脱獄していたこと、グリフォン隊の隊長ワルドのこと、ウェールズ王子が暗殺されたことなどを話したのだが、話を聞けば聞くほど学院長の顔が険しくなっていった。

「以上が今回の顛末になります」
「大変だったようじゃな・・・・・・それにしてもフーケの脱獄を許すとは、看守は何をしておったんじゃ？
いや・・・・・・レコンキスタにフーケを解放させることが出来る立場の者がいるということなのかの？」
「その可能性は高いですね。
実際グリフォン隊の隊長がレコンキスタの一員なくらいですから」
「全く嘆かわしい限りじゃ・・・・・・それもこれもマリアンヌ様が喪に服し、アンリエッタ姫が国の頂点になってから国の上層部が

役に立たなくなってきておる」
「ちょ！　誰かに聞かれたらどうするんですか?！
「大丈夫じゃ、サイレントを掛けておるからの」
「なら大丈夫かもしれませんが・・・・・・」
「心配性じゃのぅ、なんにせよレコンキスタはこの国の中に相当数紛れ込んでおるじゃろう。
早くアンリエッタ姫にも王族の自覚をもってほしいものじゃ」

俺と学院長は少しの間この国の未来について話していたが、学院長はふと思い出したように飛竜について触れてきた。

「そう言えばお主飛竜買ったじゃろ?
ラ・ロシェールの店から請求書が届いておるんじゃが・・・・・・」
「えぇ、学院長も任務に行く前に仰ってくれたじゃないですか。
飛竜で行く方がいいって・・・・・・駄目でしたか?」
「いや、別にいいんじゃが少し高かったんでのぅ。
おぉ、そうじゃった！　報酬の話もなければの！
色々あったようじゃから、２０００エキューと言ったところかの?」

そんなにくれるのか?！
まぁ嬉しいけど、そんなにもらえるなら・・・・・・。

「学院長」
「ん?　流石にこれ以上は出せんぞ?」
「いえ、違います」
「じゃあ、どうしたんじゃ?」

「飛竜に掛かった費用を依頼料から引いておいてください」
「ホ？　何故じゃ？
あれは儂が払うことになっとったじゃろ」
「僕としても少し高い買い物だと思うので、少し罪悪感が・・・・・・」
「お主はまだ２０前なのじゃから、そんなこと気にせんで良いいんじゃぞ？」
「これは僕が自己満足するためですから・・・・・・」
「損な性格しておるのぉ。
分かった、遠慮なく引かせてもらう。
じゃがただ引かせてもらうと、今度は儂の気が済まん。
故に宝物庫の品を一品だけお主に譲ろう」
「それでは僕が貰いすぎになってしまいます！」
「良いんじゃよ。
宝物庫で腐っているよりも、誰かに使ってもらった方良いじゃろう？」

正直嬉しいけど、いいのか？
普通に２０００エキューより高いものとかあると思うんだけど・・・・・。

「まぁ流石に何品か駄目なものもあるんじゃが、それ以外じゃったら何でも良いぞ？」
「・・・・・・分かりました。
ありがたく受け取らせていただきます」
「選びに行く際にはコルベール君を連れて行くと良いじゃろう。
彼ならどれが駄目なものか分かるからの」
「ありがとうございます」

「では話はこのくらいかのぅ」
「それじゃあ僕は部屋に帰って着替えたいと思います」
「帰ってきてそのままじゃからの・・・・・・良く見なければわからんが服に穴も空いておるようじゃ」

そう言えばそうだったな・・・・・・ワルドに服斬られたんだった。
斬られたって言うか刺されたんだけどな。

「そうですね・・・・・後で直しておきます」
「うむ、今日はゆっくり体を休めると良いじゃろう」
「そうさせてもらいます」

俺はそう言って学院長室を後にした。
部屋に帰ってきた俺は布を服に当てて、錬金を用いて直し、クローゼットに仕舞った。
そしていつもの部屋着に着替えて、ベットに寝転がった。

「ふぅ・・・・・・やっと終わったか」

学院長への報告も終わり、これで俺の任務は完全に終了した。
原作の流れとは結構変わってしまったけど、これからの流れはどうなるんだろうか？
確か次に起こる大きなイベントは、タルブでの戦いだったはず・・・・・・何か変わるだろうか？

「まぁ、考えても分からないな・・・・・。
取りあえず明日になったら、レイアをドリュウズ領の誰かに迎えに来てもらおう」

流石にずっとここで世話するわけにもいかないしな・・・・・。
後で手紙送っておこう。

「少し昼寝でもしようかな・・・・・」

俺は旅の疲れでも溜まっていたのか、直ぐに眠りについてしまった。

その頃アイガは・・・・・

「ジ（初めまして）」
「ギュイ（初めまして）」

なんかレイアと話していた。
どうやらレイアがレッドの匂いを感じて、アイガのいる所に来たらしい。

「ギュイギュイ・・・・・・ギュ？（貴方から主人の匂いがするんだけど・・・・・なんで？）」
「ジジ（それは僕がレッドの使い魔だからかな）」
「グルルル（そうだったかぁ）」
「ジジ？（そう言う君は？）」
「ギュイ（私も似たような感じかな）」
「ジジジ（それじゃあこれからよろしくね）」
「ギュイ！（よろしく！）」

レッドのいないところで二匹は友情を深めていた。
因みにレイアは明日ドリュウズ領に行くことを知らない・・・・・・。

第129話　報告（後書き）

修正

第１３０話　情報の大切さ（前書き）

今日は卒研メンバーとの飲み会＆鉄カラｗ
レッツアニソンタイム！！
因みに卒研メンバーの中に一人異常に歌が上手い子がいます。
簡単に言えば「君の知らない物語」をそっくりに歌えるレベルです。
俺？……どうなんだろうね？
取りあえず始めて一緒にカラオケ行く人には大抵、想像してたのと違うって言われますｗ
まぁ基本のんびりしている人なので、マクロス７の曲とかニトロプラスの曲とか歌うとビックリされます。
因みにニトロの曲では「さめない熱」「残夢」は基本毎回歌ってます
残夢は歌うと喉がデンジャラスになるのでテンション上がってからですがｗ
因みにゆったりした曲も歌うよ？
「明日もし君が壊れても」とか好き！

第１３０話　情報の大切さ

翌朝ドリュウズ家から使いの馬車が来て、レイアをドリュウズ領へと連れて行った。
なんかレイアはジッと俺を見ながら、馬車に連れられて行った。
なんだろう・・・・・・ドナドナが脳内で流れたんだけど？

さらに翌日、ルイズ達が帰ってきて、学院は少し騒がしくなった。
突然四人の学生が揃って休んだこと、そして帰ってくる頃に広がっているアルビオン王国崩壊の噂・・・・・・何かしら関係しているんじゃないかという風に考える生徒は少なくなかった。
しかし誰が聞いてもハッキリとした言質は取れずにいた。
只一人を除いて・・・・・・。

「で？　言い訳はあるかな？」
「・・・・・・いえ、ありません」
「ギーシュ、君はこの件がどれだけデリケートなものか分かっているだろう？」
「はい」

俺がいつもなら朝練をしているギーシュに説教をしている理由は、ギーシュがモンモランシに事件の真相を話したからだ。
噂が気になるのはモンモランシも一緒だったようで、ギーシュに聞いてみたんだそうだ。
すると、最初は話せないと断っていたようだが、手を握られて頼まれて頭がボーっとなってしまい、口が勝手に・・・・・・というの

が話した経緯らしい。
コイツ、モンモランシに隠し事できないな・・・・・・ということは機密性が高い情報を教えることは出来ないとうことだ。
はぁ・・・・・・いつか部隊を持つ人間がこれでいいんだろうか？

「もし次不用意に重要な情報を人に漏らした場合、僕はギーシュ君との関わりを断たせてもらう」
「そ、そんな・・・・・・」
「僕は情報が戦闘において重要なファクターだと教えているだろう？もしギーシュ君に僕の切り札等の情報を他者にバラされた場合、僕は殺されてしまうかもしれない。
正直信頼できない味方ほど厄介な者はないんだ・・・・・・」
「・・・・・・」
「君もグラモン元帥の息子なら、いつか部隊を率いて戦場に立つかもしれない。
そうなったときに部隊を危険に晒したくないなら、公私混同は避けて、守るべき情報は守らないといけない」
「・・・・・・はい」
「それにモンモランシ嬢に隠し事は出来ないと思っているのかもしれないが、知っているからこそ厄介事に巻き込まれることもある」
「？！」
「そうなった場合君は自分を許すことが出来るかい？」
「・・・・・・多分できません」
「なら、ちゃんと考えて行動しないと行けない」
「分かりました。
今後はもっと情報の重要さを考えます」
「そうだね、慎重になればきっと大丈夫だと思うよ」

俺はそのままギーシュを部屋に帰した。
今日はギーシュの訓練は無しだ。

「・・・・・タバサだけになっちゃったけど、今日の訓練は止めておこうか？」
「やる」
「そう言うような気がしてたけど・・・・・・まぁ、こういうのは継続が大事だからな」

俺とタバサは何時も通り、マインゴーシュの練習と模擬戦をした。
何時もなら模擬戦はアイガともやるんだけど、アイガの機嫌が悪いんだよね。
どうやらレイアと結構仲良くなっていたみたいで、いきなりドリュウズ領に送ったのが気に入らないみたいで・・・・・・。
ここ数日毎晩アイガの機嫌取りをしてるんだよ。

「隙あり」
「ん？うぉ？！」

今夜はどんなことして機嫌を取ろうかなって考えていると、俺の首目掛けて剣を振りおろしているタバサが目に入った。
幾ら刃を潰しているとはいえ、普通当たったら痛いじゃ済まないんだぞ？！
俺は急いでバックステップして、斬撃を避けた。

「危ないだろうが！！」
「気を抜く方が悪い」

まぁ、それもそうだな。
でもなんか不機嫌じゃないか？
タバサは不機嫌を身体で表すように、ドンドン追撃を加えてくる。
タバサの斬撃は重みこそないが、速さは有る。
いつか速さを売りにしたネタ技でも教えてみようかな・・・・・・。
流石にワルド程ではないため、今は余裕を持って避けられるが、成長したらどうなるか分からないな。

「少し剣速が上がっているな」
「ありがとう・・・・・・でも当たらない」
「そんな簡単に抜かれたら自信なくなるって・・・・・・」

俺は避けきれない斬撃だけを剣で弾き、タバサの攻撃を凌いでいく。
しかしこのままでは只タバサが疲れて終わりになってしまう。
それだとあまり訓練になっていない気がする。
マインゴーシュは攻撃を受け流す剣術だから、俺が攻めないと練習にならないだろう。
故に俺は攻勢にでる。
タバサの斬撃を受け流さずに受け止めて、強く弾いて距離を取る。

「このままじゃマインゴーシュの訓練にならないから、次は俺が攻める。
ちゃんと受け流せよ？」

「・・・・・・（コクリ）」
「じゃあ・・・・・・行くぞ！」

俺はタバサの剣速より少し早い位の斬撃でタバサに斬りかかる。
突きは刃を潰していても危ないために使わないが、人体の急所などにも剣を振るう。
首や、腕は勿論のこと、足などにも斬られると不味い血管は存在する。
故に自身の何処を狙われても対処できるようにならなければ、マインゴーシュは完成しない。
タバサは俺の斬撃を何度か受け流したが、二の腕を狙った斬撃を流しきれずに俺の剣はタバサの首元に添えられた。
これでこの模擬戦は終了だ。

「チェック」
「・・・・・・参りました」
「ふぅ、じゃあ今日はここまでかな・・・・・・。
そろそろタバサも授業の準備しないと遅刻しちゃうからな」
「分かった」

そうしてアルビオンから帰ってきて初めての訓練は終了した。
さぁてと、俺も授業の準備しないとな！

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……ｐａｒｔ３（前書き）

今回はワンピースの世界に飛ばします
なんで書いたか？
そんなのはノリです！

まぁ頑張って書いても駄文かもしれないから、読んでくれるなら、
覚悟をした方がいい！

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……ｐａｒｔ３

～ワンピースの世界へ～

日常編

「はぁ……どうしようかなぁ」
「どうしたんだいレッド？」
「いや、これからどうしようかなぁって思ってさ」

正直俺何でここに居るか分かんないんだよ……いつの間にかここに来ていた。

「何を言っているんだか……私がアンタを逃がすわけないじゃないか」
「だから言ってるんだよ……俺は海賊とかに興味ないんだ。ただ静かに暮らせればそれで「幻獣王」……」
「賞金も掛かってるのに何を言ってるんだい？」

そうなんだよ！
俺もいつの間にか賞金首になってたんだよ！！

「あれは俺の所為じゃないぞ？！」

「あ～はいはい、アンタの部屋に海軍が撃ちこんだ大砲が直撃して、お気に入りの像が壊れたんだっけ？」
「あれは俺の作った像の中でも１、２を争うレベルの出来だったんだぞ！！」
「（また熱が入っちまった……）分かった分かった、アンタは悪くない。
だから落ち着きな！」

なんか投げやりになってきてないか？
お前にも原因はあるんだぞ？

「クソッ……アルビダが俺の部屋の方に弾を滑らせたのが悪いんだぞ！！」
「だから私の所為にすんのは止めな！！
アンタが最初っから戦ってれば済んだ話だろうが！！」
「だから俺は戦うの嫌いだって言ってるだろうが！！」

「なぁ、いいのか放っておいて？」
「あぁ、お前新入りだったな。
レディーアルビダとレッドさんの口喧嘩は何時ものことだぞ？
本当ならここにバギーさんも混じるんだけどな」
「そう言えば幻獣王ってなんなんだ？」
「お前知らないのか？！」
「名前だけは聞いたことがあるんだけど、アイツ見た目平凡のちょっと筋肉質なだけの男じゃないか。
なんであんな奴が賞金首なんだ？」
「お前……それ姐御の前で言ったら大変なことになるから気をつけ

ろよ？
レッドさんが何で幻獣王なんて凄い呼び名なのか、そして何故２億なんて馬鹿げた金額の賞金が掛かっているのかはこの船に居れば分かるぜ……」

「アンタが悪い！」「お前が悪い！」

無双編

「レディーアルビダ！正面に海軍の船が見えます！」
「なんだって？！
昨日も出くわしたって言うのに……総員戦闘準備！」
「「「「了解！」」」」

今なら部屋に引っ込んでも大丈夫かな？

「……（ソロ～リ）」
「待ちな！
アンタも戦うんだよ！」
「嫌だ～～～～！！！」
「……戦わないとアンタの像壊すよ？」

オイ！？　それは横暴だぞ？！
俺があの像を作るのにどれだけ時間を掛けたと思ってるんだ！！
くそう……妥協点を探すか。

「……一隻「三隻」え？全部じゃないか！！
そんなの嫌「像」……分かったよ！！」

「本当に大丈夫なのか？」
「まぁ見てなって！」

「はぁ……また目をつけられるのかぁ。
ヤダなぁ……でも像壊されたくないしなぁ」
「まったく、いいから早く召喚しな！」

何でそんなに俺を戦わせたがるんだよ……勘弁してくれ。

「分かってるって……来いシェンロン、ハク、レウス、テルー」
「相変わらずハクは綺麗だねぇ」
「遊ぶなら後でな！」

「……なんだあれ？」
「あれがレッドさんを幻獣王と呼ぶ理由だ。

レッドさんは何処からともなく見たことない生き物を召喚する。
そしてその生き物は一匹一匹が海王類を上回る力を持っているんだ。
さらに……」

「今回装備はしないのかい？」
「いやするよ？
何が居るか分からないからね」

正直この世界、悪魔の実があるから戦力ヤバい戦艦とかあるんだよ！
気を抜いたら掴まりかねない。

「そうかい……（其れは楽しみだね！）」
「（装備、セレビィ、アンヘル、ＡＩＤＡ）それじゃあ行きますか！」

「いきなり姿が？！」
「あれはレッドさんの能力だ」
「能力って……悪魔の実？！」
「いや、レッドさん固有の能力らしい」
「なんだそれ……でも見た目は変わったんだけど、強いのか？」
「良いから見てろって！」

「また見たことない姿になったねぇ（緑色の髪、黒と黄色の鎧、背中には黒い翼かい……まるで悪魔だねぇ、でもそこが……）」
「じゃあ行くぞ皆！

目標はあの船団だ！」

「大尉！前方から見たことのない生き物が！！」
「そんなものは見ればわかる！！
問題はそいつ等と一緒に飛んでいる男だ！！」
「男？……ッ！？
アイツは幻獣王レッド！！」
「大至急電伝虫で応援を呼べ！
俺達だけでは奴を止められん！」
「イエッサー！」

「ここら辺でいいかな？
取りあえず船を壊すだけでいいよな……。
シェンロンとハクは、ハイドロポンプで船体を貫け！
レウスは火炎放射で船の上を焼き払え！
テルーは帆を神通力でへし折ってくれ！」

「相変わらずド派手だねぇ……ここにバギーが居れば喜んだろうに。
アンタ達！もうそろそろ終わるだろうから全速でこの海域を離れるよ！」
「「「「了解！」」」」

「化け物か？！」
「まぁ化け物みたいな強さだけど、本人には言うなよ？
多分凹むからな」
「なんなんだあの人は……」

バトル編

「お前さんが幻獣王レッドかい？」
「……人違いです」

ヤバい……この人大将じゃねぇか！！
大将の能力は異常すぎるんだよ！！

「お前さんは生死問わず何でここで殺させてもらうよ？」
「俺の話聞いてないな！？
クソ！（装備、レウス、テルー、トトロ、シヴァ、ラオウ）」
「ホウ、それが噂の装備って奴か……」
「流石に大将さんは物知りですね！」
「俺のこと知ってたんだ？」

海賊の中でめっちゃ怖がられてるからな！！
見たら死ぬレベルで怖がられてるよ……。

「青キジさんですよね……出来れば帰っていただけませんでしょう

か」
「別にいいけど」
「本当ですか？！なら「その代わりに金棒のアルビダは捕まえるぞ？」……そう来ますか。
彼女は大将が動くような高額賞金首じゃないですよ？」
「海賊を見かけたからには捕まえないとね」

流石にそれは後味が悪すぎる。
これまで世話になってきたしな！

「……はぁ、しょうがないな。
死んでも文句言うなよ！」
「君には死んでもらうけどね？
君達は後ろに下がってなさい。
巻き込まれると死ぬよ？」
「「イ、イエッサー！！」」

「あれが幻獣王……毎回見た目と戦い方が変わるという変わった賞金首」
「あれは王って言うより魔王だな……」
「黒い髪、赤い腕、虹色の羽、凍った足、岩の様な胴体……まるでキメラだ」

「アイス・ブロック・パルチザン」
「フレアドライブ！」

これはタバサの魔法よりヤベェな……一発で致命傷にはならないけど、めちゃくちゃ痛そうだ。
まぁなんとか身に纏っている炎で溶けてるから大丈夫だけど、これ俺も結構熱いんだよ！

「流石にこれ位じゃ止まらないか……それじゃアイス・ブロック・フェザントベック！」
「うぉ？！」

なんか氷のキジが飛んできたんですが？！
さっきより飛んでくる速度が速いから避けにくいんだよ！！

「これは流石に溶かしきれないみたいだね」
「（カチン）舐めんなよ！聖なる炎！」

「紫色の炎？！」
「なんだこれ……見ているとクラクラする」

「見たことのない色の炎だねぇ」
「どうだ、溶けたぞ」
「そうだね……でもこれはどうかな？
アイスエイジ！」
「空を飛ぶ！」

これはヤベェ！
地面が凄い勢いで凍っていく……もしあそこに立っていたら氷漬けにされてただろう。

「飛んだね？
アイス・ブロック・フェザントベック！」
「グアッ！！」

マジかよ……久しぶりに腹に風穴開いたぞ。

「おぉ！流石大将！」
「幾ら幻獣王と言えど大将に掛かれば！」

「（この傷ならもう少ししたら死ぬな）なんか遺言とかある？」
「……調子に乗るなよ？　自己再生」

もし追い打ちされてたら厳しかったな。
だがここからは俺のターンだ！！

「なんだって？！」
「すっげぇ痛かったぞ？
お返しに今まで使ったことない技を使うことにするよ……行くぞ、ブラストバーン！」

「ガアアア

ＩＦ外伝　もしレッドが他の世界に行ったとしたら……ｐａｒｔ３（後書き）

何となくアルビダをヒロインにしてみたｗ
最初は革命軍に入れようかと思ったんだけど、イワさん難しすぎる
……

シェンロン＝色違いギャラドスＬｖ１００
レウス＝リザードンＬｖ１００
アンヘル＝ゼクロムＬｖ１００
トトロ＝カビゴンＬｖ１００
シヴァ＝キュレムＬｖ１００

第１３１話　サイトの決意（前書き）

スランプ～スランプ～
外伝ネタとかなら思いつくんだけどなぁ……
だが一日一回更新は頑張って続ける！
どうしても無理になったら外伝で頑張る！！

第１３１話　サイトの決意

アルビオンから帰って来てから数日経った。
俺はその日の夜、いつも通り授業資料を整理していた。
そして、ちょうど一段落しようとするとノックが聞こえてきた。

「あいてるよ～」
「じゃあ、お邪魔します」
「あぁ、誰かと思えばサイト君じゃないか」

夜の訪問客と言えば、ルイズ嬢かタバサ、偶にシルフィが来るくらいだから三人の内の誰かだと思ったんだけど・・・・・・珍しい客が来たな。
それにどうやら遊びに来たって感じじゃなさそうだ。

「遊びに来た・・・・・・って感じじゃないね」
「あぁ、今日はレッドに頼みごとがあって・・・・・・レッドって剣使えるだろ？」
「嗜み程度だけどね？」

何でいきなりそんなことを聞くんだ？
まぁ何となく見当はつくんだけどな・・・・・・。

「アレは嗜みってレベルじゃないだろ・・・・・・」

「アレ？」
「昨日タバサとレッドが、剣で戦っているのを見たんだ」
「覗き見とは・・・・・・少し趣味が悪いね」

俺鈍ったのかな・・・・・・いや、敵意とか感じなかったから気付けなかったのかな？
どっちにしろ本来なら、見られてもそんなに困るものじゃない。

「それに関しては謝る・・・・・・でもあれを見て決めたんだ！
レッド！　俺を鍛えてくれ！」

こうやって厄介なことにならなければの話なんだけど・・・・・・。
取りあえず俺は二人の訓練でも結構手いっぱいなんだよなぁ。

「それはちょっと・・・・・・無理かな？」
「何でなんだ？！」
「二人教えるのだって結構大変なんだよ」
「そこを曲げてなんとか！」
「なんでそこまで鍛えてほしいんだい？」

一番気になる部分はそこなんだよ。
あり得る理由としては、ワルドに負けた悔しさから？
それとも、ルイズの危機的状況に気付けなかった後悔かな？

「俺はワルドと決闘して・・・・・・負けた」
「うん、それはルイズ嬢に聞いた」
「あの時は負けて、悔しいって思うだけで済んだんだ・・・・・・
でも、もしあれが殺しあいだったら俺は今ここに居ないんだ！
俺は死にたくない、元の世界に帰りたい・・・・・・ついでに言うと彼女も欲しい！」

最後の一言余計だなぁ。
まぁ、あってもなくても俺の答えは一つなんだけどな。
俺もサイトを鍛えるのは賛成なんだけど、実際二人の訓練で時間ギリなんだよね。
サイトが加わると、二人の訓練密度が下がる……それは避けたいからな。

「だから俺は、元の世界に帰るまで死ねない！
レッド、頼む・・・・・・俺を鍛えてくれ！」
「二人の訓練で手いっぱいだから、やっぱり無理かな？」
「そんな・・・・・・頼む！　この通りだ！」

土下座されても・・・・・・いや、待てよ？
個人レッスンの時間は取れなくても、あの二人との模擬戦って形にすれば鍛えられるか？
それなら大丈夫かもしれないな。

「頭を上げてください」
「なら！」

「僕自身が個人的に鍛えることは、時間的に出来そうにありません」
「・・・・・・」
「でも二人との模擬戦と言う形で訓練に参加するのはいいですよ？」
「本当か！？」

サイトは勢いよく立ちあがって、俺の手を掴んだ。
テンション高いなぁ・・・・・・まぁ命に関わるかもしれないからしょうがないか。

「ただし！」
「なんだ？　流石にお金はないぞ？」
「いやそんなことじゃなくてですね、あの二人に許可を取らなければ参加は出来ませんよ？
あくまで訓練のメインはあの二人なので」
「二人って言うと・・・・・・ギーシュとタバサか」

ギーシュはあんまり気にしないだろうな・・・・・・タバサはどうだろう。
訓練の時間が短くならなければ大丈夫かな？

「明日もあの場所で訓練するので、その時二人に聞いてみると良い」
「分かった！」
「そうと決まったら、明日も早いですから部屋に戻った方がいいですよ？」
「あぁ、遅くまでごめんな！
それじゃあお休み！」

「お休みなさい」

そう言ってサイトは、俺の部屋から出て行った。
あぁそう言えば、ガンダールヴのルーンが何処まで身体強化出来るか、試させた方がいいかもな。
本来サイトが戦うはずだったワルドはもう居ないし、いきなりタルブで空中戦だとキツイかもしれない。
それにデルフの魔法吸収能力も開花してない。
あれがないとガンダールヴは厳しいだろう。

「タバサと魔法ありで戦えば開花するかな？」
「お姉さまがどうかしたのね？」
「うぉ？！　なんでシルフィがこんなところに？！」
「そんなの一緒に寝るためなのね、きゅいきゅい！」

こんな風にアルビオンから帰って来てから、ちょくちょくシルフィが俺と一緒に寝ようとしてくる。
本人曰く、俺の匂いが落ち着くらしい・・・・・俺マイナスイオン出してる？

「だからいつも言っているだろ？
男と女は同じベットで寝ちゃ駄目なんだ！」
「何でなのね！？」
「間違いがあったら困るからだよ！」
「じゃあ間違いってなんなのね？」

いつもこうなるんだよ・・・・・・どう言えばいいんだ？
露骨に言って引かれるのも正直嫌だ。
そうして迷っているとこれ又いつも通り・・・・・・ドアが開いた。

「また・・・・・・」
「あ！　お姉さまからも言ってよ！」
「いいから、帰る」
「痛ッ、痛いのね！
耳を引っ張らないで～、るーるー」
「タバサ、シルフィお休み」
「お休み」
「痛たたたた、私はレッドと寝るのね～～～～！！！」
「黙る」
「ギャン！？・・・・・・キュ～～～」

・・・・・・流石に大声で言う内容じゃないからなぁ。
もしタバサがサイレント掛けてなかったらヤバかったよ。
それにしてもタバサの顔が赤かったが、そんなに怒ってたのか。
シルフィ・・・・・・無事に明日を迎えられるんだろうか？

第１３１話　サイトの決意（後書き）

いつか総合評価で一万超えることを夢見ながら、これからも頑張る！！

第１３２話　覚悟の足りない青年（前書き）

実家ナウ

第１３２話　覚悟の足りない青年

翌朝、いつも通り訓練に向かうと既に三人が来ていた。
サイトはギーシュと何かを話しているようで、タバサは木に寄りかかって本を読んでいる。

「さて、今日も訓練を始めよう・・・・・・と言いたいところだけど、いつもより一人多いのは分かっているね？」
「今まで話してましたから・・・・・・でも何でここにサイトがいるんですか？」
「疑問」

どうやら理由は話してなかったのか。
俺は取りあえずサイトを二人の正面に立たせた。

「二人も知っていると思うけど、アルビオンに向かう途中でサイト君はワルドとの決闘に敗れた。
その時は特に大きな怪我を負うこともなく、只悔しさを感じただけだったらしい。
だけどワルドは敵だった・・・・・・もしあの場でとどめを刺されていたら、ここにサイト君はいなかっただろう」

ギーシュとタバサは静かに俺の話を聞いている。
サイトは歯を食いしばっているようだ。

「サイト君は使い魔としてここに召喚された・・・・・しかし彼にも家族はいる。
故にいつか家族に再会したい、自分の国に帰りたいと思っているらしい。
そのためにサイト君は自分の身を守れるだけの力を求めて僕の所に来た。
しかし僕は君達二人でもかなり手いっぱいだ。
そこで今までアイガと行っていた模擬戦を、サイト君と行ってもらいたい。
二人に対する個人指導は今まで通り行うから、そこは気にしなくても大丈夫」

そう言うとタバサが少し安堵の表情を浮かべた気がした。
修行熱心だなぁ。
俺がそんなことを思っていると、サイトが一歩前に出て頭を下げた。

「いきなりのことでゴメン！
でも俺も引けないんだ！
だから頼む・・・・・俺も訓練に参加させてくれ！」

ギーシュは少し戸惑っているようだが、嫌そうな顔はしていない。
タバサは・・・・・少し眉をひそめている。
多分アイガとの訓練の方が為になると思っているのだろう。
まぁ現状ではその通りなんだけどね？

「僕は別にいいですけど・・・・・・大丈夫かい？
多分かなり厳しいと思うよ？」
「た・・・・・・多分大丈夫だと思う」

ギーシュはＯＫか。
問題はタバサの方だけど・・・・・・しょうがないな、少し口添えしてあげよう。

「タバサ嬢、僕以外との剣士と戦うのも経験になりますよ？」
「・・・・・・分かった」
「ホントか！　ありがとうな！」

やっぱり渋々って感じがするけど、これでサイトの訓練参加は決まった。
さてとじゃあ少しだけサイト君に自分の力を理解してもらうことにしよう。

「じゃあ今日は先ず、ギーシュとサイト君に模擬戦をしてもらおうかな？
ルールは互いに一撃を受けた方の負けとする。
サイト君はこの剣を使ってください」

そう言って俺は訓練でよく使っている、刃引きした剣を渡した。
正確に言うと渡そうとした。
するとサイト君は驚いた顔をして、俺を止めた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！
木刀とかじゃないのか？！」
「木刀では剣の重みになれることはできませんし、刃引きしてありますから大怪我は滅多にしませんよ？」
「滅多にしないって・・・・・・偶にはするんじゃねぇか！？」

・・・・・・流石に少し覚悟が足りなすぎるな。
少し説教するか。

「君は何をしに来たんだい？」
「え？・・・・・・それは訓練を」
「そう、訓練です・・・・・・戦闘の訓練です。
君は死にたくないから鍛えたい、なら死にそうな状況から生き残らなければならない。
その訓練をするためにここにきたんだろう？」
「はい」
「それに君は何を心配しているんだい？」
「それは・・・・・・怪我をしたら大変だから」
「僕が何の準備もせずに訓練を行っているとでも？
仮にも教師なのだからそこら辺はしっかり考えているよ。
それにいざとなれば僕が止める」

俺はそう言って懐から水の秘薬を取り出した。
サイトもアルビオンに行く道のりで大火傷を負った時、お世話になったから秘薬の効き目は知っているだろう。

俺は自分で作れるからまだいいけど、それでも結構材料費とか掛かるからあんまり使いたくないんだけどね。

「他に何か言いたいことはあるかい？」
「・・・・・・ありません」
「じゃあ説明を続けます。
突きは禁止、頭部や首、金的への攻撃は禁止します。
ギーシュはゴーレム召喚以外の魔法を禁止します」
「それは俺が有利過ぎるんじゃないか？」
「僕を甘く見ないで欲しいな・・・・・・サイト」

確かにサイトはギーシュを甘く見過ぎてるな。
ギーシュのゴーレムは武器を持ってるし、アイガとの模擬戦で一人と戦う時にどんな動き方をすれば効率的かということを学んだ。
多分サイトはフーケの様に大きなゴーレムを一体召喚すると思っているんだろう。
しかもフーケのゴーレムを翻弄したから、自信があるようだ。
ワルドとの決闘で天狗の鼻は折れたかと思ったんだけど、まだ完璧には折れてなかったみたいだな。

「まぁ、やってみた方が早いですね。
それでは双方構えて」

二人は一定の距離を開けて、互いを見つめ合う。
サイトは剣を正面に構え、ギーシュも杖を構えている。
この距離ならサイトがギーシュの懐に潜り込む前に、ギーシュがゴ

ーレムを作るだろう。
流石にギーシュの剣の腕じゃガンダールヴのルーンを持ったサイトには勝てないから、懐に入られたらギーシュの負けだな。
だがサイトは戦闘の駆け引きを知らない・・・・・故にギーシュに勝てる確率はかなり低いだろう。
まぁ戦闘は時の運も関係するから、分からないけどな？
さてさて・・・・・どうなることやら。

第１３３話　青銅とガンダールヴ（前書き）

実家にゼロ魔の設定資料集持ってくるの忘れた・・・・・・orz

どうしようかなぁ

第１３３話　青銅とガンダールヴ

互いに一挙一動を見逃さないよう、睨みあいに近い状態だ・・・・・・。
そんな中、俺は開始の合図を発する。

「開始！」

俺の合図でサイトは速攻を掛ける。
恐らくゴーレムを出す前に勝負を決め様としているのだろう。
しかしそんなことはギーシュも分かっている。
そんな簡単にやられては今までの訓練が無駄だからな。

「一気に勝とうと思っているようだけど、そんな簡単には行かないよ？」
「チッ！」

サイトがギーシュにたどり着く前に、ゴーレムは出来上がっていた。
見た目は前とあまり変わらないが、武器も持っているし、青銅の純度も密度も上がっている。
少なくとも一刀両断されることはないだろう。
サイトは構わず、ゴーレムに斬りかかったが、やはり一撃で行動不能にすることはできなかった。
その隙にギーシュはゴーレムを作り出していく。
新たに作られた四体はサイトを取り囲むように配置された。

それと同時に最初に作られた一体はサイトに壊されてしまった。

「よし！これで俺の勝ち……って何か周りにもいる？！」
「何故勝ちを確信したか分からないけど、今度は僕から行くよ！」
「ちょ！？　ひ、卑怯だぞ？！」
「最初にゴーレムを使うって言っただろう？
行けワルキューレ達！」

ギーシュのゴーレム達はサイトに四体同時攻撃を仕掛ける。
これは一人を相手する場合非常に良い攻撃方法だ。
しかも狙いは足と胴なため、剣が一本なら受けるのは厳しいだろう。
まぁガンダールヴは普通じゃないから・・・・・・。

「あ、危なかった・・・・・・殺す気か！？」
「いや、刃を潰してるから死にはしないよ・・・・・・・それよりもどうやって避けたんだい？」
「そりゃあ・・・・・・こう何となく？」

サイトは胴を狙う二本の剣を自身の剣で逸らし、足を狙う剣をジャンプで避けた。
そのままゴーレムを蹴って、包囲網から脱出した。
流石の身体能力だな・・・・・・ギーシュは位置的に全てを見ることが出来なかったようだけど、サイトの身体能力が普通じゃないことは分かったようだ。
明らかに眼が変わった。
ここまで動けるとは思っていなかったのだろう・・・・・・慢心だ

な。
ギーシュはゴーレムの隊列を変えて、弧を描くような配置にした。

「君の身体能力の高さは、前の決闘の時に知ったけどここまで動けるとは思わなかったよ」
「そいつはどうも」
「だけど僕も負ける気はない！」
「俺だって！」

ギーシュが杖を振ると二体のゴーレムがサイトに特攻を仕掛けた。
だが四体の同時攻撃を避けるサイトに、二体の攻撃では足りなかったようで、普通に避けられた。
しかもそのままゴーレムの一体はサイトの剣を受け、半壊してしまった。
しかしギーシュもそれだけで終わらせるつもりはなく、避けられはしたがゴーレムはそのまま剣を捨てて、サイトを拘束した。
ゴーレム故に出来る自分の身体を顧みない行動にサイトは対応しきれなかったようだ。
サイトも拘束を解こうともがくが、自分の足を地面に埋め込んだゴーレムを振りほどくのは簡単ではなく、そのまま残り二体がサイトの首に剣を押し付けた。

「勝負あり！」
「負けちまった・・・・・か」
「いや、僕もギリギリだったよ。
もしあそこでワルキューレ達を振りきられたら、僕の負けだったかもしれない」

「ギーシュ・・・・・・サンキュ」

なんか青春漫画っぽくなってきたなぁ。
それはそれで良いんだけど、取りあえず俺は二人に近づいて行った。

「お疲れ様」
「レッド、ギーシュってこんなに強かったんだな・・・・・・」
「ギーシュだって最初は戦術も何も知らなかったし、ゴーレムだって素手だったんだよ？
サイト君だって、やっている内に色々なことが分かってくると思うよ」

原作のギーシュ相手だったらそんなに苦労せず勝てただろうしな。
ギーシュも強くなったもんだ。

「そうだったのか・・・・・・ところでレッド」
「どうかした？」
「いい加減俺のことサイトって呼んでくれないか？
なんか君付けはむず痒くて・・・・・・」
「あぁ、そうだったんだ。
じゃあ今度からはサイトって呼ぶことにするよ」
「そうしてくれ」

そう言ってサイトはニカっと笑った。
現代人にしてはあんまり歪んでないな・・・・・・あっちに友達多

かったんだろうなぁ。
友達か・・・・・・アイツどうしてるかな？
中学校の時にもしお互いが死んだら、相手のゲームや漫画を引き継ぐとかいう話とかしてたんだよなぁ。
まぁ俺が持っているものはアイツも持ってたし、アイツが持っているものは俺も持ってたから微妙かもしれないな。
両親もどうしているんだろう……こっちの父さんや母さんも大事だけど、せめて一言言いたかったな。

「レッド？！　どうしたんだいきなり！！」
「え？」
「えって・・・・・・お前涙出てるぞ？」
「なにか悲しいことでもあったんですか？」
「大丈夫？」

いつの間にかタバサまで近くに来てたようだ。
それにしても今まであんまり考えないようにしてたからなぁ・・・・・・そっか俺泣いてたか。
もう俺はアイツにも、両親にも会えない・・・・・・それ自体は理解してるし、納得もしている。
この世界にも俺を心配してくれる人達はこんなにいる。
きっと俺が死んだことで両親は悲しんだだろう。
アイツは・・・・・・どうかな？
アイツはあんまり感情を表に出さないからなぁ。
おっと、流石に三人が心配そうにしている。

「大丈夫、少し目にゴミが入っただけだから」

「本当か？」
「でも痛がってなんか「ギーシュ」・・・・・・」

タバサがギーシュの言葉を遮った。
正直助かるよ。
流石に説明はできないからな。
俺は涙を服の袖で拭い、三人に笑顔を向けた。

「ありがとう」

この言葉はこの三人だけじゃなく、元の世界の両親やアイツにも伝えたい。
この三人には心配してくれたことに対しての感謝を。
両親には育ててくれたことに対する感謝を。
アイツには沢山の思い出を作ってくれたことに対しての感謝を。
三人は突然のお礼に戸惑っていたが、各々のタイミングで「どういたしまして」と返してくれた。

「さて、じゃあ訓練を続けよう！」
「はい！」「オウ！」「（コクリ）」

そのまま俺達は授業が始まるまで、訓練を続けた。

第１３３話　青銅とガンダールヴ（後書き）

今回の話で出てきたアイツですが、俺の友人を元にしています。
因みに男ですよ？

第１３４話　宝物庫の中（前書き）

設定資料集が手元にないから、イベント表が・・・・・・・
もう夏休み編に入って大丈夫？
大きなイベントなかったよね？！
これが聞きたかった故に更新時間を早めました

第１３４話　宝物庫の中

ある虚無の休日、俺はツルベー・・・・・・コルベール先生と一緒に宝物庫の前にいた。
理由は、前に学院長が言っていた、宝物庫の中にあるものを一つ貰うためだ。

「レッド君はどんなものが欲しいとかあるのかい？」
「僕としては、身を守る魔法具とかがあれば嬉しいのですが・・・・・・」

正直装備を使えば、割とどうにでもなるんだけどね。
でも備えあれば憂いなしっていうし、何かあれば儲けものって感じかな？

「身を守る魔法具かい？
確か何個かあったはずだ・・・・・・でもそのうち半分はあげられないものだから、あんまり期待しない方がいいよ？」

コルベール先生はそう言いながら、宝物庫の扉を開いていく。
ギギギという音と共に、重厚な扉が開いた。
中の様子はかなり薄暗く、臭いも埃臭い。
コルベール先生が壁にあるランプに火をつけると、薄暗くて見えなかった部分がはっきり見えるようになった。
宝物庫の中には、いろいろな物がある。

王族の胸像、名剣っぽい剣、ごっつい盾等の高そうな物から、ただの木の棒に見える何か、道に落ちていそうな石等のゴミのような物もあった。

「どうですか？」
「正直物が多すぎて何とも・・・・・・」
「それもそうですね、では気になる物を幾つか持ってきていただければ、それの説明をしますからそれを聞いて判断してみては？」
「それは助かります！」

俺は一先ず宝物庫内を調べてみる事にした。
調べてわかったことは、意外と俺の世界から来たような物もあるようだ。
コンバットナイフやライフルの弾等の戦闘用の物も多いが、シャープペンや中身の分からないＤＶＤ等の日用品もあった。
とりあえず俺は指輪を三つと腕輪を一つ、そして黄色い宝石を持ってコルベール先生の元へ戻った。

「気になる物はありましたか？」
「この五つが、取りあえず気になります」
「面白い物を選びましたね・・・・・・ではまずこの指輪からお教えしましょう」

コルベール先生の話を聞くと、俺の持ってきた指輪は、それぞれ人間の三大欲求を司る指輪らしい。
食欲の指輪をすれば、常に食欲が増幅されるが力も増幅する。

性欲の指輪をすれば、常に性欲が増幅されるが頑強さも増幅する。
睡眠欲の指輪をすれば、常に睡眠欲が増幅されるが精神力も増幅する。
これらの指輪は王宮から預かっている物らしく、貰うことはできないとのこと。

「三大欲求を増幅させる代わりに、それに見合う力が貰えるって事ですか・・・・・・因みにどの位増幅されるんですか？」
「そんなに多くはありませんよ？
食欲なら一日六食になる位で、拳で鎧を少し凹ませることができるようになります。
性欲なら・・・・・・まぁあれですよ・・・・・・四六時中大きくなってしまう代わりに、鎧を着けている位の頑強さを得られます。
睡眠欲なら日に一二時間以上寝るようになりますが、魔法を使える回数が二倍近くになります」

なんだろう・・・・・・すっげぇ微妙。
睡眠欲の指輪は良いけど、食欲は効力が微妙、性欲は効力は良いけど代償が・・・・・・。
何でこんなもん作ったんだ？
まぁ貰えないなら、どうでも良いんだけどね？

「次はこの腕輪ですか・・・・・・これは止めておいた方が良いです」
「どうしてですか？」
「この腕輪はつけた者に幸運を運ぶ代わりに、その人の寿命を減らす腕輪なんです」

都市伝説みたいな物出てきたな・・・・・・でもファンタジーの世界だからあり得なくもないな。
だとしたら問題はどれくらいの幸運で、どれくらいの寿命が持って行かれるかという点が気になるな。

「効果と代償はどれくらいなんですか？」
「幸運は些細な物です。
道ばたで銅貨を拾ったり、夕食が好きなおかずになったりという本当に些細な物です。
しかしその代償は一つの幸運につき、一年の寿命が減ります」
「それは・・・・・・酷いですね」

正直デメリットが大きすぎる。
下手すれば銅貨三十枚で三十年の寿命が減るわけだろ？
・・・・・・それは怖すぎる。

「流石に制作者も危険な物だと分かっていたみたいで、この効果を発動させるには腕に着けている本人がキーワードを言わなければいけません」

そうか、それなら効果を知らない人に着けさせて、寿命を減らすっていうのは難しいな。
でも危険な物には変わりないな。

「では最後のこの宝石ですが・・・・・・これはよく分からないのです」
「よく分からない？」
「この宝石が何か分かりませんが、雷を閉じ込めたような宝石なので何かの魔法具なのではないかと思っています。
どうやって使うのか、どこから採掘されたのか・・・・・・謎が多い石ですが、アカデミーで調べてもどんなものか分からなかったために、綺麗な石だという価値しかありません。
そんなこの宝石で唯一分かっていることは、この名前が電気玉と言うこと位で・・・・・・」
「電気玉・・・・・・電気玉？！」
「何か知っているんですか？」
「い、いえ」

マジか・・・・・・そりゃあ調べてもわかんないよな。
だってこの世界にピカチュウいないし、調べようがない。
俺はサトシのピカチュウを結構育てたので、電気玉には大分世話になったよ。
俺がこの世界にポケモンを召還するときには持ち物を持っていないから、正直これが欲しいな。
ピカチュウにこれを持たせれば普通に強いからな・・・・・・。

「じゃあ僕はこれを貰います」
「コレでいいのかい？
でも君は身を守る魔法具が欲しいって・・・・・・」
「何か運命みたいな物を感じたんです。
こう言うのって大事かと思うので！」

「レッド君がそれで良いなら僕は何も言わないけれど・・・・・・」

コルベール先生は不思議そうな顔をしていたが、俺が持ってきた他の物を棚に戻していった。

もしかしたら他にもポケモン関係の道具がこの世界に紛れ込んでいるかもしれない・・・・・少し探してみるか？

俺はそんなことを考えながら、コルベール先生と宝物庫を後にした。

第１３５話　婚姻の詩

電気玉を貰ったことを学院長に報告した俺だったが、学院長はコレを選ぶとは思っていなかったらしく、報告したときの一言目の台詞は「本当にそれでよいのか？」だった。
まぁ確かに用途が分からなければ唯の石だからな。

「何かビビっと来たのでこれで大丈夫です」
「そ、そうか・・・・・・お主がそれで良いならかまわんが。
ところで、お主の妹分に姫様から依頼が来たのは知っておるか？」
「いえ・・・・・・何かあったのですか？」

なんかあったっけ？
もう大まかなストーリーしか覚えてないからな。

「姫様がゲルマニア皇帝の結婚するという噂は聞いたことあるじゃろ？」
「まぁ、生徒たちも話してましたからね」

そういえば、そういうイベントもあった気がするな。
っていうことは始祖の祈祷書のことか？

「姫様がミス・ヴァリエールに依頼したのは、式の時に読む世界を司る四つの系統を讃える詩を考える事じゃ」

「え、でもそういう物は神官などに頼むのではないのですか？」
「・・・・・・・・・姫様じゃからな」
「・・・・・・・・・そうですね」

普通こういうのは、語彙や表現力が豊かな人に任せるのが妥当じゃないんだろうか？
しかも国のトップ同士の婚姻なんだから、大事な儀式だろうに・・・・・・学生に任せちゃ駄目だろう。
記憶が正しければ、ルイズ嬢に詩の才能はあまりなかった気がする。

「ルイズ嬢も大変ですね」
「おそらく初めての事じゃから、困っておるじゃろう。
もし彼女が頼ってきた場合、助けてやってくれんか？」
「それは構わないのですが、僕も詩なんか作ったことないですよ？」
「それでも彼女より人生経験は豊富じゃろ？」

色々あったからなぁ・・・・・・あれ？そういえば火属性の相手と戦ったことないな。
家に戻ったら少しゴウカザル辺りと模擬戦してみるか？
育て終わる前だったけど、Ｌｖ７０はあるから普通に強いはずだ。

「そうですね、それぞれの属性の怖さは知っているつもりです」
「今回怖さは使わんと思うがのぅ」
「こ、言葉の綾みたいな物ですよ！！」

その後少しだけ雑談をして、俺は部屋に戻った。
部屋に戻った俺は電気玉を机に仕舞い、いつも通り授業資料をまとめる。
夏休みも近いし、授業内容も結構進んできたからそろそろ実践の授業を増やそうかなとか考えていると、部屋にノックの音が響いた。

「兄様、ルイズです」
「開いているから、入っておいで」
「失礼します」

部屋に入ってきたルイズは、腕に本を抱えていた。
あれが始祖の祈祷書か？
もしかしたら違うかもしれないし、話を聞いてみるとしますか。

「今日はどうしたんだい？」
「兄様は姫様が結婚すること知ってる？」
「うん、ゲルマニアの皇帝と結婚するようだね」
「そう・・・・・・そうなのよ！
なんでゲルマニアなんかと！！」

ルイズ嬢のゲルマニア嫌いも相当だな。
まぁトリステインの貴族は、基本ゲルマニアを下に見ている部分があるからしょうがないか？
でもキュルケとは犬猿の仲っていうより、喧嘩するほど仲が良いって感じだから何とも言えない。

「この国だけではレコンキスタとの戦争に絶対勝てるとは言い切れなかったからね」
「それもこれも全部レコンキスタが！！」
「それはそうなんだけど、ルイズ嬢はその憤りを聞いて欲しかったのかい？」
「・・・・・・違います」
「じゃあ、どうしたの？」
「えっと・・・・・・兄様にお願いがあって・・・・・・」

ルイズ嬢は両手の人差し指の指先同士をくっつけ、微妙にモジモジしている。
うん、可愛いな！
前世含めて俺には妹なんて居たことないから、こんな感じなのかなっていう予想でしかないけど、妹ってこんな感じなんだろうか？

「なんだい？」
「実は・・・・・・姫様に式で読む詩を考えて欲しいって言われて、一応ここ二日位考えていたんだけど、思いつかなくて、兄様にアドバイスを貰えればなぁって・・・・・・」
「それは構わないんだけど、どこまで考えたのかな？」

俺の言葉を聞いて一瞬ビクッとしたが、ルイズ嬢は一旦深呼吸をして、気合いを入れ直すと詩を読み始めた。

「この麗しき日に、始祖の調べの光臨を願いつつ、ルイズ・フラン

ソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
畏れ多くも祝福の詔を詠みあげ奉る・・・・・・」
「・・・・・・次は？」
「・・・・・・・・・でなの」
「ん？」
「・・・・・・までなの」
「よく聞こえないのだけど・・・・・・」
「ここまでしか考えてないの！！」

羞恥からか、顔を真っ赤にしてルイズが俺に吠える。
それにしても・・・・・・まだ一つも系統に対しての感謝を言えていない。

「式の時に読む詩って、確か四大系統に対する感謝を捧げる詩だったよね？」
「そうなのよ・・・・・・でも思いつかないの！
だから兄様に手伝って貰おうと思って来たの・・・・・・お願い！
私と一緒に詩を考えて！！」

大変そうだな・・・・・・でもまぁ、妹分の頼みだし答えてあげるとしますか！
でも俺自身に詩の才能なんかあるんだろうか？
前世含めて詩なんて書いたことないんだけど、もしかしたらあんまり力になれないかもしれないな。

第１３６話　四大系統を讃える

いきなり俺が考えるのもどうかと思い、一先ず俺はルイズ嬢に案を出して貰うことにした。

「火は熱いから気をつけること」

それは感謝っていうか、使用上の注意だろ・・・・・・。
まさかこのノリで他の系統を？

「水は・・・・・・お風呂とかに使います？」

だから感謝どこ行った？！
これは止めた方が良いな。

「土は」
「いや、もうここら辺で大丈夫だよ？
一緒にゆっくり考えていこうか！」
「・・・・・・うん」

ルイズ自身も、流石に式でこれを読むのはおかしいと思ったらしく、顔を真っ赤に染めて俯いた。
とりあえずさっきの詩のどこが悪かったか伝えることにした。

「まずは四大系統に対する感謝を表す詩と言うことを、念頭に置かなければいけない」
「でも四大系統に対する感謝って言われても・・・・・・」
「（まぁ複雑な感情もあるだろうな）四大系統というより日常の火、水、土、風に対する感謝で良いんです。
ある意味先ほどの詩も言い方を変えてしまえば・・・・・・火は我々に破壊と再生を齎すと直せば、それっぽく聞こえるでしょう？」
「確かに・・・・・・」
「こういった感じに自分がそれぞれの系統に思うことを簡単に考えて、その文面を式の雰囲気に合うような文面に変えると良い詩が出来るはずだよ」
「そうかな？」
「きっとね」

俺とルイズ嬢は、それからしばらく詩を考え続けた。
しかし考えては棄却、考えては棄却を繰り返したが、詩は完成しなかった。
どんどん良くなってきているんだけど、それに伴って理想も高くなってきている。
因みに最後に却下された詩は、

火とは人類の叡智、破壊と再生をもたらす力の象徴

水とは生物への恵み、地に降り注ぐ恵みの雨は人々に活力を与える

土とは全ての母、大地の恵みが途絶えたとき命は滅びゆく

風とは生命の運び手、種子は風に乗り新たな地で芽吹いていく
我ら人類、他の種族に代りここに感謝の意を表する
とこんな感じの詩だった。
正直俺はもうこれでいいんじゃね？とも思ったが、ルイズ嬢がしっくりこなかったようなので没。
ふと外を見てみると日が落ちかけていた。

「もうこんな時間か・・・・・ルイズ嬢、そろそろ夕食の時間だから部屋に戻った方が良いよ？」
「もう？　そうね、今日はここまでね」
「今日は？」

今日だけじゃないのか？
流石に授業の準備とかあるから、結構厳しいんだけど・・・・・。

「駄目？」
「う～ん・・・・・今日みたいに長い時間は取れないけど、それで良いかい？」
「うん！」

まぁそれなら大丈夫かな？
でももうコツは掴んだだろうから、俺が居る意味はないと思うんだけど・・・・・。
客観的意見を求めてるのかな？

「それじゃ、一旦部屋に戻って夕食を頂いておいで」
「うん兄様！　今日はありがとう！」
「いえいえ、どういたしまして」

そういってルイズ嬢は俺の部屋を出て行った。
静かになった俺の部屋で、俺は小さくため息をついた。

「流石になれない事をすると疲れるな・・・・・・」

俺はそう言って、米神を揉みほぐす。
前世からの癖で、疲れたときにやっちゃうんだよなぁ。
あまり意味はないんだろうけど、なんか疲れが取れる気がする。

「さてと・・・・・・そろそろアイガのところに行こうかな？」

やっと機嫌も戻ってきたことだし、何とかしないと夏休みに帰った時大変そうだからな！
ここで気は抜けないぞ！！
俺は気合いを入れ、アイガの下に向かおうと中庭の辺りを通ろうとすると、小さな話し声が聞こえ始めた。
話し声はサイトと・・・・・・シエスタか？
このイベントは、ルイズがサイトを追い出すイベントか？
でも今ルイズは部屋だろう。

なら追い出されることはないかな？
盗み聞きするのも悪いから、俺は特に気にせずアイガの下へ向かった。

「今日はルイズ嬢と四大系統を讃える詩を作ったんだ」
「ジ～」
「ポケモンの世界だと四大系統って言われてもあんまりピンと来ないだろ？
なんてったって十七個も属性あるし・・・・・・」
「ジジ」

しかもポケモンの世界において、風っていう属性は存在しない。
土は地面、岩、鋼辺りだろう。
火は普通にある。
水も水と氷がある。
でも風は・・・・・・飛行が一番近いんだろうか？

「もうそろそろ夏休みも近づいてきてるし、実家に戻ったらまた色々と試してみようかな？」
「ジ？」
「その時はアイガも協力してくれよ？」
「ジ～～」
「いや、なぜ渋る？！
・・・・・分かったよ、岩属性のポケモン呼んであげるから手伝ってくれ」
「ジ！！」

アイガは同じ属性のポケモンと会うのが嬉しいらしく、テンションが上がった。
前にイシツブテを呼んだときは、イシツブテでお手玉してた気がするんだけど・・・・・嬉しいのか？
まぁあのときのイシツブテは楽しそうだったから良いんだけどね？

第137話　同衾

翌日、俺は念のためサイトが追い出されていないか確認しに行った。
あのイベントの時にルイズはおそらく部屋に居ただろうから、きっと大丈夫だろう！

「・・・・・・おはようサイト」
「・・・・・・おはようレッド」
「おはようございますレッドさん」

うん、状況を確認しよう！
俺中庭へ→なんかテント発見→とても嫌な予感がビンビンだが念のため確認→サイトがテントから出てくる。
ここまではまだ予想できたんだ・・・・・・でも何でテントからシエスタが？！
サイトの出てきたテントから出てくるシエスタ。

「サイト・・・・・・君もしかして」
「や、ヤってないぞ？！」
「やる？」
「だとしたら何故シエスタがそこから出てきたんだい？
いや、それ以前に何故君はテントで寝ていていたんだい？」
「それは・・・・・・昨日色々あって外で寝ることになったんだ」
「色々って・・・・・・いや、何も聞かないでおこう」

正直予想はつくし、それにしても何でバレたんだろう？
まさかあの後サイトを探しにでも行ったんだろうか？

「外で寝た理由は分かった・・・・・・でもシエスタがそこで寝ていた理由が分からないよ？」
「信じてくれレッド！
俺は手を出していないんだ！！」
「そんなにはっきり否定しなくても良いじゃないですか・・・・・・」
「手を出す云々じゃなくて、僕は理由を聞いているんだけど？」
「それは・・・・・・」

サイトの話を聞いてみると、まずルイズに頭を冷やすように一晩外で過ごすように言われテントを張ったらしい。
原作と違ってあそこまで怒らなかったのか？
まぁそれは置いといて、なんか眠れなくてテントの中で寝転がっていると、シエスタが来たらしい。
その後サイトはシエスタと夜中まで話し続けていた。
しかしサイトは途中眠気を堪えきれず、寝落ちしてしまったらしい。
で朝起きてみると横にシエスタが居たと・・・・・・。

「シエスタ、君は何故サイト君のテントへ？」
「昨晩サイトさんとお風呂に入った時に、カチューシャを忘れてしまって、それを取りに戻るとテントが見えたので近寄ると、サイトさんがいたので・・・・・・」
「そこまでは納得できたんだけど、なぜ朝まで居たのかな？」
「サイトさんが寝てしまったすぐ後、私も眠気が耐えきれなくなっ

て眠ってしまったんです。
それで起きたら朝になってました」

あり得なくはないのか・・・・・・まぁ別に二人がやることやってたとしても、サイトがルイズ嬢の使い魔を止めなければ問題はない。だけど、一応忠告しておくかな？

「理由は分かった。
しかし僕はここの先生として君たちに注意をしなければならない」
「「・・・・・・はい」」
「まずサイト、女性と学院内で混浴するとはどういう事ですか？
しかも外でなんて、良くないですね・・・・・・君はルイズ嬢の使い魔なのだから、君が問題を起こすとルイズ嬢にも迷惑が掛かる。
それは君の望むことなのですか？」
「違う！！」
「なら、今後の行動はもっと気をつけてください」

サイトは自分の立場がどういう物か、改めて理解したようだ。
これで少しは物事を考えてから行動できるようになって欲しい。

「次にシエスタ、君は夜に男性の寝床に向かうと言うことが、どんなことかしっかり理解した方が良い。
前例がないから分かりませんが、貴族の使い魔と閨を共にしたとなると、どんな罰が下るか分からないのですから・・・・・・」
「・・・・・・はい」
「他の先生に報告はしませんが、もし次同じ事があった場合は学院

長に報告して、公正な罰を受けて貰います」
「「はい」」
「・・・・・・別に二人が付き合うということになっても、私は文句を言いません。
ですがここは学院、貴族の子息たちの学舎なのです。
そこで淫行を行うと最悪親御様が出てくる可能性があります。
そうなればヴァリエール家の使い魔であるサイトは大丈夫でしょうが、シエスタは・・・・・・分かりますね？」
「そ、そんな・・・・・・分かった！
気をつける！！」
「分かりました・・・・・・」

サイトとシエスタは、最悪の状況を想像出来たようで、顔を青くしている。
俺としてもこういう脅しみたいな形で言いたくはなかったが、これも事実だから・・・・・・二人には気をつけて欲しい。

「どうやら二人とも分かって貰えたようで良かったです」
「レッド・・・・・・教えてくれてサンキュウな？」
「ご心配かけてすみません」

二人が俺に頭を下げてきた。
俺は謝罪が欲しい訳じゃない。
唯俺を友人と言ってくれるサイトと、シエスタにちょっとした注意をしただけだ。

「まぁ今度から気をつけてくださいね？」
「「はい！」」

その後は少しだけ雑談すると、シエスタが仕事の時間になったために、学院へと戻っていった。
この場には俺とサイトしか居ない。
さぁて、少しだけ追加説教しますか！

「サイト」
「ん？　どうしたんだ？」
「君は昨日ルイズ嬢を怒らせたようだね。
今回は、まぁ少しお説教して終わりにしてあげるけど、もし君がルイズ嬢を本気で悲しませた場合・・・・・・僕は君を許さないよ？」
「・・・・・・あぁ、分かってる」
「分かってるなら良いんだ・・・・・・まぁ、さっきも言ったけど、僕は君とシエスタが付き合うのに何の文句もない」
「いや、俺たちはそんな関係じゃないですよ？！」
「いやぁ、ごめんごめん。
少し下世話だったね」

ほんと・・・・・・俺何言ってんだろ？
俺何様だよ・・・・・・あぁぁぁ自己嫌悪！！
その後は特に話すこともなく部屋に戻って用意をすると、そのままいつも訓練する場所へと向かった。

第138話　宝探し

いつもの訓練も終わり、三人に解散を伝えようとしたのだが、ギーシュが俺に話しかけてきた。

「レッドさん、出来れば数日旅行に行きませんか？」
「いきなりだね・・・・・流石に授業もあるから厳しいと思うよ？」
「やっぱりそうですよね・・・・・・」

ギーシュは落胆したように、若干項垂れた。
でも何でいきなり旅行なんて？

「旅行ってどこに行く気だったんだい？」
「宝探し」
「キュルケに誘われてね・・・・・・それに僕も男だし、宝探しには少し興味があるんだ。
もし見つかればモンモランシーへのプレゼントにもなるから気合いは十分さ！」
「タバサ嬢も行くのかな？」
「・・・・・・・・・行くことになった」

何だ？
行きたくなかったのか？
そんな疑問を抱いていると、それの答えをサイトが述べた。

「タバサは最初断ってたんだけど、キュルケがどうしても来てくれって頼み込んだんだよ」
「何で断ってたんだい？」
「そんなのレッドと「少し黙る」イエッサー！」
「僕？」
「何でもないんだ、きっとそういうことにしておかないと俺がヤバい」
「よく分からないけど、分かったよ」

何でタバサはサイトに杖を向けたんだ？
言えないわけでもあるんだろうか・・・・・・なんか少し仲間はずれ間があって微妙な気分だ。

「ならその宝探しに行く人はキュルケ、タバサ嬢、ギーシュ、サイト、ルイズ嬢の五人かな？」
「いや・・・・・・あとシエスタが一緒に行く」
「シエスタ？
何で彼女が一緒に？」
「シエスタがどうしても来たいって言うし、それに料理を作れる人がいなかったからある意味丁度良かったんだよ・・・・・・」

いや、それ後付けの理由だろ？
だってサイト、あからさまに俺の方見てねぇし。
でもデートにしては少し危ないんじゃないか？

「宝探しと言うことは、危険もあると思うんだけど・・・・・・シエスタは大丈夫なのかい？」
「確かにシエスタはメイドだし、身を守る方法とか無いと思ってたんだけど、どうやら昔狩りとかしたことがあるみたいで、結構動けるんだよ」
「そうだったんですか」

タルブのイメージはワインしかないから、あんま分かんないんだよなぁ。
それにイノシシとかなら別に大丈夫だろうけど、オークとか出てきたら危ないよな。
まぁメイジ四人いるし、サイトもいるから大丈夫だろうとは思うんだけどね？
一応助言しておくか。

「宝探しに行くことは分かりました。
ですが念のために一つ言っておくことがあります」
「なんかあるのか？」「どうかしましたか？」「？」
「君たちだけなら、恐らく問題は無いでしょう。
メイジ四人、剣士一人なら殆ど危険は無いでしょう。
ですが守る対象が居ると話は変わります。
思考が守る対象にも向けられるために、思わぬ攻撃を受けるかもしれません」

良くある話だと、恋人守って自分が死ぬような展開が起こるかもしれない。

シエスタはまだ恋人じゃ無いようだが、サイトならやりかねない。
何てったって七万に突撃する度胸を持ったやつだからな！
恐らくガンダールヴの反射速度なら、不意打ちされても対応しきれるような気もするが、戦闘において絶対は無い。

「故に例えたった一体の敵だったとしても、決して油断しないように。
敵が一体なら、周囲に他の敵が潜んでいるかもしれないという考えを常に持っていなさい」
「分かった」「分かりました」「（コクリ）」

何で俺がここまで心配するかと言えば、正直このイベントでどんなことが起こるか覚えていないんだよ・・・・・・。
唯一覚えているのは、タルブで零戦を手に入れる位だ。

「ところで宝探しには、いつ出発するんだい？」
「一応用意があるから、明日の朝に行くらしい」
「・・・・・ちゃんと学院長に許可は取っているんだろうね？」

これがないと唯のサボりになるからなぁ。
まぁ貴族だから様々な理由で授業を休む事がある。
だから届けさえ出してしまえば、特に問題はない。
しかしこれを出さないと、下手をすれば親に連絡が行く。
タバサやキュルケはあまり問題ないかもしれないけど、ルイズ嬢やギーシュは不味い。
カリーヌさんは特にヤバい。

あの人が怒ると若干地形が変わる可能性があるんだよ・・・・・・・
もうヒューマノイドタイフーンもビックリだよ。

「もちろん取ってあります」
「それなら問題ないですね。
ですがいくら許可を取っても、授業の遅れをどうにか出来るのは自分だけなので、出来るだけ早く帰ってくるように・・・・・・分かりましたね？」
「「「ハイ」」」
「では僕は出来る限り怪我をしないで帰ってくるように祈ってます」

正直着いていってあげたいと思わなくもないが、他の生徒たちの授業を無視するわけにはいかない。
取りあえずイレギュラーが起こらないことを祈るしかないな。
解散してそれぞれの部屋へと戻っていく彼らの背中を見ながら、俺は旅が無事で終わるよう祈った。

第１３８．５話　生き物を殺すと言う事（前書き）

難産だ・・・・・・そしてクオリティが・・・・・・

第１３８．５話　生き物を殺すと言う事

～サイト　ｓｉｄｅ～

宝探しって聞いて、面白そうだから来たんだけど・・・・・・。
そうだよな、ここファンタジーの世界だもんな！
モンスターも居るよな！

「サイト！　ボォっとしてないでそっちのをどうにかしてくれ！」
「分かってる！！」

俺たちを取り囲んでいるのは、オークの群れ。
オークっていうのは初めて見たけど、本当に豚みたいな顔をしてるんだな。
後すげぇ臭い・・・・・・ルイズたちは気にならないんだろうか？

「面倒くさいわねぇ・・・・・・ファイアー・ボール！」
「ジャベリン」
「こんなのアイガとの模擬戦に比べれば・・・・・・ブレッド！」
「まぁ頭を狙えば問題ないわね！」

キュルケは火の魔法で焼き、タバサは氷の槍で貫く。
ギーシュは岩の弾丸で貫き、ルイズは頭を爆破していく。
俺は・・・・・・一体のオークと戦闘している。

みんなが魔法を使ってドンドンオークを倒していく中で、俺はたった一匹のオークを相手し続けている。

「クソ！」
「相棒、落ち着けよ」
「だって俺だけが一匹も倒してないんだぜ？！」
「何にでも相性ってのはあるもんだ」

俺だってこいつをとっとと倒して他のオークを倒したい。
俺の後ろで震えているシエスタのためにも早くこいつらを倒したい！
でもどうしても人型をしている奴に斬りかかる踏ん切りがつかない。
このままじゃ駄目だって分かってるのに！！
そんな風にイライラしていた所為で、俺はもう一匹が近づいてきているのに気づけなかった。
気づいたときにはオークはシエスタに棍棒を振りかぶっていた。
その光景を見て、背中に氷柱が差し込まれた様な気がした
あのままじゃシエスタは・・・・・そう考えると、俺の体は勝手に動き出した。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」
「サイトさん？！」「相棒？！」

俺は目の前に居たオークを棍棒ごと叩き斬り、シエスタを攻撃しようとしたオークの首を切り落とした。
その二匹を斬り殺しても俺は止まらない。
目に見えるオークに斬りかかっていく。

そのままどれだけの時間が経っただろうか・・・・・・数時間にも感じたし、数秒にも思えた。
気付けば周囲にオークは居なかった。

「サイト、やるじゃないか！」
「流石ダーリン！」
「意外」
「お疲れ様」

魔法使い組も周囲に敵がいなくなったために、こっちに来たようだ。
しかし俺はそれどころじゃなかった。
俺は自分の手に残る、敵を殺したときの感覚。
オークたちの断末魔。
それが頭の中をグルグル回り続ける。
そんな俺の異常に気付いたのか、みんなが心配している様な目を向けている。

「あぁ・・・・・・ありがとう」
「あんた・・・・・・顔色悪いわよ？」
「ダーリン具合悪いの？」

ルイズとキュルケが、しゃがみ込んだ俺の背中を擦ってくれている。
正直すごく助かる。
俺は今にも吐くところだったから・・・・・・。

「あなた・・・・・・実戦は初めてだったの？」

タバサの問いかけに、俺は俯きながら首を縦に振った。
恐らく彼女が聞いている実戦とは、殺し合いのことだろう。

「初めてだったのか・・・・・・なら具合悪くもなるかもしれないな」
「それならそうと、言ってくれれば良かったのにぃ」

俺としては、自分自身がこんなに精神的ダメージを受けるとは思ってなかったんだよ・・・・・・。
いや、分かったつもりになってたんだ。
命を奪うって事を甘く見ていた。
気がつけば俺の口は心情を漏らし出していた。

「斬ったときの感触が消えないんだ・・・・・・」
「相棒・・・・・・」
「あいつらの苦しむ顔が消えないんだよ！！」
「サイトさん！！」

突然俺の視界が真っ暗になった。
シエスタが俺の頭を抱きかかえてくれたみたいだ。
あぁ・・・・・・暖かい。

「サイトさんは悪くありません！
サイトさんは私を守ってくれたんですから！！」
「でも俺は！」
「もしあそこで助けて頂けなかったら、私は今頃死んでいたんです！！」

シエスタの叫びを聞き、俺はさっきの事を忘れることは出来なくても、振り切ることが出来た。
いや・・・・・振り切った訳じゃない。
唯少しだけ気持ちが楽になったんだ。
もしあそこで俺が斬るのを躊躇していたら、シエスタは死んでいたという事実があるから・・・・・それがオーク達殺す理由として、自分を納得させる事が出来た。
正直自分勝手な理由だろうけど、こう考えておかないと俺は潰れてしまいそうだ。
これからもこういった戦闘はあるだろう・・・・・早く慣れないとな。

第１３９話　青銅の薔薇の憂鬱（前書き）

久しぶりに書いたんだけど、完全にスランプ入りしました・・・・・・

マジで書けないぞ?！

タグ通りに、マジで不定期になります

一応次の話は書けそうなので、明日も更新しますが・・・・・・それ以降は不規則になります

本当に申し訳ありません

第１３９話　青銅の薔薇の憂鬱

サイト達が宝探しに出かけた翌日。
俺はいつも通り授業を行っていた。
タバサ達の席が空席になっている以外は何も変わりなく・・・・・・
いや、一人様子がおかしい子がいるな。
他の生徒が俺の講義を聴いてメモを取ったり、俺の言葉に頷いたりする中、その子は窓の外をボゥっと見ている。
一応何度か注意はしたけど、やっぱり授業に身が入らなかった。
授業が終わり、教室を出ようとするとその子が俺に話しかけてきた。

「レッド先生、少しお話があります！」
「どうかしましたか、モンモランシ嬢。
授業に集中できていなかったようですが・・・・・・」
「それに関してはごめんなさい」

俺に話しかけてきたのは、授業中ソワソワとしっぱなしだったモンモランシーだった。
彼女は授業に集中していていなかったことに対し、しっかり謝罪してくれた。
まぁ普段はしっかり聞いてくれる真面目な子だからなぁ。
今日集中できなかったのは、恐らく今ここに居ない子達の事が気になったんだろう。
・・・・・・それにしてもギーシュは話していかなかったのか？

「聞きたいことがありますので、後でお部屋にお邪魔しても大丈夫

でしょうか？」
「大丈夫ですよ？
では後ほど僕の部屋で話を聞きましょう」

俺はそういって教室を後にした。
廊下を歩いている間、俺は今頃サイト達がどうしているかなとか考えながら部屋へと歩みを進めていった。
部屋に戻り、軽く掃除を行ってモンモランシーが来るのを待つ。
こんなところギーシュが見たら変な勘違いしそうだな。
部屋の掃除が終わる頃、丁度コンコンというノックの音が聞こえてきた。

「開いてますよ？」
「失礼します」

今思えば彼女がこの部屋に来るのも、大分久しぶりだなぁ。
それだけギーシュとの仲が進んでいるのかな？

「さて、じゃあ早速だけど話って何なのかな？」
「えっと、ギーシュ・・・・・・じゃなくて！！
今日居なかったルイズ達はどこに行ったんですか？！」

・・・・・・仲が良さそうで何より。
別にギーシュがどこに行ったかで良いと思うんだけどなぁ。
顔を真っ赤にしながら訂正してるから、何も言わないけどね？

「ギーシュ達は宝探しをしに行ったみたいですよ？」
「宝探し？」
「どうやらキュルケが宝の地図を手に入れたらしくて、ギーシュ達はそれに誘われたみたいです」
「そうだったんですか・・・・・・」

ギーシュが誘わなかった理由は、たぶん危険があるかもしれない場所に連れていくことが不安だったのだろう。
まぁモンモランシーも何となく分かっているからか、何も言わないな。
微妙に不機嫌そうだけど・・・・・・。

「恐らく数日もすれば戻ってくると思いますよ？」
「そうですよね！」
「それに、もしかしたらすごい宝物を見つけて、モンモランシ嬢にプレゼントしてくれるかもしれませんよ？」
「そうだったら・・・・・嬉しいなぁ」

モンモランシ家は裕福ってわけじゃないから、あんまり宝物とかに縁がなかったからな。
女の子としては、宝石とかで着飾ってみたいとか考えたことがない訳じゃ無いはずだ。
もしギーシュが何か見つけて、彼女にプレゼントしたら好感度は鰻上りだな。

「話は終わりかな？」
「そうですね・・・・・・あ！今日の授業で聞きたいことがあったんです！」

そこからはしばらく講義の解説や、質問への応答などをしてからモンモランシーは自分の部屋へと帰っていった。
彼女が帰るのを見送ると、俺はそのまま自分の机に向かった。
モンモランシが疑問に思った部分の講義資料に手を加え、より分かりやすくなるように書き換えるためだ。
俺がミスト先生の資料に助けられたように、俺の次にこの学院に来る教師がこの資料でより分かりやすい講義が出来るようにしてあげたい。
まぁ普通はどっかの貴族の家庭教師とかが引き継ぐんだろうから、問題ないんだろうけどね？

作業を始めて約二時間弱。
改めて見ると、もっとここをこうした方が良いんじゃないか？
俺の説明に不備はなかったかとか考えると、時間はすぐに過ぎていく。
作業が終わった頃には日は落ちてしまっていた。

「そろそろ訓練の時間かな？」

俺は朝に自分自身の訓練を出来なくなったので、夜に森の中で行っている。

主な内容は煉獄の継続時間を長くしたり、新しいネタ技の練習だったりするんだけど・・・・・・。
ネタ技は基本的に漫画やゲームの技を模倣するわけで、難易度が高い技ばかりなんだよ。
魔法を使う技はそうでもないんだけど、今まで格闘技系の技は習得するのは結構大変だった。
正直煉獄はコンビネーションを覚えるのと、攻撃速度さえどうにか出来れば割と難しくない。

問題はバキとかに出てくる出来そうにない技の模倣が難しい。
剛体術は何とか出来るようになったが、未だ六式は出来る気がしない。
指銃、鉄塊は装備を使えば出来なくもないけど・・・・・・嵐脚、剃、月歩辺りはマジで出来る気がしない。
紙絵だってバキで言う消力みたいな感じだから、簡単じゃない。
いくら脱力しても出来ないぞ？
ＣＰ９って凄かったんだな！！
夏休みに入ったらもうちょっと訓練に力を入れようかな？

第139話　青銅の薔薇の憂鬱（後書き）

修正

第139．5話　ガンダールヴについて

～タバサ　ｓｉｄｅ～

宝探しを始めて二日目になった。
正直あまり来る意味がなかったと思う。
これだったら学院でレッドと一緒に訓練していた方が・・・・・・・。
因みに今は５つ目の地図を基に移動している最中だ。

「シエスタ、大丈夫か？」
「ハイ！」
「そっか・・・・・・良かった」
「アンタ、それ何回聞くのよ？！」
「え？　そんなにいっぱい聞いてるか？」
「もう８回目よ！」

何で彼がこんなに心配しているのか分からない。
彼女が少し転んで擦り傷が出来た程度なのに・・・・・・。
転んだ理由は、オークの襲撃に驚いたからなのだけど、それに逆上した彼はオークに突撃したのは驚いた。
つい先日オークを斬って顔を青くしていたとは思えない動きだったけど、オークを素早く仕留めて彼女の状態を確認したら、また顔が青くなっていた。
彼はなんなんだろう？
あのインテリジェンスソードも気になるが、それ以上に彼の戦闘時の動きは異常だ。

動きは素人、筋力もそれほどではない・・・・・・しかしスピードや剣速は異常に早い。
そして剣の振り方はまるで達人のようだが、フェイントは無く剣線を読みやすい。
彼は歪だ。
いくら考えていても分からないなら、直接聞いてみよう。

「あなたは何？」
「え、いきなり何だよ？」
「あなたの戦闘能力はおかしい。
剣の達人のようで、素人のようでもある。
どこで剣を習ったの？」
「俺、剣を習った事なんて無いぞ？」
「そうなのかい？！」

いきなりギーシュが会話に割り込んできた。
彼はサイトと模擬戦を行っているから、余計に信じられないのだろう。
他の人も気になっている様だ。

「確かに相棒は剣を使ったこと無いんだろうな！
なんてったって俺の持ち方すら知らなかったからな！」
「当たり前だろ！
俺が居たところじゃ、剣を持つのにも国の許可がいるんだよ！」
「そんな国聞いたことない・・・・・・」

王宮内での武装禁止なら分かるけど、そういったわけじゃなさそう。
そういえば彼はどこから来たんだろう？

「たぶん知らないだろうけど、日本だよ・・・・・・」
「「「「日本？」」」」
「俺は月が一つしかない世界から、この世界に来たんだよ」

月が一つしかない世界なんて聞いたことがない。
嘘でもついているんだろうか？
例え嘘でも、それより大事なことがある。

「それが本当か嘘かは知らない。
でも聞きたいことは何故剣を使ったことがないのに、あんなに剣を使えるのかと言うこと」
「あぁ、そのことか・・・・・・なんか武器を持つと、その使い方が頭に思い浮かぶんだよ。
こっちの世界来てからだけどな？」

と言うことは召還されてからと言うことになる。
ならルーンの効果だろうか？
私は彼の手にあるルーンをジッと見てみた。
あれ？　このルーン何処かで・・・・・・。

「あったり前だろう！
相棒は使い手なんだからよ！」

「使い手ってなんなのよ？」
「なんでぇ、そんなことも知らねぇのか？
ガンダールヴのことに決まってんだろ！」
「「「「ガンダールヴ！？」」」」
「ガンダールヴって何ですか？」
「ガンダールヴって言うのは、あらゆる武器を使いこなすと言われている伝説の使い魔のことよ・・・・・・」
「サイトさんって凄い人だったんですね！」

それなら納得がいく・・・・・・剣を使いこなすことは出来るけど、フェイントが出来ないのは剣とは関係ない部分だからなのだろう。
神の左手と呼ばれる伝説の使い魔。
でも彼はその力をまだ使いこなせていない。
故にワルドやギーシュに勝てなかった。

「デルフ・・・・・それあんまり話しちゃ駄目だって学院長に言われたじゃねぇか」
「そうだったか？」

それはそうだろう。
伝説の使い魔が居ると知られれば、軍がスカウトに来る可能性がある。
それに彼は平民だから、軍に入ったら死ぬまで最前線行きになるかもしれない。
恐らくそれを避けるために口止めしたはず。

「気をつけた方が良い」
「ん？」
「あんまり大勢にその事が知られると、良くないことになるかもしれない」
「良くないことって・・・・・・まぁ良く分かんないけど、気をつけるよ」

いざとなったらヴァリエール家がどうにかするかも知れないけど、注意することは無駄じゃない。
その後は剣を使っているときの感覚等を聞かれていた。
因みに一番質問の回数が多かったのはギーシュだった。
そうして話しながら地図に書かれている場所へ到着した。
しかしそこにあったのは空の木箱だけだった。

「ここも外れ・・・・・本当に宝なんてあるの？！」
「知らないわよ！」
「そんな簡単に本物の宝の地図なんて見つからないさ」

確かにそんな簡単に手に入るなら、既に他の人に見つけられているだろう。
そのまま私たちは最後の地図を見た。

「次で最後ねぇ」
「最後の宝は・・・・・・竜の羽衣っていうみたいね」
「竜の羽衣？！」
「何だ？　シエスタ、知ってるのか？」

「知ってるも何も、私の村にありますよ？！」
「「何ですって？！」」
「本当なのか？」
「えぇ、正確に言えば私の祖父のものだったんですけど、今では村に納められています」
「それじゃあ、勝手に貰っていくわけにはいかないわね」
「確かに勝手に、というのは困りますけど譲る条件をこなして貰えば譲ることは出来ますよ？」
「それ本当？！」
「まぁどちらにせよ、その竜の羽衣を見てから決めようぜ」
「それもそうね・・・・・シエスタ、案内をお願い」
「分かりました！」

そうして私たちは竜の羽衣があるタルブの村へと向かって歩き始めた。

第１４０話　竜の羽衣

今朝方宝探しに行ったメンバーが帰ってきた……ゼロ戦と共に。
パッと見たところコルベール先生のテンションがおかしい以外には、特に変わったことはないようだ。
いや、サイトの顔つきが少し変わったか？
俺は帰ってきたルイズ嬢達を労う為に校門の方へと歩を進めた。
俺が校門に着くと、彼らは雑談をしていた。

「みんなお帰り」
「兄様ただいま！」
「「「「レッド（さん）ただいま！」」」」
「ただいま」
「皆怪我とかはなかったかい？」
「擦り傷位はあったけど、特になかったぜ！」
「そっか、それは良かった」

まぁ、見た感じ大丈夫だとは思ったけどな。
取りあえずゼロ戦に頬ずりしている頭が眩い人はスルーして、どんなことをやったか簡潔に教えてくれそうなタバサに話を聞いてみることにした。

「宝探しはどうでした？」
「何もなかった」
「そうでしたか……ですが何もなかったのなら、この鉄の塊はどうしたんですか？」

「タルブの街で譲ってもらった」
「何かの道具ですか？」
「空を飛ぶ事が出来るって彼が言ってた」
「これが空を飛ぶんですか？！」

流石に飛行機って言うわけにもいかないし、こういうしかないんだよな。
あぁ違和感のない演技出来てるかな？
俺がタバサとゼロ戦について話していると、コルベール先生が声を張り上げた。

「分かりました。
少し時間が掛かるかもしれませんが、やってみましょう！」
「コルベール先生、どうかしましたか？」
「レッド先生……このゼロ戦という乗り物が飛ぶのには，がそりん，と言う燃料が必要らしいのです。
それをサイト君に錬金してくれと頼まれましてね。
いやぁ、鉄で出来たこれがどの様に空を飛ぶのか今からとても楽しみですよ！！」

うわぁ……顔が緩んでるよ。
キュルケとギーシュ、ルイズ嬢はそれを見て引いている。
科学者として、発明家としては優れているんだろうけど、もう少し周りを良く見た方がいいぞ？

「ところでタバサ嬢、他に気になることはありましたか？」

俺がそう聞くと、タバサは少し眉をひそめた。
なんだ？
俺はタバサの言葉を少しの間待つことにした。
すると彼女は小さな声で呟くように言った。

「彼が初めて実戦を経験した」
「……そうですか、相手はなんでしたか？」
「オーク」
「人型ですか……」
「彼は戦闘後顔を青くしていた」
「初めての実戦ですからね、しかし今の彼は何時も通りに見える。
何か自分を納得させるだけの理由を見つけたのでしょうか？」
「彼がオークを斬った時は、シエスタが危険だったから咄嗟にと言った感じだった」

と言うことは、割り切ったのか？
それとも殺さなければ守れなかったという免罪符で、自分は悪くないと思っているのだろうか？
もし後者なら……どっちにしろ一回、確り話をしないといけないな。

「後彼はガンダールヴらしい」
「ガンダールヴ……あの始祖の使い魔の一角ですか？」
「武器を持つと使い方が頭に入ってくると言ってた」
「そうでしたか、道理で彼の身体能力が身体に見合っていないわけだ」

「恐らくガンダールヴの能力は武器の使用方法と身体能力の強化」
「流石は伝説の使い魔ですね」

俺は一応ガンダールヴだってことは知ってたけどね？
コルベール先生と学院長も知ってるし。
っていうかまだ知られてなかったのか……。

「レッドなら分かると思うけど、この事は……」
「分かっていますよ、他の人に喋らなければいいですよね？」

俺自身知られたくないことがあるから、人のことも話さないさ。
でもルイズ嬢はアンリエッタ姫に話してしまう気がする。
友達らしいしな。

「そう言えば宝探し中は訓練どうしてましたか？
やはり出来ませんでしたか？」
「何時も程じゃないけど、基礎訓練だけはやった」
「ですが実戦も何度かあったのなら、おそらく問題ないでしょう」
「オークだと実戦と言うより……」
「オークを相手にしても、一つの経験には成りますよ？
オークは人型ですから、弱点も人に近い。
確かにキュルケの様に何処に当たっても、結果として全身が燃える火ならあまり意味はありませんが、水は攻撃力が低いものが多いですから、急所を狙わなければ仕留めることが出来ない時もありますから。
タバサ嬢も一撃で仕留められなかった敵もいたのでは？」

「……何匹か」
「一撃で仕留めなければ、思わぬ反撃を受けてしまうかもしれません。
今後はそういったところに気をつけてみてください」
「分かった」
「さて、他の人達もぼちぼち部屋に帰り始めましたし、タバサ嬢も疲れているでしょう？
今日はゆっくり休みなさい」
「……ありがとう」

そう一言言ってタバサは自身の部屋へと向かった。
俺はゼロ戦を撫でまわしているコルベール先生に一回ため息をついて、部屋へと戻った。

第１４１話　空を飛ぶために（前書き）

卒論を取りあえず仮提出したけど、まだ気を抜けない！
次は発表リハがあるんだよなぁ……

第１４１話　空を飛ぶために

夜、俺は何故かコルベール先生の部屋に居た。
何でこうなったかと言うと……。

～回想～

「レッド先生！」

そう言って誰かが俺の部屋に突然入ってきた。
頭部に光が反射して、誰か判別できない……いや、反射しているってことは？

「コルベール先生ですか？」
「何を言っているんですか？！
私以外の誰に見えるのですか？！」
「すいません」

だって顔見えないんだもの。
っていうか何の用だろう？

「ところで何か急いでいたようですが、どうかしましたか？」
「そうだ！！
レッド先生、少し手伝っていただきたいことがあるんです。
ついてきてください！」

そう言うとコルベール先生は早足で俺の部屋から出て行った。
正直いきなりのことで何が何だか分からなかったから、少し茫然としていると、足音が戻ってきた。

「何をしているんですか！
急ぎましょう！！」
「正直何が何だか……」
「サイト君が持ってきた，ぜろせん，とか言う乗り物の燃料になる，がそりん，を錬金したいのです！
レッド先生も気になるでしょう？！
それにサイト君にも頼まれましたし」

あ～……そう言えばガソリン殆どなかったんだっけ？
にしてもそんな簡単にガソリンなんて錬金出来るもんなのか？
ガソリンを作る方法は、原油を熱し、沸点の低いガソリンを蒸発させて分離させるって言うのが正攻法なんだけど、この世界に原油あるんだろうか？
原油があるなら出来なくもないだろう。

「分かりました、手伝います。
ですがガソリンが何からできているかは分かったんですか？」
「ハッキリとは分かっていませんが、原油に近いものなのではないかと思うのです」

原油あるんだ？
だとしたら出来るかもしれないな。

「取りあえず私の部屋に来てください！」
「はい」

～回想終わり～

こんな感じでコルベール先生の部屋に連れてこられたわけだけど……汚いし、油臭い。
床には蛇の玩具みたいなものが転がっているし、机の上は何かの設計図だらけだ。

「さぁこれです！」
「あ、はい」

机の上に乗っていた設計図などを床に落として、瓶に入ったガソリンを置いた。
ホントに少ししかないな。

「それでこのガソリンはどれくらい必要なんですか？」
「樽で３つ分は必要ですね」
「樽３つ分？！」

結構な量だな……それだけの量を錬金するとなったら、確かにコルベール先生だけだと結構キツイかもしれないな。
原油は樽に入った状態で部屋の隅っこに積み上げられている。
これは時間が掛かりそうだな。

「そう言えば原油に近いものと言うことは分かったと言ってましたけど、どうやってガソリンを作るんですか？」
「取りあえずこの，がそりん，というものは気化する温度がかなり低いことが分かっているから、原油を蒸発させてみようと思うんだ。それで，ガソリン，に近いものが出来たら、錬金出来ると思う」

すげぇ！
一発でガソリンの作り方を当てたぞ？！

「ですが原油は直ぐに火がついてしまいます。
なのでゆっくりと温度を上げて行きます。

幸いにも私は火のメイジですからね」

そう言うとコルベール先生は手際良く準備を始めた。
そこからはトライ&エラーの繰り返し。
温度調節が難しいらしく、直ぐに引火してしまう。
一回気化したガソリンもどきに引火して軽い爆発も起こった。
そしてついに……。

「出来た……出来たぞ！！」
「やりましたね！」
「そうか、この温度で原油を気化させれば良かったのですね」

凄く嬉しそうだな。
でもこれ3樽分作らなきゃいけないんだけどな。

「よし、これで錬金することが出来るよ！
レッド先生手伝ってください！」
「はい」

それから俺とコルベール先生は時間も忘れてガソリン作りを行った。
流石に朝まで掛かりはしなかったけど、夜中までは掛かってしまった。

「これで最後です、錬金！

ふぅ、これで3樽分出来ましたね。
レッド先生、ありがとうございます」
「いえいえ、少し大変でしたが面白かったですし、あれが飛ぶ姿を見てみたかったですから」

流石にゼロ戦が飛んでるところなんて見る機会早々ないからな。
やっぱり戦闘機が飛んでいるところって何かカッコいい感じがするんだよね。

「ふぁ～あ、流石に疲れましたね。
今日もう解散しますか。
そして明日，ぜろせん，にガソリンを入れましょう」
「そうですね……僕も疲れましたし」
「それじゃあお休みなさい」
「お休みなさい」

俺は少しふらつきながら部屋へと戻って行った。
もう眠気がピークだよ……

「それにしてもコルベール先生は、発明家としては一級だな。
自力でガソリンの作り方までたどり着いて、蒸気機関とかの構想を考えだしたんだから」

現代に居たらノーベル賞とか取れる発明しそうだ。
でもこの世界だと変わり者扱い……この世界では早すぎるってこと

かな？
まぁ魔法が発達している分、科学の発達が遅いのはしょうがない部分があるかもしれないけどな。

「さてと……軽く訓練して寝ようかな？」

俺は頬を軽く叩いて気合を入れると、いつもの訓練場所へと向かった。

第１４１話　空を飛ぶために（後書き）

修正

外伝　エルザの日常（前書き）

微妙に久しぶり！
リクエストがありましたので、エルザの話を書きます
ロリババアは都条例でセーフｏｒアウト？
人外ヒロイン駄目になったら俺の心がギガドリルブレイク！！

外伝　エルザの日常

私の朝はおじいちゃんと一緒に朝ご飯を食べることから始まる。
おじいちゃんはあんまり料理得意じゃないみたいで、基本的には私が料理をしてる。

「エルザ、今日の朝ご飯は何かな？」
「今日はパンとスクランブルエッグ、後はハムかな？」
「それは楽しみだ」

私はパンを焼き、卵をかき混ぜる。
そうして朝ご飯を作り終えると、お皿に載せて食卓についた。
そのまま食事を終え、食器を洗っているとおじいちゃんが話しかけてきた。

「今日は久しぶりに町に行こうか」
「ホント？！」
「夕方に行くから、用意しておくんだよ？」
「うん！」

おじいちゃんはそう言うと、村の開合に向かった。
村長だからこういうの多いんだよね。
私は日中あんまり外に出たくないから、基本的に家のお仕事をしてる。
吸血鬼だから夜の方が動きやすいんだけど、夜を生活の中心に動く

と町の人たちに怪しまれちゃうからね！
それに日の光を浴びてるとダルくなってきちゃうんだよね。
さ～てっと……まずはお洗濯からかな？

「ふぅ～、これで最後っと！
そろそろおじいちゃん帰ってくるかな？」

お洗濯を終えて、お掃除も今の窓ふきでお終い。
後はおじいちゃんが帰ってきたら、町に行くんだよね……楽しみだなぁ。
そんなことを考えていると外から足音が聞こえてきた。
この足音は……。

「ただいまエルザ」
「おかえりなさい！」
「いい子にしてたかな？」
「もう！　子供扱いしてぇ！」
「おぉスマンスマン」

おじいちゃんは良くこんな風に私のことを子供扱いする。
私、４０年以上生きてるんだけど……まぁいいけどね。
おじいちゃんが私のこと孫みたいに思ってるのは分かってるし、私も嫌ってわけじゃないし。

「さて、それじゃあ町に向かうとするか」

「やった！」

町に行くには定期的に来る馬車便に乗るのが一般的。
私とおじいちゃんも馬車に乗って町に行く。
何時も通りなら乗って日陰になっている場所に陣取るんだけど、今日は先客がいたようだ。
あれ？……なんか見覚えがあるような気がする。
下を向いていて顔が見えないんだけど、ちょっと太めの筋肉質で頭がツルってなっている人。

「もしかして……チャン？」
「あぁ？誰だ、俺の名前を呼ぶの……は？
マイエンジェル？！」

エンジェルはないでしょ……私吸血鬼なんだけど？
それにしてもなんでチャンさんがここに？
そう思っているとおじいちゃんも同じ疑問を持ったみたい。

「チャンさんはお仕事ですか？」
「あ、あぁ」
「他の方は一緒じゃないんですね」
「今回の仕事は俺一人で十分な内容だったからな。
そういうあんた達は何処に行くんだ？」
「ちょっと町まで買い物に行こう「じゃあ俺が護衛してやるよ！」
……かと」
「最近は町にも物騒な連中がいるからな！」

チャンも見た目物騒なんだけどね。
背中には鉄球背負ってるし、鎖も巻いてる。
まぁ今から行く町は黒の鉄球団の良く行く酒場があるみたいだから、
大丈夫だと思うけど……絶対目立つよね？

「いえ、でも……」
「遠慮すんな！」

おじいちゃん断れなそうだなぁ。
チャンがいい人なのは分かるんだけど、偶に私のことジ～っと見てるのは止めてほしいかも？
結局おじいちゃんはチャンに押し切られて、３人で町を巡ることになった。

町に着いた私たちは、まず村じゃ手に入らない調味料や食材を買った。
塩や砂糖は行商人が持ってきてくれるんだけど、香草とかは村じゃ手に入らないんだよね。
食材も買い終えて、少し自由な時間が出来たから、おじいちゃんはお酒を見に行きたいって言い出した。
私はまだお酒の良さが分からないから、お菓子を見に行くことにした。
お酒も飲めないわけじゃないんだけど……あの匂いあんまり好きじゃないんだ。
私がお菓子を見に行くって言ったらおじいちゃんは「そうか」と一

言言って、チャンに耳打ちするとチャンは小さく頷いた。
たぶん私のことを護衛してくれとでも頼んだんだろう。
相変わらず心配性なんだから……。

「エルザ、お菓子を見に行くならチャンさんが着いて行ってくれるそうだから、あまり我がまま言わないようにな？」
「エルザちゃんの我がままなら幾らでも聞いてやるぜ！」
「もう！」

人目もあるから一応年相応の態度を見せないとね。
私は頬を膨らませてそっぽを向いた。
それを見ておじいちゃんは小さく笑っているけど、チャンは……なんかだらしない顔になってる。
道行く人は彼の顔を見て、ギョッとして足早になっていく。
お願いだから一緒に行くなら、その顔をどうにかしてよ？！
おじいちゃんと別れて少し経つと、チャンの顔が元に戻った。
チャンと一緒に暫くブラブラしていると、チャンが私に質問してきた。

「ところでエルザちゃんはどんなお菓子が好きなんだ？」
「う～ん……飴も好きだけど、ケーキとかも好き！」

甘いものってなんであんなに美味しいのかな……？
吸血鬼にとって、血ってケーキとかより美味しいのかしら？
ヘイの血、吸ってみたかったなぁ。

「着いたぞエルザちゃん」
「え？　あ、あぁうん！
ここは何のお菓子が置いてるの？」
「ここは焼き菓子が多い店だ。
クッキー、パイ、マドレーヌとかだな」
「へ～……あ、いい匂いがする」

お店の中に入ると、砂糖の甘い匂いとうっすら柑橘系の匂いが混ざって、涎が出てきそう。
お金はあんまりないからしっかり選ばないとね！

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な！」
「片っぱしから頼めばいいんじゃねぇか？」
「そんなにお金持ってないよ！」
「なんだ、それぐらい出してやるよ」

そう言ってチャンは胸を張るんだけど、周りのお客さん引いてるよ？
あ、子供が泣きそうになってる。
これは急いで決めないと駄目かな？

「流石に全部頼んでも食べきれないし、持って帰るもの大変だから大丈夫だよ」
「そうか？　買ってほしかったら言えよ？」
「うん、ありがとね！」
「お、おぅ」

結局私は二人分のマドレーヌと三人分のクッキーを買って、お店を後にした。
お店を出ると日が結構暮れているのがわかったので、おじいちゃんと合流することにした。
その前に……。

「チャン」
「ん？」
「はい、今日のお礼！」
「これ……さっき買ったやつじゃねぇか！
エルザちゃんのだろ？」
「一つ多めに買ったんだ。
何もあげないっていうのはなんか……ね」

そう言いながら私はチャンの手の上にクッキーの袋を置いた。
あんまり嬉しくないかもしれないけど、小銭渡しても嬉しくないだろうし、道中食べれるクッキーの方がまだマシだと思って渡したんだけど……なんで泣く？

「ど、どうしたのよ」
「いや、なんでもねぇんだ」

チャンは涙を服の袖で拭きながら、小さな声で「これは俺の宝だな」って呟いてた。

いや、ただのクッキーだよ？
そんな事を思いながら人形の様な幼女は、泣きべそかいた大男と町を歩いて行った。

おじいちゃんと合流した時、流石にチャンも泣き止んでいたんいたんだけど、目が赤くなってたからおじいちゃんが不思議がっていた。
チャンとはここでお別れになるみたいで、私たちが乗っている馬車を見送ってくれるらしい。

「チャンさん、今日はありがとうございました」
「いや、こっちもいいことがあったし、言いっこなしだ」
「そうなんですか？」
「おうよ！」

クッキーのことかな？
なんでそんなに嬉しかったのかな？

「それではチャンさん、またいつか」
「おう、気をつけて帰れよ？」
「またね！」
「あぁ！！」

そう言葉を交わすと馬車が走り始めた。
チャンは馬車が見えなくなるまで、ジッと見ていた。
私が偶に手を振ると嬉しそうに手を振り返していた。

……子供好きなのかな？

「エルザ、今日は楽しかったか？」
「うん！　でも出来れば次はヘイと一緒に来たいな！」
「ヘイさんか……彼は複雑な環境にいるみたいだから滅多に会えないだろうけど、次に会ったら聞いてみるといい」
「うん！」

ヘイ、いつか絶対私のモノにするんだからね！！
……早く会いたいなぁ。

第１４２話　極秘ミッション開始（前書き）

スランプから抜け出せない
不定期更新が続きそうだな……

第１４２話　極秘ミッション開始

けたたましいプロペラ音で俺は目を覚ました。
どうやらサイトがゼロ戦に乗ってタルブに向かったようだ。
一応確認のために俺はコルベール先生がいるであろう中庭に向かうことにした。
中庭に着くとそこには泣いているシエスタと、心配そうに空を見るコルベール先生が立っていた。
あれ？
あんまり記憶にないんだけど、サイトがタルブ行く時ってシエスタ見送りに来てたっけ？
とりあえず状況を聞いてみよう。

「どうしたんですか？」
「あ、あぁレッド先生でしたか……」
「何やら彼女泣いていますが？」

俺は一旦シエスタの方に視線を向け、コルベール先生に視線を戻す。
そうすると彼は少しだけ顔を歪めた。

「レッド先生はタルブ村が今どのような状況か知っていますか？」
「戦場になるかもしれないということくらいなら知っていますが……」
「それでは彼女の故郷は知っていらっしゃいますか？」
「そういうことですか……しかし言っては何ですが、そのことは少し前から話に出ていたはずでは？」

「確かにそうですね、ですが彼女の泣いている理由はそれではありません」
「では？」
「もし好意を抱いている人が戦場に特攻するのを止められず、見送らざる得ないとしたら……レッド先生ならどうしますか？」

確かにキツいな。
しかもこの世界だと戦闘機がどんなものか知られていないし、ルイズ嬢が虚無であることも……ってそう言えばルイズ嬢はどうしたんだ？

「サイトがタルブに行ったんですか……でもどうやって？！」
「昨晩私と一緒に燃料を作ったあの‘ぜろせん’で……ですよ。あの機体は彼の話を聞いた限り、鳥よりも早く飛べると言っていたので、そう簡単に堕ちることはないでしょう」
「ですが！」
「それに、彼の主人も後ろに乗っているので尚更です」
「ルイズ嬢が？！」

やっぱり乗ったのか。
俺も後を追った方がいいかな？
でもレコンキスタに俺がバレたら？

「私も最初止めたのですが、使い魔だけを戦場に送るわけにはいかないとはっきり言われてしまい、一瞬言葉に詰まっている間に飛び立ってしまったのです」

「そう……ですか」
「私たちに今できることは、彼らが無傷で帰ってくることを祈るだけです」

正直今すぐタルブに行って、レコンキスタの連中を排除したいところだけど、タルブを襲撃している奴らがいなくなったところで、レコンキスタにダメージはそこまで大きくない。
それどころか俺の能力がバレたりしたら、かなり厄介なことになってしまう。
俺はどう動くべきか……幸い今日は休日だ。
今俺が取れる行動は二つ。
一つ目は後を追って影から援護。
二つ目はコルベール先生の言うとおり、無事を祈る。
まぁ答えは決まっているわけなんだけどな。
ワルドがいないことがどう影響するかわからない。
もしかしたら原作よりも敵が多くて、数に押し切られてしまうかもしれない。
それだけは避けたい。
まずはタルブに行くとしよう。
俺はコルベール先生に部屋に戻ることを告げ、頭の中でどう援護するか考え始めた。

部屋に帰ってきた俺は、まず緑色のローブを羽織った。
緑色の理由は、確か記憶が正しければタルブを襲ったのは竜騎士の部隊だったはず。
なら上空から見たときに背景と同化するには、緑が一番いいからだ。
俺にカクレオン並みの偽装能力があればそっちの方がいいんだけど、あの子持ってないしなぁ。

とりあえず今俺が考えているのは地上からサイコキネシスで竜を行動不能にするっていう方法だ。
空中で動けなくなった竜は重力に従って、地面に叩きつけられる。
上に乗っているのがメイジならフライで飛ぶかもしれないけど、飛んだら飛んだで杖を壊してしまえばそのまま落下する。
その時に頭から落ちるように少し力を加えれば……これが俺の考えている援護方法だ。
流石にガンガン落としていくとばれるだろう。
でもサイトが機銃を撃ったときに惜しくも逃した相手だったら？
それなら周りから見ればどこかに当たって堕ちていくように見えるだろう。
まぁゼロ戦が後ろを取られたり、危機的状況に陥った場合は話が変わるけどな。
その場合は攻撃される前に落とす。
竜の口を強制的に閉め、羽を折る。
そして杖を折る、又は弓の弦を切る、又は剣を落とす。
これで仲間が助けない限り落下死は免れないだろう。

「援護方法が決まったところで、動き始めるか」

タルブへの道は知っている。
後はどうやって行くかだけど……またアレか？
正直森の中を超高速で走り抜けるのは結構厳しいんだよなぁ。
でも他の奴じゃあ間に合わな……いや、一匹いるな。
頭が疲れるけど、かなりの速度で移動できる方法を持つ奴がいる。
初代で出会っては逃げられ、出会っては逃げられを繰り返したあの特攻が高い思い出深い一匹。
あの技なら見える範囲への移動なら文字通り一瞬で出来る。

俺は剣と杖を持ち、一回深呼吸した。

「よし、これで準部は整った」

さぁ妹分と友人を援護しに行くとしますか……バレずに影からこっそりとね。
そして俺はケーシィとユンゲラーとフーディンを装備して、テレポートでの移動を始めた。

第１４２話　極秘ミッション開始（後書き）

初代のフーディン、ゲンガーの強さは異常
特にゲンガーは俺のメインメンバーだった
一匹で四天王全抜きしてたのは懐かしい思い出

修正

第１４３話　見えない支援

２０回のテレポートで何とかタルブ近くの森に着くことが出来たのだが、俺がここに着いた時、既にサイトのゼロ戦は空でドッグファイトを繰り広げていた。
相手はアルビオンの竜騎士隊だが、戦闘機の飛行速度と旋回速度には着いていけないようだ。
次々と機銃の餌食となっていく飛竜を見ていると、なんとなくレイアのことを思い出してしまい、少し悲しい気分になる。

「おっと、感傷に浸ってる暇はないな。
サイコキネシス！」

俺はゼロ戦の後ろに着いた一頭の飛竜の翼を手折る。
竜騎士はかなり動揺しているようだが、錐揉み落下しながらも杖を抜いたのが見えたので、念力で杖を取り上げる。
慌てて手を離れる杖を追いかけようとするが、届かないことが分かると足掻くのを止め、空を仰ぎながら堕ちていった。
罪悪感が無いわけじゃないんだが、俺の中の優先順位に基づいて行動してるので、そこまで大きなものではない。
そのままゼロ戦が後ろを取られた場合だけ、後ろにいる飛竜を堕としていく。
流石に３頭目を堕とすと、周りの竜騎士達も不審に思ってきたようだ。

「流石に気づくか……まぁ位置の特定は出来ないと思うけどね」

俺の今いる場所は木の陰、空から俺を見つけ出すのは難しいだろう。
それにサイコキネシスや念力は火や水の様に見えるものじゃないから、攻撃方向を逆算して位置を特定することも出来ないしな。
しかも見えない敵から攻撃があるということが竜騎士達の注意力を削いでいるらしく、先ほどよりもサイトの撃墜スピードは速くなっていく。
しかし数が多い……原作よりも多い気がする。
ワルドがいない代わりに数を増やしたのだろうか？

「っと、危ないな」

何人かの竜騎士が森の周りを飛び回っている。
まぁ隠れるところ此処くらいしかないからなぁ……うおっと！

「クソ！　隠れられる場所なんて此処くらいしかないっていうのに！！」
「落ち着け、どうせ逃げられやしない……今はあの飛竜もどきを優先すべきだ。
俺達の仲間を落したことを後悔させてやろう」
「それもそうだな、あの飛んでる奴も幾ら速くたって何時か疲れる筈だ。
その時こそアイツらの最後だ！」

そう言うとサイトの方へと戻っていった。

サイトを襲う竜騎士が目に見えて増え、捌くのが厳しくなってきたようだ。
俺も一頭ずつ堕としてるんだが、効率が悪い。
でも他の方法だと場所がバレるし、見つかったらレコンキスタに目を付けられるかもしれない。
俺はこのデメリットをスルー出来ない。
しかし刻一刻とサイト達は追い詰められていく。
あぁぁぁぁぁ、しょうがない少しだけ危険を冒すか。
俺は木を少し錬金し、即席の仮面を作った。
ヘイとして動く時用の仮面じゃなく、髪と顔を隠せるフルフェイスに近いマスクだ。
これで万が一位置がバレたとしても、素性がバレることはないはず……きっと。
そう自分に言い聞かせて少し派手に動くことを決める。
ゼロ戦をみるとコックピットの辺りに被弾したらしく、コックピットカバーが吹き飛んでいる。

「はぁ……もうやるしかないな。
こうなったら即効で蹴散らして、即時離脱しますか」

少し準備をして、俺は竜騎士達の集まる中心辺りに手を向ける。
そして小さく「サイケ光線」と呟く。
すると手のひらから直径1メートルくらいのビームが出てきて一頭の竜を貫いた。
その瞬間竜騎士達は散開し始めたが、その移動よりも俺の腕を振る速さの方が早い。
サイケ光線を出したまま腕をふるうことで、腕を向けた先にいる竜達を堕としていく。

しかし流石に光線の根元に俺がいることは速攻でバレたようだ。
十頭近い竜騎士がこっちに向かってくる。
俺は走りながらも竜を堕としていくが、全部堕とす前に追いつかれそうだな……そろそろ隠れるとしよう。
事前に召喚しておいたダグトリオが掘った穴に隠れて、念のために俺の周囲を岩に錬金して簡易シェルターを作った。
次の瞬間爆音と共に地面が揺れた。

「危ねぇ……火のトライアングルスペル辺りか？」

それからも何度か爆音と共に振動が来る。
しかしそれも暫くすると止んだ。
どうやら俺は死んだと思われたようだな。
俺は簡易シェルターを解除し、状況を確認することにした。
地面から出た俺が見たのは爆撃された森とアルビオン艦隊が光と共に消える所だった。

「これが虚無のエクスプロージョンか、すごい威力だな」
「へぇ……彼女が虚無の使い手と知ってるのね」
「？！」

俺は急いで周囲を見回した。
すると爆撃を逃れた木の陰から、スタイルの良い鋭い眼をした女性が現れた。
オイ……オイオイオイオイ！！
ヤバいってレベルじゃねぇぞ？！

何で……何でこんなところに狂王の使い魔がいるんだよ！！

「えっと、貴女はどなたでしょうか？」
「名前を尋ねるならまず自分からって言葉……知らない？
まぁそんな格好している時点で教える気はないんでしょうけど」
「……」
「なんにしてもさっきからあいつ等堕としてたのは、あなたでしょう？」

此処は恍けておいた方がよさそうだな。
この人相手に、それが通じるかどうかは分からないけど……

「何のことでしょうか？」
「別にどっちでもいいのだけどね」
「え？」
「どうせあなたは此処で死ぬのだから」

やっぱりこうなるよなぁ。
どうしたもんかな。

第１４４話　狂王の使い魔（前書き）

取りあえず生存報告と共に更新します
まだまだ余震の恐怖はありますが、取りあえず妖は無事です！

第１４４話　狂王の使い魔

突如攻撃をし始めたシェフィールド。
俺は飛んでくる魔法具と思わしき石を回避する。
きっと当たったら何かしらの状態異常が引き起こるのは目に見えている。
よく見ると飛んでくる石には色がついており、どうやら四種類の色がある様だ。
赤は火、青は氷、茶は石、緑は雷を表しているらしく、衝撃を受けると中の魔力でそれぞれの効果を引き起こすことが分かった。
一個一個の威力はそれほど高くないのだが、こっちとしてはあまり目立つことをするわけにはいかないし、仮面を脱がされてはいけないという縛りがある。
あまり長期戦になったり、激しい戦いをすると援軍が来てしまう。
それは困る・・・・・物量で押されるとかなりキツイものがあるのは事実だし、それで顔がばれてジョゼフに目を付けられたりしたら、もう死亡フラグなんてもんじゃない！
俺は飛んでくる魔石達を避けながら、この状況をどうにかする策をひたすら考え続ける。

「どうしたの？
このまま避けて弾切れを待っているのかしら？」
「そうなってくれれば万々歳ですねぇ」
「お生憎様、今放ったものも一定時間すればまた使用できる様になるの。
そして自動的にこの袋に戻ってくるから、弾切れなんて存在しないわ」
「それは・・・・・・」

厄介な情報ありがとうございます。
さて、どうする。
何とか正体がバレず、この人から逃げる方法は無いか?!
一番良い方法はテレポートなんだけど、テレポートするためには一旦立ち止まらなきゃ駄目だ。
この人がそんな隙を見逃すわけがない。
殺すのも一つの手段だけど・・・・・・殺したらきっとまた召還して、見たこともない奴がジョゼフの使い魔になる。
それだったらまだ顔が分かるこの人の方がマシだ。
気絶を狙うか、一か八かで催眠術狙ってみるか?
でも催眠術は命中率が高い訳じゃ無い。
ギャンブル性が高すぎるか・・・・・・やっぱり気絶狙いだな!
俺は一旦大きく避け、シェフィールドから距離を取った。

「あら、決心がついたのかしら?」
「あんまりしたくない決心だけどな・・・・・・」
「正直なのね、嫌いじゃないわ」
「そりゃ光栄なことで」
「でも私の心はあの御方の物・・・・・・私の手も、脚も、顔も、体も全て全て全て!
あぁご主人様、今貴方の忠実なる僕が敵を殲滅して帰ります。
どうか褒めてください、可愛がってください、愛してください!
私は貴方の為に全てを捧げます。
だからどうか貴方の寵愛を私に!
アハハハハハハハハハハ!!」

あぁ・・・・・ヤバイこの人。
両手に四つずつ魔石を持ちながら、両腕を大きく広げている。
まるで天を仰いでいる様だ。
彼女の目にはジョゼフしか見えていないんだろう。
俺を殺そうとするのも、ジョゼフの障害になるかも知れない存在を消したいと思っての行動だろう。
こんなに思われているジョゼフがうらやま・・・・・しくないな。
普通に怖いよ、ヤンデレ怖いよ！！
見た目綺麗なんだけどなぁ。
うおっ！
攻撃が再開した？！

「死になさい、さぁ死になさい、私のために、私たちのために！
覚悟を決めたなら早く死になさい！！」
「死ぬ覚悟を決めたんじゃねぇよ！」

さっきよりも苛烈になった攻撃を避けるが、流石に完全に回避するのが難しくなってくる。
服の端が燃え、氷り、斬れ、貫かれる。
仮面だけは何とか死守しているが、それも時間の問題だろう。
早く攻撃に移らないと不味い！

「取りあえずその袋をどうにかする！
サイコキネシス！」
「さっきあいつらを落としていた魔法・・・・・・でもそれは対象が見えなくても使えるのかしら？」

そう言うと彼女は茶色の魔石を四つ地面に落とした。
すると地面から三メートル位の鉄の壁が現れた。

「攻撃以外にも使えるのか？！」
「これは自分のイメージによって発動する物を変えることが出来るのよ。
だからこんな事も出来るわ！」

そういうと壁の上から石が放射線を描きながら飛んできた。
先ほどよりも速度が遅く、避けやすかったので少し動いて、回避した。
しかし石はまるで吸い寄せられる様に俺に向かってくる。

「追跡弾？！」
「貴方に当たる様にイメージすれば、こういう事も出来るわ。
さっきよりも石の回復が遅くなるのが難点だけれどね」
「クソ！」
「さぁドンドン増やすわよ！」

そう言って新たに四つの石を投げてきた。
計八つの魔石が俺目掛けて飛んでくる。
曲線で、直線で、直角で・・・・・・唯俺を仕留めようと追いかけてくる。
剣で切ろうとすると、そこで魔石に込められたものが発動する。
サイコキネシスでは八つ同時に対処することは出来ない。

なら一旦耐えて、魔力が回復する前にケリを付ける！

「プリズンロック！」

瞬間俺の周囲に石の壁が出来る。
次々と石の壁にぶつかり、壁を削っていく。
八つの衝撃が終わったのを確認して、今度はこっちから攻撃だ！と思い魔法を解こうとすると

「貴方土メイジだったのね、てっきり風のメイジだと思っていたわ。まぁどちらでも良いのだけどね」

そう言う声と共に、いつの間にか石の壁の上に乗っていた彼女は手に持っていた新たな八つの魔石を、先ほどの攻撃で出来た小さな穴から中へと打ち込んだ。
次の瞬間石の牢獄は内側から爆発した。

第１４４話　狂王の使い魔（後書き）

友人何人か連絡着かなくて心配だし・・・・・怪我とかしてないと良いなぁ

第１４５話　ギリギリの戦い（前書き）

もう少しで専門学校が始まってしまう
まぁそれはいいんだけど……入学試験が作文って何なの？
しかも郵送

第１４５話　ギリギリの戦い

目の前にあるのは、上半分が吹き飛んだ石の棺。
その内側は完全に黒く焦げており、人が生き残れるようには見えない。

「少し多かったかしら？
これじゃ死体が確認できないじゃない……」

シェフィールドは小さく呟いた。
一応レッドの死体を捜すが、やはり見つからない。
小さな密室に爆弾をぶち込んだようなものなのだから、それも当然なのかもしれない。
周囲を見回していると、ふと赤い何かが目に映る。
確認のために近付いた彼女が手に取ったものはレッドのものと思われる焦げた小さな肉片。

「これは……ふふふ♪」

嬉しそうに笑いながらシェフィールドは肉片を放り投げる。
邪魔者の排除を終えた彼女には早く自分の主の元へ帰ることしか頭に存在しない。

「ジョゼフ様、今帰ります！」

そう力強く宣言し、狂王の従者はその場を後にした。
去り際の彼女の顔には満面の笑みが張り付いていたことだろう。

ボコッという音と共に地面に穴が開く。
そこから這い出してきたのは所々傷つき、腕から血を流すレッドだった。

「いないか……危ないところだった。
あと一歩遅かったら木端微塵だったな」

なぜレッドは生きているのだろうか？
なぜ地面の中にいるんだ？
その腕の怪我はどうしたんだ？
それらの疑問の答えは、シェフィールドに魔石を撃ち込まれる少し前に遡る。

「貴方土メイジだったのね、てっきり風メイジだと思っていたわ」

俺はシェフィールドの声が上から聞こえてきた瞬間、上を見た。
すると小さな穴が開いているのがわかって、一瞬にして青褪めた。
この逃げ場のない場所で魔石を撃ち込まれたら……死ぬ！
どうする？！この石の檻を解除するには少し時間が足りない。
何かないか？
幸い既に石の檻は唯の物としてここに存在している。
故に魔法は使える。
でもこの状況を打破できる魔法はないような気がする。
この逃げようがない石の檻の中で俺は……ん？
……
逃げようがない？
そうだ！！
逃げる必要はないんだ。
隠れてしまえばいい！！
そう思い至ると俺は急いで地面を錬金して、俺が膝を抱えて入れる
くらいの穴を作る。

「まぁどちらでも良いのだけどね」

その声と共に小さな穴から赤い石が連続して数個投げ込まれる。
火属性の魔石かよ?!
でもこれはチャンスかもしれない……俺は意を決して、剣を突き刺して肉をエグり取った。
とてつもなく痛い!!
だが死ぬよりはマシだと自分に言い聞かせながら、エグリ取った自分の肉片を壁隅っこの方に叩き付ける。
これで勘違いしてくれればいいけど……。
時間がない俺は急いで穴の中に入り込み、自分の周りを鉄に錬金して簡易シェルターを作り上げる。
次の瞬間爆音と共に凄い振動が襲う。
鉄のシェルターの上部が少し歪んだ事からもこの威力の高さが察せられる。
振動が収まった瞬間に上部の表層を土に錬金し直した。
これで穴を掘らない限りここが見つかることはないはずだ。
十分ほど経っただろうか……流石に酸素が無くなってきて苦しくなってきた。
もう大丈夫だろうか?
もしこれで上にまだシェフィールドがいたら運任せで催眠術するしかなさそうだな。
俺は覚悟を決めて地面から這い出した。
そうして現在に戻る。

俺は腕の傷を自己再生で治すと、改めて周囲を見渡した。
周囲には大小様々な黒い石の塊が転がっている。

「どう考えても人間一人相手の火力じゃないだろ……どんだけオーバーキルする気だったんだよ」

もしあのとき少し隠れるのが遅れていたらここに、石と一緒に飛び散っていたであろう自分を想像すると……いや止めよう。
ところであの腕の破片は役立ったんだろうか？
もし何の意味もなかったなら、痛い思いした意味がないんだけどな。
俺は周囲をよく見回してみると、少し離れたところに赤黒い肉片が転がっているのが見えた。

「壁に付けた筈だから、見つけて捨てたのか？
それとも爆風で吹っ飛んだんだろうか？
まぁ今となってはどっちでもいいか……さてと！
サイトたちももう帰ったみたいだし、俺も学園に戻らないとな！」

またテレポートの連続で帰らなきゃならないと思うと、微妙に面倒臭いけど流石に召喚→空を飛ぶってわけにもいかないしな。
俺は一度大きくため息をつくと学園に向けてテレポートを始めた。

そして行きと同じ位の時間で学園に帰ってきたわけだが……正直滅茶苦茶疲れた！
戦闘の陰からの支援だけでも大変だったのに、シェフィールドとの戦闘。
もうしばらく何もしたくないなぁ。
そう思いながら部屋のドアを開けると、見覚えのある青髪の少女の姿があった。
しかも目が合っている。
とりあえず笑顔でドアを閉める。

「うん……なんでタバサが俺の部屋に？」

部屋の外で疑問を抱いていると、その悩みの種が部屋から出てきた。

「何故閉めるの？」
「いや……むしろなんで俺の部屋に？」
「ルイズがタルブに行ったと聞いて、その話を聞きに来た」
「それなら本人に聞けばいいんじゃないか？」
「まだ帰ってきていない」

あぁそうか、そういえば王女に報告したりしなきゃいけないんだっけ？

いや、だとしても何故俺に聞きに来る？
そんな疑問を抱いている俺の心情を読んでかタバサが言ったセリフは、俺に衝撃を与えた。

「だってタルブに行ってた」

第１４５話　ギリギリの戦い（後書き）

なんか最近民主党が今まで以上にボロを出し始めていて、このまま
だと日本がどうなるか不安でしょうがない
あと約３年も民主党だったら……日本はどうなるんだろうか

第１４６話　タバサの疑問（前書き）

専門学校って大変かも
授業内容はついて行けそうだけど、周りがみんな歳４つ下且つ話が合う子がいない
今までが恵まれすぎていたのかもしれないなぁ

ＰＳ
地味に明日俺２３になります・・・・・早いなぁ

第１４６話　タバサの疑問

突然告げられた言葉に俺は一瞬硬直した。
それを見てタバサは目を僅かに細める。

「やっぱり・・・・・・」
「やっぱり？」

何故やっぱり？
・・・・・・まさか鎌かけたのか！？
ミスったな、もっと気をつけるべきだった。
その後悔を読み取られたのか、タバサが少しだけ申し訳なさそうにこちらを見ている。
タバサも自身に秘密が多いためか、そう言ったところには凄く敏感なっていて、聞いてはいけないことを聞いてしまったかと不安になったんだろう。

「ごめんなさい・・・・・・でも気になったから」
「いや、読み取られた俺が未熟だったんだ。だからあまり気にしなくてもいいぞ？」
「ありがとう」

どうやら想像以上に俺は顔に出ていたようだ。
思っていた以上に不安が大きかったらしく、タバサは安堵の表情を浮かべている。

その後彼女は俯きがちになり黙っているが、よく見ると少しそわそわしている。
あぁ、そう言えばタルブに入ったことについて聞きたかったんだっけ？
どうする・・・・・シェフィールドの件もあるから流石に全部を話すわけにはいかないが、このままでは空気が悪い。
それなりに仲のいい相手とこんな空気のままになるのもイヤだし、情報を小出しするか。

「タバサ」
「・・・・・なに？」
「タルブでのことを聞きに来たんだろ？」
「話して・・・・・くれるの？」

タバサは勢いよく顔を上げた。
俺の言葉で少し驚いているようだ。
まぁそれもそうか、さっきまでタルブに行ったことを隠したがっていたからなぁ。
だがその前に俺も聞きたいことがある。

「タルブでのことを話すのはいいんだけど、その前に俺もタバサに聞きたいことがある」
「なに？」
「何故俺がタルブに行ったと思ったんだ？」

正直何が理由で俺がタルブに行ったと思ったのか、結構気になるん

だよね。
もしテレポートするところを見られてたら、かなりヤバいことになるし・・・・・・。
タバサは少し考えてから、話し始めた。

「まず剣の訓練で聞きたいことがあって、レッドの部屋に行った」
「剣？　どうかしたのか？」
「剣が少し欠けてしまったから、研ぎ方を教えて欲しくて」
「教えてなかったか？　じゃあ後で教えるよ」
「ありがとう・・・・・・続き話していい？」
「あぁスマンスマン、続きを頼む」

話を聞いていると、どうやら俺の居場所を探す際にコルベール先生に聞きに行くと、その際に「私は知らないが、もしかしたら・・・・・・」とタルブに行ったルイズの話を俺にしたことを話したらしい。その話を聞いて、一応つい先日行ったタルブが戦場になっているのは知っていたし、ルイズやサイトも行っているとも少し前に聞いたならばもし俺がタルブに行ったのなら状況を聞きたいと思ったようだ。
その結果、先ほどの鎌かけに至ったらしい。

「そう言うことだったのか・・・・・・でも俺の部屋にいた理由は？」
「いつ帰ってくるかわからなかったから」
「いや、どうやって入ったんだ？」

俺がそう聞くと、タバサは無言で何故か誇らしげに杖を振る。
・・・・・・要するにアンロック使って入ったと？
今度から入られたくないときは、扉を練金で溶接することを心に決めた。

「じゃあ次は俺が話す番かな？」
「お願い」

俺はタルブへの移動方法とルイズたちへの援護方法、シェフィールドとの戦闘を隠して説明した。
だがそこを隠すと微妙におかしい部分が出てくる、それは・・・・・・。

「・・・・・・レッドは何をしに行ったの？」

まぁ、そうなるよな。
援護方法を喋れないから、唯見ていただけみたいな説明になってるし。
でも援護したことを言うと、今度は竜騎士たちをどう相手したか疑問が沸いてくるだろう。
これは万が一に備えたと説明するしかないな。

「ルイズたちが万が一命の危機に陥った場合だけ手助けしようと思ってね。
結果としてルイズたちを見守っていただけなってしまったんだ。

本当なら戦争に自分から関わる気は微塵もないんだが、戦いには万が一があるからな。
二人が死ぬようなことが無い様にしたかったんだよ」
「そうなの？」
「まぁ、援護をするとしても相手は空中戦に一日の長がある竜騎士だから、気を引くくらいしか出来なかったかもしれないけどな？」

タバサは俺の話を聞いて少し考えたようだが、何とか納得してもらえたようだ。
騙しているようで少しだけ心苦しいが、タバサの立場が微妙すぎて余り情報を渡すことが出来ないんだ・・・・・すまない！
俺は少し気まずい気分だったがために、話題を変えようと考えた。

「他に何か聞きたいことはあるかい？」
「他に・・・・・じゃあ話の最後に出てきた光について詳しく」

また答えにくい質問がきたな！
正直虚無について俺が知っていることは多くない。
爆発、忘却、解除、加速という４種類の魔法があることと、使い魔の能力くらいのもんだ。
でもそれを話すわけにもいかないから、結局見た感じのイメージを伝えることくらいしか出来ない。
何処かの誰かが使用した見たことのない魔法。
強い光と凄まじい音、その結果として消えた巨大戦艦。
そして逃げ帰っていく敵軍。
これだけ聞くとまるで英雄譚だな。
裏では俺がシェフィールドと泥臭い戦いをしていたわけだが・・・・

・・アレは厳しい戦いだったなぁ。
なんであの相手に縛り有りで戦わなきゃならないんだよ！
持っている魔道具次第では縛りなしでも戦いたくねぇっていうのにさ。

「どうしたの？」
「ん、いや、なんでもないなんでもない！」
「？」

また顔に出ていたようだ。
はぁ・・・・・・もっとポーカーフェイスの練習した方がいいのかな？

第１４６話　タバサの疑問（後書き）

現在ディスガイア４のセリフを書き出している最中なのですが、結構多くて困る
まだ半分も終わってないんです！！
しかも書き出した後にオリキャラを入れて、書き換えなきゃいけないから結構掛かりそうだ
でもこのやり方だと一気に最終話まで書くことが出来るので、また毎日更新が出来るかも・・・・・いつになるかわかんないけどね！！

第１４７話　買い物の約束（前書き）

ホントに講義内容がハードになってきたもんで、なかなか更新できない・・・・・今回はちょっと催促のお言葉を頂いたもんで、頑張ろう！って筋肉痛に襲われつつ書いてます
でもやっぱり書けない・・・・・この量書くのにメチャクチャ時間かかったｏｒｚ
一日一話書いてた俺はどこに行ったのやら

第１４７話　買い物の約束

せがまれたので、ルイズ達の活躍を若干ぼかしながら説明したわけだが、タバサの目の輝きっぷりが半端じゃない。
そう言えばタバサはイーヴァルディの勇者って作品が好きって聞いたな・・・・・・英雄譚とか好きなんだなぁ。
まぁ自身の状況が状況だから、弱きを助け強きを挫く、囚われの姫を助けるなぁんていう勇者を夢見るのも無理はないだろう。
実際王族の血が流れてるから、姫って言われても間違いじゃないわけだしな。

「って訳で、俺も帰ってきたんだが・・・・・・タバサ？」
「・・・・・・・・・・」

目で続きを催促してくるが、コレは物語じゃないし、その後ルイズ達は城に行って事後報告したはずだけど俺はついて行っていない。
故に知っているはずがない情報ってことで、続きは存在しない。
続きはないことを伝えると、目に見えてテンションが下がった。
もし彼女に尻尾と犬耳が生えていたなら、ブンブンと振っていた尻尾は止まり、耳は垂れているはずだ。
やっぱり英雄譚に重ねて、最後は褒美もらってめでたしめでたしというのを期待していたんだろう。

「いや、そんな顔されても困るんだが・・・・・・というかそれ以前に、タバサは剣の研ぎ方を聞きに来たんじゃないのか？」
「・・・・・・そうだった」

そう言って顔を僅かに朱に染めた。
その後は、タバサが来た本来の目的である剣の研ぎ方を伝授することになったわけだが、その前に・・・・・・。

「そろそろお下がりじゃなくて、タバサにしっかり合う剣探すか？」
「・・・・・・なんで？」

首をかしげる少女。
・・・・・・本当に15歳以上なんだろうか？
とりあえず俺は何故今の剣のままじゃいけないのか教えることにした。

「今使ってる剣は俺のお下がりだろう？
それは俺の癖が付いちゃってるんだ。
幾ら金属製とはいえ、何年も使ってると柄の部分にも自分の癖が移る。
正直もう少し早めにタバサに合う剣探すべきだったんだけど・・・・・・ごめんな？」
「別にいい」

正直言うともっと早い段階でタバサ用の剣を見繕う予定だったけど、長く使うものだからじっくりと選ばないとと思うと、まとまった時間が必要になる。
それに本人も連れて行かなければならない。

と言うわけでなかなか行く機会がなかった。
でも流石にいい加減彼女に合った剣を使ってもらわないと、俺の癖がそのまま移ってしまう。

「だから今度の休日に予定がなければ、一緒に剣を探しに行こう」
「・・・・・・・・・・・・え？」
「ん？　だから今度の休みに剣探しに行こうって・・・・・・」
「わ、分かった。
了解した」
「じゃあ今度の休日に部屋まで迎えに行くから、待っててくれ」

そう俺が伝えると、タバサは一言「お邪魔しました」と言って若干早足で、俺の部屋を後にした。
それにしても急にどもったけど、どうしたんだ？
しかもなんか気合い入ってたし・・・・・・自分の剣を選ぶのが楽しみなのか？
とりあえず俺は扉に鍵を掛け、今度こそ誰も入ってこない様に練金で溶接した。

「よし！
これでやっと休めるな・・・・・・」

正直今日の出来事は俺の体力と精神力をガッツリ削り取っていた。
実はタバサと話している時点でかなり限界に近かったわけで・・・・・・俺はベットに横たわると、泥のように眠り始めた。

～タバサｓｉｄｅ～

レッドに剣の研ぎ方と、どこに行ってたのか確かめるために部屋で待ってたけど、戻ってきたレッドは凄く疲れているように見えた。
一端出直そうとも思ったけど、余り長居するつもりもなかったから少し申し訳なく思いながら話を聞くことに決めたけど・・・・・・
まさかルイズが物語の中のような体験をしているとは思わなくて、予想より長く話してしまった。
しかも剣の研ぎ方を教えてもらうことはなかったけど、代わりにレッドと一緒に剣を選ぶ約束をすることに・・・・・・少し緊張する。

「どうしたのね、おねえさま？」
「！？」

声に反応して即座に振り向くと、そこには心配そうな顔でこちらを見ているシルフィード（人間に変化した）の姿があった。
なんとなく緊張していたことを知られるのが恥ずかしいと思い、できる限りいつも通りの顔になるように意識する。

「別に」
「でも表情がいつもより硬いのね！
何かあったの？」

一緒にいる時間が長いからか、それとも韻竜の感受性の高さからか私の感情も読み取れるようだ。
でもよく考えたらレッドと出かける際の移動手段は、シルフィードに乗ることになるはず・・・・・・なら隠さなくてもいいと思って話すことにした。
するとシルフィードの顔がドンドン笑顔になっていく。

「きゅいきゅい！！
レッドとデートなのね！」
「デート・・・・・・」
「そうなのね！
ちょっとロマンチックじゃないけど、デートなのね！！」

私とレッドがデート・・・・・・。
胸の鼓動が早くなり、顔に熱が集まっていくのを自分でも感じる。
それを見て、シルフィードはより一層笑顔になっていく。

「いつなのね？
デートはいつ？！」
「・・・・・・次の休日」
「明後日！？

もう余り時間がないのね！」

突然忙しなく部屋の中を荒らし回るシルフィード。
そしてドンドン目の前に私の服が積み上がっていく。

「何をやっているの？」
「今日と明日でデートに着ていく服を決めないといけないのね！！
おねえさまはどれがいいのね、きゅいきゅい！」

私は少しシルフィードの行動に呆れつつも、真剣に服を見回す。
明後日・・・・・・レッドは何時来るんだろう？

第１４７話　買い物の約束（後書き）

もし矛盾や変な部分があったら教えていただけると嬉しいです

第１４８話　新たな可能性（前書き）

痛い
足と腕と顔が痛いよ・・・・・・
ここ５日間、実習で９時間ずっと外での作業
立ちっぱなしで足は痛いし、日焼けで顔と腕が真っ赤っか
濡れタオルの重要性を感じました

第１４８話　新たな可能性

命の危機すら感じた激闘を終えた翌朝、タバサとのデート（？）を翌日に控えたレッドだったが・・・・・彼は特に何かを用意するわけでもなく、何時も通り朝練をこなしていた。
ただしその内容は、いつもと少し異なるようだ。
彼がいるのは学院の外れにある森の奥深く。
眼前に広がる光景はまるで石の雨が降ったような印象を受ける光景だった。

「駄目だ・・・・・・まだ完全に威力を流しきれない」
「ジ」
「アイガ、もう一回頼む」
「ジ♪」

所々破けたローブを纏うレッドがファイティングポーズを取る。
アイガもそれに応えるように、レッドに腕を向ける。
彼らが一体何をやっているのか？
それは数時間前まで遡る。

～3時間前の同じ場所にて～

「アイガ、今日は少し手伝って欲しいことがあるんだ」
「ジ？」

俺の個人的な朝練の内容は基本的にアイガとの戦闘訓練と自己鍛錬、そして記憶にある実現できそうな技の模倣である。
時折魔法の範疇と認識されるであろうポケモン技の威力確認や、その応用方法の模索なども行っている。
しかし今日行おうとしているのは違う。
俺はアイガの顔をジッと見て言った。

「俺に向けてストーンエッジを使ってくれないか？」
「ジ！？」

俺の発言にどうやらアイガは驚いているようだ。
それもそうか・・・・・・ストーンエッジという技は当たれば人の体なんて一瞬でミンチになる威力を持った技なのだから。
だが俺にも譲れないものがある。

「頼む、アイガ！
お前にはまだ言ってなかったけど、俺は昨日死にかけたんだ。
何とか死を偽装する事で逃げられたけど、あの時一瞬判断が遅れたら俺は今ここにいなかったはずだ」
「・・・・・・・・・ジ」

「確かに装備や召喚を使えば、どうにでもなっただろう。
でも相手は大国の王の使い魔。
万が一視覚の共有などによって俺の能力が知られたら・・・・・・
その情報はロマリアに伝わり、迫害の対象になるだろう」

ジョゼフはロマリアとの繋がりもあったはずだ。
もしかしたら面白いという理由でロマリアには伝えないかも知れないが、そんなギャンブル性の高い選択肢は選べない。
故に俺は新たな選択肢を作る。

「俺は死にたくない」
「ジ」
「でもこの世界にはまだまだ俺の知らない魔法や、魔道具が存在する。
それがもし鉄壁を貫くような威力だったら？
・・・・・・俺は人間だ。
首を落とされれば死ぬし、心臓を貫かれても死ぬ。
じゃあどうすればいい？
そこで俺は思いついたんだ。
今まで使っていなかった部類のポケモン技があることを！」
「ジ？」

そんなものあったっけ？とでも言いたそうなアイガに説明するため俺は口を開く。
今まで・・・・・・いや、前世でもあまり使わなかった部類の技。

「それは・・・・・・相手のステータスをダウンさせる技だ」
「ジ〜」

ポケットモンスターというゲームにおいてステータスダウン系の技を、俺の周りで使う人はあまりいなかった。
その理由としては、ポケモンではステータスを下げる技を使われてもボールに戻せば元通りになってしまうからだ。
だから俺はこのゲームの中で自分のステータスを上げる技しか使ってこなかった。
しかしここはポケモンの世界じゃない。
モンスターボールという概念もなければ、身体能力を下げる魔法というものも聞いたことがない。
ならば不意を突くには最適なものなのではないか？と俺は気付いたんだ。
それにもし魔法が『とくこう』に当てはまるなら、魔法の威力すら下げることができる。
何故今まで気付かなかったのだろうかと思うほど使い勝手のいい効果の数々を、実戦で使う前に実験しようと先の発言をしたわけだが、それだけなら俺にストーンエッジを放つ理由にはならない。
そこにはアイガも気付いたようだ。
アイガは自身の腕を少し大きめの石に向け、ストーンエッジを放って砕いた。
まるでコレじゃ駄目なのか？とでも言いたいかのように首をかしげる。

「あぁ、俺に向けなきゃ駄目なんだ。
まぁ別にストーンエッジである必要はないんだが、岩雪崩だと範囲が広くて目立つと思ってな。

俺に向けなきゃいけない理由は、ただ単に俺自身の防御能力を上げたいからだよ？」
「ジ？！」
「幾らステータスダウン系の技を重ねたところで、岩が飛んでくるんだから当たれば骨折、下手すれば死ぬ。
でも俺はある程度の怪我なら直せるし、なにより・・・・・・昨日の戦いだけじゃなく、吸血鬼と戦ったときだって、もっと俺の防御能力が高ければ腹に風穴を開けられることもなかったんだ。
だから素の俺の防御も固めておこうと思ったんだよ」

アレは本当に死ぬかと思った。
昨日の爆破よりも全然死を身近に感じたよ。
ちなみに俺の言う防御は回避や攻撃をそらすことも防御の中に入っている。

「あ、でも流石にどれくらい威力が軽減されるか確認してから俺に向けてくれよ？
流石に、目論見外れて全然軽減されませんでした、なんてことになると、俺ミンチになるからね？」
「・・・・・・・・・・ジ～」
「今ため息吐いたな！？」

この後は様々な事を実験した。
その結果としてわかったことは、攻撃力の低下は物理的威力の軽減（まるで攻撃する方向にゲル状の壁があるような感覚）。
防御力の低下は硬度の低下（たとえば筋肉が贅肉くらいの柔らかさになる）。

特攻の低下は魔法だけでなく、自然現象の規模縮小（たとえば炎の温度の低下など）
特防の低下は痛覚の鋭敏化（炎ならばより熱く、氷ならばより冷たく感じる様になる）
素早さの低下は脳から体への命令伝達スピードの低下（動き始めが遅くなる）
どの効果も最低でも１０分は続くようだ。
そして話は冒頭に到る・・・・・・。

「色々我慢して、三回も‘あまえる’使ったのにまだ方向をズラすのが精一杯って・・・・・・」
「ジ～♪」

凹む俺と、どこかご機嫌なアイガは、端から見ると異様な光景にも見えただろう。
よく考えてくれ・・・・・・精神的に３０超えた男が甘えるということを！
そりゃ凹みもするさ！！

「でもこれでわかったぞ！」
「ジジ？」
「物理攻撃は攻撃を限界まで下げると、スピードが半分くらいまで遅くできるということが！」

高校の物理で習うように運動エネルギーとはＫ＝１÷２ＭＶ二乗。
運動エネルギーにとって速さとは非常に大きなウェイトを占めてい

るのだ。
某格闘技漫画でもスピード×体重×握力＝破壊力と述べている。
そしてスピードが下がるということは、攻撃を避けやすくなるということでもある。
ポケモンの世界ではどういう理由で攻撃力が下がるんだろう？

「攻撃力の低下はかなり使えるな・・・・・・問題は攻撃力を二段階下げる、あまえる、は実戦では使えないところかなぁ」
「ジ！？」
「なんで驚く！？
攻撃力が下がっても俺のテンションはだだ下がりだぞ！？
と言うことで実戦で使うとしたら、くすぐる、か、なきごえ、だな。
攻撃に混ぜるなら、オーロラビーム、か、ひみつのちから、・・・・・・ひみつのちからは水場で使わないと効果が違うから微妙だな。
一番いいのは、フェザーダンス、だけど、翼がないと出来ないんだよなぁ～アレ」

一応試しては見たんだが、まず、つるぎのまい、や、フェザーダンス、のような発動に行動が伴う技は体が勝手に動くようなイメージなんだが、フェザーダンスを使おうとしても発動すらしなかったんだよ。
疑問に思って装備を使って翼を生やしてみると、技が発動できたことから一部の技は発動に条件があるようだ。
今までこんな事は無かったから、今後色々試してみないと駄目だな。

「ジ！」
「ん？　あぁ、もうこんな時間か、そろそろ授業行かなきゃ駄目だ

な。
じゃあアイガ、さっき言ったとおり明日は朝練ないからな。
明日はゆっくりしてくれ」
「ジ〜ジ〜」

俺はアイガの返事を確認した後、魔法で抉れた地面を元通りにし、ローブに開いた穴を練金で直すとその場を後にした。
アイガは訓練後いつもそこでしばらく日向ぼっこをするので、帰りは一人だ。

「そう言えば明日は何時に行けばいいんだ？」

街への距離や移動時間を考えながら学校へと向かう姿は、まるでデートプランを考える青年の様だった。

第１４８話　新たな可能性（後書き）

ポケモンを知らない人のために、今後は技の説明とかを軽く入れていこうかと思います。
くすぐる：くすぐって何故か攻撃力と防御力が下がる技・・・・・・使うタイミングが難しい
なきごえ：かわいく鳴いて攻撃力を下げる・・・・・・可愛くないと駄目なんだろうか？
オーロラビーム：オーロラのような虹色のビームを放つ・・・・・・昔はよく使ってたなぁ
ひみつのちから：場所によって効果が変わる攻撃技・・・・・・使い勝手は悪くない
フェザーダンス：あまり覚えるポケモンはいないが、攻撃力を二段階下げる技
ストーンエッジ：高威力の岩系攻撃・・・・・・命中が若干低いがクリティカル率が高いのは魅力
あまえる：可愛く見つめて油断を誘う攻撃力二段階ダウンさせる技・・・・・・女の子にやられたい
つるぎのまい：攻撃力を二段階上げる技・・・・・・今でもお世話になってます！！

第１４９話　おでかけ（前書き）

夏休みなんて無かった・・・・・本気でｗ
まぁ大学に比べればの話だけどね
社会出ればもっと休みが無いのは分かるんだけど、どうもね
後親の作るご飯を久しぶりに食べると凄く美味く感じる
コレがお袋の味ってヤツなのか？！

第１４９話　おでかけ

約束の日、とりあえず昼前にタバサを迎えに行くことにした俺はいつも着ている服を身につけ、杖と一応ナイフを持って彼女の部屋へと向かう。
昨日の夜考えた予定では、街で昼を取ってから剣を見に行く。
もし時間があれば新しいローブも見に行きたいところだな。
練金で見た目は元通りに出来るんだが、生地の質量自体は減ってるから全体的に少し薄くなってるんだよ・・・・・このままだと透けるローブが出来上がってしまう。
頭の中で予定の再確認を終えるのとほぼ同時にタバサの部屋の前へと着いた。
そのまま流れるようにノックをしてドアを開けようとドアノブに手をかけると、ドアは勢いよく‘内側’に開いた。

「うぉ！？」
「待ってたのね！　もうおねえさまの準備は出来てるから、早く早く！」

そう言ってシルフィは俺の腕を掴んで、何故か外に向かって歩き始める。
話を聞いてみるとタバサは既に外で待っているらしく、入れ違いにならないようにシルフィが待っていたようだ。
そのまま学院から少し離れた森まで引っ張ってこられた俺。
シルフィが韻竜である事を他の人に知られたくないから、待ち合わせの場所を見つかりにくい森にしたんだろうなぁ。
しかし肝心なタバサの姿が見えない。

「おねえさま～、レッド連れてきたのね～！」
「ここで合ってるのか？
お前まさか間違えたとかは・・・・・・」
「む～～、そんなことないのね！！
レッドは私のことバカにし過ぎなのね、きゅいきゅい！！」
「悪い悪い、でもじゃあタバサは何処にいるんだ？」
「たぶん何処かに隠れてると思うのね」
「隠れてる？」
「レッドはあんまり気にしなくていいのね！　おねえさま～、早く出てこないと遊べる時間短くなっちゃうのね！」

その言葉を聞いたからなのか、レッド達の前方にある木の後ろからタバサがヒョコっと顔を出す。
その顔は何故か少し紅い。
暑かったのだろうか？

「恥ずかしがってないで早く行くのね！」
「・・・・・・やっぱり着替える」
「い・い・か・ら！」

シルフィが木の後ろからタバサを無理矢理引っ張り出す。
木の後ろから現れたタバサの姿は何時もの姿とは全く違っていた。
白を基調としたフリルの付いたドレスで何時も持っている大きな杖も無い。
白い肌にその服はよく似合っていて、まるで雪の妖精の様だ。

俺はしばしの間その姿に見惚れていた。
反応のないことに不安になったのか、タバサが俺に声を掛けてくる。

「・・・・・・どう？」
「・・・・・・っと、何がだ？」
「服、どう？」
「あ、えっと・・・・・・似合ってると思うぞ？」
「良かったのね、おねえさま！
昨日じっくり選んだ甲斐があ「・・・・・・ッ！」イタッ！　痛い、痛いのね！！」

タバサが近くに落ちていた大きめな木の枝で逃げるシルフィの頭をバコバコと叩く。
そこまで楽しみにしてくれていたかと思うと、俺としても提案した甲斐があったというものだ。
しばらくシルフィを叩いていたタバサだったが、気が済んだのか元の姿に戻したシルフィを連れて戻ってきた。

「もういいのか？」
「・・・・・・」（コクリ）
「じゃあ行くとするか。
シルフィ、ここまで頼む」

そう言って俺は地図を見せる。
行き先はトリステイン王国の首都トリスタニア。
あそこは首都と言うだけあって武器屋も何件かあるし、距離的にも

余り遠くない。

「とりあえずあっちに着いたら昼食にしよう。
タバサは何が食べたい？」
「ハシバミ草」
「それは主食じゃないだろ？」
「・・・・・・ハシバミ草」
「・・・・・・ふぅ、分かったよ。
じゃあ、着いたら探してみるか」
「・・・・・・」（コクコク）

昼食をどうするか決めたところでシルフィの背中に乗り、その背中を軽く叩く。
すると力強く彼女は羽ばたき始め、目的地への短い旅が始まった。
緩やかなスピードでの飛行は周囲の景色を見る余裕もあり、晴れというのもあって遠くの山々までよく見える。
今まで空からの景色をゆっくり眺める事なんて無かった。
空の移動は殆どが急いでるか、疲労で見てる余裕がなかったためだ。

「綺麗だな・・・・・・」
「え？」
「今までじっくりと見たことなかったからなぁ」

俺の言葉でタバサも視線を同じ方向に向ける。
特に何がというわけじゃない。
あるのは緑の多い山、広い平原、所々に見える小さな村。

この世界も百年、いや千年後は灰色のビルが建つのだろうか？
いや魔法と貴族制度があるこの世界が日本やアメリカのような状況になることは無いだろう。
この世界の遠い未来を夢想していると、タバサが俺の袖を引っ張る。

「どうしたの？」
「いや、ちょっとこの光景が何か嬉しくてな」
「？」
「気にしないでくれ、何となく思っただけだから」
「ん、わかった」

俺は前に座るタバサの頭を軽く撫で、流れる景色を見続けた。
そのまましばらく遊覧飛行をしていると、徐々に目的地が近づいてくる。
竜に乗って直接首都に降りることは出来ないので、近くで降りなければならない。

「シルフィ、俺達を降ろしたらどうするんだ？
暇なら着いてくるか？」
「今回はおねえさまの番だから、私は散歩でもしてるのね」
「ちょっと意味が分からないんだが、何処かで時間潰すってことはわかった」
「楽しむといいのね！　おねえさまも頑張って、きゅいきゅい！」
「・・・・・・」（グッ！）

俺達を降ろしたシルフィはタバサの荷物から自分の服を掴み、その

まま何処かへ飛んで行ってしまった。
大分高くまで飛んでいったから、見つかって討伐って話にはならないだろう。
それに服を持っていったなら、いざというときは人間の姿になればどうにかなる。
俺はタバサに出発しようと伝えるためシルフィの飛び去った方から彼女へ視線を向けると、何故かタバサはシルフィの飛び去った方向に親指を立てていた。
見られていることに気付いたタバサは慌てて手を腰の後ろに隠す。
何となく見なかったことにした方がいいかな？と思ったので追求はしないことにする。

「じゃあ行くとするか！」
「・・・・・・・・・」（コク）

首都までの距離はおおよそ８００メイル。
その短くも長い距離を顔がほんのりと紅いタバサと、何処か気まずい気分で歩いていく。
二人の後をこっそりついて行く青髪の女性に気付かないままに。

第１４９話　おでかけ（後書き）

ついに始まったデートもどき
青髪の女性とは一体！？・・・・・・いや、まぁ分かると思うけどね？

追記
先住魔法，変化，を勘違いしてました
服は変化でどうにか出来ないんですね

第１５０話　昼食（前書き）

なんだろう超無気力

第１５０話　昼食

街は休日ともあって、表通りは人で溢れていた。
とりあえずタバサの空腹をどうにかしないと、集中して剣を選べないだろう。

「そういえばハシバミ草がある店ってどんな店なんだ？
俺はあんまり外食したことがないから分からないんだが」
「それなら良く行くところがあるから・・・・・付いてきて」

そう言ってタバサは俺の前を歩き始める。
その足に迷いがないことから、普段から行き慣れてることがわかった。
そのまましばらく歩くと、こじんまりとしたレストランの前でタバサが立ち止まる。
入り口らしきところには「レストラン　精霊の祝福」という看板がひっそりと掲げられていた。

「ここ」
「・・・・・なかなか渋い店だな」

タバサは空腹に負けたようにゆっくりとドアを開けた。
ドアを開けると小さくドアベルの音が鳴り、カウンターにいる店長と思わしき中年男性がこちらを向く。
彼はグラスを拭きながらタバサと俺に目を向けると、小さく「いら

っしゃい」と呟いた。
店内に客の姿は無かったが店の内装はシックな雰囲気で纏められており、レストランと言うよりもバーに近い印象がある。
ふとさっきからタバサが声を出していない事に気付き、辺りを見回してみると既にイスに座ってメニューをガン見してる姿が目に入る。
いつの間に席に着いていたんだよ・・・・・・とりあえず俺も座るか。
俺はメニューを手に取り何を頼もうか悩んでいると、ふと正面から視線を感じた。

「・・・・・どうかしたのか？」
「決まった？」
「あ～、うん。
このランチセットにするわ」
「そう」

タバサは俺が注文を決めたことが分かると直ぐに、店員・・・・・・
というか店長を呼んだ。
店長は拭いていたグラスを置き、カウンターから出てくるとテーブルの横まで歩いてきた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」
「ランチセットを一つ、タバサは？」
「ハシバミ草のサラダ二人前、地鶏のハシバミ草焼き二人前、エビのハシバミ草蒸し三人前、本日のデザート」
「あ、相変わらずだな。
っていうかそんなにハシバミ草使う料理あったのか！？」

「もちろん、そして今日は控えめ」
「これでか・・・・・・」
「・・・・・・ランチセット一人前、ハシバミ草のサラダ二人前、地鶏のハシバミ草焼き二人前、エビのハシバミ草蒸し三人前、本日のデザート一人前でよろしいですか？」
「あ、はい」
「ではこちら下げさせて戴きます」

メニューを小脇に抱えカウンターへと戻っていく店長。
俺はさっき店長が持ってきてくれた水を一口飲み、今後の予定をタバサに伝えることにした。

「昼食取った後のことだけど、約束通り剣を見に行こう。命を預かるものだからな、確りと選んだ方がいい」
「・・・・・・」（コクリ）
「その後は少し俺の用事に付き合ってくれ」
「何？」
「いや、そこまで重要なことじゃ無いんだけど新しいローブを買おうかと思ってな」
「？　あのドラゴンのローブは？」
「いや、流石にアレを普段着るのはちょっとな」
「そう」

今後の予定の確認を終え、学園でのこと等を話しながら料理が来るのを待っていると一品目のハシバミ草のサラダが来た。
一人前の量はそれほど多くないが、二人前となると少し量が多い。
上には白いドレッシングのようなものが掛かっているようだ。

ふとサラダから目を上げると、タバサが俺をジッと見ていた。

「どうした？」
「・・・・・・食べていい？」
「ん、あぁ別にいいぞ」
「ありがとう」

タバサは一度俺に微笑むと、まるで今から戦いに挑むような真剣な表情を浮かべ、ハシバミ草を口へと運ぶ。
ゴーヤほど苦くはないが、それでも苦いことにはかわらないハシバミ草を口に含みゆっくりと何度も咀嚼する。

「美味しいか？」
「美味しい、ドレッシングがとても良く合う」
「そうなのか・・・・・・・」
「一口食べる？」
「いいのか？」
「かまわない、んっ」
「へっ？」

俺が自分のフォークを手に持とうとしたとき、目の前にハシバミ草が差し出された・・・・・・タバサのフォークに刺さった状態で。
一瞬状況がつかめなかった。
しかし顔を少し赤らめてフォークを突き出すタバサを見て我に返る。

「いやいやいや、自分で食えるぞ！？」
「ん」
「いや、だからな？」
「・・・・・・・ん」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・ん」
「あ、あー」

味は良く分からなかったが、少しだけ甘酸っぱかった気がする。
その後少ししたら俺のランチとタバサの他の料理が来た。
すると出来た料理を前に先ほどまで感じていた恥ずかしさよりも空腹感が勝ち、二人とも食事に集中していく。
そして気付けば残るのはランチに付いていたデザートとタバサが頼んだ本日のデザートだけ。
ちなみに俺のデザートはフルーツの盛り合わせ、タバサのデザートはクックベリーパイだ。
互いにデザートを食べ終わり食後の紅茶を楽しんでいると、何やら店の外が騒がしい。

「何かあったのか？」
「わからない」
「まぁ、俺達に関わることじゃないから問題ないな」
「・・・・・・」（コク）
「コレ飲んだら行くか？」
「そうする」

～シルフィードｓｉｄｅ～

「なんなのね！？　私が何したって言うのね！！」
「いや、だから金を払えって言ってるんだよ！！」
「だからなんでなのね！　私は食べていいって言われたから食べただけなのね！」
「食っていいのは試食品だけだ！　出来上がったの片っ端から食っていいとは言ってねぇんだよ！！」
「む～・・・・・・どうしても払わなきゃ駄目？」
「だ・め・だ！」
「はぁ、わかったのね」
「っと確かに、まいどありぃ」

私のおこづかいぃ・・・・・・。
これは今度レッドにお肉おごってもらうしかないのね、きゅいきゅい！！
っと、二人が出てきたのね！
おねえさまはしっかりできたかな？
せっかくのチャンスなんだから頑張って欲しいのね。
それにしても服は窮屈なのね！
でも着ないとおねえさまに怒られるし・・・・・・はぁ、早く元の姿に戻りたいのね。

第１５０話　昼食（後書き）

なんとなく今更だがニーアレプリカントを購入
一週目が終わったワケだが、予想よりも面白くてビックリした
カイネの声が攻殻機動隊の少佐の声優さんで俺の心を鷲掴み！！
エミールも可愛い・・・・・男の子だけど
しかも本編で女の子かも知れないと思わせるセリフがあったりしたが、調べてみると公式で若干ＢＬ臭漂う子らしい
なんにしても主要キャラ全てが幸せになるというエンドがないのは悲しいが、尚かつＤエンドを見るとニーアのセーブデータが消えるという悲しい仕様があるが、それを差し置いてもいい話だ
ちなみにＤエンドでデータが消えるのはバグとかじゃなく、ストーリーにリアリティを持たせるというか・・・・・もし気になったなら買うか、動画とかを探してみるといいかも
俺としては買ってプレイする方をオススメします
やっぱりその方が感動も大きいと思いますしね

第１５１話　隠れ家（前書き）

気付けばもう一年経ったのか……っていうか本編１５１話目
一話一話が短いとはいえ、３９００００字
原稿用紙でいえば９７５枚
ビックリするわ！！
後久しぶりに見たＰＶとかユニークは大分怖い数字になってた……
ＰＶの数が俺の貯金になればいいのにｏｒｚ

第１５１話　隠れ家

昼食を終え、この町に来た目的でもある武器屋に向かっている俺とタバサなわけだが、この町かなりスリが多い。
かれこれ十分位しか歩いていないにも関わらず、スリに遭遇した回数が四回。
戦争が始まりかけてるから治安が悪化してるんだろうか？
ちなみに俺又はタバサにスリを仕掛けてきた奴はスリープクラウドで眠らせて放置している。
まぁ最低でも明日の朝までは起きないレベルのやつなので、是非風邪でもひいてほしいところだ。

「さてと、そろそろ着くかな」
「よく行く所なの？」
「それほど行くとこってわけじゃないけど父さんが昔よく行っていた店らしいから、父さんの付き添いで挨拶しに行く位だな。」
「そう」
「と、話してる間に見えてきたようだ」
「……どこ？」
「あぁ、初めてだと分かりにくいよな」

実はこの店一見さんお断り的なお店なのだ。
故に表立って看板とかは出していない。
唯一武器屋っぽさが見えるのは、ノッカーについた小さな剣の装飾位。
だがそれも普通の家にあるようなものなので非常に分かりにくい。
しかも俺も一人でここに来た回数は三回しかないから迷うかもしれ

ないと不安だったのだが……今は正直安堵してる。
店知ってるって言って迷ったらカッコ悪いにもほどがあるからな！
俺はノッカーで扉を二回、一回、七回とそれぞれ少しだけ間隔を開けて叩く。
するとガチャという音と共に鍵が開いた。
扉を開け、未だにここが武器屋かどうか信じ切れていないタバサを連れて中へと入っていく。
するとそこには普通の家の居間が広がっていて、どう見ても武器屋には見えない。
だがここはそういう場所なのだ。
頭の中が疑問符でいっぱいであろうタバサはとりあえず置いといて、今は正面に座っている女性に話しかけないとな。

「いらっしゃい」
「お久しぶりです、二―ナさん」
「おや、珍しいね。　君が誰かを連れてくるなんて……もしかして彼女かい？」
「彼女は俺の生徒兼弟子みたいなもんですよ。
ところでナッシュさんは上ですか？」
「いや、今は下だ。
なにやら新しい構想が突如思いついたらしくて昨日から籠りっぱなしなんだよ」
「あ～、じゃあ後で来た方がいいですかね？」
「いや大丈夫だ、丁度一休みしようとしていたところだからな」

その声と共に台所の方からナッシュさんが現れた。
ところどころに煤を被り、頭はボサボサ。
どうやら徹夜で打ち続けていたようだ。

「あんた！　いい加減その癖直しなさいよ！」
「いやぁ、悪い悪い。
でも思いついたら即実行が俺の売りだからな」
「馬鹿……」

なんか今はほのぼのとしているけど、多分このまま放置するとＲ－１８な展開に突入しかねないので止めることにする。
一回止めるタイミング間違えて、三十分ほど外をブラブラする羽目になったことがあったんだよ！

「えっと、すいませ～ん」
「ん？　あぁレッドか。
今日は何しに来たんだ？」
「ちょっと短剣とレイピア見せてほしくて」
「そこの嬢ちゃん用か？」
「短剣はそうです」
「そうか、ちょっと準備してくっからここで待っててくれ」

そう言い残すとナッシュさんは再び台所へと戻っていった。
多分水を浴びに行ったんだろう。
とりあえず今の内にタバサにここのこと話しておこうと思ったんだが、振り返るとそこにタバサがいない。
疑問に覚えて二―ナさんの方を向くとそこにタバサがいた。
なんか二―ナさんが盛り上がっているように見えるけど、何話してんだろ？

っていうかタバサの顔赤ッ！？

「だから男っていうのは……さえ掴んでおけば……いざとなれば既成事……で大丈夫さ」
「え……あ……う……」
「二―ナさん？　何の話してたんですか？」
「ん、あぁちょっといい物件を抑える方法かね。
あれ？　ナッシュはどこ行ったんだい？」
「ナッシュさんは多分煤を流しに行ったんだと思います」
「そうかい……あ、あの馬鹿。
拭くもの持っていかなかったね！
もうしょうがないねぇ」

そう言ってどこか嬉しそうにタオルを持って台所へと向かう二―ナさん。
しかしふと思い出したようにタバサの方へ振り向く。

「頑張んなよ、後悔したくないだろう？」
「……」（コクリ）
「よし、いい子だ」

そう言い残して満足そうに再び台所へと向かって行った。
なんか話に着いていけてないが、物件を抑える方法とか言ってたから……タバサは別荘でも買うんだろうか？
とりあえずタバサにここの説明しておくか。

「もしかしたら二―ナさんに聞いてるかもしれないけど、ここについて説明するよ。
ここ、どう見ても武器屋に見えないだろ？
これは泥棒と変な貴族が来ないようにっていう対策なんだ。
ナッシュさんは結構凄い鍛冶師なんだけど、有名になりたいわけじゃないから売りたい人に売れればそれでいいらしいんだ。
だから看板も上げないし、中に入っても簡単には分からないようになってる。
タバサもここのことを人に伝えるのは極力避けてくれよ？
その条件を呑んでくれないと詳しく話せないんだ」
「分かった」
「じゃあ続きを話そう。
ここの建物は外から見ると二階建てに見えるが、その実三階建てなんだ。
地下の工房、一階の居住スペース、二階の武器屋から成り立っている。
ちなみに地下の工房の入り口は台所のどこかにあるみたいだけど、工房への立ち入りは絶対に禁止。
もし工房へ入った場合は本人だけでなくその人が紹介した相手もここへの立ち入りを永久に禁止される」
「……厳しい」
「ここは客への信用を大切にしてるからね」
「信用できない相手に俺の作品たちはやれねぇよ。
俺の作品は俺の子供みたいなもんだからな」

戻ってきた二―ナさんとナッシュさんは先ほどまで着ていた私服姿ではなく、大分グレードが高い服を着て、腰には杖を差していた。

「貴族？」
「いや俺たちの家はもう没落してるから貴族ではないな」
「ごめんなさい」
「いや、気にしなくていい。
さてと……ゴホンッ！
いらっしゃいませ、武器屋，隠れ家，へようこそ」

ナッシュさんはそういうと顔に笑顔を浮かべて一礼した。

第１５１話　隠れ家（後書き）

ディスガイアの小説は現在１５話まで書き終わったところ
まだまだ先は長いけど、じっくりと進めていくことにします
ゼロ魔もね？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1751o/

ゼロの使い魔～幻獣騎士～

2011年10月11日12時23分発行